山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査

第 12 集

1979

福岡県教育委員会

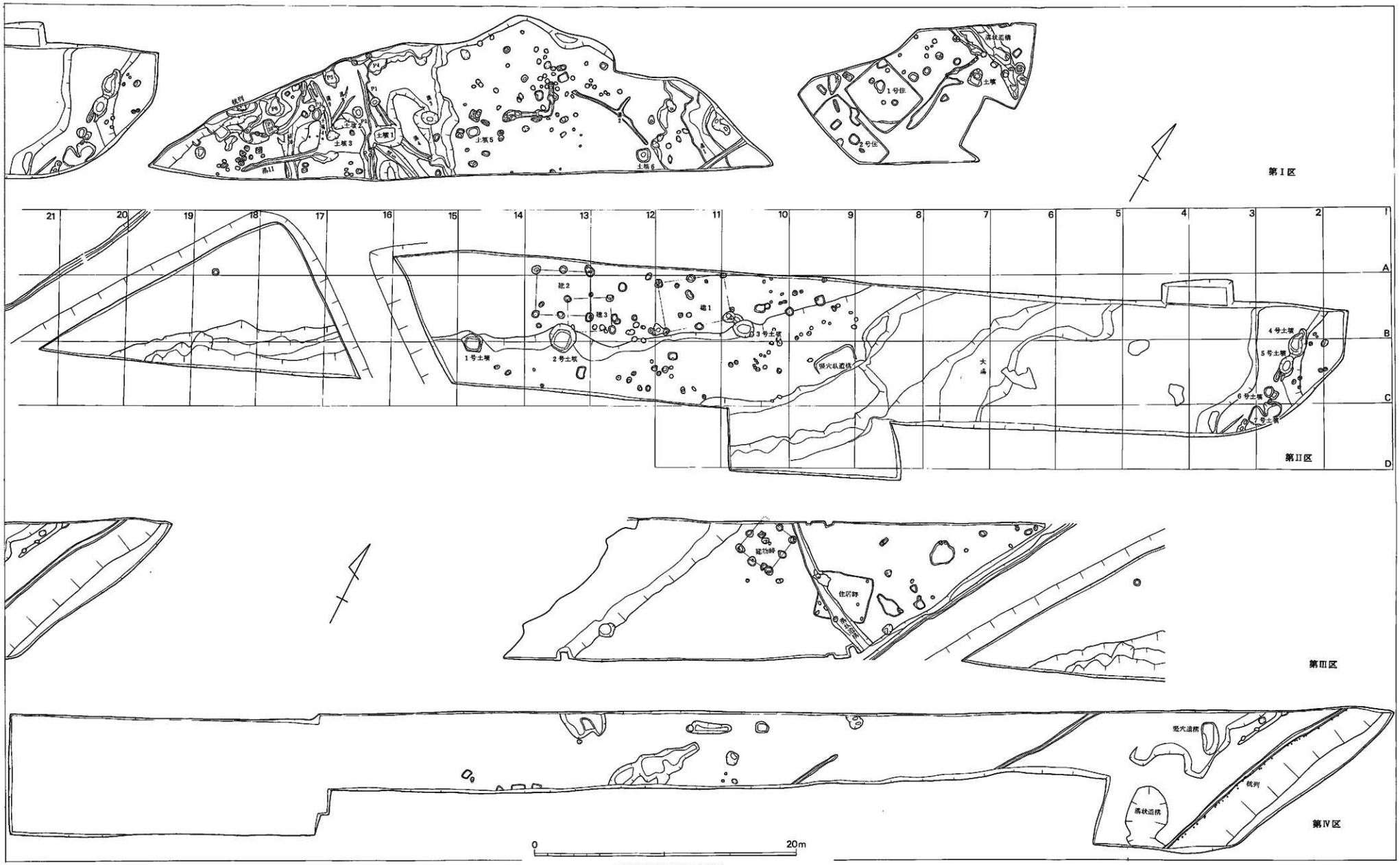
山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第12集

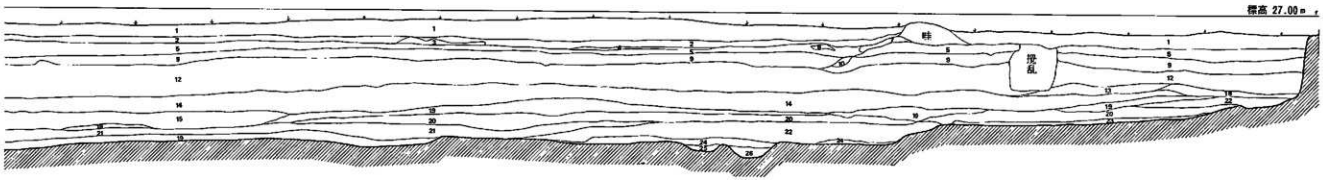
付　　図

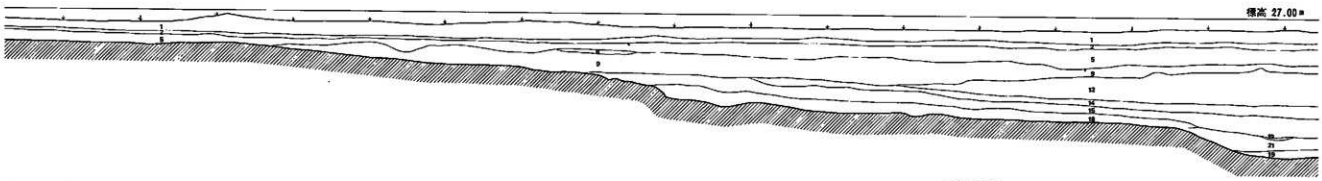
1979

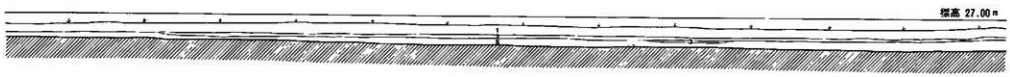
福岡県教育委員会

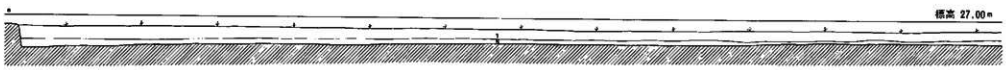


辻田遺跡遺構配置全体図（1/200）



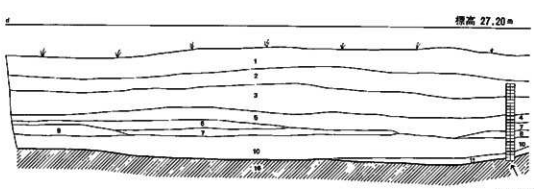


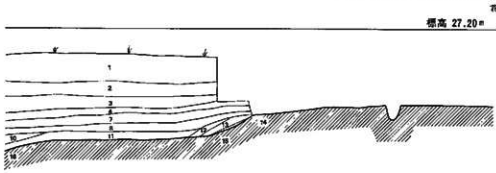




土層名

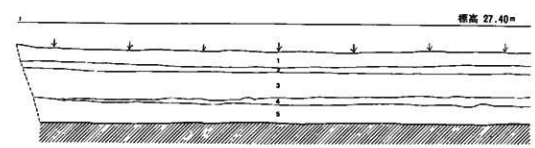
1．表土（耕作土）	第1層
2．黄褐色粘性土（床土）	第2層
3．暗黄白色粘土ブロック	
4．暗黄褐灰黄褐色土	
5．暗黄褐色粘性土	
6．黄褐色粘土ブロック	第3層
7．黄褐色粘土ブロック混砂質土	
8．白色砂混暗灰色粘性土	
9．暗灰色粘性土	第4層
10．砂質土	
11．黒色粘性土	
12．腐植性暗灰色粘性土	第5層
13．腐植物混暗灰褐色粘性土	
14．腐植性黒色粘性土	
15．腐植性暗灰色粘性土	第6層上部
16．腐植性暗灰黒色粘性土	
17．腐植物混黒褐色粘性土	
18．腐植物混暗灰黒色粘性土（12より淡い）	
19．白色砂質土	
20．腐植性黒茶褐色粘性土	
21．腐植性黒褐色粘性土	第6層下部
22．腐植性暗灰色粘性土	
23．腐植性暗黒褐色土（粗砂混）	
24．白色粗砂混暗灰色粘性土	
25．白色粗砂混淡黒灰色粘性土	第7層
26．腐植性暗灰黒色粘性土	
27．白色粗砂混灰黒色粘性土	
28．白色粗砂混暗茶褐色粘性土	

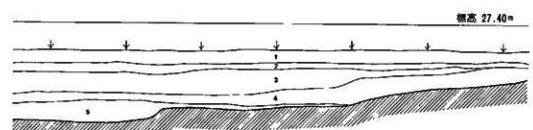


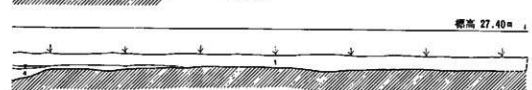


土層名

1．表土および床土	第4層
2．明黄褐色粘性土	
3．淡い暗灰色粘性土	
4．暗灰色粘性土	第5層
5．腐植物混暗灰色粘性土	
6．腐植物混やや淡い色調の黒色粘性土	第6層上部
7．腐植物混青灰色粘性土	
8．腐植物混暗灰色粘性土	
9．茶褐色腐植質土	第6層下部
10．腐植物が多い黒色粘性土	
11．やや淡い色調の黒色腐植物粘性土	
12．黒色砂質粘土	第7層
13．灰色粘土	
14．灰黒色粘質土	
15．淡青灰色粘土および淡褐色粘土・青灰色砂礫	
16．淡青灰色粘土および砂	







土層名

1．耕作土。
2．淡灰黒色土。砂粒を含む。
3．黒灰色土。やや粘質の砂粒を含む。
4．暗黄褐色粘質土。
5．灰黒褐色粘質土。

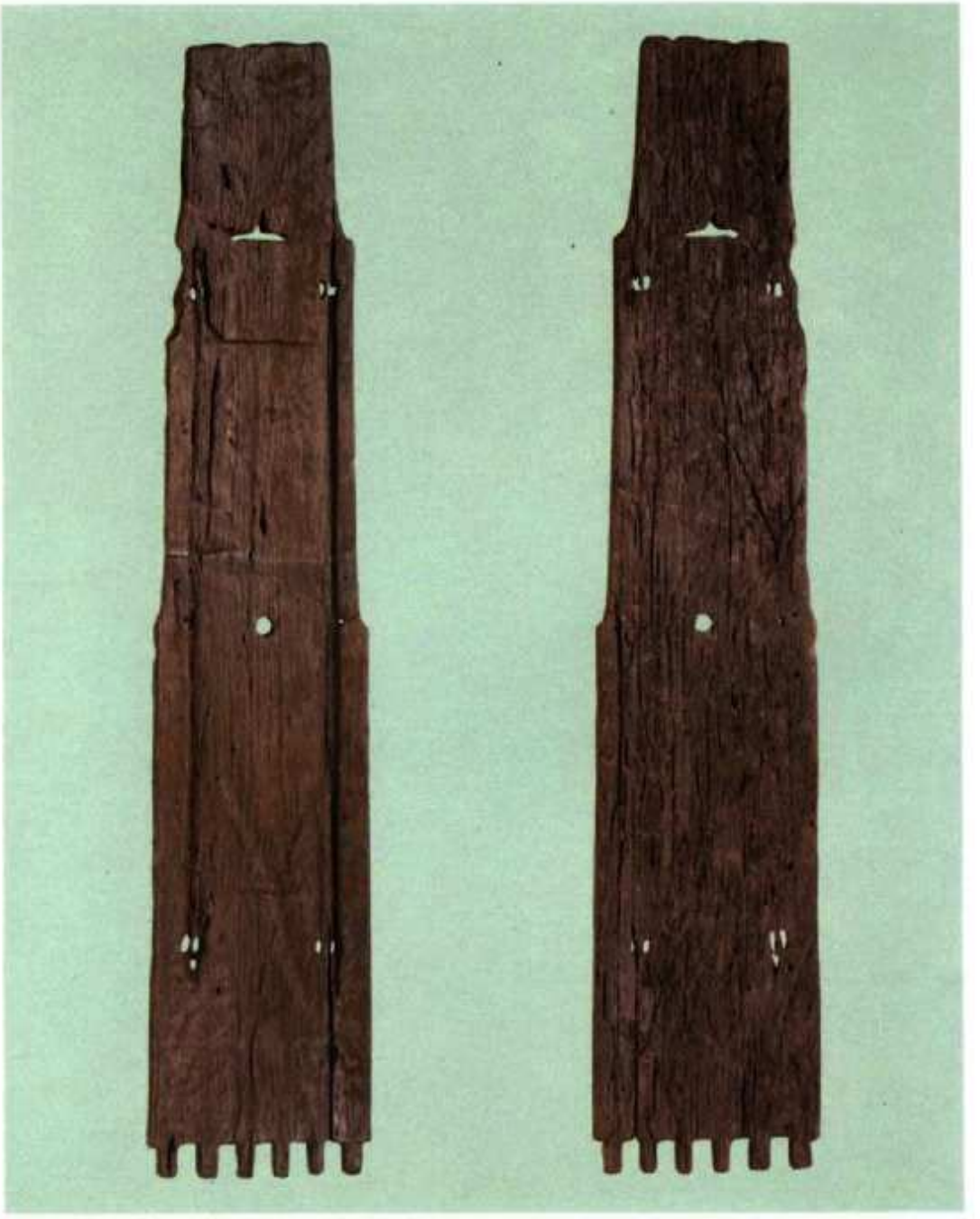
0　5m

付図2　辻田遺跡II区土層図（1/60）

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査

第 12 集



II区 出土 琴1号

II区 出土 筌

II区 出土 袋状鉄斧

II区 出土 銅鋤先

II区 出土 銅矛片

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委嘱を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輛基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，昭和53年に実施しました春日市大字上白水所在の辻田遺跡についてのもので『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが，本報告書が文化財保護の一助となり，学術・研究にも活用いただければ望外の喜びとするものであります。

なお調査に対してご協力いただいた調査員・地元の方々をはじめ関係各位のご援助とご配慮により本書を発刊するはこびとなりましたので心からの感謝を申し上げます。

昭和54年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1．本書は昭和53年1月13日から昭和53年5月26日までに福岡県教育委員会が日本国有鉄道下関工事局から委嘱されて，山陽新幹線建設に伴う県道付替工事のため破壊される辻田遺跡を発掘調査した報告書であり，山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第12集にあたる。

2．本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ……小池史哲
Ⅲ　……木下　修・石橋新次
Ⅳ—1～7……井上裕弘・小池史哲・小林義彦
Ⅳ—8……粉川昭平
Ⅳ—9……松本　勗・林　弘也
Ⅳ—10……横田義章
Ⅳ—11……小池史哲
Ⅴ　……井上裕弘・木下　修・小池史哲
Ⅵ　……井上裕弘・木下　修
Ⅶ　……小池史哲

3．掲載の写真の撮影・実測図の作成および製図は，図版目次と挿図目次に示すとおりである。

4．挿図で使用する方位は真北に統一している。

5．本書の編集は，小池史哲が担当した。

本　文　目　次

辻田遺跡の調査

Ⅰ　調　査　の　経　過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 9

Ⅲ　第Ⅰ区の遺構と遺物 …… 13

1．Ⅰ－1区の調査 …… 13
2．Ⅰ－2区の調査 …… 20
3．小　　結 …… 31

Ⅳ　第Ⅱ区の遺構と遺物 …… 33

1．層　　序 …… 33
2．縄文時代以前の遺物 …… 34
3．大　　溝 …… 38
4．竪穴状遺構 …… 114
5．土　　壙 …… 115
6．建　物　跡 …… 126
7．包含層出土の遺物 …… 130
8．春日市上白水辻田遺跡の種子類 …… 141
9．辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定 …… 144
10．出土遺物の取り上げと保存処理 …… 156
11．小　　結 …… 158

Ⅴ　第Ⅲ区の遺構と遺物 …… 163

1．層　　序 …… 163
2．竪穴住居跡 …… 164

3．建　物　跡…… 169
4．溝状遺構…… 169
5．小　　結…… 170

Ⅵ　第Ⅳ区の遺構と遺物…… 171

1．竪穴遺構…… 171
2．溝状遺構…… 171
3．杭　　列…… 176
4．包含層出土の遺物…… 176
5．小　　結…… 177

Ⅶ　お　わ　り　に…… 178

図　版　目　次

本文対照頁

図版 1　(上) 辻田遺跡遠景空中写真（春日市教育委員会提供）…… 1
(下) 辻田遺跡全景空中写真（春日市教育委員会提供）…… 1
2　(1) 辻田遺跡Ⅰ区全景空中写真（春日市教育委員会提供）……13
(2) 辻田遺跡Ⅰ区全景（木下修撮影）……13
3　(1) Ⅰ－Ⅰ区住居跡群（木下撮影）……13
(2) Ⅰ－1区1号住居跡（木下撮影）……13
4　(1) Ⅰ－1区1号住居跡内遺物出土状況（木下撮影）……13
(2) Ⅰ－1区1号住居跡内遺物出土状況（木下撮影）……13
5　(1) Ⅰ－1区2号住居跡全景（木下撮影）……17
(2) Ⅰ－1区2号住居跡内高杯出土状況（木下撮影）……17
6　Ⅰ－1区1・2号住居跡出土土器・砥石・鉈（岡紀久夫撮影）……13
7　(1) Ⅰ－1区溝状遺構全景（木下撮影）……17
(2) Ⅰ－1区溝状遺構1土層堆積状況（木下撮影）……17
8　(1) Ⅰ－1区溝状遺構・土壙出土土器（岡撮影）……18
(2) Ⅰ区包含層出土石器……29
9　(1) Ⅰ－2区全景（木下撮影）……20
(2) Ⅰ－2区土壙群全景（木下撮影）……23

10 (1) Ⅰ—2区土壙1（木下撮影）……23
(2) Ⅰ—2区土壙1土層堆積状況（木下撮影）……23
11 (1) Ⅰ—2区土壙2（木下撮影）……25
(2) Ⅰ—2区土壙3（木下撮影）……25
12 (1) Ⅰ—2区土壙4（木下撮影）……25
(2) Ⅰ—2区ピット5（木下撮影）……27
13 (1) Ⅰ—2区ピット群（木下撮影）……27
(2) Ⅰ—2区溝・土壙・ピット群（木下撮影）……28
14 (1) Ⅰ—2区柱穴群（木下撮影）……28
(2) Ⅰ—2区杭列（木下撮影）……29
15 Ⅰ—2区溝・土壙・ピット・包含層出土土器・塼（岡撮影）……29
16 Ⅱ区全景空中写真（春日市教育委員会提供）……33
17 (1) Ⅱ—1区全景（井上裕弘撮影）……33
(2) Ⅱ—2区全景（井上撮影）……33
18 Ⅱ区出土縄文土器（岡撮影）……34
19 (1) Ⅱ区大溝全景（井上撮影）……38
(2) Ⅱ区大溝土層堆積状況（井上撮影）……38
20 (1) Ⅱ区B・C—3・4区建築部材等出土状況（木下撮影）……39
(2) Ⅱ区B・C—3・4区建築部材等出土状況（木下撮影）……39
21 (1) Ⅱ区B・C—3・4区建築部材等出土状況近景（木下撮影）……39
(2) Ⅱ区B・C—3・4区建築部材等出土状況（木下撮影）……39
22 (1) Ⅱ区C3区農具・建築部材出土状況（木下撮影）……39
(2) Ⅱ区B4区建築部材出土状況（木下撮影）……39
23 (1) Ⅱ区B—2・3区木材出土状況（井上撮影）……39
(2) Ⅱ区B3区建築部材出土状況（木下撮影）……39
24 (1) Ⅱ区B5区農具出土状況（木下撮影）……39
(2) Ⅱ区C6区農具出土状況（小池史哲撮影）……39
25 (1) Ⅱ区B6区槌出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区C6区農具未製品出土状況（井上撮影）……39
26 (1) Ⅱ区D3区杓子出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区C4区杓子出土状況（小池撮影）……39
27 (1) Ⅱ区C6区杓子出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区C6区木製紡錘車出土状況（小池撮影）……39

28 (1) Ⅱ区Ｂ７区手鋤出土状況（木下撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ７区円形板状製品（井上撮影）……39
29 (1) Ⅱ区Ｂ７区琴１号・農具出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ７区琴１号出土状況（小池撮影）……39
30 (上) Ⅱ区Ｂ７区琴１号近景及び細部（小池撮影）……39
(下) Ⅱ区Ｂ７区横杵出土状況（小池撮影）……39
31 (1) Ⅱ区Ｂ７区二又鍬出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区杓子出土状況（小池撮影）……39
32 (1) Ⅱ区Ｂ７区紡織具？出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ７区枘孔を有した板材（Ａ類）出土状況（小池撮影）……39
33 (1) Ⅱ区Ｂ７区鋤出土状況（井上撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ７区三又鍬出土状況（小池撮影）……39
34 (1) Ⅱ区Ｃ７区二又鍬出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｄ７区三又鍬出土状況（小池撮影）……39
35 (1) Ⅱ区Ｃ７区杓子出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｃ７区槽出土状況（小池撮影）……39
36 (1) Ⅱ区Ｂ８区遺物出土状況（井上撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ８区遺物出土状況（井上撮影）……39
37 (1) Ⅱ区Ｂ８区遺物出土状況（井上撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ８区三又鍬建築部材出土状況（小池撮影）……39
38 (1) Ⅱ区Ｂ８区木材出土状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ８区木材出土状況（小池撮影）……39
39 (1) Ⅱ区Ｂ７区盤出状況（小池撮影）……39
(2) Ⅱ区Ｂ７区田舟状木製品出土状況（小池撮影）……39
40 (1) Ⅱ区Ｂ８区建築部材等出土状況（井上撮影）……40
(2) Ⅱ区Ｂ８区平鍬出土状況（井上撮影）……40
41 (1) Ⅱ区Ｂ８区三又鍬・杓子出土状況（小池撮影）……40
(2) Ⅱ区Ｃ８区枘を有した板材（Ｂ類）出土状況（小池撮影）……40
42 (2) Ⅱ区Ｃ８区建築部材等出土状況（井上撮影）……40
(2) Ⅱ区Ｃ８区建築部材等出土状況（井上撮影）……40
43 (1) Ⅱ区Ｃ８区紡織具？出土状況（井上撮影）……40
(2) Ⅱ区Ｃ８区建築部材出土状況（井上撮影）……40
44 (1) Ⅱ区Ｃ８区建築部材出土状況（井上撮影）……40

(2) II区C８区建築部材細部（井上撮影）……40
45 (1) II区C９区土器集積状況（小池撮影）……40
(2) II区C９区土器除去後の状況（小池撮影）……40
46 (1) II区C７区竪杵出土状況（井上撮影）……40
(2) II区C７区枘を有した板材（B類）出土状況（井上撮影）……40
47 (1) II区C９区杓子出土状況（小池撮影）……40
(2) II区C９区横杵出土状況（小池撮影）……40
48 (1) II区C９区平鍬出土状況（小池撮影）……40
(2) II区C９区板材出土状況（小池撮影）……40
49 (1) II区D８・９区木材出土状況（小池撮影）……40
(2) II区D９区木製品出土状況（小池撮影）……40
50 (1) II区D９区槽出土状況（小池撮影）……40
(2) II区D９区鋤未製品出土状況（小池撮影）……40
51 (1) II区D９区横杵出土状況（小池撮影）……40
(2) II区D９区平鍬出土状況（小池撮影）……40
52 (1) II区D８・９区南端部での木材出土状況（井上撮影）……40
(2) II区D８・９区南端部での木材出土状況（井上撮影）……40
53 (1) II区D８区梯子・容器蓋出土状況（井上撮影）……40
(2) II区D９区三叉鍬出土状況（井上撮影）……40
54 (1) II区D10区遺物出土状況（井上撮影）……40
(2) II区D10区枘を有した板材出土状況（井上撮影）……40
55 (1) II区D８区笭出土状況（小池撮影）……40
(2) II区C８区籠出土状況（小池撮影）……40
56 II区石器出土状況
(1)石匙出土状況（小池撮影）……40
(2)砥石出土状況（小池撮影）……40
(3)石剣出土状況（井上撮影）……40
57 II区金属製品出土状況
(1)銅子片出土状況（木下撮影）……40
(2)鉄斧出土状況（小池撮影）……40
(3)銅鋤先出土状況（井上撮影）……40
58 II区大溝出土弥生式土器１（岡撮影）……40
59 II区大溝出土弥生式土器２（岡撮影）……42

60　Ⅱ区大溝出土弥生式土器３（岡撮影）……46
61　Ⅱ区大溝出土弥生式土器４（岡撮影）……46
62　Ⅱ区大溝出土弥生式土器５（岡撮影）……49
63　Ⅱ区大溝出土弥生式土器６（岡撮影）……49
64　Ⅱ区大溝出土弥生式土器７（岡撮影）……52
65　Ⅱ区大溝出土弥生式土器８（岡撮影）……55
66　Ⅱ区出土先土器～弥生時代石器（岡撮影）……55
67　Ⅱ区出土石器・土製品（岡撮影）……57
68　Ⅱ区出土平鍬・二叉鍬（岡撮影）……59
69　Ⅱ区出土二叉鍬・三叉鍬（岡撮影）……62
70　Ⅱ区出土三叉鍬（岡撮影）……65
71　Ⅱ区出土三叉鍬・鋤（岡撮影）……67
72　Ⅱ区出土ふぐし状木製品・えぶり状木製品・田下駄・手綱枠（岡撮影）……75
73　Ⅱ区出土笄（石丸洋撮影）……79
74　Ⅱ区出土杵類（岡撮影）……79
75　Ⅱ区出土槌・斧柄（岡撮影）……81
76　Ⅱ区出土つるべ状木製品，盤・槽（岡撮影）……84
77　Ⅱ区出土槽類（岡撮影）……85
78　Ⅱ区出土杓子（岡撮影）……89
79　Ⅱ区出土紡織具・円形の小孔を有した板材等（岡撮影）……92
80　Ⅱ区出土容器・容器蓋・曲物底板（岡撮影）……92
81　Ⅱ区出土孔を有した円形板状製品（岡撮影）……96
82　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材（Ａ類）（岡撮影）……96
83　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材（Ｂ類）（岡撮影）……96
84　Ⅱ区出土枘孔を有した板材（岡撮影）……96
85　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材等（岡撮影）……96
86　Ⅱ区出土出土琴１号（岡撮影）……102
87　Ⅱ区出土建築部材１（岡撮影）……103
88　Ⅱ区出土建築部材２（岡撮影）……106
89　Ⅱ区出土建築部材３（岡撮影）……106
90　Ⅱ区出土建築部材４（岡撮影）……106
91　Ⅱ区出土琴２号・建築部材・矢板，杭（岡撮影）……108
92　Ⅱ区出土楔類（岡撮影）……109

93　II区出土板材1（岡撮影）…… 109
94　II区出土板材2（岡撮影）…… 109
95　II区出土板材等3（岡撮影）…… 109
96　II区出土角材1（岡撮影）…… 109
97　II区出土角材2（岡撮影）…… 109
98　II区出土杭類（岡撮影）…… 109
99　II区出土端部加工材1（岡撮影）…… 109
100　II区出土端部加工材2（岡撮影）…… 109
101　II区出土焼けた材（岡撮影）…… 109
102　II区出土籠（岡撮影）…… 109
103　II区出土木簡及び短冊形木製品（岡撮影）…… 110
104　II区袋状鉄斧・銅鏃先（岡撮影）…… 112
105　II区出土銅予片・勾玉（岡撮影）…… 112
106 (上) II区1号土壙（井上撮影）…… 115
(下) II区4～7号土壙群（北から）（井上撮影）…… 117
107 (1) II区4号土壙（井上撮影）…… 117
(2) II区5号土壙（井上撮影）…… 119
108 (1) II区6号土壙（井上撮影）…… 119
(2) II区7号土壙（井上撮影）…… 126
109 (1) II区2号土壙（井上撮影）…… 120
(2) II区2号土壙内遺物出土状況（井上撮影）…… 120
110 (1) II区2号土壙内遺物出土状況（墨書土器）（井上撮影）…… 120
(2) II区2号土壙内遺物出土状況（下駄）（井上撮影）…… 120
111 (1) II区2号土壙内遺物出土状況（瓢容器）（井上撮影）…… 120
(2) II区3号土壙（井上撮影）…… 124
112 (1) II区2号建物跡（井上撮影）…… 127
(2) II区pit内の柱痕（井上撮影）…… 126
113　II区1号土壙・2号土壙・2号建物出土土器（岡撮影）…… 115
114 (1) II区2号土壙出土下駄（岡撮影）…… 124
(2) II区2号土壙出土瓢容器（岡撮影）…… 124
115　II区包含層出土弥生式土器（岡撮影）…… 130
116　II区包含層出須恵器（岡撮影）…… 133
117　II区大溝出土種子類（粉川昭平撮影）…… 141

118　木材顕微鏡写真について（松本昂・林弘也作成）…… 144
119　木材顕微鏡写真１（松本・林撮影）…… 146
(1) Ｄ９，６層上出土品（アスナロ）…… 146
(2) Ｂ７，６層下出土品（ヤマモモ）…… 146
(3) Ｃ８，６層下出土品（スダジイ）…… 146
120　木材顕微鏡写真２（松本・林撮影）…… 146
(4) Ｃ７，６層出土三叉鍬（アカガシ属）…… 146
(5) Ｂ８，６層上出土琴状木製品（スギ）…… 146
(6) Ｂ７，６層下出土横杵（マンサク）…… 146
121　木材顕微鏡写真３（松本・林撮影）…… 146
(7) Ｃ９，６層上出土杓子（アカガシ属）…… 146
(8) Ｄ８，６層下出土筌の一部（広葉樹材）…… 146
(9) Ｃ７，６層直上出槽（クスノキ）…… 146
122　木材顕微鏡写真４（松本・林撮影）…… 146
(10) Ｄ９，６層上出土手斧（マンサク）…… 146
(11) Ｄ10，６層上出土手斧（シラカシ）…… 146
(12) Ｂ６，７層出土二叉鍬（シラカシ）…… 146
123　木材顕微鏡写真５（松本・林撮影）…… 146
(13) Ｃ９，６層上出土平鍬（ツクバネガシ）…… 146
(14) Ｄ９，６層上出土蓋（シラカシ）…… 146
(15) Ｄ８，６層上出土梯子（クリ）…… 146
124　木材顕微鏡写真６（松本・林撮影）…… 146
(16) Ⅱ・Ⅰ区出土ねずみ返し（クスノキ）…… 146
(17) Ｃ７，６層出土品…… 146
(18) Ｄ８，６層上出土鍬（ツクバネガシ）…… 146
125　木材顕微鏡写真７（松本・林撮影）…… 146
(19) Ｃ６，６層上出土堅杵（ヒメユズリハ）…… 146
(20) Ｃ６，５層下出土つるべ（アスナロ）…… 146
(21) Ｃ８，６層下出土建築材（ウラジロモミ）…… 146
126　木材顕微鏡写真８（松本・林撮影）…… 146
(22) Ｄ７，６層出土建築材（スギ）…… 146
(23) Ｃ８，６層上出土矢板（カヤ）…… 146
(24) Ｂ７，６層出土くい（マツ）…… 146

127　木材顕微鏡写真９（松本・林撮影）…… 146
(25) Ｃ８，６層下出土角くい（クロベ）…… 146
(26) Ｄ８，６層上出土三又鍬（ハナガシ）…… 146
(27) Ｄ10，６層下出土三又鍬（シラガシ）…… 146
128　木材顕微鏡写真10（松本・林撮影）…… 146
(28) Ｄ８，６層上出土円板（カゴノキ属）…… 146
(29) Ｄ８，６層下出土くい（ユズリハ）…… 146
(30) Ｃ８，６層下出土角くい（タブノキ属）…… 146
129　木材顕微鏡写真11（松本・林撮影）…… 146
(31) Ｂ７，６層出土琴（モミ属）…… 146
(32) Ｄ３，７層出土杓子（イヌマキ）…… 146
(33) ２号土壙井戸出土下駄（シオジ）…… 146
130　木材顕微鏡写真12（松本・林撮影）…… 146
(34) Ｄ９，６層上出土漆塗り（ハンノキ）…… 146
(35) Ｄ９，６層上出土竪杵（シラカシ）…… 146
(36) Ｂ７，６層下出土槌（クリ）…… 146
131　木材顕微鏡写真13（松本・林撮影）…… 146
(37) Ｃ９，６層上出土横杵（マンサク）…… 146
(38) Ｄ９，６層上出土横杵（マンサク）…… 146
(39) Ｂ８，６層下出土杵（スダジイ）…… 146
132　木材顕微鏡写真14（松本・林撮影）…… 146
(40) Ｂ８，６層上出土壁杵（マンサク）…… 146
(41) Ｃ９，６層下出土竪杵（ツバキ属）…… 146
(42) 用途不詳品（クスノキ）…… 147
133　木材顕微鏡写真15（松本・林撮影）…… 147
(43) Ｂ７，６層下出土品（ツバキ属）…… 147
(44) Ｄ10，６層下出土鋤（ツクバネガシ）…… 147
(45) Ｄ９，６層上出土鋤（ツクバネガシ）…… 147
134　木材顕微鏡写真16（松本・林撮影）…… 147
(46) Ｂ３，６層下出土鋤の柄（ツクバネガシ）…… 147
(47) Ｂ３，６層出土紡錘車（マツ）…… 147
(48) Ｂ７，５層下出土たも（クロベ）…… 147
135　木材顕微鏡写真17（松本・林撮影）…… 147

(49) D10, 6層下出土品（マンサク）…… 147
(50) D10, 6層下出土品（ツクバネガシ）…… 147
(51) C8, 7層出土網（タケの一種）…… 147
図版136　編物（笠）の取り上げ（横田義章作成）…… 156
図版137 (1) 調査前のⅢ区（木下撮影）…… 163
(2) Ⅲ区全景（井上撮影）…… 163
図版138 (1) Ⅲ区住居跡全景（小池撮影）…… 164
(2) Ⅲ区住居跡全景完掘後（井上撮影）…… 164
図版139 (1) Ⅲ区住居跡内遺物出土状況（小池撮影）…… 164
(2) Ⅲ区住居跡内遺物出土状況（小池撮影）…… 164
図版140　Ⅲ区住居跡出土土器（岡撮影）…… 165
図版141 (1) Ⅲ区建物跡（小池撮影）…… 168
(2) Ⅲ区調査風景（小池撮影）…… 170
図版142 (1) Ⅳ区全景（木下撮影）…… 171
(2) Ⅳ区全景（木下撮影）…… 171
図版143 (1) Ⅳ区調査区東側全景（木下撮影）…… 171
(2) Ⅳ区調査区東側全景（木下撮影）…… 171
図版144 (1) Ⅳ区溝状遺構全景（木下撮影）…… 171
(2) Ⅳ区溝状遺構全景（木下撮影）…… 171
図版145 (1) Ⅳ区溝状遺構内木材・土器出土状態（木下撮影）…… 174
(2) Ⅳ区溝状遺構内壺出土状態（木下撮影）…… 174
図版146　Ⅳ区溝状遺構出土土器（岡撮影）…… 174

挿　図　目　次

第 1 図　発掘風景1　（木下修撮影）…… 2
第 2 図　多量の土器や木製品（井上裕弘撮影）…… 3
第 3 図　発掘風景2　（木下修撮影）…… 4
第 4 図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（佐々木隆彦作成）…… 8
第 5 図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡分図
（日本国有鉄道原図1：1,500木下作成）……折込み
第 6 図　辻田遺跡地形全体図（日本国有鉄道原図　白水千賀子製図）……折込み

第 7 図　辻田遺跡周辺の弥生時代遺跡の分布
（国土地理院地形図福岡南部１：25,000　小池史哲作成）……折込み
第 8 図　辻田遺跡周辺微地形図（１：5,000）（小池作成，荒武麗子製図）……11
第 9 図　Ⅰ区遺構配置地形図（小池・石橋新次実測，河鍋洋子製図）……折込み
第 10 図　Ⅰ区Ⅰ号住居跡実測図（小池・石橋実測，白水製図）……14
第 11 図　Ⅰ区１号住居跡出土土器実測図（石橋実測・製図）……15
第 12 図　Ⅰ区１号住居跡出土砥石・鉈実測図（木下・小池実測，小池・石橋製図）……15
第 13 図　Ⅰ区２号住居跡実測図（小池・石橋実測，白水製図）……16
第 14 図　Ⅰ区２号住居跡出土土器実測図（石橋実測・製図）……17
第 15 図　Ⅰ区溝状遺構１土層断面図（小池・石橋実測，河鍋製図）……17
第 16 図　Ⅰ区溝状遺構出土土器実測図（石橋実測・製図）……18
第 17 図　Ⅰ区土壙実測図（石橋実測，荒武製図）……19
第 18 図　Ⅰ区土壙出土土器実測図（石橋実測・製図）……19
第 19 図　Ⅰ区溝３，５，10土層断面図（石橋実測，河鍋製図）……20
第 20 図　Ⅰ区溝３出土土器実測図（木下実測・製図）……21
第 21 図　Ⅰ区溝４出土土器実測図（木下実測・製図）……21
第 22 図　Ⅰ区溝５出土土器実測図（木下実測・製図）……22
第 23 図　Ⅰ区溝７出土土器実測図（木下実測・製図）……22
第 24 図　Ⅰ区土壙１実測図（石橋実測，白水製図）……24
第 25 図　Ⅰ区土壙１出土土器実測図（木下実測・製図）……24
第 26 図　Ⅰ区土壙３，４実測図（小池実測，白水製図）……26
第 27 図　Ⅰ区土壙２～４出土土器実測図（木下実測・製図）……27
第 28 図　Ⅰ区ピット包含層出土土器実測図（木下実測・製図）……27
第 29 図　Ⅰ区包含層出土瓦拓影（勝野素子手拓）……28
第 30 図　Ⅰ区包含層出土文様塼拓影（勝野手拓）……29
第 31 図　大宰府第37次調査ＳＢ765 柱穴出土文様塼拓影
（「太宰府史跡昭和50年度調査概報」1976）……30
第 32 図　Ⅰ区包含層出土石器実測図１（小池実測・製図）……30
第 33 図　Ⅰ区包含層出土石器実測図２（小池実測・製図）……31
第 34 図　Ⅰ区糸切り土師器小皿・杯法量図（木下作成）……32
第 35 図　Ⅱ区遺構配置・地形図（井上裕弘・小池・小林義彦実測，白水製図）……折込み
第 36 図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（勝野手拓，小池実測・製図）……35
第 37 図　Ⅱ区出土石器実測図１（小池実測・製図）……36

第 38 図　II区大溝出土土器実測図 1（井上・小林・荒武実測，井上製図）……41
第 39 図　II区大溝出土土器実測図 2（井上・小林・荒武実測，井上製図）……43
第 40 図　II区大溝出土土器実測図 3（井上・小林・荒武実測，井上製図）……45
第 41 図　II区大溝出土土器実測図 4（井上・小林・荒武実測，井上製図）……47
第 42 図　II区大溝出土土器実測図 5（井上・小林・荒武実測，井上製図）……48
第 43 図　II区大溝出土土器実測図 6（井上・小林・荒武実測，井上製図）……50
第 44 図　II区大溝出土土器実測図 7（井上・小林・荒武実測，井上製図）……51
第 45 図　II区大溝出土土器実測図 8（井上・小林・荒武実測，井上製図）……53
第 46 図　II区大溝出土土器実測図 9（井上・小林・荒武実測，井上製図）……54
第 47 図　II区出土石器，土製品実測図 2（小池実測・製図）……56
第 48 図　II区出土石器実測図 3（小池実測・製図）……58
第 49 図　II区出土平鍬の地区別分布（小池作成）……59
第 50 図　平鍬の計測区分（小池作成）……60
第 51 図　II区出土平鍬実測図（小池実測・製図）……61
第 52 図　II区出土鍬未製品実測図（小池実測・製図）……62
第 53 図　叉鍬類の計測区分（小池作成）……63
第 54 図　II区出土二叉鍬実測図（小池実測・製図）……64
第 55 図　II区出土二叉鍬の地区別分布（小池作成）……65
第 56 図　II区出土三叉鍬の地区別分布（小池作成）……65
第 57 図　II区出土三叉鍬実測図 1（小池実測・製図）……66
第 58 図　II区出土三叉鍬実測図 2（小池実測・製図）……68
第 59 図　II区出土三叉鍬実測図 3（小池実測・製図）……69
第 60 図　II区出土不明鍬類の地区分布（小池作成）……73
第 61 図　II区出土鋤の地区別分布（小池作成）……74
第 62 図　II区出土鋤類実測図（小池実測・製図）……折込み
第 63 図　II区出土ふぐし状木製品・えぶり状木製品・田下駄・手綱実測図
（小池実測・製図）……76
第 64 図　II区出土漁具の出土地点（小池作成）……77
第 65 図　II区出土釜実測図（小池実測・製図）……78
第 66 図　II区出土杵実測図 1（小池実測・製図）……78
第 67 図　II区出土杵類実測図 2（小池実測・製図）……80
第 68 図　II区出土杵類の搗部（小池実測・製図）……折込み
第 69 図　II区出土杵の地区別分布（小池作成）……81

第 70 図　Ⅱ区出土槌・斧柄・盤実測図（小池実測・製図）……81
第 71 図　Ⅱ区出土槌の地区別分布（小池作成）……83
第 72 図　Ⅱ区出土斧柄の地区別分布（小池作成）……83
第 73 図　Ⅱ区出土つるべ状木製品実測図（小池実測・製図）……84
第 74 図　Ⅱ区出土槽などの地区別分布（小池作成）……85
第 75 図　Ⅱ区出土盤・槽実測図１（小池実測・製図）……86
第 76 図　Ⅱ区出土槽実測図２（小池実測・製図）……87
第 77 図　Ⅱ区出土槽実測図３（小池実測・製図）……88
第 78 図　Ⅱ区出土杓子の地区別分布（小池作成）……89
第 79 図　Ⅱ区出土杓子実測図１（小池実測・製図）……90
第 80 図　Ⅱ区出土杓子実測図２（小池実測・製図）……91
第 81 図　Ⅱ区出土杓子・紡錘車・漆塗容器，その他実測図（小池実測・製図）……93
第 82 図　Ⅱ区出土紡織具，容器蓋等実測図（小池実測・製図）……94
第 83 図　Ⅱ区出土孔を有した円形板状製品等実測図（小池実測・製図）……95
第 84 図　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材実測図１（小池実測・製図）……97
第 85 図　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材実測図２（小池実測・製図）……98
第 86 図　Ⅱ区出土枘を有した板材（Ａ）の地区別分布（小池作成）……99
第 87 図　Ⅱ区出土枘を有した板材（Ｂ）の地区別分布（小池作成）……99
第 88 図　Ⅱ区出土枘・枘孔を有した板材実測図３（小池実測・製図）…… 100
第 89 図　参考資料（大分県安国寺遺跡）…… 101
第 90 図　Ⅱ区出土琴１号実測図（小池実測・製図）……折込み
第 91 図　Ⅱ区出土琴２号実測図（小池実測・製図）…… 103
第 92 図　Ⅱ区出土建築部材実測図１（小池実測・製図）…… 104
第 93 図　Ⅱ区出土建築部材実測図２（小池実測，小林製図）…… 105
第 94 図　Ⅱ区出土建築部材類の地区別分布（小池作成）…… 106
第 95 図　Ⅱ区出土建築部材実測図３（小池実測・小林製図）…… 107
第 96 図　Ⅱ区出土建築部材，矢板，杭実測図（小池実測・製図）…… 108
第 97 図　Ⅱ区出土籠実測図（小池実測・製図）…… 110
第 98 図　Ⅱ区出土木簡及び短冊形の木製品実測図（小池実測，小林製図）…… 111
第 99 図　Ⅱ区出土金属器実測図（小池実測・製図）…… 113
第 100 図　Ⅱ区勾玉実測図（小池実測・製図）…… 114
第 101 図　Ⅱ区竪穴状遺構実測図（小林実測、荒武製図）…… 115
第 102 図　Ⅱ区１号土壙実測図（小池実測，河鍋製図）…… 116

第 103 図　II区 1 号土壙出土土器実測図（井上・小池・小林実測，小池製図）…… 116
第 104 図　II区 4 号土壙実測図（小林実測）…… 118
第 105 図　II区 4 ～ 6 号土壙出土土器実測図（井上実測・製図）…… 119
第 106 図　II区 5 号土壙実測図（小池実測，荒式製図）…… 120
第 107 図　II区 6 号土壙実測図（井上実測，荒武製図）…… 121
第 108 図　II区 2 号土壙実測図（小池実測，荒武製図）…… 122
第 109 図　II区 2 号土壙出土遺物実測図（小池実測・製図）…… 123
第 110 図　II区 3 号土壙実測図（井上実測，荒武製図）…… 125
第 111 図　II区 7 号土壙実測図（井上実測，荒武製図）…… 126
第 112 図　II区 1 号建物跡実測図（小池・小林実測，白水製図）…… 127
第 113 図　II区 2 号建物跡実測図（小池・小林実測，白水製図）…… 128
第 114 図　II区 2 号建物跡出土土器実測図（小池実測・製図）…… 129
第 115 図　II区 3 号建物跡実測図（小池・小林実測，白水製図）…… 129
第 116 図　II区包含層出土弥生式土器実測図 1（井上・小林・荒武実測，井上製図）… 131
第 117 図　II区包含層出土弥生式土器実測図 2（井上・小林・荒武実測，井上製図）… 132
第 118 図　II区包含層出土須恵器実測図 1（小林実測・製図）…… 134
第 119 図　II区包含層出土須恵器実測図 2（小林実測・製図）…… 136
第 120 図　II区包含層出土土師器・瓦器・陶器・磁器実測図（井上実測・製図）…… 137
第 121 図　II区包含層出土瓦拓影（勝野手拓）…… 139
第 122 図　II区包含層出土骨製品（岡紀久夫撮影）…… 140
第 123 図　II区種子類の採取地点（小池作成）…… 143
第 124 図　II区釜の取り上げ方法模式図（横田義章作成）…… 157
第 125 図　III区遺構配置図，地形図（小池・小林実測，白水製図）…… 162
第 126 図　III区南壁土層図（小林実測，河鍋製図）…… 163
第 127 図　III区竪穴住居跡実測図（小池実測，白水製図）…… 164
第 128 図　III区竪穴住居跡出土土器実測図 1（井上・小林・荒武実測，井上製図）…… 166
第 129 図　III区竪穴住居跡出土土器実測図 2（井上・小林・荒武実測，井上製図）…… 167
第 130 図　III区建物跡実測図（小池実測，白水製図）…… 169
第 131 図　III区建物跡出土須恵器拓影（小池手拓）…… 169
第 132 図　III区溝状遺構土層図（小林実測，白水製図）…… 170
第 133 図　IV区遺構配置図，地形図（小池・石橋実測，河鍋製図）……折込み
第 134 図　IV区北壁・南壁土層図（小林実測，河鍋製図）…… 172
第 135 図　IV区竪穴遺構及び包含層出土土器実測図（木下実測，製図）…… 173

第136図　Ⅳ区溝状遺構実測図（小池・石橋実測，白水製図）…… 174
第137図　Ⅳ区溝状遺構出土土器実測図（井上実測・製図）…… 175
第138図　Ⅳ区包含層出土土器実測図（木下実測・製図）…… 176
第139図　Ⅳ区包含層出土石鏃実測図（小池実測・製図）…… 177

表　目　次

表1　山陽新幹線関係遺跡一覧表（小池史哲作成）……折込み
表2　平鍬計測表（今長谷潔・勝野素子・小池作成）……60
表3　二叉鍬計測表（今長谷・勝野・小池作成）……63
表4　三叉鍬計測表(1)（今長谷・勝野・小池作成）……70
表5　三叉鍬計測表(2)（今長谷・勝野・小池作成）……72
表6　不明鍬類計測表（今長谷・勝野・小池作成）……73
表7　1号建物跡計測表（小池作成）…… 127
表8　2号建物跡計測表（小池作成）…… 128
表9　3号建物跡計測表（小池作成）…… 130
表10　木製品の用途および資料数（松本昌・林弘也作成）…… 144
表11　同定樹種名および資料数（松本・林作成）…… 146
表12　木材の性質（松本・林作成）…… 155
表13　Ⅲ区建物跡計測表（小池作成）…… 168

付　図　目　次

付図1　辻田遺跡遺構配置全体図（井上裕弘・小池史哲・石橋新次・小林義彦実測，白水千賀子製図）
付図2　辻田遺跡Ⅱ区土層図（井上・小池・小林実測，河鍋洋子製図）

辻田遺跡の調査

I 調査の経過

この調査は，山陽新幹線博多総合車輛基地建設に伴って計画された，県道福岡・大野・早良線付替用地の事前発掘調査として実施したものである。広大な車輛基地建設によって大きくう回することになった県道をより直線的に付け替える計画は昭和48年度に付帯施設として計画された。一方これに対して文化課側では，既に調査され広大かつ各時代の各種遺構を有すことの明らかであった門田遺跡に続く台地、更には低地の柏田遺跡に近接する水田面内に予定されたため，調査を要すると判断，追加18－2地点として，昭和50年度以降に調査を実施予定とした。

しかし国鉄側の用地買収が難行し，調査体制に入れず年々遅れ遅れとなり，ようやく52年末になって買収が解決したので，53年に文化課側の調査を実施することになったのである。

調査は昭和53年1月13日から開始したが，例年になく冷え込みが厳しく，たびたびの降雪，降雨の影響を受け，且つ予想以上に多量の木製品類が出土したことなどから，年度中に終了せず，5月26日までの期間を要した。

調査範囲が道路予定地という性格上狭長な部分であり，東側から第Ⅰ～第Ⅳ区に区分したが，第Ⅲ区に立木が植ったままの状況，その他の地区でも排土の用地確保の点から一気に調査できず，前半に第Ⅰ区・第Ⅳ区を，後半に第Ⅱ区・第Ⅲ区という順で着手する結果になった。

日を追って調査の経過を追ってみると

昭和52年度の調査

1月13日　調査開始，他遺跡の調査報告書作成作業等の進行状況から先ず木下技師，石橋補助員が担当。

1月14日　ユンボによるⅣ区の試掘。排土の都合で用地のうち北側半分のみを表土剥ぎすることにした。

1月17日　Ⅳ区の表土剥ぎに並行してⅠ－2区・Ⅱ－1区を試掘。Ⅱ－1区の中央部の試掘坑では表土下150cmまで下げたが更に堆積土が続き谷部を形成していることが想定された。

1月18日　人力によるⅠ－1区の表土剥ぎ開始。Ⅱ－2区を試掘。

1月20日　Ⅰ－1区・Ⅳ区とも表土剥ぎ作業終了，Ⅰ－1区で遺構検出作業に移り，溝，住居

跡２軒を確認した。Ⅰ－２区の表土剥ぎを開始する。

１月25日　Ⅰ－２区の表土剥ぎを一応終了した。

１月26日　Ⅰ－２区で遺構検出を行なった結果，東部で落ち込みを確認したが，西部では大きく黒褐色粘質土の落ち込みがみられ，唐草文様壇の破片が出土した。

１月30日　Ⅰ－２区の台地裾部で杭列を検出。雪のため午前中で現場作業を中止。

１月31日　Ⅰ－２区で溝・土壙等の遺構を検出。

２月１日　10cm以上の積雪を排除しての作業。

２月２日　Ⅰ－２区のPit を掘り下げる。降雪が激しくなったため午前中で現場作業中止。

２月３日　Ⅰ－２区のPit 群，土壙等の掘り下げ作業を行なう。

２月７日　Ⅰ－１区の住居跡掘り下げ作業。

２月８日　Ⅰ－１区・Ⅰ－２区写真撮影。

２月10日　Ⅳ区の掘り下げ作業を開始する。

２月13日　小池技師が調査に加わり，石橋補助員と共にⅠ区の実測作業用の杭打ち，割り付け作業にかかる。

２月14日　Ⅰ区の実測作業開始。Ⅳ区はⅢ区寄りの台地裾部を掘り下げていたが，湧水が多く排水ポンプを導入する。

２月16日　午前中は雪のため現場作業中止。京都大学地理学教室の出田和久氏来訪。

２月22日　Ⅳ区のⅢ区側で落ち込みを確認し掘り下げる。上層に古式土師，下層に弥生前期末の土器及び木材が発見された。

２月24日　１区は実測作業継続実施。Ⅳ区の西側で遺構検出作業を実施したが溝１条とPit が若干みられたのみで遺物は全く出土しない。西方に位置する柏田遺跡とは連続せず別個の遺跡であると判断した。

２月25日　１区は実測作業。ユンボによるⅡ－１区の表土剥ぎ（第１図）を始めたが湧水が激しく排水ポンプを連続運転して作業。Ⅳ区は写真撮影のため清掃。

２月28日　Ⅳ区は実測作業を残して終了し，Ⅰ－１区の中央部に試掘溝を設定して堆積土観察のための深層掘りを開始する。

３月１日　Ⅱ－２区は道路に挟まれユンボを使用できないため人力による表土剥ぎを開始する。

３月３日　Ⅱ－１区の表土剥ぎ終了。Ⅰ区での実測作業も終了する。

第１図　発掘風景１

3月4日　Ⅱ－1区に5m方眼の区割りを設定しA～D－1～15の小地区に分け，杭打ちを行なうと共に東側から掘り下げ作業開始。

3月6日　春日市教育委員会が航空写真撮影を実施するため便上して航空撮影を実施。

3月7日　B～D－2～5区を掘り下げ作業。B～D－2区は高く3～5区側に深くなることが観察できた。

3月10日　Ⅰ－1区BC－4付近に木材が多く出土し，ねずみ返し等を含めた各種建築部材がまとまって検出された。

3月13日　Ⅱ－1区B～D7区を掘り下げ，第5層下部で手綱枠が検出された。一方Ⅳ区の実測作業を開始する。

3月15日　Ⅱ－1区C6第5層下部で銅矛片出土，赤銅色を呈しており出土時には青銅器と思えない色調であった。Ⅳ区は土層断面図以外の実測作業終了。文化課松岡係長が指導助言の為来訪。

3月17日　Ⅱ－1区B7第6層で柄を丁寧に造り出した板材出土。後日この板材が琴板とわかる。

3月22日　報告書作成作業の都合で木下技師に替って井上主任技師が調査に加わる。Ⅱ－1区でB～Dの5列に堆積土観察用の畦を残して掘り下げ，表土下1.5m程度まで達しているためプールの如く冠水し排水に約2時間を費す。

3月24日　C6区とC7区の境の第6層で彫刻を施した杓子の柄出土，その精巧さに驚かされる。九州大学岡崎敬教授・明治大学杉原荘介教授来訪。

3月30日　C3区の第7層，D4区の第7層で各1点杓子が出土。両者とも先日出土した杓子に劣らぬ精巧さを見せる。B7～B8区で多量の土器が出土し，更に土器の下に多量の木材が集積して検出された。これらの内には琴2号，田舟状木製品も含まれている。(第2図)

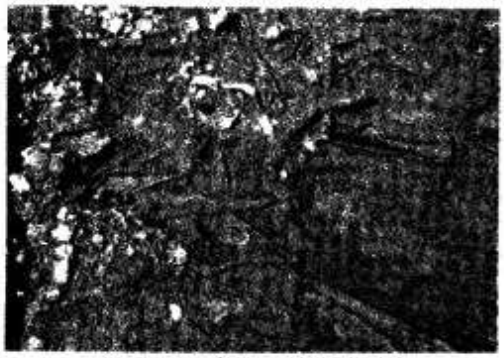
3月31日　B8区付近の土器，木材の出土状況写真撮影のため清掃作業。Ⅱ－1区の半分とⅢ区の調査を残した状態で52年度の発掘調査を終了する。

昭和53年度の調査

4月3日　石橋補助員が久留米市に就職したため，井上主任技師，小池技師の2人が担当して昭和53年度の発掘調査として再開する。Ⅱ－1区のB～D－3～8区の第6層下部を掘り下げる。

4月7日　3月17日に出土した板材が琴とわかり，西日本新聞に報道されたためか，見学者多数，九州歴史資料館鏡山猛館長，渡辺正気課長，横田義章氏，文化課宮小路係長，朝日新聞記者等来訪。

4月8日　Ⅱ－1区B7の第6層下部で田舟状木製品を掘り上げる。内法長は120cmであった。一方Ⅳ区では既掘区域内に



第2図　多量の土器や木製品

冠水がひどく放置したままでは危険なため埋め戻し作業を実施する。

4月10日　Ⅱ—1区C9・10区掘り下げ開始。九州産業大学森貞次郎教授，文化課藤井課長，松岡課長補佐，橋口主任技師来訪。

4月12日　B8区の木材出土状況の写真撮影を行なう。

4月13日　C9区の土器出土状況写真撮影のため清掃作業を行なう。九州大学文学部西谷正助教授，沈奉謹氏，赤崎敏男氏，工学部山本輝雄助手，文化課松岡課長補佐，日本農業新聞記者等来訪。

4月14日　C8区の第6層下面でアンペラ状の竹製品出土。九州歴史資料館横田義章氏の応援をえて発泡ウレタン処理によって取り上げる。C6・8区の第7層で縄文土器片出土。C9区の土器出土状況写真撮影。福間町郷土史会，作家宮崎康平氏，西日本・朝日新聞記者等来訪。

4月15日　B・C—6・7区第7層掘り下げ，須恵町歴史民俗資料館板橋鎌一氏来訪。

4月17日　C9区の木器出土状況写真撮影。B—11～15区，C—10～13区では遺構検出作業を行ない，土壙・Pit 等を確認する。福岡市教育委員会沢皇臣氏，山口譲治氏，共同通信・朝日新聞記者来訪。

4月18日　今日から小林調査補助員が調査に加わり，各地区の堆積土断面実測を開始する。

4月19日　多量の土器・木材を含む大溝の流路と河道幅を確認するため，D9・10区をユンボ等を用いて拡張する。福岡市歴史資料館後藤直氏来訪。

4月20日　E・F—10区にユンボによる試掘溝を空け堆積土断面実測後埋め戻す。またB3・4区の一部をユンボで拡張する。D9・10区の掘り下げ作業を開始し，D10区の北西端第6層上面で青銅製鏃先の出土をみた。

4月22日　D8～10区の第6層上部を掘り下げ，D9区で磨製石剣片出土。久留米市教育委員会大石昇氏に遺物の取り上げ作業を手伝って頂いた。大阪府教育委員会石神怡氏来訪。

4月25日　Ⅲ区の表土剥ぎを開始したが門田遺跡辻田地区につづく台地上の立地でもあり，甕棺墓の存在も懸念されたので重機を用いず人力で実施した。

4月26日　D10区第5層上部で曲物底板出土。大溝に対して直交する方向に大きな木材が集まっており，九州歴史資料館横田義章氏の来援によってPEG塗付作業を始める。九州大学農学部松本昌教授，林弘也助手・文化課松岡課長補佐来訪。

4月28日　D8区の第6層下面で櫂が出土したため，再度横田義章氏の来援を得て発泡ウレタン処理により取り上げ作業を実施する。また同区でウリ科種物の種子

第3図　発掘風景2

がまとまって検出された。一方植物種子の出現率を求める目的で各層の10cm立方体ブロックサンプルを採取する。九州歴史資料館渡辺正気氏，石丸洋氏来訪。

5月2日　RKB毎日放送TVの取材，文化課藤井課長の現地での指導助言をえる。

5月6日　雨天の為現場作業中止。釜の反転露出が済んだので九州歴史資料館石丸洋氏が写真撮影。3～5日の間にはB～D—6～10の平板測量を開始し，B～D—11～15の土壙等遺構を掘り下げる。Ⅲ区は遺構検出作業を実施。新日本製鉄生産技術研究所大沢正巳氏，修猷館高校，西南高校生等の見学もあった。

5月8日　D10区西壁堆積土の断面実測図を作成し，花粉分析等の供試資料用に土壌サンプルを5cm単位に採取する。

5月10日　Ⅲ区では，住居跡・Pit・溝等の遺構掘り下げ作業を行なった。住居跡は火災を受けた住居跡で炭化材，焼土と共に完形の土器が含まれておりセット関係を把握する上で重要な資料となった。

5月15日　Ⅱ－1区は掘り残していた東端部の調査を始め，B～D—2区の第6層上部を掘り下げる。一方Ⅲ区は住居跡・掘立柱建物跡等の写真撮影。奈良県立橿原考古学研究所石野博信氏，KBC九州朝日放送TVの取材来訪があった。

5月16日　Ⅱ—1中央部に残してあった堆積土観察用の畦除去。Ⅱ—2区，Ⅲ区の実測作業を行なう。西日本・朝日・読売新聞記者ら取材。

5月22日　Ⅱ—1区・Ⅱ—2区・Ⅲ区の全景写真撮影。

5月23日　Ⅱ－1区の土壙を掘り下げる。2号土壙では甕容器，下駄，墨書土器等が出土する。

5月25日　Ⅱ—1区の土壙を実測。九州大学農学部友納英毅助手，今長谷潔氏来訪。

5月26日　Ⅱ—1区に一部残していた平板測量も済ませ，器材，テント等も撤収し，現場での発掘調査を終了する。

発掘作業終了後，直ちに国鉄側の工事着工の予定であったが，事実上の着工は秋以降になりその間，6月10・11日にかなりの降雨があり，Ⅱ－1区を中心として調査区域内に冠水がはげしく放置することは危険であるため12日より水の汲み出し，深い部分の埋め戻し作業，更にⅡ—1区では周囲に有刺鉄線をはりめぐらせる処置を実施した。

5月27日以降は，パンコンテナにそれぞれ200箱以上の土器・木製品と各種遺物を洗浄することから整理を始めたが，多量の遺物のため物理的，空間的にも制約があった。殊に水浸状況で保管しなければならない木製品が大半を占め，積み重ねたパンコンテナの荷重で床が落ち込む状態にもなり，一方では見学の為に来訪された方々の前に直ちに遺物を出せないで迷惑をかけた。また福岡市を中心にして起きた無類の水不足の時期と重なったため木材の保管も思うにまかせられない状況となり一部の資料に乾燥・崩壊をもたらせる結果となってしまった。

整理過程において出土遺物は当時の生活環境復原の為に非常に貴重な資料であるため出来る

だけ図化，写真撮影を行なうべきものであるが，本年度中に全ての報告書を刊行しなければならず時間的にも制約の多い調査であった。

なお辻田遺跡の発掘調査並びに整理関係者は下記の通りである。

日本国有鉄道下関工事局福岡工事事務所

所長	高野満洲男	(昭和51年度)
所長	草野一人	(昭和52・53年度)
所長	中川章	(昭和53年度)
総務課課長	坂本清	(昭和51年度)
総務課課長	大村専一郎	(昭和52・53年度)
総務課課長補佐	坂本良作	(昭和53年度)
総務課設計協議第2係長	上野光	(昭和51～53年度)
総務課設計協議第2係主席	平野喜久也	(昭和51～53年度)
経理課課長	安永佳三	(昭和51年度)
経理課課長	芝山恒美	(昭和52・53年度)
経理課調度係長	吉木繁司	(昭和51年度)
経理課調度係長	山崎嘉一	(昭和52・53)
停車場課課長	高原計夫	(昭和51年度)
停車場課課長	速水昭正	(昭和52・53年度)
停車場課課長補佐	櫛間幸徳	(昭和51年度)
停車場課課長補佐	乙守茂	(昭和52・53年度)
停車場課第1係長	今泉重光	(昭和51年度)
停車場課計画係長	山本義実	(昭和52・53年度)
南福岡工事区 区長	石倉優	(昭和52・53年度)
南福岡工事区 区長	今泉重光	(昭和52・53年度)
南福岡工事区 助役	浦田勝	(昭和51年度)
南福岡工事区 助役	守永知邦	(昭和51年度)
南福岡工事区 助役	市丸宏	(昭和51年度)
南福岡工事区 助役	西野一則	(昭和51年度)
南福岡工事区 助役	平原洋一	(昭和51年度)
南福岡工事区 助役	野口則昭	(昭和52年度)
南福岡工事区 助役	猪俣征雄	(昭和52・53年度)
南福岡工事区 助役	宮部正義	(昭和52・53年度)

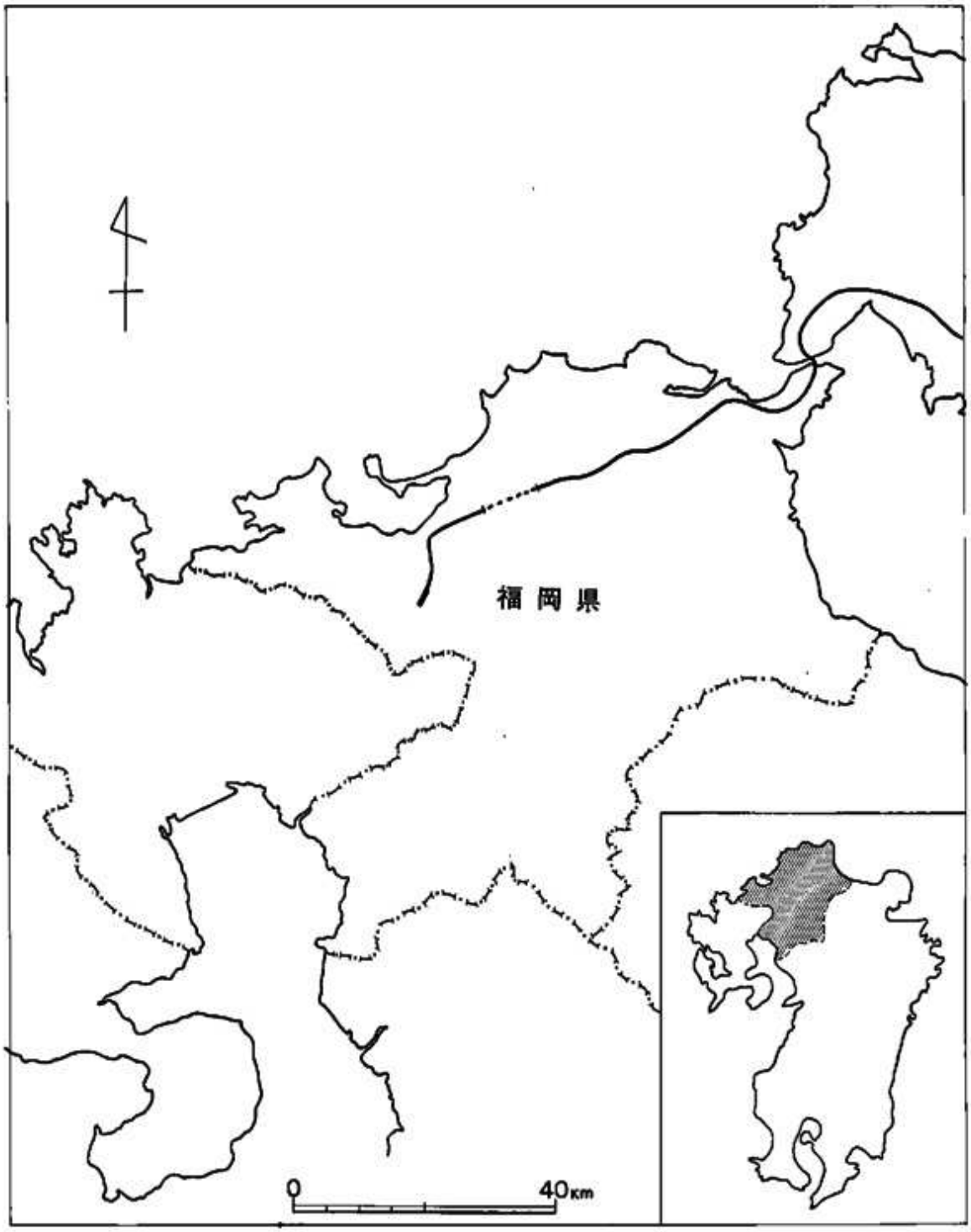
福岡県教育委員会

総　括	管理部長	浦山太郎	
	管理部長	西村太郎	(昭和52年度)
	管理部長	岩下光弘	(昭和53年度)
	文化課課長	藤井功	
	文化課課長補佐	武久耕作	
	文化課課長補佐	松岡史	(昭和53年度)
庶　務	文化課庶務係長	大渕幸夫	
	文化課主任主事	大神新	
	文化課嘱託	吉村源七	
発掘調査	大阪市立大学理学部教授	粉川昭平	
	九州大学農学部教授	松本昂	
	九州大学農学部助手	林弘也	
	九州歴史資料館主任技師	横田義章	
	九州歴史資料館主任技師	石丸洋	
	文化課調査係長	松岡史	(昭和52年度)
	文化課調査第2係長	栗原和彦	
	文化課主任技師	柳田康雄	
	文化課主任技師	井上裕弘	
	文化課技師	木下修	
	文化課技師	小池史哲	
	調査補助員	石橋新次	
		小林義彦	
遺物整理	整理補助員	荒武麗子	

作業員　今長谷潔　池辺信子　中村良子
金堂仁枝　藤野和代　八尋恵美子
河鍋美智子　金堂融子　江藤千賀子
山下幸子　植村典子　勝野準子
手嶋道子　勝野素子　河鍋洋子
白水千賀子

この他発掘調査・整理作業を通じて多くの方々の有益な助言・協力を得た。感謝に耐えない。

(小池史哲)

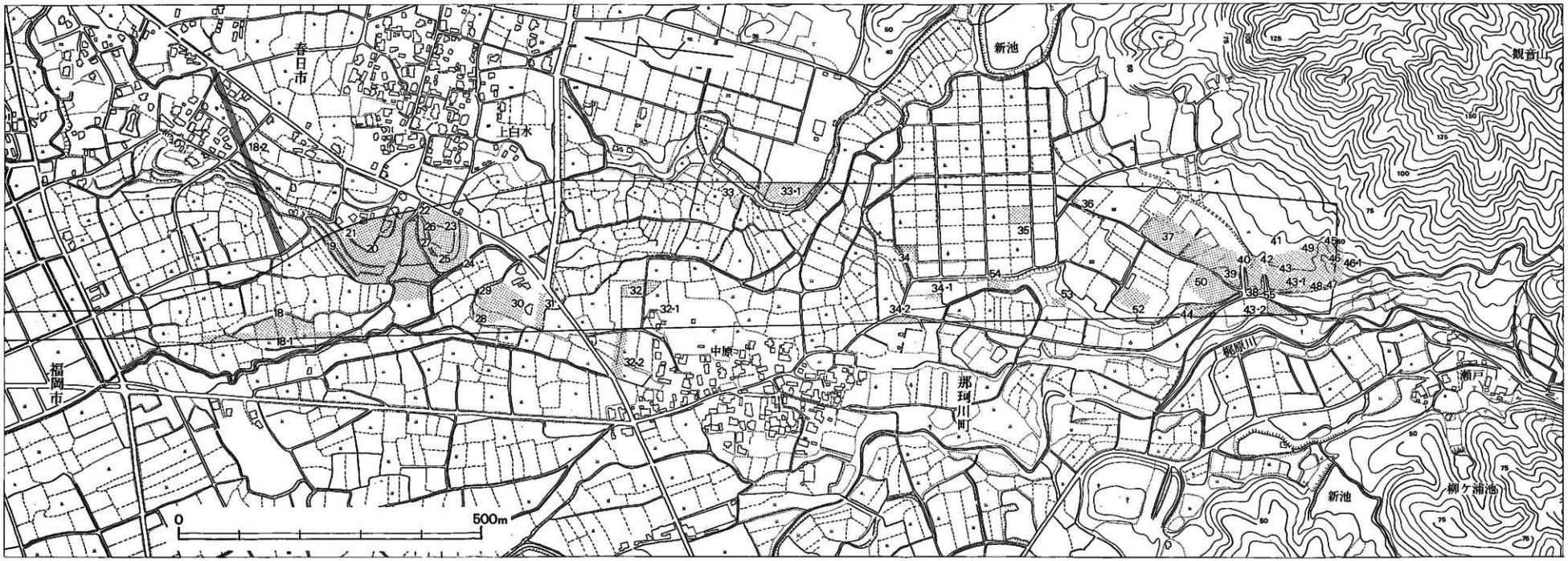


第 4 図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（1/1,000,000）

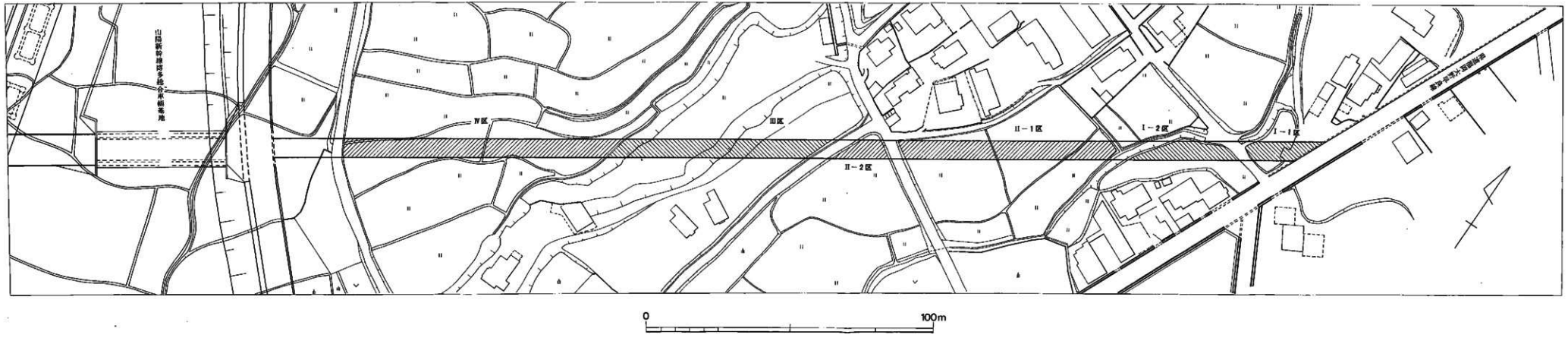
表 1 山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積 46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	備考	報告書
				㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡		
3	小田山墓地	筑紫郡筑手町中山	近世墓地										1集
4	下松尻墓地	〃 〃 〃	近世墓地		—								〃
5	京尻遺跡	〃 〃 宮木	中世紀石遺構		—								〃
6	若宮条里	〃 若宮町	条里遺構		229								〃
6－0		〃 〃 金丸	近世墓地			—						調査前に工事のため改葬	〃
6－1	田尻遺跡	〃 〃 金丸・水原	古墳、歴史時代：住居跡		2,035		3,000						〃
6－2	別当塚	〃 〃 竹原	古墳		146							遺構、遺物なし	〃
6－3	八幡塚	〃 〃 〃	古墳		16			300					
7	杉間遺跡	〃 〃 福光	土師：散布地									遺構なし	1集
8		粕屋郡久山町山田	条理遺構		100							調査の結果、条里ではなかった	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒、円形			790							4集
18－1			遺構、溝状遺構				2,100	1,000				昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱	〃
18－2	辻田遺跡	〃 〃	弥生、古墳時代：住居跡・木器							2,375	1,882		
18－3	井手ノ元遺跡	福岡市南区上長住								720			
19～27 及び周辺	門田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡、貯蔵穴、墓標群、石棺墓、土壙墓、古墳5基		予備調査 (4,500)	7,170	9,700	4,570				昭和46年度に門田2号墳の調査を平安時物館に委嘱	1・3・6・7・9・11集
28～31－1	下原遺跡	〃 〃	古墳時代：住居跡	2,784	690								3集
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地										〃
32－1	〃	〃 〃 〃	古墳時代：横穴墓				300						
32－2	久保遺跡	〃 〃 〃	縄文、歴史時代：溝状遺構						700				
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197							2集
33－1	原古墳群	〃 〃	円墳3基、周溝墓8基、土壙墓4基			1,725	800	1,510					〃
	原遺跡		縄文時代早期、弥生時代横穴墓									一部保存	10集
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代、散布地		135							遺構・遺物なし	
34－1	辻ノ無遺跡	〃 〃 〃	先土器、縄文時代：散布地		267								
34－2						288						別府大学に調査委嘱	
35		〃 〃 〃	中世：散布地			200							
36		〃 〃 〃	近世：道路（かんのん道）			—							
37, 39 50, 55	井手ノ浜遺跡	〃 〃 〃	中世：方形区画遺構、溝状遺構	1,814	1,515	1,500							2集
38, 41～43 45～49 49-1～4, 51	牧台山古墳群 中原支群	〃 〃 〃	古墳31基	707	6,400	220							5集
43－1		〃 〃 〃			1,840	2,540							
43－2	篠原遺跡	〃 〃 〃	縄文時代：石焼炉跡32基、円形竪穴遺構			104						昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	8集
46－1					271				1,021				
44		〃 〃 〃	中世：散布地		432								
52		〃 〃 〃	中世：散布地		123								
53		〃 〃 〃	古墳時代：散布地		123							遺構なし	
54		〃 〃 〃	弥生、古墳時代：散布地		150								
54－1		〃 〃 〃	古墳時代：散布地			95							
合計				5,305	14,399	14,829	15,900	7,380	1,721	3,059	1,882		

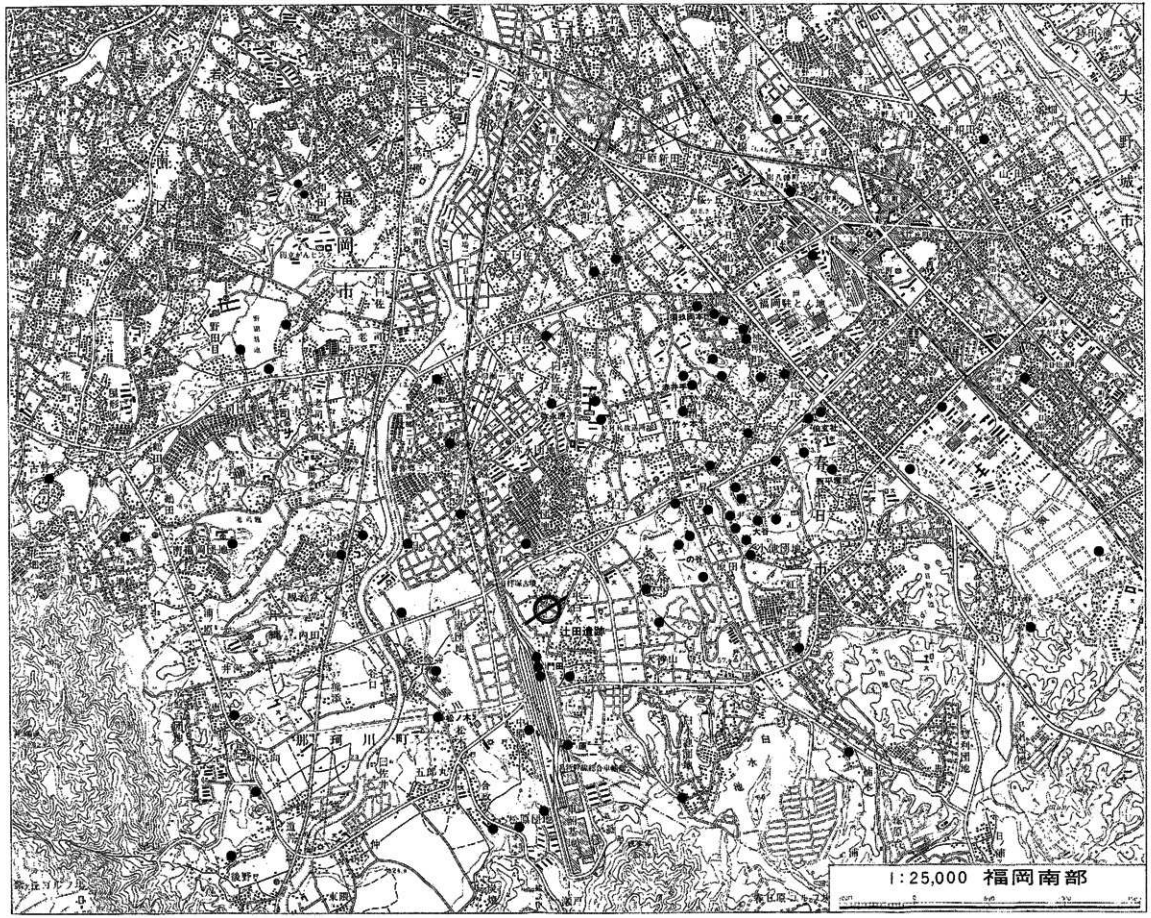
注 1. 地点番号1，2は北九州市教育委員会，9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2. 欄頭以外の付番地点にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3. 面積欄に（－）で示したものは調査面積としてあげないが当該年度に調査したことを示す。



第 5 図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡分布図 (1/5,000)　▨印は本報告掲載を示す



第 8 図　辻田遺跡地形全体図（1/1,000）



第 7 図　辻田遺跡周辺地の弥生時代遺跡の分布

II　遺跡の位置と環境

はじめに　辻田遺跡は，福岡県春日市大字上白水字中白水・同字辻畑・同字柏田にわたって所在する（註1）。山陽新幹線建設工事に伴う県道付替用地は，以上3つの小字区域を横断しており，広大な山陽新幹線博多総合車輌基地の北東隅に直交する形になり，長さ約320㎞・幅約10㎞の狭長な部分を今回発掘調査している。この部分は，那珂川右岸の中位段丘とそれを開析する浅い谷及び低位段丘上に位置し，地目は水田及び畑である。

立地条件　那珂川右岸の中位段丘は，脊振山地の北方に延びる牛頸山（標高448㎞）塊につづく春日丘陵を開析した谷から広がるようにして，上白水・下白水・須玖へと広く続いており，標高は40㎞以下である。一方，花崗岩を基盤とする牛頸山塊から流れる梶原川が，この風化花崗岩を侵蝕し，瀬戸の谷あいを抜けたあたりから下流に土砂を堆積させており，春日丘陵から派生する小河川も同様な作用をしている。この作用と那珂川の流れによって形成されたのが低位段丘である。これは，今光・弥永・日佐と続き標高25㎞以下である。また中位段丘の周辺部には処々で低位段丘との落差を埋めるが如く浅い谷を形成している（註2）。辻田遺跡はこのような，中位段丘周辺部に位置し，低位段丘・浅い谷をも含めた3種の地形に立地する。

立地による区割り　まず，遺跡の東端部は中位段丘上に立地し，標高約27.5～28㎞を測るが，小河川より西方は低くなる。東端から約70㎞までの範囲である。

小河川より西方は浅い谷になり，標高26.5～27㎞を測るが，市道辻畑道線から西方が高くなり，その間の距離は約100㎞を有す。

道路より西側はまた中位段丘上であり，標高28～28.8㎞を測る。道路から西方約60㎞で急傾斜な斜面となる。

東端から約240㎞になると標高21.4～21.8㎞の低位段丘上で，約100㎞西の市道柏田本通り線までを調査範囲としている。

このように，こま切れ状態で立地が異なるため同一の遺跡として各種の遺構，遺物を扱う訳にはいかない。このため立地条件によって東から第Ⅰ区・第Ⅱ区・第Ⅲ区・第Ⅳ区の大地区に区分して取り扱うことにした。各大地区別の調査範囲に含まれた地番は，以下の通りである。

第Ⅰ区　大字上白水字中白水545－1，545－5

第Ⅱ区　大字上白水字中白水571－1，571－2，580，581

第Ⅲ区　大字上白水字辻畑625－1

第Ⅳ区　大字上白水字柏田658－1，659－1，660－1，666，668－1

周辺の遺跡　Ⅲ区の台地は南方に門田遺跡辻田地区を占地させている。門田遺跡は，中位段

丘上に立地する辻田地区・門田地区があり，また両地区に挟まれた谷地区もある。辻田地区では，先土器時代の遺物の他弥生～歴史時代の各種の遺構遺物が発見されており，住居跡，袋状竪穴・V字溝・溝・甕棺墓・土壙墓・古墳・火葬墓・近世墓等の遺構は総数200以上に及ぶ。なかでも弥生時代中期後半に台地頂部を占める3基の甕棺墓で青銅製鋤先・鉄戈・鉄剣等を墓壙あるいは棺内から検出されたこと，台地西斜面で弥生後期前半の土壙墓などから玉類を多量に出土したこと（註3）は特定集団を想定させうるものであり埋葬形態の違いもあり注目される。

門田遺跡谷地区では，谷部の中央にみられる大溝から先土器時代・縄文時代早期・前期・晩期・弥生時代後期後半・古墳時代以降の遺物が出土し，特に弥生時代後期の土器が大半を占め，木製品・植物種子等の出土もみられた。また弥生時代後期末のイチイガシの貯蔵穴を発見している。なおこの谷地区の谷頭部は，現在の県道と車輛基地の接する部分にみられ豊富な湧水があったとされ（註4）る。なお，第8図で理解し易いが現在の県道部分は，台地部分より低くなっている。この部分について，中位段丘形成時の旧河道とする意見（註5）もあるが，低い部分は辻田遺跡のII区に続く。辻田遺跡II区を中位段丘を開析する浅い谷部としているが，この上流域において，旧河道状の低地があり，一方で門田遺跡谷地区に開析することから，門田遺跡辻田地区と辻田遺跡III区を乗せる台地はあたかも独立丘のような形になる。これは門田遺跡における連綿とした生活にとって立地条件としての好材料であったといえよう。

III区の台地は北方に延びてやや広くなり，国指定史跡日拝塚古墳を占地させている。日拝塚古墳（註6）は，全長47.2m，後円径26m，前方径39.2mを測るこの地方ではやや大形の前方後円墳で，単室横穴式石室を内部主体とする後期古墳である。辻田遺跡との距離は約150mで，古墳時代後期における占地の面でも注目されよう。

IV区の立地する低位段丘上では，車輛基地を挟んで柏田遺跡が占地している。標高21mの水田面に立地して，縄文時代後期の住居跡群をはじめ，縄文時代晩期の遺構，古墳時代前期・歴史時代の遺構等がある。但し弥生時代の遺構，遺物が全くみられなかった点など，低地での弥生時代の状況が問題になってくる遺跡でもある。また柏田遺跡の西方を流れている小河川が，東側を流れたこともあったと指摘できており（註7），辻田遺跡IV区との関連に注目される。

辻田遺跡と200mと離れていない極めて狭い範囲での周辺の遺跡をとりあげたがI区の方向では近くにまだ遺跡の存在が確認できていない。しかし半径2km以内には須玖岡本遺跡，伯玄社遺跡までの多くの遺跡群がある。この地域は，青銅器類を多く出土させ，また巨大な甕棺墓地群を構成するなどの弥生時代中期の段階に遺跡が特に多くなり，いわゆる奴国の中枢部というべき地域である。既にこの地域では多くの遺跡が発見，調査されており，枚挙にいとまがないが地名表として「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1集があるので改めて触れない。地名表以後に調査された弥生時代遺跡を若干紹介するのにとどめておきたい。

春日市小倉　赤井手遺跡　春日市教育委員会の発掘調査（昭和51～53年度）よって，弥生時

第 8 図　辻田遺跡周辺地形図（微地形図）（1/5,000）

代中期甕棺墓群・後期住居跡群・古墳時代住居跡群及び時期は明確でないが水田遺構（取水の為の樋等）が検出され，ガラス製勾玉の溶范の出土は注目される（註8）。

春日市小倉　大谷遺跡　春日市教育委員会の発掘調査（昭和51～53年度）によって，弥生時代中期の甕棺墓群・住居跡，後期の住居跡群，古墳時代後期の横穴式石室等が検出されている。特殊な遺物として，銅戈・銅矛・銅剣・小銅鐸の溶范片や石剣が出土している（註8）。

春日市小倉　西平塚遺跡　春日市教育委員会の発掘調査（昭和53年度）によって，弥生時代前期末～中期の甕棺墓・土壙墓群，古墳時代前期の並列した箱式石棺２基を内部主体とする古墳等を検出している（註8）。

春日市下白水　一の谷遺跡　春日市教育委員会による発掘調査（昭和51～53年度）では，Ａ地区に，弥生時代中期～古墳時代初頭の墓地群が検出され，これには甕棺墓・土壙墓・石棺墓・方形周溝墓等が含まれている。Ｂ地区には，弥生時代前期末～中期初頭の貯蔵穴群・中期住居跡群が，Ｃ地区には弥生時代中期の甕棺墓・土壙墓群が検出されており，またＤ地区にも貯蔵穴・土壙墓・方形周溝墓等ある（註8）。

筑紫郡那珂川町松の木　松の木遺跡　那珂川町教育委員会の発掘調査（昭和53年度）によって弥生時代前期の甕棺墓群，古墳時代前期の住居跡群，溝等が検出されている（註9）。

（小池史哲）

註１　辻田遺跡の名称については，中白水・辻畑・柏田のどの小字名にも一致しないが，山陽新幹線関係調査報告で辻田をツジバタケと読ませている先例があり（字辻畑に含まれる門田遺跡を辻田地区として取り扱っている），既に遺跡一覧表にも辻田遺跡として紹介する等，現状では改称し難いのでそのまま踏襲した。また字柏田遺跡とした遺跡もある。この意味では中白水遺跡とする方が妥当であったかも知れない。但し今回のように長い調査範囲の場合にはこのような問題が生じ易く，後述する大地区区割りのような遺跡の区分も必要になってくる。

２　春日丘陵周辺での地形区分等では代表的なものとして次の論文がある。

a）浦田英夫「福岡市付近の平坦面の地史学的研究」『九州大学教養部地学研究報告』８　1962

b）古川博恭「地形・地質」『板付，福岡市埋蔵文化財調査報告書』第35集　1976

３　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集及び第９集　1978

４　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集　1979

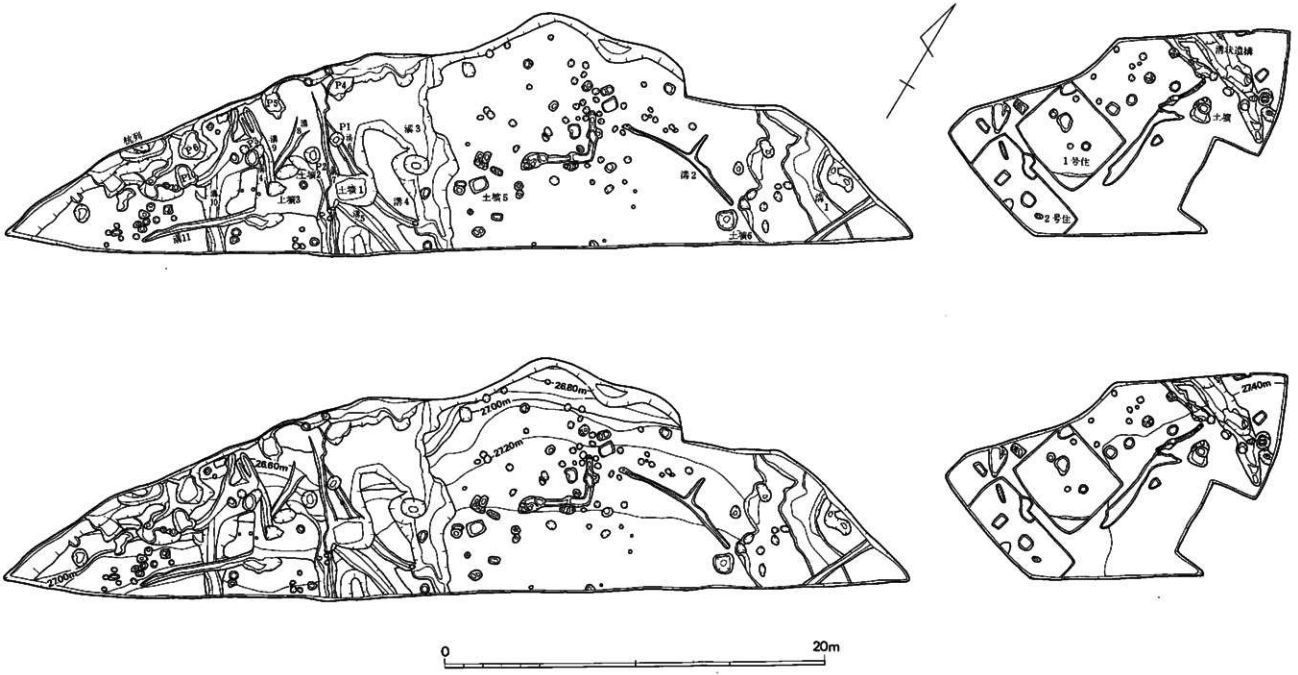
５　安田喜憲「泥土の花粉分析」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第４集　福岡県教育委員会　1977

６　渡辺正気・柳田康雄「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42　1969

７　小池史哲編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第４集　1977

８　春日市教育委員会　丸山康晴氏教示

９　現地説明会資料『那珂川町の歴史を掘る』福岡県教育委員会・那珂川町教育委員会　1978



第 9 図　1区遺構配置・地形図（1/200）

III　I 区の遺構と遺物

I 区は,県道福岡大野早良線と交差する箇所から70 mまでで,辻田遺跡の東端に位置する。調査区の東寄りに市道前田中白水線が横断することから，東側をI－1区，西側でII区に接する台地上をI－2区と便宜上分離した。

I－1区は，三角形状の調査区で，表土下60cmで遺構が検出された。遺構は，弥生時代終末期の住居跡2軒，溝状遺構2条，土壙1および時期不明のピット群である。1号住居跡は完存したが，2号住居跡は約⅓が調査区内に存し，他は市道下になっている。2条の溝状遺構は，調査区を南から北へ横断する方向で検出された。

I－2区は，南から延びる低平な台地端部に位置し，I－1区の調査経過から弥生時代住居跡の存在が予想された。遺構は，11条の溝状遺構，土壙4，ピット群・杭列が検出された。時期は溝状遺構1・2を除いた大半の遺構が中世のもので，I－1区と同じ台地上端部にありながら，まったく異なった様相を呈している。溝状遺構，土壙内より糸切り土師器が主に出土し，若干の磁器類を伴出した。その他にも，柱穴と考えられるピット群が，溝3の東側にみられるが，まとまるものは無い。

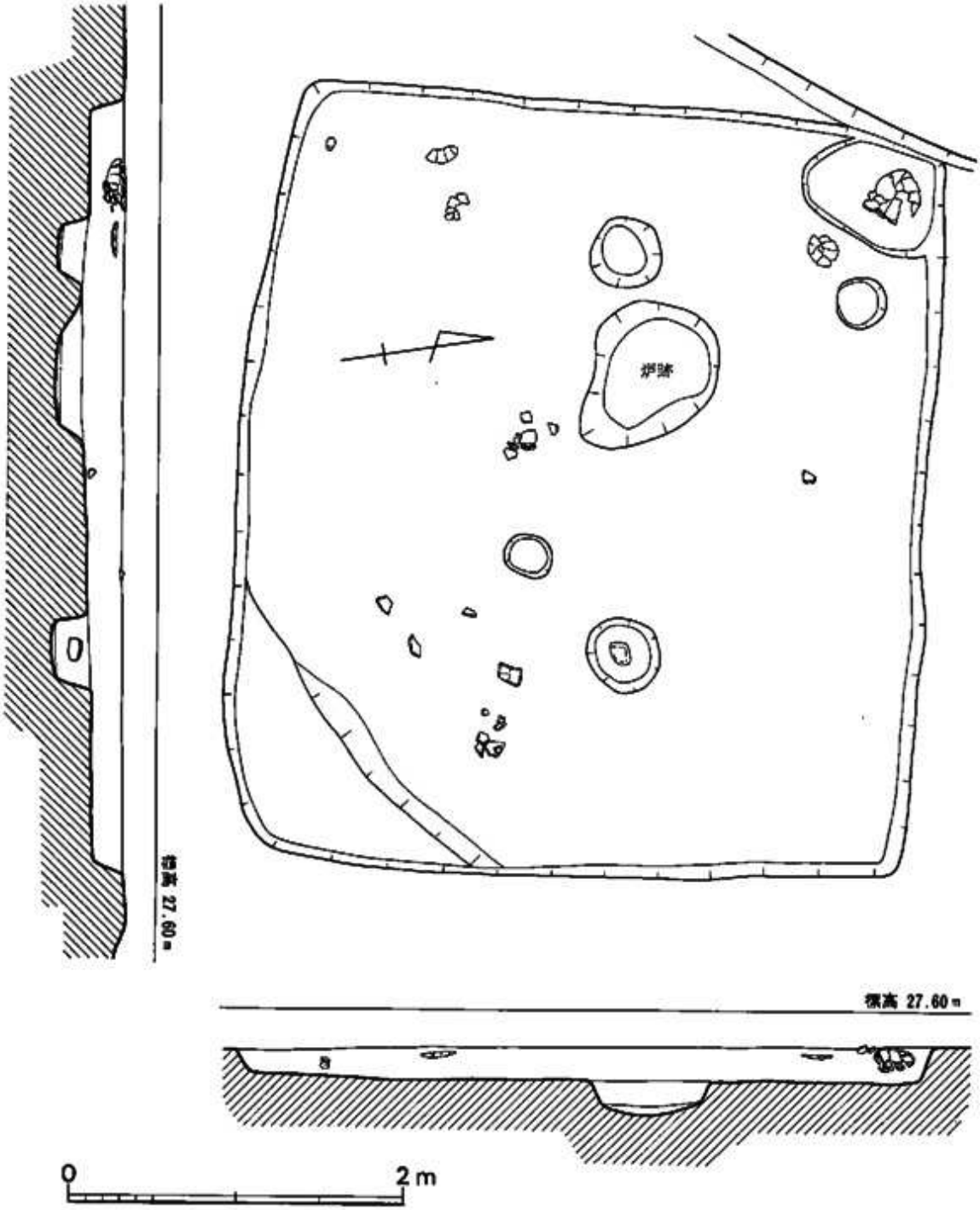
1. I－1区の調査

(1)　1号住居跡（図版3・4，第10図）

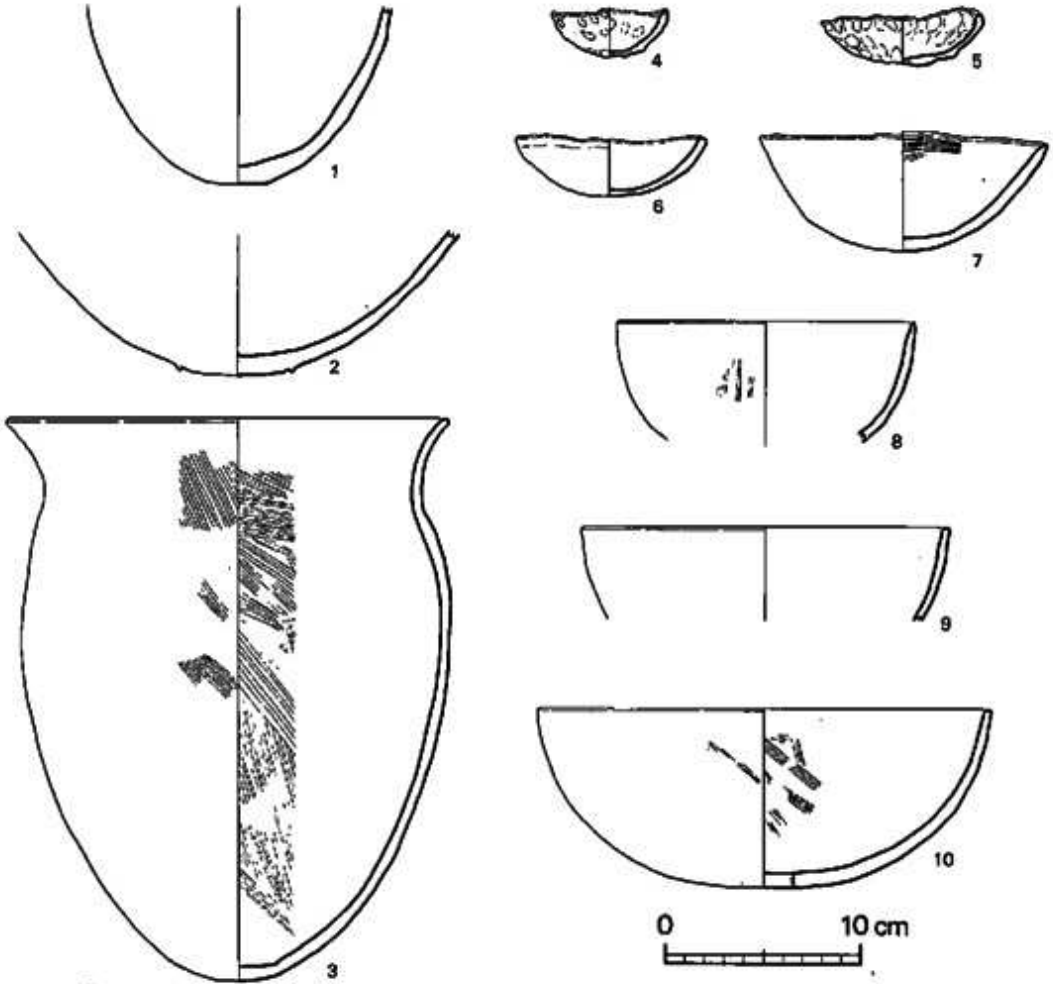
調査区の中央西寄りに検出された。東西4.64 m，南北4.15 mと若干東西方向に長い方形のプランを呈す。壁高は20cm内外と低く，上辺は削平されていると思われる。床面は中央部が若干へこみ，南コーナーで半月状の高まりを有すが，全体に平坦であり，あまり固く締められていない。炉跡は住居跡中央部の北寄りに施設され，径70～80cmと大きく，深さも20cmを測る。柱穴はこの炉跡を挟んで2本の主柱穴がある。その他にも2つのピットがあるが，位置から柱穴とも考え難い。住居跡内からは壺・甕・椀・手捏土器，砥石，鉄鏃が床面から浮いた状態で出土した。これらの土器群から1号住居跡は弥生時代後期末頃の時期であろう。（木下　修）

出土土器（図版6，第11図）

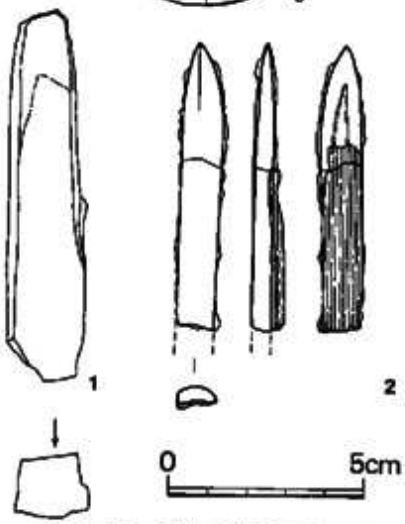
1は小型の壺形土器の胴部下半資料である。底部は丸底気味の平底をなす。外側はナデ仕上げ，内面は器面磨耗のため不明。色調はくすんだ灰白色を呈する。2は甕形土器の底部破片資料で，底に剝落痕を残す。剝落の状態からして脚が付されるか，丸底気味の平底を作ると思わ



第 10 図　Ⅰ区 1 号住居跡実測図（1/40）



第 11 図　Ⅰ区 1 号住居跡出土土器実測図（1/4）



第 12 図　Ⅰ区 1 号住居跡出土砥石・錘実測図（1/2）

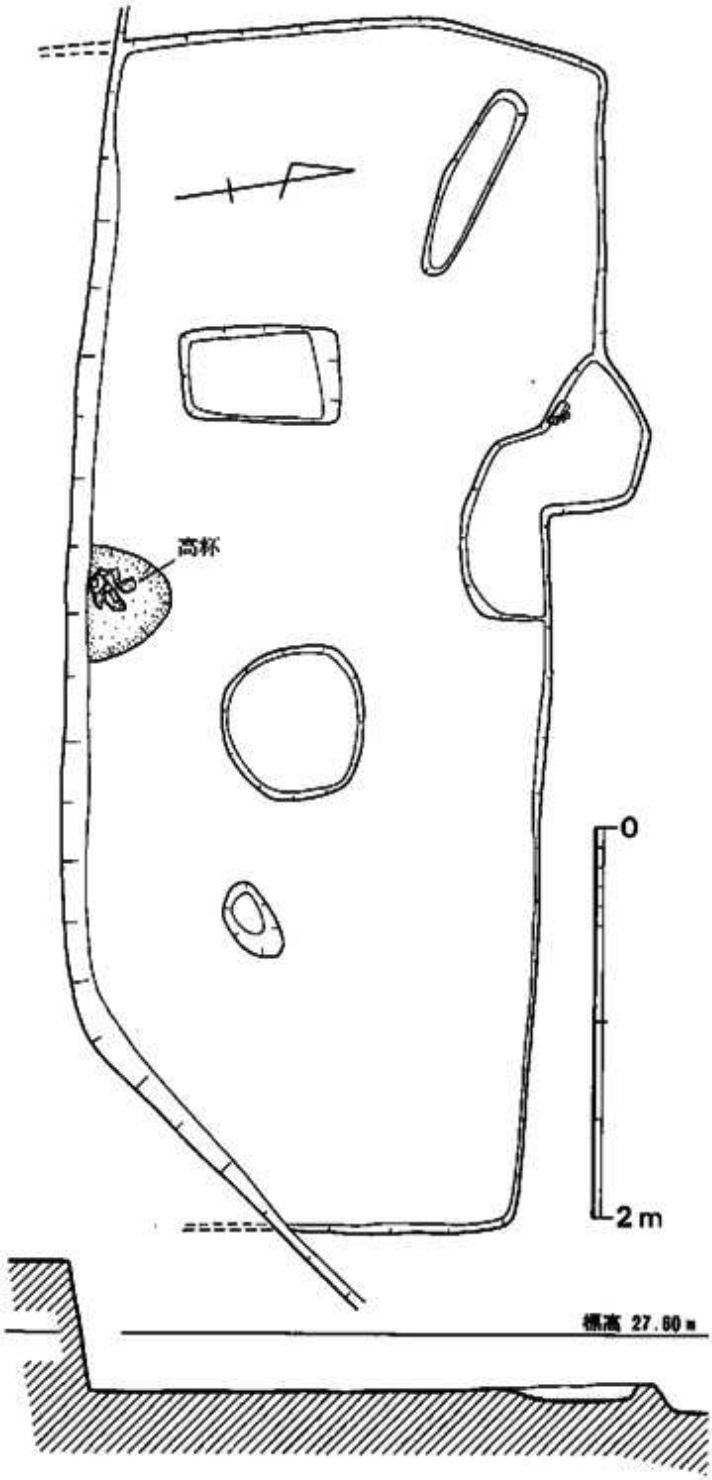
れる。内面ナデ，外面細かい刷毛状具によるナデ仕上げ。色調は灰白色を呈する。3は立ち気味にゆるく外反する口縁部に倒卵形の胴部がつく長甕である。底部は丸底であるが，わずかに平底気味になるクセを残している。胴部外面上半は刷毛，下半は縦位の，ナデ，内面は粗い刷毛で，口縁部内外はヨコナデ仕上げされる。口径23.3cm，器高28.6cmを測る。色調は暗灰色を呈する。4・5は手捏の小型の杯である。いずれも内外に指頭整形痕を残し，口縁も凹凸の波状をなす。また両者とも器面内外はヒビ割れ状を呈し色調も暗灰色である。他の器種にくらべ胎土に金

雲母を含むようである。6は指頭整形痕をわずかに残す小型の杯である。口縁はわずかに波状を呈し不安定であるが，本来角張るものと思われる。外面は風化のため不明，内面はナデ仕上げされる。色調は灰白色を呈する。7は外方へ広がる口縁の椀形土器で，口径14.8cm，器高6.1cmを測る。内外ともナデ仕上げされるが，口縁下の内面には横位の粗い刷毛痕を残す。内外とも指頭整形痕を残しており，器面は凹凸をなし口縁もまたわずかに波を打つ。胎土は非常に細かい長石粒が主で精選され，色調は灰白色を呈する。8～10はいずれも比較的ていねいに仕上げられた椀形土器で，それぞれ復原口径15.2cm，18.8cm，23.2cmを測る。8の口縁が尖り気味なのに対し9・10はやや角張る。器面調整は8，9が内外ともナデ，10は内面が細かい刷毛の後ナデ，外面は細かい刷毛の後粗い研磨を施す。色調は9が橙褐色で，8，10は灰白色を呈する。

（石橋新次）

石器（第12図1）

柱状の細身の砥石で，研砥面は主に一面で，左面に一部



第13図　I区2号住居跡実測図（1/40）

研砥の跡を残す。研砥面の状態はなめらかで仕上げ用のものと思われる。石材は頁岩質である。

鉄鉋（第12図２）

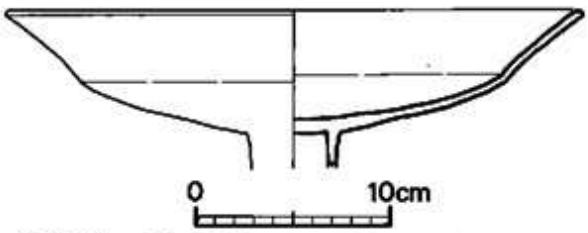
刃部長2.5cmを測る鉋で，柄部の一部を欠く。現存長7.4cm，柄部幅１cmを測る。断面は三日月形を呈し，厚さ3.7cmである。刃部は，わずかにカーブをえがき先端は鋭く尖る。側面は先端にかけてわずかに傾くが，ほぼ直線的である。

(2)　２号住居跡（図版５，第13図）

１号住居跡の西に接して検出された住居跡で，調査区内に約⅓がかかり，他は道路下になる。長軸を１号住居跡と同様にほぼ東西方向に取り6.2mを測る。南北は2.4cmまで確認でき，全形は方形に近くなると思われる。住居跡プランを確認した段階で内を掘り下げたが，壁高はわずか１～２cm前後を除すのみであった。住居内は火災にあっており，炭化物が多く認められ，床面も固く締っていた。炉跡は調査区境にある径47cmとほぼ円形を呈し，内に高杯が出土した。柱穴と考えられるものは調査区内には無かった。遺物は炉跡内から出土した高杯のみである。時期は弥生時代後期末頃で，１号住居跡と同時期であろう。　（木下　修）

出土土器　（第14図）

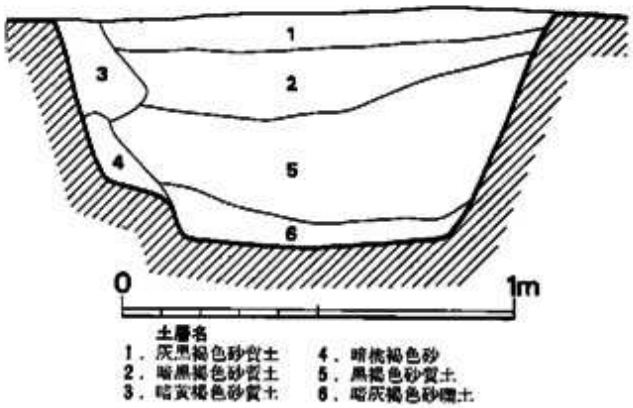
脚部を欠失する高杯の破片資料で，復元口径29.6cmを測る。杯部口縁の外反はさほど大きくなく，杯底部の内外に不明瞭な段を作る。器面は内外とも磨耗していて調整は不明。胎土，焼成とも良好で，色調は淡赤褐色を呈する。　（石橋新次）



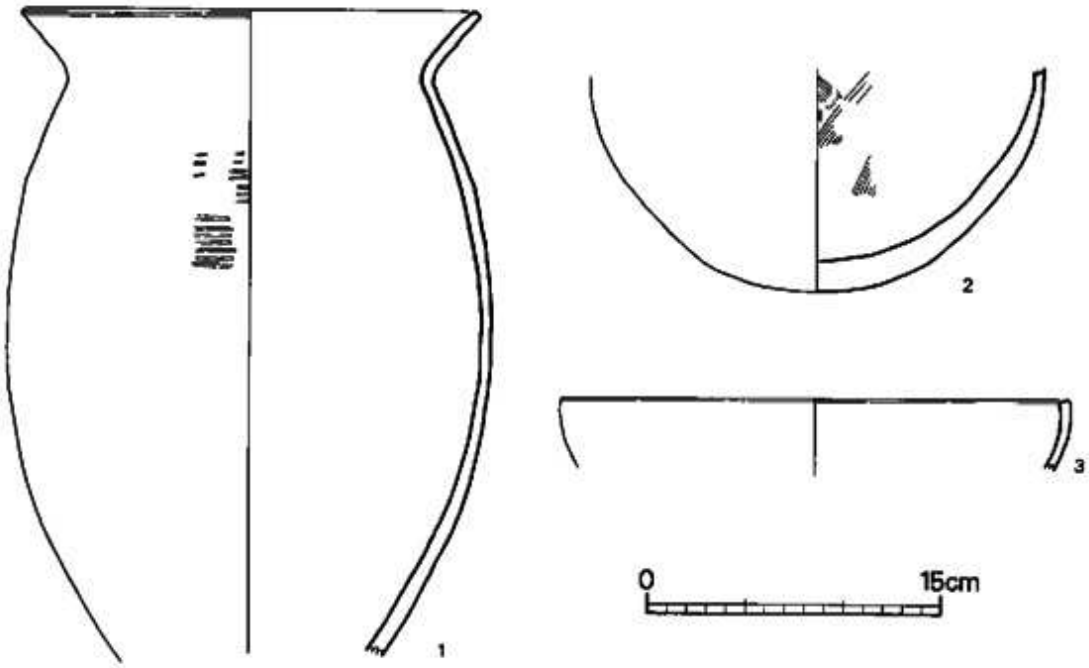
第 14 図　Ⅰ区２号住居跡出土土器実測図（１/４）

(3)　溝状遺構１
（図版７，第９図）

調査区を東西に横断する溝で，幅は70～1.4mと台地端部の方へ広くなる。深さは東端で40cm，西端で71cmと深くなっていく。底面は東側は「U」字形を呈すが，西になるに従い台形状に変わる。第15図は溝内の土層堆積状態を表わした図で，大きく４枚の土層が認められる。色調の



第 15 図　Ⅰ区溝状遺構１土層断面図（１/20）



第 16 図　I区溝状遺構出土土器実測図（1/4）

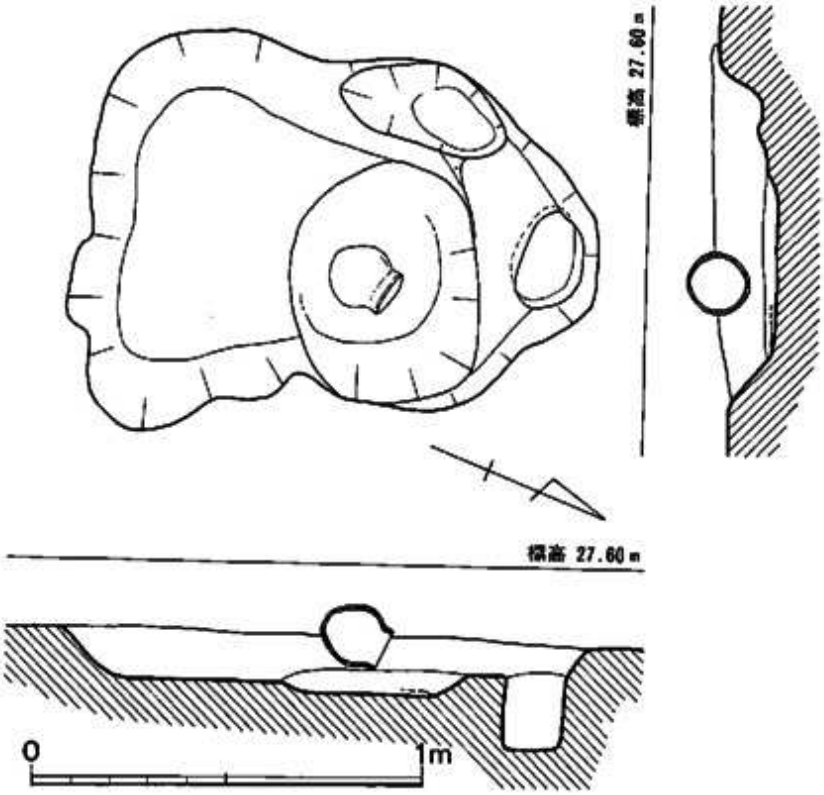
差はあるが，砂質，砂礫土が埋まっている。遺物は弥生時代後期終末頃のものが多い。

出土遺物（第16図）

1は「く」字状に外反する口縁部に，中位に最大径を有する胴部が付く長胴の甕である。肩部を作らずなだらかに伸びる胴部はさして張らず底部に至るのが特徴で，一般にこの時期の甕に比しより長胴になる感を与える。器面調整は内面ナデ，外面胴部上半がやや右下りの粗い叩きの後ナデ，下半は縦位のナデ仕上げである。口縁部内外はヨコナデされ，端部内外にわずかに凹みを作る。色調は淡灰褐色を呈する。復原口径23.4cmを測る。尚，外面には煤の付着が認められる。2はやや小型の壺形土器の胴部下半資料である。球形を呈する胴に，直口する短頸の口縁を付す器形になると思われる。器面調整は内外とも非常に細かい刷毛ナデ仕上げされる。色調はくすんだ黄灰色を呈する。3は椀形土器の破片資料で，復原口径26.1cmを測る。口縁端部は角張りわずかに内傾する。器面調整は内面がヨコナデ，外面は磨耗のため不明。色調は白灰色を呈する。尚，一部に丹の痕跡を残している。

(4)　溝状遺構2（図版7）

溝状遺構1の南側に並走する小さな溝で，長さ3.2mまで確認でき，調査区外へ続く。幅は40～50cmと狭く，深さも10cm内外と浅い。弥生時代後期の土器片が若干出土した。



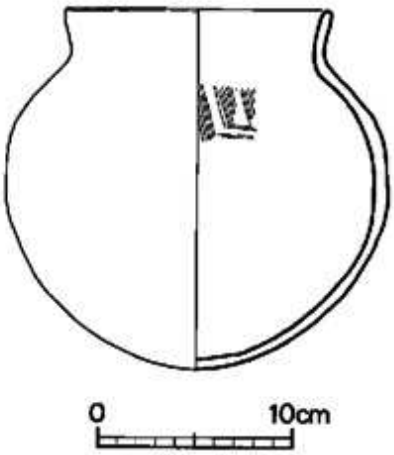
第 17 図　I区土壙実測図（1/20）

(5)　土　壙

溝状遺構2の南東側に検出された土壙で，長辺1.34mで，短辺0.87～1.0mの不整形を呈す。壙の北側寄りに径60cm程の円形の凹みがあり，この内に壺形土器が倒置されていた。

出土遺物（第18図）

やや外反気味に直行する短頸の壺で，胴部は球形を呈する。器面調整は胴部内外がナデ，口縁部はヨコナデされる。特に外面のナデはていねいで，肩部内面に刷毛痕を残すのみでナデ消されている。口径13.6cm，器高18.5cmを測る。色調はくすんだ黄褐色を呈する。II区の大溝内6層に類似の土器がみられ，弥生時代後期終末に属そう。



第 18 図　I区土壙出土土器実測図（1/4）

2. Ⅰ－2区の調査

(1) 溝状遺構（第19図）

11条検出された。調査区の東・西に二分される。溝1・2は東側に検出され，溝3～11は中央部から西側で，各溝が合流したり，土壙と重複したものが多い。時期的にも前者は弥生時代終末期頃で，後者は中世と相違している。溝2・11を除いて，台地の北端へ傾斜に沿って流水している。

(1) 溝1

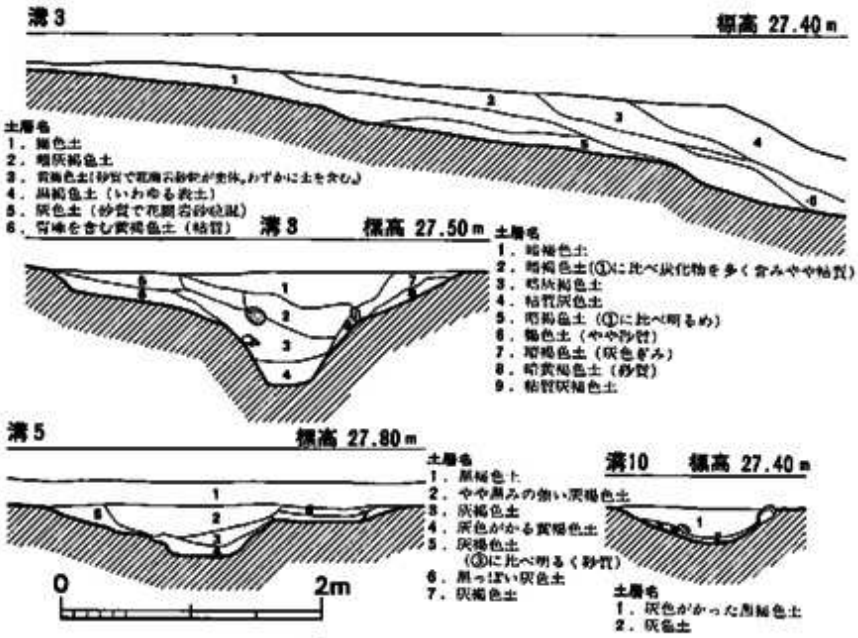
調査区の東端に検出された。ほぼ南北方向の溝で，幅1.4m前後，深さ27cmで底面はU字形を呈す。溝内からは，中世土師器や須恵器，弥生土器が混在して出土した。時期は弥生時代終末頃であろう。

(2) 溝2

溝1の西側に検出された。完結する細い溝でほぼ中央部で北く転ずる支溝がある。全長7m，幅28cmで，深さは10cm内外と低平。遺物は弥生時代終末頃の土器片が若干出土した。

(3) 溝3

調査区の中央部を横断する溝で，中世の溝状遺構で最も幅広で主流をなすと思われる。幅は南端で0.8mと最も狭く，北へ進むにつれ幅を広げ，最大1.6mを測る。深さも10～40cmと深くなって行く。ピット3の北側1.8mで溝としての機能を放棄し，台地端部で幅5m，深さ20



第19図
Ⅰ区溝3・5・10
土層断面図（1/60）

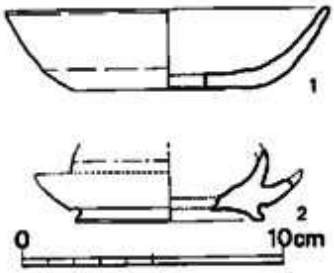
cm前後の低平な凹みに変わる。高低差は58cmを測る。遺物は糸切り土師器・青磁片が若干出土した。

また溝の終点部付近に，長径1.2m，短径1m，深さ0.65mの楕円形を呈すピットが存在し，内から土師器杯が出土した。

出土遺物（第20図）

土師器杯(1)　溝内ピット出土で，復原口径12.4cm，器高3.0cm，底径6.2cmを測る。糸切りだが底部と体部との区別が不明瞭な杯である。

須恵器(2)　托で溝の最上層から出土した。底部付近の破片で全形は不明。細身で外方に張り出す高台は径7cmを測る。受部は外方に反りあがり，内弯度の強い杯部が付くようだ。杯部内面は回転ナデ，外面はナデ調整。同様の器形は筑紫郡那珂川町今光遺跡でも出土している。



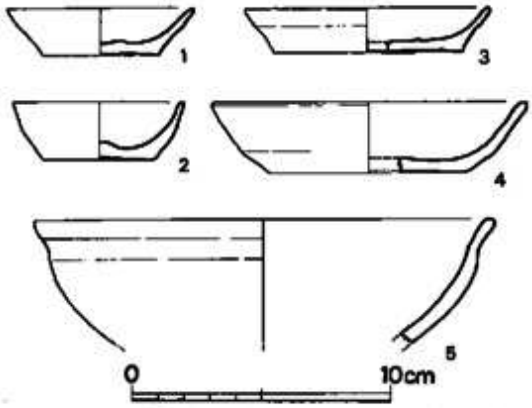
第20図　I区溝3出土土器実測図（1/3）

その他に高台付椀の破片が出土している。

(4)　溝4

溝3から枝分かれし，やや西北に走る溝で，土壙1に切られている。長さ3m，幅0.5～0.6m，深さ20cm前後で，断面はU字形を呈し，高低差は10cmである。本来は溝6と連続していたのであろう。遺物は土壙付近に多く出土し，土師器杯・小皿・磁器，瓦器が出土した。

出土遺物（第21図）



第21図　I区溝4出土土器実測図（1/3）

土師器小皿（1～3）　糸切りで，1・2と3の大小二者があり，前者は特小皿と呼ばれているものである。

a類　1は口径6.5cm，器高2.2cm，底径4.4cmを測る。底部から内反気味に立ちあがる。内底面は回転ナデ，外面ヨコナデで仕上げ，淡灰褐色を呈し，焼成良好。2は1と異なり外方に広がる器形を呈す。口径7.4cm，器高1.8cm，底径4.4cmを測り，a類の小皿では最も大きい。細かい板目痕を残す。

b類　3は¾破片で，復原口径9.4cm，器高1.7cm，底径7.0cmを測る。

土師器杯(4)　復原口径12.0cm，器高2.65cm，底径7.2cm前後を測る。

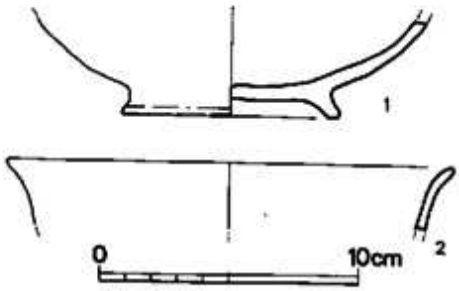
白磁椀(5)　口縁部から胴部の破片で，復原口径17.5cmを測る。口縁部直下で浅い沈線状に凹み，胴部のやや張る椀である。施釉は薄く，内面には貫入がみられる。釉色は淡い青白色を呈し，胎土は灰白色。溝4と溝3の土器が接合した。

(5) 溝5

溝4の西に並列して走る溝で，ほぼ東西向きになる。西端で土壙1，溝7に切られる。検出されたのは全長4m，幅は東端で60cm，中央でやや広く88cmを測る。底面は平坦に近く，深さはほぼ20cmと一定である。高低差は12cm。遺物は最下底に内黒土師器の他に土師器杯,小皿の小片が出土した。

出土遺物（第22図）

内黒土師器(1) 底部から胴部の破片。外方に長めに張り出す高台は径8.2cm，高土0.7cmを測る。



第22図 I区溝5出土土器実測図（1/3）

青磁(2) 口縁部小破片で，復原口径17cm前後になろう。灰緑色の釉が施される。

(6) 溝6

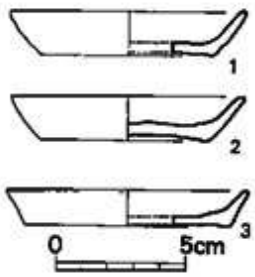
土壙1に切られ，本来は溝4と連続したものであろう。末端で溝7と合流する。全長2.74cm，幅0.4cmで，深さは5cm前後しかない。溝底面には河原石の小礫が多く認められた。遺物は出土していない。

(7) 溝7

溝3と同様に南北方向に走る溝で，土壙1に切られている。また，土壙1付近で溝5と合流していたと考えられる。最も良好に溝の形態を残し，台地北端へ下っている。全長8.9mで，幅は30～60cmと差があり，末端部は76cmと広くなる。断面は浅い「U」字形を呈し，南端が15～17cmと一番深く，末端部に行くに従い浅くなる。高低差は78cmに達する。出土遺物は少なく，土師器杯・小皿が出土したが，細片が多い。

出土遺物（第23図）

土師器小皿（1～3） いずれもb類で，1は約¼破片。口径9.0cm器高1.7cm，底径6.5cmを測る。内面は淡灰褐色，外面暗灰褐色を呈す。2は復原口径9.4cm，器高1.4cm，底径8cmを測る。底部から外反して口縁部に移行する。3は½破片で，口径9.0cm，器高1.7cm，底部6.3cmを測る。底部はかなり上げ底である。すべて糸切り。



第23図 I区溝7出土土器実測図(1/3)

(8) 溝8

溝9と分岐する短い溝である。全長2.9cm，幅は34～60cmと末端部に広くなる。底は低平で4～7cmしかない。遺物は須恵器甕の胴部片のみが出土した。

(9) 溝9

台地の傾斜変換線付近から始まり，端へ抜ける南北走する溝である。南端を土壙3，中央部

を土壙4にて切られている。全長4.7cmを測り，幅は50cmとほぼ一定している。深さ10～24cmで，断面は低平な「U」字状を呈す。遺物は出土しなかった。

(10) 溝10

台地を南北に横断する溝としては，最も西に位置し，途中で若干東に向きを変え，台地端へ落ちる。南側は溝11に切られている。全長7.8m，幅は50～80cmで，末端部に狭い。断面は低平な「U」字形で，最深部12cm前後で，途中はほとんど深さを持たない。
遺物は出土しなかった。

(11) 溝11

調査区の西南部に検出され，ほぼ東西に走る溝である。全長6m強，幅30～44cmで，断面はやや深い「U」字形を呈す。深さは10cm前後に一定する。溝10を切っており，溝内の堆積土が遺跡の上部の土層である点，溝3～10と異なり，時期的にもかなり新しいものと思われる。遺物は出土しなかった。

(2) 土　壙

4基検出された。方形の掘り込みを有す土壙1と楕円形を呈し壙底面及び周囲に河原石の集石のある土壙2～4の二者がある。両者とも，溝状遺構を切って作られている。

(1) 土壙1（図版10，第24図）

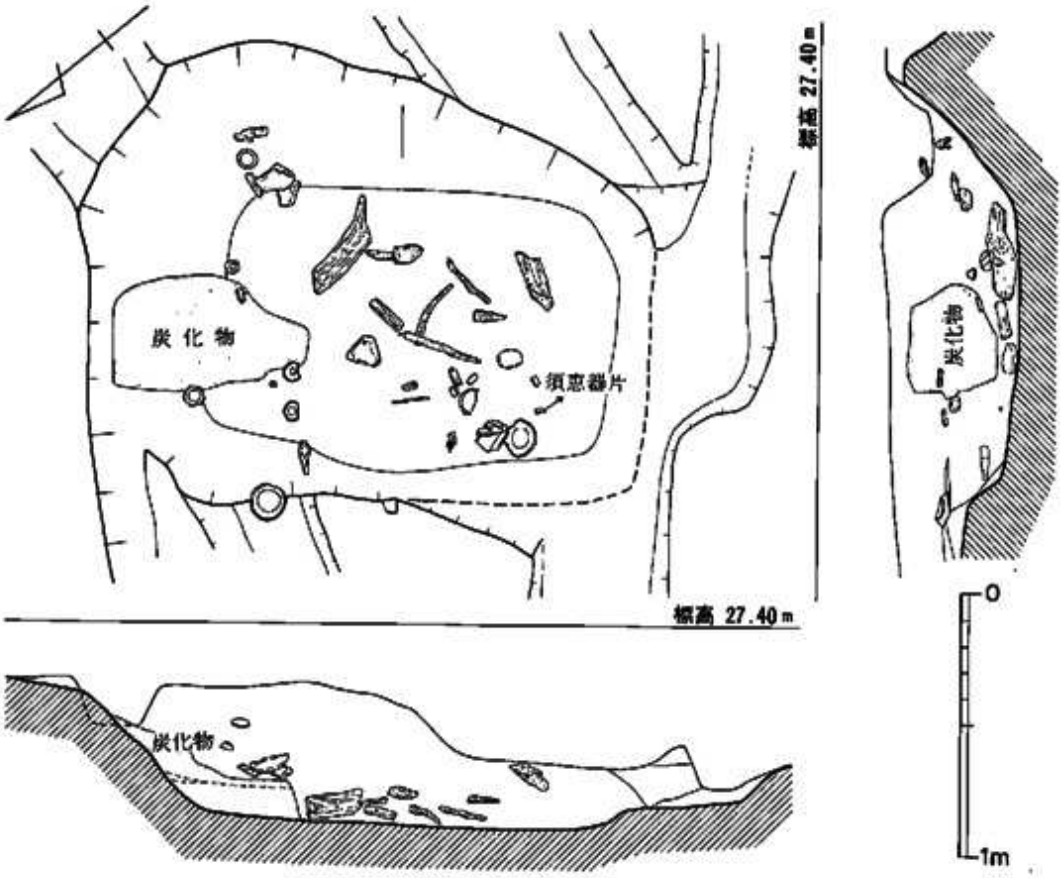
調査区のほぼ中央部に位置し，溝4～7を切っている。上面プランは台形状を呈し，長軸2.14m，短軸は北側で1.75m，南側で1.13m，素掘りの底面は，長軸1.56m，短軸1.06mの隅丸長方形形を呈し，ほぼ平担である。深さは北側で47cmを測る。壙内は上部から炭化物，焼けた木材が出土し，内には完全に炭化した木材もあり，底面にも横たわった状態で検出された。壁面は焼けて赤色化しており，この遺構が火災を受けた事を物語っている。遺物の出土状態は壙上部及び周囲に集中し，底面には無い点が注意された。遺物は，土師器杯4・小皿6・特小皿1・青磁1，白磁2・土鍋片2の他土師器の細片がある。

出土遺物（第25図）

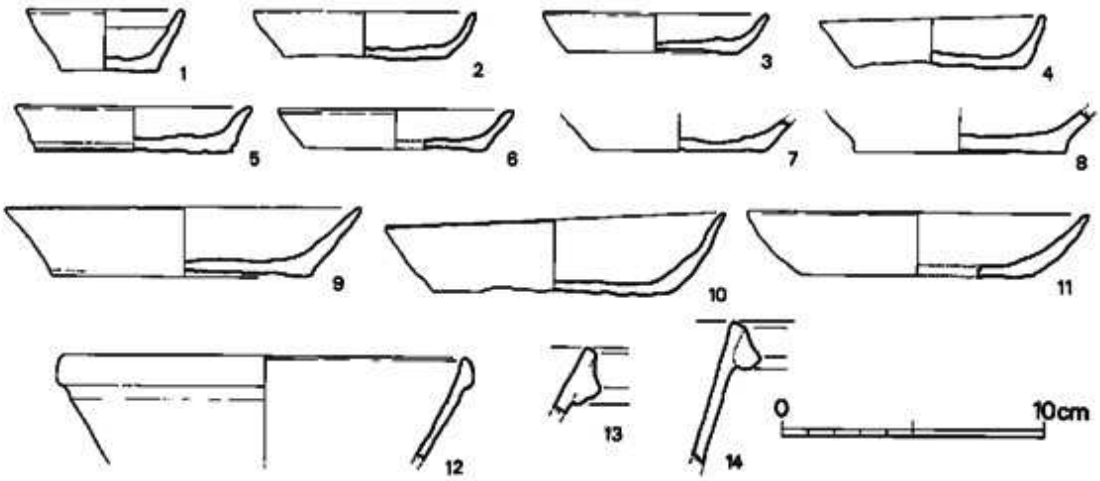
土師器小皿（1～11）　すべて糸切り離しで，口径の大小により大きく2つに分類できる。

a類　1で，口径6cm，器高2.35cm，底径3.6cmを測る。底から内弯して立ちあがり，口縁部付近で外弯する。灰褐色を呈し，胎土，焼成は良好。土壙2，溝4出土の同類の土器に比べて口径が小さく，器高が高い。

b類　2～7で，2～4は口径8.5ないし8.6cm，器高1.5～1.8cm，底径6～6.4cmを測り，底部から外弯して立ちあがるもの。5は復原口径9.0cm，器高1.7cmを測る。底部から内弯して外反する。2～5は板目痕が残り，4のみが細かい。6は復原口径9cm，器高1.5cm，底径7cm



第 24 図　Ⅰ区土壙1実測図（1/30）



第 25 図　Ⅰ区土壙1出土土器実測図（1/3）

を測る。板目痕はない。7は底部破片で，底径6.5cmを測る。いずれも淡灰褐色を呈す。

土師器杯（8～11）　8は底部破片で底径7.8cm。他の杯に比べて特に小さい。幅広の板目痕が残る。淡赤褐色を呈し，焼成良好。9・10は完形品で，口径13～13.6cm，器高 2.6cm，底径8.8～9.8cmを測る。内底面は回転状のナデが施される。幅広の板目痕が残る。11は約1/6破片で，復原口径13cm，器高2.35cm，底径8.8cmを測る。器面は風化している。

白磁椀（12）　玉縁状の口縁を有す胴上半部の小破片で，復原口径16cmを測る。釉色は乳白色を呈し，胎土も白色に近い。

土鍋（13，14）　口縁部小破片で，13は外面に多量の煤が付着している。

(2)　土壙2

溝8に接し，土壙3の北側で検出された。長辺1.2m，短辺0.77mの楕円形を呈し，深さ30cmの掘り込み内に河原石が粗く認められる。遺物は土師器特小皿1のほか，青磁，天目の破片が出土し，青磁は土壙1の破片と接合した。

出土遺物（第27図1～3）

土師器小皿（1・2）　1はb類に属す小振りの小皿で，復原口径7cm，器高1.9cm，底径4.3cmを測る。糸切りで板目痕はない。

陶器(2)　黒釉陶器でいわゆる天目の小破片である。口径11cmを測る。胎土は灰白色を呈す。

青磁椀(3)　復原口径18.8cm，器高7.4cm，高台径6.5cmを測り，1－2区でも最も残りの良い青磁である。丸く納まった口縁部はやや強く外反し，肉厚の底部へゆるやかに移行する。高台は若干高く外方に張り出す。口唇部は釉薬のかからない〝口禿げ〟で，高台も畳付け内は施釉していない。釉色はややくすんだ淡緑色で，胎土は乳白色。また，高台内は赤褐色を呈し，回転ヘラ削りされている。この青磁は口縁部が土壙2，胴部が土壙1，底部が溝3より出土し接合した。

(3)　土壙3（図版11，第26図）

溝9を切って作られている。長径87cm，短径50cmほどの不整円形の掘り込みで，底面および北側にかなりの量の河原石が認められた。深さは20cm前後で，断面は浅い「U」字形を呈す。河原石間には瓦の小片と焼土が検出されたが，石自体は熱を受けていない。壙内より土師杯，須恵器片が出土した。

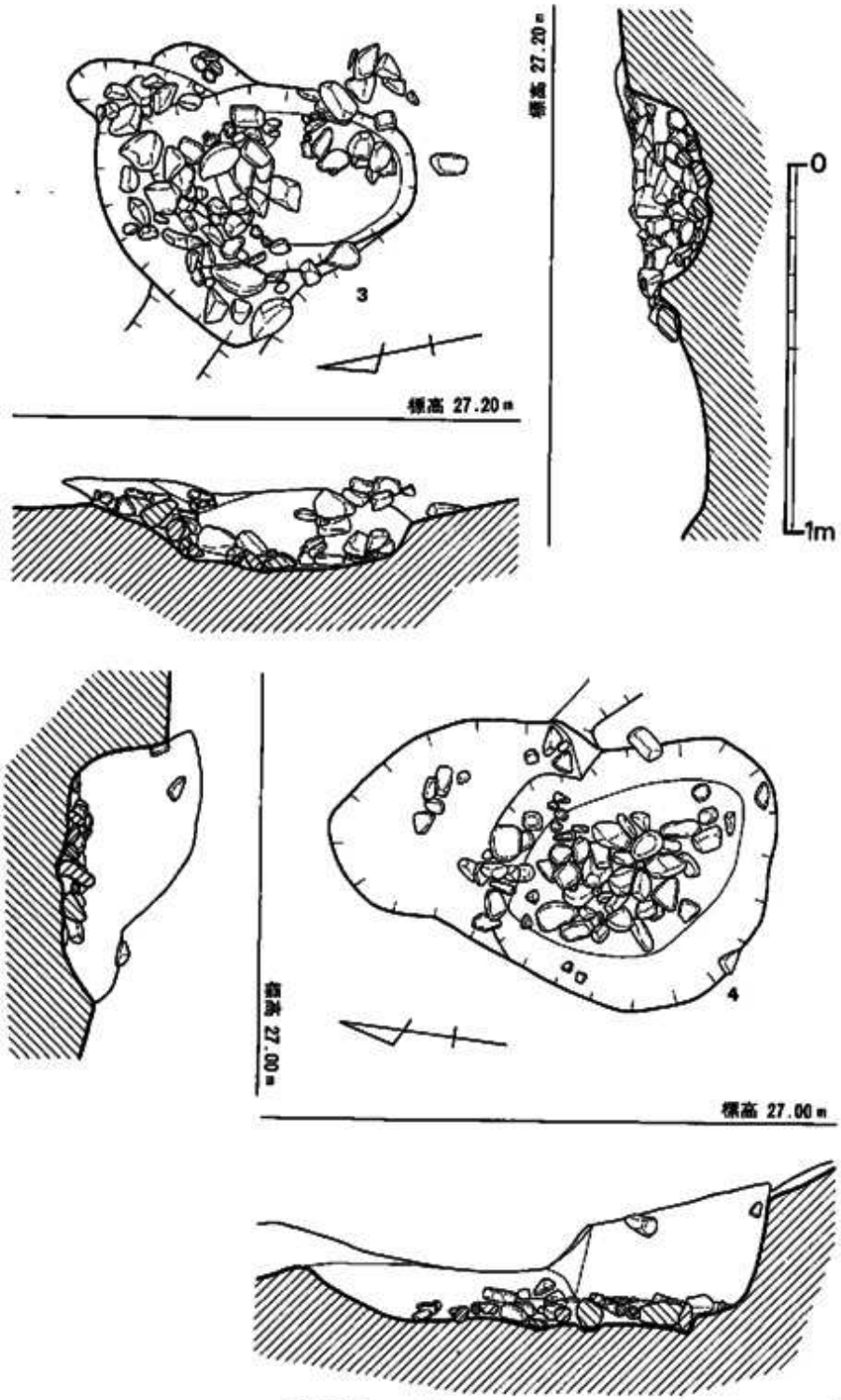
出土遺物（第27図4）

土師器杯　小破片であるが，復原口径13cm前後，器高1.95cm，底径9.6cmを測る。表面は風化し調整は不明。糸切りで板目痕を残す。

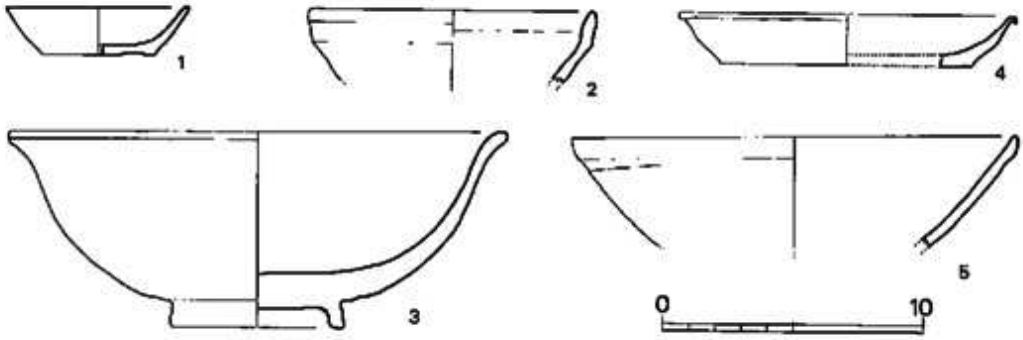
その他に須恵器甕の口縁部細片が出土した。

(4)　土壙4（図版12，第26図）

溝9を切って作られた土壙で，長径85cm，短径72cmの楕円形を呈す。素掘りで，南側で34cm



第 26 図　Ⅰ区土壙３・４実測図（1/40）



第 27 図　I区土壙2～4出土土器実測図（1/3）

を測る。壙内には河原石がまとまった状態で配されているが，レベルは不統一で凸凹が激しい。壙内より白磁が出土した。

出土遺物（第27図5）

白磁　1点のみの出土で，底を欠損するが高台の付く椀であろう。小さな玉縁状の口縁部は復原口径17cm前後で，全体の外傾度が強い。器肉は4mmと薄手である。釉は非常に薄く施釉され，色調は乳白色を呈し，胎土は灰白色の土壙1の白磁よりも白味が強い。11世紀代のものであろう。

(3)　ピット状遺構（図版13）

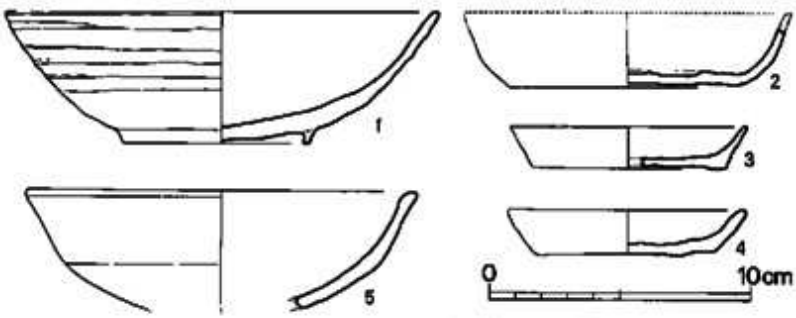
溝3から調査区の西側にかけて，中世の溝状遺構，土壙間に散在するもので，小は径25cmから，大は70cm前後と様々である。

(1)　ピット3

4号土壙の西に接して検出された。径25cmのほぼ円形を呈し，深さ22.5cmを測る。内より瓦器椀の完形品が出土した。

出土遺物（第28図1）

瓦器　椀の完形品で，口径16.5cm，器高5cm，高台径7cmを測る。細く，短い高台は，やや



第 28 図　I区ピット・包含層出土土器実測図（1/3）

内側に向き，胴部は外方へ広がる。内底面の中心が片寄っており，全体にゆがみが著しい。外面は，段部を中心に粗い横ヘラ磨きされる。底部は回転ナデで細い板目痕がのこる。内面および口縁直下の状況から重ね焼きされた事が判る。体部外面の調整は粗雑であり，12世紀末頃の所産と思われる。

(2) ピット5（図版12）

台地の北斜面にピット4・6と並んだ状態で検出された。径約55cm前後で，深さ56cmを測る。レベル的には，調査区の北台地下を流れる小さな水路よりも低くなる。内より土師器杯1点が出土した。

出土遺物（第28図2）

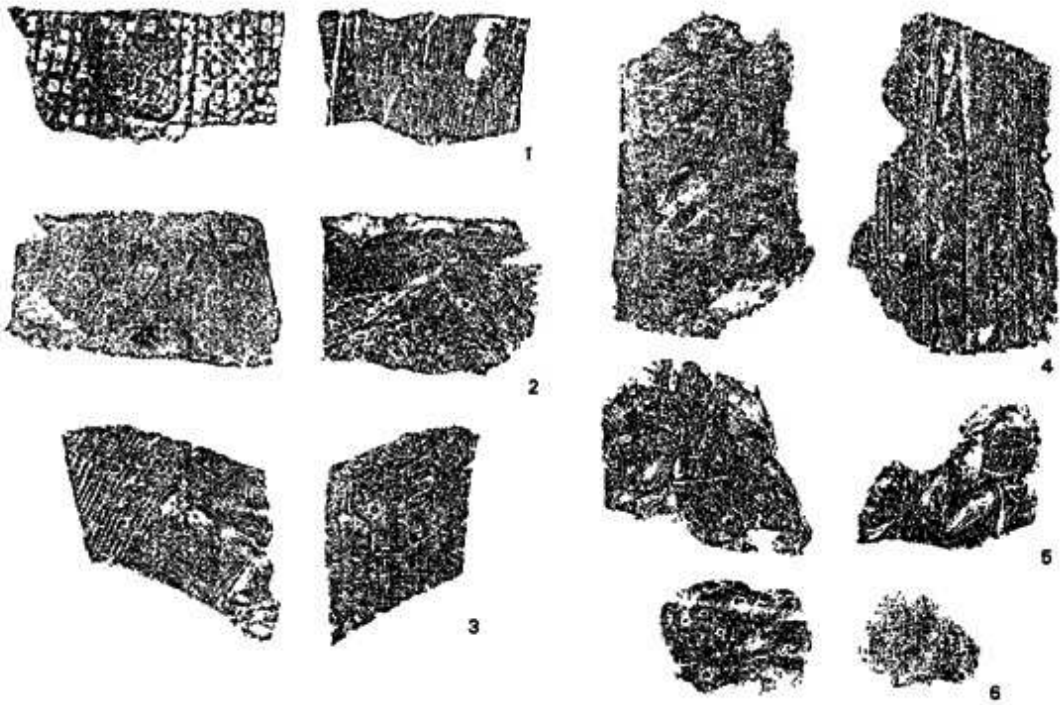
土師器杯　口縁部を欠損する破片で，器高2.8cm，底形9cmを測る。内底面は不定方向のナデ，それ以外はヨコナデで，底部は糸切り後の板目痕がのこる。

(3) ピット6

径約70cm，深さ45cmを測る。内より土師器小皿1のほか，杯・小皿の細片が出土した。

出土遺物（第28図3）

土師器小皿　糸切りの⅓破片で，復原口径9cm，器高1.6cm，底径7.4cmを測る。糸切り後の板目痕がのこる。器面は風化し調整は不明。



第29図　I区包含層出土瓦拓影（1/3）

(4) 杭　列（図版14）

調査区の西北で，台地の崖下の流路とほぼ同一の走向で検出された。その出土状態は２列で，台地側の一列は傾斜面の変換線に沿っている。時期は出土した遺物から，土壙とほぼ同時期の可能性がある。

(5) 包含層出土の遺物

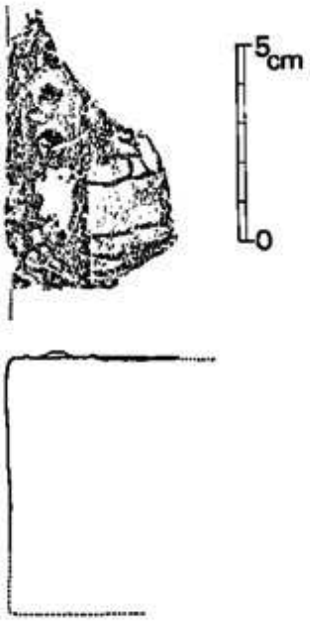
土師器小皿（第28図４）　口径8.6cm，器高1.7cm，底径6.6cmだが，ゆがみが著しい。底面は糸切りのみで板目痕は無い。

黒色土器（第28図５）　内外面とも燻された土器で，黒色土器Ｂ類と呼ばれるもの，器面の風化が著しい。

瓦（第29図）　いずれも耕作土からの出土で，丸瓦と平瓦が出土した。１は丸瓦で，凸面は5.5mmの正格子目文，凹面は布目。２～６は平瓦で，２は須恵質のものである。凸，凹ともナデのみ。３は凸面が平行条線，凹面は布目。４は面が風化し凸面は不明，凹面は並行する粗いタタキ。５，６とも凹面に布目が残るが，凸面は不明

塼（第30図）　耕作土内より出土した。長方塼の残欠で，上面と左側面が残存する。上面は風化し剥落が著しいが，側縁の珠文帯と波状文が見られる。珠文の間隔は1.1～1.2cm（心心間）で，上から４つめが完全に欠損している。繊細な波状文は上部が弧状，下部が水平になる。

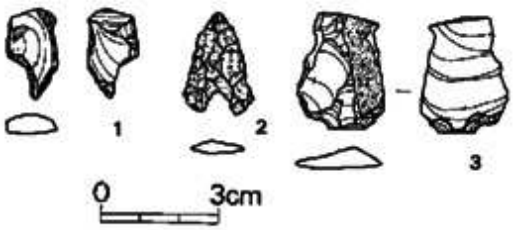
この塼は，大宰府学校院址ＳＢ765柱穴出土（第37次調査）の完形品（注1）と，珠文，波状文の構成が等しく，同笵と考えられ唐花文様塼であろう。第31図は学校院址ＳＢ765出土の塼拓影である。この拓影からすると，当遺跡出土の塼は左側縁部にあたり，図左上から下方2.1cmのところにあたる。ちなみに完形品の大きさは，縦27.0cm，横33.0cm，厚さ6.5cmである。



第30図　１区含含層出土文様塼拓影（1/2）

石器（図版　，第32・33図）　１は，基部側の欠損品で，寸づまりの横長剥片を利用する。両側縁に刃潰し加工を施し，基部端は尖る。ナイフ形石器であろう。黒曜石製で，Ｉ－２区出土。２は，安山岩製の凹基無茎式石鏃の完形品。全長26.1mm，幅18mmを測る。Ｉ－２区，溝３の１層出土。３は，黒曜石製のいわゆるつまみ形石器。打瘤部は折断されている。つまみ部の加工は表面から行なわれている。縄文時代中期～後期頃の所産であろう。Ｉ－１区出土。４は，玄武岩質の蛤刃

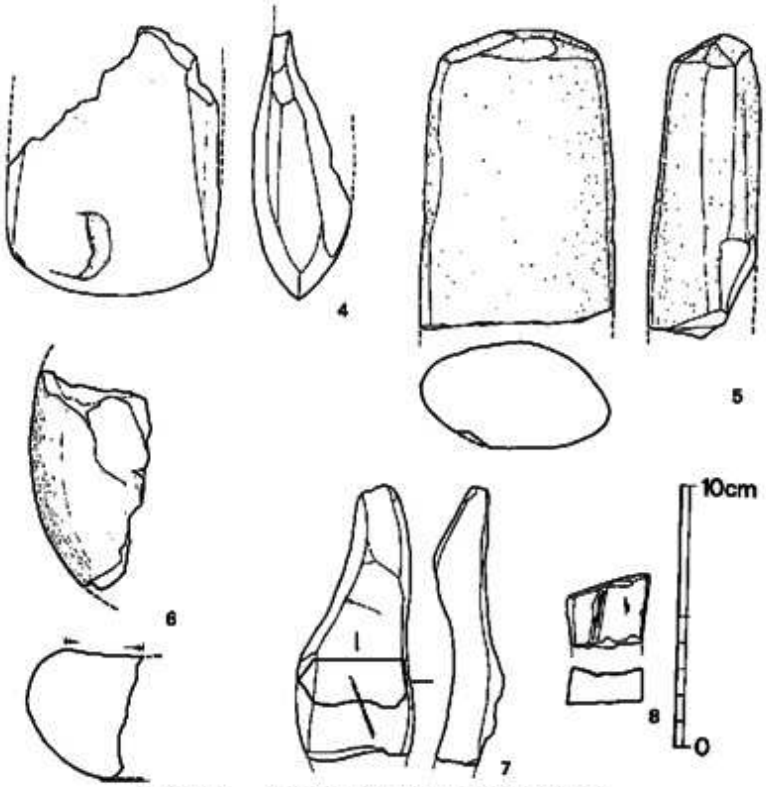
第 31 図　大宰府第37次調査ＳＢ765柱穴出土文様塼拓影（1/3）
（アミの部分は辻田遺跡出土の部分）



第 32 図　包含層出土石器実測図１(1/2)

石斧の刃部から胴部の破片。胴部から刃部にかけて非常に丁寧な研磨で仕上げている。体側部に稜を有す。残存長10.4cm，刃部幅7.6cmを測る。５は，太型蛤刃石斧と基部破片で玄武岩製。断面は倒卵形で，厚さ４cm。４・５ともＩ―２区出土で，弥生時代前期～中期頃か。６は，楕円形を呈すと思

われる砂岩製のくぼみ石の破片。厚さ 4.7cm を測り，体中央部にかけて凹む。Ⅰ—2区，耕作土出土。7は，粘板岩製の砥石で，2面の研砥面を有す。8は，砂質頁岩製の砥石で，幅3cmの板状になろう。砥面がU字形に凹み，その一部が溝状を呈す。使用減りが著しい。7，8ともⅠ—1区，耕作土出土。



第 33 図　Ⅰ区包含層出土石器実測図2（1/3）

3. 小　結

Ⅰ区の調査では，同じ台地上に立地しながら道路を挟んでまったく時期を異にする遺構が検出された。東側のⅠ—1区では弥生時代終末期の住居跡2・溝2・土壙1が，Ⅰ—2区では中世の溝9・土壙4である。そのうちⅠ—2区の溝1は弥生時代終末頃の遺物を含んでおり，位置的にもⅠ—1区に検出された遺構との関係を有していよう。

1号住居跡出土の遺物は，弥生時代後期末頃の時期が与えられる。辻田遺跡ではⅡ区大溝内6層に良好な包含層が検出されたが，それらの土器群と比べ，若干新しい様相が認められる。立地的には100m前後の距離しか離れていないが，間（Ⅰ—2区）に遺構の存在が希薄な事などと考え合せ，大溝との関連性は薄いと思われる。

Ⅰ—2区では溝，土壙，ピットが検出され，いずれも中世に属す。溝はいずれも，河原石が多量に認められ，豊富に水が流下していた事が考えられる。この溝がいかなる性格を有していたかは調査区内では判断できなかった。時期的には土壙2出土の白磁，ピット3出土の瓦器椀が11世紀，12世紀末頃の時期が与えられる（註2）。

一方，土壙1で一括出土した土師器，白磁は比較的良好な資料で，溝・土壙の時期の決め手

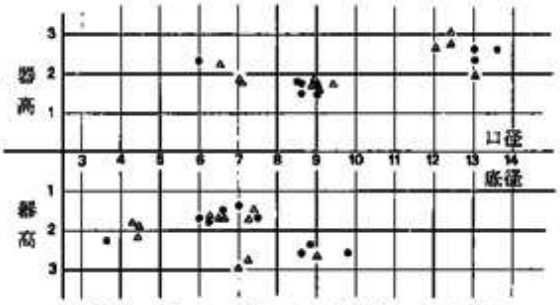
になる。土壙内は火災を受け，多くの炭化材が横倒しになった状態で出土し，壁面は赤く焼け固まっていた。遺物はこの炭化材の間ないし土壙の縁上に出土し，火災後放棄されたと思われた。

出土した遺物は土師器・白磁・土鍋である。土師器はいずれも糸切り離しのもので，ロクロはすべて右回転である。

皿は法量からａ類・ｂ類に分けられる。ａ類は口径６㎝，器高2.3㎝を測り，小さな口径に比して器高の高い特徴がある。いわゆる特小皿と呼ばれるものである。一方，ｂ類は口径 8.5～９㎝，器高1.5～1.8㎝と法量では規格制の高い一群である。器形では内弯するものと，外反するものがある。

杯は口径13.0～13.6㎝，器高2.35～2.6㎝を測る。器形では内弯ぎみに立ちあがるものと，外方にそのまま延びるものがある。

これらの土師器は前述した様に糸切りで，底部には第25図６を除き板目痕が見られる。特に杯の板目痕は幅広のものである。



第 34 図　Ⅱ区糸切り土師器小皿・杯法量図

第34図は土壙１を主にし，他に溝，土壙出土の土師器の法量図である。小皿ａ類は溝４，土壙２で別に３個体出土している。口径6.0～7.6㎝，器高1.75～2.3㎝とバラツキがやや大きい。それに対してｂ類は溝７，ピット６から出土しており，法量は土壙１とほぼ等しい。杯は溝３内のピット，溝４，土壙３，ピット５から出土し，口径12.0～13.6㎝，器高1.9～3.0㎝を測る。特に溝３，溝４出土の２点は底径を合せても，他の個体と法量を別にすると思われる。

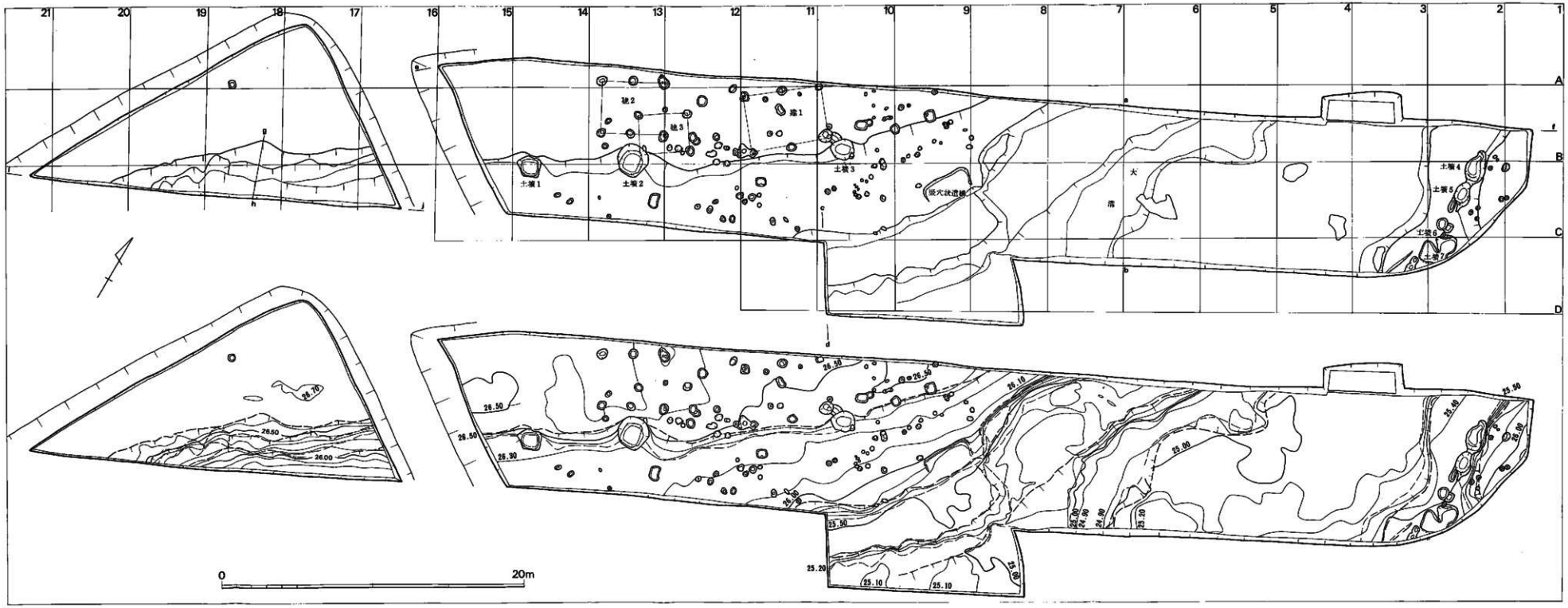
中世の土師器の分類については，大宰府史跡内の御笠川南条坊遺跡の調査にて，前川威洋氏により集大成されている（註３）。土壙１の土師器をこの分類に対比させると，特小皿の存在からⅡ―２類以降のものである。また，その器形が口径（６㎝～７㎝）に比べて器高が２㎝以上と高い特長を有す点は，Ⅱ―６類までの法量に適さない。一方，伴出した白磁についても，Ⅱ―６類以降のものであるとされる事から，土壙１の時期はⅡ―６類の14世紀中頃～14世紀後半より下り，15世紀前後の年代が与えられよう。従って，溝４，溝７・土壙２も同時代の所産と考えられる。

Ⅰ―２区の溝状遺構は溝３，溝５，土壙４が11～12世紀頃作られ，その後溝４，溝７，土壙１・２が作られ，15世紀頃に溝としての機能を放棄したものであろう。　　（木下　修）

註１　九州歴史資料館「大宰府史跡―昭和50年度発掘調査概報」1976

２　歴史時代土師器，青磁，埴等については石松好雄，森田勉氏ほか九州歴史資料館調査課の御教示を得た。

３　前川威洋他「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』８　福岡県教育委員会　1978



第 35 図　II区遺構配置・地形図（1/200）

Ⅳ　第Ⅱ区の遺構と遺物

第Ⅱ区は、標高26.5m～27mの水田面で，Ⅰ区の台地とⅢ区の台地に挟まれた幅35m程度の狭い谷になっており，この谷を斜めに横切る形に長さ約100m，幅約10mの範囲を調査した。しかしこの間には市道上白水菅弥郷線が通っており，便宜上市道の東側をⅡ－Ⅰ区，西側をⅡ－2区と区別している。またⅡ－1区は，更に5m方眼の区割りを設定し，A～D－1～15の小地区に区分している。

第Ⅱ区で検出できた遺構は，弥生時代後期の大溝1条・土壙4基・竪穴状遺構1基，歴史時代の建物3棟・土壙3基と，Pit群がある。

遺物としては，先土器時代の石器，縄文時代晩期の土器・石器，弥生時代後期の土器・石器・土製品・金属製品・木製品類・玉類・植物遺存体，古墳時代以降歴史時代の土師器・須恵器・磁器・瓦・木製品類などがあり，殊に弥生時代後期の土器・木製品類が多く大半を占める。

また大溝の調査に関連して，出土植物種子の調査を大阪市立大学理学部生物学教室の粉川昭平教授，出土木製品類の樹種同定調査を九州大学農学部木材理学教室の松本昌教授・林弘也助手，木製品等の保存科学処理を九州歴史資料館の横田義章主任技師にお願いした。花粉分析等の調査も予定し供試資料を採取したが時間的な制約のため割愛している。

なお図版16～136には，第Ⅱ区関係の写真を掲載し，土層図及び第Ⅰ区～第Ⅳ区遺構配置図は別添付図1・2におさめている。　（小池史哲）

1．層　序（付図2）

この調査は県道付替工事に伴う事前調査という性格上南北に狭く，逆に東西に非常に長い区域となった。発掘区は標高26.50～26.70mの台地のちょうど先端部にあたり，Ⅱ－1区では台地から谷を斜めに横断し，Ⅱ－2区では台地の緩斜面に平行する形となった。したがって同一層位でも区域によっては土質・土色の相違がみられた。Ⅱ－1区では発掘区北壁，D・E・F－10区西壁，B5・C5区西壁を，Ⅱ－2区は南壁を通観して記録した。

第1層は現水田耕作面で，厚さ20～25cmで部分的に砂粒の混入がみられる。

第2層は現水田床土で，固くしまった薄い黄褐色粘質土が一般的であるが部分的に黄白色粘土を敷いている。また，A12～A15区と調査区東端のB2区では認められなかった。

第3層は暗黄褐色土で，土師器・須恵器・瓦等の遺物を内包する。台地上のB9～A15区で

は薄く，逆に谷部上層にあたるＢ６～Ｂ９区では厚く堆積している。

第４層は暗黄色粘性土で，20～30cmの厚さで水平に広がる。Ｂ８区の台地端部からはじまって谷部上層を覆い，Ｂ９区以西の台地上では認められない。第３層に同じく土師器・須恵器・瓦等の遺物を内包する。

第５層は（腐植性）暗灰色粘性土である。Ｂ８区東端にはじまり東にいくにしたがい厚くなり，Ｂ５～７区では最も厚く堆積し，45～55cmを測る。色度・包含する遺物等においては明確な相違は認め得ないが，その下半は腐植物の混入がみられ，かつ，少量ながら手網・木製品等の出土がみられる。このことから第５層は更に上・下の２層に区分されうる。この第５層までの遺物を包含層出土の遺物とし，また第６層以下の遺物を大溝出土の遺物として一括してとり扱った。

第６層は薄く堆積する白色砂質土を境として上・下２層に区分し，各々第６層上部，第６層下部とした。第６層上部は腐植物混黒色粘性土・腐植物混暗灰色粘性土・腐植物混青灰色粘性土など若干の色度の相違を認めるが，いずれも腐植物が混入しており，遺物その他においては相違は認め得ず，同一土層としてとり扱った。腐植物混暗灰色粘土は砂粒を含んでいるが第６層下部に近づく程にその含む量は多くなる。三叉鍬・平鍬などの農耕具やねずみ返しなどの建築部材が多量に出土し，出土土器も弥生後期土器が大部分で，少量の須恵器を含む。第６層下部は腐植物混茶褐色粘性土・腐植物混黒茶褐色粘性土で構成され，腐植物混茶褐色粘性土にはかなりの砂粒を含んでいる。遺物を第６層上部と同様に槌・横杵などをはじめ多くの木製品が出土しているが，土器の量は少なくなり，小片が多くなる。弥生後期の土器に混って弥生中期の土器も含まれる。また，植物種子も出土している。

第７層は大溝の最深部で，最も深い所で標高24.80mを測る。腐植物混暗灰色粘性土・黒色腐植物混粘性土・暗灰青色粘性土で構成され，砂粒・腐植物をかなり含んでいる。Ｂ４～５区では青灰色粘土の地山上に厚さおよそ５～10cmの白色砂質土がのっている。杓子などの木製品が出土しているが，全体に木器・土器など遺物の出土量は少なくなり，弥生中期の土器に混って若干ではあるが，弥生前期および縄文晩期の土器片も含まれる。　（小林義彦）

2．縄文時代以前の遺物（図版18，第36・37図）

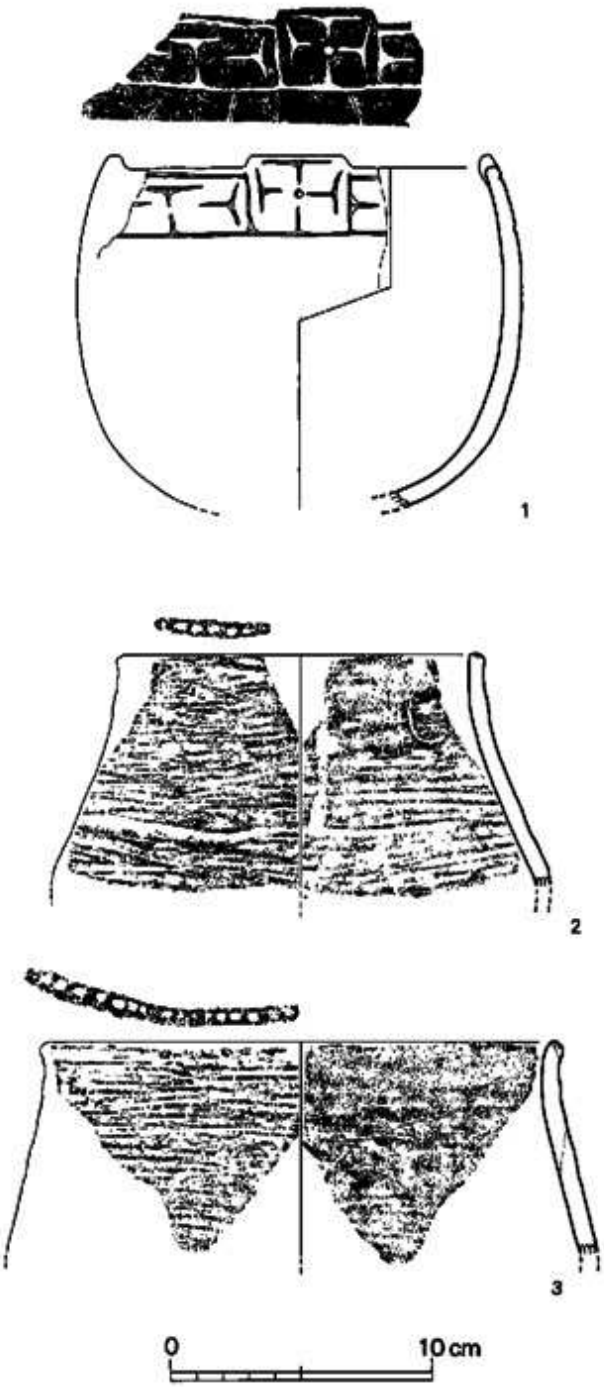
先土器時代に属すると思われるナイフ形石器１点がⅡ－２区の耕作土中から出土し，縄文土器３片及び縄文時代に属すると思われる石器が10点，大溝の下位から出土している。

(1)　縄文土器（図版18，第36図）

精製土器　1は黒色磨研土器で，口縁部は全体の約5分の1程度，胴部約3分の1が残る。底部を欠失してはいるが，復原器高14.0cm・口縁部径14.4cm・胴部最大径17.0cm，器壁0.6～0.8cmを測る。口縁のやや内弯する鉢形を呈す器形である。内・外面とも丁寧に研磨され，口縁端部に幅4cm・高さ0.5cmの平らな突起を有す。文様は，外面の上部にのみ施され，ヘラ状工具による平行沈線で画された部分を埋めるように単独あるいは連続させた三叉状文を縦位，横位に施文される。なお突起部では4つの三叉状文に囲まれた処に刺突点がみられる。細砂粒もほとんど含まない極めて精良な胎土で焼成も良好。C6区第7層出土。

粗製土器　2・3は条痕文土器である。2は，口縁部が残る程度の破片で，やや内反りな曲線を描いて胴部に至り，底部へは反転して窄まる器形をなすものと思われる。胴部最大径19cmで，口縁部径は14cm前後，口唇上面には刻み目に近い刺突が付され，内・外面ともに条痕文が施文されるが，外面の鋭く細い条痕文に対して内面は幅広な条痕文で，原体の異なることを想定させる。胎土は並で石英粒等を含むが，焼成は良で，色調は暗黄褐色。C8区第7層出土。

3は，2とほぼ同様の器形になる口縁部破片で，口縁部径20cmを有す。器面の条痕文は2よりわずかに幅が広目



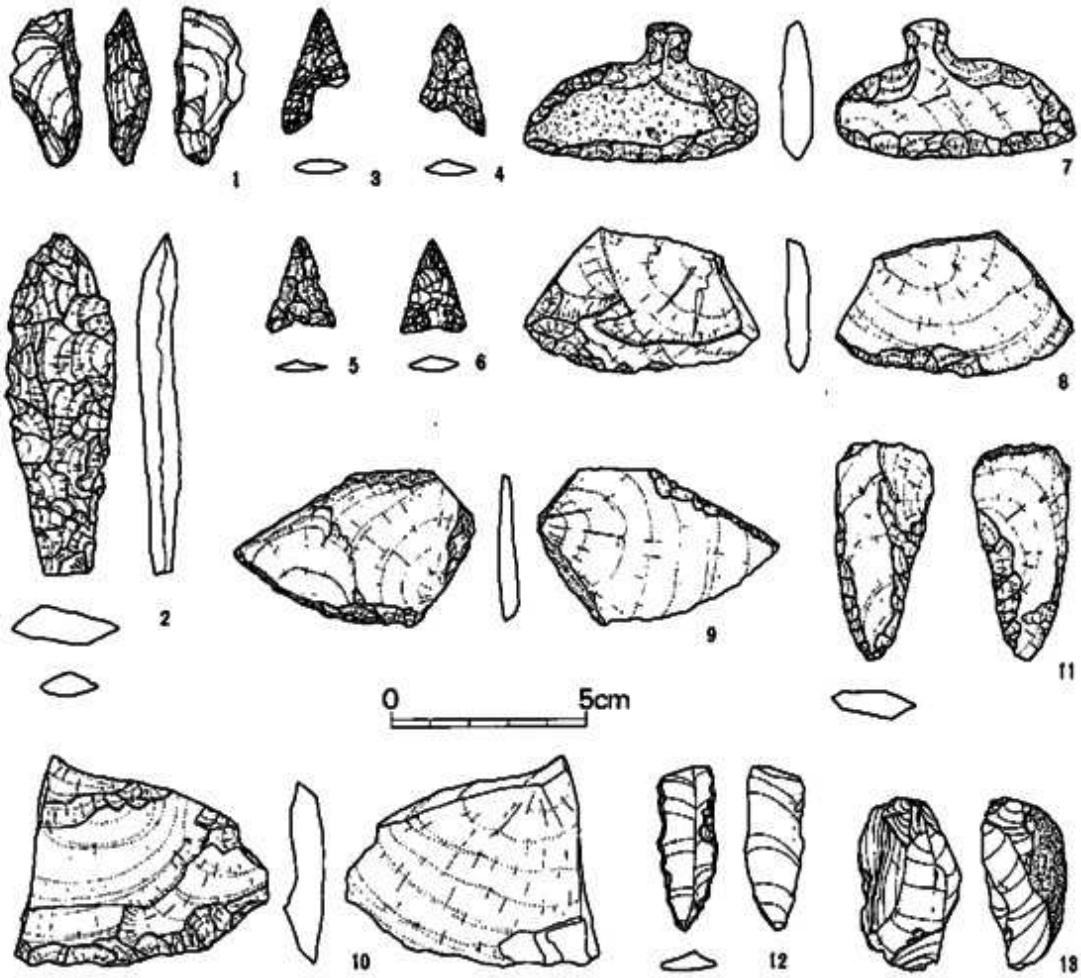
第36図　II区出土縄文土器実測図（⅓）

で，外側に肥厚する口唇部上面に刺突列点文が施される。石英粒等を含み胎土は並で，焼成はやや良好，暗黄褐色を呈す。C８区第７層出土。

以上の３点の土器は縄文時代晩期に盛行する手法の土器であるが，１の精製黒色磨研土器は，従来北部九州地方において類例をみない資料である。

(2) 石器（図版66，第37図）

ナイフ形石器　１はII－２区の耕作土から出土した。不純物を多く含む黒曜石製で，不定形な剥片を素材とし，主要剥離面からプランティングを行なってバルブ部を除去している。一方剥片の末端部の鋭い縁辺を有す側を刃部としてそのまま残し厚みのある側は更にプランティング加工される。ほぼ完形で長さ39.8㎜，最大幅18.0㎜，厚さ11.6㎜，重量９ｇを測る。



第 37 図　II区出土・石器実測図１(1/2)

石槍 (1)，D10区第6層下面出土で，基部の一部を欠損しているが，現在長87.1㎜，最大幅28.3㎜，厚さ12㎜を測る安山岩製の柳葉形をなす石槍である。両側縁から調整されているが，縦断面形ではやや反った形になる。重量21g。

石鏃 3～6の4点があり，それぞれ，C8区第6層上部，C7区第6層上部・II－2区第3層・D9区第6層下部の出土資料である。3・6が黒曜石，4・5が安山岩製で，計測値をそれぞれ長さ・最大幅・厚さ・重量の順に㎜・gで示すと，3は31.7・(17.0)・3.7・1，4は28.0・(16.5)・3.7・1，5は24.0・17.5・27・1，6は23.2・17.0・3.6・1となる。いずれも不定形な剥片を素材として製作されたもので主要剥離面を残さない。また3・4は凹基式であるが，5・6は平基式に近い。

石匙・スクレイパー 7～12の6点あるが，12の黒曜石製以外は安山岩製で，7・9・12は縦剥ぎ，他は横剥ぎによる剥片を素材としている。7はC2区第6層下部出土の石匙で，長さ35.4㎜・幅61.0㎜，厚さ8.0㎜，つまみ部の長さ約10㎜，幅11㎜，厚さ5㎜を測る完形品で重量は19g。片面には原面を残す。8はII－1区の第1～4層中に含まれていた資料で，長さ35.4㎜，幅61.0㎜，厚さ 8.0㎜，重量19gを測る，9は，C7区第7層出土資料であるが風化が進み淡青灰色を呈す。長さ30.8㎜，幅62.0㎜，厚さ 4.5㎜，重量18gを測る。調整加工は剥片の両側縁に，交互の面の片側のみ施される。10は，C5区第7層出土で半欠。現存長53.5㎜・現存幅65.0㎜，厚さ11.0㎜，重量21gを測る。調整は片面からのみである。11は，C4区第7層出土資料，長さ56.3㎜，幅25.0㎜，厚さ 7.2㎜，重量12gを測る。端部に原面が残る。12はD8区第6層下部出土，縦長剥片を利用したもので長さ41.8㎜，幅15.7㎜，厚さ 4.7㎜，重量5gを測る。打瘤部を除去して尖り気味に主要剥離面の両側から調整される。

石核 C4区第7層出土の資料を図示しているが，他に2点D3区とD8区の第7層上面に黒曜石の残核がある。13は，原面を約半分残しており，不定形である。長さ44.2㎜，幅26.1㎜，厚さ21.5㎜と小さい。

磨石 第47図10に示す資料があり，C3区第6層下部より出土している。約半分を欠失するが現存する長径73.5㎜，短径93.5㎜，厚さ51.6㎜，重量 430gを測る。両面ともよく磨耗しており，中央部には敲打痕が残る。

なお，ここで取り扱った石器は打製石器類を一括しており，全て縄文時代以前の所産であるとするのは難しい。とくに2・5・6の資料については弥生時代以降に属するものかも知れない。

(小池史哲)

3．大　溝（弥生時代）（図版19，第35図）

この大溝については，むしろ大溝状遺構，あるいは旧河川状遺構という名称を使用すべきであったかも知れない。目下のところ，人為的な掘削によって形成された溝であるという証左はなく，あくまでも台地を切り込んだ谷に流れる自然形成的な溝として成立している。

しかし，調査によって出土した多量の土器・木製品はこの溝から出土し，主として西側の肩部に集中する。このことは居住区域とこの溝が至近距離にあったことを示すもので，密接なつながりを想定させるものでもある。また，立地条件の項で前述したように，この谷は，門田遺跡辻田地区・辻田遺跡第Ⅲ区及びその北方の日拝塚古墳をのせる長い台地を，東側の丘陵地帯から続く台地と区画する要素を有しており，独立丘にならしめているものと云えよう。

一方，多量に出土した木製品中にあっても圧倒的に多い農具の存在は，今回の調査において水田遺構や取水・排水の施設などは確認できなかった分を差し引いても，水田耕地をこの溝の延長線上に想定させうるに充分な資料と云えよう。

このように，自然形成的な溝であっても，生活の痕跡を留め密接な関わりをもっていたと想定させる溝であるため，あえて大溝という名称を付けている。

旧地形では，調査区域のうちB9～20区は標高26.5ｍ以上を有し平坦であるが，これ以外の地区は低くなる。標高26.5ｍで対応する部分はⅠ－２区西端部にみとめられるが，この間にみられる堆積土は第４層の暗黄褐色粘性土で，平安時代以降の遺物を若干含み，この段落ちは後述する土壙１～３の上端部を削平している。この次の段落ちは標高26ｍ程度から落ちるもので，Ｂ８区・Ｃ９区及びC20区南端にあり，この段落ちから下位に多量の土器が集積し，第６層上部の暗灰色粘性土が堆積している。標高26ｍではＢＣ－２区が対応し，両者の間約30ｍの距離を有しているが，第５層・第６層上部の堆積土がみられる。第５層は，Ｂ３～５区・Ｃ３～７区・Ｄ４～10区にみられ，Ｃ４・Ｃ５区付近では約25cmの厚みを有す。淡い暗灰色を呈す粘性土で，奈良時代を中心とした時期の遺物を含む。第６層上部は，この落ち込みのほぼ全域にみとめられるが，Ｂ５区で最も厚くなり標高25ｍ15cmを下面としており，腐植物を多く含む暗灰色粘性土で，弥生時代後期の土器と若干奈良時代の土師器・須恵器も含む。

また更に下位には，標高25.4ｍ、25ｍ程度を肩部にする段落ちがあり，第６層下部・第７層をそれぞれ堆積している。第６層下部は腐植物を多く含む黒色の粘性土で，部分的には第６層上部との間に青灰色系の粘性土や白色細砂を挟んでいる。第７層は色調のやや淡い黒色粘性土で，白色砂粒・腐植物を多く含み下位では白色砂が中心となり，最も低い処で標高24.8ｍを測る。第６層下部は土器の出土が少なくなり，木製品の他には若干の弥生時代後期の土器を含む程度，第７層は弥生中期・後期の土器・縄文土器・木製品類が若干出土している程度である。

この２つの段落ちの幅は上位が幅15ｍ程度，下位が２～４ｍでＢ５・Ｂ６・Ｃ６・Ｃ７・Ｄ７区にみられる。

旧地形にみられる４段階の段落ちを下位から整理すると，

１，標高24.8～25ｍ　第７層　溝下底部

２．標高25～25.4ｍ　第６層下部　中央部では標高25.15ｍを下面とする第６層上部がある。

３．標高25.4～26ｍ　第６層上部　中央部では標高25.80ｍを下面とする第５層がある。

４．標高26～26.5ｍ　第４層・第５層

となるが，このうちの３段階に多くの遺物が含まれており，1～3段階を大溝として取り扱っている。

この大溝は，Ⅱ－２区の南端部でわずかに肩部が残るが，一度調査区域の南側に反り，Ｃ10区の南端からＢ８区にかけて北側に曲がる形に蛇行し北方へ流れる。また最下面での傾斜はゆるく，４/1000の勾配である。この溝に対して主に西方から遺物が堆積しており，遺物の種類は，弥生土器・石器・土製品・木製品・金属製品・玉類及び植物遺存体等の多岐にわたる。

(1)　大溝内の遺物出土状況（図版20～57）

各遺物の出土状況は各遺物の項で触れるが，各小地区での出土状況は写真図版によって示している。図版20～23は，Ｂ・Ｃ－３・４区第５層下部及び第６層上部での建築部材と思われる木材の出土状況で，ねずみ返しや柄を有した部材等がまとまって出土した。

図版24は，三叉鍬の出土状況を示し，１はＤ５区での資料番号（以下Ｎｏと略す）55三叉鍬，２はＣ６区Ｎｏ12三叉鍬の出土状況である。図版25はＢ６区第６層下部のＮｏ152槌，Ｃ６区第６層下部のＮｏ499未製品。図版26・27は，Ｄ３区第７層のＮｏ776杓子，Ｃ４区第７層のＮｏ775杓子，Ｃ６区第６層上部のＮｏ777杓子，Ｎｏ773木製紡錘車の出土状況。図版28はＢ７区第５層下部のＮｏ750手網，Ｂ７区第６層上部の円形板状製品の出土状況である。

図版29と30の上は，Ｂ７区第６層上部の琴１号で，琴板の表を上にして出土している。この時点では，まだ中央の孔などは土がつまったままである。また裏側を横断するようにしてみとめられる圧痕が他の部材と接していたことに起因するのも理解できよう。なお図版30下はＢ７区第６層下部のＮｏ20横杵の出土状況で，図版31～33はＢ７区での出土状況を示している。図版34はＣ７区，Ｄ７区の鍬類であり，図版35はＣ７区の食料調理用具で柄の長い杓子と槽の出土状況。

図版36～41では，Ｂ８区を中心とした，大溝の肩部での遺物出土状況を示している。まず図版36で第６層上部の土器類の堆積とその下に木材が集積した状況を伺うことができよう。このうち土器類を除去した状況を図版38で示しており，琴２号や田舟状木製品が目立った存在となる。

この時点では琴２号・田舟状木製品は完全な形で残っていた。また153の竪杵も器台形土器・高杯脚部の脇に見える。図版39は台付盤と田舟状木製品で，盤の外底面の状況・田舟状木製品の

形状が理解できる。図版40・41もこれらの木材の中にみられた各種の遺物で，図版41−2は枘を有した板材(B類)の出土状況で，C8区第6層下部のNo111の枘孔に他の部材の挿入された状況を示す。

図版42〜44はC8区第6層下部の建築部材等の出土状況である。細部を示している資料は柱材として考えられる。

図版45〜48では，C9区で検出された大溝肩部での遺物出土状況を示しているが，木材を被うように土器が集積しており，杓子や横杵・竪杵等を含めた木材を取り除くと，北側の肩部に竪穴状遺構が検出される。

図版49〜54は，D8〜10区の拡張区域での遺物出土状況を示している。建築部材を含めて長めの木材が溝を横切る形に出土しており，これに混ってNo40平鍬・No147三叉鍬，No411鋤未製品・No36槽・No444横杵・No800梯子等が出土した。なお図版50は，D10区での土器・木材の出土状況と，枘の組合せの例を示している。

図版55は，D8区第6層下面で発見された釜[449]とC8区の第7層上面で発見された籠である。釜は入口と思われる幅の広い側を上流方に向け，押し潰された状況で出土した。

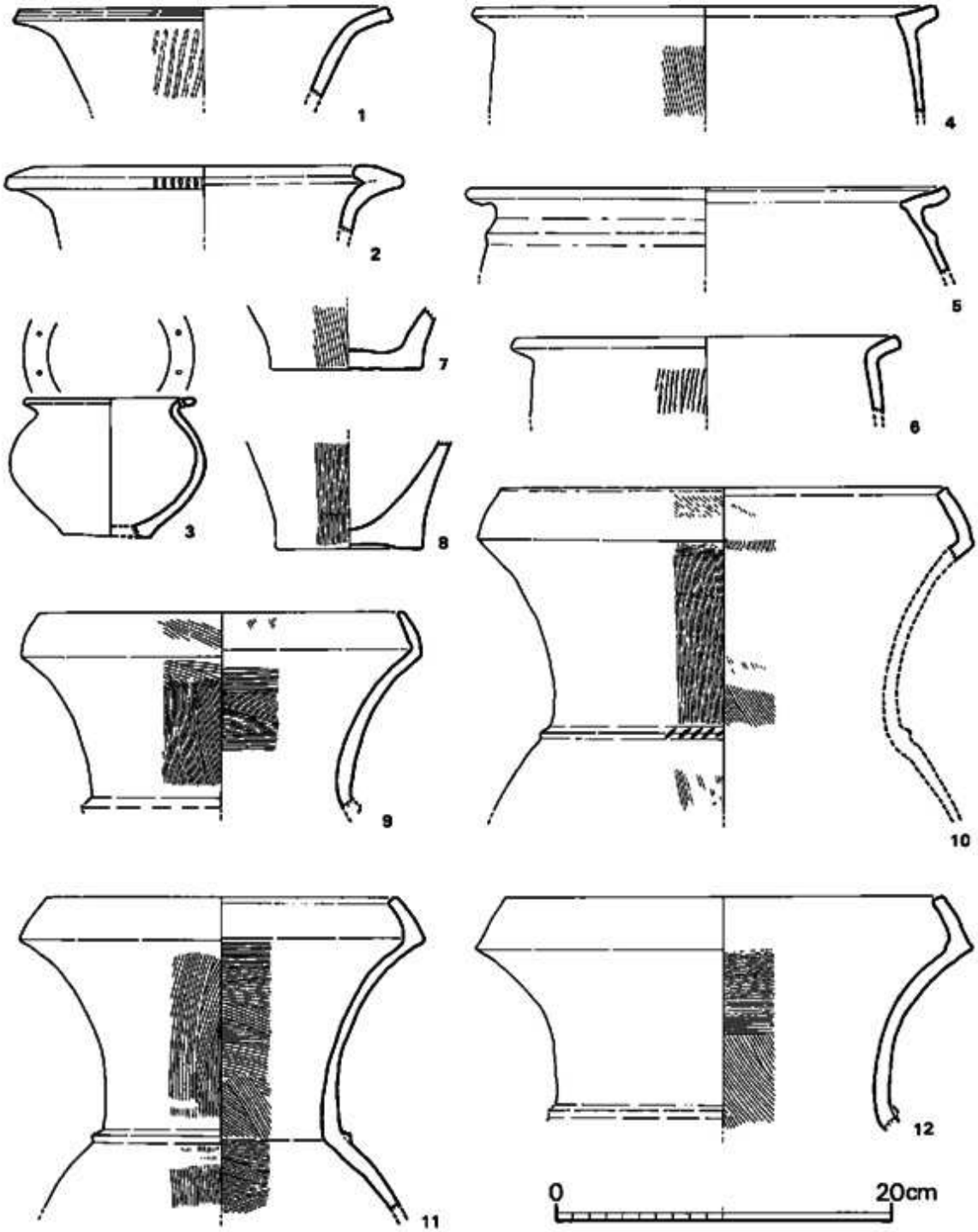
図版56・57は，石器・金属器の出土状況である。石器では石匙は縄文時代に属する資料であるが，B2区の第6層下部から出土し，砥石は同区の第6層上部の出土である。いずれも大溝のの東端肩部の堆積土中である。石剣はD9区の第6層上部出土。金属器では，銅矛片が溝中央部の第5層下部の出土で，鉄斧，銅鋤先は溝肩部の第5層下部と第6層上部の接点から出土し，鉄斧・銅鋤先とも木柄に差装された状態ではなく，単独に出土した。

なお，D10区から南方にユンボによる試掘溝をあけて溝幅の確認を試みたが，DEF−10区土層図に図示するように肩から約7mでわずかに立ちあがりこの部分で7層はなくなる。また約11mの位置でもわずかに立ちあがることがわかる。この結果D8〜D10区にみられる第2段の面でのわずかな落ち込みが溝状になることを知るが，第1段の面とでは並列ではなく直交する方向に近い。一方，南側の台地斜面ぞいの現水路が屈曲する部分で，水路改修工事の際に黒色土の落ち込みと木材・腐植物等が出土しており，この部分は調査区域内の区割で6列の延長に相当する。大溝がどのような流路を描くか，調査範囲内の結果だけは簡単に決論の出せるものではない。今後の周辺の調査を待ちたい。　　(小池史哲)

(2) 弥生土器

(1) 中期の土器（図版58，第38図1〜8）

壺形土器（1〜3）　1は単口縁の大きくひらく壺の口頸部付近の破片資料で，復原口径22.4cmを測る。口頸部外面はタテヘラ磨きで暗文風に仕上げている。口縁部内外ヨコナデ，頸部内面ナデている。口縁端部にはヨコナデによる凹線を形成している。色調は茶褐色を呈す。2は鍬先状口縁壺の口頸部破片で，復原口径23.6cmを測る。口縁部上面は外傾気味で，分厚い鍬



第 38 図　II区大溝出土土器実測図 1 (1/4)

先状をなし，端部外面には刻目を施している。調整は風化が著しく不明。色調は暗茶褐色。3は広口の小形壺である。玉葱形の胴部に強く外反した短い口頸部がつくもので，口縁部上面には2個対の紐通し孔がみられる。胴部外面ヨコヘラ磨き，内面ナデ，外底部ヘラ磨き，口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は暗茶褐色を呈す。全て7層出土。

甕形土器（4～8）　4～6は胴上半，7・8は底部の資料である。4は内傾する「T」字状口縁の甕で，復原口径27.6cmを測る。胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデしている。色調は暗茶褐色。5は内傾する「T」字状口縁の甕であるが，端部をヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げている。口縁下には1条の低平な三角凸帯を付している。色調は淡茶褐色を呈す。6はいわゆる如意形口縁の甕で，復原口径23.1cmとひとまわり小さい。胴部外面粗い刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。外面全体に著しい煤の付着がみられる。色調は暗茶褐色。7は底径9cmの平底の底部であるが，8は外底部がわずかに凹む平底である。底径8.7cm。調整は7・8とも外面刷毛，内面・外底部はナデて仕上げている。色調は両者とも暗黄褐色を呈す。全て7層出土。

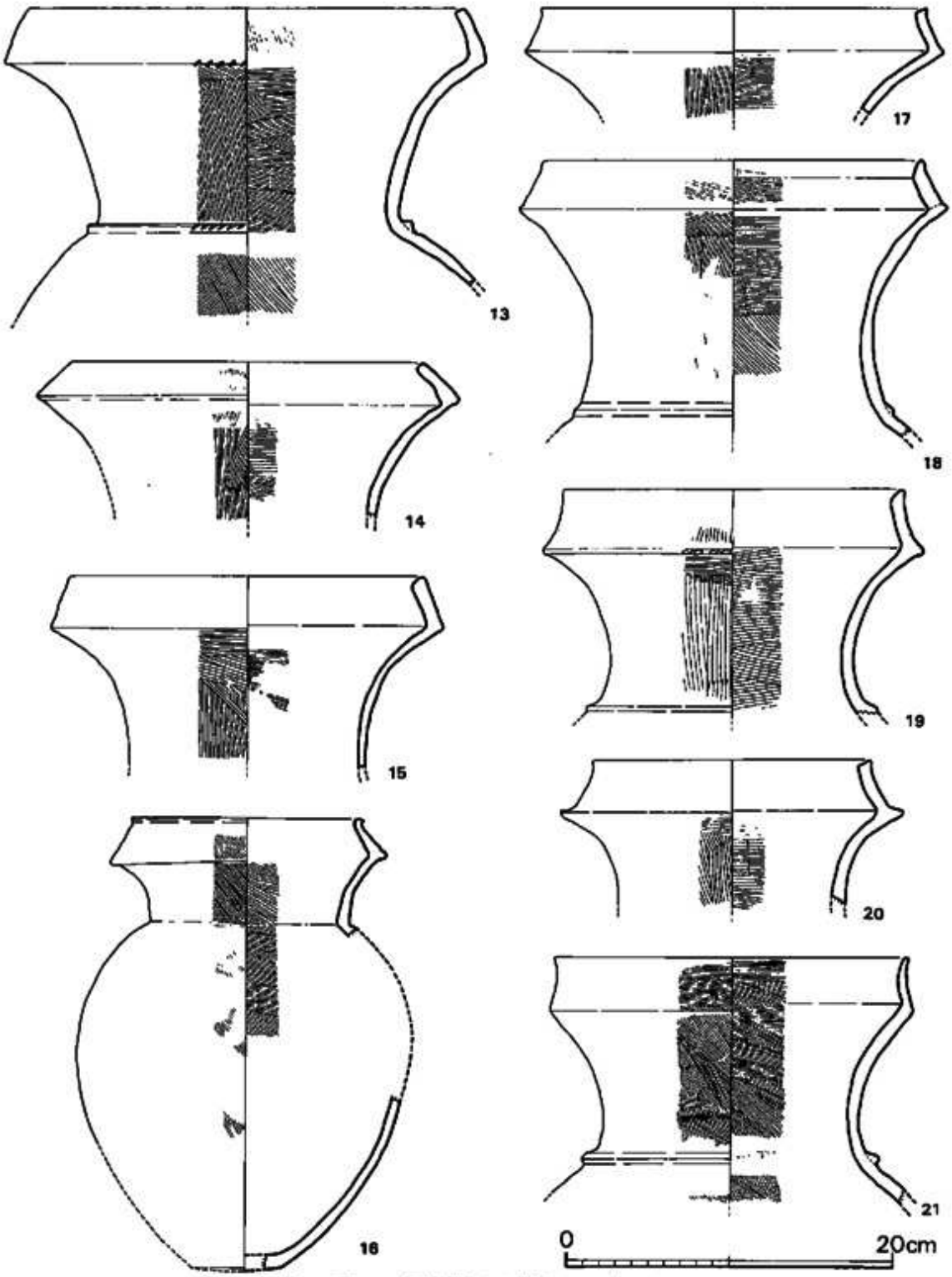
(2)　後期の土器（図版58～65，第38～46図）

壺形土器（9～25）　壺にはいわゆる複合口縁のもの（9～21）と，単口縁の小形のもの（22～25）に二大別できる。

複合口縁の壺は，口縁部の形状によりさらに3種に細別できる。口縁部が「袋状」気味に内傾するもの（9～14），直線的・外弯気味に内傾するもの（15～20），垂直に立ち気味のもの（21）がある。

9・10は，口縁部外面がもっとも丸味をもつ「袋状」に近いもので，頸部下に1条の三角凸帯を付している。10の凸帯端部には横状工具による刻目が施されている。復原口径は9が22.5cm，10が26.5cmを測る。調整は内外面刷毛仕上げで，口縁部内外はさらにヨコナデしている。色調は9が外面淡明褐色，内面淡灰黄褐色，10が黄褐色を呈す。11は他と比べ頸部が細く長いタイプである。口径20.8cmを測る。色調は淡黄褐色を呈す。12は立ち気味の頸部に大きく外反する「袋状」口縁がつく壺で，復原口径26cmを測る。頸部外面刷毛のあとナデ，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデして仕上げている。色調は淡黄褐色。13は肩の張った胴部に大きく外反する頸部がつくタイプである。口縁屈折部と頸部下に付された三角凸帯端部には刻目が施されている。口径26.6cmを測る。調整は内外面刷毛のあと口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。14は口縁部がもっとも内傾するタイプで，口縁部の屈折部が明瞭な壺である。口径21.5cmを測る。調整は他と同じ。色調は灰色っぽい淡黄褐色である。

15～20は，直線的・外弯気味に内傾する口縁部をもつタイプである。15は直線的に内傾するもので，口径に比べ頸部が細く立ち気味のタイプである。口径21.6cmを測る。色調は暗灰褐色を呈す。16～20は外弯気味に内傾する口縁部をもつタイプであるが，16・17・20のような口縁



第 39 図　II区大溝出土土器実測図 2 (1/4)

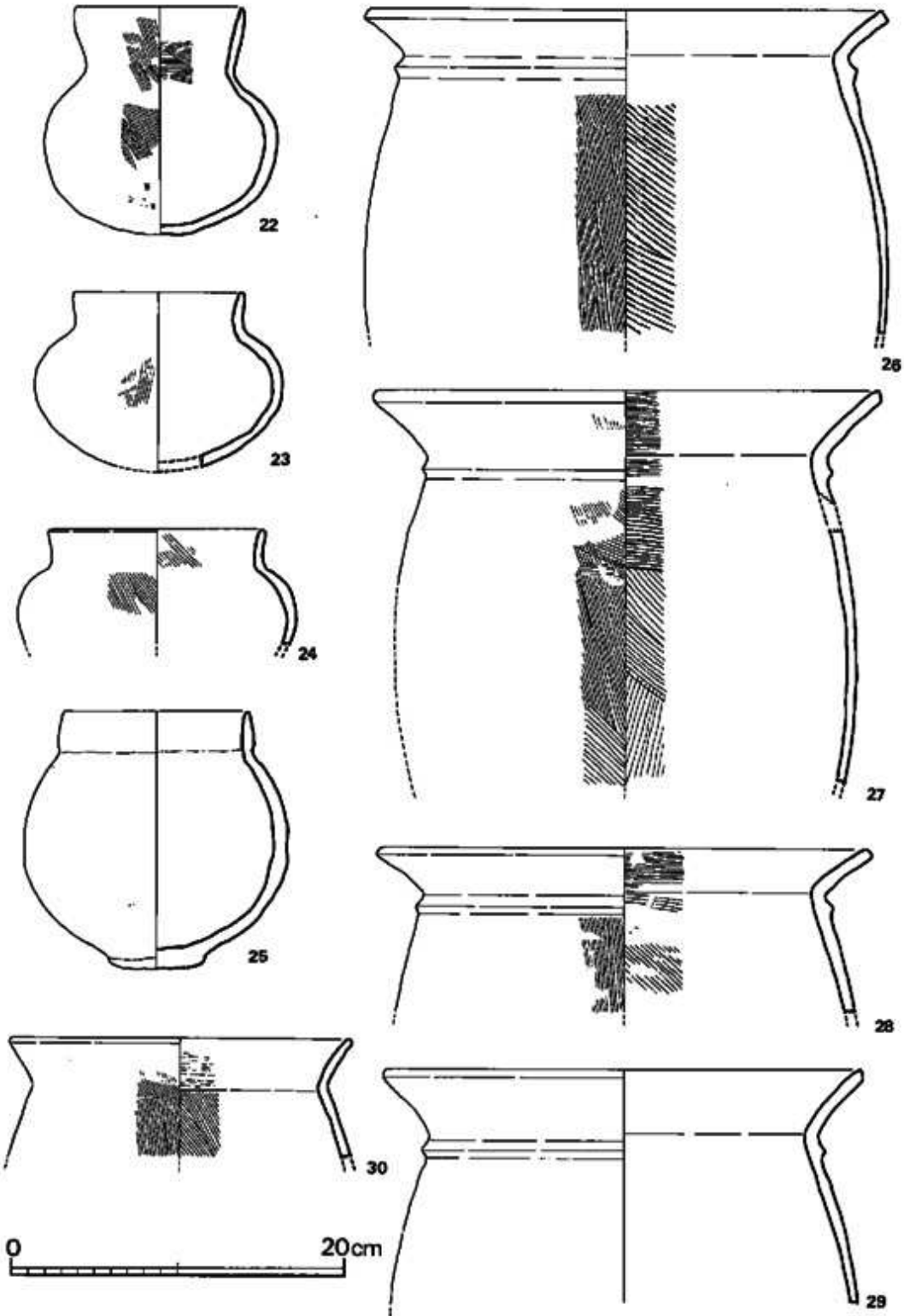
端部をつまみ出し気味に仕上げたものと，端部を細く仕上げたものとがある。16はほぼ全形を知りうる小形の壺である。卵形の胴部に強く外反する短い頸部がつくもので，口縁部の屈折も極めて強いタイプである。口縁部に比べ胴部が長い壺である。底部は「レンズ」状をなす平底である。調整は内外とも刷毛のあと，胴部外面ヘラ磨き，内面下半ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は黄褐色。口縁部と胴部外面中位には黒斑を残している。口径14.2cm，復原器高27.5cmを測る。17は頸部の外反が大きい。20は立ち気味に外反する頸部に強く屈折した口縁部がつくもので，強い口縁屈折部は鍔状を呈している。調整は17・20とも外面刷毛のあと，口縁部内外はさらにヨコナデして仕上げている。復原口径17が23.5cm 20が17cmを測る。色調は17が黄白色，20が暗黄褐色である。18・19は口縁端部を細く仕上げたもので，端部上面の内傾が極めて強いものである。口径18が23.2cm，19が20.6cmを測る。内外とも刷毛調整，口縁部内外はヨコナデで仕上げ，19は頸部下半内外をさらにナデて仕上げ，19の口縁屈折部には刻目が施されている。色調は18が黄褐色，19が淡灰褐色を呈す。

21は垂直に立ち気味の口縁部をもつタイプで，いわゆる一般に二重口縁の壺といわれるものに近いものである。内外とも細かい刷毛調整で，口縁端部と頸部下の「コ」字形凸帯付近をヨコナデして仕上げている。外面全体に著しい煤の付着がみられる。色調は淡褐色で，胎土・焼成とも良好・堅緻な土器である。

22～25は単口縁の小形壺である。23～25が短頸の広口直口壺で，22は口頸部の長い坩形をなす壺である。22は口径10cm，器高13.5cmを測る平底気味の丸底をもつ壺で，外面刷毛のあと胴下半をヘラ削り，胴部内面ナデ，口頸部内面刷毛のあと口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面明灰褐色，内面暗茶褐色を呈す。23・24は扁球部の胴部に直口する短口縁がつくタイプで，23からして丸底をなすものと思われる。23の口径10.2cm，復原推定器高10.6cm，24は口径13cmを測る。調整は胴部外面刷毛のあと下半をナデ，胴部内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。24の口縁部内面には刷毛の痕跡を残す。色調は23が黄褐色，24は暗茶褐色を呈す。24の外面全体に煤の付着がみられる。25は球形の胴部に直口する短い口縁部がつくもので，底部は器肉の厚い平底である。調整は口縁部内外をヨコナデしている他は，粗いナデで仕上げている。出土層位は，11・12・15・19・22～25が6層上部で他は6層下部出土である。

甕形土器（26～43）　甕には長胴の「く」字状口縁をもつもの（26～35）と，球形ないしは扁球形の胴部に短い「く」字状口縁がつく小形のもの（36～43）の二つのタイプがある。前者のタイプには33のような脚台のつく例もある。

26～29は口径30cm前後の大形の甕で，口縁下に1条の三角凸帯を付している。調整は内外とも刷毛調整，口縁部内外はさらにヨコナデして仕上げている。色調は26が淡茶褐色，27が暗茶褐色，28・29が淡黄褐色である。27の外面全体には著しい煤の付着がみられる。口径は，26が31.2cm，27が30.2cm，28が29.6cm，29が28.7cmを測る。27を除き全て復原径である。

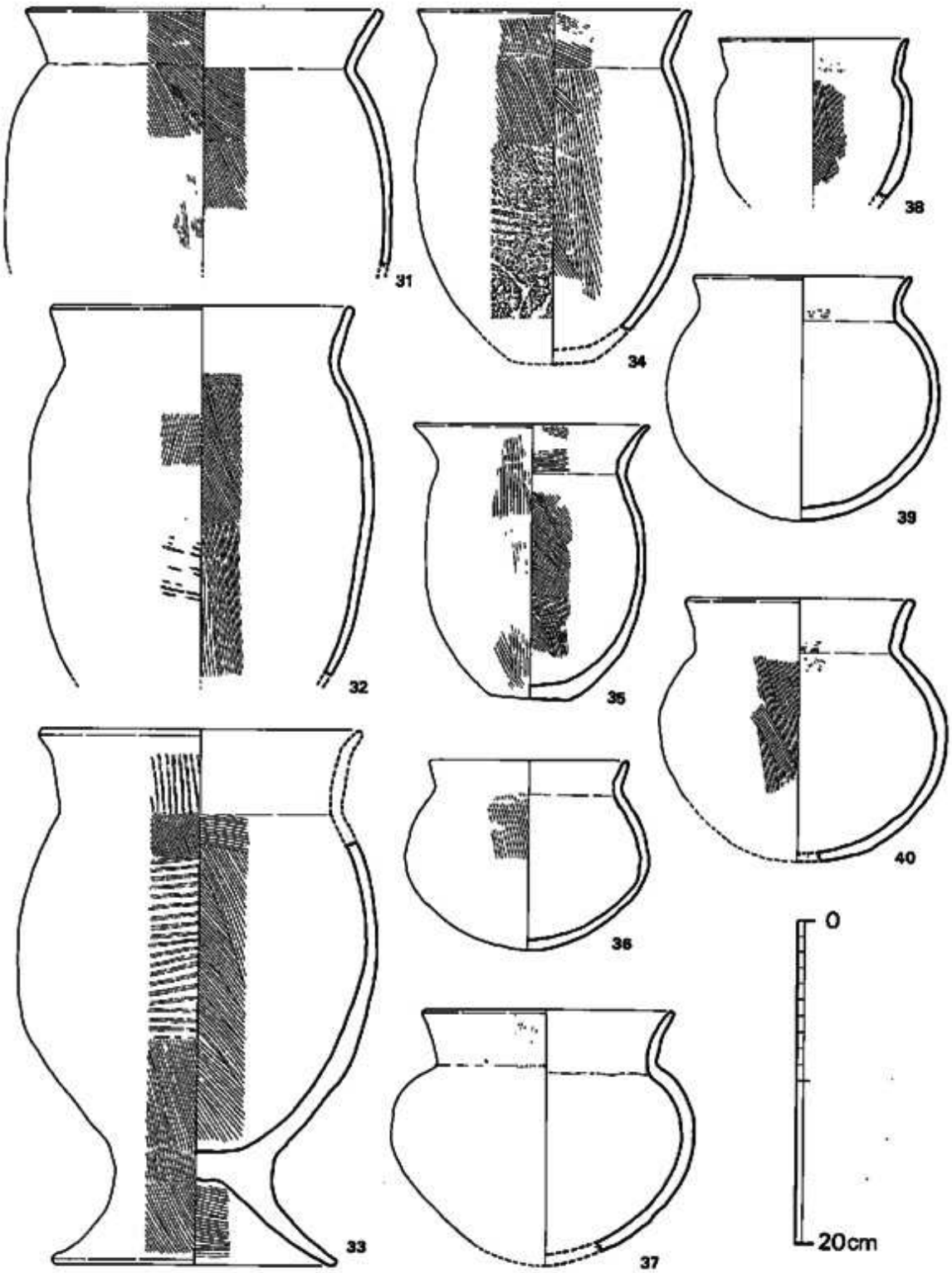


第 40 図　II区大溝出土土器実測図 3 (1/4)

30～33は口径20cm前後の中形のタイプである。30・31のように強く外反するものと32・33のような立ち気味に外反する「く」字状口縁のものとがある。調整は32・33を除き内外とも刷毛調整で，口縁部内外はさらにヨコナデしている。32は胴部外面下半を粗いタタキのあとナデ調整，上半と内面は刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。外面全体に著しい煤の付着がみられる。33は脚台付の長胴甕で，胴部外面中位を粗いタタキ，上下を粗い刷毛調整，内面と脚台部内外刷毛，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は30・32・33が淡茶褐色，31が内面淡褐色，外面黒茶褐色を呈す。口径は30が20.5cm，31が22cm，22が18.6cm，33が19.6cmを測る。30は復原径である。

34・35は小形の長胴の甕である。34は外面上半刷毛，下半はタタキのあと底部付近のみを粗いヘラ削りで仕上げている。内面は刷毛調整，口縁部内外は軽くヨコナデしている。色調は淡黄褐色を呈す。外面全体に煤の付着がみられる。35は口径14.4cm，器高16.7cmを測る。底部は平底で，胴下半が若干膨み気味の長胴の甕で，口縁部の外反は大きく，端部を細く仕上げている内外面とも刷毛調整，口縁部内外はさらに軽くヨコナデしている。底部内外はナデて仕上げ，内底部には指頭圧痕がみられる。色調は外面淡黄褐色，内面淡明褐色を呈す。

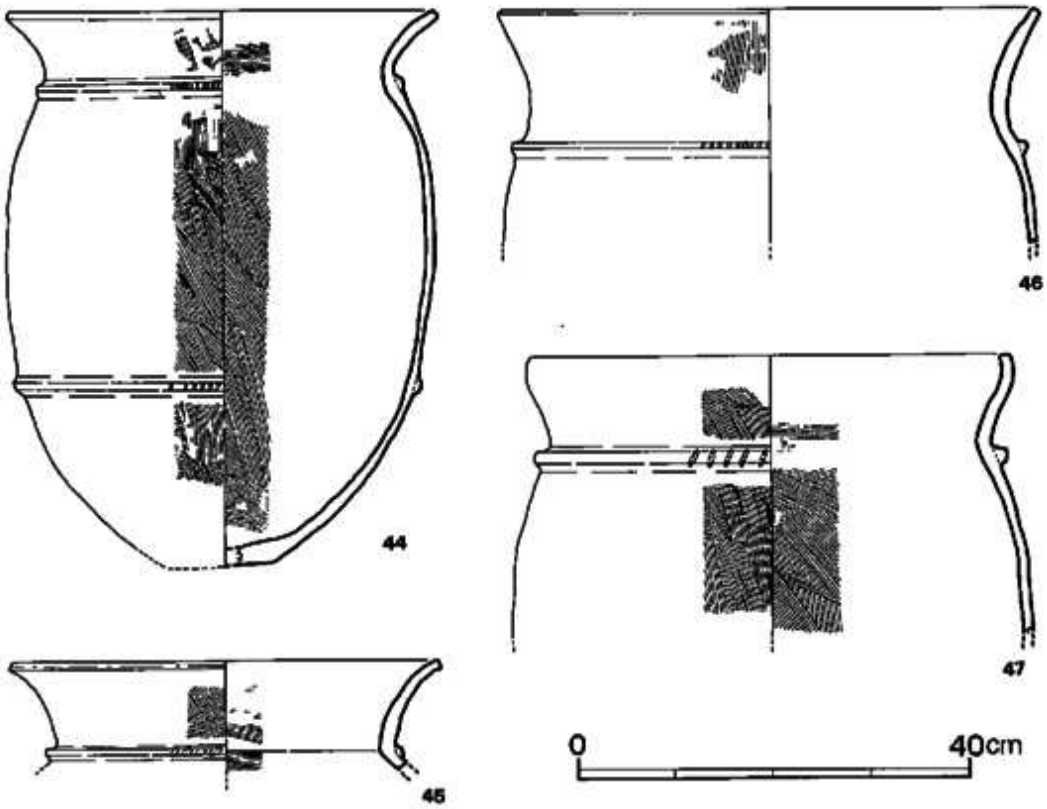
36～43は球形ないしは扁球形の胴部に短い「く」字状口縁がつく小形の甕で，器形的には小形壺との区別が困難な一群である。底部は知りうるものの大半が丸底で，口縁部は43を除き他はいわゆる広口のタイプである。36・37とも扁球形の胴部をもつもので，底部は尖り気味の丸底である。調整は37が外面刷毛のあとヘラ磨き，内面丁寧なナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。36は外面刷毛のあと，下半をヘラ削り，内面はナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は両者とも淡茶褐色を呈す。口径は36が12.2cm，37が15.4cm，器高は36が11.6cm，37は復原推定器高15.5cmを測る。38は胴部最大径と口径がほぼ等しいもので，調整は外面丁寧なナデ，内面は刷毛，口縁部内外はヨコナデして仕上げている。内面下半には炭化物様のもの，外面には煤の付着がみられる。色調は淡黄褐色を呈す。復原口径11.6cmを測る。39・40・42は球形の胴部をもつタイプである。39は口径13.4cm，器高14.8cm，胴部最大径16.6cmを測る。胴部内外とも刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。40は口径13.9cm，復原推定器高15.9cm，胴部最大径17.5cmを測る。胴部外面細かい刷毛調整のあと下半をナデ，内面は刷毛のあと入念にナデて仕上げ，口縁部内外はヨコナデしている。色調は暗茶褐色で，器面には大きな黒斑がみられる。42は口径15.8cm，器高17.8cm，胴部最大径19.2cmを測る。外面は全体に風化が著しいが，上半は刷毛，下半はヘラ削り，内面は刷毛のあと，下半はさらにナデ上げ調整している。口縁部内外はヨコナデで，端部をつまみ出し気味に仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。41は扁球形をなすと思われる胴部に緩かに外反する口縁部がつくもので，口径と胴部最大径がほぼ等しい甕である。内外とも風化が著しくかならずしも明確でないが，刷毛調整と思われる。色調は淡黄白色。43は他と異なり頸部が強くしまっ



第 41 図　II区大溝出土土器実測図 4 (1/4)

たタイプで，胴部最大径に比べ口径の小さい甕である。内外とも細かい刷毛，内面下半はさらになでて仕上げ，口縁部内外はヨコナデしている。復原口径11.4cm，胴部最大径19.1cmを測る。色調は淡茶褐色を呈す。出土位置及び層位は，26・28がD10区6層下部，29・41はB8区6層下部，32・34・35・40・43はB8区6層上部，30はC9区6層下部，38はC9区6層上部，33・42はC8区6層下部，36はC7区6層下部出土，39はB7・C7区6層上・下部出土の接合資料である。

大型甕形土器（44～47）　大甕には，いわゆる「く」字状口縁のもの（44～46）と，内弯口縁のもの（47）がある。頸部には1条の「コ」字形凸帯を付し，端部には刻目を施している。ほぼ全形の知りうる44は胴部下位に1条の「コ」字形凸帯を付している。おそらく他の大甕もつくものであろう。調整は46が器面の風化が著しく明瞭でない他は，内外とも刷毛調整で，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。44の底部付近はさらにナデて仕上げている。44は口径44cm，器高55.3cmを測り，底部は平底である。45は口径44.4cm，46は55.2cm，47は48.8cmを測る。色調は44が淡黄褐色，45が暗黄褐色，46・47は淡褐色である。出土位置及び層位は44がB7区6層上部，45・47がC8区6層下部，46はB8区6層上部である。



第42図　II区大溝出土土器実測図5（1/8）

鉢形土器（48～56）　鉢には単口縁のもの（48～52），口縁部が「く」字状に外反するもの（53・54），鍋形を呈すもの（55）がある。他に杯部が明瞭ではないが脚台のつく56もある。

単口縁の鉢には大小あり，口径22～23cm前後のもの（48・49）と，15～19cm前後のもの（50～52）がある。調整は48が外面ナデ，内面刷毛，内底部はナデて仕上げている。口径23.4cm，器高11.7cmを測る。49は内外面刷毛のあと下半をナデて仕上げた外面暗黄褐色，内面淡褐色を呈す土器である。口径22cm。50は口径16.8cm，器高11.9cmを測る。調整は外面タタキのあとナデ，内面はナデ仕上げ。色調は淡黄褐色を呈す。51は口径19cm，復原推定器高8cmを測る口径に比し浅目の鉢である。内外とも刷毛調整，体部外面下半はさらにヘラ削り，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は灰褐色で，外面全体に煤の付着がみられる。52は口径15.2cm，器高 6.9cmを測る。外面刷毛，内面は丁寧なナデ調整である。外面灰白色，内面淡褐色を呈す。

53・54は「く」字状に外反する口縁部をもつもので，復原口径30.9cmを測る大形品（53）と，14.2cmを測る小形品（54）がある。調整は54が体部内外ナデ，53が刷毛仕上げである。口縁部内外はヨコナデしている。色調は53が黄褐色，54が淡褐色を呈す。

55は鍋形を呈す鉢で，体部中位には1条の三角凸帯を付している。底部は丸味をもつ平底である。復原口径24.2cm，復原推定器高10.5cmを測る。調整は外面刷毛のあとナデ，内面上半刷毛，下半はナデ仕上げである。色調は淡黄褐色。

56は脚付鉢と思われる脚台部の資料である。脚台径13.8cm，脚高5.5cmを測る。

出土位置及び層位は，48・49・56がC8区6層上部，51はC9区6層上部，50・52はB7区6層下部，53・54はB8区6層下部，55は出土位置は不明であるが6層上部出土の資料である。

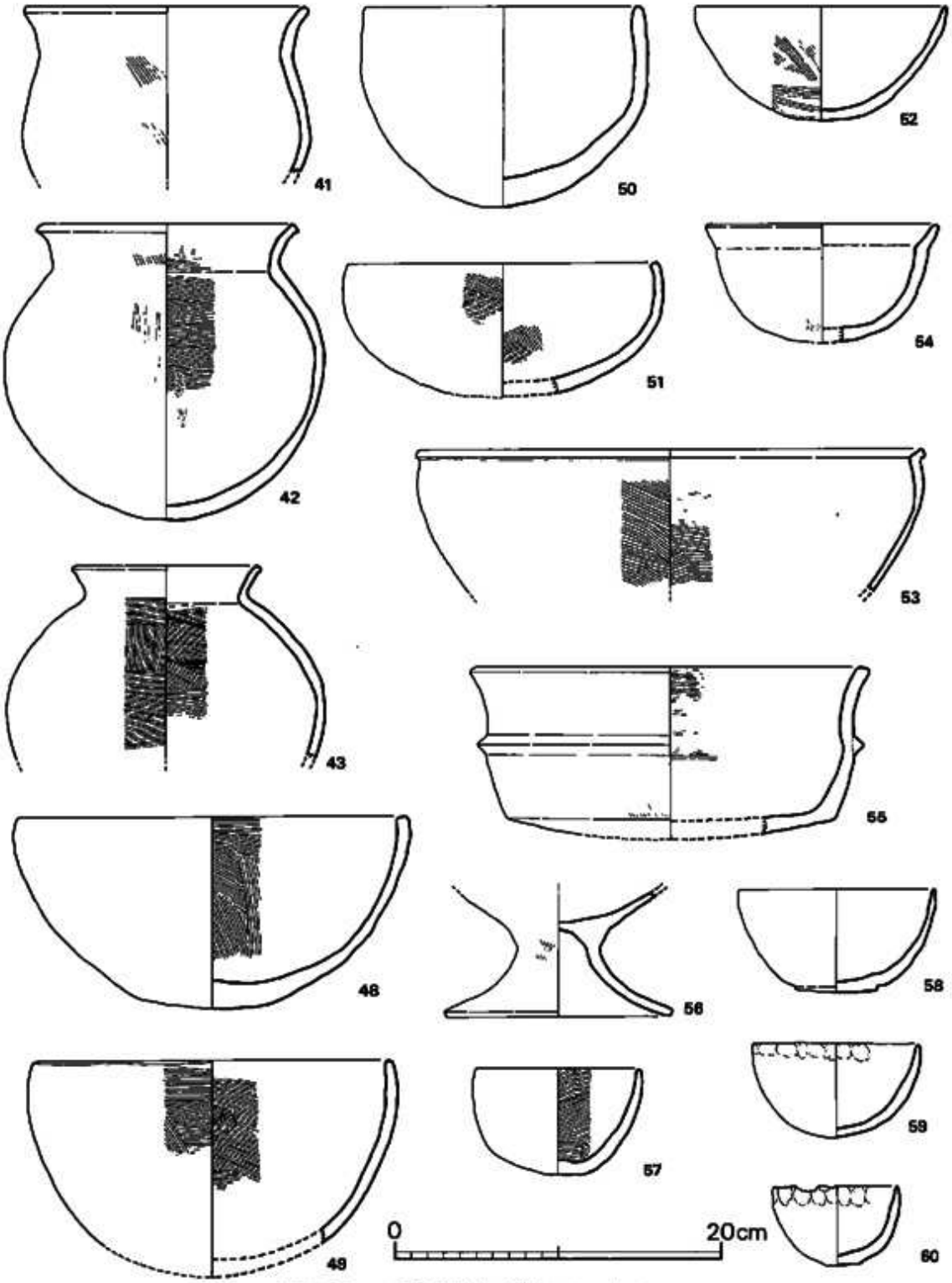
椀形土器（57～60）　59・60はいわゆる手捏土器で内外に指頭圧痕を顕著に残している。57は口径10cm，器高 6.5cmを測る丸底で，58は口径11.6cm，器高6.3cmを測る平底の椀である。調整は58が内外ともナデ，57は外面ナデ，内面刷毛仕上げしたものである。

出土位置及び層位は57・60がB8区6層下部，58がB7区6層上部，59はB7区6層下部出土である。

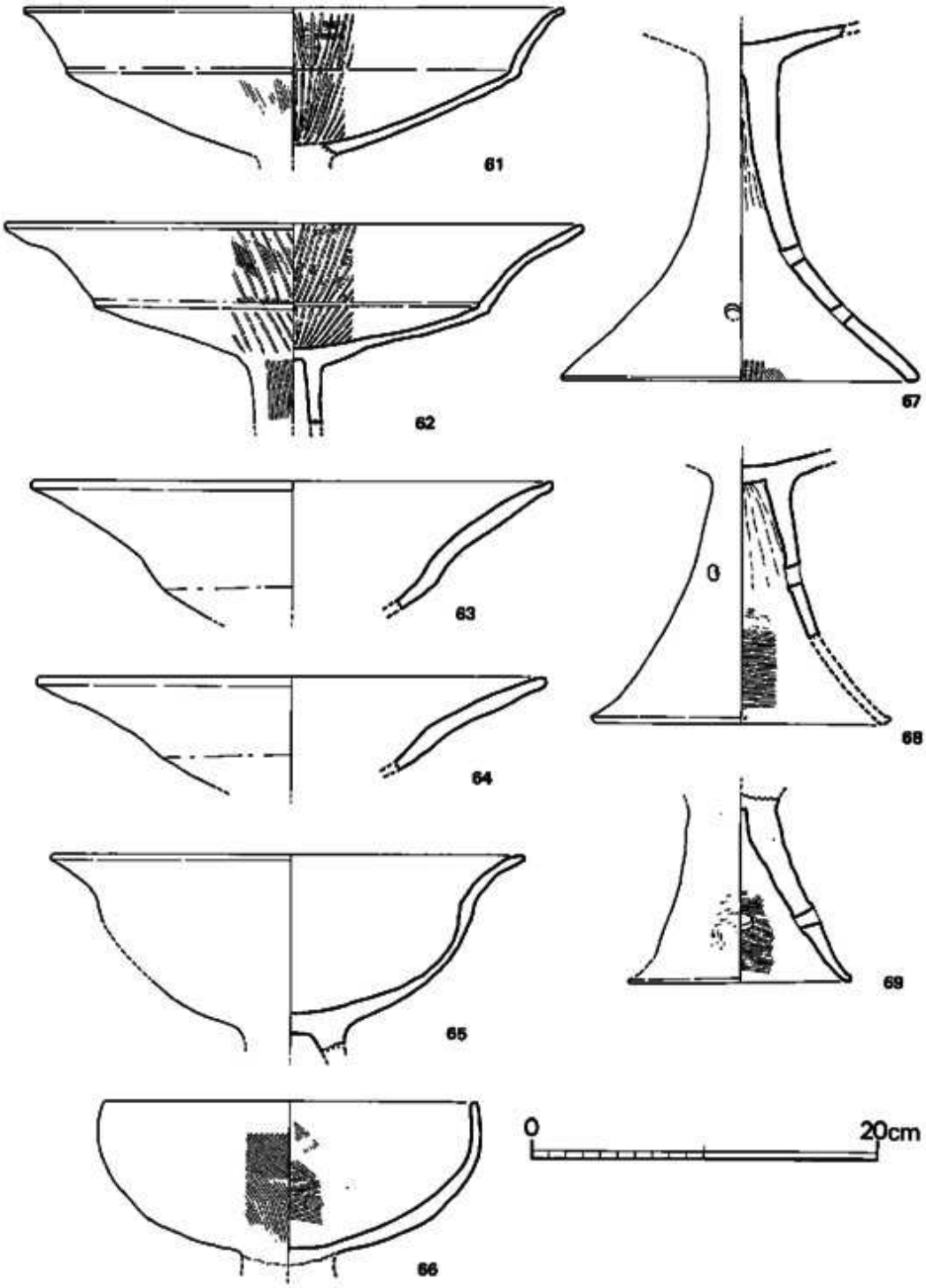
高杯形土器（61～69）　高杯には杯部の形状で4種，脚部で3種ある。杯底部の屈折が明瞭で，杯部が外上方に長く大きくひらくもの（61・62），杯底部の屈折が不明瞭で，杯部が長く大きく外上方にひらくもの（63・64），杯部が「く」字状にひらく鉢形を呈すもの（65），杯部が内弯気味に立ちあがる単口縁の鉢形を呈すもの（66）がある。

61・62とも細かい刷毛調整のあと丁寧にヘラ磨きした作りの良い高杯で，内外にヘラ先磨きによる暗文を施している。杯部の外反は62に比べ61は弱く短い。61の口唇部内面にはヨコナデによる凹線を形成している。口径は61が復原口径30.9cm，62が33.2cmを測り，色調は両者とも暗茶褐色を呈す。

杯底部の屈折が不明瞭な63・64は，器面の風化が著しく調整は不明である。口径は63が30.1



第 43 図　II区大溝山土土器実測図 6（1/4）



第 44 図　II区大溝出土土器実測図 7 (1/4)

cm，64が29.3cmを測る。色調は淡黄褐色である。

65は「く」字状にひらく鉢に脚部がつく高杯で，低い脚台のつく鉢と共通するタイプである。口径27.3cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明。色調は淡黄褐色。この高杯は二次焼成を受けているらしく口縁部付近が赤褐色に変色している。

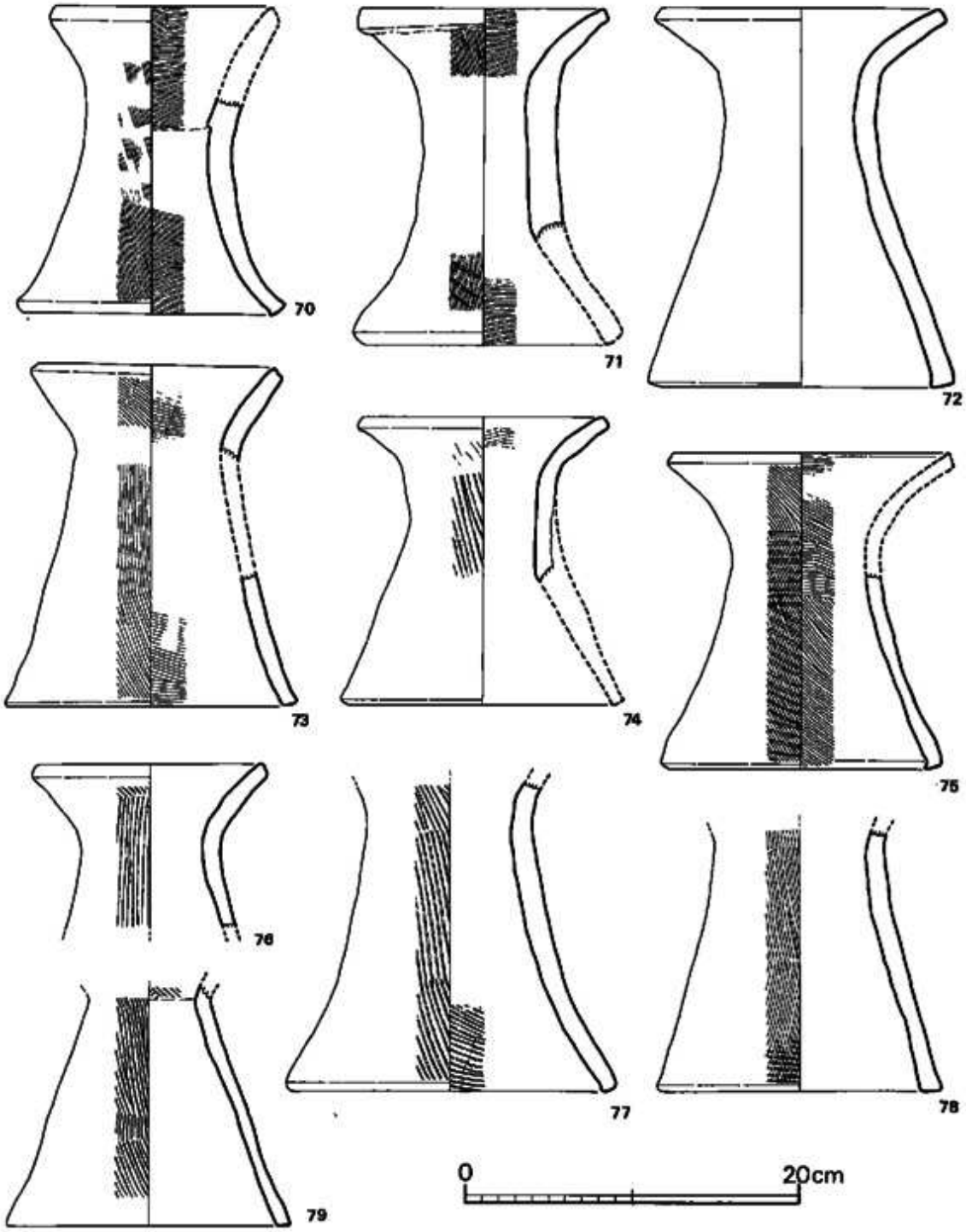
66は単口縁の鉢に脚部がつくタイプの高杯である。調整は内外とも刷毛，内底部はさらにナデて口縁部内外はヨコナデして仕上げている。口径21.4cm。色調は暗黄褐色。

脚部にも3種あり，67のように柱状部が細く裾部で大きく内弯気味にひらくもの，柱状部の先端からラッパ状に大きくひらくもの（68），脚部が短かくラッパ状をなすもの（69）である。67の脚部は一般に61・62のような杯部につくものである。67の裾部には2個対の6孔が穿たれている。

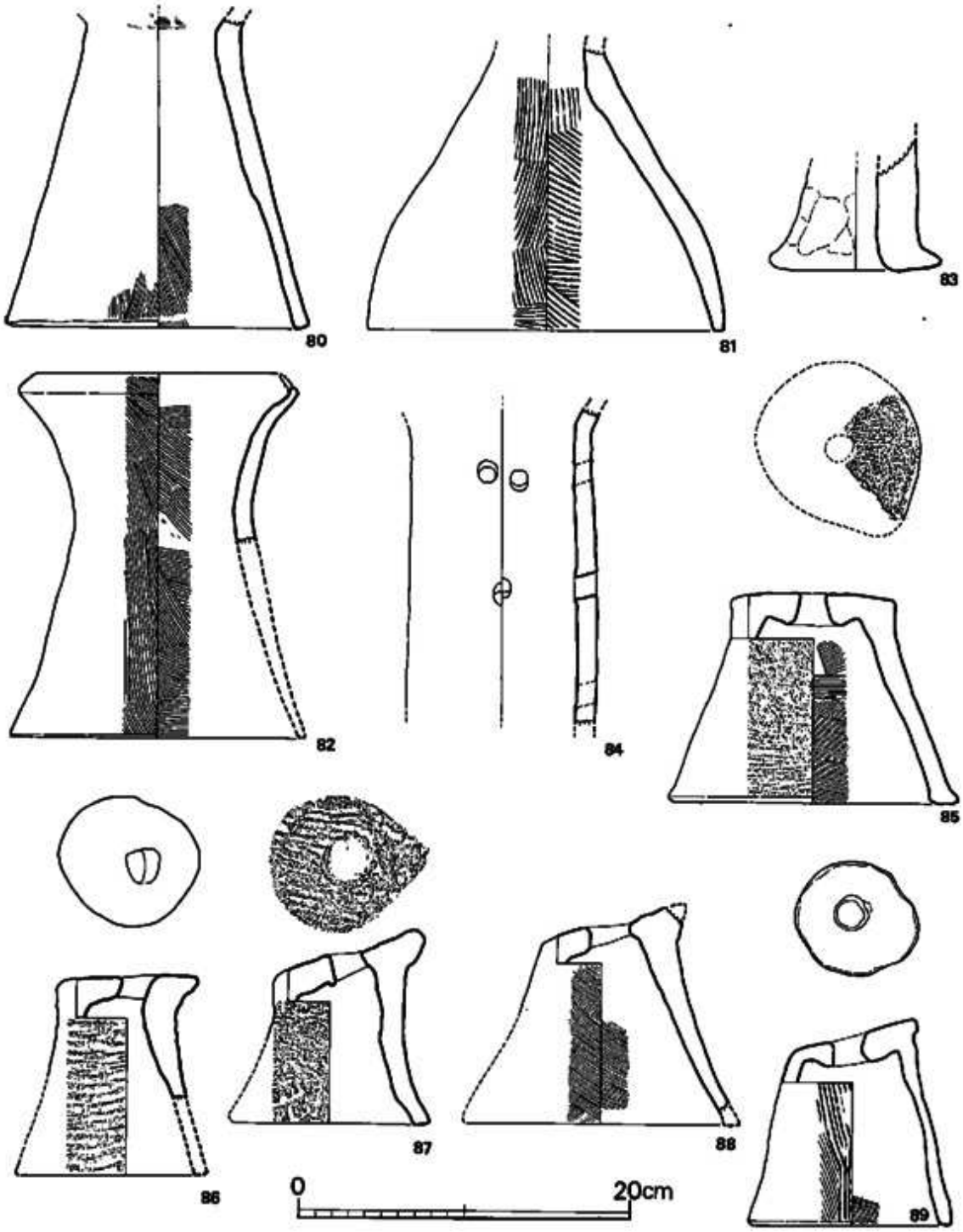
出土位置及び層位は，62・63がB8区6層上部，64・65・67・69がC9区6層上部，66がC8区6層上部，68がD9区6層上部，61はC8区6層上部・下部出土の接合資料である。

器台形土器（70～84）　器台には5種のタイプがある。上下の開きがほぼ等しい円筒状をなすもの（70・71），器受部のくびれが高いもの（72～76），器受部口縁が「袋状」をなすもの（82），いわゆる手捏の器肉の厚い小さいタイプ（83），体部が柱状をなすもので，体部に2個対の8孔の穿孔がみられる特異なタイプ（84）がある。他に，器受部を欠く77～81があるが，おそらく器受部のくびれが高いタイプのものであろう。70は外面刷毛，内面中位がナデの他は刷毛で仕上げている。復原器受部径13.6cm，脚部径15.8cm，器高18.2cmを測る。色調は黄褐色を呈す。71は器受部径14.9cm，復原脚部径16.1cm，器高19.7cmを測る。調整は外面粗いタタキのあと刷毛調整し，体部中位もさらにナデている。器受部・脚部内面刷毛，体部中位はナデ仕上げである。色調は淡茶褐色。

72は内外とも丁寧にナデて仕上げたもので，器受部径17.3cm，脚部径18cm，器高22.5cmを測る。色調は淡茶褐色である。73は器受部径15.1cm，脚部径17.4cm，器高20.1cmで，調整は70と同じである。色調は淡茶褐色。74は体部中位が立ち気味で器受部で強く外反するものである。外面粗い刷毛のあと下半をナデて仕上げ，内面は刷毛のあとナデている。器受部径14.9cm，復原脚部径16.9cm，器高17cmを測る。75は外面粗いタタキのあと粗い刷毛調整，内面刷毛で仕上げた土器で，上下端部はヨコナデにより内側につまみ出し気味に仕上げている。復原器受部径17cm，脚部径16.6cm，器高18.8cmを測る。色調は74・75とも黄褐色である。76は脚部を欠く資料で，器受部径14cmを測る。外面粗い刷毛，内面ナデ調整の暗茶褐色を呈す土器である。77～81はラッパ状にひらく脚部の資料であるが，81のような内弯気味にひらき，くびれが極めて強いタイプもある。調整は80が外面に粗いタタキを残す他は外面刷毛，内面刷毛かナデで仕上げている。脚部径は，77が19.5cm，78・79が16.8cm，80が18cm，81が21.2cmを測る。色調は77・81が黄褐色，78が淡茶褐色，79が茶褐色，81が淡黄褐色である。



第 45 図　II区大溝出土土器実測図 8 (1/4)



第 46 図　II区大溝出土土器実測図 9 (1/4)

82は器受部が「袋状」をなすタイプで，器受部径14.7cm，復原脚部径17.6cm，器高21.7cmを測る器壁の薄い作りの良い器台である。内外とも丁寧に刷毛調整し仕上げている。口縁部外面には煤の付着がみられる。色調は暗茶褐色である。

83は器肉の厚い手捏の小形器台で，内外に指頭圧痕を顕著に残している。

84は器受部と脚部を欠く体部の資料である体部はずん胴で，器受部へのひらきはあまり強くないようである。体部には2個対の8孔の穿孔がみられる。調整は器面の風化が著しく不明・体部中位の径は11.1cmを測る。色調は淡黄褐色を呈す。

出土位置及び層位は，70・71・80がC7区6層上部，72・76・77・79がB8区6層下部，74がB8区6層上部，73がC8区6層下部，82がC8区6層下部，75・83がD8区6層上部，81がC9区6層上部，84はC2区6層下部出土である。78は出土位置は不明であるが6層上部出土。

支脚形土器（85～89）全て上面が傾斜する沓形状を呈す支脚で，上面中央に1つの円孔があく。器面の調整は外面タタキのままのもの（85～87），丁寧な刷毛仕上げのもの(88),タタキのあと粗い刷毛調整したもの（89）がある。内面は刷毛のもの，刷毛のあとナデたものがある。上面はナデ調整のものが一般であるが，86のような刷毛，87のようなタタキのままのもの，89のようなタタキのあとナデて仕上げたものもある。大きさも若干大小はあるが中央部での器高は10～12cm前後を測る。色調は85・86が淡茶褐色，87が淡黄褐色，88・89が暗茶褐色を呈す。また，外面各所で煤の付着，二次加工焼成による変色がみられる。

出土位置及び層位は，85がD8区6層下部，89がB7区6層下部，86がC8区6層上部，88がB8区6層上部，87は出土位置は不明だが6層下部出土の資料である。

以上，大溝出土の土器は大きく中期・後期の土器群に大別できる。しかし，若干ではあるが前期の小破片も出土していることを付記しておく。

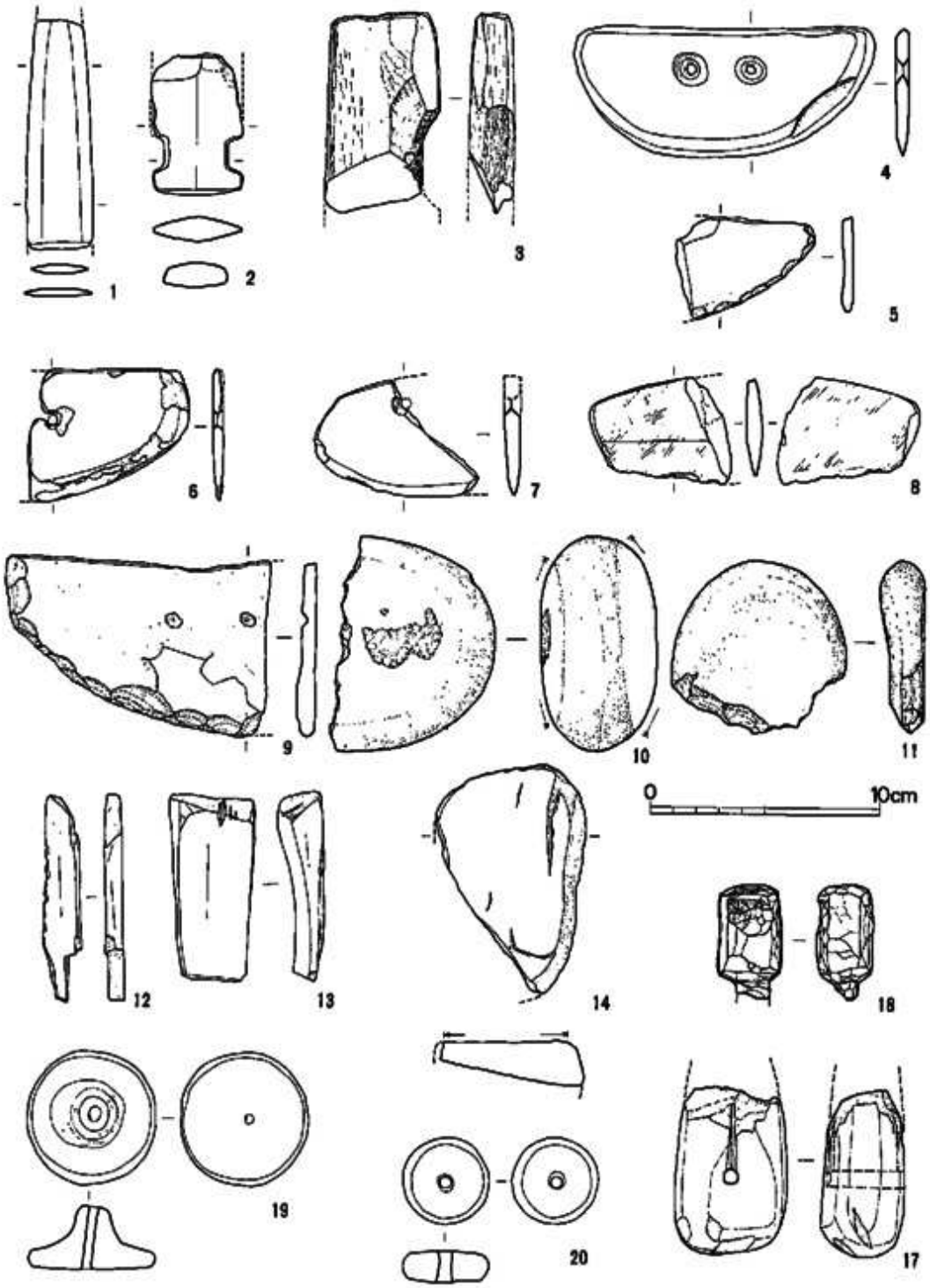
中期の土器は基本として中葉から後半に属するものである。また，後期の土器群も若干の新旧はあるようだが，後記するⅢ区の竪穴住居跡出土の土器群と基本的に同一型式の範疇で把握しうるものである。いわゆるこの地域の弥生終末とした門田遺跡（辻田地区）8号住居跡出土土器群（註1）とほぼ併行するものといえよう。（井上裕弘）

註1　井上裕弘「Ⅷ－5」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』7　福岡県教育委員会　1978

(3) 石　器（図版66，第47・48図）

石剣・石斧・石庖丁・礫器・砥石・石錘・不明石器を一括して取り扱っているが，18の不明石器は古墳時代以降の所産と考えている。

石剣　2点出土しており，いずれも粘板岩質の砂岩でD9区第6層上部から出土しているが接合しない。1は刃の部分で先端部も欠失する。現存長99.8mm，最大幅29.3mm，厚さ3.9mm，重量20gを測る。鎬はみられず断面形はレンズ状になる。2は基部破片で，現存長61.4mm，最大



第 47 図　II区出土石器・土製品実測図 2 (1/3)

幅40mm，厚さ10.7mm，重量48gを測る。関部は端部より約25mmの位置にあり長さ15mm，奥行5mm程度の抉りが設けられる。鏃は端部まで残っており，断面形は菱形を呈し，刃部では明瞭になる。

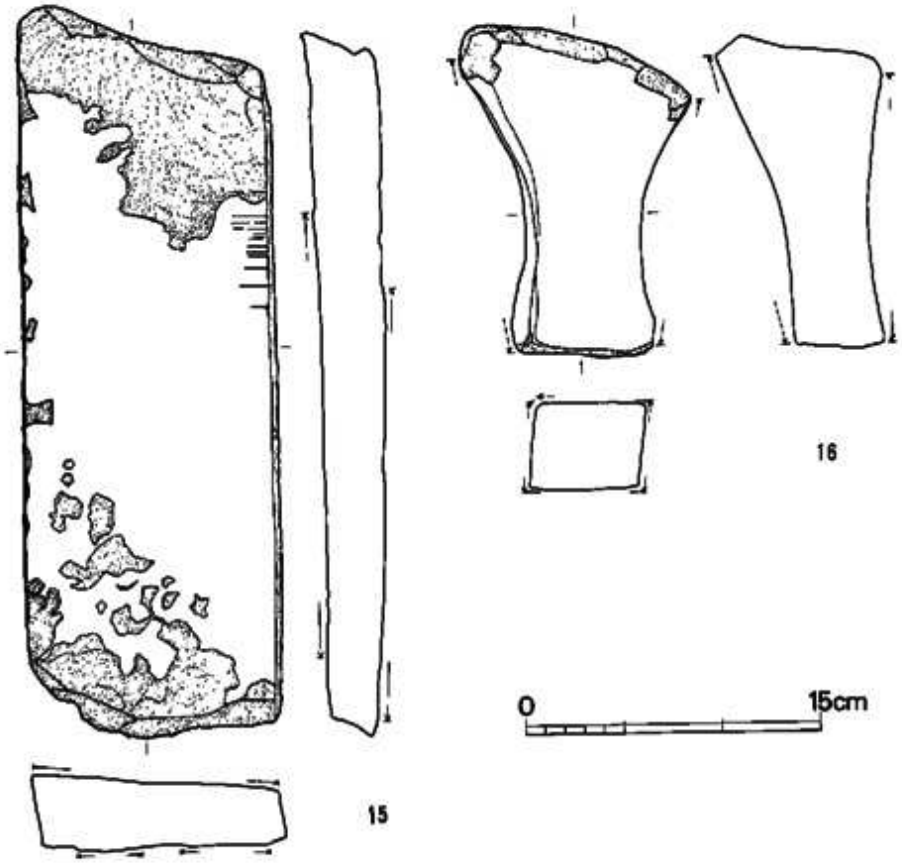
石庖丁　未製品も含めて6点ある。4は完形品で，D10区の第6層上部と第6層下部の間の砂層から出土した。長さ57.0mm，幅 132.4mm，厚さ 5.8mmを測る。ほぼ中央の上位に対応する2孔が両面から穿たれている。粘板岩質砂岩。5はC2区第7層出土で，片岩質の破片資料である。現存値では長さ44.6mm・幅60.3mm，厚さ 5.0mm，重量19gを測る。わずかに研磨されている程度で刃部は鈍い。6・7はよく研磨され，それぞれ破片であるが孔の存在を知ることができる。D6区第6層上部・B7区第6層下部からそれぞれ出土し，片岩製。現存値での長さは57.5mm・50.1mm・厚さ 4.6mm・7.2mm。8はB7区第6層下部出土資料で全体に研磨痕が明瞭に残る。孔は不明だが片面のほぼ中央には刃線に並行する稜がみとめられる。現存値での長さ46.0mm・幅62.0mm・厚さ6.5mm重量24g。粘板岩質。9は，未製品である。C3区第7層より出土したが，約3分の1を欠失する。部分的にまだ厚い部分が残り，片面からの穿孔も中途である。刃部は整形されているが研磨痕は全くない。製作中途段階で折損したものであろうか。片岩質で長さ78.9mm，現存幅115.8mm，厚さ8.2mm，重量121g。

礫器　11はやや中凹みになる扁平な円礫を両面から半分づつ打ち欠いたもので掌の中に納まり易い形状を呈している。長さ75mm，幅77.2mm，重量は108gを測る。砂岩。

砥石　4点あるがそのうち14の資料は水路改修工事の際に出土した砥石である。砂岩で現存値では長さ100mm・幅65.5mm・厚さ20mm・重量118g。12・13は粘板岩製で小形な仕上で砥石の部類に入る資料である。それぞれB7区第6層下部・C9区第5層下部から出土しており，長さは91.5mm・83.5mm，13には切り込みもみられる。15はB2区の第6層上部の出土で完形品。長さ373mm・最大幅131mm・厚さ26～39mmを有し，表裏両面共砥面としているが裏面はまだ余り使い込まれていない。表面の一部に切り込みがみられる。粘板岩製。16は砂岩製の砥石でB8区の第6層下部より出土した。長さ169.6mm・最大幅118mm・最大厚92mmを測る。両端部以外は全て砥面としているが，各使用面共カーブし中細になっている。

石錘　17は滑石に近い片岩製の石錘破片である。中央部に径6mmの孔を穿ち，孔の両端から上部に溝を刻んでおり，溝と孔を通した紐を上端部で緊縛するタイプの石錘で本来は釣錘形になるものであろう。現存長72.8mm・幅49mm・厚さ36mm・重量214gを測る。B7区第6層下部出土。弥生時代後期～古墳時代にみられる種類である。

不明石器　18は，II－2区第3層出土の滑石製品である。一端は削り込みによってくびれているがその先を欠失する。また片面で長径20mm，短径16mm，深さ5mm程度の不整形な凹みがみられる。側面にはやや風化した面が残っており，石鍋の転用かと思われる。現存長68.5mm，幅35mm，厚さ8mm，重量38gを測る。



第 48 図　II区出土石器実測図 3 (1/4)

(4)　土製品（図版67，第47図）

紡錘車　3点が出土しており，19はC 5 区，20と図示していない資料はC 7 区の 7 層からの出土である。

19は，直径5.8cmで一方の面が凸レンズ状，一方の面が中央につまみ状の突起を有した形状で，最大厚2.8cmを測り，孔径は 4 mmで，レンズ状の面に対してやや傾いた方向に穿たれている。

20は，直径3.75cm厚さ1.3cmを測る。片面は凸レンズ状になるが，反対側の面では孔の付近でやや盛り上る。孔径は 5 mm。

あと1点（図版67）は，土器片再利用のもので，外周は不整形。長径4.4cm，短径3.9cm，孔径3mmを測る。素材となった土器片は器壁3～4mmで内外面ともナデ仕上げされている。

(5) 木 製 品

この遺跡から出土した遺物のうち，殊に目立った存在となっているのは木製品であり，後述する土壙内出土の木製品（下駄，瓢容器）以外のすべてが大溝より自然木，土器片と共に出土した。これらの木製品には各種多様な用具が含まれ，用途，機能の不明確な資料も多い。

大溝には第5層下部，第6層上部，第6層下部，第7層と一応区分した堆積土があり出土土器は縄文時代晩期・弥生時代後期・古墳時代以降に属し，大半を占める弥生時代後期の土器が第6層に含まれ第5層下部ではそれ以降の時期の遺物と混在している。木製品の出土層位は第6層を中心として，第5層下部，第7層にもみられる。このような状況で木製品自体での時期的な区分を行うことは困難であり，あえて弥生時代・古墳時代以降といった区分はここでは行わない。但し第5層下部で1点出土した木簡については現在までの同種遺物出土例からみて古墳時代以降に所属する資料であると考えている。

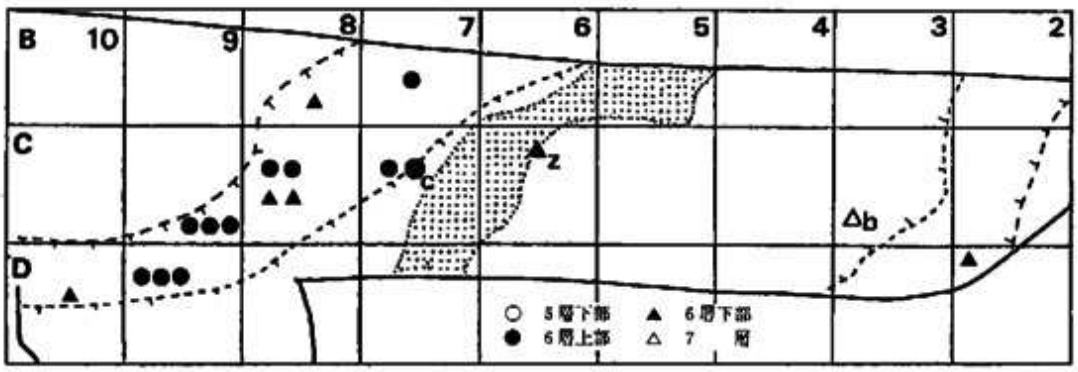
以下，農具・漁具・脱穀等の調整用具・工具・調理用具・紡織具・その他の生活用具類・特殊な用具・建築部材・矢板・杭の類・その他の部材の順に従って概述をおこなう。なおこれらの分類では民具にみられる形態から用途を推定する方法もとったが，道具の一部品として残される資料を推定するのも容易ではなく，部品の形状による分類を行うに留まった資料も多い。

なお各木製品に付した番号は整理作業のために記番した番号のままであり，分類による再編成は，時間的制約から成しえなかった。御涼承願いたい。

(1) 農具（図版68～72，第49～63図）

農具には，平鍬・二叉鍬・三叉鍬・鋤・ふぐし状木製品・田下駄等を含める。

平鍬（図版68，第49～52図，表2）17点出土し，全体の形状を知り得る資料は少ない。

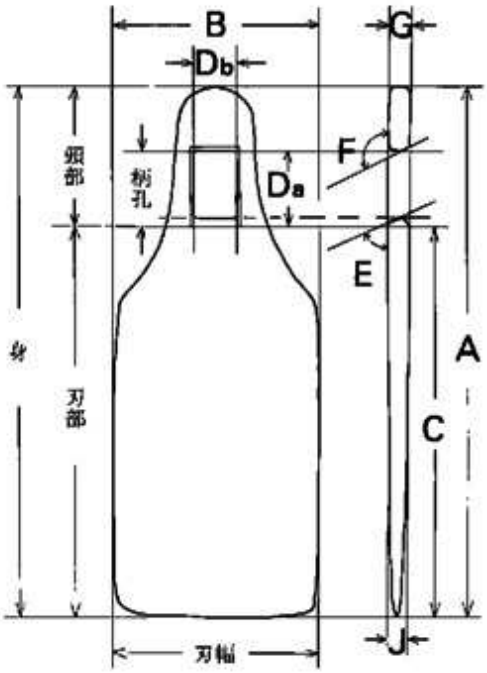


bはB類　CはC類　Zは未製品　それ以外はA類

第49図　II区出土平鍬の地区別分布

平鍬の計測区分は第50図に示し，それによる計測値は表2にまとめた。また出土状況での分布は第49図に示す。このうち全体に身を薄く仕上げ突起を有さないタイプ（A類）が大半を占め，他に刃幅の狭いいわゆる狭鍬と称すべき資料（B類）と柄孔付近に突起を有すタイプの平鍬（C類）の各1点がある。柄の装着された例はない。

A類では40・98を図示するが，40は頭部から基部にかけて狭く，歯の部分で広くなり，幅20.1cmを測る。全長43.3cmのうち，刃部の長さ31.7cmを占める。柄孔は方形で，着柄された角度60°が考えられる。98は，40に比して，スマートさを欠き頭頂から刃部にかけて直線的に広がり，柄孔の下端と歯の肩が一直線になる。全長34.9cmで刃部長24.1cm，刃部幅15.1cmを測る。

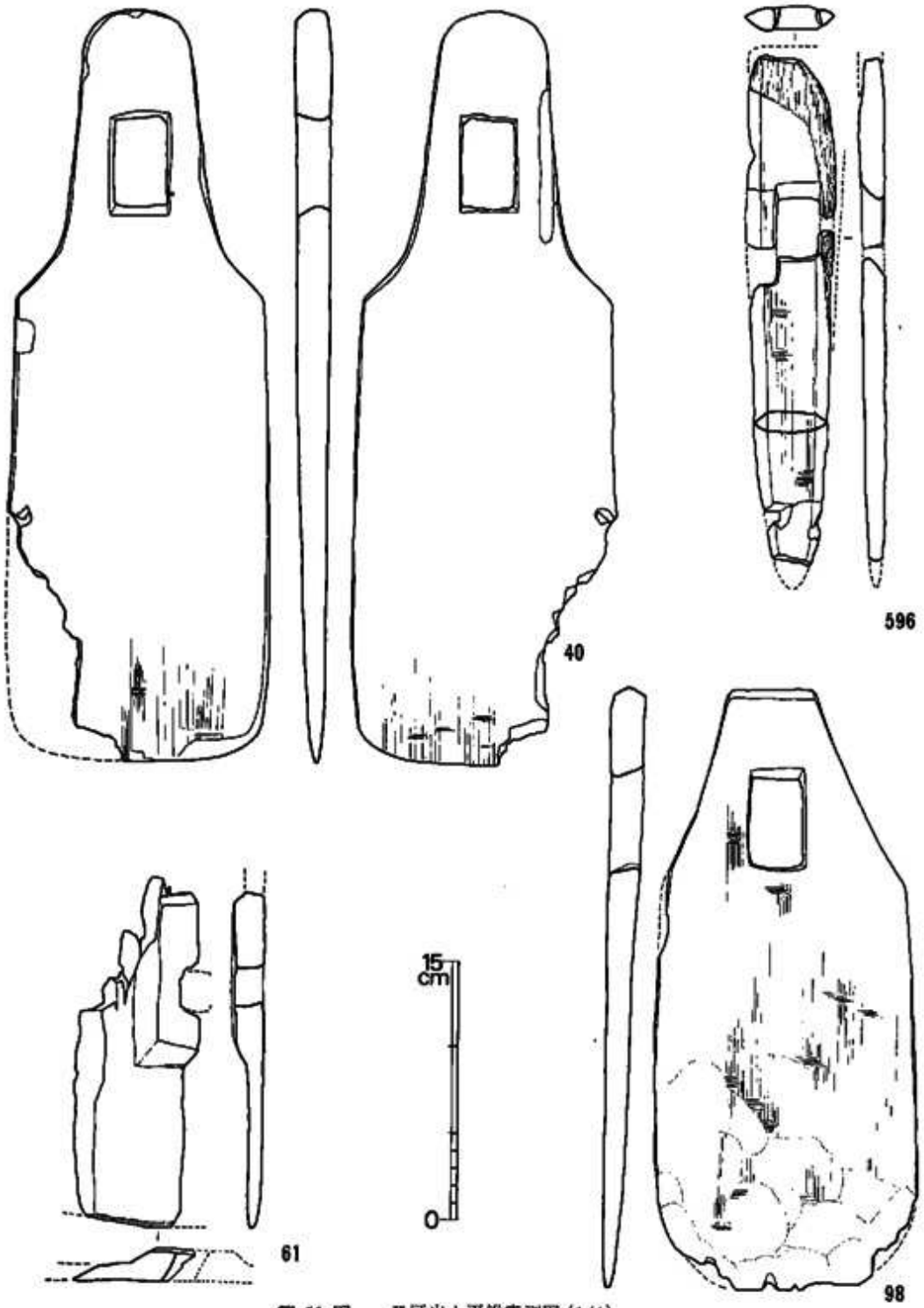


第 50 図　平鍬の計測区分

表 2　平鍬計測表

（単位cm　度）

No.	地区	層	A	B	C	D	E	F	G	J	残存状況	備考
40	D 9	6（上）	43.3	20.1）	31.7	6.4×3.5	60°	92°	2.1	1.5	ほぼ完形	A 類
61	C 7	6	(20.2)	(7.4)	(12.7)	3.0×－	(78°)	(115°)	1.9	0.9	半　欠	C 類
64	B 7	6	(19.9)	(6.5)	(16.9)	－	－	－	1.3	1.0	〃	A 類
98	C 7	6	34.9	15.1	24.1	5.6×3.3	73°	116°	2.0	1.4	完　形	〃
178	D 2	6（下）	(17.4)	(13.2)	－	－	－	－	1.3	－	破　片	〃
246	C 9	6（上）	(29.7)	(14.6)	(18.1)	6.7×3.3	－	－	1.6	1.3	完　形	〃
247	C 9	6（上）	(29.2)	(6.9)	(24.6)	－	－	－	0.9	0.8	刃部破片	〃
384	D 9	6（上）	(19.5)	(5.9)	(15.1)	－	－	－	1.5	1.2	〃	〃
386	D10	6（下）	(12.3)	(8.3)	－	－	－	－	2.5	－	〃	〃
487	C 8	6（上）	－	－	－	－	－	－	1.1	－	破　片	〃
499	C 6	6（下）	50.5	19.7	－	－	－	－	4.5	－		未製品
534	C 8	6（下）	(21.1)	(8.5)	－	－	－	－	1.9	－	破　片	A 類
540	C 8	6（下）	(31.4)	(6.4)	－	－	－	－	1.3	0.6	〃	〃
552	C 8	6（上）	(31.2)	(5.9)	(20.0)	(6.8)×－	－	－	1.5	1.2	〃	〃
596	C 3	7	28.4	4.4	16.9)	(3.4)×2.4	46°	139°	1.5	1.1	ほぼ完形	B 類
637	C 9	6（上）	(13.7)	(7.2)	－	－	－	－	1.5	－	破　片	A 類
717	D 9	6（上）	(15.0)	－	－	－	－	－	0.8	－	〃	〃
771	B 8	6（下）	36.1	16.8	27.0	5.1×3.4	(57°)	(99°)	1.8	0.7	ほぼ完形	〃



第 51 図　II区出土平鍬実測図 (1/4)

B類としては 596があり，全長28.4cmに対して最大幅 4.4cm，刃幅 4.1cmと狭長な形状で，頭部での厚み 1.5cmを測る。柄孔は方形で着柄角度はA類に比し鋭角な46°を考えている。

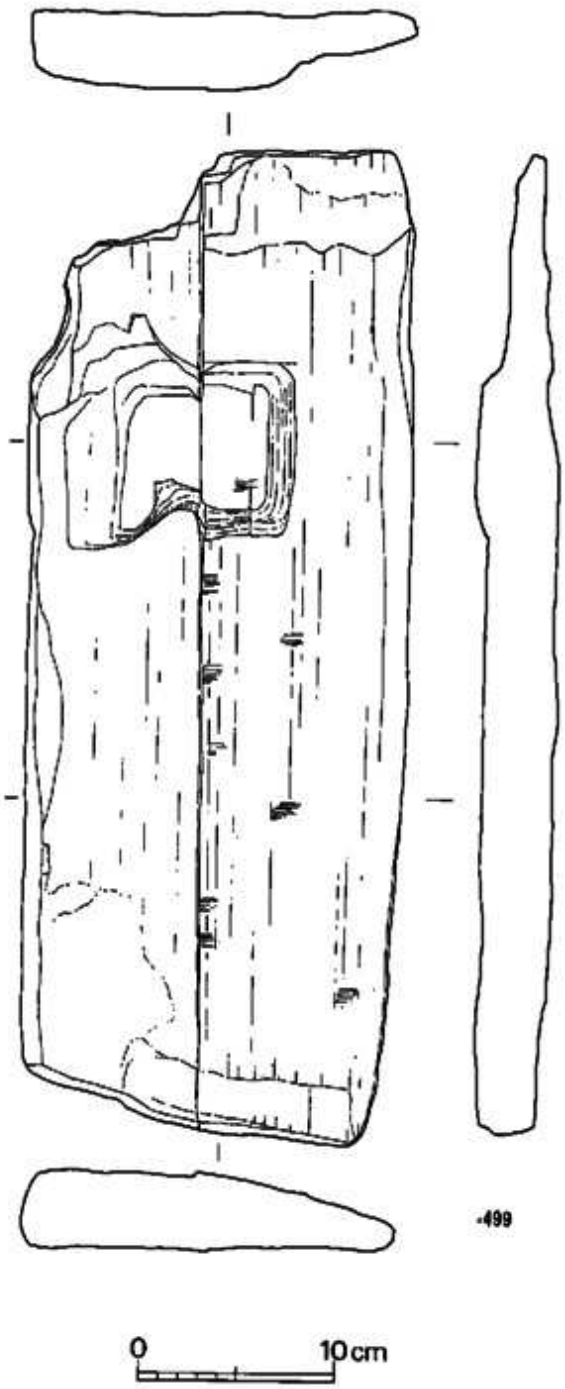
C類は61資料をあてているが，全体の形状は明らかでなく，刃縁と突起部の構造を知る程度に留まる。約1cm厚さで方形になる突起部に一辺3cmを測る方形の柄孔が穿たれているが，長軸方向で刃縁側に78°の角度を有すると共に側面方向に83°の角度を有しており，形態的に似るとはいえ疑問の残る資料である。なお樹種も他の鍬類に共通してみられるカシ類と異なり，マンサクに似た材を用いている。

なお 499はカシ材の加工中途資料である。全長50.5cm，最大幅19.7cmの板状をなし，中央よりやや長軸方向で片寄った位置に不整方形の突起を有す。厚みは突起部で 4.2cm，その他の部分で1.5～3.8cmを測る。材がカシであることと形状から鍬類の未製品と考えているが，突起部の長さが短かく直ちにC類平鍬の素材とする訳にはいかない。

平鍬類では 246を樹種同定し，ツクバネガシという結果を得ている。

二叉鍬（図版68・69，第53～55図，表3）

19点出土しており，地区別の分布は第55図に示す。二叉鍬は身の形態が平鍬A類に似ており，身が薄く，突起を有さず，柄孔は方形である。ただ平鍬A類の中にもみられた如く，スマートな形状のもの



第 52 図　II区出土鍬未製品実測図（1/4）

表 3　二叉鋤計測表

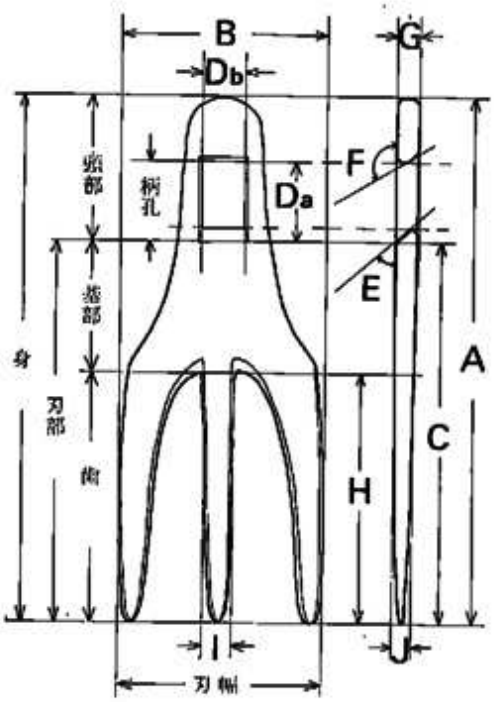
（単位 cm・度）

No.	地区	層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況
92	C 7	6	49.8	15.8	35.4	6.9×−	31°	(116°)	2.0	26.1	4.6	1.1	完形
93	C 8	6(下)	(23.6)	(10.6)	−	−	−	−	1.3	−	5.2	1.1	半欠
96	B 7	6	(42.2)	12.9	(31.2)	5.8×−	46°	95°	1.9	(22.3)	4.4	1.0	刃部欠
134	B 7	6	33.0	(5.0)	21.7	6.0×−	48°	(12.3°)	2.0	12.2	2.8	1.4	破片
165	B 6	7	(42.2)	(8.5)	(35.4)	−	−	−	2.2	(21.5)	7.4	1.2	破片
177	B 2	6(下)	(29.3)	(6.4)	(28.5)	−	57°	−	1.7	22.7	5.6	0.9	刃部破片
257	D 8	6(上)	(33.4)	−	−	−	−	−	−	−	4.5	1.4	刃部破片
259	C 6	5(下)	43.4	(13.6)	31.0	6.4×3.8	40°	(132°)	1.8	21.5	4.8	0.9	刃部欠
260	D 6	6	42.1	(6.9)	30.9	5.3×−	56°	125°	2.1	24.0	5.1	1.0	半欠
262	B 5	6	(39.5)	(7.1)	(27.6)	6.4×−	44°	127°	1.9	(16.7)	(2.8)	1.5	半欠
296	D 8	6(上)	(30.0)	(6.9)	−	−	−	−	1.1	(13.4)	4.4	0.7	刃部破片
366	C 4	6(上)	(49.4	(6.3)	(48.3)	−	−	−	1.7	(38.6)	3.2	1.3	刃部破片
438	D 8	6(下)	(27.9)	(5.9)	−	−	−	−	1.8	−	−	−	基部破片
449	D 8	6(上)	(20.9)	(2.2)	(9.5)	5.9×−	−	−	1.5	−	−	−	基部破片
463	D 9	6(上)	(24.9)	(6.3)	−	−	−	−	1.2	13.1	5.3	0.9	刃部破片
483	C 8	6(上)	(49.6)	(6.6)	(29.4)	4.9×−	−	−	1.2	−	5.9	0.8	破片
639	C 8	6(上)	(7.5)	−	−	−	−	−	−	−	4.2	1.1	刃部破片
709	D 9	6(上)	(15.2)	(5.8)	−	−	−	−	1.0	−	5.5	0.4	破片
721	D 9	6(上)	(28.9)	(6.8)	(17.0)	7.2×−	−	−	1.7	−	−	−	破片

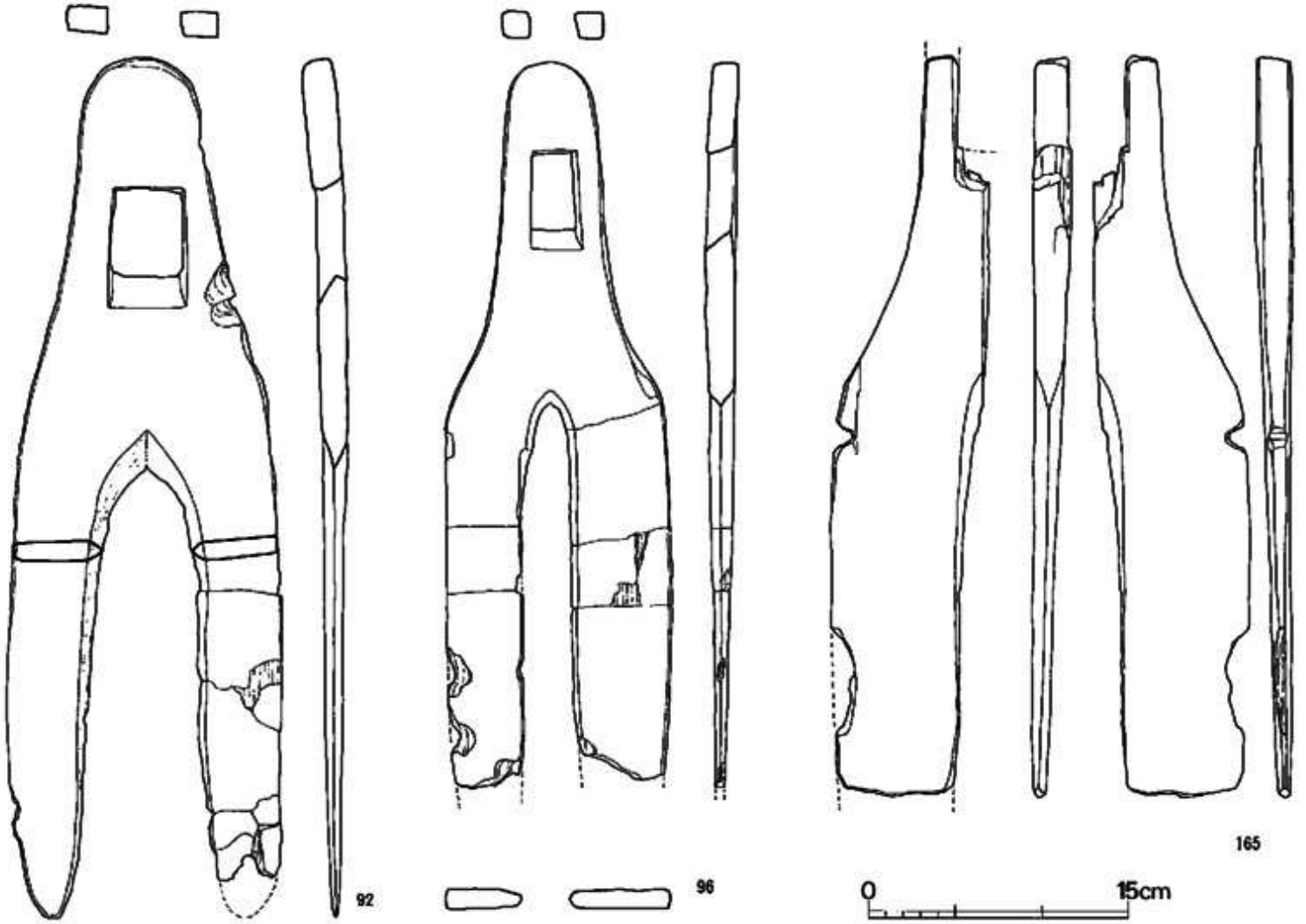
と，そうでない形状のものがある。

92はほぼ完形の資料で，長さ49.8cm，最大幅15.8cm。半円形を呈す頭頂部から緩い曲線を描きながら広がり刃部・歯にいたる。頭頂部から7.5cmの位置に柄孔が長さ 6.9cm幅 4.5cmの方形に穿たれ傾斜角度31° である。柄孔の下端から 9.3cmの位置で刃部が分かれ，歯をなすが，歯は薄く幅広で，歯のほぼ中央で幅 4.6cm，厚み 1.1cm。歯の内側縁は断面三角形で，基部の内側縁も同様の断面となる。

96は刃部先端を欠失し現存長42.2cm，最大幅12.9cm。頭頂部は削り込みによって半円形に仕上げられ，頭部は平行した外側縁のまま基部に至り，基部で反るようにして広がる形をなす。頭頂部から柄孔の間は 5.2cmで，柄孔は 5.8cmの長辺と 3cmの短辺の方形で傾斜角度は46°。また柄孔から歯になる部分との間は 8.9cmを測



第 53 図　又鋤類の計測区分

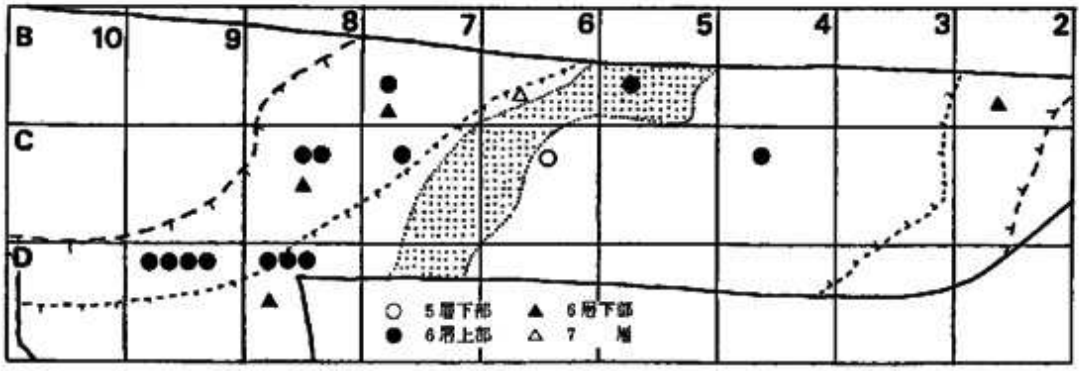


第 54 図　II区出土二叉鉄尖測図 (1/4)

り，92に比して全体に小さい。歯の幅は一方で 4.4cm，もう一方で 5.6cmであるが，いずれも厚さ1cmと薄く内側縁の三角形断面は摩耗の為か丸味をもつ。歯の長さは22.3cmのみ残っているが，現存する全長の52.84%を占め，欠失した部分を考慮すると更に大きな数値になる。92の52.41%に比して大で，96は92よりもスマートな形状を呈している。

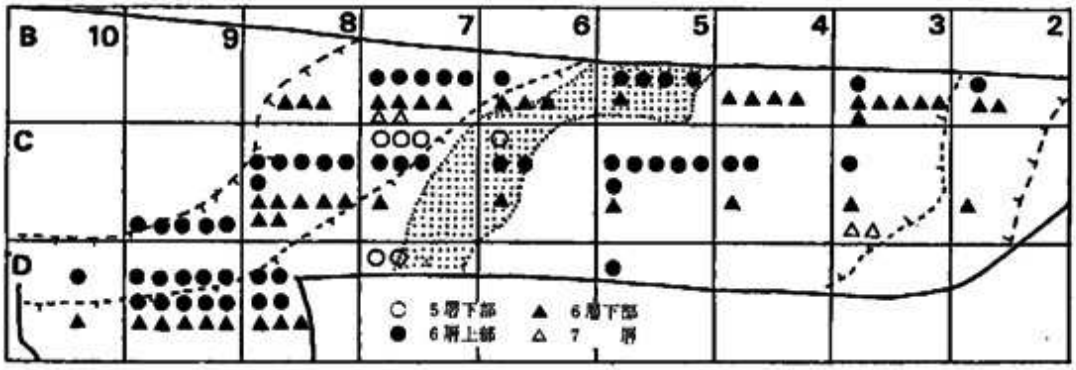
165は，半欠資料で更に頭頂部，刃部先端を欠失するが，42.2cmの現存長を有し，形状は96に似る。歯の幅 7.4cmと広く厚さ 1.2cm，外側縁の上部にV字形の抉り込みがある。

なお図版69に示す 260は外側縁が基部より更に下位で広がる例で，366はくびれ方が大きく「いかり肩」になる例である。二叉鏃のうち165を樹種同定しシラカシという結果を得ているが他の資料も同様の材で，全てカシ材と思われる。



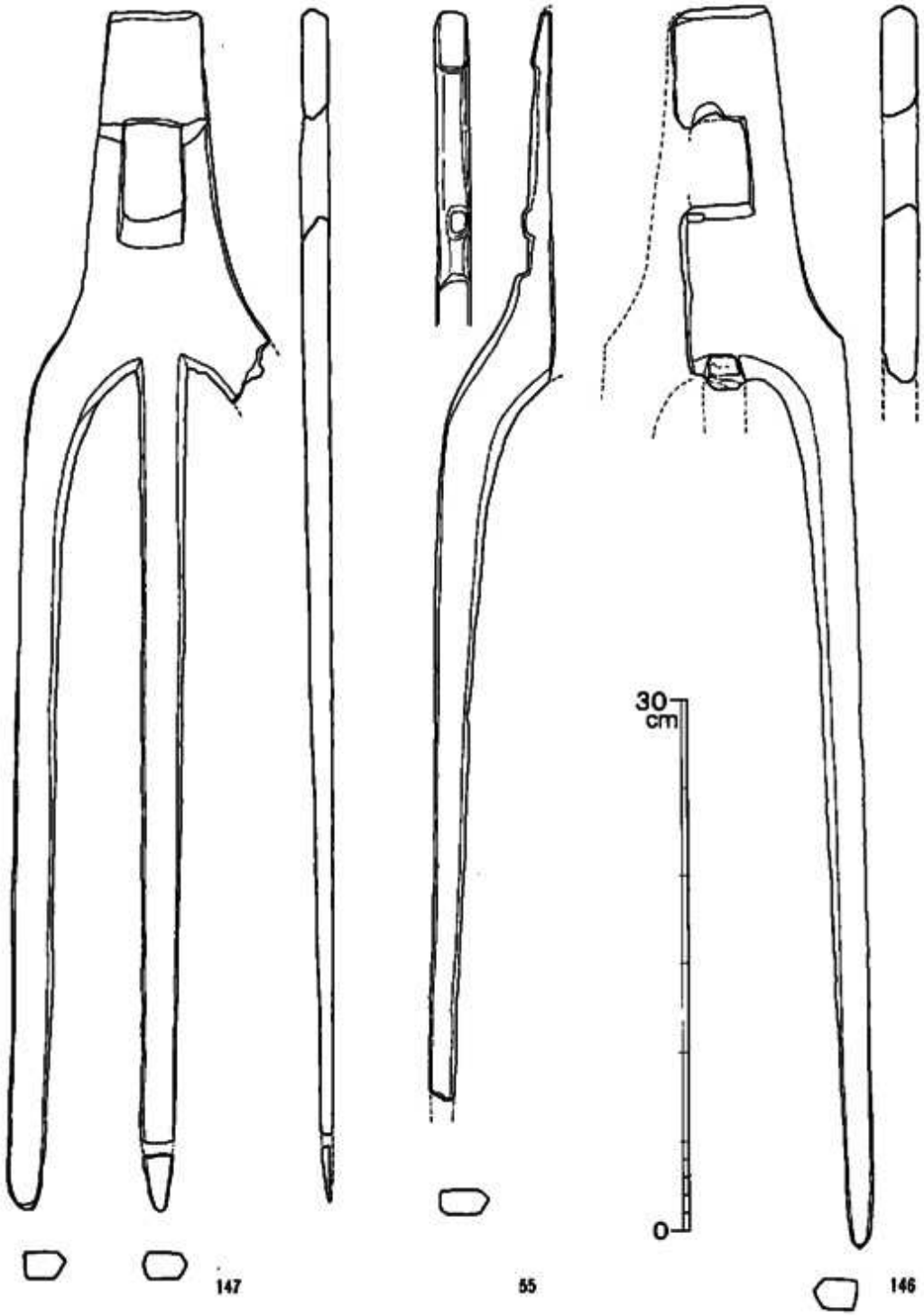
第 55 図　II区出土二叉鏃の地区分布

三叉鏃　（図版69～71，第56～59図，表4）　109点出土し，地区・層位別の出土頻度を示したのが第56図の地区別分布である。これらの資料のうち完全な形で残っているものはなく，全体の形状を知りうる資料も少ない。破片として出土した例が多く相互に接合しうる可能性もあ



この他に出土地地点不詳の資料1点あり

第 56 図　II区出土三叉鏃の地区別分布



第 57 図　II区出土三叉鏃実測図 1 (1/4)

り，109点がそのまま絶対量とはできない。三叉鍬の計測区分は第53図に示す通りで，これによる計測値は表4・5にまとめている。また11点の実測図を図示し，図版に14点図示した。

147は，全長67.4cm，現存幅14.3cmで，復原幅17cm程度。前面，後面からわずかに削り込んで断面に丸味をもちながらも平面形で平坦になる頭頂部から反り返るようにして刃部が広がり刃部は先端に向けて更に幅広になっている。頭頂部から6cmの位置に長辺 6.8cm短辺 3.7cmの柄孔が40°傾いて穿たれる。歯の長さは47.4cmで，幅 2.2～ 2.5cm，厚さ 1.2～ 1.6cmを測り，二叉鍬の歯と比べ細くやや厚い。（これは他の三叉鍬をみても同様である。）外側の歯は基本的に二叉鍬同様に内側縁断面が三角形で外側縁断面は直線的である。これに対し中央の歯は断面形が平坦な六角形になる。歯の長さは全長の70.33％を占める。

146は，この遺跡出土の三叉鍬で一番長い資料であり，全長69.8cmを測るが2本の歯を欠失する。147と似るが肩の張った形を呈し，柄孔は小さく，柄孔の角度63°。歯は幅2.2cm厚さ1.4cmで内側縁の断面は三角形を呈す。全長に対する歯の長さが70.49％である。

55も，先端部を欠失するが現存長61.6cmを測る長い三叉鍬の破片である。現存値での歯の占める割合は65.75％。歯の形状は前述の例と同様だが，頭部から基部にかけての外側縁に長さ 8.4cmと，2.2cmの2ケ所の削り込みが施され，頭頂部側の深さ3mm程度の削り込みと一方の4～5mm深さの削り込みを込れることによって両者の間に長さ 1.8cm幅 1.3cmの突起を形成させている。

105は，歯の部分の外側縁に肩の折返しが位置する例で全長52.4cmを測り，このうち歯の占める割合が63.17％。

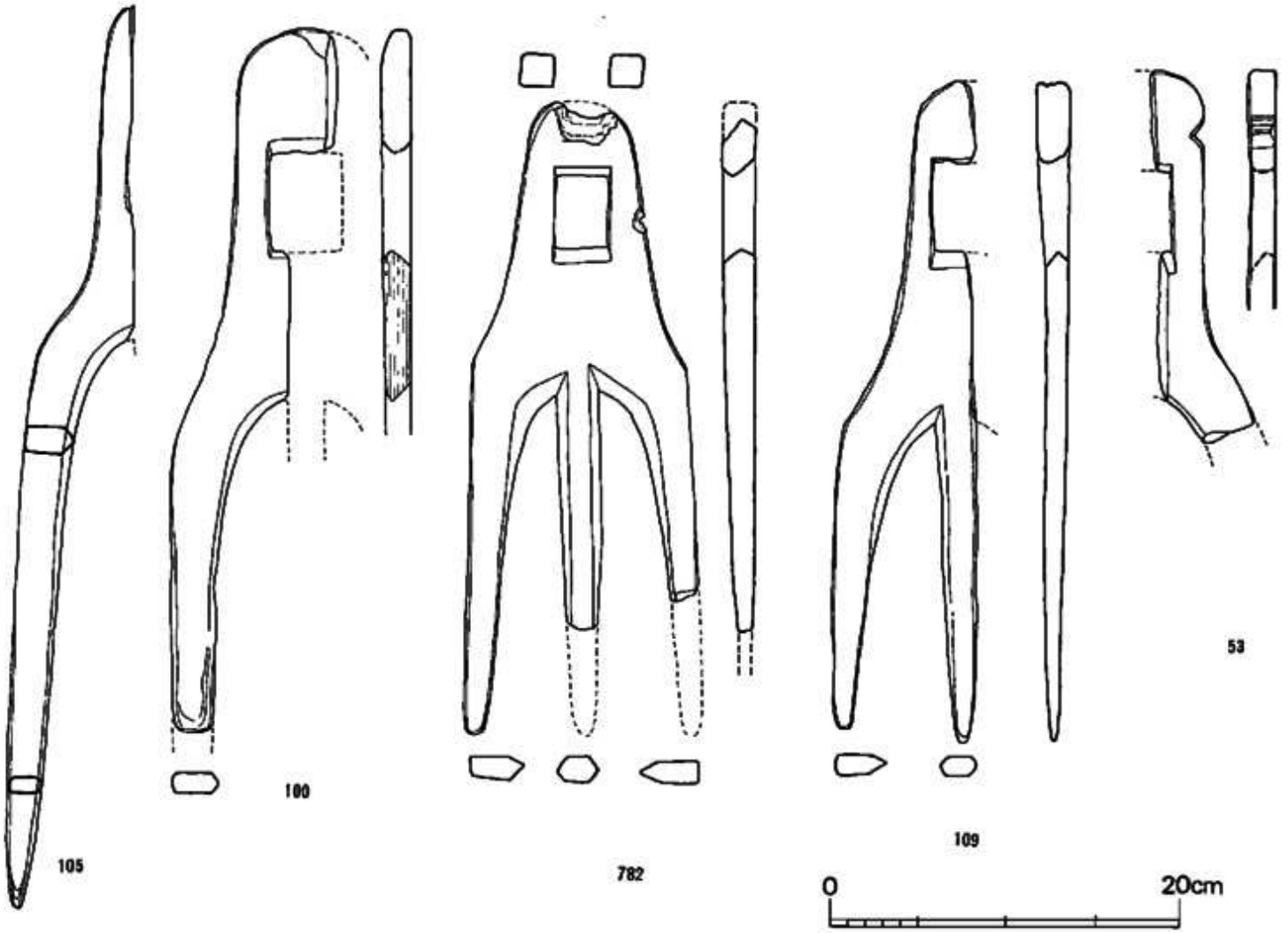
100は，先端部を欠失している為全長が不明。長辺7cmの方形の柄孔が46°の傾斜で穿たれている。

12は，歯が全長の59.79％を占め，外側縁と内側縁がほぼ並行するため肩が歯の外側縁の上部に位置する。柄孔の穿たれる角度は48°。

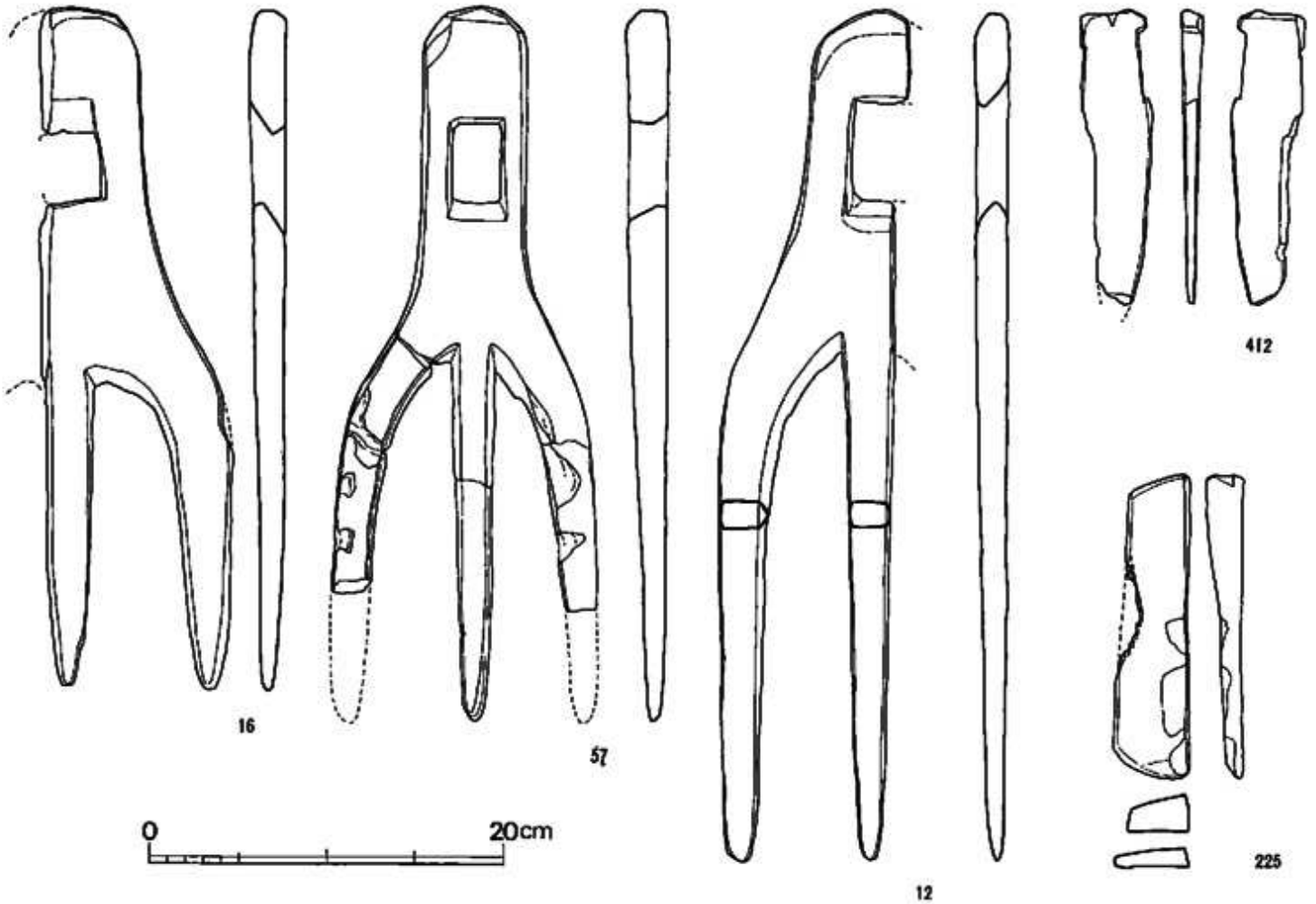
57も，歯の外側縁上部に肩が位置する例だが削り痕の明瞭な頭部から基部の下位まで外側縁は広がらずに幅6cmで長く並行し，基部と歯の境付近に至って急に膨み，幅13.7cmとなる。全長40.1cmで，歯は49.88％の20.0cm。柄の角度は61°と推定される。

782は，2本の歯先を欠失するが完形に近い資料で全長36.6cmを測る。幅は現存値13.5cmあり14cm程度であろう。半円形を呈す頭頂部からそのまま広がりながら基部の下位で折り返す形をなす。一方厚みでは頭頂部で 1.9cm，歯の基部で 1.6cm，歯の半程で 1.0cmを測り，直線的に薄くなる。余り使用されなかったのか磨耗が少なく稜線は明瞭に残る。歯の全長に対する割合は53.01％と約½に相当する。

109は，第5層下部から出土した三叉鍬である。全長38.2cmに対する歯の長さ18.2cmは47.64％で½を割り，柄の装着角度は40°を示している。



第 58 図　II区出土三叉鏃実測図 2 (1/4)



第 59 図　II区出土三叉鍬実測図 3 (1/4)

表 4　三叉鏃計測表(1)

（単位cm，度）

No.	地区	層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況
9	C 8	6(上)	(13.9)	—	—	—	—	—	—	—	1.8	1.3	刃部刃片
10	B 7	7	(41.0)	(9.5)	(30.1)	—	43°	—	2.3	(19.3)	2.2	1.3	破　片
11	C 8	6(下)	(13.1)	—	—	—	—	—	—	—	1.8	1.0	刃部破片
12	C 6	6(上)	48.0	(10.7)	36.8	7.4× —	(48°)	137°	2.0	28.7	2.2	1.3	破　片
13	B 7	6(下)	—	—	—	6.2× —	35°	102°	1.7	—	2.2	1.2	基部破片
14	—	—	(37.1)	(9.9)	35.3	—	(46°)	—	—	27.6	1.9	1.2	刃部破片
15	B 8	6(下)	(34.5)	(4.3)	31.8	—	40°	—	1.7	23.3	2.3	1.2	刃部破片
16	C 5	6	37.7	(10.8)	27.4	6.1× —	34°	146°	2.0	17.1	2.6	1.1	破　片
37	D 8	6(上)	(33.1)	(5.8)	—	—	—	—	1.7	24.4	2.6	1.4	刃部破片
51	B 8	6(下)	32.5	(6.7)	(21.6)	6.5× —	40°	124°	1.8	12.4	1.5	1.2	刃部破片
53	B 7	6	(53.2)	(6.5)	46.4	5.3× —	(38°)	—	1.6	38.2	2.0	1.3	刃部破片
54	C 8	6(中)	(37.3)	—	(27.5)	—	—	—	2.0	(18.6)	2.2	1.4	破　片
55	D 5	6	61.6	—	—	—	—	—	1.8	40.5	1.7	1.0	刃部破片
56	B 7	6(下)	(35.9)	(14.0)	(29.1)	—×3.4	42°	—	1.8	(19.4)	2.8	1.0	破　片
57	B 7	6	40.1	13.7	28.2)	5.5×3.1	61°	126°	2.3	20.0	2.1	1.3	ほぼ完形
83	B 3	6(下)	(40.6)	(9.7)	(34.6)	—	34°	—	1.6	(28.3)	1.9	1.2	刃部破片
84	B 3	6(下)	(20.9)	(7.3)	(17.0)	—×3.4	(50°)	—	1.7	(10.3)	2.2	1.0	破　片
89	D 9	6(上)	(57.7)	(6.5)	—	—	—	—	1.8	(38.4)	2.0	1.3	刃部破片
97	C 8	6(下)	53.3	—	—	—	—	121°	1.8	31.8	2.0	1.2	破　片
99	C 7	5(下)	(38.8)	(10.3)	(28.3)	6.5×3.3	34°	150°	1.5	(19.5)	1.5	1.1	破　片
100	C 5	6	(40.4)	(9.7)	(26.9)	7.0× —	46°	129°	1.8	18.3	2.2	1.2	破　片
101	BC 3・4	6(下)	39.3	(10.4)	23.2	6.5× —	(38°)	(114°)	1.9	19.5	2.3	1.2	破　片
102	B 5	6	(32.5)	—	—	—	—	136°	1.9	15.5	2.3	1.5	基部破片
104	C 5	6(上)	52.5	(6.1)	—	—	—	—	1.8	33.1	2.1	1.4	破　片
105	C 7	6	52.4	—	—	—	—	—	1.9	33.1	2.4	1.3	破　片
106	C 7	6	46.9	(12.3)	33.9	6.6×3.6	63°	(134°)	1.5	27.3	2.4	1.3	刃部欠
108	C 7	6	(29.9)	—	(29.1)	—	(41°)	—	1.2	(20.2)	2.1	1.1	刃部破片
109	D 7	5(下)	38.2	(8.5)	27.4	6.5× —	40°	113°	1.8	18.2	2.1	0.9	破　片
110	C 8	6(上)	(34.0)	(7.7)	32.8	—	29°	—	1.3	24.7	1.8	1.0	刃部破片
129	B 6	6(下)	—	(4.1)	—	—	—	—	1.7	—	—	—	基部破片
130	D10	6(下)	(37.5)	(16.0)	(29.1)	—×3.3	36°	143°	1.5	(20.2)	2.1	0.9	刃部欠
131	B 6	6(上)	43.0	(7.3)	31.3	—	47°	—	1.8	21.9	2.2	1.2	破　片
135	B 7	6(下)	(9.9)	—	—	—	—	—	—	—	2.1	1.3	刃部破片
137	D 9	6(上)	55.2	—	—	—	—	—	1.9	36.5	2.9	1.3	破　片
146	D 8	6(上)	69.8	(8.8)	57.8	5.7× —	63°	(117°)	2.1	49.2	2.2	1.4	半　欠
147	D 9	6(上)	67.4	(14.3)	54.5	6.8×3.7	40°	140°	1.7	47.4	2.2	1.2	一部欠
150	D 8	6(下)	(15.8)	(4.8)	—	—	—	—	1.3	—	2.0	0.9	破　片
154	C 9	6	44.1	(8.7)	33.9	6.1× —	44°	(120°)	1.7	23.8	2.1	1.2	破　片
156	C 9	6(上)	(30.0)	(8.0)	(21.1)	—	59°	—	1.8	(13.6)	2.1	1.2	破　片
173	D 8	6(下)	(31.7)	—	—	—	—	—	—	—	1.9	1.2	刃部破片
174	D 9	6(上)	(52.3)	—	(40.7)	4.5× —	45°	(123°)	2.1	33.2	2.0	1.3	破　片
188	B 2	6	(42.9)	(7.2)	42.2	—	—	—	1.4	34.1	1.7	1.3	刃部破片
203	D 9	6(上)	(26.9)	—	—	—	—	—	1.6	19.7	1.9	1.2	刃部破片

№	地区	層	A.	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況
205	D 8	6(上)	(22.1)	(5.9)	(21.2)	—	51°	—	1.2	(16.2)	1.8	1.1	刃部破片
219	C 3	6	(40.0)	—	—	—	—	—	1.9	22.2	2.0	1.2	破　片片
248	C 9	6(上)	(37.0)	(8.6)	(26.0)	—	47°	—	1.9	18.4	1.8	1.2	破　片
290	D 9	6(上)	(28.5)	(5.0)	—	—	—	—	1.0	18.7	2.3	0.7	破　片
295	D 8	6(下)	(19.7)	(6.6)	(18.9)	—	49°	—	1.7	—	2.3	0.9	破　片
311	C 8	6(中)	(10.3)	(8.8)	—	—	—	—	1.2	—	—	—	破　片
323	C 8	6(下)	(6.9)	(6.3)	—	—	—	—	1.6	—	—	—	基部破片
329	B 5	6	(17.5)	—	—	—	—	—	—	—	2.3	1.5	破　片
347	C 5	6(下)	(17.7)	(5.3)	—	—	—	—	2.1	12.4	2.0	1.7	破　片
363	C 3	7	(22.2)	—	—	—	—	—	—	18.9	1.5	1.1	刃部破片
371	B 4	6(下)	(28.7)	(6.8)	—	—	—	—	1.8	20.5	2.5	1.0	破　片
377	D 9	6(上)	(40.4)	(9.0)	(9.0)	—×3.1	—	(133°)	1.6	(20.3)	2.4	1.2	破　片
379	D 9	6	(31.8)	(11.6)	(20.8)	6.0×—	(43°)	140°	1.6	(13.3)	1.5	0.9	破　片
410	D 9	6(上)	(53.6)	—	—	—	—	—	1.8	35.1	1.9	1.5	破　片
413	B 3	6(下)	(15.5)	(5.4)	—	—	—	—	1.5	(12.8)	1.8	1.2	破　片
416	B 3	6(下)	(23.1)	(3.2)	—	—	—	—	—	18.1	1.5	1.0	破　片
417	B 3	6(下)	(32.8)	(4.8)	—	—	—	—	1.6	19.8	1.7	1.2	破　片
433	D 9	6(下)	(48.6)	(9.8)	—	—	—	122°	1.8	(28.9)	2.5	1.2	破　片
434	D 9	6(下)	(36.3)	—	—	—	—	—	—	—	2.1	1.3	刃部破片
454	B 4	6(下)	(35.5)	—	—	—	—	—	1.4	(22.5)	1.4	1.4	破　片
457	B 3	6(下)	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	1.1	破　片
477	C 8	6(上)	(22.2)	—	—	—	—	—	1.6	—	—	—	基部破片
478	C 8	6(上)	(16.5)	—	—	—	—	—	1.5	—	1.8	1.2	破　片
490	C 8	6(下)	(26.9)	—	—	—	—	—	1.8	—	1.9	1.4	刃部破片
492	C 6	6(下)	(40.6)	—	—	—	—	137°	1.6	(20.2)	1.8	1.3	破　片
493	C 8	6(下)	(22.7)	—	—	—	—	—	—	—	2.3	0.8	破　片
497	B 8	6(下)	45.3	—	(34.3)	7.3×—	—	139°	1.6	27.0	2.0	1.0	破　片
503	C 7	5(下)	(26.3)	(8.2)	(16.1)	5.6×(3.6)	(69°)	106°	1.6	—	—	—	基部破片
516	D10	6(上)	(56.9)	—	—	—	—	—	—	—	1.9	1.3	刃部破片
519	B 7	6	(11.6)	(5.0)	—	—	—	—	1.3	—	—	—	破　片
523	D 9	6(下)	(25.0)	—	—	—	—	—	1.8	(10.8)	1.4	1.3	破　片
526	C 6	6直上	(15.7)	—	—	—	—	—	—	—	2.0	1.0	破　片
531	D 5	5(下)	(22.6)	(6.1)	(13.2)	5.4×—	(28°)	(153°)	1.4	(14.1)	—	—	基部破片
538	B 7	6(下)	(27.7)	—	—	—	—	134°	1.6	(5.9)	—	—	基部破片
550	B 7	6	(15.5)	—	—	—	—	—	—	—	1.6	1.0	破　片
556	B 7	6	(25.6)	—	—	—	—	—	—	—	2.2	1.0	刃部破片
557	C 5	6	(39.3)	(5.4)	(37.5)	—	(43°)	—	2.0	31.2	2.1	1.2	刃部破片
560	C 5	6	(36.1)	—	—	—	—	—	—	—	2.0	1.3	刃部破片
561	B 5	6	(22.3)	(6.0)	—	—	—	—	1.7	—	2.0	1.2	破　片
564	C 4	6	(24.0)	(4.9)	(22.7)	—	35°	—	1.7	(16.2)	2.4	1.3	刃部破片
565	C 4	6	(20.1)	(3.0)	—	—	—	—	—	(17.7)	1.7	1.2	破　片
569	D 9	6	(21.0)	—	—	—	—	—	1.3	20.3	2.8	1.2	破　片

表 5　三叉鏃計測表(2)

（単位 cm・度）

No.	地区	層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況
579	C 7	6(下)	(17.4)	(7.8)	—	—	—	—	2.2	—	—	—	破　片
583	C 6	6(下)	(31.5)	—	—	—	—	—	2.0	—	2.5	1.1	破　片
598	C 5	6	(21.2)	—	—	—	30°	—	1.8	—	2.1	1.6	刃部破片
613	B 7	6(上)	36.0	—	—	—	—	—	1.6	21.3	1.9	1.0	破　片
614	C 8	6(下)	(11.5)	—	—	—	—	—	—	—	2.1	1.3	破　片
615	C 7	5(下)	(12.2)	—	—	—	—	—	0.7	—	—	—	破　片
626	C 3	6(下)	(20.3)	—	—	—	—	—	—	—	2.4	1.3	刃部破片
629	C 3	7	(18.3)	—	—	—	—	—	—	—	3.0	1.6	刃部破片
657	B 2	6(下)	(13.1)	—	—	—	—	—	—	—	3.1	1.0	刃部破片
659	C 8	6(下)	(31.1)	—	—	—	—	—	2.0	—	2.3	1.3	刃部破片
670	D 9	6(下)	(18.8)	—	—	—	—	—	—	—	2.8	1.6	刃部破片
672	B 2	6(上)	(12.7)	(8.4)	—	—	—	—	1.9	—	—	—	基部破片
673	D 9	6(下)	(5.4)	—	—	—	—	—	—	—	2.3	0.7	破　片
674	C 9	6(上)	(10.5)	(5.0)	—	—	—	—	1.3	—	—	—	破　片
681	D 9	6(上)	—	(9.9)	—	—	—	122°	1.8	—	2.3	1.0	破　片
684	C 2	6(下)	(14.1)	—	—	—	—	—	—	—	1.6	0.8	刃部破片
688	B 4	6(下)	(12.8)	—	—	—	—	—	—	—	1.9	1.0	刃部破片
694	B 6	6(下)	(11.8)	(4.8)	—	—	—	—	1.8	(9.4)	2.0	1.7	刃部破片
715	B 4	6(下)	—	—	—	—	—	—	1.9	—	1.9	0.9	破　片
731	D 8	6(上)	(29.2)	—	—	—	—	—	—	—	1.9	1.5	刃部破片
734	B 3	6(上)	(28.0)	8.8	17.9	5.3×—	(46°)	(143°)	0.8	(8.9)	—	—	基部破片
781	B 5	6(下)	(15.6)	(5.7)	—	—	—	—	1.7	(9.7)	—	—	破　片
782	B 7	7	36.6	13.5	27.1	5.3×3.4	54°	137°	1.9	19.4	1.8	1.0	ほぼ完形

16は，第6層出土の資料であるが，全長37.7cm，現存する幅10.8cmを測り，復原幅18cmと広い。歯の長さが17.1cmで，全長の45.36%と短い。柄孔の角度は34°で鋭い。

13は，頭部外側縁の上部で長さ 1.5cm深さ 0.5cmのV字形の抉り込みを有する例である。

三叉鏃のうち，全長の明らかな資料19点をみると32.5cm～69.8cmあり，35cm以下1点，35～40cmに5点，40～45cm・45～50cm・55～55cmに各3点と55～60cmに1点，60～65cm 1点，65cm以上2点が内訳である。最大幅では完全に残る例が少なく13～14cmに2点あるのみで，中央の歯で反転復原した法量でも10点余りしか推測できない。しかし13～14cmを中心としたまとまりと，16cm以上の若干例があると云えよう。柄孔の角度では，36点の可検資料が30～63°に分布し，31°～45°に19点，46～60°に12点が分布し，41～50°には15点が分布する。最大厚は1.5～1.9cm，歯の中央部での厚さは1.0～1.4cmにまとまり，歯の幅は1.8～2.2cmが多い。また，全長に対する刃部の長さ，歯の長さ等は全長に相対して割合が大になる傾向がある。

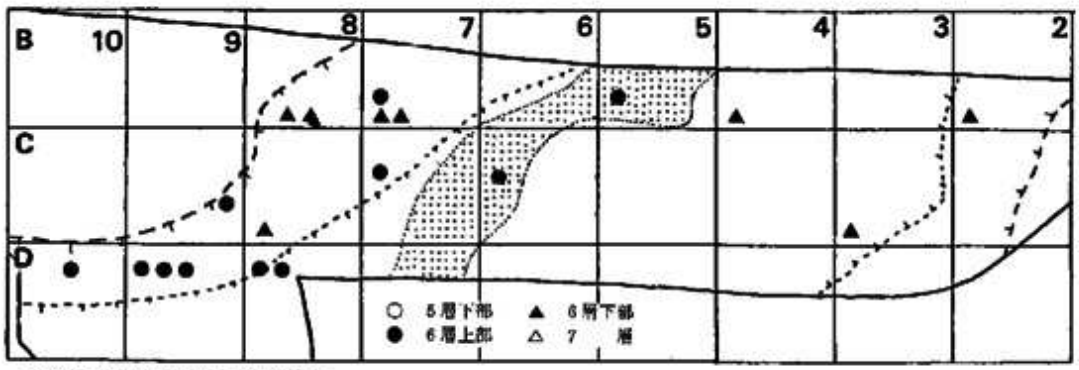
三叉鏃では，106・103，146を樹種同定の試料としたが，それぞれアカガシ属・シラカシ・ハナガカシという結果を得た，全てカシ類に含まれる種類で他の資料もカシ材と考えている。

なお，鏃類の頭部破片などで平鏃・二叉鏃・三叉鏃等のいずれに含まれるか不明の資料が20点あり，これについては第60図の地区別分布と表6に示す通りである。

表 6　不明鏃類計測表

（単位 cm・度）

No.	地区	層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況
38	D 9	6(上)	(18.0)	−	−	−	−	−	−	−	4.6	1.3	破　片
52	B 7	6	(19.1)	(7.4)	(9.8)	5.0×−	57°	111°	1.1	−	−	−	基部破片
58	−	−	(8.6)	(4.1)	−	−	−	−	1.6	−	−	−	基部破片
103	B 5	6	(28.4)	(9.4)	(14.6)	6.0×−	45°	113°	1.5	(5.1)	−	−	基部破片
157	B 8	6(下)	(10.6)	(6.1)	−	−	−	118°	1.4	−	−	−	基部破片
254	C 9	6(上)	−	−	−	−	−	−	0.6	−	−	−	
324	C 8	6(下)	(7.1)	(4.3)	−	−	−	−	0.8	−	−	−	破　片
441	D 9	6(上)	−	−	−	−	−	−	1.4	−	−	−	
452	D 8	6(上)	−	−	−	−	−		1.2	−	−	−	
473	D10	6(上)	(21.5)	(6.3)	−	−	−	(116°)	1.6	−	−	−	
495	B 8	6(下)	(8.6)	−	−	−	−	−	−	−	4.0	1.6	破　片
551	B 7	6(下)	(10.6)	(4.6)	−	−	−	−	1.8	−	−	−	基部破片
655	C 2	6(下)	(5.9)	−	−	−	−	−	−	−	3.3	1.1	破　片
689	B 4	6(下)	(14.1)	(1.8)	−	−	−	−	1.9	−	−	−	破　片
698	B 7	6(下)	(8.2)	−	−	−	−	−	1.5	−	−	−	破　片
713	B 2	6(下)	(5.9)	(3.6)	−	−	−	−	1.2	−	−	−	刃部破片
716	D 9	6(上)	(11.2)	(6.1)	−	−	−	−	1.5	−	−	−	基部破片
723	D 8	6(上)	(9.0)	(5.4)	−	−	−	(135°)	1.3	−	−	−	破　片
741	C 6	6(中)	(10.1)	(6.3)	−	−	−	128°	2.0	−	−	−	基部破片
761	C 7	6(上)	(11.8)	(4.7)	−	−	−	132°	2.0	−	−	−	基部破片



この他に出土地点不詳の資料1点あり

第 60 図　II区出土不明鏃類の地区別分布

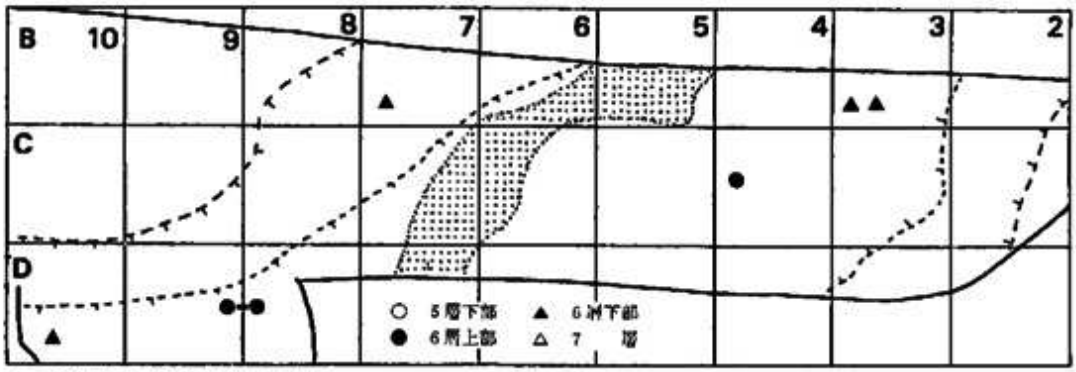
鋤（図版71，第61・62図），鋤の柄・未製品を含めて８点出土し，地区別の分布は第61図に示す。但しＢ３区出土の１点 690は後述するふぐし状木製品として区別するが第62図には含まれている。

133は，Ｂ７区の第６層下部から出土した完形品で，全長73.3cm・厚さ 2.8cm。身の長さ20.6cm・幅13.6cm・厚さ1.5～2.3cm，把手の長さ４cm・幅 6.3cm・厚さ 1.7cmを測る。把手は扁平で逆三角形の底辺にわずかな抉り込みを入れた形状のＶ字形を呈し，削り込みで中央をやや薄く仕上げる。柄は，削り痕がよく残り，把手側，幅 2.6cm，身側の幅 3.4cm。身の上縁は直線的で，側縁もわずかに内傾しながらも直線的だが上縁から３分の２程度の位置で屈折して刃部が窄りＵ字形をなす。刃部では刃縁に沿って約 1.5cmに傷がみとめられる。柄の正中線に対して身はわずかに傾く。その平面形は現在使用されるスコップの形に似るが身に顕著な反りがなく鋤としての用途を考える。

409は，Ｄ10区の第６層下部出土で，把手部と身の半分を失っているが，133と形が似る。現存長67.5cm，厚さの最大値 2.2cm。幅 2.4～ 3.5cm，厚さ 1.9～ 2.2cmの柄は両側縁に削り痕を残す。身の上縁は，柄の下端部と弧を描いて接し，現存値で 8.7cm復原値で13cmの幅を有す。身の長さは18.5cm，厚さ0.8～1.9cmを測る。刃の部分はわずかに残る程度で磨耗を受けており，刃縁の形状が明確ではない。樹種はツクバネガシ。

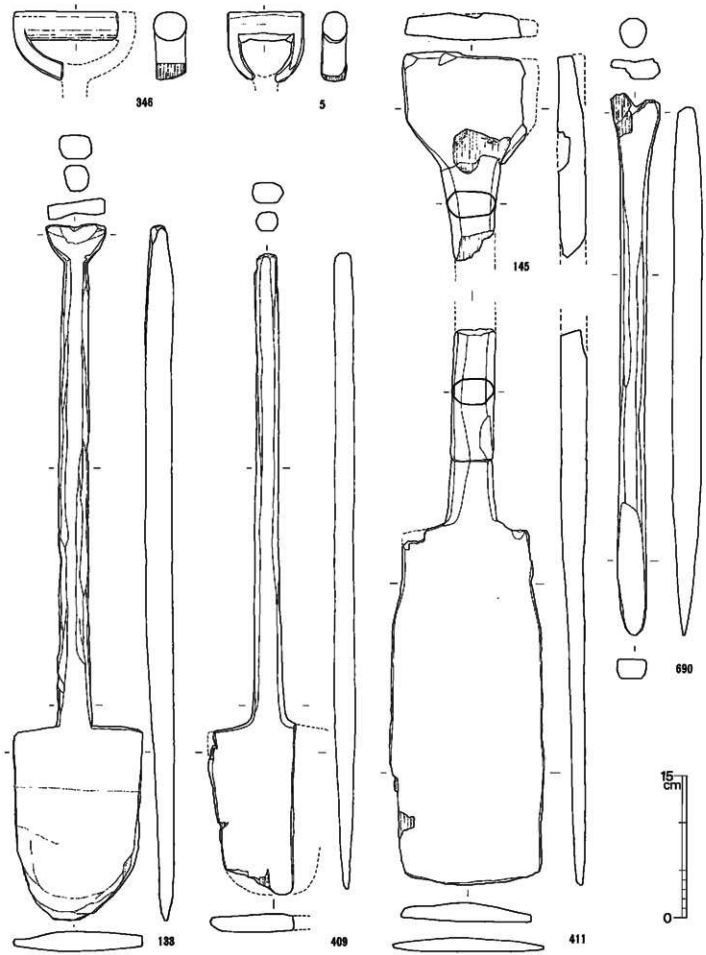
346は，出土地点不明だが，鋤の把手と思われる資料である。握りの部分と柄に続く側板の片側が残り，長径 3.4cm・短径３cmの円形に仕上げた握りの部分は現存長11cmを測る。側板は厚さ3.1・幅1.5cmの方形断面で弧を描いて握りに接し，端部の状況から柄に直接続く一木造りを想定させる。握りと柄に接する部分との空間は 2.4cmで幅も９cm前後と狭くわずかに指先をかけられる程度の把手であろう。

５は，Ｃ４区第６層上部出土の把手で，346同様一木造りの鋤把手である。形状は346に比して縦長で，幅 8.1cm，長さ 7.4cm，厚さ 2.6cmを測る。握りの部分で幅３～ 3.2cm，側板で



この他に出土地点不詳の資料１点あり

第 61 図　Ⅱ区出土鋤の地区別分布



第 62 図　II区出土鋤類実測図（1/4）

1～ 1.3cmである。この他同様の形状をした把手に，Ｂ３区第６層下部出土の 136資料があり。樹種同定でツクバネガシという結果を得ている。

145・411は，それぞれＤ８区第６層上部・Ｄ９区第６層上部出土による資料で，鋤未製品であろう。145は現存長22cm。現存幅13cm・厚さ 2.8cmで，端部から 7.5cmの位置から幅が狭くなり13cm・19cmの位置でそれぞれ６cm・４cmとなる。その形状から把手の部分から柄にかけての未製品かと思われる。一方411は，現存長58.3cm，幅16.2cm，厚さ2.7cmで，羽子板状を呈している。柄の長さ20cm，幅 2.5～３cmで，身の部分の幅，13.4～16.2cm，厚さ１～ 2.4cm。身の長さが133・409に比して長いが鋤の身になるものであろう。145と411の出土地点はほとんど離れておらず，両者の法量が対応すること，いずれも樹種がツクバネガシという結果を得たことから，両者が同一個体である可能性が高いと言える。

ふぐし状木製品（図版71・72，第59・62・63図） 690（第62図）は，Ｂ３区第６層下部出土資料で，全長56.8cm・厚さ３cmを測る。端部を削り落として鋭利に仕上げているもののその全体の形状は，前項の鋤 133資料から身の部分を差し引いた状態と酷似し，鋤の折損品の再利用を考えさせる。把手部の端も折損しているが，Ｖ字形に残る側板の一方は折損した状況のまま，いま一方は，磨滅しており，新しい用途での把手の機能はそれほど重要な問題ではなかったともいえよう。柄の部分の幅は，把手の部分で５cm，中程で 2.8cm，身に近い部分３cm。身にあたる削りの部分は片面で14cm，反対の面で15.2cmの長さにわたっており，約15°の刃先角度を造り出し，3.1cmの幅を保つ。カシ材。

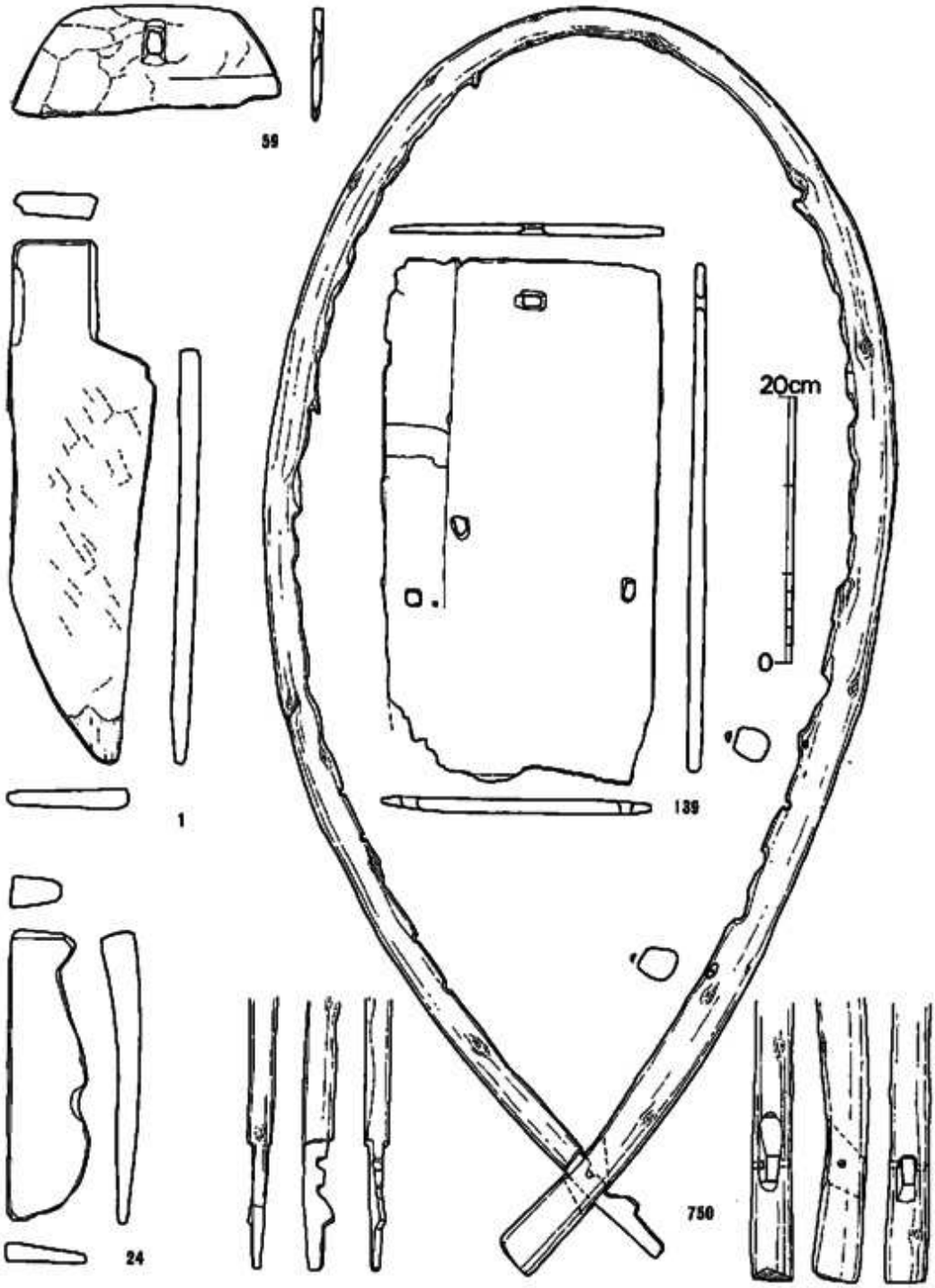
412（第59図）は，Ｂ３区第６層下部出土資料で，現存長16.6cm・幅４cm・厚さ 0.4～ 1.2cmを測る。基部の両側縁に抉り込みが設けられ，刃部は片側に薄くなる。ふぐし状木製品に含めるのは不適当でむしろ鎌形を呈すことからその方の用途を考えるべきかも知れない。いずれにしても二叉鍬等の再利用品と思われる。樹種はカシ材。

225は，Ｃ３区の第７層から出土した。全長17cm，現存する幅 4.2cm，厚さ１～ 2.1cmを測る。丸味をもった刃部を有し，側縁の一部は焼け焦げている。カシ材。

１（第63図）も，Ｃ３区の第７層出土で，全長29.4cm，幅 8.3cm，厚さ 1.4cmを測る。側面と先端は磨耗しているが，表面に削り痕を残す。カシ材。

24は，Ｃ７区の第７層より出土した。長さ16.4cm，厚さ 0.5～２cmで現存幅 4.7cmを有し，全体に反る。基部には抉り込みがみられる。カシ材。

えぶり状木製品　（図版72，第63図） 59は，Ｃ９区第６層上部で出土した。幅15.4cm，長さ6.3cm，厚さ0.5cmを測る。約７cm幅で平坦な頭部から刃部に「ハ」の字形に広がり，刃部は薄くなる。柄孔は長さ 1.3～ 2.2cm，幅 0.8～１.2cmで前面側に28.5°の角度に穿たれる。前面の一部に削り調整痕が残る。樹種は不明だが他の木製農耕具類中に例をみない材質で針葉樹であろう。



第 63 図　II区出土ふぐし状木製品・III下駄・手綱実測図 (1/4)

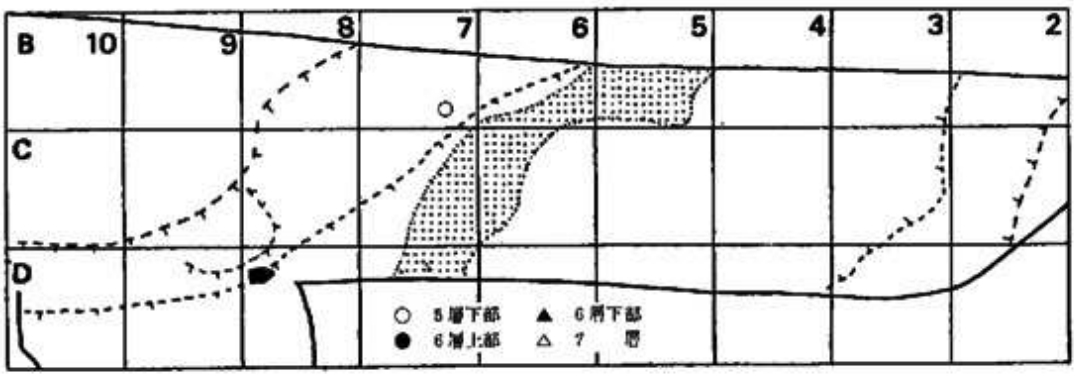
田下駄　（図版72・第63図）　139資料１点のみ，Ｄ10区第６層上部より出土している。長辺29.4cm，短辺15.8cm，厚さ 0.9cmの長方形の板に３孔を穿って緒孔としている。図示した面が平担・反対側の面がわずかに反るため，図示した面が表と考える。また板の正中線に対し，前方の緒孔はわずかに右に寄り，後方の緒孔を結んだラインは，右に87°である。このことから左足の方が使い易いと考えている。緒孔は前方 0.6×１cm，後方左 0.7 × 0.7cm・右 0.9 × 0.5cm，を測る。これ以外の２孔は後世に草の茎の侵蝕で空いた孔である。枠材と接した痕跡については，表・裏面ともに確認できなかった。樹種はスギ。

これ以外に，図版85と第88図に図示した 211資料が農具と考えうる。即ち，いわゆる大足の踏板の形を呈しており，両端部のくびれを利用して枠材に接合させて使用する例が知られている。但し当該資料では一方の端部を欠失しており，緒孔がみられないなど，直ちに決しえない。現存長39.6cm，幅 9.4cm厚さ 0.9～ 1.9cm。幅広な中央部の長さは22cm，くびれ部の幅２cmを測る。針葉樹材。

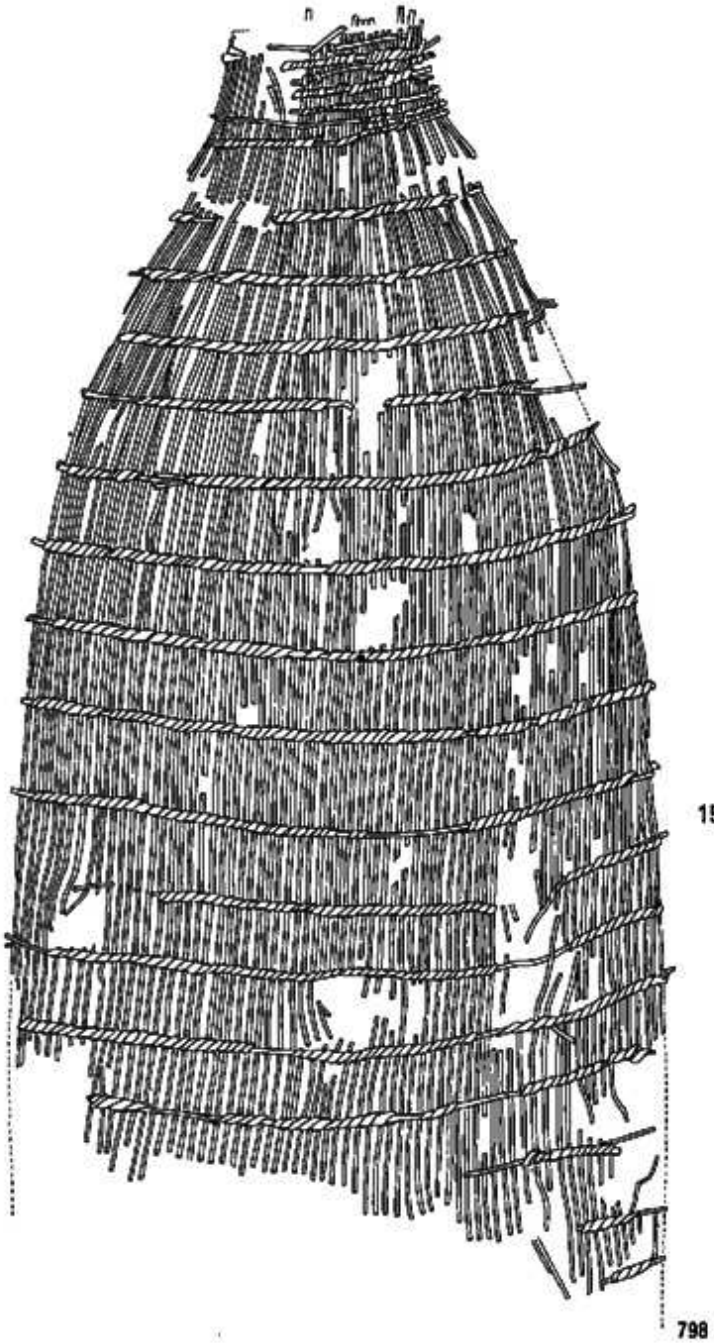
(3)　漁具（巻頭図版②　図版72・73，第63・64・65図）

漁具としては，手網枠・筌があげられる。手網枠はＢ７区の第５層下部・筌はＤ８区６層下面の出土である。

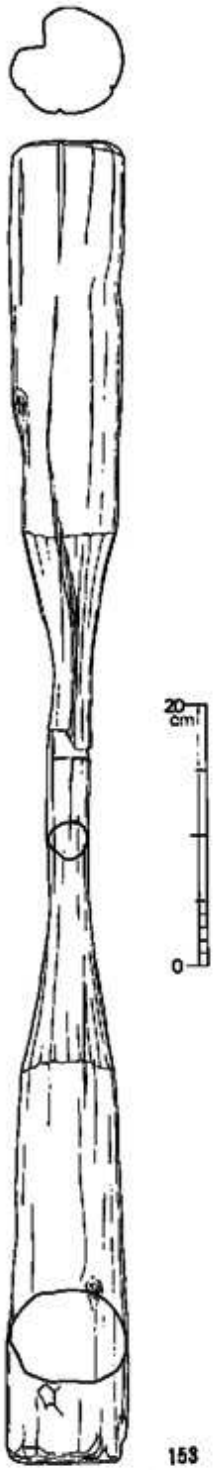
手網枠（図版72，第63図）　750資料で，網枠のみ残存する。全長約 169cmの丸木を曲げて両端部を接合して枠をなしている。現状では楕円形を呈す形になっているが，出土時はやや丸味が強い形で保管中に若干縦長に変形した。製作時はもっと丸味の強い形をしていたかも知れない。太い方の端部は，端から約６cmの位置に幅１cm，長さ 2.4～ 3.6cmの柄孔を内側縁から外側縁に通るように刳り貫き，ほぼ中央に上下に貫通する目釘孔を穿っており，目釘孔は直径約４mmである。一方細い方の端部は，長さ７cmにわたって両面から削り込んで，幅４～８mmの扁平な枘を造り出しているが，既に目釘孔は壊れており，２ケ所の痕が残る。この両端部の枘を通して結合させ，端部は交差する。



第 64 図　　Ⅱ区出土漁具の出土地点（Ｂ７は手網枠 Ｄ８は筌）



第 65 図　II区出土笠実測図（1/3）



第 66 図　II区出土杵実測図 1（1/6）

端部以外は，全体に内側縁を削り落としているためか，断面 2.4cm× 1.8cmの倒卵形を呈し，内側縁に沿って3～5cm間隔で，直径3～4mmの小孔を穿っている。この孔は網を固定する為のものであろう。ただし既に孔が壊れ，孔として残っているのは2ケ所のみで，それ以外は痕跡を留める程度である。なお目釘材は残っていない。樹種はクロベ。

筌（巻頭図版2，図版73，第65図）　798資料は，大溝の下面から土圧のため押しつぶされた状態で出土した。下端部は調査時に欠失してしまったが，全体に残存状態の良い編物製品である。現存長49.3cm・最大幅25.3cm・上端部での幅 7.5cmで，全体の形は砲弾形を呈す。幅1～1.5mm・厚さ 0.5mm程度の細いヒゴを2～3mm間隔で縦に並べ，直交する桁を支えにして隙間に蔓を1本1本通して固定する。現存する部分ではこの桁が2～3cm間隔の帯状に17条並び18条目からは密になり相接するかの様に6条みとめられる。また条を増すごとに，縦ヒゴが集約され，わずかながら幅狭になる傾向がみられる。この傾向は10条目あたりから顕著で，18条目にはほぼ淘汰される。図では桁が弧を描いているが，これは押しつぶされた状態のためであり，本来の形である円筒形の直径を復原すると6条目で$\frac{26\times 2}{\pi}$cm＝16.56cm・11条目で$\frac{23\times 2}{\pi}$cm＝14.65cm，18条目で$\frac{9\times 2}{\pi}$cm＝5.73cmの数値を得ることができる。

なお，この資料は非常に脆弱であったため，発泡ウレタンで周囲を固定させ，下部から切り取る方法で取り上げ，反転して露呈させている。このため実測図及び遺物写真は出土状況の写真（図版55—1)と表裏になる。また外面の構造で筌と判断しているが，脆弱なため内面を観察することができず，魚の入口である部分（図の下端側）の仕掛等については不明である。

ヒゴの破片は樹種同定で広葉樹材という結果を得た。蔓については同定を行なっていないので不明。

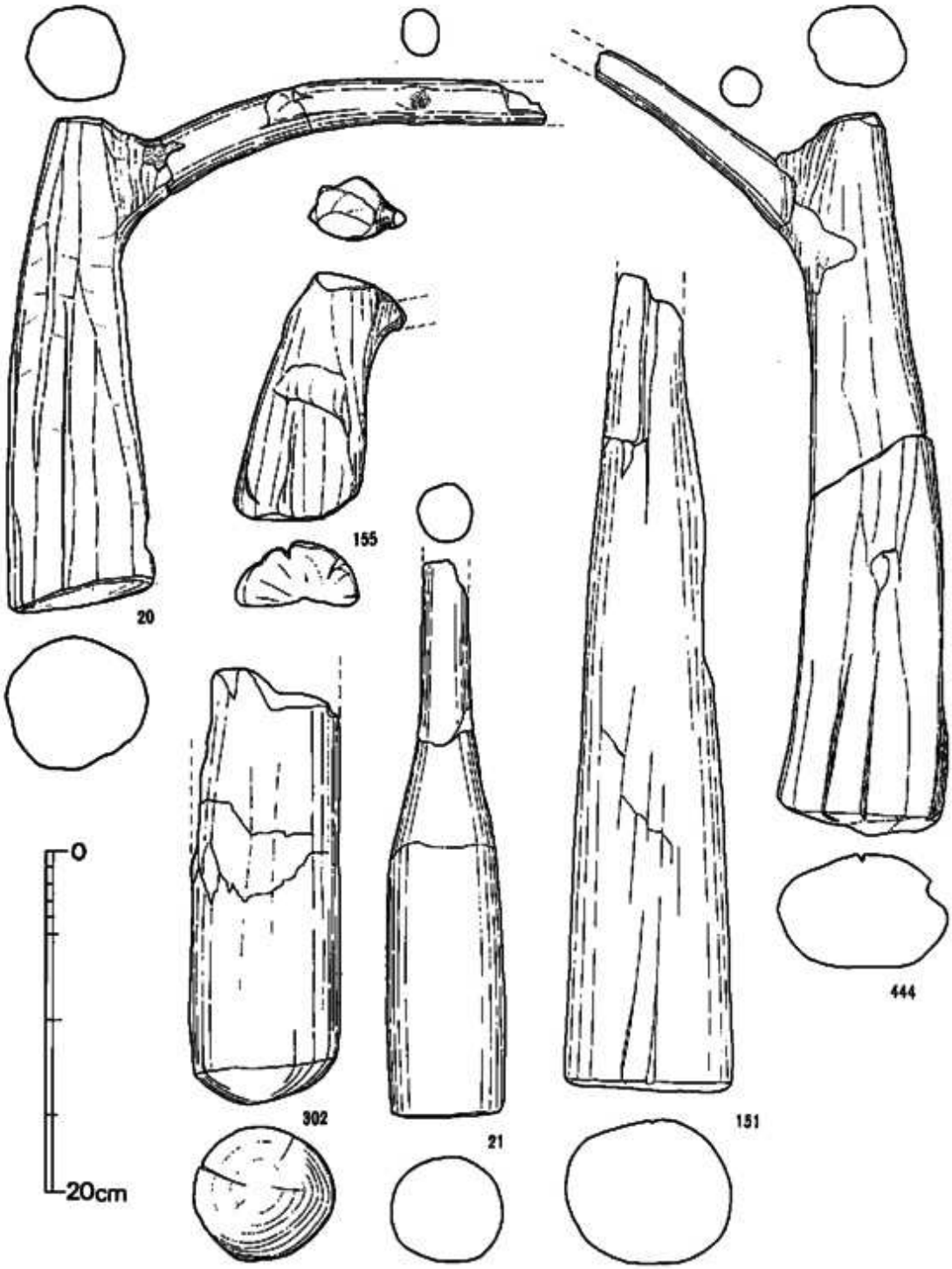
(3)　調整用具（図版74・第66～69図）

脱穀等に使用する杵があり，形状から竪杵・横杵に区分される。杵類の地区別分布は第69図に示す。なお杵類とセットになる臼は出土しなかった。

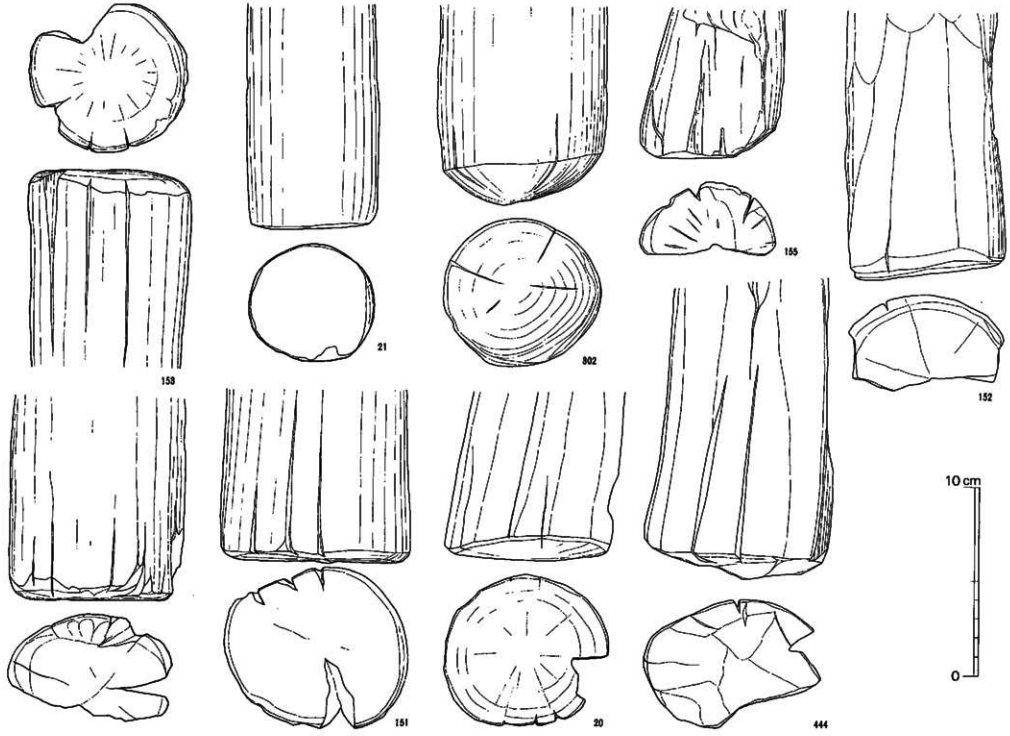
竪杵　21・151・153・302の4点のうち，完形品は153のみで，他は破片である。

153は全長110.5cmのうち，両端からそれぞれ約30cmが搗部であり，握部は削り込みによって細く仕上げられ，中央でわずかに膨らむ。土圧による若干のひずみはあるにせよ上下に均整のとれた形状を呈しており搗部直径7～9cm・握部直径3～7cm・握り部中央の直径 3.4cmを有す。搗面は使用によって磨耗するがほぼ平坦。樹種はマンサク。B8区第6層上部出土。

21は約半分を欠失した資料で現存長32.5cm。搗部は約16cmの長さで直径6～6.8cm。搗部と握部は削り込みによって区別されるがやや不分明で，握部にある直径最小値は 2.8cmである。搗面は磨耗するが平坦。樹種はツバキ。C9区第6層上部出土。



第 67 図　II区出土杵類実測図 2 (1/4)



第 88 図　Ⅱ区出土杵頭の掩部（1/2）

151は現存長47.8cm，直径10cmの搗面から直線的に狭まって直径4cmの握部に至る。搗部と握部は区別できない。搗部は磨耗するが平坦。樹種はヒメユズリハ。C6区第6層上部出土。

302は現存長25.5cm，直径 8.5～9cmの破片。搗面は丸く磨耗する。樹種はシラカシ。D9区第6層上部出土。

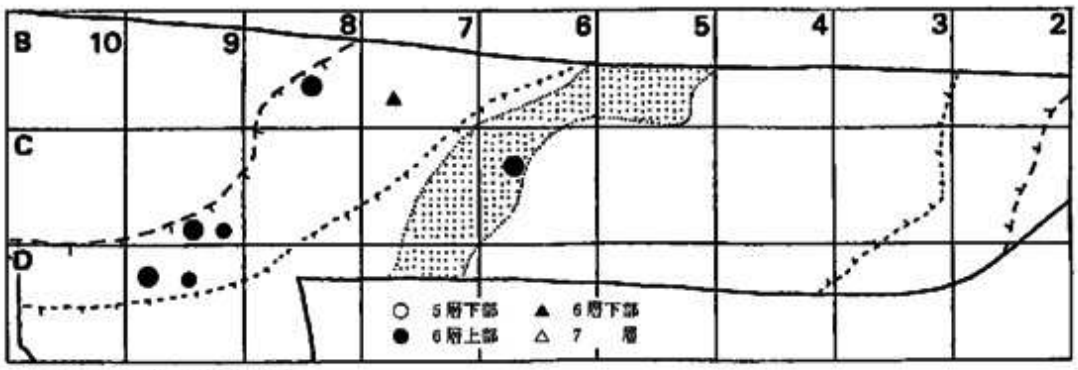
横杵 20・155・444 の3点があるが，完形品はない。いずれも幹と枝をそのまま利用して搗部と握部である柄を造り出している。

20は搗部の長さ28.8cmで，搗面付近の直径 8.5cm・頭部の直径3cmを測り，搗面から頭部にかけて外側にわずかに丸味をもちながらも直線的に窄まる。頭部のやや下位から115°の角度に柄が接しているが，柄はやや反っており（現存長25cm），握部と搗部の角度は90°に近い。搗面は磨耗し，わずかに丸味をもつが搗面に対する搗部の正中線は直角ではなく約10°内傾する。なお搗部に削り調整痕が顕著で柄の一部には樹皮が残る。B7区第6層下部出土資料で，樹種はマンサク。

155は出土時に長さ約20cm・直径約 1.5cmの柄が 120°の傾斜で接して確認されたが，保管中に崩壊し，現存するのは搗部破片のみである。搗部の長さ15cm・直径7cm・搗面は磨滅がひどい。C9区第6層上部出土。樹種はマンサク。

444は搗部の長さ42cm・直径 3.5～10cm，柄は 130°で接して約15cm残存する。搗面の磨耗は顕著でなく，未だ削り痕が残る。D9区第6層上部出土資料で，樹種はマンサク。

杵類では，21資料を除く全てが心材を用いている。搗面の状況を拡大したのが第68図である。これにはなお竪杵を転用した槌の 152資料も含めて図示した。



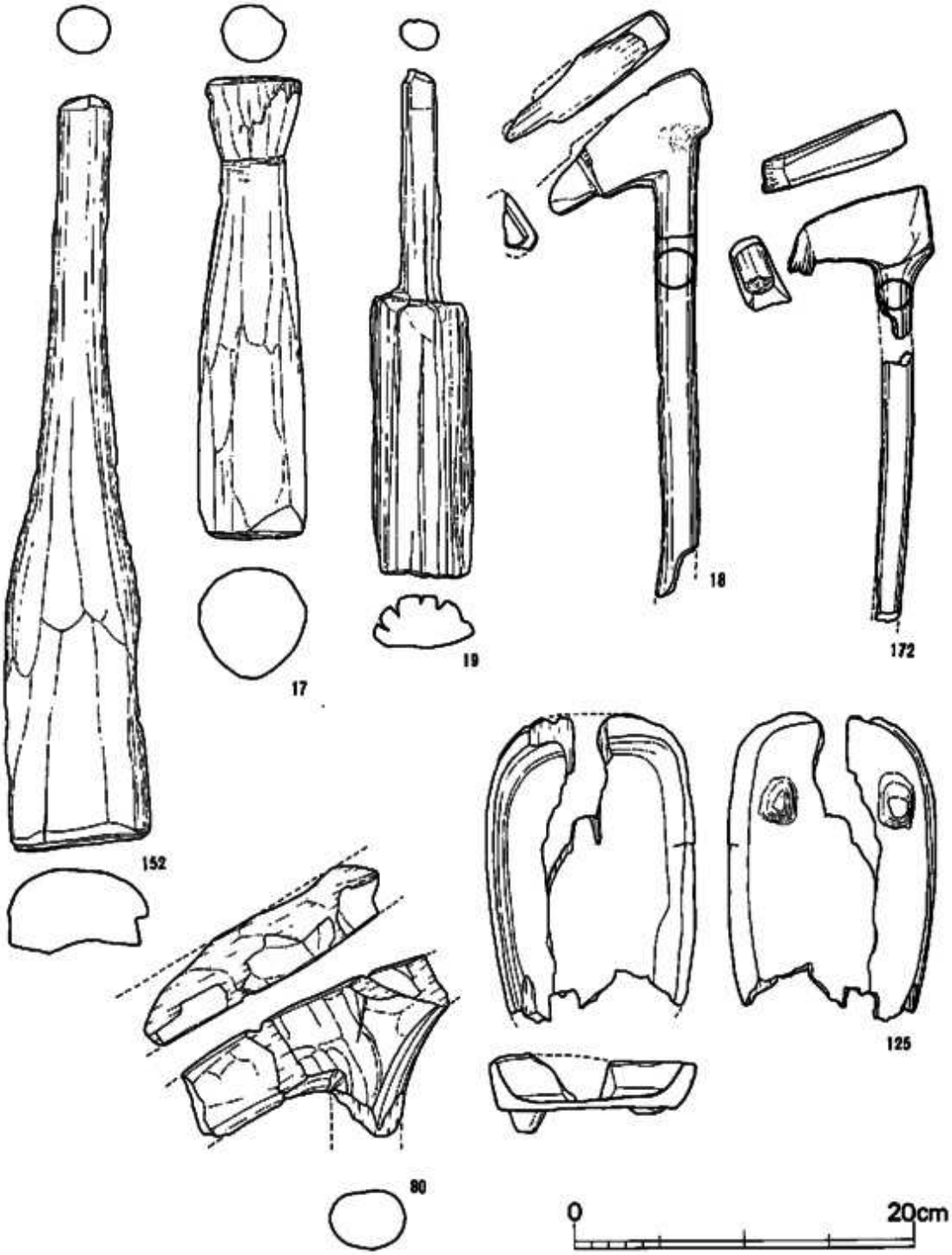
太印は竪杵，細印は横杵

第 69 図　II区出土杵の地区別分布

(4) 工具類（図版75・第70～72図）

槌と斧柄をこの項に含める。

槌 出土地区別分布は第71図に示す。

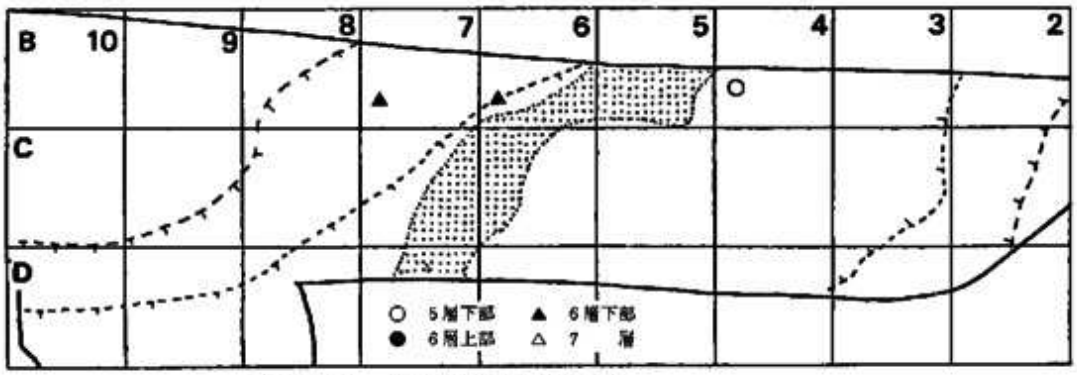


第 70 図　II区出土槌・斧柄実測図 (1/4)

152は縦方向に割れた竪杵の再利用と思われる槌で，搗部外面は使用によって扁平且つ，わずかに中くぼみになっている。全長も竪杵の約半分に相当し44cmを有すが，握部の端は削り込み調整され，直径3cm。打撃の痕跡をみとめる槌部は搗面から約15cm以内で，幅8cm・厚さ5cm。搗面は磨耗するが平坦で，樹種はスダジイ。B6区第6層下部出土。

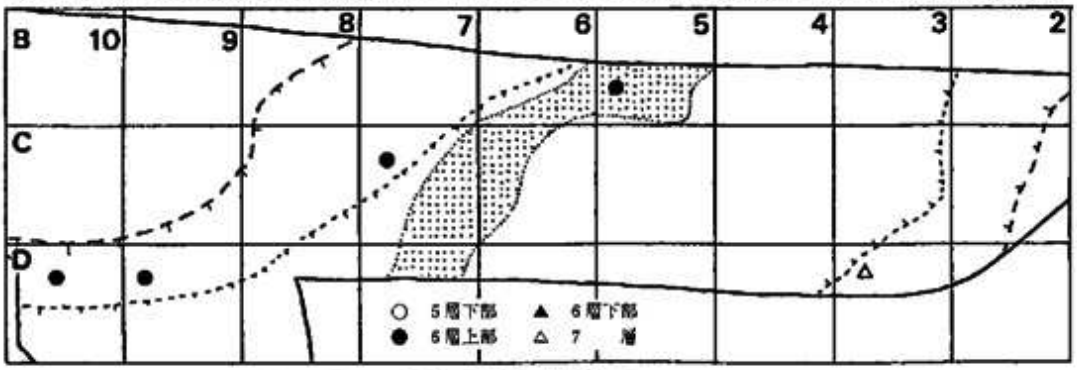
17は全長27cm，槌部直径約 6.3cm・握部直径約 3.5cm・頭部直径約 5.5cmを測る完形品である。槌部の長さは約12cm，握部は削り込みの痕が明瞭である。端部に，杵の如き磨耗痕はない。割り材を用いたもので髓は避けている。B7区第6層下部出土で，樹種はクリ。

19は槌部と握部の境に段を有し，明瞭な区分の行われている資料で，全長29.8cmのうち16cmが槌部に相当する。心材を用いた為か縦に割れているが，槌部の直径約6cm・握部の直径約2cmを有す。磨滅が進んでおり，削り痕などは不明・B4区第5層下部出土。樹種同定は行なっていない。



第 71 図　II区出土槌の地区別分布

斧柄　斧柄としては5点出土しており出土地区別分布は第72図に示す。機能的分類としての斧・手斧の区別があり，当初，柄と刃の角度が90°に近いものを斧・60°前後の鋭角のものを手斧というように判断して，当該遺跡出土遺物を手斧と呼称してきた。しかし直接刃先が付着した状態で出土した訳でもなく，両者を含めた広義の意味での斧柄として一括した。完全な形の資料はないが，実測図に3点図示している。全て，枝別れする部分の材の幹側を身（刃先の



第 72 図　II区出土斧柄の地区別分布

付く側）に，枝側を柄に用いている。

18は柄の先端と身先端の一部を欠失する。柄の長さ約26cm・柄の直径 2.3cm，身の現存長 11.5cm・身の幅約4cm・身の厚さ 2.8cmで，57°に接する。身の頭部から約8cmの位置に4～5mm削り込み，幅 2.7cm・厚さ 1.3cmの断面隅丸方形の柄状の着装部を造り出している。着装部形状は鉄斧袋部の規模と相似する。但し装着すれば刃先の方向が柄と並行することになる。D3区第7層出土。樹種同定は行なっていない。

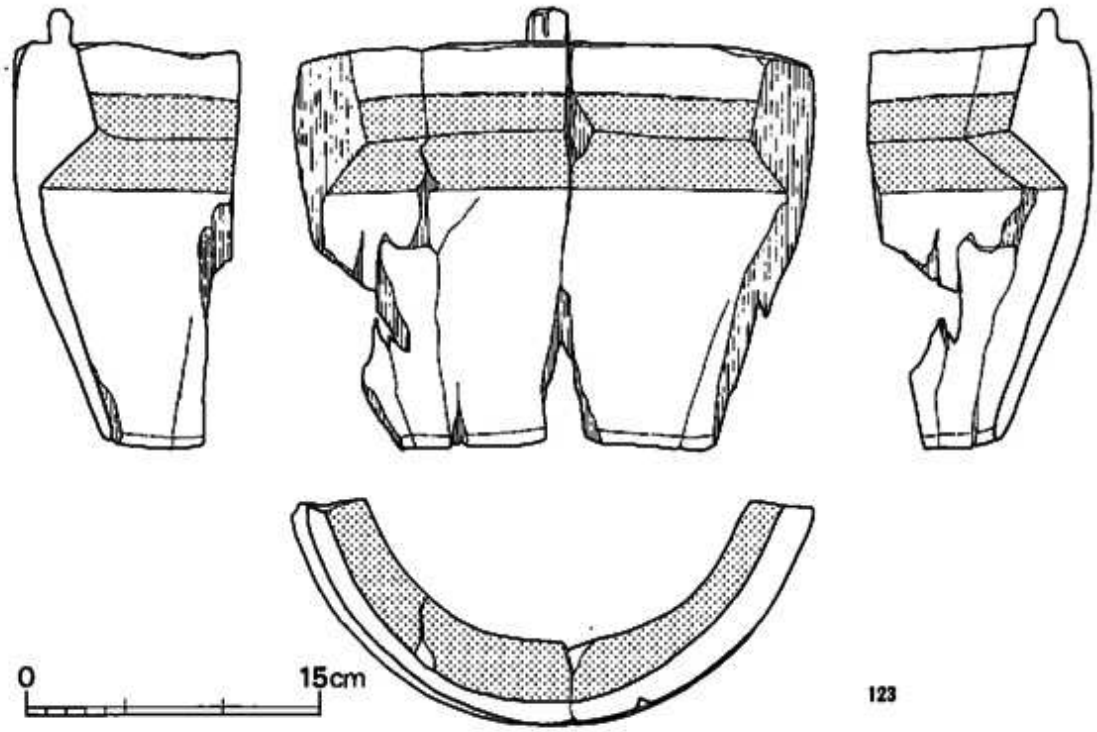
172は，身の先端が他の材に押し潰されてしまっており形状不明だが，約75°の角度で柄と接す。身の断面形は幅3～4cm・厚さ 2.4cm以下の長方形になり，18資料同様の着装方向をとらざるを得ない。D9区第6層上部出土。樹種はマンサク。

80は身と柄の接する部分のみ残る資料でD10区第6層上部出土。約60°で接し，柄の径 3.4～4.4cm・身の幅 4.3cm・厚さ4cmを測る。この資料では先端を欠失するため推定の域を出ないが，柄に対して直交する刃先の着装が可能であろう。樹種はシラカシ。

(5) 食料調理用具（図版76～78，第73～80図）

つるべ状木製品・盤・槽・杓の類をこの項で扱う。

つるべ状木製品（第73図）　123資料が，C6区の第5層下部より出土した。長さ22.7cm，



第73図　II区出土つるべ状木製品実測図（1/4）

幅26.8cm，高さ11.7cmを測り，最大径で直径26cm程度の円筒状をなす。全長のうち 1.7cmが枘の部分で幅 2 cm厚さ 1.1cm。容器の部分は枘側に厚い縁を設けている他は薄い器壁で0.5～1.2mm厚さで，先端は丸味をもちながらも劣る。基部側の厚い縁は内側で 2.5～ 3 cm，外側でも 2.5～ 3 cmの厚さを有し，外面との厚みは 4 cmを越す。また厚い縁の部分の上面中程にはわずかに段がみとめられ，他の円盤あるいは半円形を呈すような部材が接していたと考えられる。この段より内側には赤色顔料が塗布されており，特殊な容器として使用されたと考えるべきであろう。形状が従来知られているつるべの例に似ているためつるべ状木製品と仮称したが，他の用途も考えなければならない資料である。樹種はアスナロ。

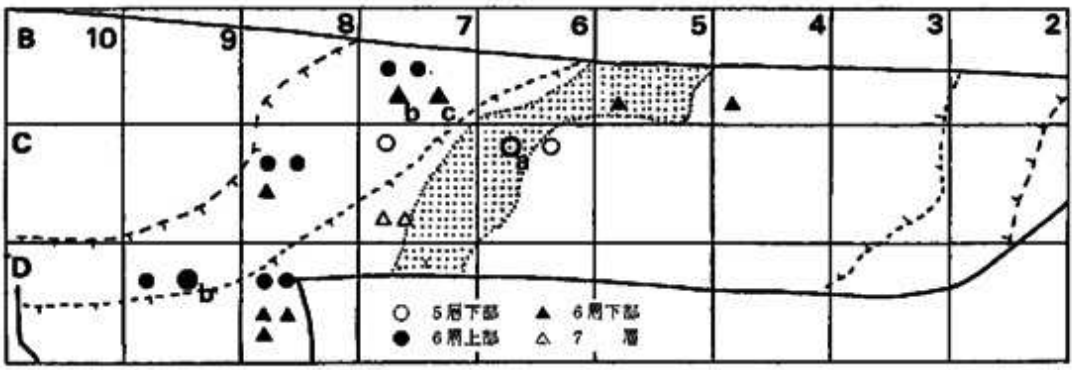
盤　125（第70図）欠損した部分は多いが長辺の現存値17.8cm・短辺12.2cm・器高 3 ～ 4.5 cmを測り，平面形で隅丸長方形になるものと思われる。縁の高さ約 2 cm，厚さ 0.5～ 1.4cmで，外底面に一対の突起がみられる。片側で高さ 1.2cmを測るが，他方は磨滅し 3 ～ 4 mmと低い。容器の深さは 2 ～ 2.2cmである。B 7 区第 6 層下部出土。樹種はクリ。

204（第75図）　直径38cm削後の不整円形の盤で約 3 分の 1 を欠失する。器高約 7.2cm，底の厚さ 1.3cm，縁の厚さ 2 ～3.3cmを測る。樹種はクリ。D 9 区第 6 層上部出土。

槽　126（第75図）は，長さ44.2cm，幅16.3cm，器高 8 cmを測り，かなりのひずみをもつ。縦に半截した材の中を刳って仕上げているが，側板・底板の厚さ 1 ～ 2 cmで木口は，一方で 3 ～ 4 cm，他方で 4 ～ 5 cmの厚みをもたせている。B 7 区第 6 層上部出土。樹種はクリ。

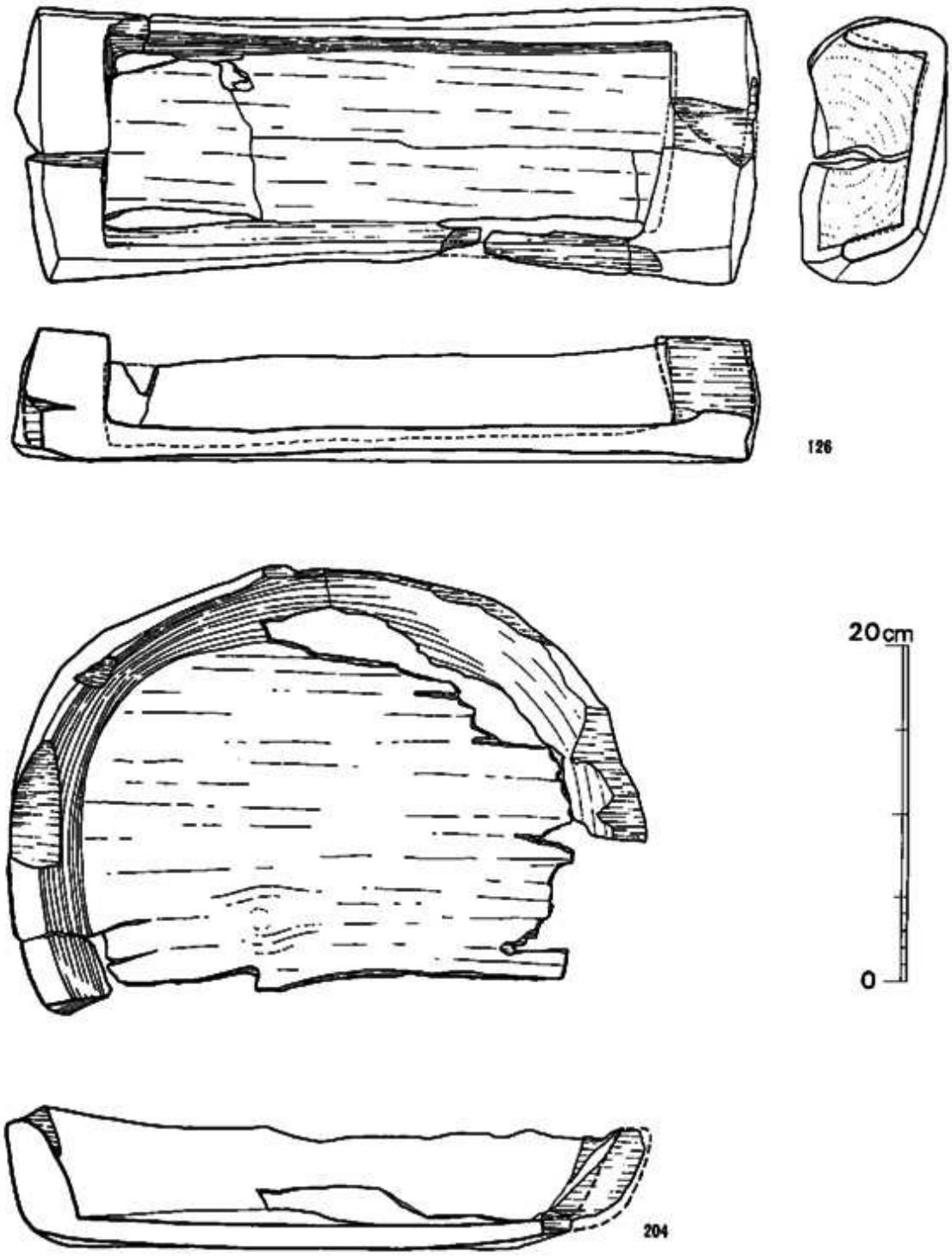
767（第76図），全長62cm，現存幅21cm・器高5.8cmで，側縁が，木口に向って内傾し，また木口も外底面に対して斜めになるため舟形に近い形状となっている。底面は，長さ50cm，現存幅15cmで底板の厚さ 1 ～ 1.6cm，側板は厚さ 1.2～ 1.8cm。木口は一方で幅 3.5cm・高さ 3 cm，一方で幅 4 ～ 5 cm・高さ 2.5cmで，内面での高さは両者とも 4.3cmを測る。C 7 区の第 5 層下部出土。樹種はクスノキ。

234は，現存長18cm，現存幅10cm，器高 5.8cmを測る。器壁はやや薄めで，木口も 2 cm程度

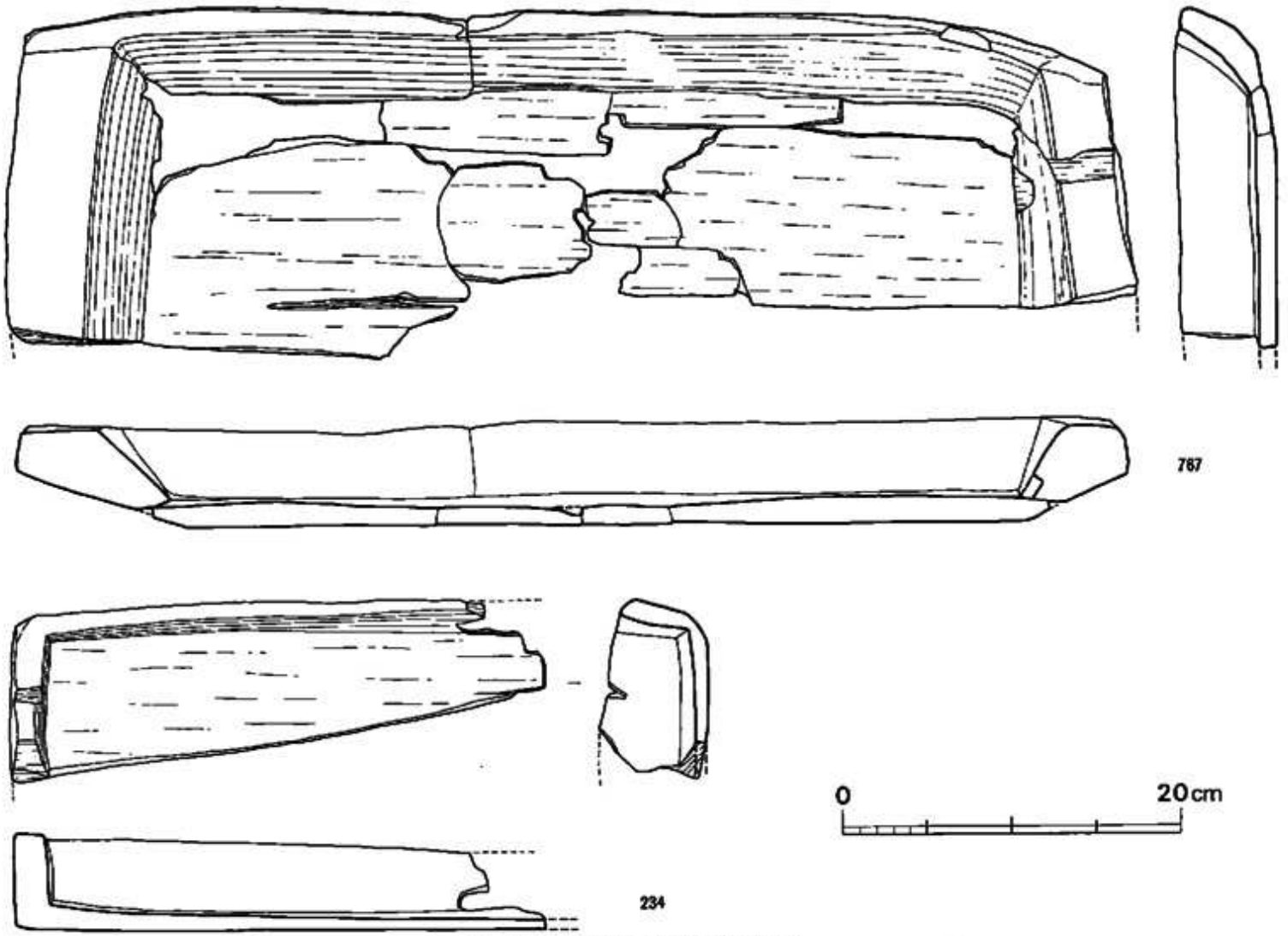


aはつるべ状　bは盤　cは出舟状木製品　その他は槽

第 74 図　II区出土槽などの地区別分布



第 75 図　II区出土盤・椀実測図 1 (1/4)



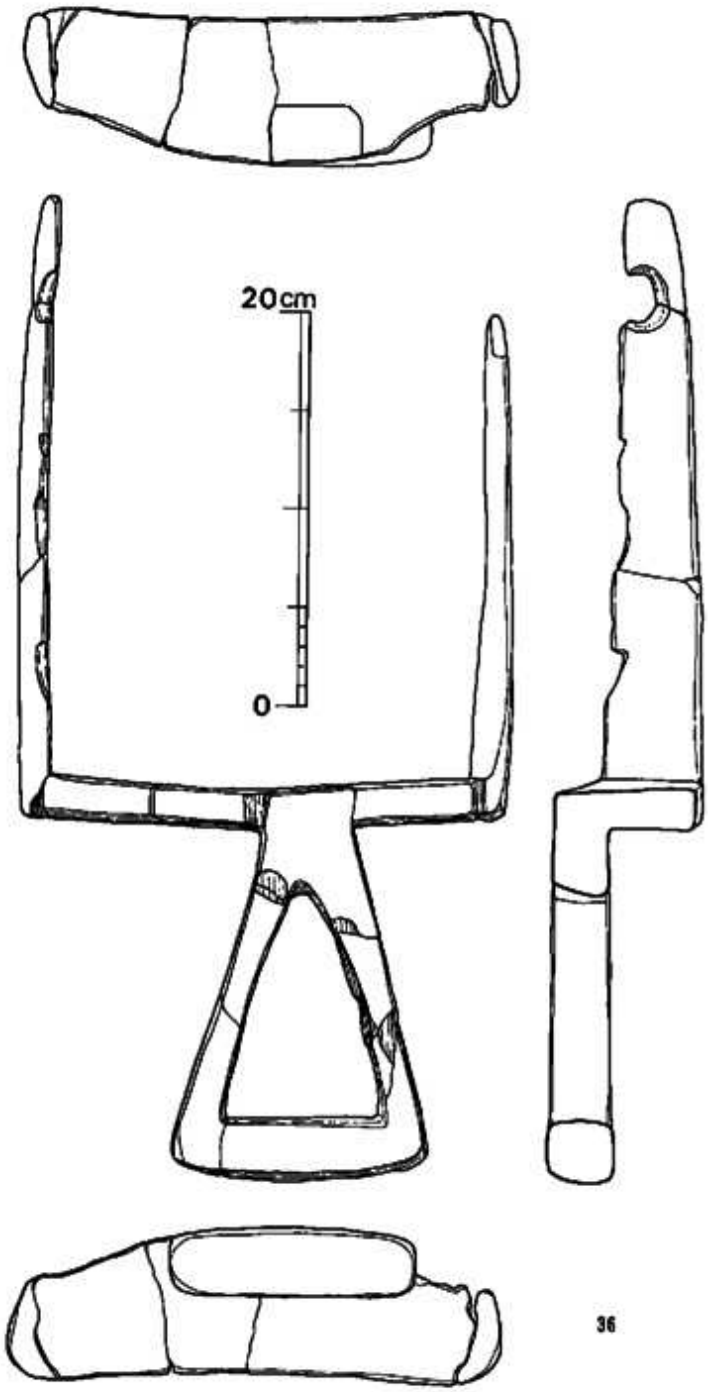
第 76 図　II区出土槽実測図 2 (1/4)

と薄い。Ｄ９区の第６層上部出土，樹種はクスノキ。

36（第77図）は把手付の槽で，片側の木口と両側板が残存する程度である。現存する全長50cm，幅は25.5cm，側板の高さ４～５cm，木口で５～７.5cmを測る。把手は木口の上端に付き三角形。厚さ３cmで把手の端部の幅は13cm。把手内側の空間は一辺８cm他の二辺12cmを測る二等辺三角形を呈す。底板については不明である。樹種はクスノキ。Ｄ９区第６層上部出土。

この他に槽片が12点出土しており，また図版77の 337資料の如き台付槽の破片と思われる資料もある。

田舟状木製品　Ｂ７区の第６層下部より出土したが，取りあげ作業の際にバラバラになってしまい水槽中に破片として保管している。ＰＥＧ含侵処理後であれば接合することも可能であるが，今回の報告期限に間に合わないので，実測・写真記録も実施できないままである。調査時の写真は図版39−2の出土状況としてある。内法での長さは120cm程度であった。大形であるため「田舟」としていたが，木口部が直立し，槽の形状と同様であるため，大形の槽とも考えられる。樹種はヤマモモ。



第 77 図　Ⅱ区出土槽実測図３（1/4）

杓子（図版78，第78～81図）　いわゆる汁杓子が３点と、ヘラ杓子７点、ヘラ杓子の柄の破片５点が出土している。

汁杓子（第79図）　775は，現存長27.2cmで一木で身，柄を造り出し，椀形の身の外面に付けられる断面円形の柄は弧を描いて頭部で更に屈折する。頭部は稜を有した二等辺三角形のヘラ状になる。身の部分には黒漆が塗布される。Ｃ４区第７層出土。

776は，現存長36cmで身の端部を欠失する。身は浅い椀形で，身から柄は直接つづく。このため柄は幅広になり断面形で稜を有すカマボコ形を呈す。柄は身の境付近に「く」字形に浮きださせた彫刻を有し，平行沈線の彫刻を施した頭部が屈折して接す。身の部分は精良な磨きが施され光沢を有すが，漆等の塗布はみられない。樹種はイヌマキ。Ｄ３区第７層出土。

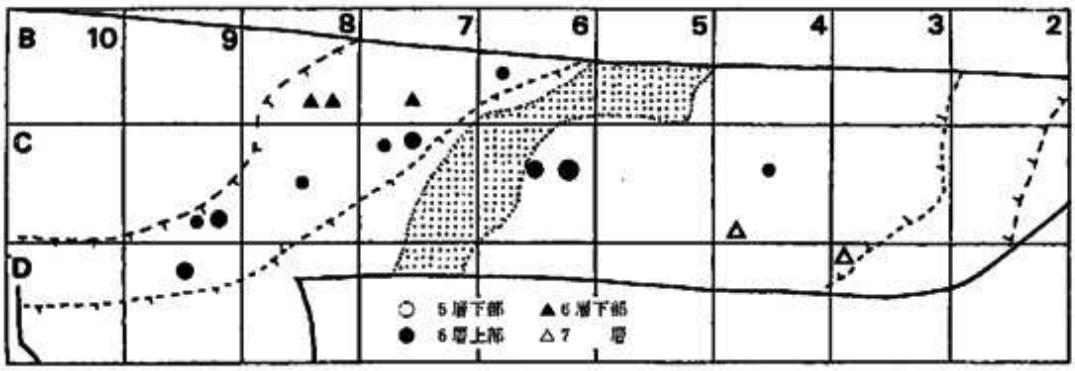
777は，現存長31.5cm。身はほとんど残存しないが椀形を呈し，内面に赤漆の塗布がみられる。柄は断面円形で頭部は断面方形になる。頭部両側面に２条の沈線が側縁に沿って彫られる。また，柄から頭部はゆるやかに曲る。Ｃ６区第６層上部出土。

ヘラ杓子（第80図）　22は，74.2cmの現存長を有す。端部を欠失しているが柄は，56cmを占め直径 1.2～２cmの円形断面，身に近い部分方形になる。身は小判形を呈し現存幅９cm，厚さ0.4～1.4cmでわずかに反る。Ｃ９区第６層上部出土。樹種はアカガシ属。

25は，身の先端を欠失し現存長65.9cm，このうち柄は約50cmを占め隅丸方形の断面を呈し，身の部分では幅広になりながらそのまま身の側縁につづく。身は後述する23資料の如く倒卵形になるものと思われ，約４mm厚さを有し，内外面とも黒色の漆が塗布される。身はやや中凹みでわずかに反って柄に接す。Ｃ７区第６層上部出土。

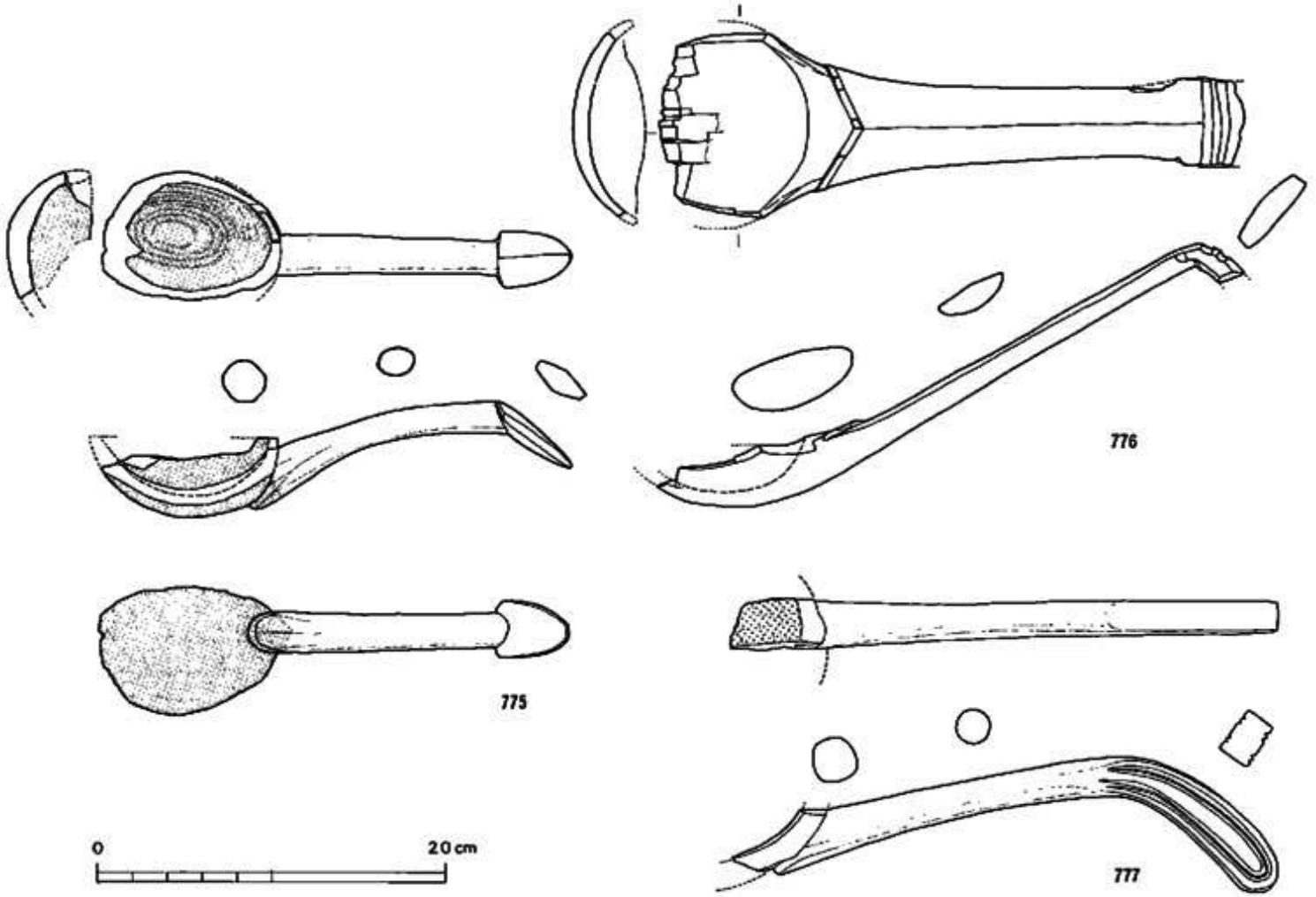
23は，現存長37.5cmで柄の大半を欠失する。身は長さ約18cm・幅11cm・厚さ４mm程度で倒卵形を呈しやや反って柄につづく。身の内外面に黒色の漆が塗布される。Ｂ８区第６層下部出土。

299は，Ｄ９区第６層上部出土で，現存長26cmのうち身は13cmを占める。幅1.6cm・厚さ1.1cmの柄に接して，厚さ３～４mm，幅13cm程度のやや下ぶくれの円形の身になるものと思われる。

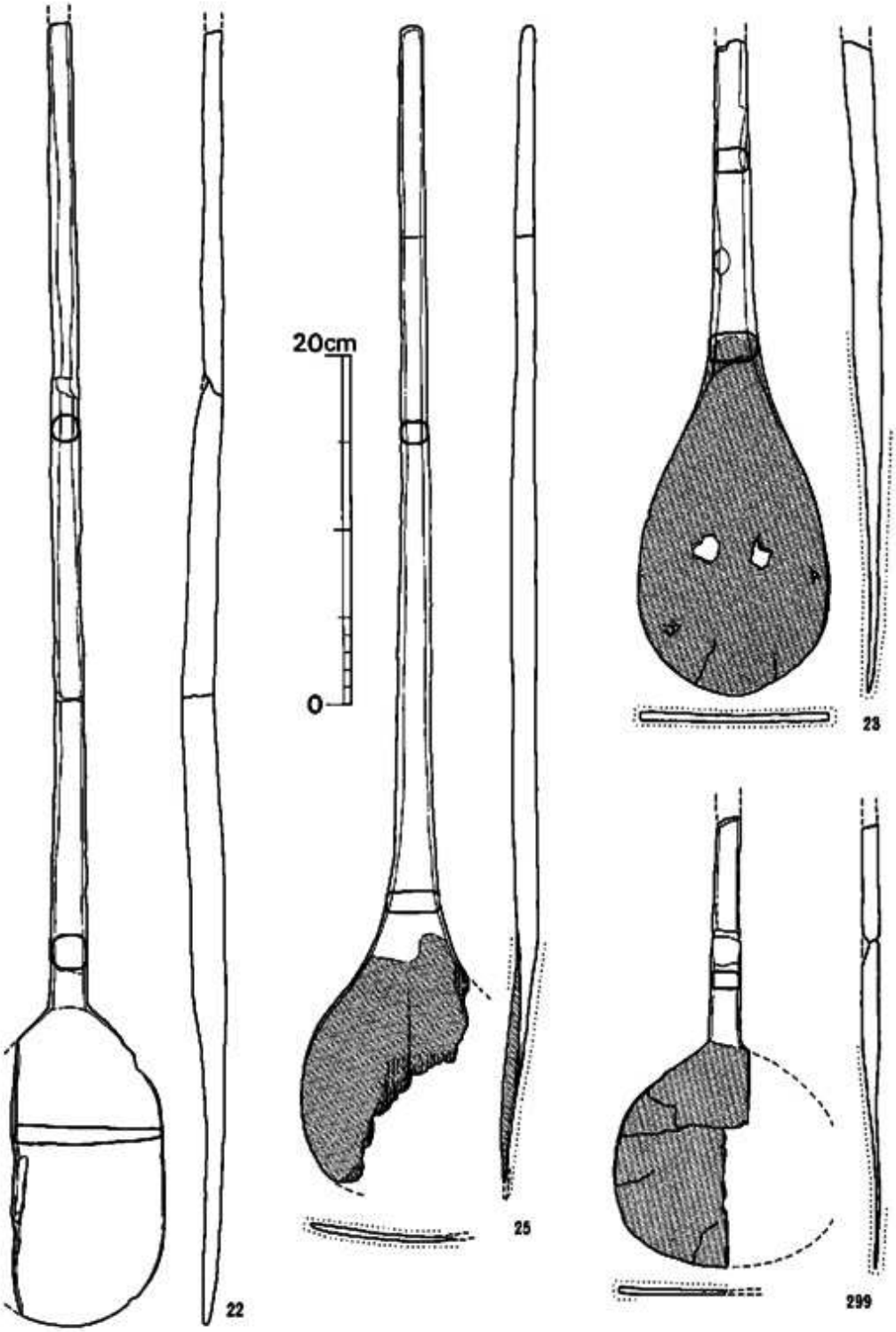


太い印は汁杓子　中はヘラ杓子　細はヘラ杓子の柄のみ

第 78 図　II区出土杓子の地区別分布



第 79 図　II区出土杓子実測図 1（1/4）



第 86 図　II区出土杓子実測図 2（1/4）

26は，現存長14cm，身の幅 4.3cmを測り身は中凹みになる。杓子というよりはむしろ匙に近い。B７区第６層下部出土。樹種はヒノキであろうか。ヘラ杓子ではこの資料以外はカシ材を用いている。カシ材は農具に多用されているが，ヘラ杓子は柄が細く農具とは考え難い。

(6) 紡織具（図版79，第81～82図）

紡錘車（第81図773・774） 773は，Ｃ６区の第６層上部出土，直径 5.5cm，厚さ 1.6cmの円錐形を呈し，直径約７mmの孔が穿たれている。774は，Ｂ３区第６層上部出土。直径 5.3～5.7cmのやや不整な円形で厚さ５～８mm，直径 5.5mmの孔を有す。樹種はマツ。

紡織具類と考えられる部材（第82図８・214・261・753・769） ８・214・769がそれぞれＢ７・Ｂ６・Ｃ８区の第６層下部より出土し，261・753はＣ５・Ｂ６区の第６層より出土した。８は全長47.3cm，厚さ１cmで中央部の幅 2.6cm。両端部の幅６～ 6.4cmで，長軸方向に 3.6cmの間を有して約 2.5cm四方の孔が穿たれている。樹種はツバキ属。214・769は，４隅に突起を有した板材で長軸方向に対応する小孔を穿ったもので，769は中央にやや大きな孔も穿たれる。753では１孔が板材の正中線からややそれており，性格の異なる部材かも知れない。261は一端を欠失するが，端部に紐をかけるための削り込みを施した棒状をなす部材である。769の樹種はスダジイ。

(7) その他の生活用具類（図版79～85，第81～89図）

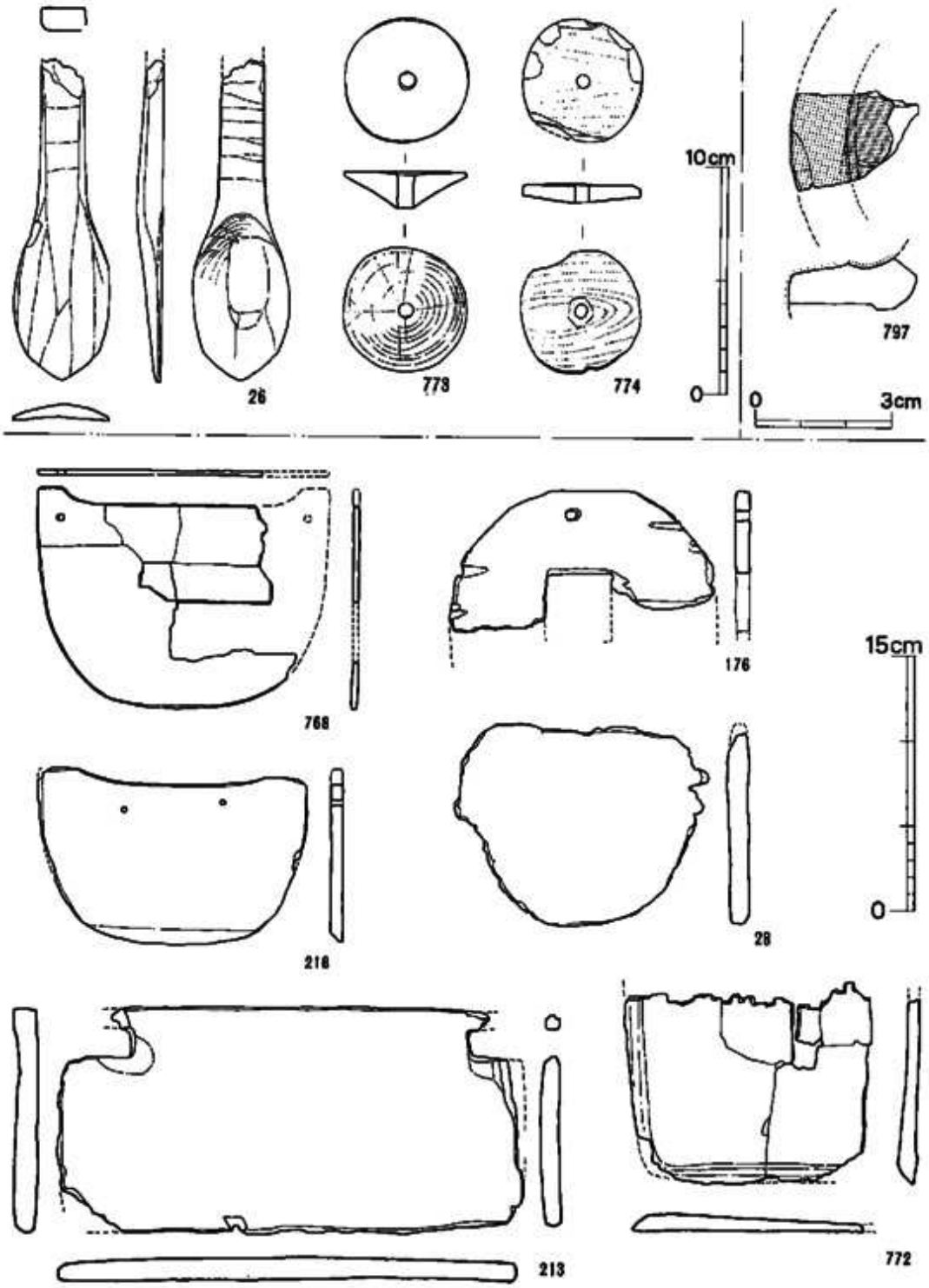
ここでは種々様々な部材で小形のものを中心にして一括している。何らかの形で他の部材と組み合わさって生活用具となるものと思われるが，その構造・用途の推測できるものは少い。

漆塗り容器（図版80，第81図797） Ｄ９区の第６層上部出土資料で，破片のため全体の形状は明らかでない。直径 9.5cm程度になる円弧を有しており，外縁部の幅 1.2cmに赤色の漆が塗布され稜を有して反る部分に黒色の漆が塗布される。樹種はハンノキ属。

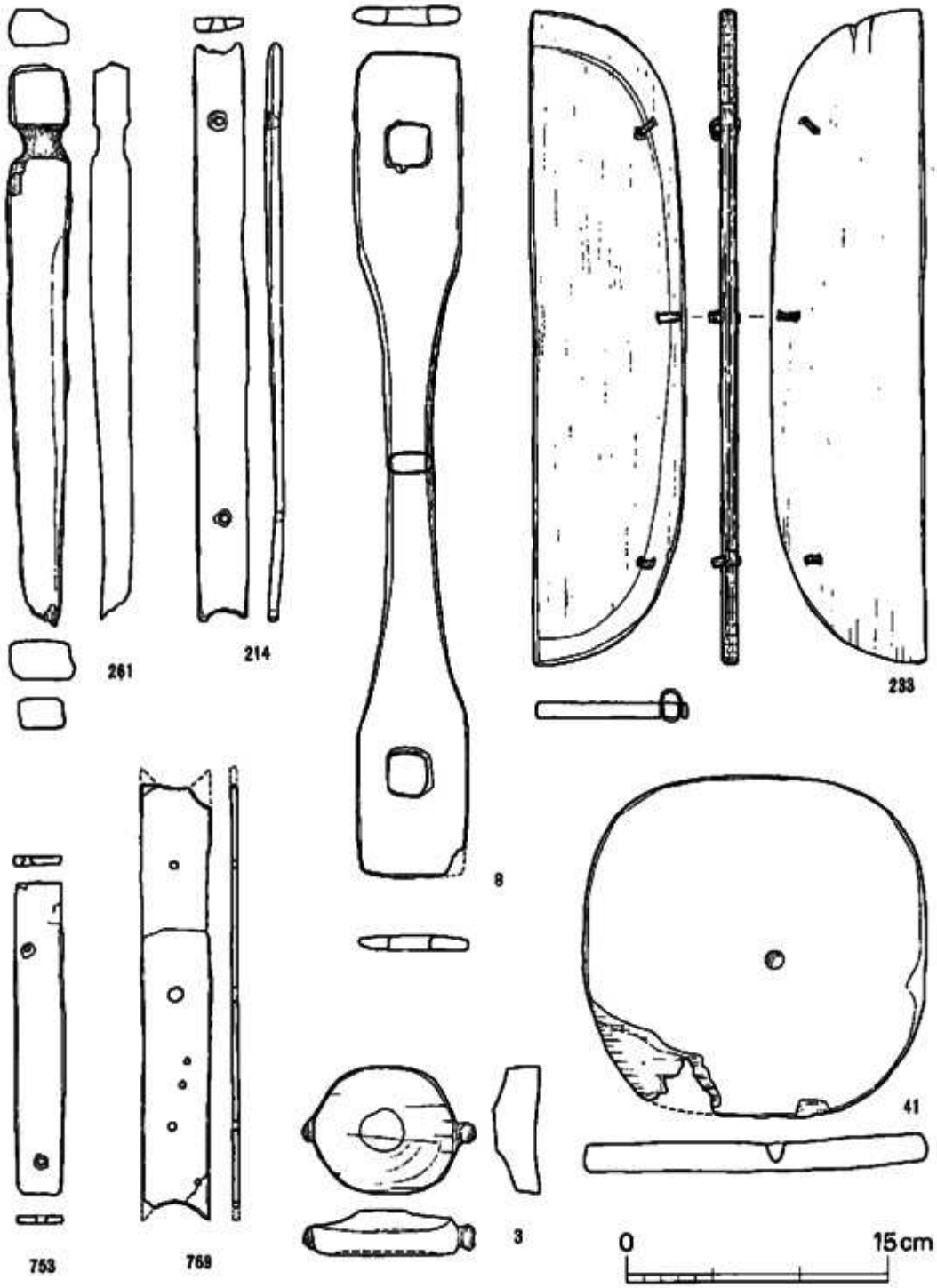
容器蓋（図版80，第82図） ３はＣ７区第６層上部出土の完形資料で径７～８cmの不整円形で，高さ 2.3cmの蓋で，長径方向に対応する小さなつまみが付く。おそらく紐をかける為のものであろう。41は一辺20cm程度の隅丸方形で 1.7cmの厚さを有する。中央部に小孔が中途まで空くが，その用途は不明。樹種はシラカシ。この他図版80(244)の大形円形板も容器蓋として使用されたものであろう。樹種はカゴノキ属。

曲物底板（図版80，第82図 233） Ｄ８区第６層上部より出土した。３分の１程度が残存し，長さ37.4cm，現存幅 8.7cm，厚さ 0.9cm。側板は残らないが，外縁から 1.5～２cm内側に側板の接していた痕跡がみとめられ，３ヶ所にカバ綴も残る。カバ綴の部分は約１cmの間をおいた小さな２孔に桜の皮状のものが通り高さ0.5～0.7cmの高さで巻かれている。底板の樹種はヒノキ。

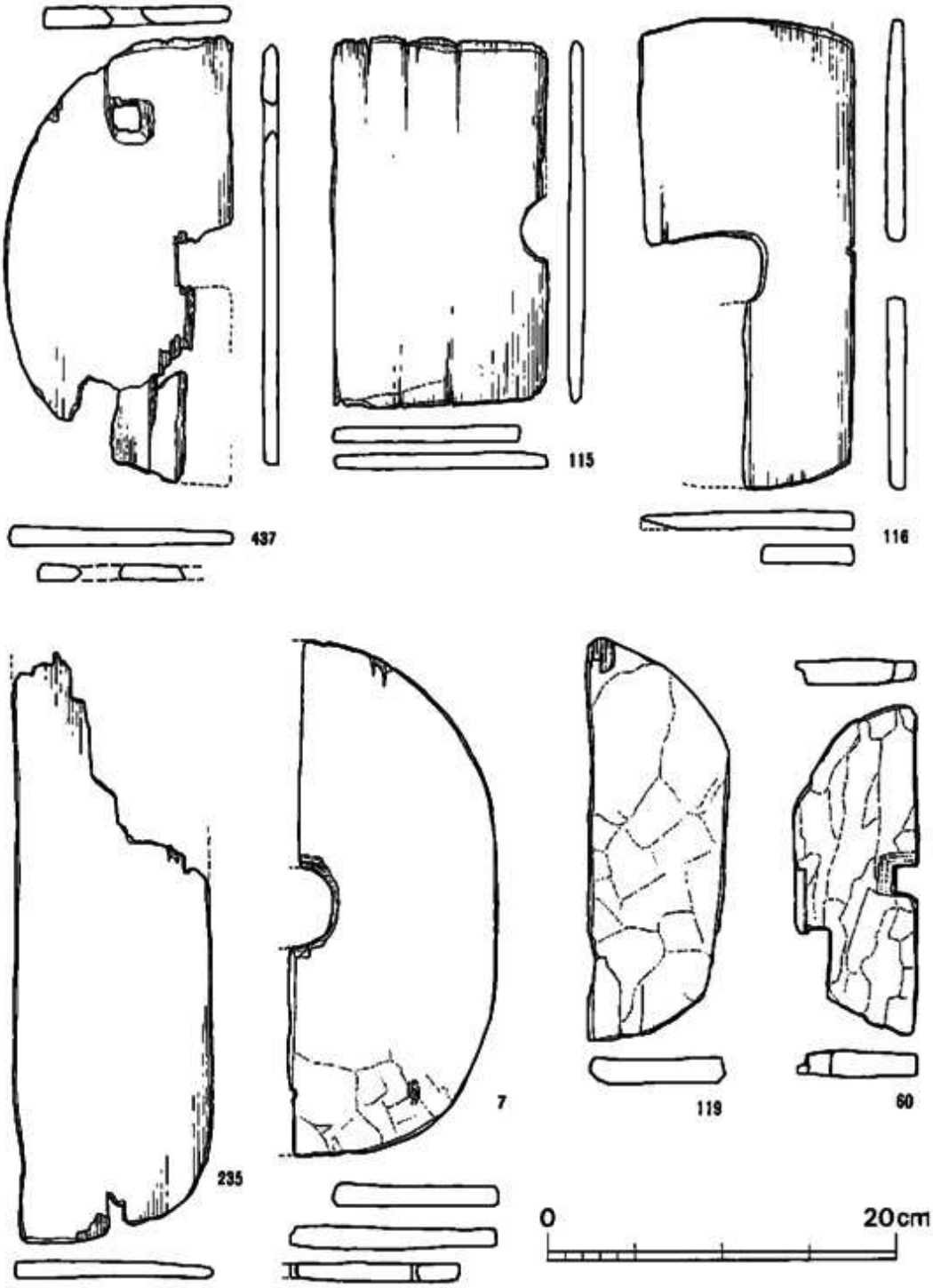
円形の小孔を有した板材 （図版79，第81図） 768はＣ４区の第６層上部に出土した半円形



第 81 図　II区出土杓子・紡錘車・漆塗容器，その他実測図
(1/3)　(1/3)　(2/3)　(1/4)



第 82 図　II区出土紡織具、容器蓋等実測図（1/4）



第 83 図　II区出土孔を有した円形板状製品等実測図（1/4）

の板材で上縁は反り返る。上縁からやや下位に対応する２孔が穿たれ，紐で結えて垂らすような役割を果したと考えられる。Ｃ８区第６層下部出土の 768資料も同様の形状を呈している。また28資料は孔を有さないが，同様の形をしている。 176はＤ10区の第６層上部から出土しているが，半欠資料で，中央部に約４㎝四方の孔も，空いていたと思われる。また第84図 405資料はＢ３区第６層下部から出土しているが，長さ45㎝・幅５㎝の板材で２孔が穿たれており，１孔には紐の残欠が残る。

孔を有した円形板状製品（図版81，第83図）　外縁が円弧を描く板材で方形，円形の孔を有したものを一括した。但し，明らかに建築部材として考えられる大形の同形品であるねずみ返しは除いた。７・60・ 116・437 資料があり，それぞれＢ７区・Ｄ10区・Ｂ７区・Ｄ９区の第６層上部から出土している。７・ 116は円形の孔を中央に穿った例で，60・437 は方形の孔が穿たれ，中央以外にも孔あるいは切り込みを有す。用途が異なるものであろう。むしろ後述する項に含めるべきであったかも知れない。なお円形板材になるか否か不明であるが，Ｃ５区の第６層上部出土の 115資料も円形の孔を有している。

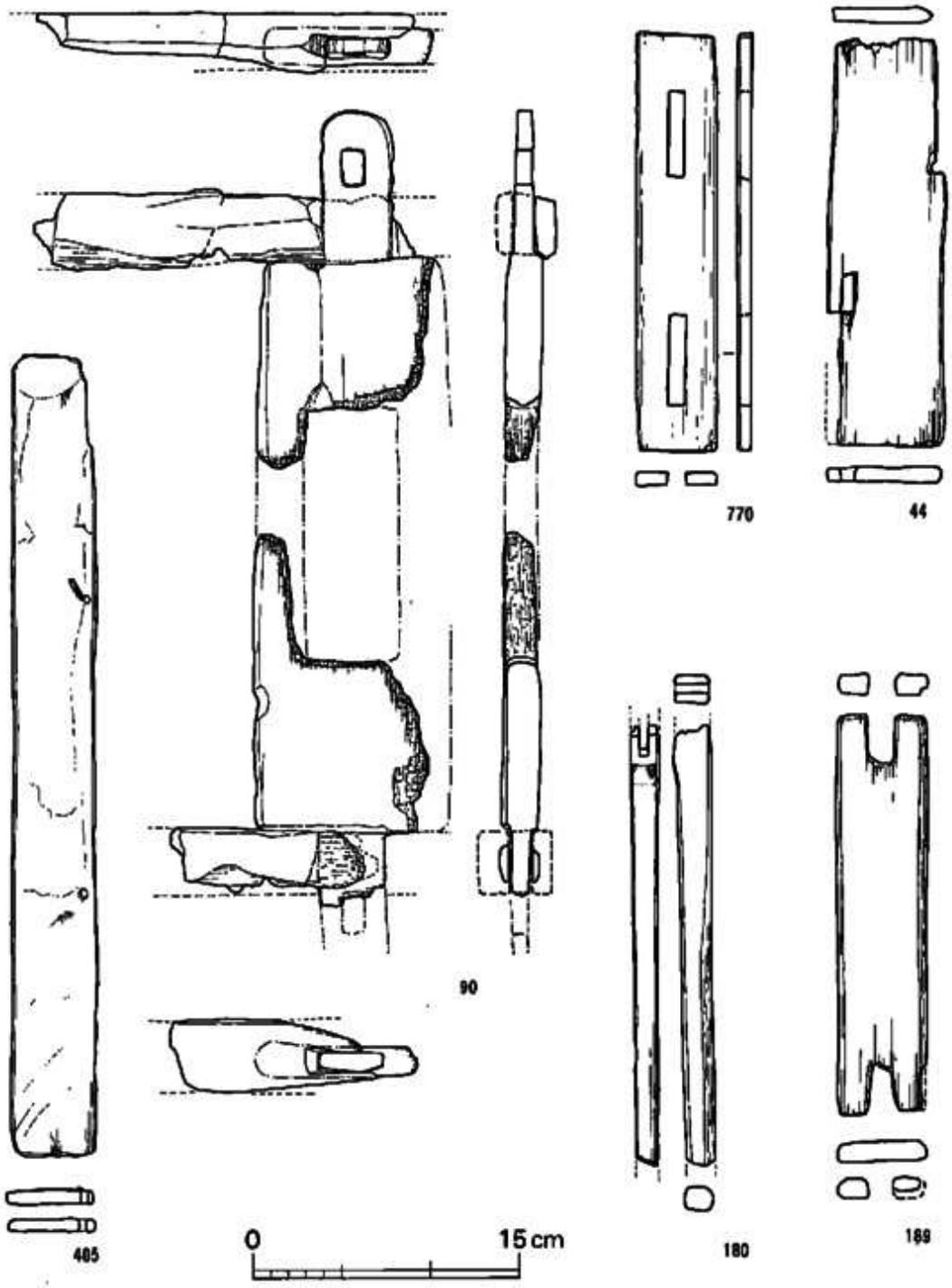
この他，孔を有さない 119・ 235資料がＣ８区・Ｄ８区の第６層上部から出土している。両者とも破片のため孔を有していたか否か不明。

枘・枘孔を有した板材（図版82～85，第84～89図）枘・枘孔は部材を接合する為の加工であり，組み合わさった例の一つとして第84図の90資料がある。Ｄ10区の第６層下部から出土し，幅広な部材の両端に他の角棒状の部材を接合している。両方の部材とも焼け焦げあるいは折損している為に全体の形状はわからないが，枘の接合のあと更に飛び出した部分の枘孔に，くさびあるいは別の部材を挿入して固定する形態をとっている。樹種は幅広な部材がツクバネガシ・角材状の部材がマンサクである。なお，図上の復原は出土時の状態による。

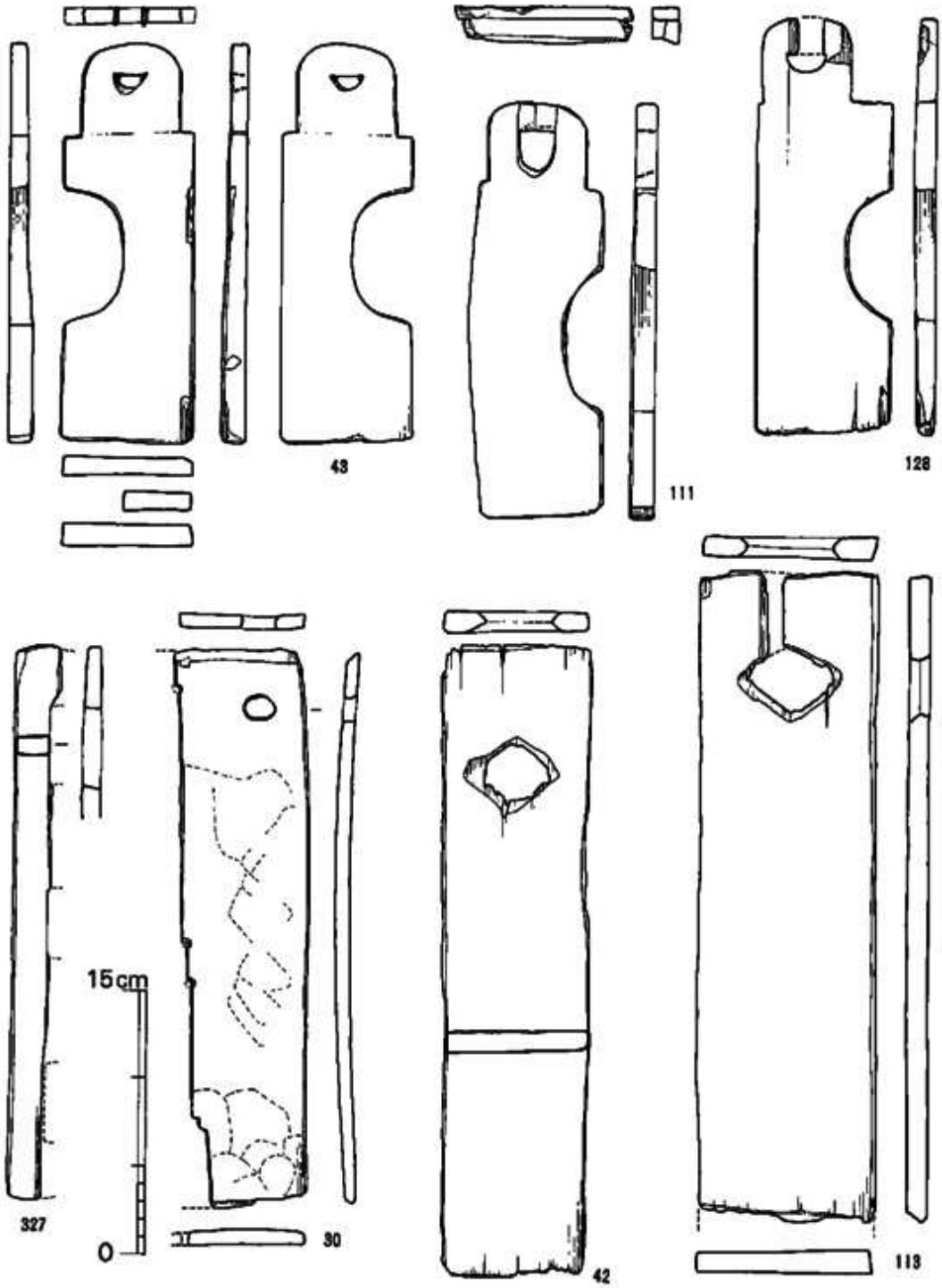
770は，長さ23.5㎝の板材で約８㎝の距離をおいて長軸方向に２つの枘孔を穿った例でＢ７区第７層より出土した。この種の部材は他に６例あり，図版82に示す47・ 112・ 216・ 230資料も含まれる。これらの７点の部材を仮に「Ａ類」として地区別分布を第86図に示した。なお47資料を樹種同定供試資料としたがスギという結果をえた。

44・ 189は，Ｂ３区・Ｃ７区の第６層上部から出土し， 180はＤ９区の第６層下部から出土した。

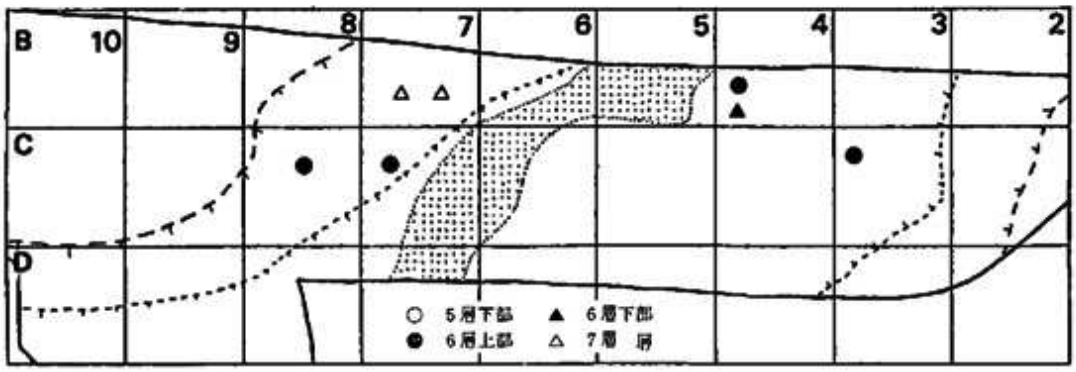
第85図の43・111・128は，一方の側縁に「Ｕ」形の抉りを有し，ほぼ同様の形状をしている。このような形状の部材が全部で11点出土しており仮に「Ｂ類」として地区別分布を第87図に示した。43はＣ７区の第６層上部の出土で，側縁が直線的である。 111はＣ８区の第６層下部出土で，上部の孔に別の材が挿入された状態で出土した。側縁が円弧を描く例である。 128はＢ６区第６層上部出土資料で，枘の位置の片寄る例として示した。図版83に示す 461資料を樹種同定し，アナナロという結果を得た。



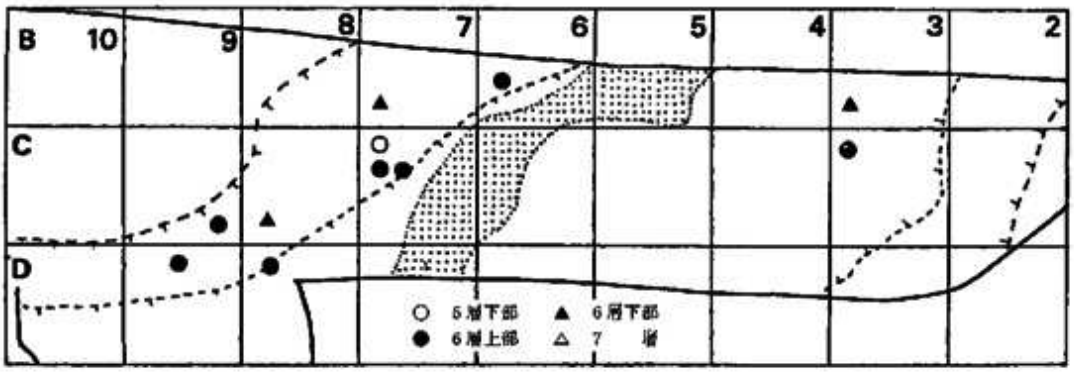
第 84 図　II区出土柄・柄孔を有した板材実測図 1 (1/4)



第 85 図　II区出土枘・枘孔を有した板材実測図 2 (1/4)



第 86 図　II区出土枘を有した板材(A)の地区別分布



第 87 図　II区出土枘を有した板材(B)の地区別分布

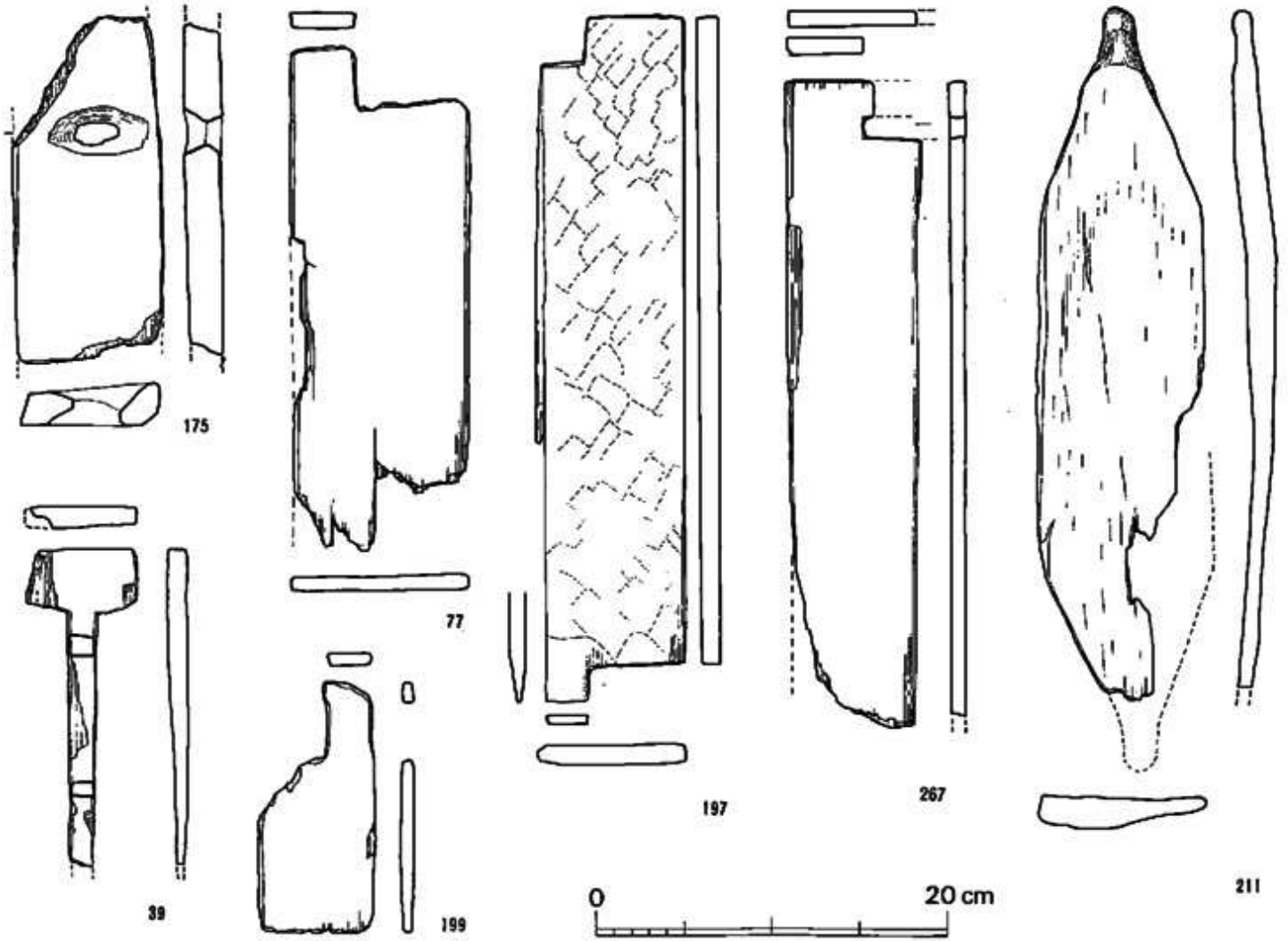
枘を有した板材のA類の枘孔の規模とB類の枘の規模はよく似るが，80資料の如く挿入してみてもB類の半円形の孔・あるいは 111資料の円弧を描く側縁の用途が理解できない。

しかし、大分県安国寺遺跡では，A類の板材と酷似する資料が，B類に似た板材と組み合わさった状況で発見されている（第89図)。想定されている組み合わせの形状は，辻田遺跡の形状とやや異なる。

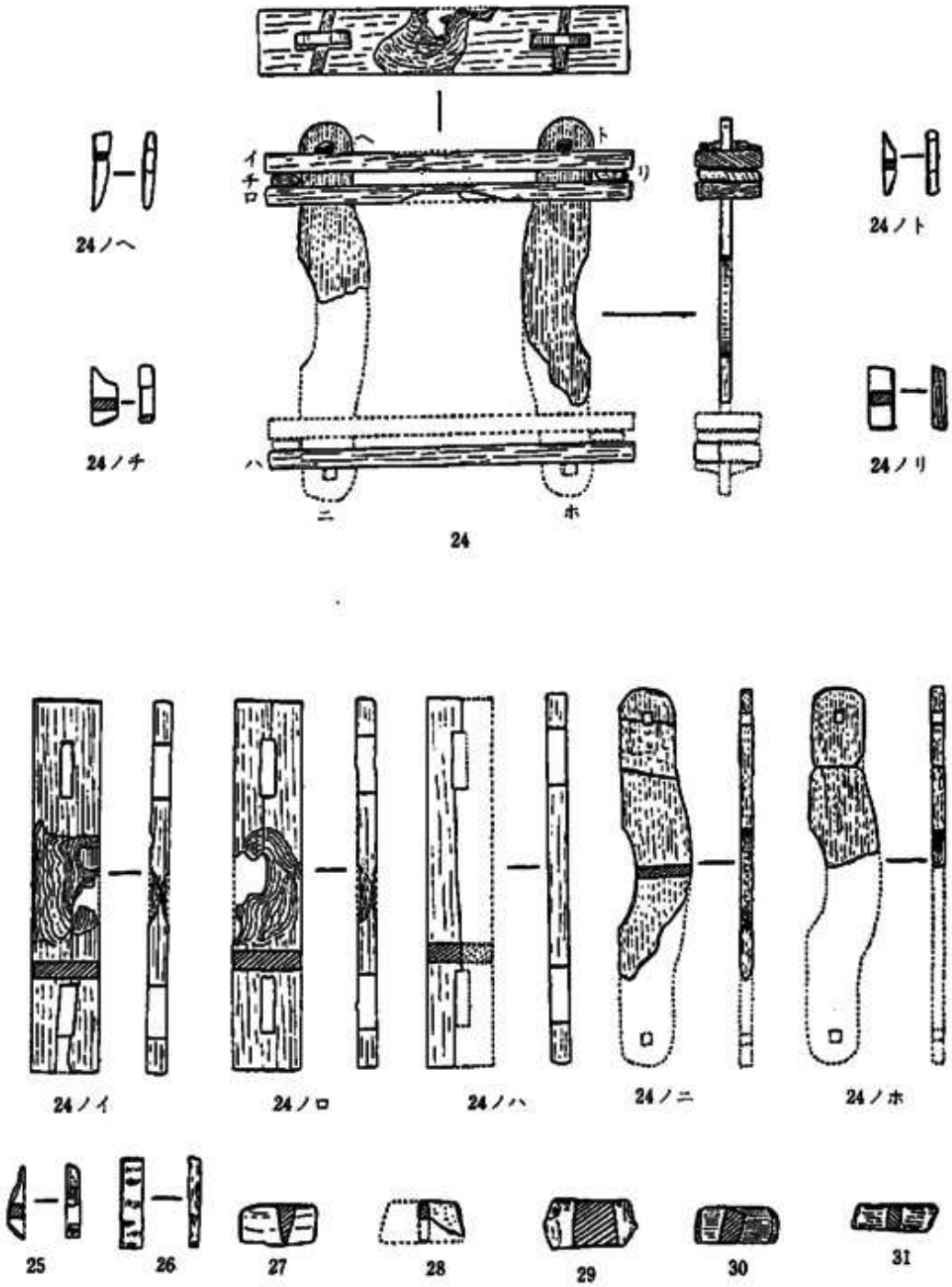
第85図に示す，30資料はB7区第7層出土で楕円形の枘孔が付く。楕円形の枘孔は建築部材の中にもみられる。42･113は菱形の枘を有しており，それぞれ，B4区・C4区の第6層上部から出土している。

第88図39は，枘というより栓あるいはクサビという用途を考えるべきであろう。D9区第6層上部出土でカシ材。なお211資料については，農具の項で前述している。

これらの用途不明の板材にはスギあるいはそれに近い針葉樹材を使用したものが多く，材の木理が細かく割り易い。軽くて加工し易いという性質を充分に活用しているといえよう。



第 88 図　Ⅱ区出土柄・柄孔を有した板材実測図 3 (1/4)



第 88 図　参考資料（大分県安国寺遺跡出土例）（1/6）

(8) 琴（巻頭図版1，図版86・91，第90・91図）

特殊な木製品として，琴板と考えうる資料が2点出土している。1点はB7区の第6層上部にほぼ完形の状態で表側を上にして埋まっていたものである。あと1点は，B8区の第6層上部に堆積した多量の土器片に被われるようにして発見された。前者を778資料・後者を787 資料としているが，ここでは琴1・2号として記述する。なお出土状況の写真は，図版29～30及び38に掲載する。

琴1号　（巻頭図版1，図版86，第90図）　全長148.4cm，最大幅29.4cm，最大厚2.0cmを測る。全体の形は一端の幅が最も狭く3段階の広がりをもち最大幅を測る部分から端部に6本の突起を造り出している。

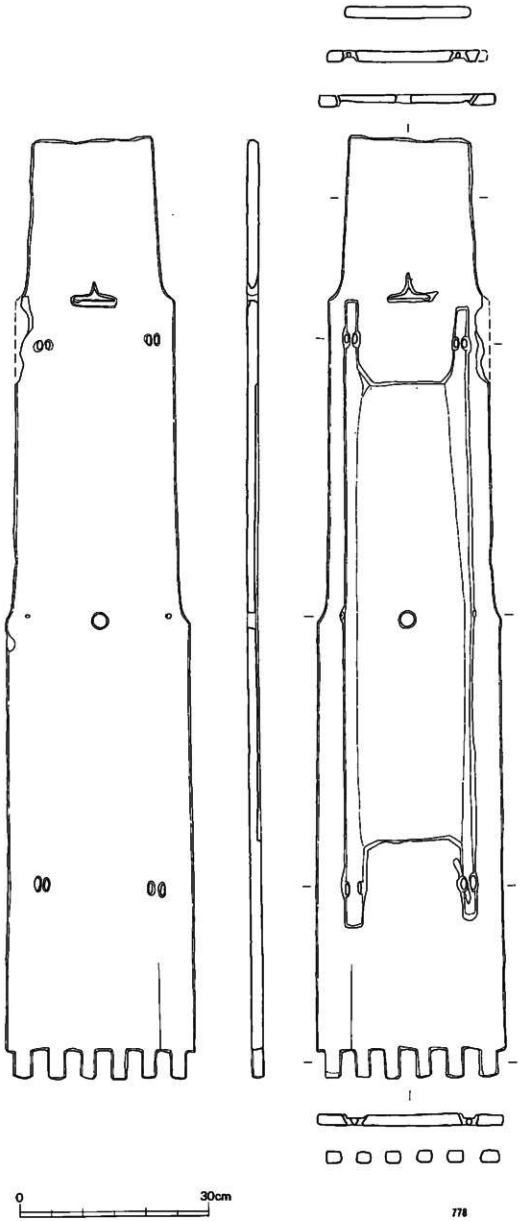
最小幅を測る端部は，幅19.3cm・厚さ1.8cmで，徐々に広がりながら，端部から22cmの位置では幅21.2cm，厚さ1.8 cmを有す。この位置から2段階目の肩にあたる部分までは4 cmであるが，肩の一方を欠失している。復原値にすると幅25.2cmで，弧を描きながら広がる。この両肩を結ぶラインの中間に、ラインに沿って長さ65mm・幅2～6 mmの孔を穿ち，更に中央では幅17mmに達する切り込みになる。

2段階目はほとんどまっすぐに伸び，端部から73cmの位置で，幅26.3cm。3段階目の肩は，端部から76.0～76.5cmの位置になり，幅28.8cm。この部分も弧を描きながら広がる。また，両肩の中間には直径22mmの孔が穿たれる。

3段階目は長く幅広で，端部から143.5～144.5cmの位置で最大幅となる。幅の広い方の端部に造り出される突起は，両側面からそれぞれ1.2cm削り込み，更に2～2.5 cmの抉りを5ヶ所施すことによって6本を得ている。最大厚2cmはこの突起部にある。

一方、片面には，側縁に平行する，2条の溝を9mm程度の深さで，95cmと98cmの長さに掘り込み，2条の溝をつなぐようにして，長さ71cmにわたって内側を削り取っている。即ちこの部分は，全体の中央がややもり上った「⌒」形の凹みを呈しているのである。またこの溝は1.5～2.5cmの幅を有し，溝の両端部では，それぞれ対になる孔（長径20mm、短径10mm程度）が穿たれ，中間の外側面には直径5 mmの小孔がみとめられる。前者の孔は溝に対して両側から入る方向に，後者の小孔は溝に対して反する方向になっている。樹種はモミ属。

琴2号　（図版91(787)・第91図）出土時には全長約1 m，最大幅33cm程度で突起のある方がやや広い状況で検出されたが，厚みもなく脆弱で大半は細かく崩れてしまい，わずかに3分の1以下を残す程度である。現存長87.2cm，現存幅11cm・最大厚1.7cmを測る。端部の突起は側縁から0.7cm削り込み2.8cmの間をおいて2.5cmの幅を抉って造り出されており，長さ6.5cm，厚さ1.7cm。現存するのは2本のみである。この突起は1号琴の突起に比して長く先端は細い。また突起の端から，28～31cmの位置に幅8 mmの孔が一対穿たれている。1号琴にみられる如き溝等



778

第 90 図　II区出土琴1号実測図（1/6）

の施設はみられないが，厚さは側縁で1.5cm・内側で0.8cmと内側に薄くなる。樹種はスギ。

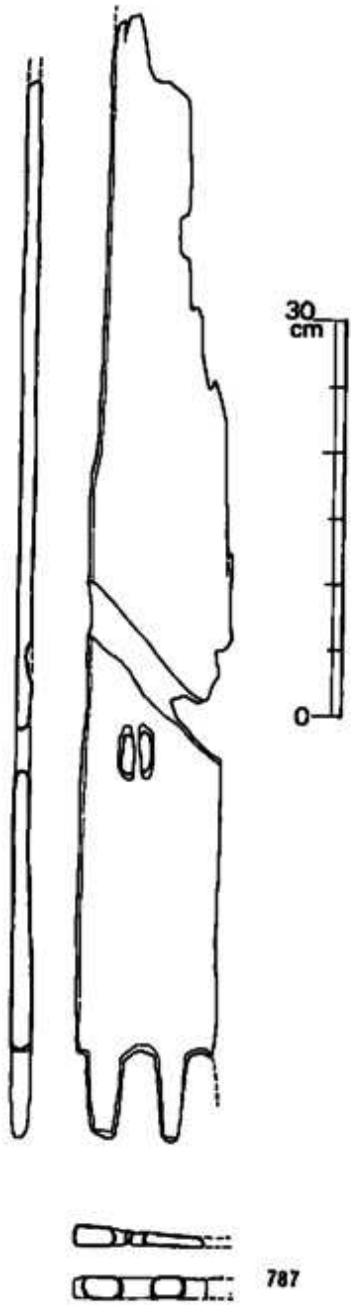
なお琴1，2号と同様の突起を有した部材が3例ある。図版88・90，第93・95図に示す，788資料と32資料で，前者はB7区第6層上部で琴1号の近くに出土し，後者はC8区第6層上部で出土した。788資料は全長81.5cm，現存幅15.8cm，最大厚2.5cmを測り，長さ約8cm，幅25.～3cm，厚さ2cmの突起が2本残るが，琴1・2号にみられる様な孔はなく，樹種未同定。32資料は，全長41.2cm・最大幅17.6cm，最大厚2.2cmで突起が1本残る。突起は幅2.5cm，厚さ1.8cm，長さ6cmを有すが最大幅からみて3～4本の突起が付く程度であろう。スギ材を用いたと思われるが，この資料にも孔は存在しない。この2点とも琴とするだけの条件を備えていない。

(9) 建築部材（図版87～91，第92～96図）

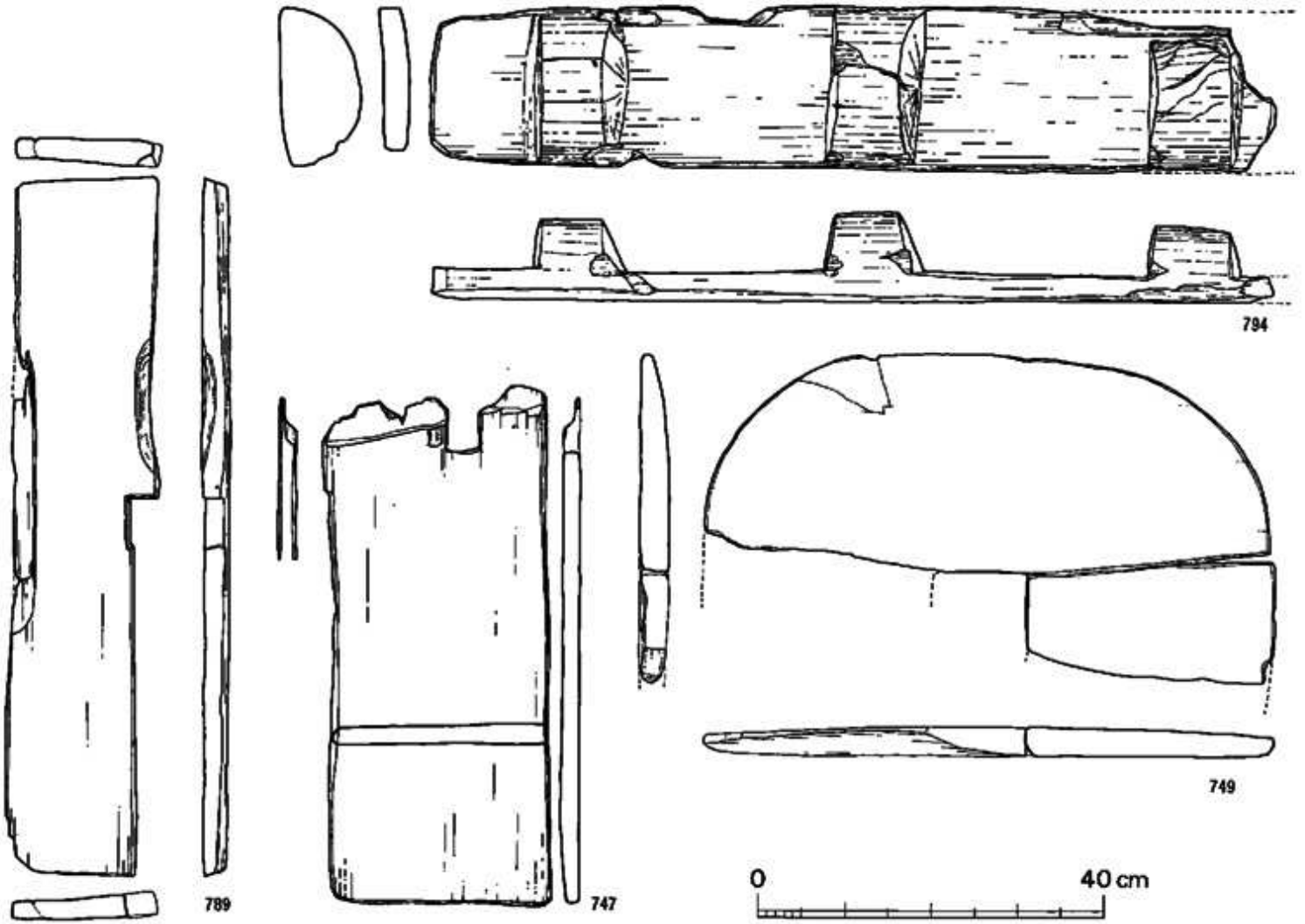
建築部材と考えられる資料として，梯子・ねずみ返し・枘・枘孔を有した板及び角材等が出土している。これらの建築部材類の地区別分布は第94図に示す。なお図版・挿図に含めない資料にも多くの建築部材が出土している。

梯子　（図版87，第92図）　2点出土しているが，794を実測図に示した。現存長99cm・最大幅19cm・最大厚10.5cmを測る。丸太材を半截し，樹皮側を表側に用いて削り出したもので，3段の突起が残る。板になる部分は，約3cmの厚みを有し，端部の角を削り落としている。踏台にあたる突起は，端部から12cm～23cm，45～57cm，85～94cmの部分に位置し，6～7cmの厚みを有す。なお突起は端部側に垂直，反対側に傾斜して造り出されており，板部に対する角度は前者約80°，後者約65°となる。この角度は，梯子を架けた場合に水平になることを条件にしたと考えられる。従って現存する端部は梯子の下端に相当すると考える。D9区第6層上部出土。樹種はスダジイ。

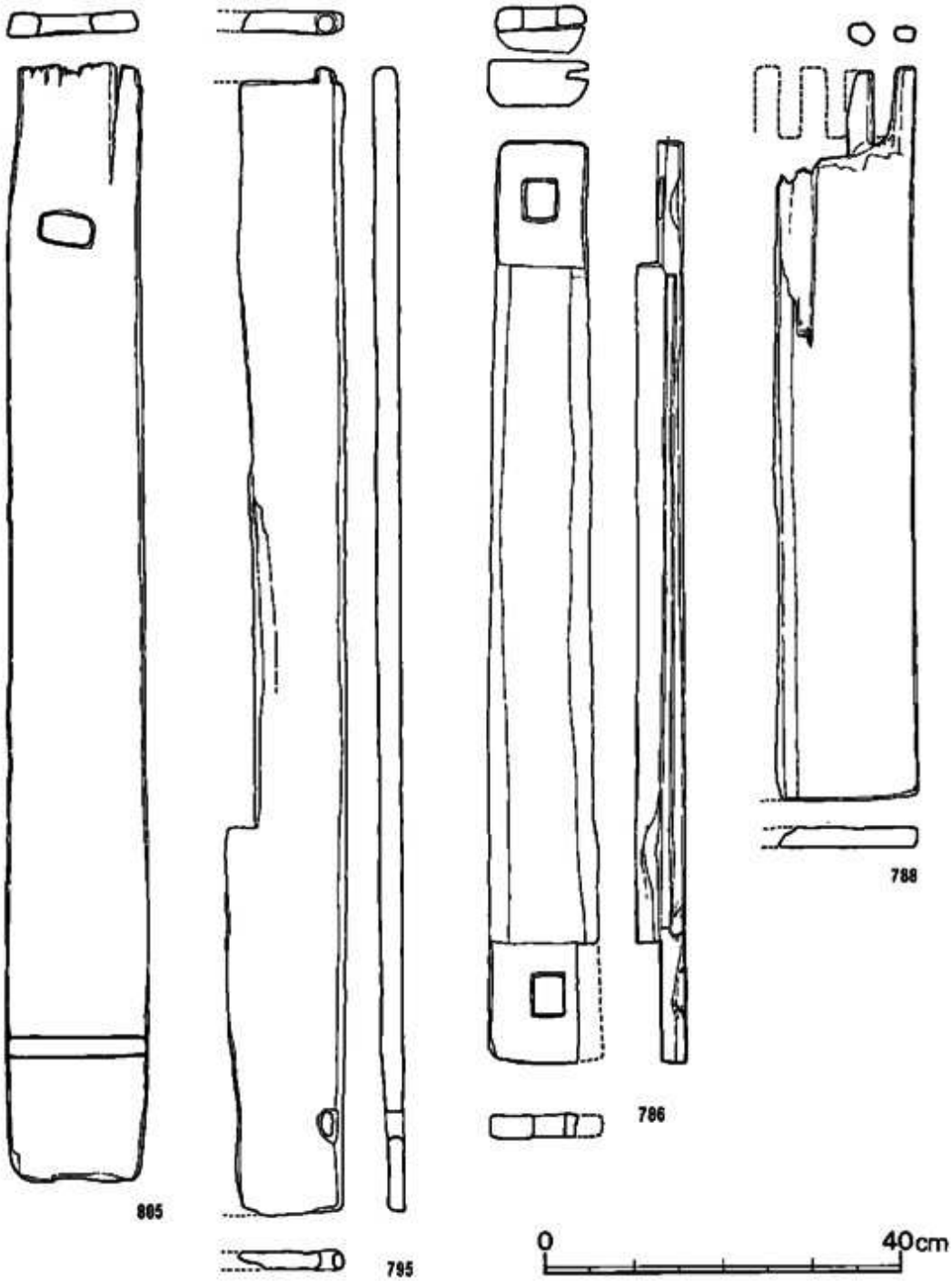
800資料は，D8区とD9にわたって第6層上部で出土し



第91図　II区出土琴2号実測図 (1/6)



第 92 図　II区出土建築部材　実測図1 (1/8)



第 93 図　II区出土建築部材　実測図 2 (1/8)

たが，現存長12.5cmで5ヶ所の踏み台を有す。樹種同定ではクリという結果を得ている。

ねずみ返し（図版87，第92図）　5点出土しているが，完形になるものはない。全体の形の知れる資料として749・806があり，いずれもB4区の第5層下部から出土した。749は長径65cm，現存する幅38cm，厚さ3.4cm。中央の孔は半分を欠失するため明らかではないが，1辺が10cm程度の方形になるものと考えられる。樹種はクスノキ。

806資料は，直径72cm，現存幅47cm，厚さ2.7cmでこれも中央の孔は9cm以上の方形になる。なお孔から周縁までは一方で33cmを有し他方は27.5cmを測る。樹種同定は行なっていない。

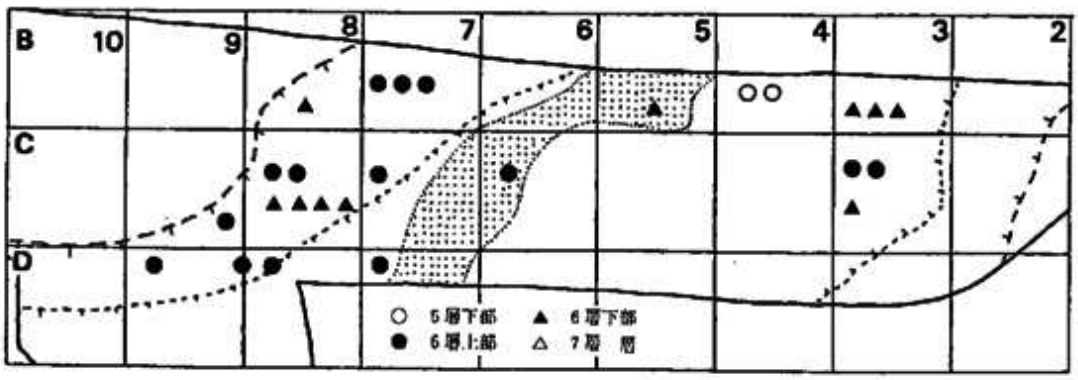
枘・枘孔を有した部材　（図版88～91，第92～96図）　枘を有した部材のなかには種々の形態がある。基本的には，通し枘と組み継ぎを用いておりL字形に接するものと，T字形に接するものが考えられる。

通し枘の例としては，117・786・795・805があり，C8区第6層下部・C3区第6層上部・C8区第6層下部・B3区第6層上部からそれぞれ出土した。

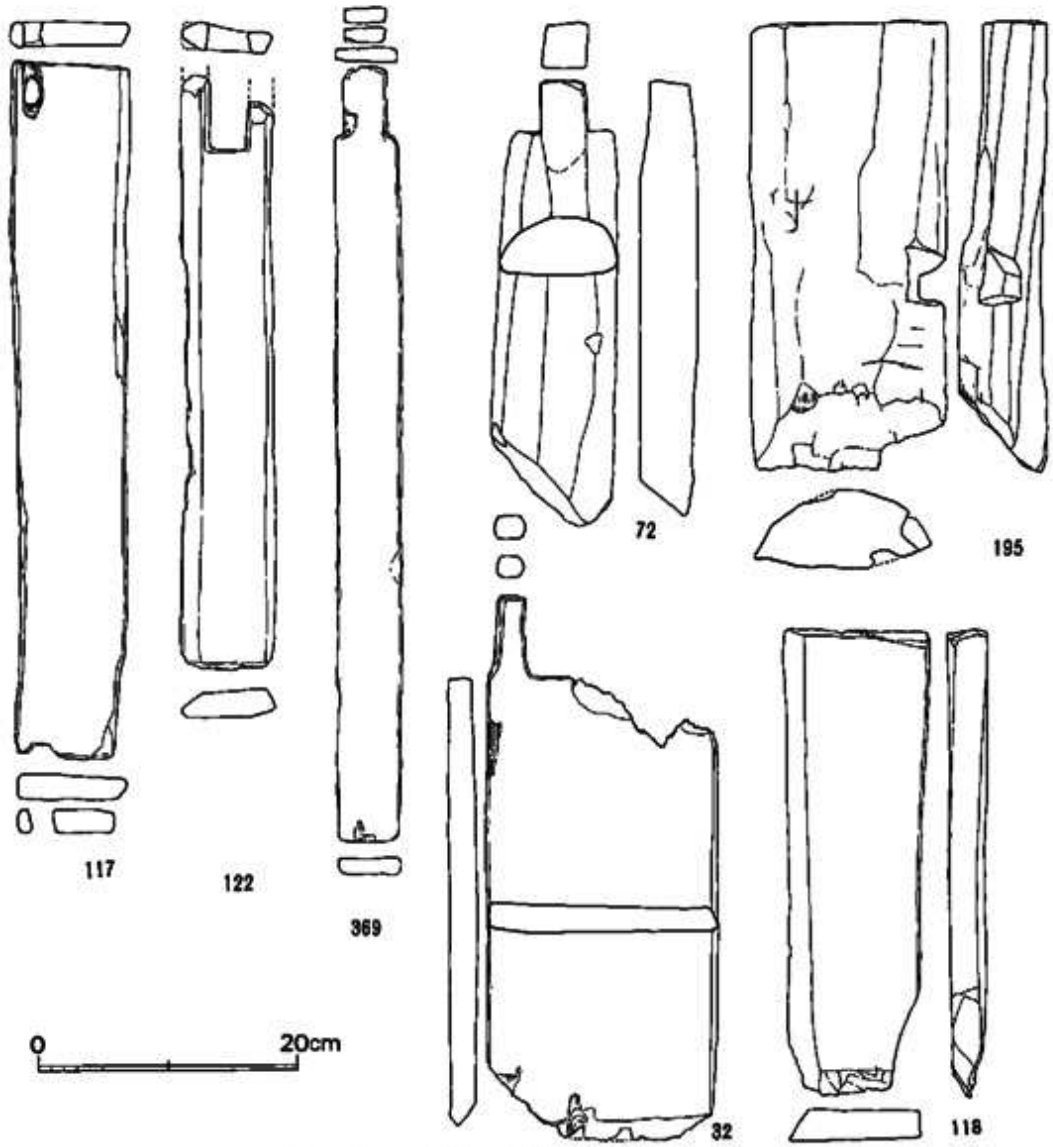
117と795は同じ小地区内の同じ層にあり形態的にも似る。端部に瘤状の突起1本を有し，反対側の端部付近に枘孔1穴を穿ったもので，枘孔と突起はいずれも片側の側縁に寄る。L字形に接する類でもある。117資料の全長32.8cm・最大幅9.1cm・厚さ1.7～1.9cm，枘の部分を差し引いた内法長は48.5cm。795は全長128.7cm，現存幅58cm。厚さ2.7cm・端部の突起は長さ1.5cm直径2.5cmの円形瘤状，一方の孔は，端部より10cmの位置の側縁寄りに長径2.7cm短径1.3cmを測る楕円形の孔が穿たれる。内法長は115cm。樹種はウラジロモミ。

786は，追入れ継ぎの方法と包み枘の方法も併用しており，手が込入る。全長103 cm，最大幅12.3cm・厚さ5.3～5.6cm両端からそれぞれ約14cmを厚さ3cm程度に削り落とし，ほぼ中央に4×3.5cmの方形の孔を穿つ。両孔の距離は84cmで，また厚みのある部分の距離は75cmを測る。また一方の側縁には幅0.6～1cm・奥行2cm・長さ72.5cmの溝が刳込まれる。

805は，全長124.9cm，最大幅9.0cm，厚さ2.5cm。端部から17～20.5cmを測る位置の中央に隅丸方形の孔が穿たれる。また一方の端部の中央はわずかであるが削り調整される。



第 94 図　Ⅱ区出土建築部材類の地区別分布



第 95 図　Ⅱ区出土建築部材実測図３（1/6）

組み継ぎになる・あるいは可能性のある例としては，32・122・195・747・778・783・789・などがある。32・778については前述している。

122・747・783・789は，Ｂ８・Ｃ８・Ｂ５・Ｂ３区の第６層下部出土，72・195は，Ｃ９・Ｃ７区の第６層上部出土資料である。122の現存長44.9cm・幅７cm・厚さ2.2cm・抉りの幅2.8 cm。195の長さ34cm・幅15cm・厚さ６cm・抉りの幅３～４cm・奥行２cm。　747は，全長61cm，幅26cm・厚さ2.4cm・抉りの幅3.7～3.9cm，抉りのある端部は３～４cm幅に削り落とされ厚さ５～８mm。　783は全長107cm・幅30～34cm・厚さ2.5～2.8cm・枘の長さは６cm・幅４cm・厚さ2.3 cm。789は全長81.3cm・幅17cm・厚さ2.5cm・抉りは5.3cm幅で奥行3.4cm。

(10) 矢 板

（図版91，第96図）

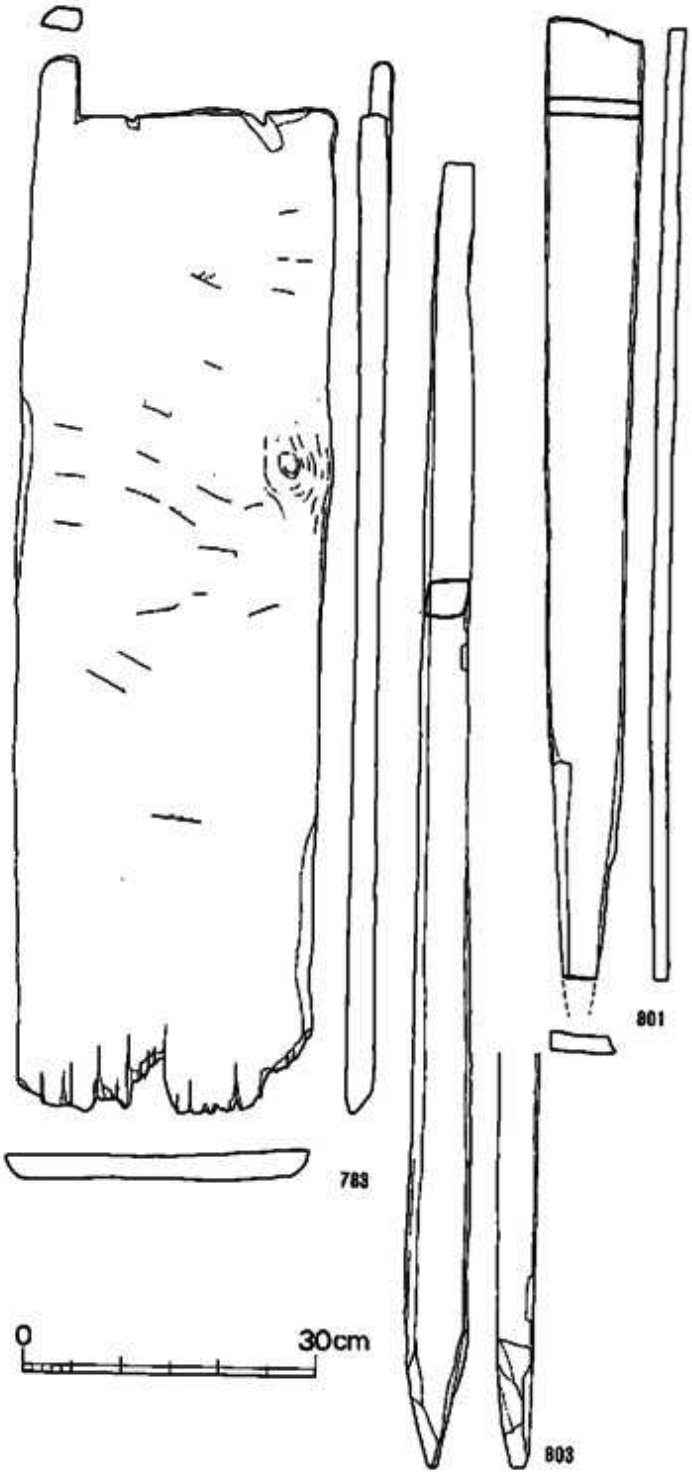
801資料はC8区の第6層上部出土。現存長97.2cm・幅9.8 cm・厚さ1.7cm，先端は削られる。樹種はカヤ。この他D8区第6層上部出土の307資料，C8区第6層下部の467資料などがある。また118資料（第95図）はB7区第5層下部出土資料であるが，全長35.5cm・幅11cm・厚さ3cmで先端を削っており，矢板に含めるべきかも知れない。

(11) 杭

（図版91，第96図）

803は，C8区第6層下部出土資料である。全長132 cm・最大幅6.5cm・厚さ3.8cmの角材で端部は6面に削られる。樹種はクロベ。

またB7区の第6層上部出土資料の丸杭802 資料は長さ13.0cmで，樹種はマツ，D8区第6層下部出土資料の丸杭804 資料は長さ67cmで樹種はユズリハという結果を得ている。



第 96 図　II区出土建築部材・矢板・杭実測図（1/8）

(12) その他の部材（図版92～101）

時間的な制約があったため実測図を作成しえなかったが，楔・板材・角材・杭・端部加工の材・焼け焦げのみられる材などの一部を図版で図示する。

図版92は，楔類である。楔類は16点あり第5層下部から第6層上部にわたってみられる。なお 118資料は前述した如く矢板に考えているが，他の資料はおおむね長さ20cm以下で，7～15cmのものが多い。

図版93～95は，板材である。(1)～(11)の木製品の破片であるかも知れない。この遺跡出土資料の中では圧倒的多数を占める。但し曲物側板に相当するような極めて薄い材はみあたらない。杉材あるいはこれに近い材の多いのも特徴的である。

図版96～97は，角材である。このうち374・545・763 資料は先端の尖った細い角材であり用途の検討を必要とするものであろう。いずれも第6層上部の出土である。また341 資料はD8区の第6層下部出土資料であるが，調査区域外にも続いており全体の形状は知りえない。顕著な削り痕を有している。また 149資料もD8区の第6層下部出土資料で，調査区域外に長く続く角材である。端部は削り調整されている。

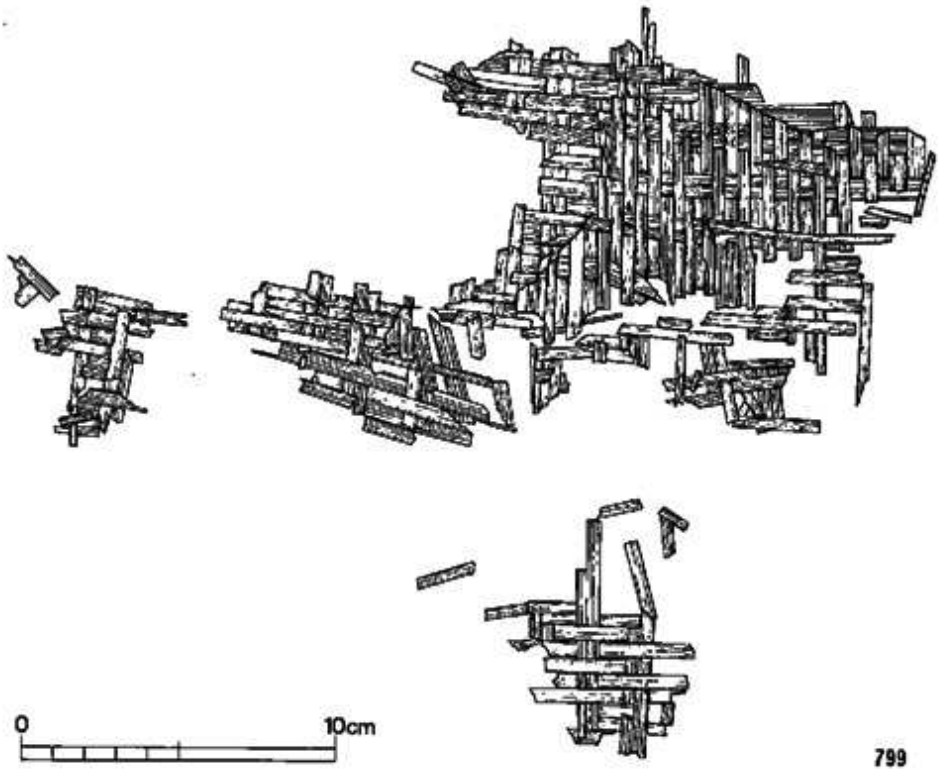
図版98は，杭とみられる資料を一括している。これらの材は，打ち込まれた状態ではなく，各種の木材と共に重なって出土したものであり，散在していたためどのような構築物に帰属するのかは知り得なかった。

図版99・100は，丸木のまま，あるいは割材にして，端部を加工した材を一括している。木製品の製作中途段階のものや 68・69・369 のように，材の端部を折り取った残欠とも考えうるもの，471のように編錘の欠損品とも考えられる資料が含まれている。

図版101は，焼け焦げの残る木材の例である。焼け焦げた木材は，D8・D9・D10区の第6層にやや多くみられた。

(13) 籠（図版102，第97図）

C8区の第7層で砂層に押しつけられるようにして検出されたが，全体の形状を知りえない。残存していた範囲は長さ29cm，幅24cmを測るが，ところどころ寸断されている。幅3～5mm・厚さ1mm程度の皮竹を用い，縦方向に1～2本分の間隔をあけて2本揃え横方向に密に並べながら，交互に通した編み方をしている。この編み方は，いわゆる「笊目編み」と呼ばれるものである。なお第97図右上方で，編み方の向きが異なっているが，本来円筒形に編まれたものが土圧によって重なり，重なる際にねじれた方向になったものと解せられる。また図上でうまく表現は出来なかったが，向きの異なる部分が皮竹でも身面が表になっており，他の部分は皮面が表になっている。このことから，この籠容器は皮竹の皮面を内面にしていたと考えられる。



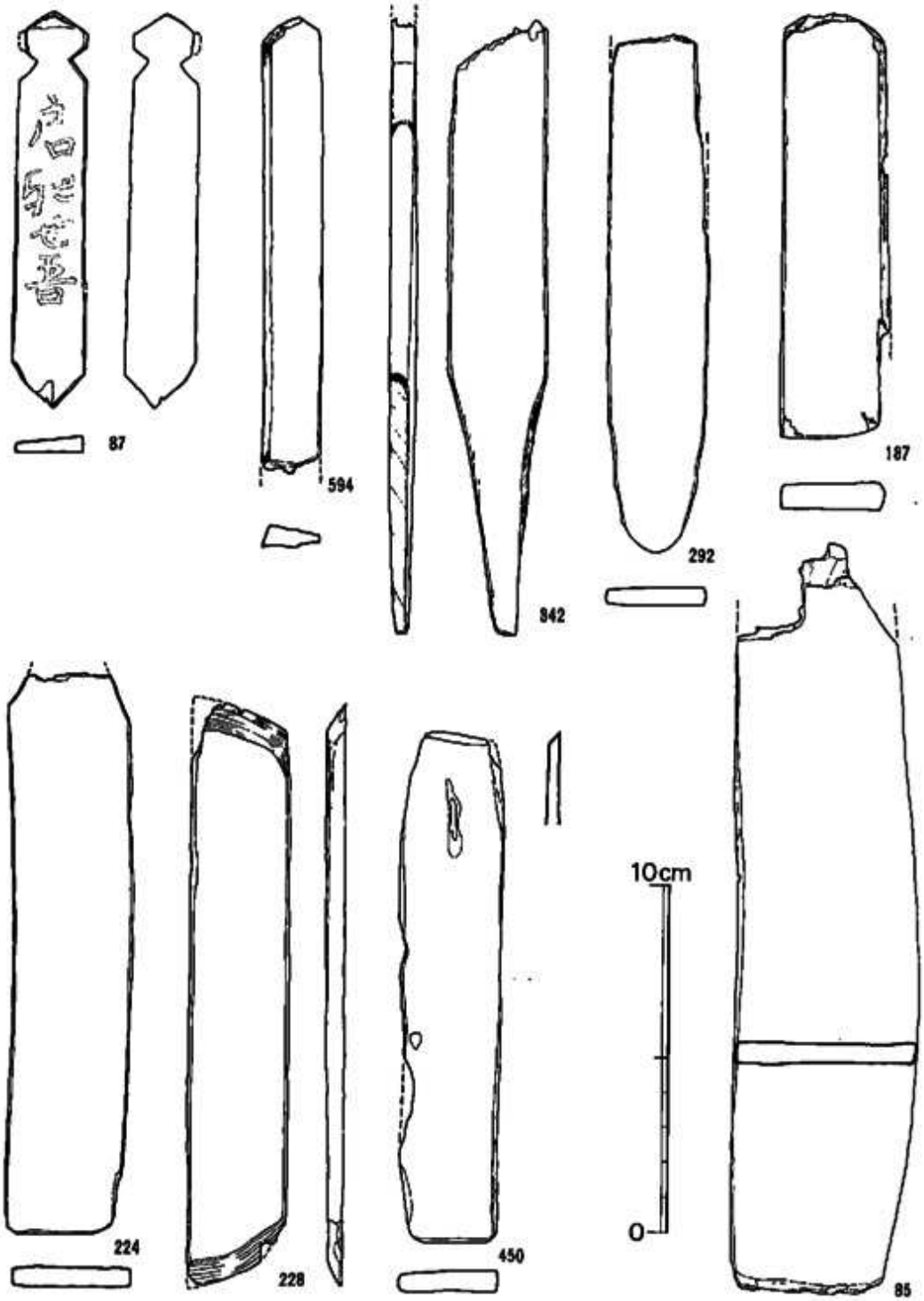
第 97 図　II区出土籠実測図（2/5）

(14) 木簡及び短冊形の木製品（図版103, 第98図）

この項では，木簡及び短冊形を呈した小形の板材を一括している。これらのうち 87をはじめとして，スギ・ヒノキ材使用のうすい板材など古墳時代以降に属する資料が大半と思われる。

87は　C 6 区の第 5 層下部より出土した資料で全長11.2cm・最大幅 2.1cm・厚さ 2 ～ 5 mmを測る。両端部は山形に削られ，上端から 1 ～ 2 cmの間には両側から「V」字形に切り込みが施されて，紐を結え易くしている。両面ともに平滑に仕上げられており，表面には墨書がみとめられる。墨書文字は，既に墨が消えて痕跡のみとなっているが，「君□□吾」の 4 文字が記されている。樹種はヒノキ。

594・187・228 はそれぞれC5・C 6 区・C7区の第 5 層下部出土の資料でヒノキ材を用いており，端部が削られている。342・292・450・85は，E10区・D 9 区・D 8 区・D 9 区の第 6 層上部から出土した資料で，342・292 はスギ材を用いており下端部を削っている。450 はヒノキで端部は削られ上部中央に不整な孔をもつ。85は樹種不明だが両面とも整えられた面を有す。224 はC 7 区第 7 層出土，スギ材で上端部に削りの痕跡がある。



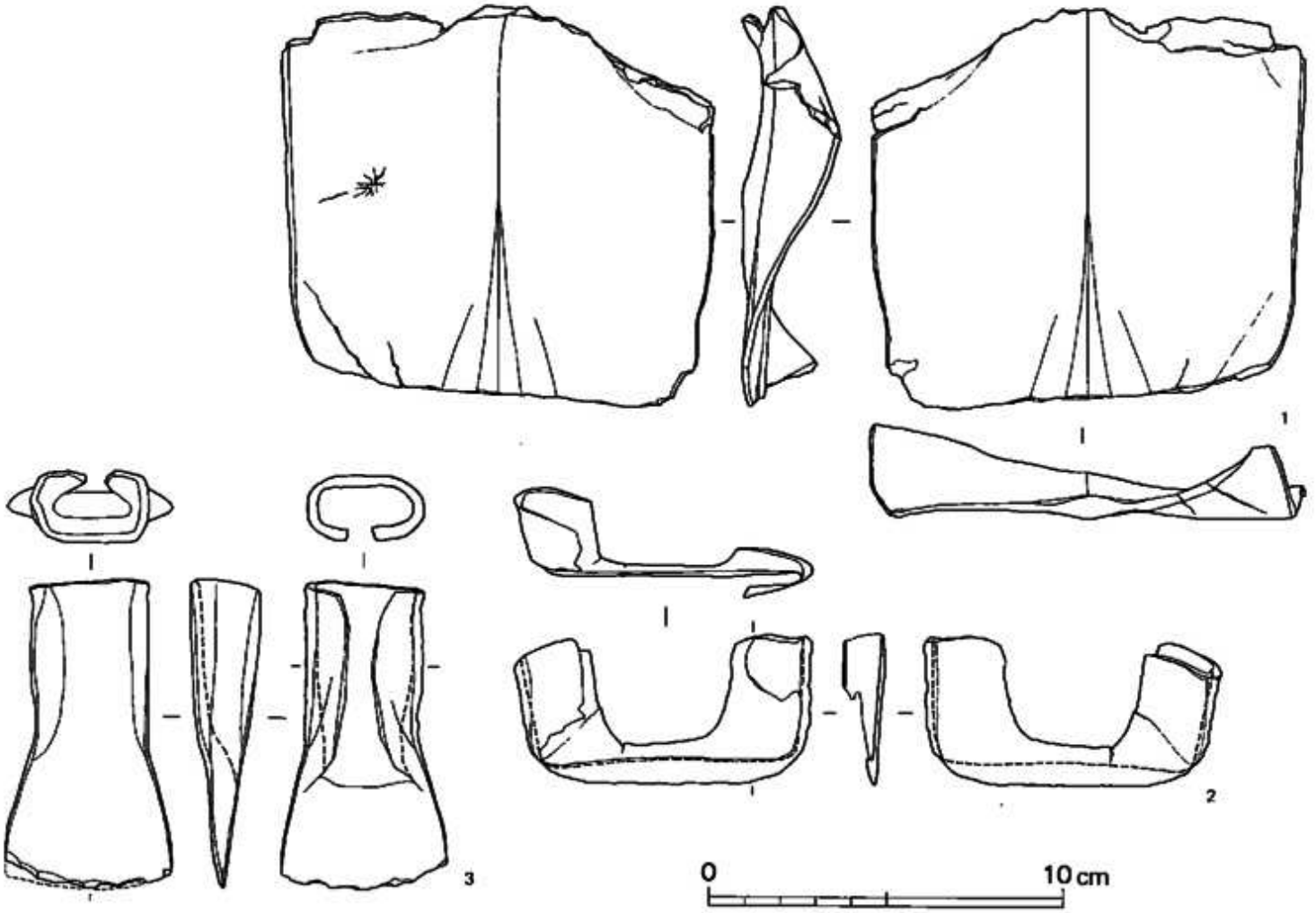
第 98 図　Ⅱ区出土木簡及び短冊形の木製品実測図（1/2）

(6) 金属製品（巻頭図版３・４，図版104・105，第99図）

１は，青銅製の銅矛片である。Ｃ６区の第５層下部から出土し，弥生時代後期後半と古墳時代以降の遺物を伴っている。木製品も含まれる湿潤な堆積土中にあったためか，出土時はややにごった赤銅色を呈して，青銅器とは思えない色調であった。また，上下の両端を折りまげられて折損しており，下端部に鐏を残していなければ，銅矛片であることすら考えつかないような資料でもある。折りまげられた際に出来た亀裂や反りが，あたかも飴のような曲り方を４隅に与えているが，鐏の部分での長さ110.5 ㎜と上端部で最大幅 125㎜を測ることができる。また厚みは，鐏の下端部で，6.9 ㎜・上端部で4.1 ㎜，側縁部で３～４㎜を測れる。最大幅とその位置及び，鐏の状態からみて本来広形銅矛の最も広がる部分のやや下位の部分を占めていたものと考えられる。なお表面は細かな気泡が多く，縦方向に走る細かな条痕様の凹凸もみられる。重量は245ｇ。

２は，青銅製の鋤先で，Ｄ10区の第５層下面から出土したが，銅矛片同様湿潤な堆積土中にあったため，出土時には赤銅色を呈していた。全体の形状は，２ヶ所に亀裂が入って反り返り片びらきになっているとはいえ完形であり，無突帯形式のＵ字形を呈す。全長4.2㎝・復原する袋部の幅84.5㎜・袋部の厚さ12㎜で，袋部での外側縁から内側縁は各々22㎜を測る。刃部は鋭い片刃で，長さは，刃の側 7.5㎜，反対側11.5㎜，幅は71.2㎜を測り，袋部内法は，深さ35㎜，厚さ６～ 9.5㎜，最大幅80㎜を測る。表面は酸化による為かアバタ状の凹凸がはげしく刃部の詳細な観察はなしえないが，かなり使用したものであろうか，刃部及び刃部の左側はかなり薄くなっている。また袋部も片刃になる側は反対側に比して極端に薄くなっている。37.3ｇ。

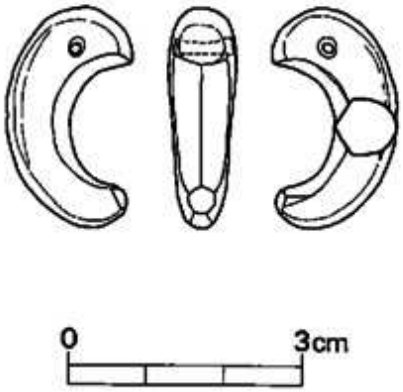
３は　袋状の鉄斧で，Ｃ８区第６層上面で出土した。第６層上部は，弥生時代後期後半の土器を多量に含み，若干古墳時代以降の遺物を含む層である。これも出土時は光沢を有し銀色に近い灰白色を呈していた。刃部先端を約４㎝幅欠失するが全体の形状の知れる資料で，全長88㎜を有し，わずかに窄まるが直線的な袋部と「ハ」字形に広がる刃部はくびれ部で区別され，刃部はこのうち32㎜を占める。「Ｃ」字形断面を有す袋部の最大幅34㎜，厚さ20.3㎜，刃部最大幅は47.5㎜で，くびれ部の幅は32.5㎜。袋部の内法は深さ43～50㎜，幅27.5㎜，厚さ16㎜を測る。刃部は鋭く両側から尖るが，袋部の折り返される側の面により長く平坦で，反対側との差は約30㎜ある。表面はわずかながらも銹化の凹凸がみられるほかは使用痕などは不明。鍛造品で重量は132.7ｇ



第 99 図　II区出土金属製品実測図 (1/2)

(7) 玉 （図版105・第100図）

勾玉1点がC4区第6層上部に出土した。光沢のある暗青灰色を呈しているが，滑石に近い蛇紋岩を素材としている。長さ28mm・厚さ4～8.7 mmを測り，孔は両面から穿たれ直径 1.5mmと細い。丸味をもちながらもわずかに稜を有す，背面は直径30mm程度の弧を描いて肉厚の頭部と細い尾部をつなぎ，長さ17mmの腹部は中央に明瞭な稜が通る。全体に細かな調整が施され平滑であるが，腹部には，尾部から頭部に向って削った痕跡が残される。孔に糸を通して垂らすと尾の先端が約5mm頭部より前に出る。

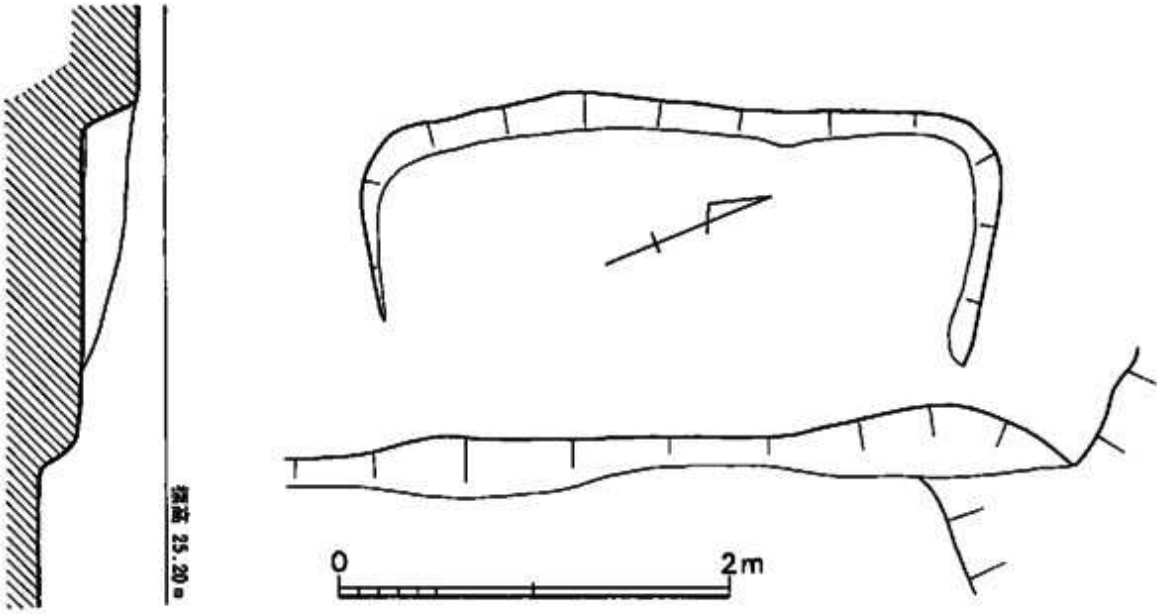


第 100 図　II区出土勾玉実測図（実大）

4. 竪穴状遺構（弥生時代）（第101図）

C9区南東寄りの標高25.4 mから落ちる段の上部に位置する。段落ちに沿った辺3.2 m，壁高25cmを測り，隅丸の形で段に向って他辺が延びるが，約1 mで壁は消える。この遺構は大溝の肩部にも位置し，C9区の肩部に集積した土器片・木材等を除去して確認できた遺構であり，上面ではこの輪郭は検出されなかった。従ってC9区第6層上部堆積土より下る時期のものとは考えられない。また遺構内の堆積土は、周辺の第6層上部の堆積土と区別できず，堅緻な床面にみられた土器片も第6層上部中の土器と時期的に区別できる資料ではない。周壁の一方が大溝肩部になるために消失することを考えると，大溝によって削平されたことと，大溝と同時存在の両方可能性がある。しかし，大溝による削平があったとしても，削平後の堆積と時間的に大きな隔りがないと云えよう。柱穴や炉等の施設を有さないことから，住居跡ではなく，水辺に占地し，水と関わりの強い施設が考えられる。この遺構の前方が大溝内でも平坦な部分をなすこともこのような性格を想定し易い。

なお出土遺物については，床面にみられた土器が器形を明確に表しえるものではなく細片が多いので図示していない。また木製品では，平鍬・三叉鍬・竪杵・横杵が，この遺構の部分の堆積土から出土しているが各木製品の項に一括している。



第 101 図　II区竪穴状遺構実測図（1/40）

5．土壙（弥生時代～歴史時代）（図版106～111，第102～111図）

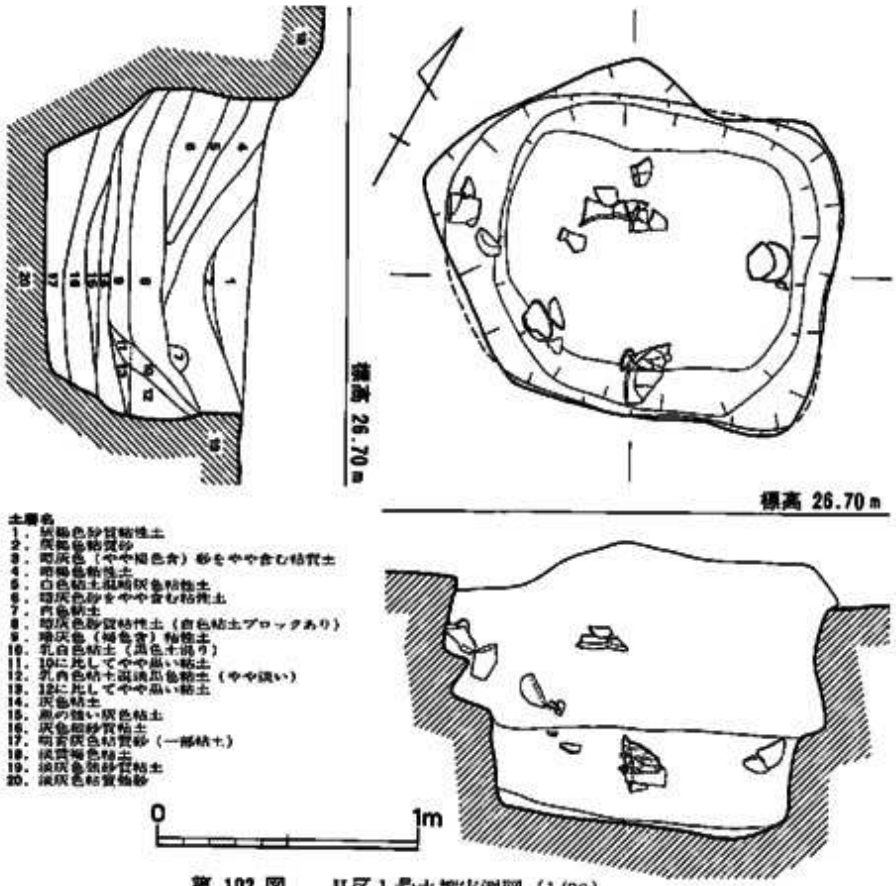
土壙は７基検出され，大溝を挟んで西側に１～３号，東側に４～７号が位置する。このうち１号及び４～６号が弥生時代に属し，２・３・７号は歴史時代に属す。このため記述は1・4・5・6・2・3・7号の順としている。

(1)　１号土壙　（図版106，第102図）

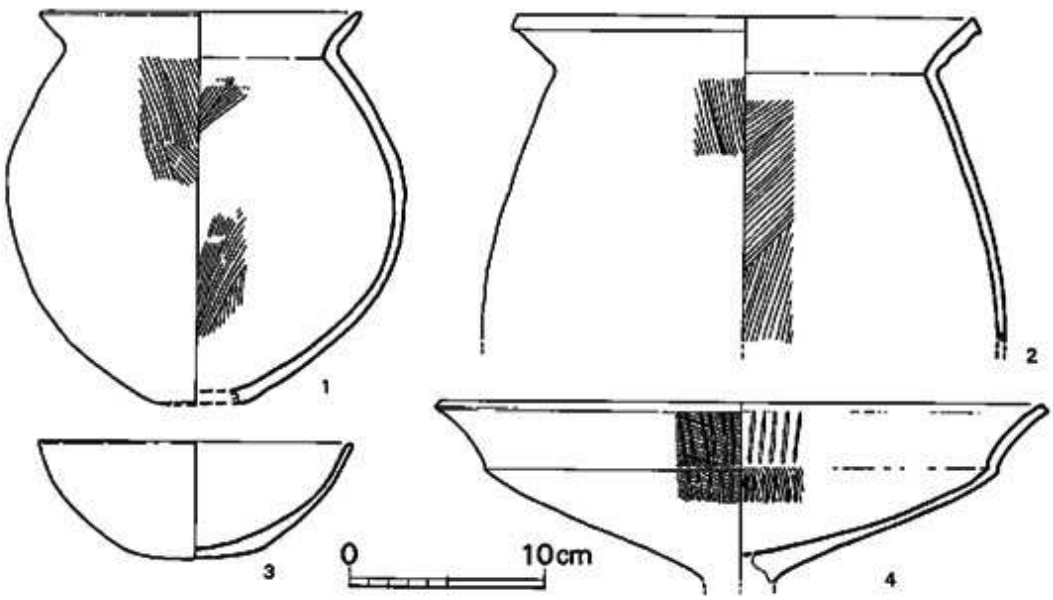
II－１区西端部のＢ・Ｃ14区で検出された土壙で，削平を受けたためか上面は不整形。中位以下はやや不整形ではあるが隅丸方形に近い平面形となる。上縁からの深さは１～1.1 mで，周壁の中位にオーバーハングの状況がみとめられる。上部の堆積上は灰褐色・暗灰色を呈す粘性土が北西方向から斜めに堆積し，中位は乳白色系の色調を呈す粘土を混じえた暗灰色の粘性上，下位に灰色の粘土及び空色の粘質砂が堆積している。淡灰色粘質強砂の周壁からはわずかな水の滲み出しがみとめられた。遺物は上位及び中位から出土しており，全て弥生時代後期に属す土器であった。

出土遺物（図版113，第103図）

壺・甕・椀・高杯が出土しているが，器形の明らかな４点を図示した。壺形土器は頸部に突



第 102 図　II区1号土壙実測図（1/30）



第 103 図　II区1号土壙出土土器実測図（1/4）

帯を有し，口唇部と共に斜行する小さな刻み目が施されるいわゆる西新式土器特有の壺であるが，細片であり図示できなかった。

甕形土器　（1・2）　1はほぼ完形の甕形土器で，短く外反し，わずかに途中で肥厚しながら口唇部へ鈍く尖るヨコナデ仕上げの口縁部を有す。肩はなで肩で，丸味をもった胴部の移るが，胴部最大径は器高のほぼ中間に位置する。胴部から底部にかけては球形に近く，底部がわずかに平底をなす。全体に器面の風化が進んでおり内外面とも細かい刷毛調整の痕跡を処々でみとめられる程度であり，外面右下り，内面右上りに施されている。口径16.3cm・器高20.0cm・胴部最大径20.1cm・器厚4～8mmを測る。胎土に砂粒を多く含み雲母も混じる。焼成は並，色調淡黄褐色を呈す。2は胴下半を欠失する甕形土器で，風化による器面の剥落の著しい土器である。短く外反するヨコナデ仕上げの口縁部を有し，口唇部は外に面して下端にわずかに折れる。頸部からなで肩というよりもむしろ直線的に胴部へ移るが，内外面とも細かい刷毛で調整されている。胎土には砂粒を多く含み雲母も混じるが焼成は良で暗茶褐色を呈す。口径24cm・現存する器高16.4cm・胴部最大径26.7cmを測る。器厚は胴部でほぼ5mm・口縁部で7mm。

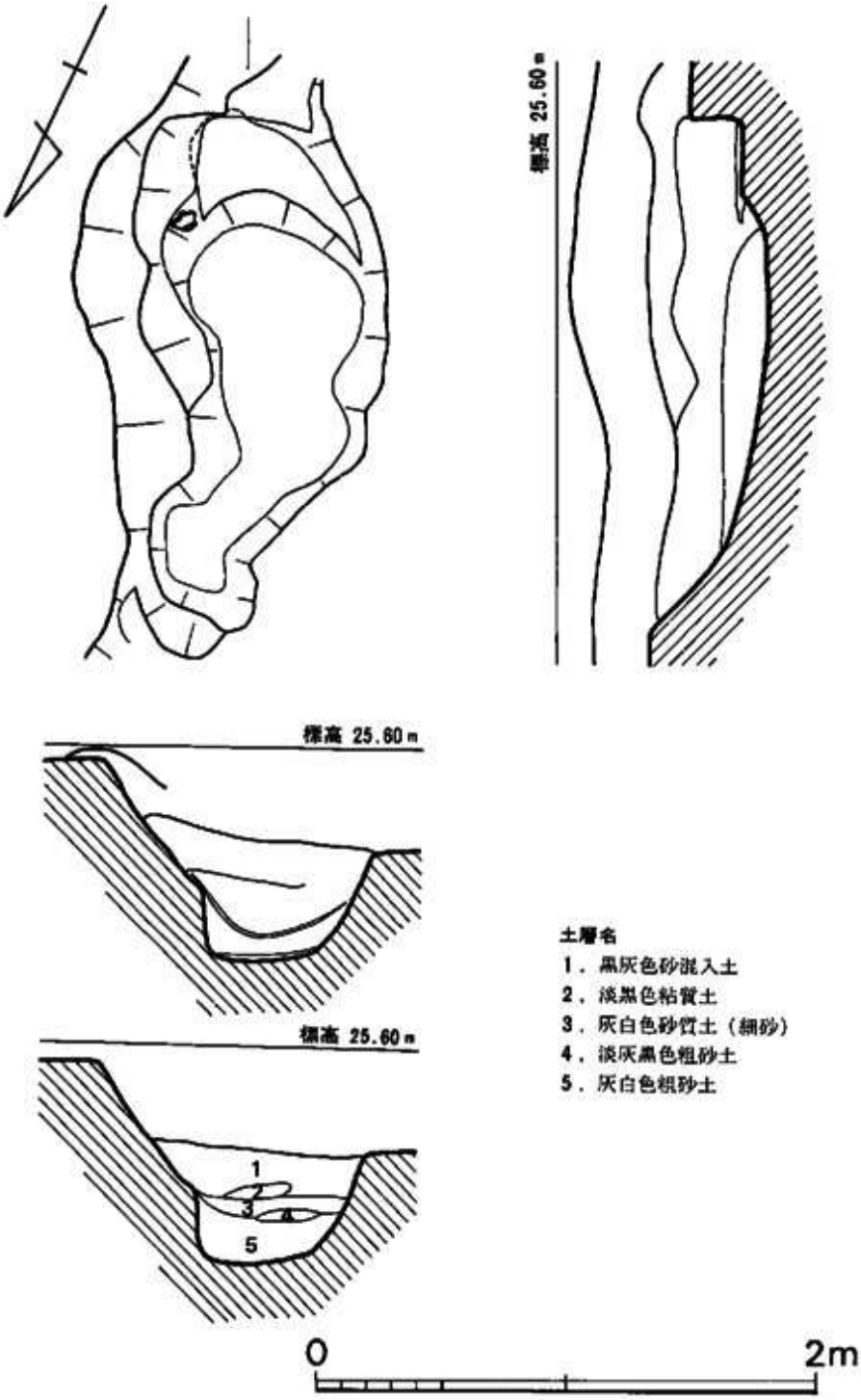
椀形土器　(3)　口径16.0cm・器高6.0cmを測る半球形の椀形土器である。外面はナデで仕上げられ，口縁内外はヨコナデ，内面はナデ調整されるが，内底面には押圧痕が残る。器厚は底部付近で8mmを有すが口縁部では3.5mmと薄くなる。胎土に石英等の砂粒を多く含み焼成並，淡褐色を呈す。

高　杯　(4)　杯部のみ約3分の1残存した資料で，口径31.4cm・杯部内高7.8cmを測る。杯底部はわずかに丸味をもつが長く直線的で，反転して稜を有し，外反する口縁部が付く。口唇上面は斜めに外面し，垂れ気味である。器面は風化の為に部分的に調整痕をみとめる程度であるが，外面は刷毛調整のあとヘラ先研磨を縦方向に施し暗文をなしている。内面にも同様の暗文がみられるが杯内底の刷毛調整後に対して，口縁内面はヨコナデ調整後のヘラ先研磨である。また口唇部から1cmの間はヨコナデによるわずかな凹みになる。なお杯底部の欠損面の形状から脚部との接合は脚部挿入が考えられる。胎土は砂粒を含むが良質で焼成良好，色調淡黄褐色を呈す。器厚は杯底部3.5～14mm・口縁部5～6mmを測る。

これらの土器は，大溝に堆積した土器にも類例があり，弥生時代後期後半でも新しい方に位置づけられよう。またこの土壙と大溝の堆積時期はほぼ同様の時期と考えられる。（小池史哲）

(2)　4号土壙（図版107－1，第104図）

4～7号の土壙はII区の発掘区東端から検出された一群のもので，大溝の東側岸下に位置する。この土壙はB2・C2区にわたって検出された不整長楕円形を呈す土壙で，直径2.15cm，短径は最も広い所で約1.25cm，深さ東側で約70cm，西側で43cmを測る。土壙内の堆積土は5層に別れ，レンズ状の堆積状態を示している。



第 104 図　II区 4 号土壙実測図（1/30）

土壙内からは，弥生時代中期後半の壺・甕破片数点が出土した。他に小枝・木材片等も検出されている。時期としては土器の示す弥生中期後半であろう。

出土遺物（第105図）

甕形土器（1・2）　1は口縁部付近，2は底部の破片資料である。1はいわゆる「く」字状口縁の甕で，胴部の張りは強いタイプのようである。胴部内外ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡黄褐色を呈す土器である。口径24.6cmを測る。2は下ぶくれの胴部をもつ平底の土器である。外面刷毛，内面ナデ調整である。底径7cmを測る。色調は黄褐色を呈す。

(3)　5号土壙（図版107－2，第106図）

4号土壙の南側に隣接して検出された土壙である。長径1.55m，短径は広い所で約1m，深さ東側で60cm，西側で35cmを測る平面長楕円形を呈す土壙である。底面は鍋底状を呈す。土壙内の堆積土は5層に別れ，東西両方向から流れ込んだ状態でレンズ状に堆積している。

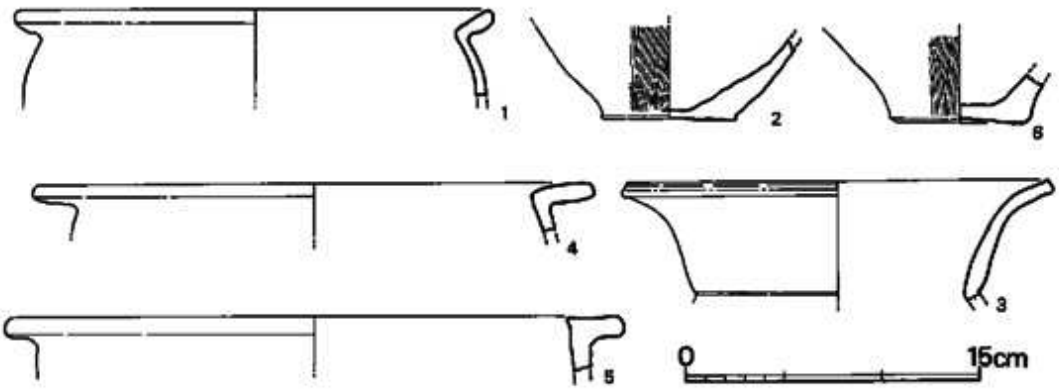
出土遺物は底面より浮いた状態で検出されたもので，弥生前期・中期を思わせる小破片が混在している。実測しえたものは前期の壺破片のみである。他に一部が焼けた木片も出土している。時期はおそらく中期であろう。

出土遺物（第105図）

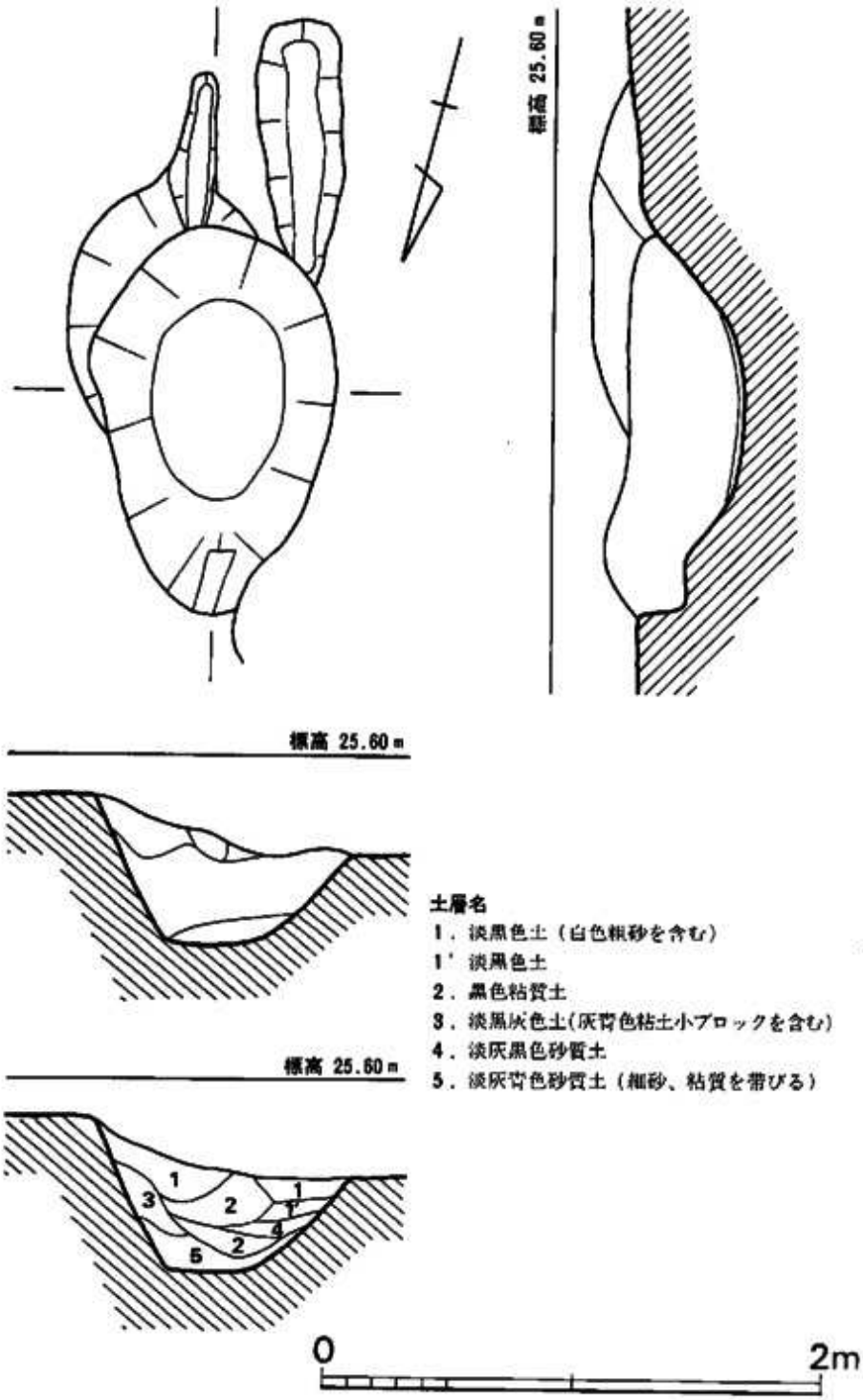
壺形土器（3）　口縁部の破片資料である。口径22.2cmを測る有段状口縁の壺で，口頸部の境を平行ヘラ描き沈線で画している。内外ともヨコナデのあと丁寧にヘラ磨きして仕上げている。口縁端部にはヨコナデによる凹線がみられる。色調は暗茶褐色を呈す焼成良好な土器である。時期は前期末であろう。

(4)　6号土壙（図版108－1，第107図）

C2区で検出されたもので，5号土壙の南側に位置する。長径75cm，短径72cm，深さ13cmを



第 105 図　II区4～6号土壙出土土器実測図（1/4）



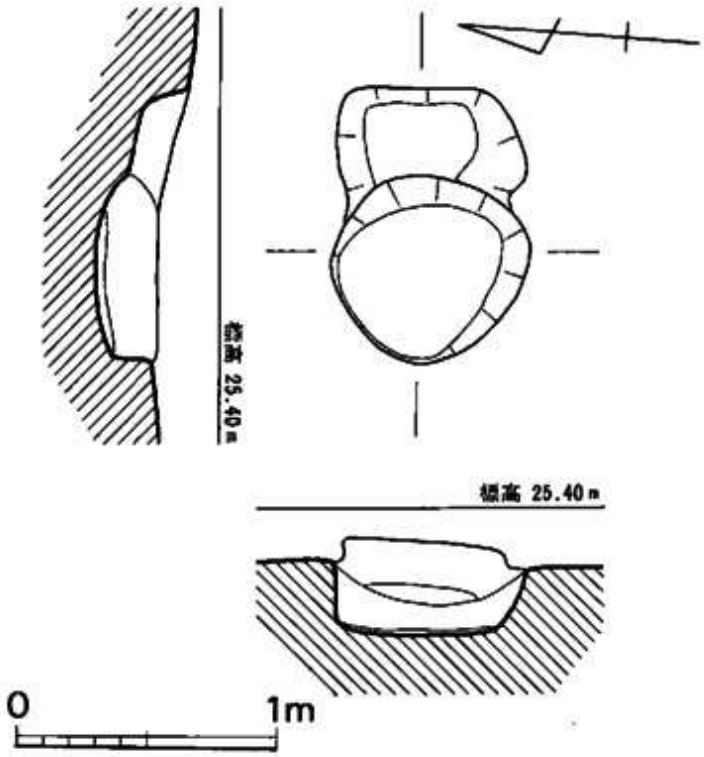
第 106 図　II区第5号土壙実測図（1/30）

測る不整円形の土壙で，一部東側のピットと複合している。土壙のうちもっとも小形のものである。

土壙内からは，弥生中期の甕・高杯等の小破片多数と木片数点が出土した。時期は中期中頃である。

出土遺物（第105図）

甕形土器（4～6）　4・5は口縁部付近，6が底部の破片資料である。4は逆L字状口縁の甕で，復原口径28.8㎝を測る。5はT字状口縁の甕で，復原口径31.7㎝と少し大きいタイプである。6は底径 7.2㎝を測る上げ底気味の平底である。外面刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は4が淡黄褐色，5・6が暗茶褐色である。

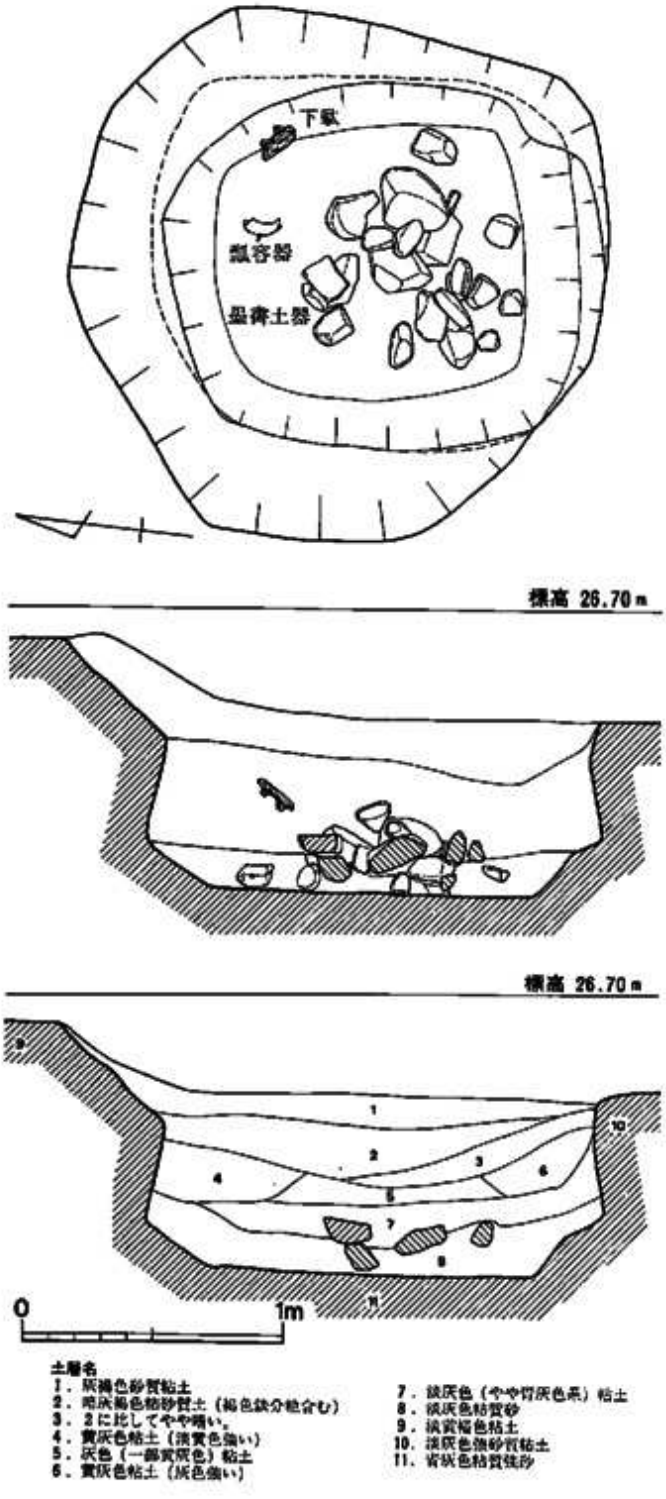


第 107 図　II区6号土壙実測図（1/30）

（井上裕弘）

(5)　2号土壙　（図版109～111，第108図）

旧地形で標高26.6㎞から26.3㎞に削られた段の部分，BC－13区に検出された土壙である。上縁では南東側を削平されているため径2㎞程度の不整形な平面形を呈しているが，約 0.4㎞下位では隅丸方形プランになり，長辺1.65㎞，短辺 1.4㎞を測る。また上縁から0.95㎞下る底面も長辺 1.2㎞短辺1.05㎞の隅丸方形を呈す。土壙の周囲の土質は上部で粘土，下部で強砂質の粘土，更に下位に強砂が堆積しているためか周壁は崩落でオーバーハングした状態になっている。土壙内の上部では灰褐色系の色調を呈し鉄分・マンガン粒・砂粒を多く含んだ粘性土，中位では砂質が弱くなり淡い色調の粘土が堆積し，それ以下は砂が多く混じる。下位の堆積土には人頭大程度の円礫や割れ石が積み重っており，床面との間は必らずしも接せず，石の下には完形土器がみられた。また甕容器が下面に，下駄が上位において出土した。石はわずかに火を受けた痕跡や煤の付着のあるものもあったが石器等に利用されたものはない。なお，この土



第 108 図　II区２号土壙実測図（1/30）

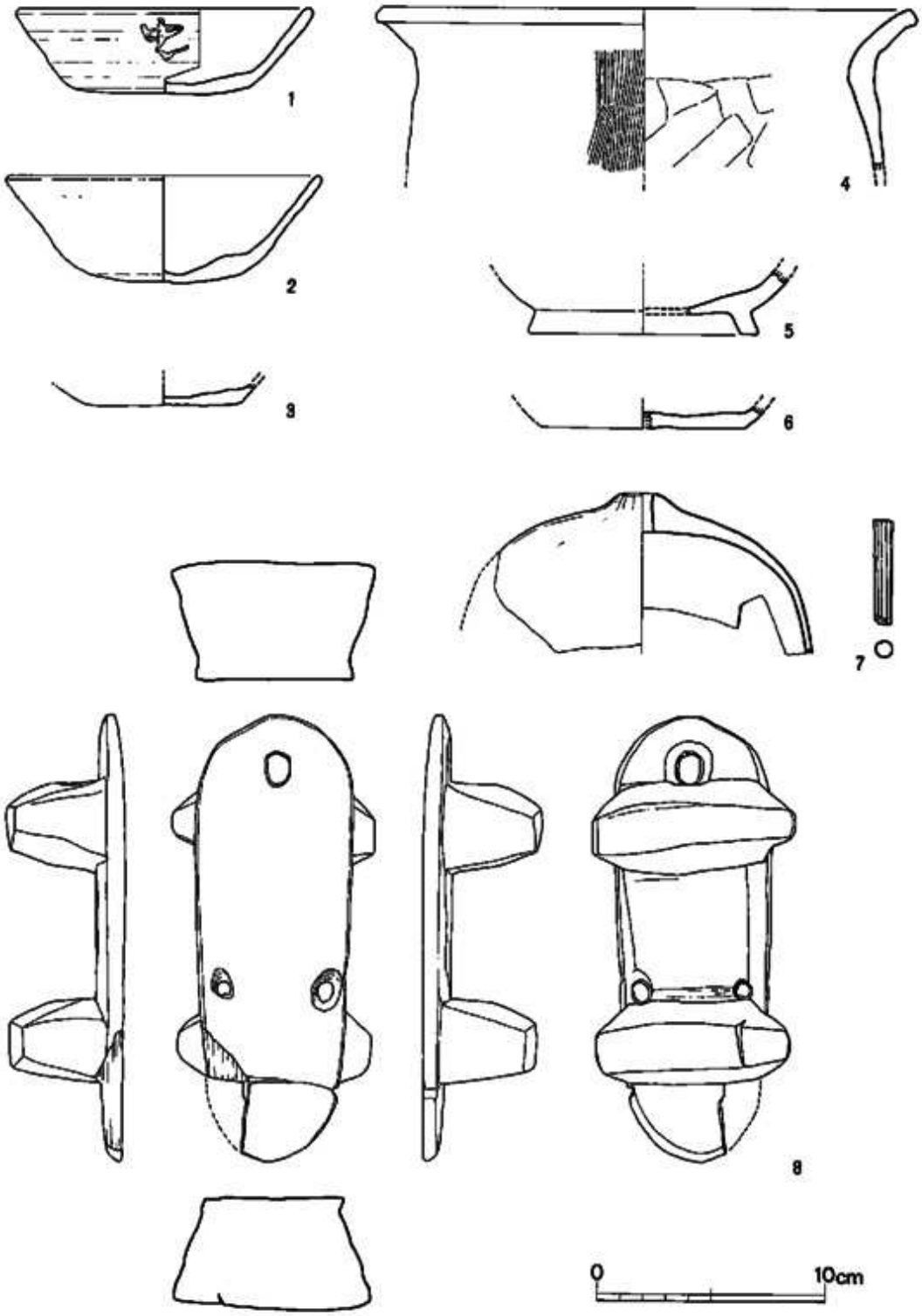
壙は枯水期にあっても，強砂を通して水が滲み出しており，かなり湿潤であった。

出土遺物

（図版113・114，第109図）

土師器甕（１）　口縁部破片であるが口径23.8cmを測る甕形土器で，器壁の肥厚したくびれ部から口唇部にかけてはヨコナデ調整され反り返るように外反し，口唇端部は稜をなす。くびれ部外面から下位に向って刷毛調整が施されており，内面は時計廻りに上がるヘラ削り痕がみられる。胎土は並で焼成は良好，色調は暗灰褐色であり，部分的に煤が付着して黒色になっている。

土師器杯（２～４）２は口径13.0cm・器高 3.8cm・底径 7.8cmを測る杯で内外面ともヨコナデ調整，内底面はナデ調整されており，外底面にはヘラ切り痕が残される。胎土・焼成とも良好で淡褐色ないしは淡灰褐色を呈す。外面には「虫」？の墨書がみとめられる。３は口径13.8cm，器高 4.7cm・底径 6.7cmを測る杯でやや深い器形である。内外面ともヨコナデ調整され，外底面はヘラ切りされている。胎土焼成とも良好で淡黄褐色を呈す。４は底径 6.8cmを測る底部破片であるが，同様の器形に



第 109 図　II区２号土壙出土遺物実測図（1/3）

なるものと思われる。

須恵器（５・６）いずれも底部破片で全体の器形については明らかではないが，５は外底面にヘラ切り痕を残しており，胎土精良ながら焼成が粗雑でうすい灰色の色調を呈す。６は高台を有した底部であるが胎土焼成良好で紫がかった灰色を呈す。

これらの土器はおおむね奈良時代末～平安期の所産と考えられるが，土師器杯では口縁部が極わずかに外反し，ヘラ磨きの手法がみられず底部をヘラ切りされていること，及び法量から大宰府史跡ＳＥ 400出土の杯に相当し，ＳＥ 400は９世紀前半に考えられている（註）。

瓢容器（７）　下半分を大きく欠失しているが瓜科種物（瓠？）の中を茎の部分から刳り抜いて中空とした容器である。また口を塞ぐための別材による栓もあり，装着された状況で出土している。瓢容器は平面形で長径14.0cm・短径12.5cmとややひずみのある円形を呈し現存高 7.1cmであるが，本来はかなり高くなるものと思われる。器壁は３～5mm・孔の部分の厚みは1.7cm，孔径は8mm，栓は長さ4.5 cm径７～8.5 mmを測り，細い心材の外周を細かく削って太さを整えている。この栓は挿入すると約４cmが容器内に入り込む。樹種は同定していない。

下　駄（８）全長19.5cmの一木造りの連歯下駄。台部の幅 6.9cmの長楕円形を呈し，上面は平坦に，下面は丸味を持たせており，歯は約６cmの間を空けて削り出されている。歯幅は上端で台部よりわずかに短くなるが下方に広がり断面台形を呈す。使用による減りもあろうが，前歯で幅 6.5～９cm・厚さ４～２cm・高さ 5.2cm，後歯は幅６～ 8.5cm・厚さ 3.7～２cm・高さ 4.9 cmを測り，上面観では両歯が台部よりはみ出し，「キ」字形になる。鼻緒孔は，前歯前方に１孔，後歯前方に２孔が穿たれる。前緒孔の空き方は上面より下面に広がり歯も一部削られるのに対し，後緒孔は上面に広がり，わずかではあるが扇形に外向きになる。（小池史哲）

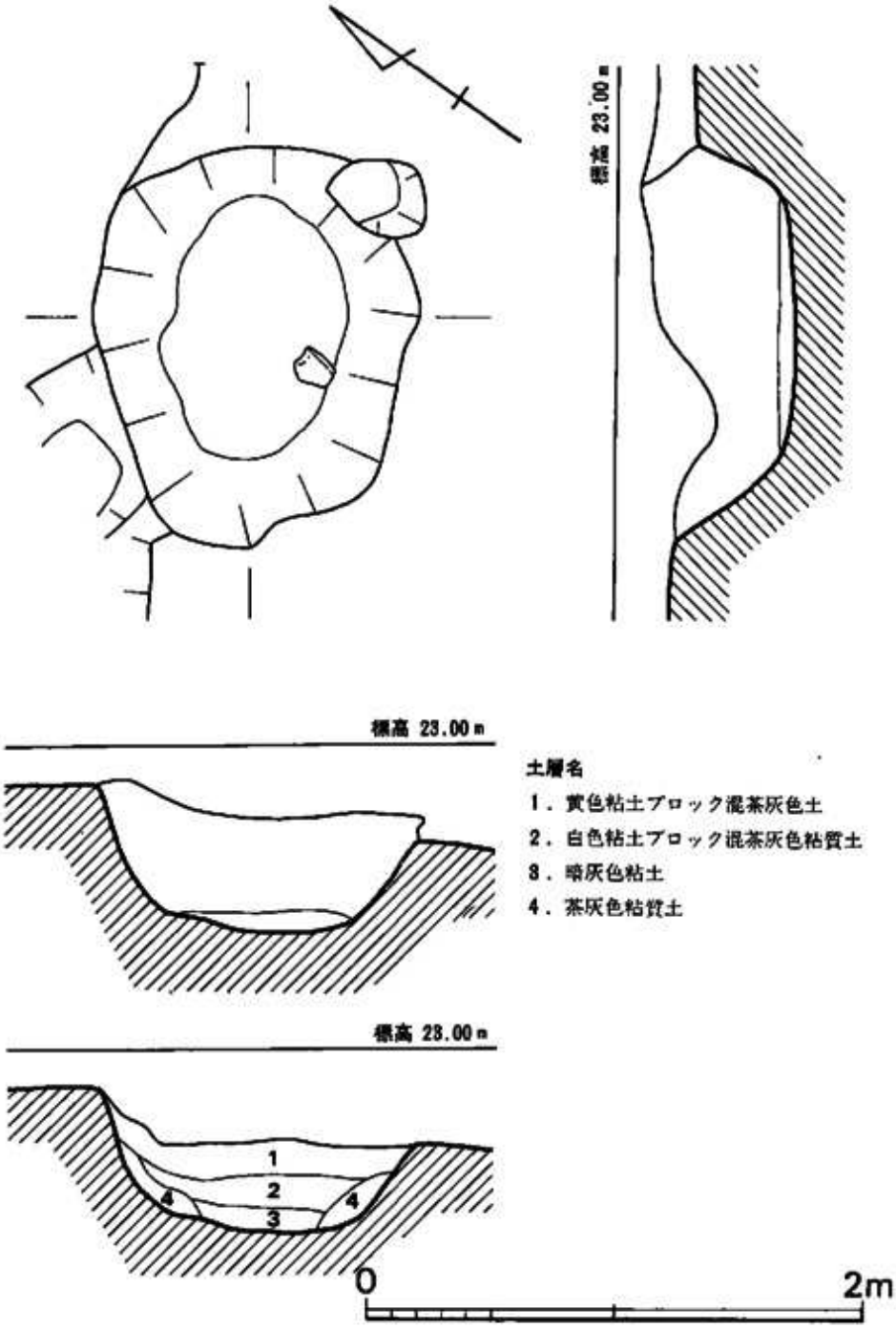
註　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書き」『九州歴史資料館研究論集』２，1976，太宰府。

なお墨書土器等については，九州歴史資料館倉住靖彦氏・森田勉氏の御教示を得た。

(6)　３号土壙（図版111－２，第110図）

B10区から検出された土壙で，１号掘立柱建物の南東側に位置する。長径 1.6ｍ，短径 1.3ｍ，深さ北側で約50cm，南側で約30cmを測る不整楕円形の土壙である。土壙内の堆積土は４層に別れ，上層から黄色粘土ブロック混りの茶灰色土，白色粘土ブロック混りの茶灰色粘質土，暗灰色粘土，茶灰色粘質土がレンズ状に堆積している。

出土遺物は若干の弥生式土器・土師器・須恵器の小破片が出土したのみで，他に木片・炭化物・河原石等が検出された。時期はおそらく古墳時代であろう。



第 110 図　II区3号土壙実測図（1/30）

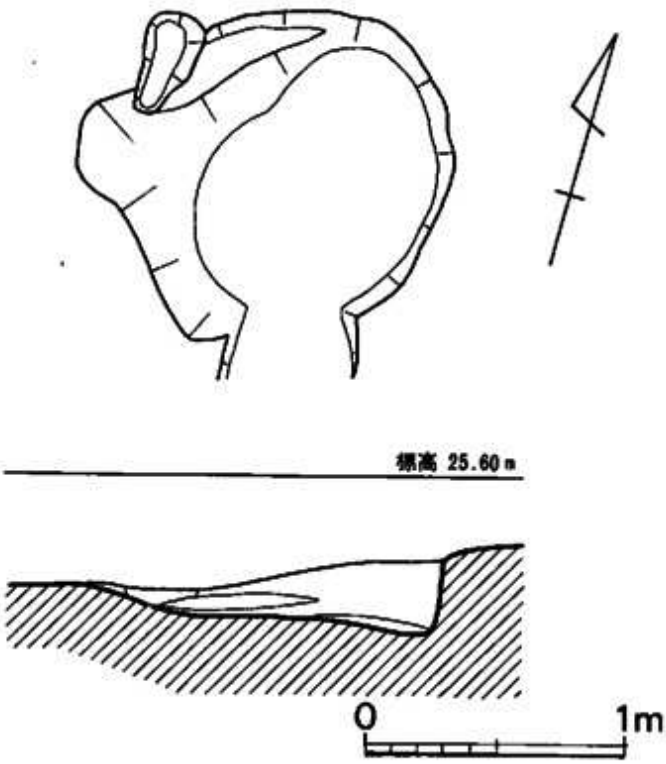
(7)　7号土壙

（図版108－2, 第111図）

6号土壙の南側に近接して検出されたもので，D2区に位置する。長径1.45m，短径1.22m，深さ東側で26.5cm，西側で11.9cmを測る不整円形の土壙である。北側と南側で小ピットと一部複合している。東側の壁面が直に近いのに対し，西壁はなだらかである。

出土遺物は，弥生中期後半の壺（丹塗り）・甕の破片と須恵器小片が若干出土している。時期としては古墳時代のものと思われ，4～6号土壙と時期を異にしている。他に木片数点も検出されている。

（井上裕弘）



第 111 図　II区7号土壙実測図（1/30）

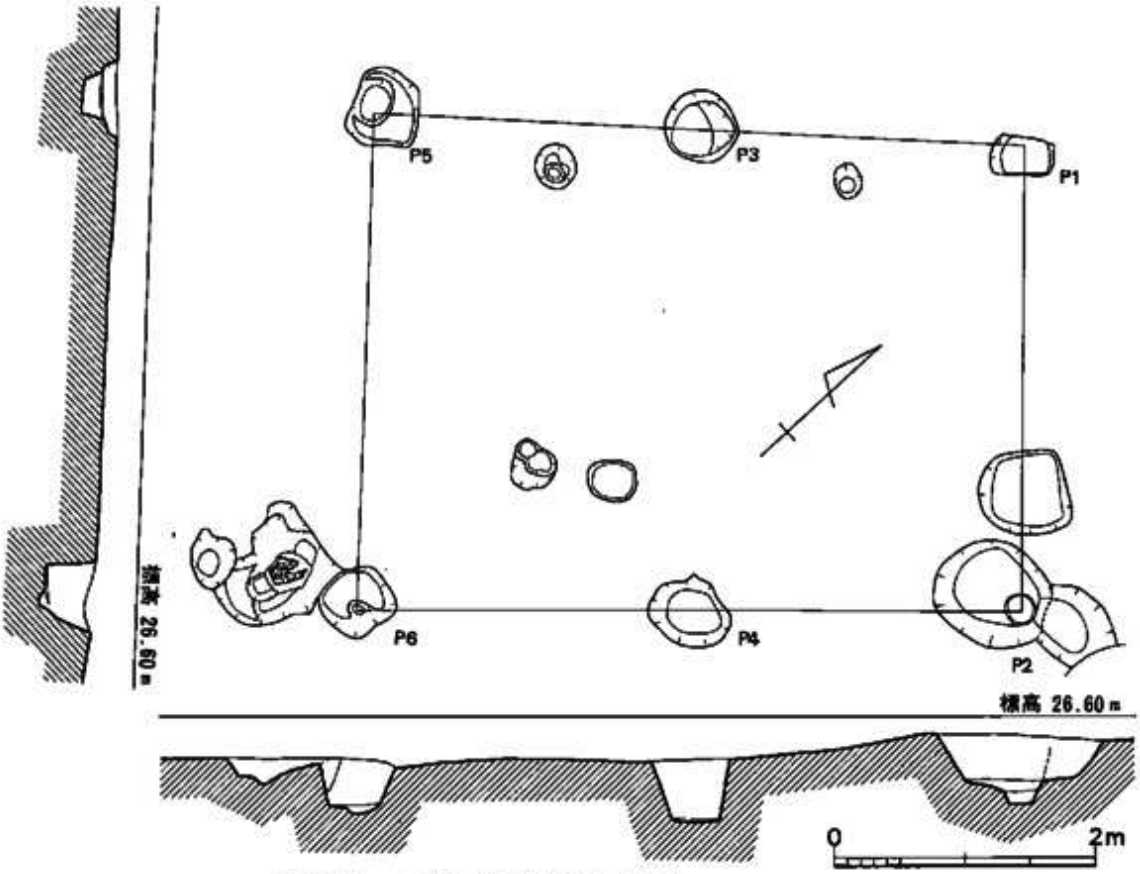
6. 建　物　跡　（歴史時代）

(1)　1号建物跡（第112図　表7）

B10・B11区にわたって検出された，1×2間の掘立柱建物跡である。梁間間平均3.86m・桁行間平均5.06mで，桁行は真北に対して45°東偏する。柱穴はおおむね直径50～60cm，深さ30～50cmであるが，P1・P3・P5といった台地側の柱穴は浅くなっている。なおP.6の西方に接する柱穴に柱根の残欠（図版112－2）をみとめるが，この建物に伴うものではなく，またいずれの建物に伴うのかは不明である。

出土遺物

P2・P3・P5・P6に若干の土器片が含まれており，P3・P5・P6では弥生後期の土器片，P2に奈良時代の須恵器，杯蓋片が2片，細片ではあるが含まれている。このことか



第 112 図　II区1号建物実測図（1/60）

表7　1号建物跡計測表

（単位 cm）

1間×2間		梁間間			桁行柱間	桁行間
P 1	P 2	350.0	P 1	P 3	250.0	501.0
3	4	361.0	3	5	251.0	
5	6	386.5	2	4	253.5	510 .5
平	均	385.83	4	6	257.0	
			平	均	252.88	505.75

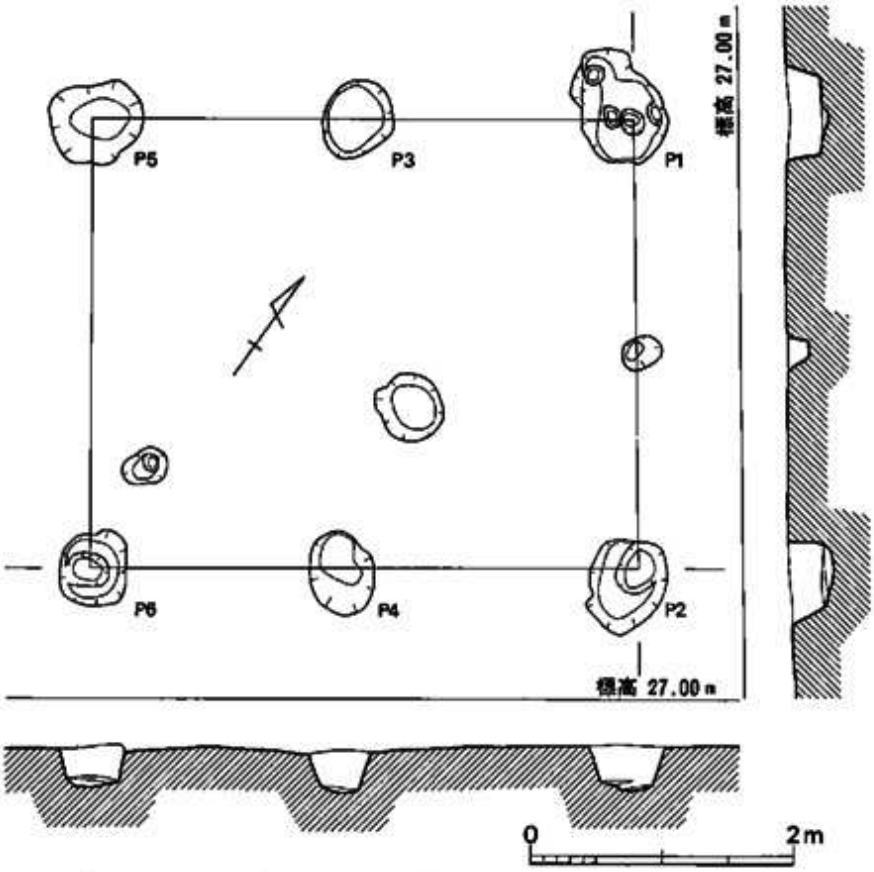
N45° E

P	深さ	長 径	短径
1	30.5	49	—
2	53	90	78
3	30	60	54
4	48	64	51
5	27.5	61	51
6	41.5	53	48
平均	38.42	62.83	56.4

ら奈良時代を余り下ることのない時期と思われる。

(2)　2号建物跡（図版112－1，第113図　表8）

1号建物跡の西方に約5 mの距離をおいて検出された掘立柱建物跡である。梁間間平均 3.4



第 113 図　II区 2 号建物実測図 (1/40)

表 8　2 号建物跡計測表

(単位 cm)

1間×2間		梁間間			桁行柱間	桁行間
P 1	P 2	341.5	P 1	P 3	214.0	414.0
3	4	340.0	3	5	200.0	
5	6	342.5	2	4	227.5	421.0
平	均	341.33	4	6	193.5	
			平	均	208.75	417.5

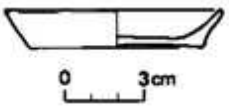
N54°30′ E

P	深 さ	長 径	短径
1	32	71	64
2	35	73	58
3	21	62	53
4	35	64	48
5	20	71	55
6	32	54	51
平均	29.16	65.83	54.83

m・桁行間平均 4.2 m を測る 1 × 2 間の建物で，桁行は真北に対して54° 30′ 東偏する。柱穴は径50～70cm・深さ30cm余を有するが，上部を削平されておりＰ３・Ｐ５は浅くなっている。またＰ１とＰ２の中間に長径30cm，短径25cm，深さ17cmの小さな *pit* があり，梁間を２分する形になっているが，対応する *pit* はみられなかった。

出土遺物（図版 113，第114図）

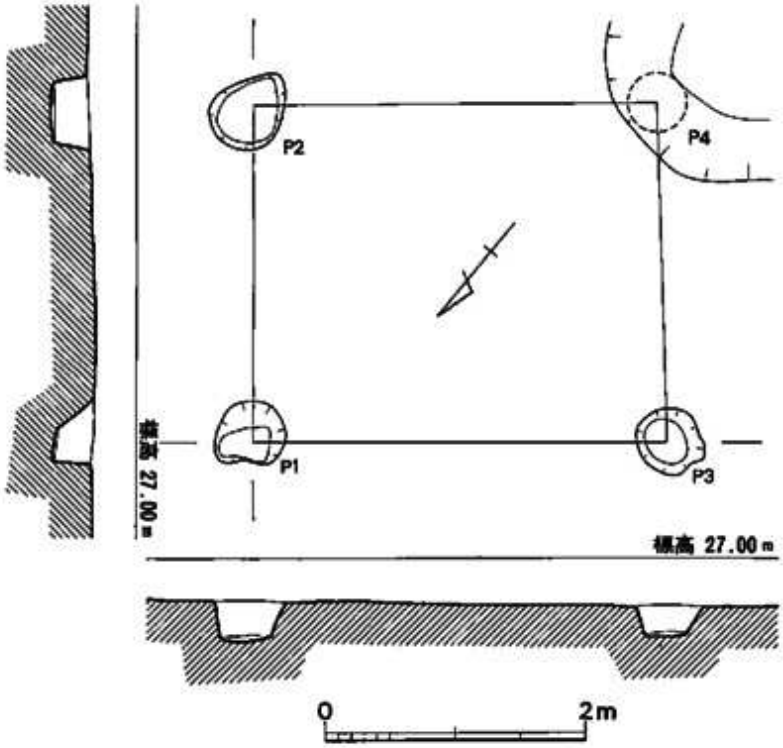
土師器　Ｐ１から土師器小皿が１点出土した。ほぼ完形になる資料で，口径8.5cm，器高1.4～1.5cm，底径 6.6cmを測る。外面ヨコナデ，内面ナデで仕上げ，底部は糸切り痕と板圧痕を残す，胎土，焼成はやや良好で，色調は淡黄褐色。時計廻りの砂粒移物もみとめられる。この土師器小皿は，既に，奈良時代～鎌倉時代にかけての編年研究の確立されて来ている大宰府政庁及びその周辺での成果と合わせても相当する資料が不明である。但し，土師器小皿の口径縮小化傾向がみられること，糸切り・板圧痕の残ることからみておおむね14～15世紀の枠の中に納まると思われる。　（小池史哲）



第 114 図　Ⅱ区２号建物出土土器実測図（1/3）

(3)　３号建物跡（第115 図　表９）

Ｂ12・Ｂ13区にわたって検出された１間×１間の掘立柱建物跡で，西側は２号建物跡と重複し，南側の柱穴は２号土壙によってきられている。梁間間2.60ｍ，桁行間3.17ｍで，桁行は真北に対して50°40′東偏する。素掘りの柱穴は径50～65cmの不正円形を呈し，深さは20～30cm余を測る。Ｐ１，Ｐ２より各々１片の弥生式土器小片が出土しているが，時期については不明である。



第 115 図　Ⅱ区３号建物実測図（1/60）

表9　3号建物跡計測表

（単位　cm）

1間×1間	深間間		桁行間	P	深　さ	長　径	短　径
P1　P2	260.0	P1　P3	317.0	1	32.5	58	54
3　4	260.0？	2　4	317.0？	2	30	66	54
平　均	260.0	平　均	317.0	3	21.5	53	47
				4	—	—	—
				平均	28	59	51.66

N50°40′ E

尚，1号建物跡の西方に接して柱根の残存する柱穴が検出され，更に幾棟かの掘立柱建物跡が想定されるが明確にはしえなかった。

一方，台地から1段下がった緩斜面上に台地（南端）に沿ってpitが群在する。遺物としては弥生・土師・須恵器等の小片が若干出土したのみで時期は不明であるが，P39・P46からは平安時代の格子目文の平瓦片が出土し，おおむねこの時期を下ることはないと思われる。

（小林義彦）

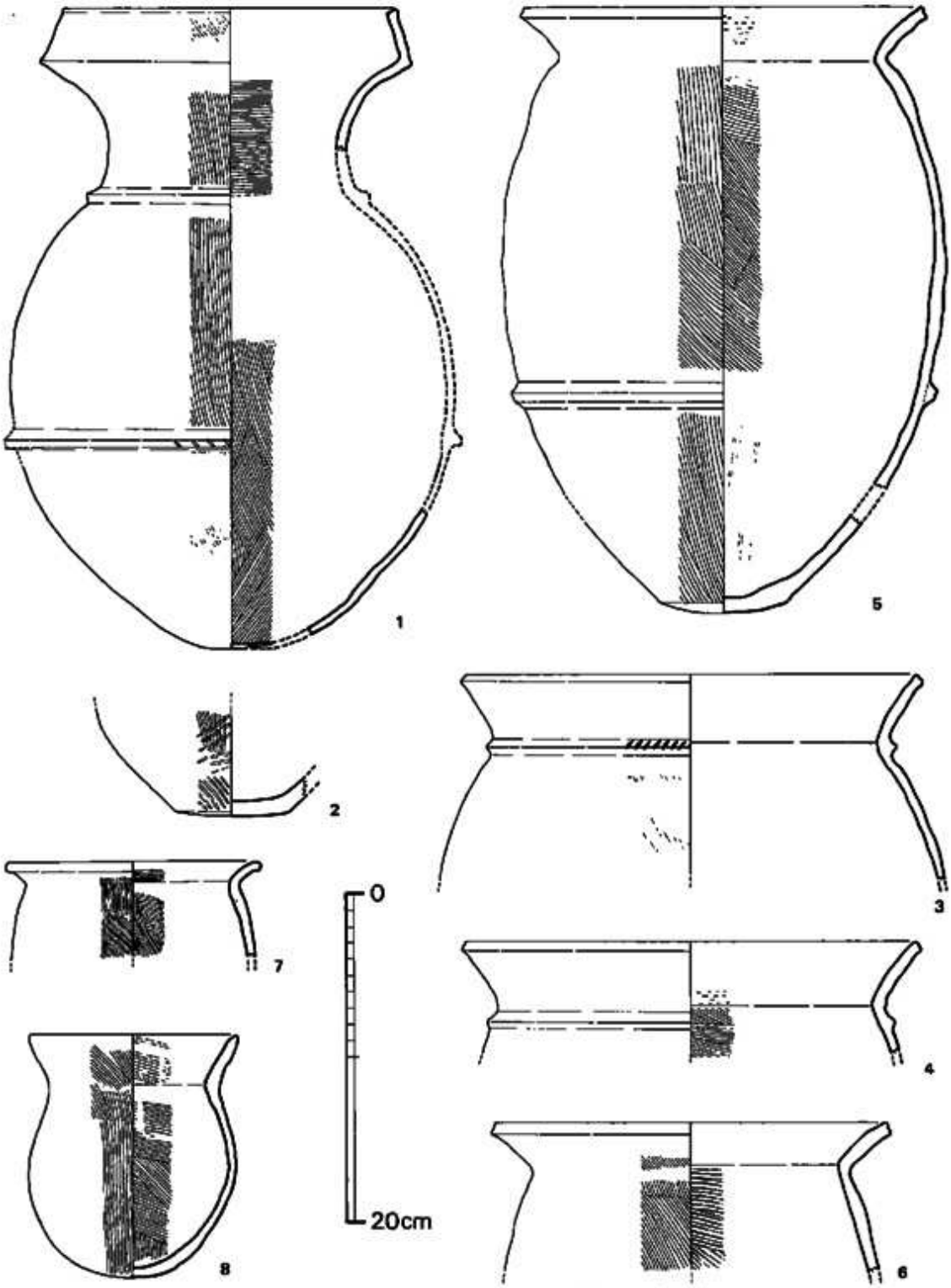
7. 包含層出土の遺物

(1) 弥生式土器（図版115，第116・117図）

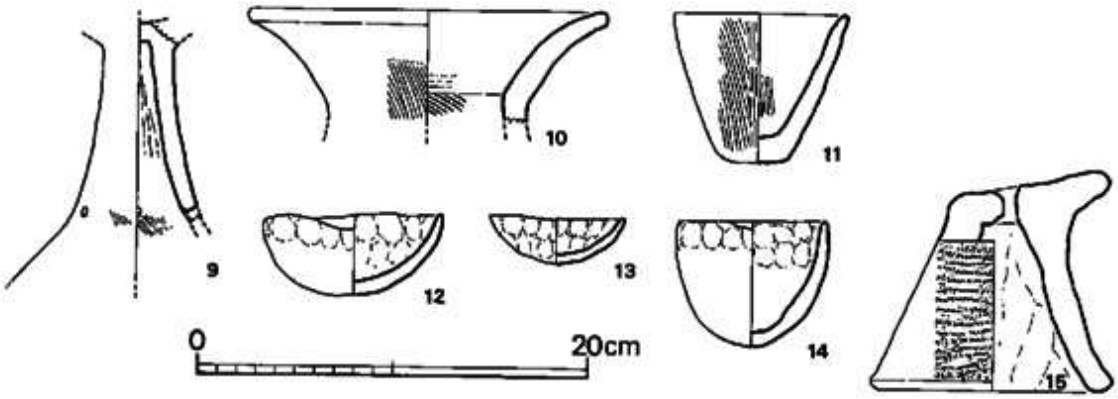
壺形土器（1・2）　1はほゞ全形を知りうる資料で，2は底部付近の資料である。1は口径20.2cm，器高38.2cm，復原胴部最大径26.7cmを測る大形の壺である。卵形の胴部に立ち気味に外反する短い頸部がつく。口縁部はいわゆる直線的に内傾する複合口縁で，口頸部の屈折部は明瞭である。口縁端部はわずかにヨコナデによりつまみ出し気味に仕上げている。頸部下と胴部中位よりやゝ下に1条の凸帯を付し，胴部凸帯端部には刻目を施している。底部は丸底ともいえる平底である。調整は外面刷毛のあと胴下半はさらにナデて仕上げ，内面は口縁部内外をヨコナデ，胴上半をナデている他は刷毛仕上げである。色調は黄褐色を呈す。2は小形の壺の底部付近の資料で，底部はいわゆる「レンズ」状の平底である。外面粗いタタキのあと刷毛調整，内面と外底部はナデて仕上げている。色調は暗茶褐色。出土位置及び層位は，1がB8区5層下部，2がC10区5層下部である。

甕形土器（3～8）甕には大中小がある。口径27.8cmを測る大形のもの（3・4），24.1～24.4cmの中形のもの（5・6），15.5～12.7cmの小形のもの（7・8）である。

大形品である3・4の頸部には1条の三角凸帯が付され，3の凸帯端部には刻目が施されている。調整は両者とも器面の風化が著しく不明瞭だが，内外とも刷毛調整で，口縁部内外はヨコナデで仕上げているようである。3の外面各所に煤の付着がみられる。色調は3が茶褐色，4が淡茶褐色である。



第 116 図　II区包層出土弥生式土器実測図 1 (1/4)



第 117 図　II区包含層出土弥生式土器実測図 2 (1/4)

5はほゞ完形の資料で，口径24.4cm，器高36cm，胴部最大径27.6cm，底径 8.6cmを測る。長胴の卵形をなす胴部に，大きく外反する「く」字状口縁がつく甕で，胴下位に1条の「コ」字形凸帯を付している。調整は内外とも刷毛のあと，内面下半はさらにナデて仕上げている。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は暗茶褐色を呈す。6は復原口径24.1cmを測る。調整は5と同じ，色調は外面暗茶褐色，内面淡黄褐色で，焼成良好である。

7は復原口径15.5cm，8は口径12.7cm，器高14.5cmを測る小形の甕である。内外とも刷毛調整で，口縁端部付近内外はヨコナデで，7は端部を丸く，8は細く仕上げている。8の底部は平底である。色調は7が暗茶褐色，8が淡黄褐色を呈す。出土位置及び層位は，3がC2区5層上部，4・8がB8区5層下部，5がC9区5層下部，6がC2区5層下部，7がC3区5層下部出土の資料である。

高杯形土器（9）　柱状部の資料である。柱状部が細くて長いもので，裾部が内弯気味に大きくひらく脚部である。大溝出土の68と同様のタイプである。柱状部から裾部に移る所に3個の円孔が穿たれている。外面刷毛のあとタテヘラ磨き，内面刷毛のあとナデて仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。D2区5層下部出土。

器台形土器（10）　脚部を欠く資料で，器受部径18.4cmを測る。内外面刷毛のあと口縁部内外はさらにヨコナデして仕上げている。色調は黄褐色。この器台は大溝から多く出土しているタイプで，器受部のくびれが高いもので，大溝出土72がその典型である。B8区5層下部出土。

椀形土器（11～14）　全て手捏の小形椀である。11が刷毛調整で仕上げたものである他は，内外に多くの指頭圧痕を顕著に残す土器である。色調は13が淡茶褐色の他は全て淡褐色を呈す。出土位置及び層位は，11がC2区5層下部，12・13がC5区5層下部，14がC7区5層下部出土である。

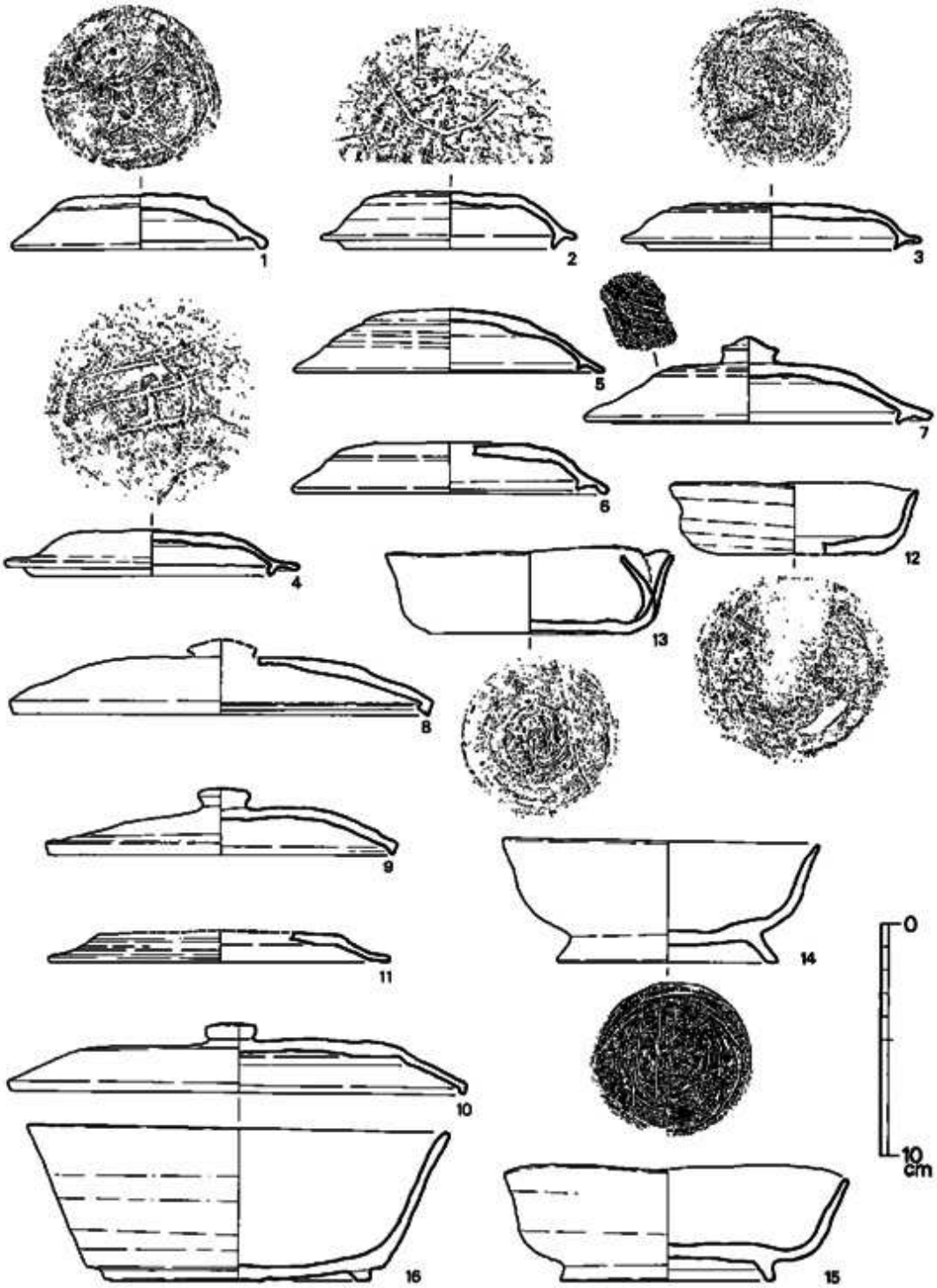
支脚形土器（15）　上面が傾斜する杏形状の支脚で，上面中央に1個の円孔が穿たれている。

中央での器高10.1cm，上面最大径 8.2cm，脚部径12.3cmを測る。外面は粗いタタキ，内面はナデ，上面はタタキのあと中央付近をナデて仕上げている。器肉の厚い土器である。色調は黄褐色で，外面上半は二次焼成を受け赤褐色に変色している。5層下部出土。　　（井上裕弘）

(2)　須恵器（図版116，第118・119図）

杯　蓋（1～11）　1は口径11.1cm，器高 2.4cmを測る。天井部は若干丸味をもつが扁平で，身受けのかえりは低く内側に入る。全体に器肉が厚く，口縁端部は丸くおさめている。天井部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げている。天井部外面に「#」のヘラ記号をもつ。胎土・焼成はともに良好。色調は淡黄褐色で，外面はやや灰色をおびる。　2は口径11.1cm，器高 2.5cmを測る。天井部は平坦で，身受けのかえりは口縁部より下方に伸びる。天井部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデ仕上げである。天井部外面に弓状のヘラ記号がある。胎土に砂粒を含み，焼成は堅緻。色調は濃灰色。3・4はともに器高が低く扁平な蓋で，身受けのかえりも低く，かえりと口縁部の間には凹線がめぐる。3は口径13.0cm，器高2.0cm，4は口径12.8cm・器高 2.0cmを測る。ともに，天井部にヘラ記号を有し，3は天井部と体部の境に2条の太い凹線がめぐる。調整は天井部外面がヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げているが，3の天井部外面はヘラ削り後にナデ調整を加えている。胎土に少量の砂粒を含み，焼成は堅緻。色調は濃灰色を呈す。

5は口径13.5cm，器高 2.8cmを測る。天井部の器肉は厚く若干丸味をもち，身受けのかえりは低く内側に入る。天井部と体部との境に稜をもつ。天井部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデ仕上である。胎土・焼成はともに良好。色調は淡黄褐色であるが，外面はやや明褐色をおびる。6は復原口径13.8cm，器高 2.2cmを測る。天井部は平坦で，器高の低い扁平な蓋で，身受けのかえりは低く内側に入る。身受けのかえりと口縁部の間には凹線がめぐる。天井部外面はヘラ削り，内面がナデの他は全てヨコナデ仕上げである。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は堅緻・色調は灰色。7は口径15.1cm，器高 3.8cmを測る宝珠形のつまみをもつ蓋である。天井部は平坦で，身受けのかえりはわずかに下方に伸びる。天井部と体部との境には「///」のヘラ記号をもつ。天井部外面はヘラ削り後につまみをつけている。内面がナデの他は全てヨコナデ仕上げである。胎土・焼成はともに良好で，色調は外面が黒色・内面は灰白色を呈す。8はつまみを欠く資料で，復原口径は18.0cmを測る。天井部は平坦で，口縁部は先端を折り曲げ，内面に鋭い稜をもつ。天井部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げている。胎土・焼成はともに良好。色調は灰色。9は復原口径15.0cm，器高 2.9cmを測る。平坦な天井部に擬宝珠形のつまみを載せ，口縁部は先端を小さく折り曲げている。天井部はヘラ削り後につまみをつけている。内面はナデ，その他は全てヨコナデ仕上げである。胎土には砂粒を含み，焼成は堅固。色調は灰色。



第 118 図　II区包含層出土須恵器実測図1 (1/3)

10は杯身16とセットで16の身に被せた状態で出土した。口径20.0cm，器高 3.0cmを測る。平坦な天井部に擬宝珠形のつまみを載せ，口縁部は先端を小さく折り曲げている。風化による磨滅が著しく調整手法は不明。胎土は良質で焼成は普通。色調は天井部外面が淡明褐色の他は淡褐色を呈す。11は復原口径14.9cmを測る破片資料である。天井部は平坦で反りぎみに口縁部へ移行する。口縁部内側には1条の浅い凹線がめぐる。天井部外面はヘラ削り・内面がナデの他はヨコナデ仕上げである。胎土に石英砂を含み，焼成は堅緻。色調は灰色

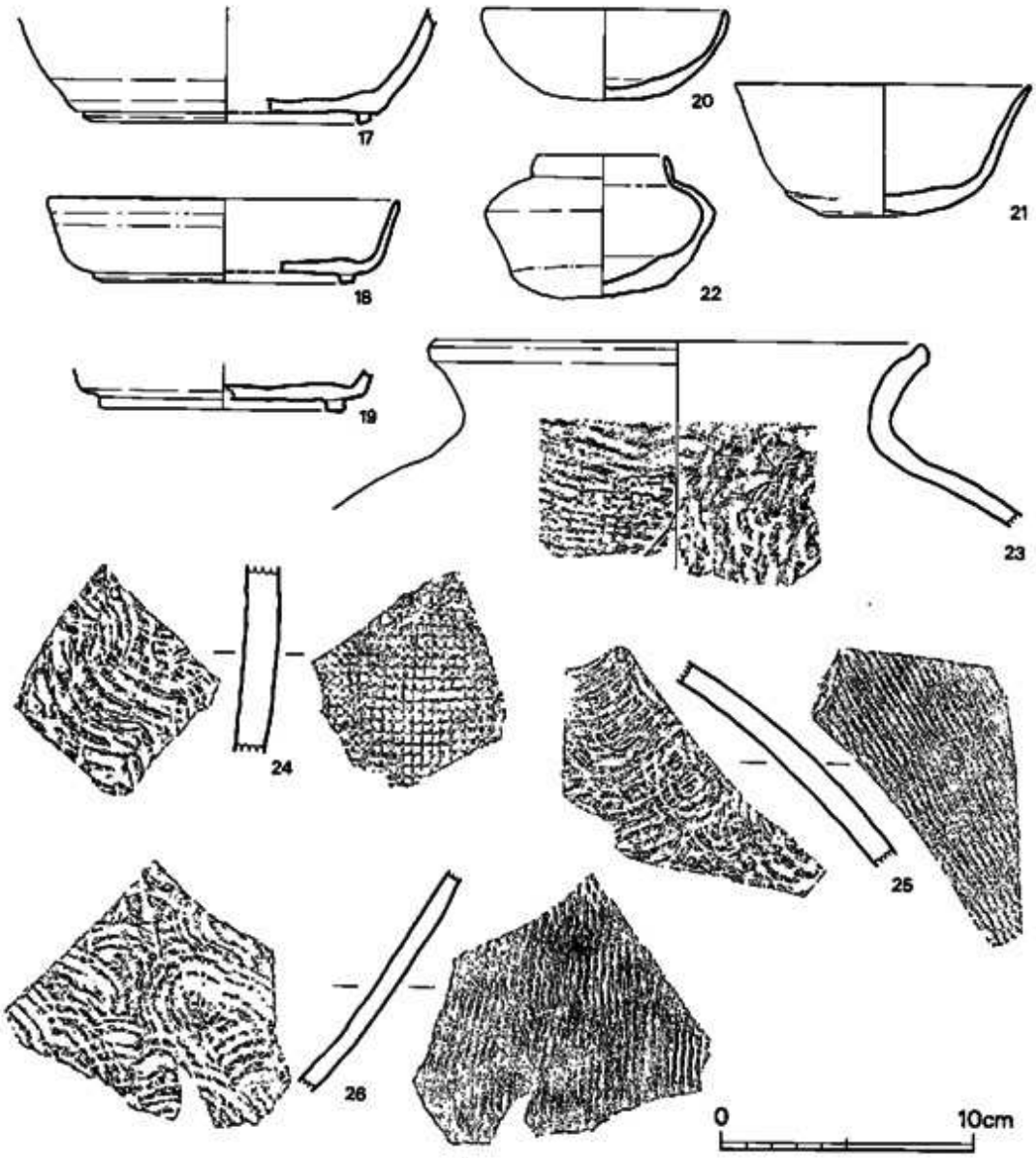
杯　身（12～19）　12・13はいずれも平底の底部からゆるやかに立ち上がり端部を丸くおさめた口縁部は緩く外反する。12は口径10.8cm，器高 3.1cm，13は口径12.5cm，器高 3.8cmを測り，いずれも底部外面にヘラ記号をもつ。調整は底部外面がヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げている。胎土には少量の砂粒を含み，焼成は堅緻。色調は12が灰緑色，13は灰色を呈す。

14は口径13.6cm，高台径 9.6cm，器高 5.4cmを測る。深い杯部に高台を付したものでゆるやかに立ち上がった口縁部はわずかに外方へ伸びる。底部外面はヘラ削り後に高台をつけヘラ記号「≡」を有す。底部内面はナデ，その他はヨコナデ仕上げである。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は良好。色調は灰白色。15は口径15.0cm，高台径 9.2cm，器高 5.0cmを測る。杯部は深く，端部を丸くおさめた口縁部は外弯ぎみに開く。調整手法は14と同じである。胎土・焼成はともに良好。色調は淡灰色。16は杯蓋10とセットになるもので，口径18.3cm，高台径11.6cm，器高 6.7cmを測る。底部と体部境に稜をつくり，端部を丸くおさめた口縁部は直線的に外方に開く。風化による磨滅が顕著なために調整手法は不明であるが，底部外面には板目痕を残す。胎土に若干の砂粒を含み，焼成は普通。色調は内面淡明褐色。外面が灰白色を呈す。

17・18・19はいずれも破片資料で，高台は低い。17は復原高台径11.4cm，18は復原口径13.9cm，高台径10.3cm，器高 3.3cm，19は復原高台径 9.5cmを測る。17は高台の畳付けが外方にはねる特徴をもっている。底部外面がヘラ切り，内面がナデ，その他はヨコナデで仕上げている。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は堅緻，色調は灰色を呈す。

椀（20・21）　20は口径 8.6cm，器高 3.6cmを測る。器肉の厚い丸味をもつ底部から内弯しながら立ち上がり，端部を丸くおさめた口縁部は直口する。底部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げている。胎土・焼成はともに良好で，灰色を呈する。21は口径11.7cm，器高 5.2cmを測る。底部の器肉は厚く，反りぎみに外反する口縁部は薄く，端部を丸くおさめている。底部外面はヘラ削り，内面がナデの他はヨコナデで仕上げている。胎土は良質で若干の砂粒を含み，焼成は堅緻。色調は灰色。

坩（22）　口径 5.1cm，器高 5.6cmを測る。胴部上位で「く」字状に屈曲し，緩く膨んでわずかに内傾する短かい口縁部へつながる。胴部下半の器肉は厚く，調整は底部内面が不定方向のナデ，外面は右回転のヘラ削り。胴部外面下半は回転ヘラ削り，口縁部内外と胴部内面はヨ



第 119 図　II区包含層出土須恵器実測図 2 (1/3)

コナデ仕上げである。胎土に若干の石英砂を含み，焼成は堅緻。色調は灰色。

甕（23～26）　23は復原口径19.6cm，現存高 7.1cmを測る。口縁部は肥厚して外反し，平坦に整えられた口唇部はわずかに外に突出する。肩部は張りをもつようである。口縁部内外はヨコナデ，胴部外面は正格子目文，内面は青海波文の叩きを施こす。胎土は良質で若干の砂粒を含み，焼成は堅緻。淡灰白色を呈す。24～26はいずれも胴部の破片資料である。24は外面が正

格子目，内面は青海波の叩き文を施している。灰色を呈し，胎土に細砂を含み，焼成は堅緻。25は外面が平行条線の叩き後に細かい横刷毛ナデを施し，内面は青海波の叩きを施す。灰色を呈し，胎土・焼成はともに良好。26は外面が平行条線の叩き後にナデ調整を加え，内面は青海波の叩きを施している。胎土には若干の細砂・雲母を含み焼成は堅緻。色調は外面が黒灰色，内面は灰色を呈す。（小林義彦）

(3) 土師器（第120図）

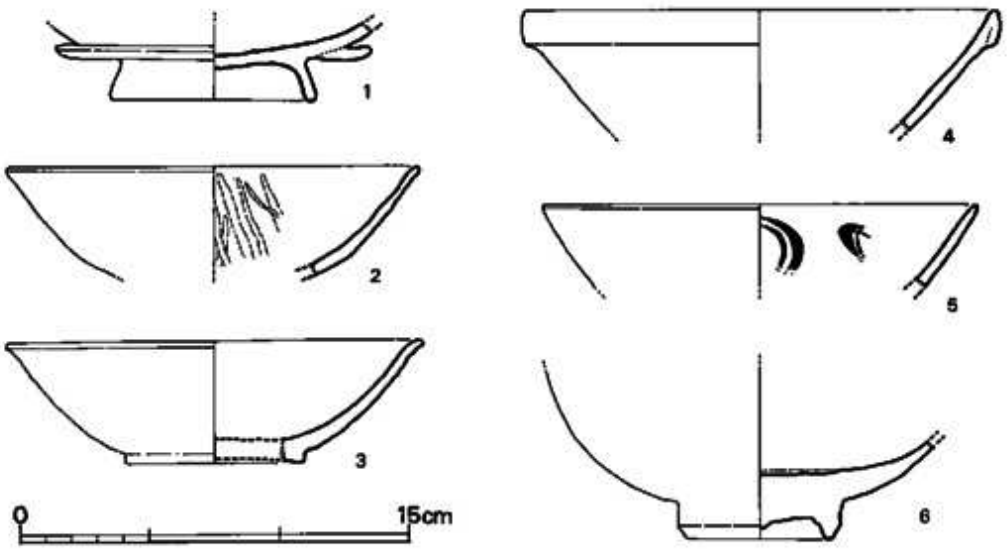
托（1） 高台径 7.9cmを測る托で，器受部は欠損しているため不明体部と高台の境には幅約2cmの鍔が付されている。内外とも風化が著しいがロクロヨコナデ仕上げである。色調は淡褐色ないしは暗茶褐色を呈す。B13区3層出土。

(4) 瓦 器（第120図）

椀（2） 体部の破片資料で，復原口径15.8cmを測る。口縁部内外はヨコナデ，体部外面ナデ調整で，体部内面はナデたあとヘラ磨きして仕上げている。色調は暗灰色を呈す。

(5) 陶 器（第120図）

緑釉陶器（3） 高台付椀で，復原口径16cm，器高 4.6cm，高台径 6.8cmを測る。釉は淡黄緑色で内外に施釉されているが，極めて薄く地色の灰色がめだつ，胎土は灰色を呈し，焼成良好である。C8区5層下部出土。



第 120 図　II区包含層出土土師器・瓦器・陶器・磁器実測図（1/3）

(6) 磁　器（第120図）

白磁（4）　口縁が玉縁状をなす椀で，復原口径18.1cmを測る。釉は淡黄白色で，内外に施釉されている。胎土は乳白色。C15区5層出土。

青磁（5・6）　5は口縁部付近，6は体部下半の高台付椀の資料である。5は体部内面に片彫りの草花文を描き出したもので，釉色は黄緑色を呈し，内外に施釉されている。釉厚は0.4～0.8 mmで胎土は乳灰色を呈す。6は高台径 5.5cmと小さく，畳付けは細く平坦である。釉色は淡緑灰色で，高台内面を除く内外に施釉され，内底部中央はかきとられている。胎土は乳灰色を呈す。5はII－2区3層，6はII－1区B3－5層下部出土である。

(7) 丸瓦・平瓦・瓦（第121図）

全て破片資料であるため，大きさ・模骨の規模等は不明である。叩文様には大きく正格子目文・平行条線文・斜格子目文・撚糸文の4つがある。斜格子目文には格子目の大きさに3種ある。

正格子目文（1）　凸面が3×3 mmの格子目文，凹面は細かい布目で，粘土板切り離しの糸切り痕を残す。色調は淡灰色を呈し，軟質である。平瓦。

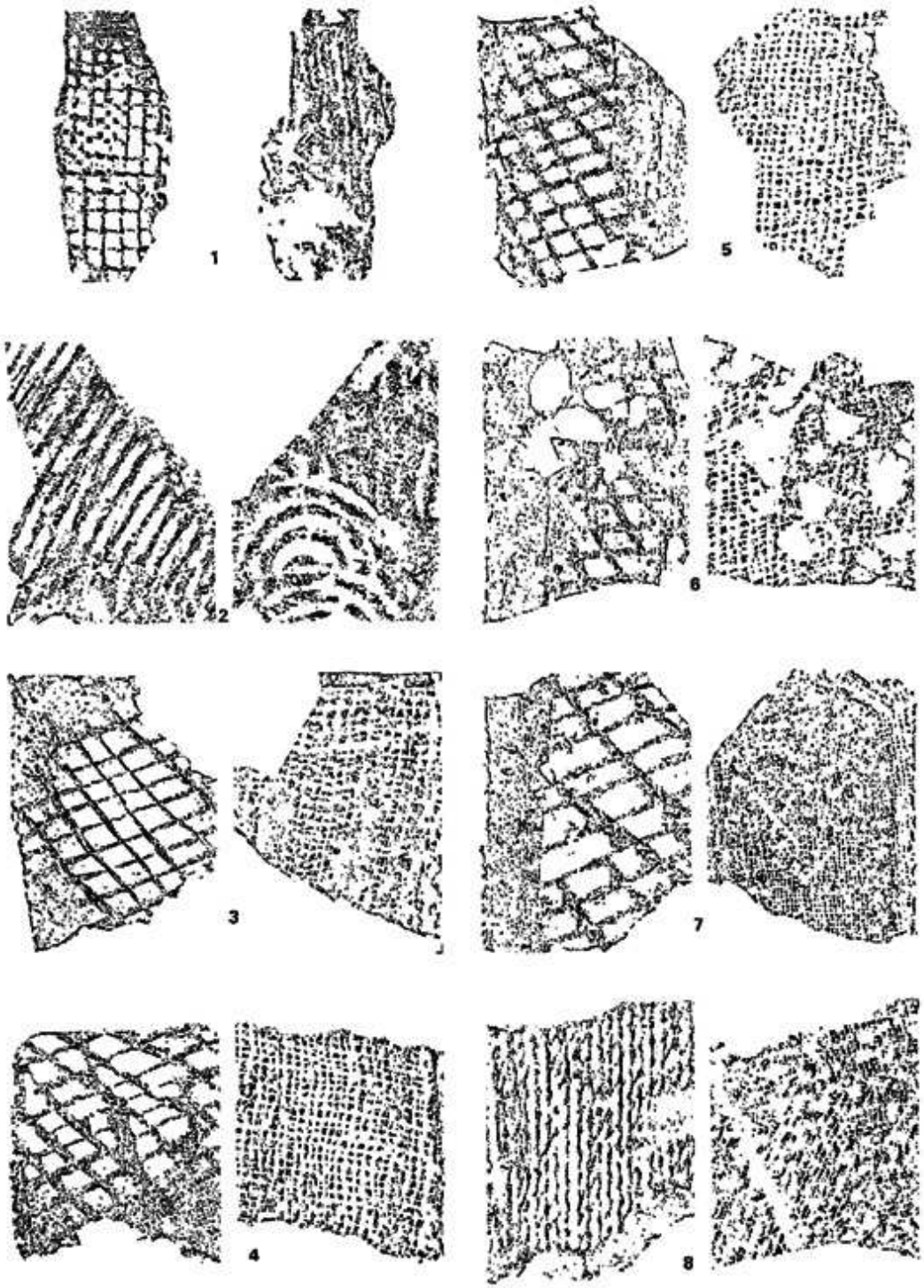
平行条線文（2）　凸面が幅 3.8mmの平行条線文，凹面は青海波の叩目文である。色調は淡黄灰色で軟質，平瓦。

斜格子目文（3～7）　3は凸面が4×5 mmの斜格子目文，凹面は粗い布目である。焼成は須恵質。丸瓦。4は 4.5×6 mmの斜格子目文，凹面は粗い布目である。色調は暗茶褐色で硬質。平瓦。5は凸面が 4.5×6 mmの斜格子目文，凹面は粗い布目で，凸面は部分的にナデ消している。焼成は須恵質。平瓦。6は凸面が5×7 mmの斜格子目文，凹面は粗い布目で，凸面は5と同様に部分的にナデ消している。焼成は須恵質。7は凸面が7×12mmの大きい斜格子目文，凹面は細かい布目である。焼成は須恵質。平瓦。

撚糸文（8）　凸面が右撚りの撚糸文，凹面は細かい布目である。凹面には糸切り痕を残す。色調は淡灰色で軟質。平瓦。

瓦の出土層位は，1・2が5層下部出土，3～8は3～5層上部出土の資料である。

以上の丸瓦・平瓦類は大きく二時期に大別できるようである。いわゆる正格子目文（1）と平行条線文（2）をもつ瓦類と，斜格子目文（3～7）と撚糸文（8）をもつ瓦類である。前者はいわゆる門田遺跡・柏田遺跡で出土している，白水廃寺系の軒丸瓦と共伴する平・丸瓦であり，7世紀後半と考えている瓦である。しかし後者の斜格子目文・撚糸文の瓦は大宰府政庁等に類例の多い平安時代の瓦といえよう。　（井上裕弘）



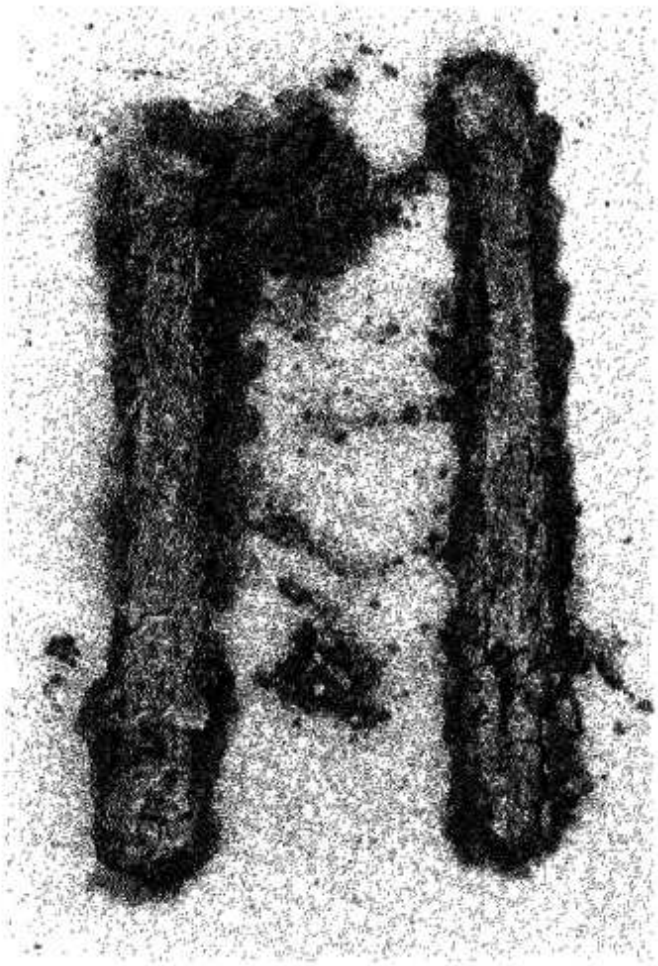
第 121 図　Ⅱ区包含層出土瓦拓影（1/2）

(8) その他の遺物（第122図）

鹿角柄と思われる骨が2点，B9区の第5層で検出されたが，風化が進んでおり非常に脆い状態になっている。

1点は，長さ19.2cm，幅 1.8cmで，端部に2.2cm・2.7cmと広がる。幅 2.7cmの端部には鉄分が付着しており，長さ 3.9cm，幅 1.7cmの広さで骨に対して直角に接している。骨・鉄分とも薄くなっている。もう1点は，長さ20.8cm，幅 1.5cm，端部では 1.7・ 1.9cmと幅広になる。1.9 cmを測る端部の骨質には，端から 3.1cmの長さにわたって鉄分の付着（色が染まる程度）がみとめられる。

両者とも，骨質が緻密であることから鹿角と考えられる。また鉄分が一端のみに付くことから鉄製品の柄を想定するものの，付着した鉄分の原形がどのような種類のものであったかは見当がつかない。　（小池史哲）



第122図　包含層出土骨製品

8．春日市大字上白水辻田遺跡の種子類について

辻田遺跡の弥生時代後期の大溝より，福岡県教育委員会の小池史哲氏らによって多数の保存のよい果実・種子類が発掘された。これらの種子類は大溝の最下層である第7層とその上の第6層下部から出土している。

第7層には若干の縄文時代・弥生時代中期の遺物も含まれているが，第6層下部では弥生時代後期の遺物，更に第6層上部では弥生時代後期の土器が多量に出土していることから，第6層下部にみられる種子類は弥生時代後期頃のもの，第7層の資料もこの時代に近い時期と考えられる。C6区の資料は大溝の中でも最も低い部分から，D10区の資料は大溝の中でわずかに高くなる部分から採取したものである。またC6区7層のA－1～4，B－1～4と記した資料はそれぞれ29ℓ採取した堆積土を水洗選別したものを4つの容器に収納しただけで1～4については特に意味はなく780414等の6桁番号は採取年月日を示す番号である。

今回は時間の関係で，予察的な同定にとどめて，将来さらにくわしく検討する予定である。

なお写真図版は巻末の図版117に収める。

II－1区，C3，7層，780516　ヤブツバキの保存のよい果実1個。

II－1区，C6，7層，A－1，780414（29ℓ）　多数のエゴノキの種子。まれに外果皮の残存しているものがあり，一見サクラ属の核のようにみえる。センダンの種子1個。

II－1区，C6，7層，A－2，780414（29ℓ）　ツブラジイ（堅果17個，うち1個は殻斗の一部をわづかながら残している）。マテバシイ（堅果の底の臍の部分だけが丈夫で2個あり）。クヌギ（殻斗1個）。ウラジロガシ？（多数の堅果と殻斗とがある）。クスノキ（種子1個）。サカキ（種子4個）。ハクウンボク（種子2個）。エゴノキ（種子10個。うち1個は双生でしかも対をなした種子がお互いにくっついたままの状態で出土した。これは珍しい例である）。カンガレヰの類（種子1個）。

II－1区，C6，7層，A－3，780414（29ℓ）　ウラジロガシ？（多数の幼果と6個の冬芽）。ツブラジイ（殻斗をつけた幼果6個）。ヤマモモ（種子1個）。ムクノキ（種子4個）。クスノキ（種子25個）。コブシ（種子の破片1個）。サカキ（果実1個。種子でなく果実である点が注目される）。センダン（種子3個）。アカメガシワ（種子15個）。コバンモチ（種子1個と破片3個）。ヤマビワ（種子27個）。イロハカエデ？（翼のとれた果実5個）。サクラの類（小形の核多数）。ウドカズラ（種子2個）。ノブドウ（種子2個）。エビヅル（種子1個）。ヒョウタンの類（種子1個。側面より圧縮され，変形をうけている）。ミミヅバイ（種子1個）。この他，木炭の小片4個，菌核1個。

II－1区，C6，7層，A－4，780414（29ℓ）　カシ属の冬芽及び堅果の先端部が多数。

ツブラジイ（幼果３個）。ヤマグワ（種子２個）。クスノキ（種子の破片１個）。ミゾソバ（種子３個）。タデ属（３稜をもつもの，２稜のもの夫々１個宛）。マルミノヤマゴボウ（種子１個）。サカキ（種子多数）。ヒサカキ（種子６個）。フジの類（冬芽４個）。カラスザンショウ（種子３個）。キハダ（種子１個）。モチノキの類（種子15個）。イロハカエデ？（果実１個）。ウドカズラ（種子２個）。エビヅル（種子２個）。チシャノキ（種子１個）。シソの類（種子１個）。ガマズミ（種子１個）。スゲ属の一種（種子２個）。カンガレキ（種子７個）。ミクリ属の一種（小形の種子５個），果実１個）。この他不明の長い越冬芽３個（これはカエデ属のものか？）。菌核（６個）。虫瘤？６個（楕円状のもので，カシ属の堅果の果皮の下に，しばしば数個つらなって生ずるものらしい）。

Ⅱ－１区，Ｃ６，７層，Ｂ－１，780414（29ℓ）　ハクウンボクの種子３個。おびただしいエゴノキの種子。

Ⅱ－１区，Ｃ６，７層，Ｂ－２，780414（29ℓ）　ウラジロガシ？（多数の堅果）。ツブラジイ（堅果10個）。サカキ（種子１個）。ハクウンボク（種子１個）。エゴノキ（種子６個）。菌核１個。木炭の破片２個。

Ⅱ－１区，Ｃ６，７層，Ｂ－３，780414（29ℓ）　ツブラジイ（堅果３個で，うち２個は幼果で殻斗をつけている）。イチイガシ？（未熟の幼果が多数あり）。ムクノキ（種子４個）。ヤマモモ（種子１個）。クスノキ（種子13個）。ノブドウ（種子１個）。エビヅル（種子１個）。ヤマビワ（種子15個）。イロハカエデ？（果実６個）。カラスザンショウ（種子15個）。コバンモチ（種子１個，小形）。アカメガシワ（種子７個。うち１個には白い胚乳が保存されていた。現世のものの混入かもしれない）。サクラ属の一種（小形の核72個）。ハクウンボク（種子１個）。エゴノキ（種子６個。双生で２個の対をなすものがくっついたもの１個あり）。この他。材片１個。木炭片２個。冬芽３個（クス科？１個及びカシ属？２個）。不明の種子５個。甲虫の翅鞘（小形のもの１個）。

Ⅱ－１区，Ｃ－６，７層，Ｂ－４，740414（29ℓ）　ヤマグワ（種子２個）。ヒサカキ（種子７個）。サカキ（種子多数）。カラスザンショウ（種子２個）。モチノキ属の一種（種子１個）。イロハカエデ？（果実１個）。フジ属の冬芽（２個）。ヤマビワ（種子１個）。ノブドウ（種子１個）。ウドカズラ（種子１個）。エビヅル（種子３個）。サクラ属の一種（小さな核１個）。チシャノキ（種子１個）。スゲ属（種子２個）。カンガレキ（種子２個）。この他，不明の冬芽・菌核・虫瘤が若干みられた。

Ⅱ－１区，Ｃ６，６層，780328　イチイガシの堅果２個。

Ⅱ－１区，Ｃ７，６層上部，780328　モモの核４個。

Ⅱ－１区，Ｃ７，６層下部，780329　サクラ属の小形の核１個。

Ⅱ－１区，Ｄ８，６層下部，780428　アカガシ？（堅果１個）。マテバシイ？（堅果１個。側

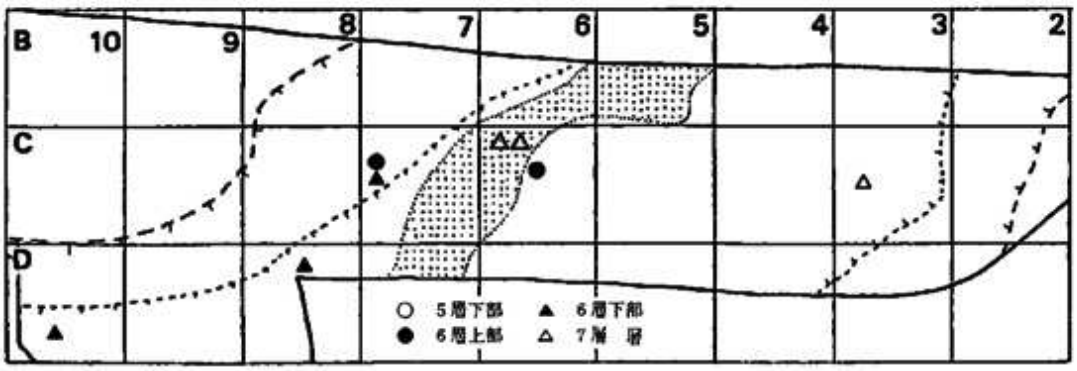
面に横方向に線状のへこみがあるが，これは発掘時のきずであろうか？。ヒョウタンの類（多数の種子と少量の果皮片がある。果皮片の一部は乾き上っている）。

II－1区，D10，6層下部，780503　モモの核1個。クヌギの堅果1個。つぶれている。

II－1区，D10，6層下部，780426－クリの堅果1個。

以上が予察的同定の結果である。C7，6層上部とD8，D10にはモモ・ヒョウタンの類・クリといった食用その他に利用した植物遺物がある。その他のC6の試料には，豊富な照葉樹林の要素が多数みられる。イチイガシ・ウラジロガシ？・ツブラジイ・マテバシイ・ヤマモモ・クスノキ・サカキ・コバンモチ・ヤマビワ・ミミヅバイ・ウドカズラなどである。C6の試料は溝の中に流れこんだ自然遺物であろう。殆んど人為のあとがみられない。わづかにC6，7層，A－3の試料の中に，不完全なヒョウタンの種子1個がみられただけである。当時この地点の近くには現在では全く破壊され消滅しさった立派な照葉樹林が存在していた事が想像される。

最後に遺跡に伴う植物種子類の産状について附け加えておく。日本において後永期（ほぼ1万年前以降）の植物化石（遺体・遺残とも）は，それ以前の古い洪積世の植物化石に比して保存のよい事は新しい時代のものとして当然である。特に「特殊泥炭層」のものは保存がよい。この点について，次のような事実が注意される。C6，7層のB－3，やA－2にみられた，エゴノキの双生の種子がくっついて出てくる事は，遺跡に伴う場合にのみみられた。又，C6，7層，A－4の試料にみられたミクリのうちの1個が，種子だけでなく果皮も保存しているというのも古い時代の化石にはみられない事である。またC6，7層，A－1にみられるように，エゴノキが時として外果皮を保存している場合がある。A－3では多数の種子をもったサカキの1個の果実が出土している。ヤマモモの核も多汁の毛の著点が点々とよく残っている例がしばしばみられる。これらは遺跡に伴う後永期の植物遺残の保存のよい事を反映しているのである。洪積世の古い化石ではみられない現象である。　（粉川昭平）



第 123 図　II区種子類の採取地点

9．辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定について

福岡県春日市上白水にある辻田遺跡は福岡県教育委員会によって発掘された弥生中期ないし後期の遺跡である。本遺跡からは多数の木器，木製加工品が出土した。これらの木製出土品のなかから約51点の資料の提供を受け樹種の同定を行なったので，ここにその結果をとりまとめた。

資料のいずれにも何らかの加工跡がある木製品であるが，出土した部分が木製加工品の一部分であるため用途が判明していない資料も数点含まれている。大部分の資料は用途が明らかに示されており，資料の用途および資料数をまとめて表10に表示した。

表 10 木製品の用途および資料数

用　途	資料数	整理番号
建築材	2	21，22
矢板	1	23
くい	4	24，25，29，30
梯子	1	15
ねずみ返し	1	16
田舟	1	2
二叉鍬	1	12
三叉鍬	3	4，26，27
平鍬	1	13
鋤	4	18，45，46，47
笠	1	8
たも	1	49
網	1	51
手斧	2	10，11
槌	1	36
横杵	3	6，37，38
竪杵	4	19，35，40，41
杵	1	39
杓子	2	7，32
漆塗り容器	1	34
槽	1	9
蓋	1	14
曲物底板	1	43
つるべ	1	20
紡錘車	1	48
下駄	1	33
琴	2	5，31
円板	1	28
不詳加工品	6	1, 3, 17, 42, 44, 50,

(1) 樹種同定の方法

資料から数ミリの大きさの直方体ブロックを数個切り出し，このブロックをポリエチレングリコールで包埋して固めた。包埋ブロックからスライディングミクロトームで13－18μmの薄片を作成し，この薄片をスライドガラス上に封入してプレパラートを作成した。これらのプレパラートを光学顕微鏡で検鏡し，木材の三断面（横断面，接線断面，半径断面）の各断面に認められた木材の組織学上の特徴から樹種を同定した。

(2) 樹種同定の結果（図版118～135）

同定した樹種は針葉樹9種，広葉樹16種であり，同定樹種名は資料の用途，出土層などとともに表11に表示した。

以下に同定した各樹種の顕微鏡で認められる特徴と木材の性質などを簡単に説明する。

1．カヤ　　*Torreya nucifera*

(23)　矢板(註1)

仮道管にはらせん肥厚があり，2本のらせん肥厚が近接して配列することが多い。放射柔細胞の分野壁孔

はヒノキ型壁孔である。材はほぼ通直であり，耐久性，割裂性が大きく，比重は0.53である。

2．イヌマキ　　*Podocarpus macrophyllus*

(32)　杓子

早材部仮道管には凸レンズ状孔口をもつ有縁壁孔があり，仮道管の有縁壁孔は多くは単列であるが，2列の仮道管も認められた。横断面における樹脂細胞の分布は短接線状および散在状でかなり多数分布する。放射組織にある放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型壁孔，トウヒ型壁孔が認められた。

材は木理がおおむね通直であり，肌目はこまやかである。脂気があり，臭気をもっているが，水湿に耐え，白蟻の害を受けにくい。耐久性，割裂性は大であるが，切削などの加工性は中庸である。比重は0.54である。

3．モミ属　　*Abies spp.*

(31)　琴1号

早材部仮道管には単列および2列の有縁壁孔をもつが，軸方向柔組織は認められなかった。放射組織は1細胞幅であり，高さは2－30細胞あるが，10－20細胞のものが多い。放射組織の放射柔細胞は壁孔の多い，肥厚した水平壁をもち，末端壁はじゅず状末端壁である。

材の木理はおおむね通直であるが，肌目は粗い。耐久性は低いが，割裂性は大きく，切削などの加工は容易である。比重は0.44である。

4．ウラジロモミ　　*Abies homolepis*

(21)　建築材

早材部仮道管の有縁壁孔は単列および2列の配列であり，トールスの周辺に突起はない。放射組織は1細胞幅であり，高さは2－20細胞である。放射組織の放射柔細胞は水平壁が肥厚しており、多数の壁孔をもっている。またじゅず状末端壁をもっている。

材は木理がおおむね通直であるが，肌目は粗い。耐久性は低いが，割裂性は大であり，切削などの加工性は容易である。

5．マツ　　*Pinus spp.*

(24)　くい　　(48)　紡錘車

軸方向樹脂道が散在状に分布する。放射組織には水平樹脂道を含むものがある。また放射組織の上，下縁には1列または2列の放射仮道管をもち，内壁には鋸歯状肥厚がある。放射組織にある放射柔細胞の分野壁孔は大型の窓状壁孔である。

わが国のマツ属の樹木は二葉松と五葉松があり，ここで，同定した材はともに二葉松である。わが国の二葉松にはアカマツとクロマツがあるが，両樹種を組織学上の特徴によって識別することは難しいので，一括して"マツ"として表示した。なお（48）紡錘車は貴重な小型の資料

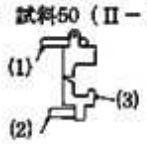
表11　同定樹種名および資料表

（図版118～135）

整理番号	出土層	用途	樹種名 和名	樹種名 学名	資料番号	写真番号
1	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	不詳	アスナロ	*Thujopsis delabrata*	461	1
2	Ⅱ－Ⅰ区，B7，6層下	田舟	ヤマモモ	*Myrica rubra*	779	2
3	Ⅱ－Ⅰ区，C8，6層下	不詳	スダジイ	*Castanopsis cuspidata var. shieboldii*	769	3
4	Ⅱ－Ⅰ区，C7，6層	三叉鍬	アカガシ属	*Cyclobalanopsis spp*	106	4
5	Ⅱ－Ⅰ区，B8，6層上	琴2号	スギ	*Cryptomeria japonica*	787	5
6	Ⅱ－Ⅰ区，B7，6層下	横杵	マンサク	*Hamamelis spp*	20	6
7	Ⅱ－Ⅰ区，C9，6層上	杓子	アカガシ属		22	7
8	Ⅱ－Ⅰ区，D8，6層下	釜の一部	広葉樹材	*Cyclobalanopsis spp.*	798	8
9	Ⅱ－Ⅰ区，C7，6層直上	櫓	クスノキ	*Cinnamomum camphora*	767	9
10	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	手斧	マンサク	*Hamamelis japonica*	172	10
11	Ⅱ－Ⅰ区，D10，6層上	手斧	シラカシ	*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*	80	11
12	Ⅱ－Ⅰ区，B6，7層	二叉鍬	シラカシ	*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*	165	12
13	Ⅱ－Ⅰ区，C9，6層上	平鍬	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	246	13
14	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	臺	シラカシ	*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*	41	14
15	Ⅱ－Ⅰ区，D8 9，6層上	櫟子	クリ	*Castanea crenata*	800	15
16	Ⅱ－Ⅰ区，	ねずみ返し	クスノキ	*Cinnamomum camphora*	749	16
17	Ⅱ－Ⅰ区，C7，6層	不詳	スギ	*Cryptomeria japonica*	47	17
18	Ⅱ－Ⅰ区，D8，6層上	櫛	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	145	18
19	Ⅱ－Ⅰ区，C6，6層上	竪杵	ヒメユズリハ	*Daphniphyllum teijsmanni*	151	19
20	Ⅱ－Ⅰ区，C6，5層下	つるべ	アスナロ	*Thujopsis delabrata*	373	20
21	Ⅱ－Ⅰ区，C8，6層下	建築材	ウラジロモミ	*Abies homolepis*	795	21
22	Ⅱ－Ⅰ区，D7，6層	建築材	スギ	*Cryptomeria japonica*	790	22
23	Ⅱ－Ⅰ区，C8，6層上	矢板	カヤ	*Torreya nucifera*	801	23
24	Ⅱ－Ⅰ区，B7，6層	くい	マツ	*Pinus spp.*	802	24
25	Ⅱ－Ⅰ区，C8，6層下	角くい	クロベ	*Thuja standishii*	803	25
26	Ⅱ－Ⅰ区，D8，6層上	三叉鍬	ハナガガシ	*Cyclobalanopsis hondai*	146	26
27	Ⅱ－Ⅰ区，D10，6層下	三叉鍬	シラカシ	*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*	130	27
28	Ⅱ－Ⅰ区，D8，6層上	円板	カゴノキ属	*Actinodaphne spp.*	244	28
29	Ⅱ－Ⅰ区，D8，6層下	くい	ユズリハ	*Daphniphyllum macropodum*	804	29
30	Ⅱ－Ⅰ区，C8，6層下	角くい	タブノキ属	*Machilus spp.*	121	30
31	Ⅱ－Ⅰ区，B7，6層	琴1号	モミ属	*Abies spp.*	778	31
32	Ⅱ－Ⅰ区，D3，7層	杓子	イヌマキ	*Podocarpus macrophyllus*	776	32
33	Ⅱ－Ⅰ区，2号土壙，	下駄	シオジ	*Fraxinus spaethiana*	785	33
34	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	漆塗り容器	ハンノキ属	*Alnus spp.*	797	34
35	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	竪杵	シラカシ	*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*	302	35
36	Ⅱ－Ⅰ区，B7，6層下	櫂	クリ	*Castanea crenata*	17	36
37	Ⅱ－Ⅰ区，C9，6層上	横杵	マンサク	*Hamamelis japonica*	155	37
38	Ⅱ－Ⅰ区，D9，6層上	横杵	マンサク	*Hamamelis japoncica*	444	38
39	Ⅱ－Ⅰ区，B8，6層下	杵	スダジイ	*Castanopsis cuspidata var. shieboldii*	152	39

	出土層	用途	樹種名		資料番号	写真番号
			和名	学名		
40	II－I区，B8，6層上	竪杵	マンサク	*Hamamelis japonica*	153	40
41	II－I区，C9，6層下	竪杵	ツバキ属	*Camellia spp.*	21	41
42	II－I区，	不詳	クスノキ	*Cinnamomum camphora*	36	42
43	II－I区，D8，6層上	曲物底板	ヒノキ属	*Chamaecyparis spp.*	233	
44	II－I区，B7，6層下	不詳	ツバキ属	*Camellia spp.*	8	43
45	II－I区，D10，6層下	鋤	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	409	44
46	II－I区，D9，6層上	鋤	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	411	45
47	II－I区，B3，6層下	鋤の柄	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	136	46
48	II－I区，B3，6層	紡錘車	マツ	*Pinus spp.*	774	47
49	II－I区，B7，5層下	たも	クロベ	*Thuja standishii*	750	48
50	II－I区，D10，6層下	不詳(1)(2)	マンサク	*Hamamelis japonica*	90	49
		不詳(3)	ツクバネガシ	*Cyclobalanopsis paucidentata*	90	50
51	II－I区，C8，7層	網	タケの一種		799	51

註　試料50（II－I区，D10，6層下出土，不詳品）の整理番号は下図の通りである。



(1)，(2)　棒状のもの

(3)　板状の加工品

であったためプレパラートを製作せず，資料を直接に反射顕微鏡で検鏡する方法および資料表面の小さな剥離片を採取し検鏡する方法を併用して同定した。

材にはヤニ条があり，肌目は粗い。耐久性，割裂性は中庸であるが，水中での保存性は優れている。切削などの加工性は中庸である。マツ材は伐採後に青変菌に侵され易く，材の色が変わることが多い。

6．スギ　*Cryptomera japonica*

（5）　琴2号　（17）　不詳加工品　（22）　建築材

早材部仮道管の有縁壁孔は単列または2列に配列する。横断面における樹脂細胞の分布は散在状あるいは接線状であり，かなり多数の細胞が分布している。またじゅず状末端壁をもっている。放射組織は1細胞幅であるが，高さは2－30細胞である。放射組織の放射柔細胞は壁孔がある肥厚した水平壁をもち，末端壁は薄く，インデンチャーがある。分野壁孔はスギ型壁孔である。

材は木理が通直であるが，肌目は粗く，早材から晩材への推移は急である。耐久性は中庸であるが，割裂性は大であり，加工性は容易である。

7．ヒノキ属　*Chamaecyparis spp.*

（43）　曲物底板

本資料は採取できた試料が少ないためにプレパラートが製作できなかったので，接線および

半径断面の剝離片を検鏡して同定した。顕微鏡写真は撮影できなかったため添付されていない。

横断面では樹脂細胞が存在するが，早材部にはない。放射組織の高さは２－８細胞の組織が多い。放射組織の放射柔細胞の水平壁は肥厚しており，分野壁孔はヒノキ型壁孔またはスギ型壁孔であるが，大部分はヒノキ型壁孔である。

材は木理が通直であり，肌目はこまやかである。独特の香気や光沢がある。耐久性は高く，割裂性は大である。切削などの加工性は非常によく，加工容易である。また水湿に対する耐久性も優れている。

8．アスナロ　　*Thujopsis delabrata*

（１）　不詳加工品　　（20）　つるべ

樹脂細胞は横断面では晩材部分に散在し，じゅず状末端壁をもつ。放射組織の高さは２－20細胞である。放射組織の放射柔細胞の水平壁は肥厚しており，壁孔をもっているが，インデンチャーやじゅず状末端壁はない。

材は木理が通直で，肌目はなめらかである。耐久性は高く，割裂性は中庸で，比重は0.45の範囲にある。

9．クロベ　　*Thuja standishii*

（25）　角くい　　（49）　たも

早材部仮道管の有縁壁孔は単列である。横断面における樹脂細胞の分布は散在状である。放射組織の高さは１－10細胞あり，放射仮道管をもつ放射組織が少数であったが分布する。放射組織の放射柔細胞の水平壁は壁孔を有し，肥厚しているが，末端壁は薄く，インデンチャーがある。分野壁孔はスギ型壁孔である。

材の木理は通直であるが，樹幹は往々にして捩れる。肌目はこまやかである。耐久性は中庸，割裂性は大であり，切削などの加工性はよく，加工容易である。

10．ヤマモモ　　*Myrica rubra*

（２）　田舟

散孔材。道管の直径は10－90 μmであり，横断面での分布数は80－100個／mm^2である。道管要素は多孔せん孔板を有する。軸方向柔組織は散在柔組織であり，結晶を含む多室結晶細胞がある。放射組織は１－４細胞幅で，異性放射組織型である。

材は堅く，ち密であり，肌目はこまやかである。比重はほぼ 0.6である。

11．ハンノキ属　　*Alnus spp.*

（34）　漆塗り容器

散孔材。道管の直径は30－100μmであり，道管要素は多孔せん孔板を有する。軸方向柔組織はあまり顕著ではない。放射組織は単列であり，かつ同性放射組織型である。

材はち密であり，肌目はこまやかである。耐久性は中庸であるが，割裂性は小さい。切削な

どの加工性も中庸である。

12. クリ　　*Castanea crenata*

(15)　梯子　　(36)　槌

環孔材。横断面の道管配列は孔圏では複列に配列し，孔圏外では放射状に配列する。道管の直径は80－400μmであるが，なかには500μmに達する道管もある。道管要素は単せん孔板をもっている。軸方向柔組織は短接線状柔組織および散在柔組織である。柔組織は顕著に認められる。放射組織は単列放射組織であり，かつ同性放射組織型である。

材は堅く，よく水湿に耐え，狂いも少ないが，肌目は粗い。耐久性は極めて高く，割裂性も大きいが，切削などの加工性は固いために困難である。

13. アカガシ属　　*Cyclobalanopsis spp.*

(4)　三叉鍬　　(7)　杓子

放射孔材。道管の直径は40－200μmであり，道管要素は単せん孔板をもっている。軸方向柔組織は多数顕著に認められ，独立帯状柔組織，短接線状柔組織および散在柔組織が認められる。軸方向柔組織には結晶を含んだ多室結晶細胞や同じく結晶を含んだ大型の柔細胞がある。放射組織は単列と幅が広い多列放射組織があり，同性放射組織型である。多列放射組織には結晶を含んだ柔細胞がある。

以上の検鏡結果からアカガシ属のカシ材であることは明らかであるが，樹種名までは同定することができなかったので，上記のように属名で表示した。

材は堅く，かつ重く，ち密である。切削などの加工性は困難である。

14. シラカシ　　*Cyclobalanopsis myrsinaefolia*

(11)　手斧　　(12)　二叉鍬　　(14)　壷

(27)　三叉鍬　　(35)　竪杵

放射孔材。道管の直径は50－200μmあり，道管要素は単せん孔板をもっている。道管壁には小型の有縁壁孔が交互状に配列している。軸方向柔組織は多数顕著に認められ，独立帯状柔組織および散在柔組織が認められる。軸方向には結晶を含む柔細胞が連続して分布するのが認められた。放射組織は単列および幅の広い多列放射組織があり，同性放射組織型である。多列放射組織の放射柔細胞には結晶を含むものがある。

材は重く，かつ堅く，ち密であるが，肌目は粗い。曲従性に富み，摩擦に対する耐久性がある。耐久性，割裂性は中庸であるが，切削などの加工は困難である。

15. ハナガガシ　　*Cyclobalanopsis hondai*

(26)　三叉鍬

放射孔材。道管の直径は50－300μmの大きさであり，単せん孔板をもっている。軸方向柔組織は顕著に認められ，短接線状柔組織および散在柔組織が認められる。軸方向柔組織には結晶

を含む柔細胞がまれに存在する。放射組織は単列および幅の広い多列放射組織であり，同性放射組織型である。多列放射組織には結晶を含む柔細胞が存在する。

材は他のカシ材と類似するが，やや軽く軟い。

16. ツクバネガシ　*Cyclobalanopsis paucidentata*

(13)　平鍬　(18)　鋤　(45)　鋤　(46)　鋤

(47)　鋤の柄　(50-3)　不詳加工品

放射孔材。道管の直径は50－300μmの大きさがあり，道管要素は単せん孔板をもっている。軸方向柔組織は顕著に認められ，独立帯状柔組織および散在柔組織が認められる。軸方向柔組織の柔細胞には多室結晶細胞と結晶を含んだやや大型の柔細胞が認められる。放射組織は単列および幅の広い多列放射組織があり，同性放射組織型である。多列放射組織には結晶を含んだ柔細胞がある。

材は重くかつ堅く，ち密であるが，肌目は粗い。曲従性に富む。耐久性や割裂性は中庸であるが，切削などの加工性は困難である。

17. スダジイ　*Castanopsis cuspidata var. shieboldii*

(3)　不詳加工品　(39)　杵

環孔材。横断面の道管配列は孔圏では複列に配列するが，道管の分布数はあまり多くない。孔圏外では放射状に配列する。道管の直径は100－300μmの大きさがあり，道管要素のせん孔板は単せん孔である。軸方向柔組織は短接線状柔組織および独立帯状柔組織であり，多数顕著に認められる。放射組織は単列放射組織であり，かつ同性放射組織型である。

材は堅く，ち密であるが，肌目は粗い。耐久性は低いが，割裂性および切削などの加工性は中庸である。

18. クスノキ　*Cinnamomum camphora*

(9)　樽　(16)　ねずみ返し　(42)　不詳加工品

散孔材。道管の直径は40－200μmであり，道管要素は単せん孔板をもっている。軸方向柔組織は周囲柔組織であり，多数顕著に認められる。分泌細胞である油細胞が多数分布する。

材には特有の香気があり，根・葉・樹幹からしょう脳が得られる。材はち密であるが，肌目はやや粗い。耐久性は高く，割裂性は大である。切削などの加工性は容易であり，材には光沢がで易い。

19. カゴノキ属　*Actinodaphne spp.*

(28)　円板

散孔材。道管の直径は30－140μmであり，道管要素のせん孔板には単せん孔板および多孔せん孔板がある。軸方向柔組織は周囲柔組織であり，顕著に認められる。放射組織は1－4細胞幅あり，異性放射組織型である。分泌細胞である油細胞が分布する。

材の肌目はややこまやかであり，強さは中庸である。

20. タブノキ属　*Machilus spp*

(30)　角くい

散孔材。道管の直径は50－140μmであり，道管要素のせん孔板は単せん孔板および多孔せん孔板が認められた。軸方向柔組織は周囲柔組織であり，顕著に認められた。放射組織は1－3細胞幅あり，異性放射組織型である。

材はやや堅く，ち密であるが，肌目はやや粗い。耐久性や切削などの加工性は中庸であるが，割裂性は小である。

21. マンサク　*Hamamelis japonica*

(6)　横杵　(10)　手斧　(37)　横杵　(38)　横杵

(40)　竪杵　(50-1)　不詳加工品　(50-2)　不詳加工品

散孔材。道管の直径は50μm以下であり，道管要素のせん孔板は多孔せん孔板である。軸方向柔組織は短接線状柔組織であるが，あまり顕著には認められない。放射組織は単列放射組織であるが，高さの低い複列部を含んだ放射組織も認められ，異性放射組織型である。

材はち密であり，堅く，強靭である。

22. ユズリハ　*Daphniphyllum macropodum*

ヒメユズリハ　*Daphniphyllum teijsmanni*

(19)　竪杵　(29)　くい

散孔材。道管の直径は20－80μmであり，道管要素は多孔せん孔板をもっている。軸方向柔組織は散在柔組織および短線状柔組織が認められたが，顕著には分布しない。放射組織は単列放射組織であるが，数細胞の高さの複列部をもつ放射組織も認められた。異性放射組織型の放射組織である。

材は肌目がこまやかで，ち密である。比重は約 0.7である。

(19) 竪杵は道管要素の壁孔の形態からヒメユズリハに類似し，(29) くいは放射組織の断面の形態からユズリハに類似する。しかし両樹種はよく類似するので，まとめて一項目とした。

23. ツバキ属　*Camellia spp.*

(41)　竪杵　(44)　不詳加工品

散孔材。道管の直径は30－70μmであり，道管要素は多孔せん孔板をもっている。軸方向柔組織は短接線状柔組織であるが，あまり顕著ではない。放射組織は1－4細胞幅をもつ多列放射組織であり，異性放射組織型である。放射組織には結晶を含む柔細胞が認められる。

材は堅く，ち密であり，肌目はこまやかである。耐久性は高いが，割裂は非常に困難であり，切削などの加工性も困難である。

24. シオジ　　*Fraxinus spaethiana*

(33)　下駄

環孔材。横断面での道管配列は孔圏では単列または多列に配列し，孔圏外では急激に小さくなり，道管壁は厚い。孔圏の道管の直径は200－350μmにも達し，道管要素は単せん孔板をもっている。軸方向柔細胞は顕著に認められ，周囲柔組織および随伴帯状柔組織である。放射組織は1－3細胞幅をもつ多列放射組織であり，同性放射組織型である。

材はやや堅く，肌目は粗い。曲従性があり，狂いは少ない。耐久性および割裂性は中庸であり，切削などの加工性は比較的容易である。

25. 広葉樹材

(8)　筌

本資料は樹木の小枝を編んで網状にしたものであり，小断面積である枝は腐朽などにより試料の周囲部分の破損が著しく，プレパラートの作成は困難であった。試料からは材の髄を含む横断面の切片が得られたが樹種の同定はできなかった。横断面の切片は髄と1－2年輪の材部を含んだ小さな円形断面である。材部には小さな直径の道管が分布することから広葉樹材であろうと思われる。

26. タケ

(51)　網

本資料は幅が約5㎜程度の長さで厚さが薄い扁平状の断面をもったテープ状の材料を編んで網にしたものである。採取した試料は腐朽などによりかなり破壊されており，横断面のプレパラートは得られたが，他の2断面のプレパラートは作成できなかった。

横断面の切片では，皮層，維管束鞘を含む中心柱が観察されたのでタケの一種であると同定した。

(3)　利用樹種および用途について

今回樹種を同定した資料は51点であるが，これらの資料を用途によっておおまかに区分すると建築部材9点，農漁具13点，生活用具23点，用途不詳加工品6点となる。材料として使用された木材は属名までしか同定できなかった樹種を含めて，針葉樹9種，広葉樹16種に達する。これら木材の樹種，利用形態や木製品の用途などについていくつかの考察を試みた。

樹木の枝を利用した資料としては（8）筌と（49）たもがある。（49）たもは枠に使用された枝材である。形態は枝を輪状に曲げて組合せたもので，内側には切込みが数ヶ所入れてあることからこの部分の曲りをよくし，輪の形を整えたものと考えられる。また切込み部分にたも網の圧こんが残されているのでたも網をかけて使用したことも考えられる。樹種は現在でも曲物に使用されている針葉樹のクロベであるが，この樹種は現在，九州地方とくに福岡周辺には

全く自生していない。しかし本資料では枝材を利用しているので，当時は福岡周辺にも自生していた可能性が大きく，植物生態学的にも興味ある問題であろう。（8）笠は細い枝を編んだ網の部分である。この網は網目が粗く，同じ編んだものである（51）網とは網目が異なっている。（51）網はタケの地上茎を縦割りして,扁平状の断面をもったひごを作り、これを編んだものであり，現在のタケ編みと同様の目がつまった編み方になっている。

樹幹を棒状の形態として利用した資料にはくいが4点，竪杵が4点，槌が1点と杵の1点の合計10点がある。

くいは細い樹幹や角棒状に割られた樹幹の先端を削り落したものが使用されている。使用樹種はマツ，アスナロ，タブノキ，ユズリハであった。マツ，アスナロ，タブノキの各材は耐水性がよく，地中に保持されるくいとしては適した使用方法であると思われる。ユズリハ材は福岡市の板付遺跡（弥生後期の遺跡）では丸木杭として多量に使用されていたと報告（註2）されており，当時は比較的入手が容易であり，利用し易かった材であろう。なおアスナロ材は前述のクロベと同じく，現在の植生からは想像できないもので当時の植物相を知る貴重な資料であろう。

竪杵，槌，杵はいずれも丸太状の木材であるが，丸太の一部を細く削り握りとし，他のものに力を加える道具として使用された。この場合に木材が力を受ける面は材の横断面に限定され，力は木材の繊維軸方向に加えられる様に使用されている。木材ではこの方向に力が加えられたときの強さが最も強く望ましい負荷方向だといえる。使用されている材はカシ材をはじめとして，いずれの材も重く，堅い木材であり，ものを突いたり，たたいたりするには良い材質をそなえている。

枝をつけた樹幹を利用した資料としては，横杵が3点，手斧が2点ある。木材の樹幹部分を本体に，枝部分を柄に利用している。樹幹と枝の結合は木材組織上からもかなり強固な結合であり，本体と柄の力伝達に十分な機構を備えている。加工技術が十分に発達していなかった当時では材料利用の優れた技術であったといえよう。道具の本体と柄のなす角度すなわち樹幹と枝のなす角度が横杵は手斧より大きく，両者の間には形態上の差がある。これらの道具が使用される場合の力を伝達という面から考えると角度が異なっていることは合理的である。使用されている材は横杵には靱性があり，破損しにくいマンサク材が使われ，手斧にはより強さの大きいカシ材も使用されている。

板状の形態をもつ資料には長さが100cm以上もある長いものと約60cm以下の短いものとがある。長いものは建築材，矢板，琴などがある。これらの板材はモミやカヤといった樹幹が通直な針葉樹材が用いられている。これらの針葉樹材は木理が通直であるため割裂性が大きく，加工が比較的容易であることから平らな表面をした長い板が得られる。一方短いものには蓋，円板，曲物底板などがあるが，これらの盤あるいは板材には針葉樹材のものと広葉樹材のものと

がある。広葉樹材は樹幹のねじれや枝などのために長い寸法の板材が得られにくいために専ら短い板材に利用されたものであろう。

その他の板状の形態をもつ資料のなかに農具である二叉鍬が1点，三叉鍬が3点，平鍬が1点，鋤が4点の計9点がある。これらの農具は土地を直接掘ったり，耕すのに使用されるために材質が堅く，強さの大きい木材として，切削などの加工が困難であるにもかかわらずアカガシ属のカシ材が選択的に用いられている。門田遺跡から出土した二叉鍬，平鍬もやはりアフガシ属のカシ材が使用されており，当時すでに農具用の木材にはカシ材が選定されていたと考えられる。加工具の面では，鍬類に柄をつけるため鍬身に一辺が2－5㎝程度のほぼ正方形断面をもった穴があけられていることや、叉鍬類の鍬身の加工跡などからかなり性能がよい小型の加工具が使用されていたものと思われる。

今回の資料の木取りを見ると，（7）と（32）の杓子および（48）の紡錘車は板目取りされているが，棒状のくいやたもを除いた他の資料は柾目取りされた材から作られている。

例えば（16）ねずみ返しは直径72㎝の円板の中央に正方形の穴があけてあるものであるが，板の広い面が材の柾目面となっている。（20）つるべは半径約22㎝の円板の一部分と考えられるが，円板の広い面が柾目面である。（21）建築材，（31）琴のような板材でも広い面は柾目面となっている。これは丸太から板状の材を得る加工法としていわゆる"割り加工"によっていたためだと思われる。

使用された木材の性質をおおまかに分類し，表12に示した。割裂性や切削などの加工性が中庸以上の木材が多用されており，加工方法との関連性が考えられる。

割裂性が小さなタブノキ材，ツバキ材は加工量が少ない棒状の加工品に利用されている。カシ材，クリ材，ツバキ材は加工性は困難な木材であるが，道具として使用するときに強さが要求される用途，すなわち農具，槌，竪杵といった用途には使用され，木材の特性を考慮しているものと思われる。

槽にはクスノキ材が使用されているのは耐久性が高いことと刃物が切れなくてもある程度の加工が容易であるためと考えられる。

（松本昌・林弘也）

註1　（　）内の数字は表11に表示した整理番号である。

2　後藤直他編;『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第35集　福岡県教育委員会　1976

なお本報告書作成後に木製品資料番号 125・126・204・234・767・794の樹種同定報告を頂いた。この結果はクリ・クリ・クリ・クスノキ・クスノキ・スダジイである。本文・写真図版等を掲載できなかったが，補っておきたい。（編者註）

第12　木材の性質

耐久性		
高い	中庸	低い
カヤ，イヌマキ，ヒノキ属，アスナロ，クリ，クスノキ，ツバキ属	マツ，スギ，クロベ，ハンノキ属，シラカシ，ハナガガシ，ツクバネガシ，タブノキ属，シオジ	モミ属，ウラジロモミ，スダジイ

割裂性		
大きい	中庸	小さい
カヤ，イヌマキ，モミ属，ウラジロモミ，スギ，ヒノキ属，クロベ，クリ，クスノキ，	マツ，アスナロ，シラカシ，ハナガガシ，ツクバネガシ，スダジイ，シオジ，	ハンノキ属，タブノキ属，ツバキ属，

切削などの加工性		
容易	中庸	困難
カヤ，モミ属，ウラジロモミ，スギ，ヒノキ属，クロベ，クスノキ，シオジ，	イヌマキ，マツ，アスナロ，ハンノキ属，スダジイ，タブノキ属，	クリ，シラカシ，ハナガガシ，ツクバネガシ，ツバキ属

10．出土遺物の取り上げと保存処置

出土木材（建築材？）の発掘調査中の乾燥防止

辻田遺跡第６層中からは川に直交する状態で長大な（長 ２ ｍ，径25 ㎝ ）丸太材が発見された。発見，露出後，時々水浸状態になったものの周囲を掘り下げた結果水浸状態は降雨時のみとなり，そのままでは調査中に現場で干割れてしまうと判断された。そこで，露出後約１週間経った段階で，乾燥防止のためにポリエチレングリコール－1500（ＰＥＧ－1500以下同）の50％水溶液を丸太材に塗布し，その上を綿，雑巾で覆って更にビニールをかぶせた。その結果，陽除けとしてのテントなどの覆いなしにもかかわらず，以後約２週間ほとんど乾燥することなく５月の気候に耐えることができた。このようにＰＥＧ－1500を木製品の乾燥防止剤として使うことは有効であるが，この場合，あくまでも大きく直ちに取り上げられないようなものに限るべきで，その場合にも（辻田では行われなかったが）テントなどで覆いをすることが必須である。またＰＥＧ溶液は数日間隔である程度機械的に塗布しなおすのが適切である（ＰＥＧは水溶性であるから，水との接触が多いほど抜け易いので特に塗布後降雨，地下水などで浸された場合は改めて塗り直すことが必要である）。

弥生時代の遺跡をはじめ最近は杭列などが発見されることが多いが，この杭は打ち込んでかなり下層まで達しており，調査終了までかなり長期間見込まねばならない。このような条件の時にはＰＥＧをたっぷりと塗布してシートなどで覆いをし，更にテントなど張れば防乾措置としては相当効果が期待できる。

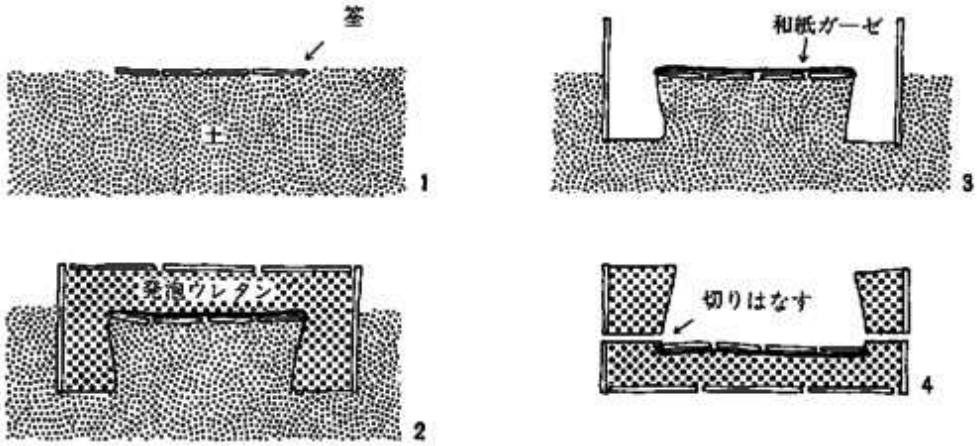
註　市販のＰＥＧは様々な分子量のものがあるが，ふつう水浸木製品に対する保存処置剤としては，乾燥防止には1500，固化剤としては4000又は6000が適している。ＰＥＧ1500は常温ではゲル状で，かなりの親湿性をもっている。ハンド・クリームなど同様の理屈である。

(2)　竹製編物（籠），筌の取り上げ　（図版136）

これらの出土状態，形態については本文を参照されたい。かごはつぶれてではなく一部分が砂礫にへばりついた状態で発見され，また筌は横断面形が円形のものが，まさにペシャンコにつぶれて土にへばりついていた。これらは作業の進め方に若干のニュアンスのちがいがあるものの同一方法で取り上げたので模式図（第124図）で説明しておきたい。これまで石膏などで行なっている取り上げと基本的には同様である。

1　出土状態

2　遺物の周囲を10㎝程掘り取って，板で枠を入れ，遺物の上面はガーゼ，画仙紙・障子紙



第 124 図　筌の取り上げ方法模式図

などで覆ってから水で遺物と密着させる。掘り込み下部に遺物の中心に向って横方向のえぐりを入れればより有効である。

3．硬質発泡ウレタンを周囲の掘り込み部と天井部に流し込む。

4．10分程経って裏返す。

この際使用した硬質発泡ウレタンはごく軽量であるが強度はあり，従来の石膏取り上げに比べてはるかに利点がある。

取り上げ後，今度は室内作業に移って，ここで時間をかけて裏側からの土を取り去って，現場で見せていた面とは逆であるが反対側の面を現わした。都合によっては再び反転も可能であることはいうまでもない。

(3)　木製品の今後の保存について

木製品は，管理が適切に行き届くのならば当面は水浸保存でもよいと考えられる。ただ，この場合には展示などに資料を使わないならばということであり，展示等を行ったりして一般に公開するというようなことがあるのならば，早急に固化保存の処置をする方が適している。この際は大半のものが大きさ，形状などからみてＰＥＧ4000～6000による固化処置が適していると考えられる。仮りにこの処置を行った場合の事後の保管上の注意点として，

1．温湿度は春，秋程度が望ましい。

2．固化したからといってむやみに触手，移動は慎しむ。

3．日光は避ける。　　の３点を厳守することが必要である。

尚，当遺跡出土全木製品を固化処置するのには最低１ヶ年を要する。全部をただちに固化保存しなければならないかどうかについては慎重に考慮すべきであろう。

(4) 筌の今後の保存について

筌は現在発泡ウレタンの台（箱）に取り上げ後逆転した状態で定期的に注水しながら保存している。これはふつういう水浸保存ができない状態なので早急に何らかの抜本的保存処置が必要である。

凍結乾燥法，アルコール，エーテル，樹脂法，ＰＥＧ法などが現存行われている。この種遺物の固化保存処置であるが，いずれにしても，このペシャンコにつぶれたペラペラの脆弱なものをそれのみで固化保存することは困難であろう。

そこでまず最も簡便に考えられる処置は，現存台になっている発泡ウレタンのまま，ＰＥＧ4000で固化処置を行うことである。こうすれば，筌のみを移動させずに済み，遺物に対しての安全度は最も高いし，展示等公開もしやすいであろう。

安全度が高い点からは，もう一つ，密閉してしまう方法がある。この際に問題になるのは水分をどう処理するか（含水のままか又は水抜きをするか）とか，密閉した後，中での腐植等のあった際どうするかなどいくつかの大きな難関がある。その点からＰＥＧにより台のまま固化処置しておくのが現状で最も適していると思われる。ただし，細い棒状であるから脆い点と，表面処理がかなりむづかしいと懸念される。

(5) 溝中出土の金属器保存処理

溝の中から発見した金属器は，鉄斧，方形銅矛（片），青銅鋤先である。これらは保存状態はチョーキング，緑錆などほとんどなく良好であった。しかし，青銅製品には原表面が良好に保たれているわけではなく，ごく小さな「鬆」（す）が露わな状態であったので，鉄斧も共にアクリル樹脂のキシレン溶液（パラロイドＢ72）を塗布し硬化した。

（横田義章）

11. 小　　結

Ⅱ区の調査では，大溝の調査にその大半を費し，大溝以外では土壙・竪穴状遺構・掘立柱建物跡等11の遺構を数える。遺物としては先土器時代以降の資料があるが弥生時代中期までは遺構として存在しない。先土器時代は西端部の表土層出土資料のナイフ形石器１点でその原位置については何らの痕跡をみとめない。縄文時代では晩期の資料が若干大溝の中に混在し，弥生時代前期の遺物も大溝の中に散見するに留まる。弥生時代中期になると東端部に３基の土壙が台

地裾に並ぶ。大溝はこの段階でも顕著な痕跡を残さないが，弥生時代後期後半には多くの土器・木製品をこの大溝内に埋積させており，竪穴状遺構・土壙等も設けられている。また大溝は上層に古墳時代以降の遺物も含んでおり土壙や掘立柱建物がみられるようになる。これらの遺構からは各種の遺物が出土し，多くの成果が得られた。またこれらの遺物はその出土状況や遺物自体の形状等に多くの問題点をはらむものである。限られたスペースの中で問題点を一つ一つ言及するだけの余裕はなく，成果について整理し，若干の問題点を指摘することに留めておきたい。

1　ナイフ形石器の出土から周辺に包含層の存在が考えられる。なお門田遺跡には多くの先土器時代遺物の出土がみられ（註1），両者の関連も考えられる。

2　縄文時代晩期の遺物が大溝内にみられることから周辺に遺構あるいは包含層の存在する可能性がある。また黒色磨研土器の形状は従来北部九州地域に発見されていないものである。

3　大溝には多くの弥生時代後期の土器が西肩から堆積していた。また多くの木製品類・植物遺存体や各種の遺物が埋積しており，土器の下に位置することから一部の木製品類を除いた大半は土器の年代を下ることのない時期の資料と言える。

4　弥生時代後期の土器はその特徴から後期後半（終末に近い）の時期があてられる。しかし従来弥生時代後期後半の土器編年ではまだ資料は充分とは云えない。大溝第6層上部及び1号土壙出土の土器は，わずかながらも門田遺跡辻田地区出土の土器群（註2）と共に編年の枠の一角を占めることが可能であろう。

5　大溝から出土した石器類は少ない。弥生時代に属すると思われる石器は石剣・抉入石斧・石庖丁・砥石等に限られるようになり，その量もわずかである。

6　木製品類は大溝の中でも目立った存在である。種類として，農具・漁具・調整用具・工具・食料調理用具・紡織具・その他の生活用具・琴・建築部材・土木部材等がある。これらの内農具・生活用具類が量的に多い。また板材あるいは板状に加工した種類が多い。

7　農具では，平鍬・二叉鍬・三叉鍬・鋤・ふぐし状木製品・えぶり状木製品・田下駄等の種類があり，量的に多い鍬類はカシ材を用いて扁平で均整のとれた形状を呈している。ただ叉鍬類では刃の長さの長いものが含まれる点は注意されるよう。また鋤には刃縁に沿った痕の存在も注意しなければならない。

8　漁具では手網と筌がある。第5層下部の出土資料である手網は古墳時代以降の所産の可能性もあるが，筌は第6層の下面から出土しており弥生時代の所産である。筌は現在使用されているものと同じ外形を有しているが，竹を材料とせずに広葉樹材を用いている。

9　調整用具と分類した杵には，竪杵と横杵がある。竪杵は弥生時代前期に既に出現しているが，横杵とは別な系譜をたどるものと考えられる。なお竪杵の中に搗面の丸くなる例を除いて全て平坦面に近い搗面を有していることは留意する必要があろう。

10　工具と分類したものには槌と斧柄がある。斧柄では木製品番号18資料に着装部がみられ，袋状鉄斧の着装が想定される。鉄斧は完形の袋状鉄斧が大溝西肩部で出土しており，着装可能だが，斧柄と刃先は平行になる。柄は木の叉になる部分を利用し57°の傾きを有す。他の斧柄は着装部が不明で，60°・75°の傾きを有す。なお石斧では，抉入石斧基部1点が出土したのみであるため斧柄と結びつける資料はこの調査では得られなかった。

11　食料調理用具では槽類と杓子があり，一応，槽に類するものとした田舟状木製品は，木口部が底面に対して直交するため田舟としての使用より他の用途を考えるべきであろう。ただ樹種が槽類に共通するクスノキに対してヤマモモである点は注意を要する。現状では実測不可能な状況にあるため機会を改めたい。杓子では汁杓子が3点とヘラ杓子7点があり，汁杓子は他の木製品類に比して精巧である。ヘラ杓子は柄の長い点に留意する必要があり，今後の類例を待ちたい。

12　紡織具としては木製紡錘車の出土がある一方では土製紡錘車の存在もある。いずれにしても糸巻棒はみとめられなかった。

13　その他の生活用具類には，枘・枘孔を造り出した資料が多い。材の接合は器種を多様化させる要因となろうが出土品では散在するため復原することが出来なかったが，木製品番号90資料にみられる組合せにその一つの形をみることができる。また大分県安国寺遺跡では枘を有する板材のA類とB類を接合させたような例がある（註3）が，B類の形状に違いがあり用途を同一とし難い。しかし技術的には同一であり興味深い。なお曲物底板の出土例としては岡山県上東遺跡に類例がある（註4）が，円形であるのに対して本遺跡の例は楕円形になる点を除いて近似する。ただ第6層上面には若干古墳時代以降の遺物を混入している点注意を要する。

14　琴板は2点出土しており形状は異なる。琴1号は大形で全長148.4cmを測り，6弦を張る突起と孔・共鳴孔を有す。また裏面には共鳴箱を接合したと思われる施設がみられる。琴2号は6本の突起を有し，共鳴箱を接合した可能性もある。いずれにしても琴柱は出土していない。なお琴板をめぐる問題については別の章で後述したい。

15　建築部材・土木部材としては，梯子・ねずみ返し・矢板・杭等がある。また建築部材には枘孔を有する大形の板材・角材等もある。建築部材・土木部材とも構築の理解できる出土状況ではなかったが，種々の制限があったため，充分な調査をなしえなかった。

16　金属製品では，銅矛片・青銅製鋤先・袋状鉄斧が各1点出土している。3点とも湿潤な堆積土中にあったためか出土時の色調は赤銅色・灰白色を呈している。

17　竪穴状遺構は大溝に関連した施設と考えられる。

18　弥生時代の土壙は4基あり，大溝の東側に位置する中期の土壙3基と，大溝の西側にある後期の1号土壙と区別される。1号土壙は大溝の時期とほぼ同様の時期と考えられる。

19　古墳時代以降の土壙は3基あり，これも大溝の東側と西側に別れる。このうち西側に位

置する２号土壙は，墨書を有した土師器杯や瓢容器・下駄を含み９世紀前半頃と考えられる。

20　建物跡は３棟あり，１号建物は８世紀以降，２号建物は14～15世紀の可能性がある。

21　歴史時代の遺物は第５層下部以上の堆積土から出土した遺物があり，須恵器・土師器・瓦・磁器等が含まれる。また木製品の中できわだった存在となっているのは大溝上層で出土した木簡である。木簡の出土は福岡県内において大宰府政庁及びその周辺（註５）・福岡市南区三宅廃寺（註６）と辻田遺跡の３遺跡のみしか確認されておらず，貴重な資料と云えよう。

22　大溝出土の種子類から当時の環境をある程度考えることができる。大阪市立大学粉川昭平教授によると，大溝の第７層（最下層）では照葉樹林を構成する多くの植物遺存体が溝の中に流れ込んだもので殆んど人為のあとがみられないことと，第６層下部及び第６層上部ではモモ，ヒョウタン・クリ等の食用あるいはその他の利用の考えられる植物遺存体がみられるとされる。この結果は，第６層下部の段階から大溝が生活に密接になったことを暗示させ，木製品類の出土状況とほぼ符合する。

23　木製品に使用された樹種については九州大学の松本勗教授・林弘也助手によって同定され，用途に適した材を選定していること，木取りも用途に適していることが指摘された。また現在の植生にみられない樹種の存在もあるとされ，クロベ，アスナロの針葉樹材があげられている。両者を用いた木製品では手網・つるべ状木製品・枘を有する板材Ｂ類・角杭があり，手網・つるべ状木製品が第５層下部出土の木製品として数少ない資料である点は留意する必要があろう。なお琴１号はモミ属・２号はスギとされる。

24　遺物の保存処理は九州歴史資料館の横田義章主任技師によって進められている。木製品類の現場での防乾措置の指摘をはじめ，筌等の取り上げ方法・木製品の今後の保存についての指摘がなされた。変色・風化の進んでいない金属製品をはじめとし，類例の少ない貴重な資料である木製品の保存は，今後の調査研究への礎となろう。　（小池史哲）

註１　久村貞男・荻原博文「先土器時代の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集上巻福岡県教育委員会1978，など。

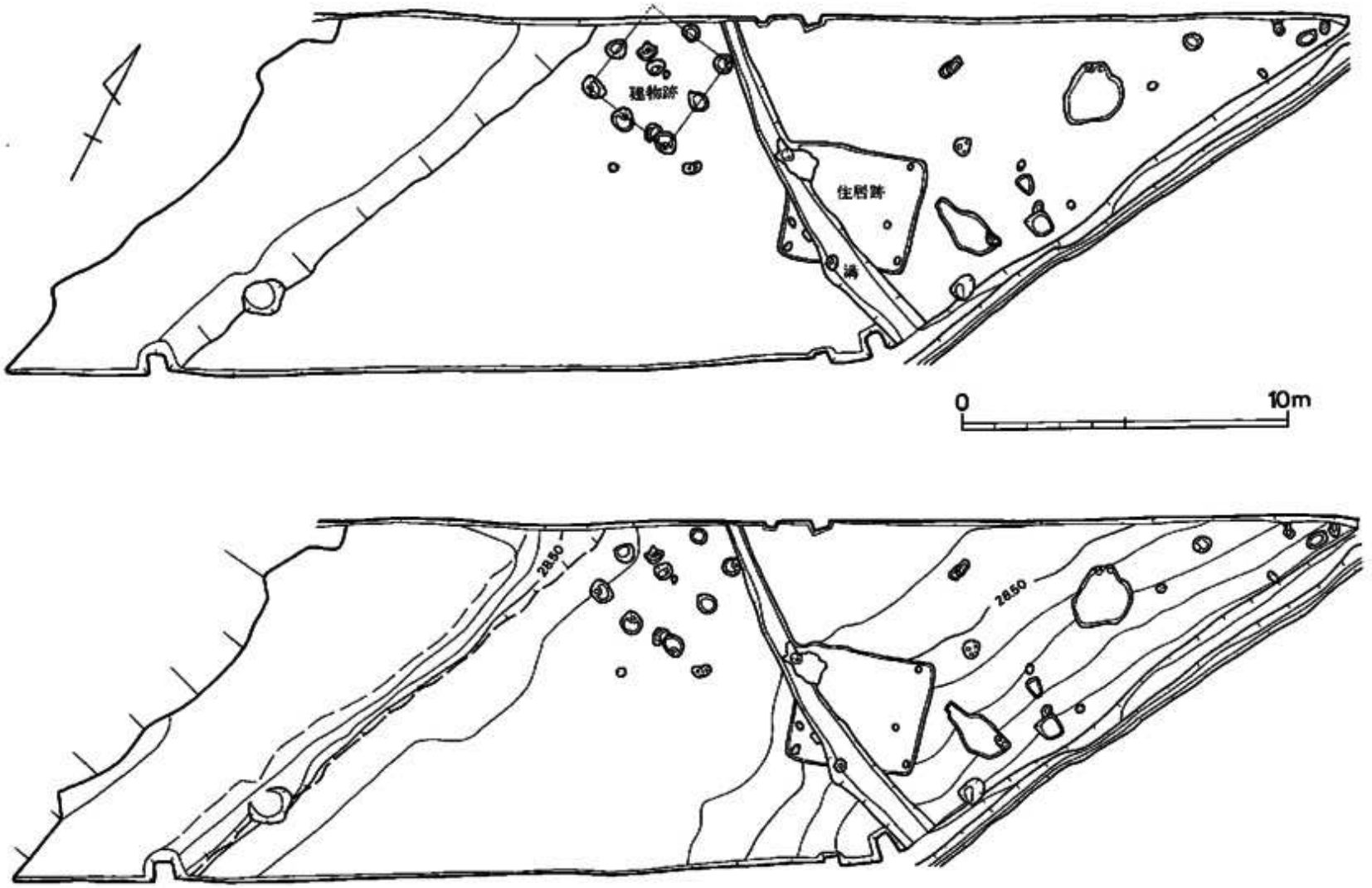
註2　井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集下巻　福岡県教育委員会　1978.

註３　乙益重隆「木器及び木製品」『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』九州文化総合研究所・毎日新聞社1958.

註４　柳瀬昭彦他「上東遺跡」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　1977.

註５　倉住靖彦編『大宰府史跡出土木簡概報（一）』九州歴史資料館　1976.

註６　福岡市教育委員会二宮忠司氏の御教示による。



第 125 図　Ⅲ区遺構配置・地形図 (1/200)

V　第Ⅲ区の遺構と遺物

Ⅲ区は，Ⅱ区の南西にあたる狭い台地上をさす。この台地は門田遺跡から続く台地で，北は日拝塚をのせる台地へとつながり台地の幅を広げる。Ⅲ区での台地平坦面の幅は，現状では約20ｍを測る。東側を町道，西側は畑の開削により削平されてはいるが，もともと狭長な台地で，その幅を大きく増すものではない。

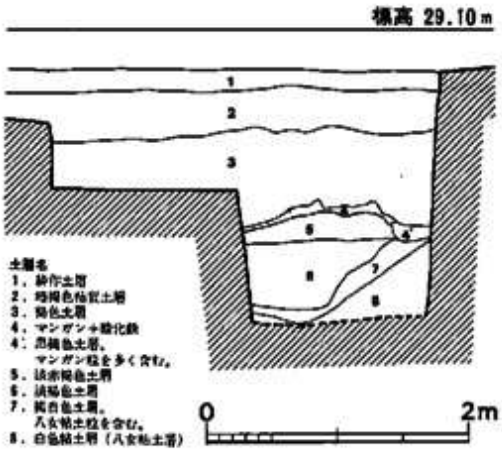
調査区は，台地を斜めに横ぎる状態で設定されたものである。検出された遺構は，弥生時代後期の住居跡1軒，古墳時代のものと思われる2間×2間の総柱の掘立柱建物跡1棟，中世の溝状遺構1条と他に時期不明のまとまりのないピット群がある。遺構は全体に浅く台地上面がかなり削平されていることが判る。

遺物は，火災を受けたと思われる竪穴住居跡内から弥生時代後期の土器が多数出土した他は，弥生式土器・土師器・須恵器・磁器等の小片が若干出土したのみである。　　（井上裕弘）

1．層　　序

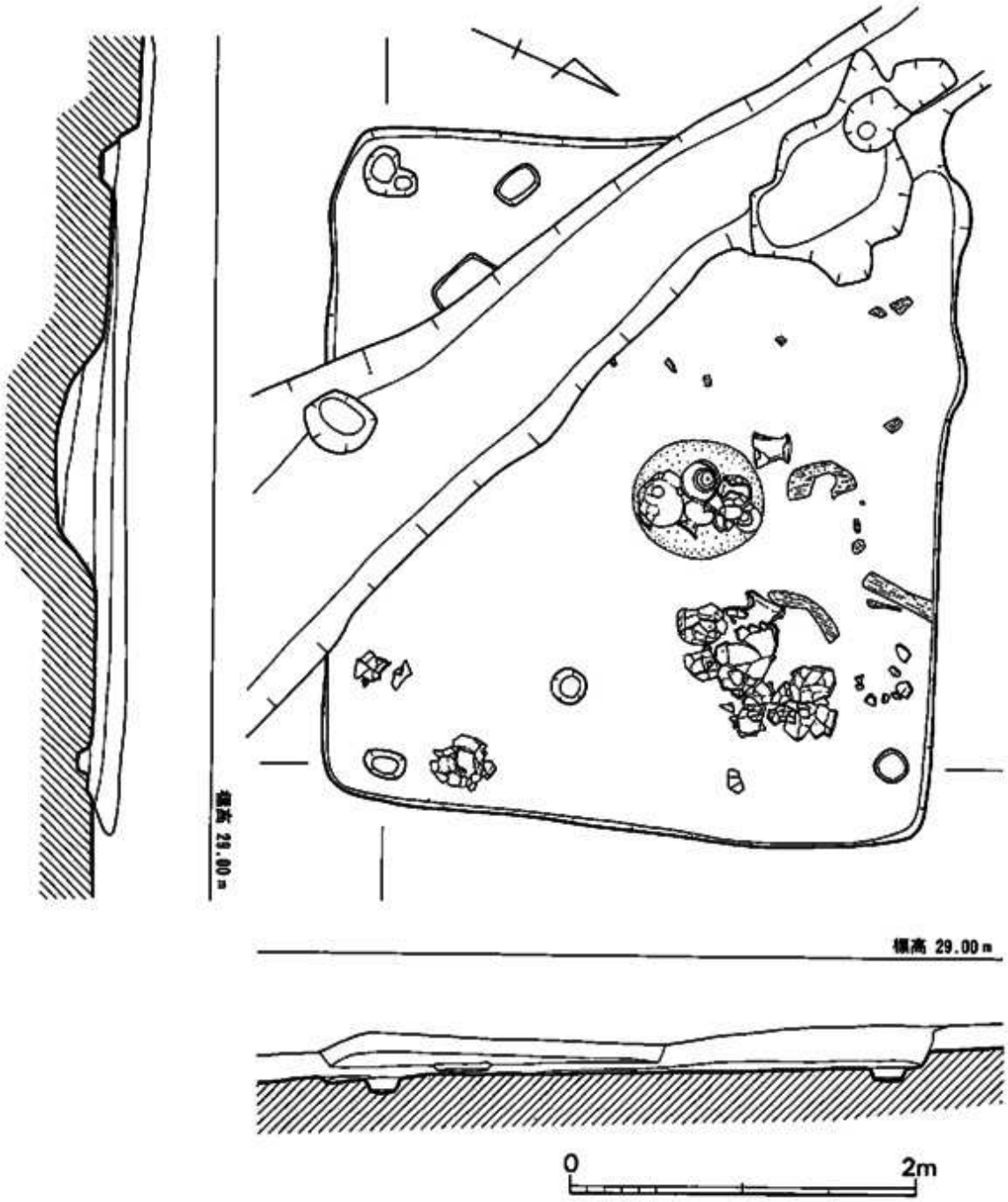
Ⅱ－2区の調査時にナイフ形石器(第37図1)が検出され，Ⅲ区の台地上に包含層の存在が予想された。Ⅲ区の遺構の調査終了を待って，グリット掘りを行なったが，包含層は無かった。

第126図はⅢ区の層序で，1.9ｍまで掘り下げ8枚の土層が確認された。1層は耕作土で層厚16cm前後。2層は暗褐色粘質土で34～38cmで，Ⅲ区の遺構は2の層を掘り込んでいる。土層の状態では，門田遺跡門田地区の細石刃の包含層が確認された3層の暗茶褐色土に類似する。3層は褐色土で60～70cmと厚く，4層と凹凸をもって接する。4層はマンガンと酸化鉄を多量に含み，固く締まった土層で3～10cmと層厚に差が著しい。4'層は4層が変化した黒褐色土。5層は淡赤褐色土で鉄分を含み10～20cm前後。6層は淡褐色土，7層は褐白色土で両層は不整合面状をなす。8層は白色粘土層で，いわゆる八女粘土層と呼ばれている。4層～6層までは鳥栖ロームに相当しよう。　　（木下　修）



第126図　Ⅲ区南壁土層図（1/60）

2. 竪穴住居跡（図版138･139，第127図）



第 127 図　Ⅲ区竪穴住居跡実測図（1/40）

この住居跡は，中央平坦部がわずかに東側に傾斜しはじめる付近から検出された。中世の溝状遺構により一部破壊されてはいるが，ほぼ全体を知りうる。東西４ｍ・南北約 3.6ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。壁高は残りの良い北西側で20.3cm，南壁では約３cmとわずかに残すのみで，上面がかなり削平されていることが判る。柱穴と思われるピットは北東・南東・南西隅で検出されたＰ１～Ｐ３の３個で，北西隅は中世の溝状遺構により破壊されているため発見できなかった。しかし，これら３個のピットとも 9.5～７cmと浅く若干の疑問も残る。炉跡は中央よりやや北側に寄った所にある。床面はさほどたたきしめられていない。この住居跡は，火災を受けたらしく床面全体に炭化材・炭化物・焼土等が散乱していた。また，床面からは，弥生時代終末の壺・甕・脚付甕・鉢・高杯・器台・支脚等多数が完形ないしはつぶれた状態で一括して出土した。

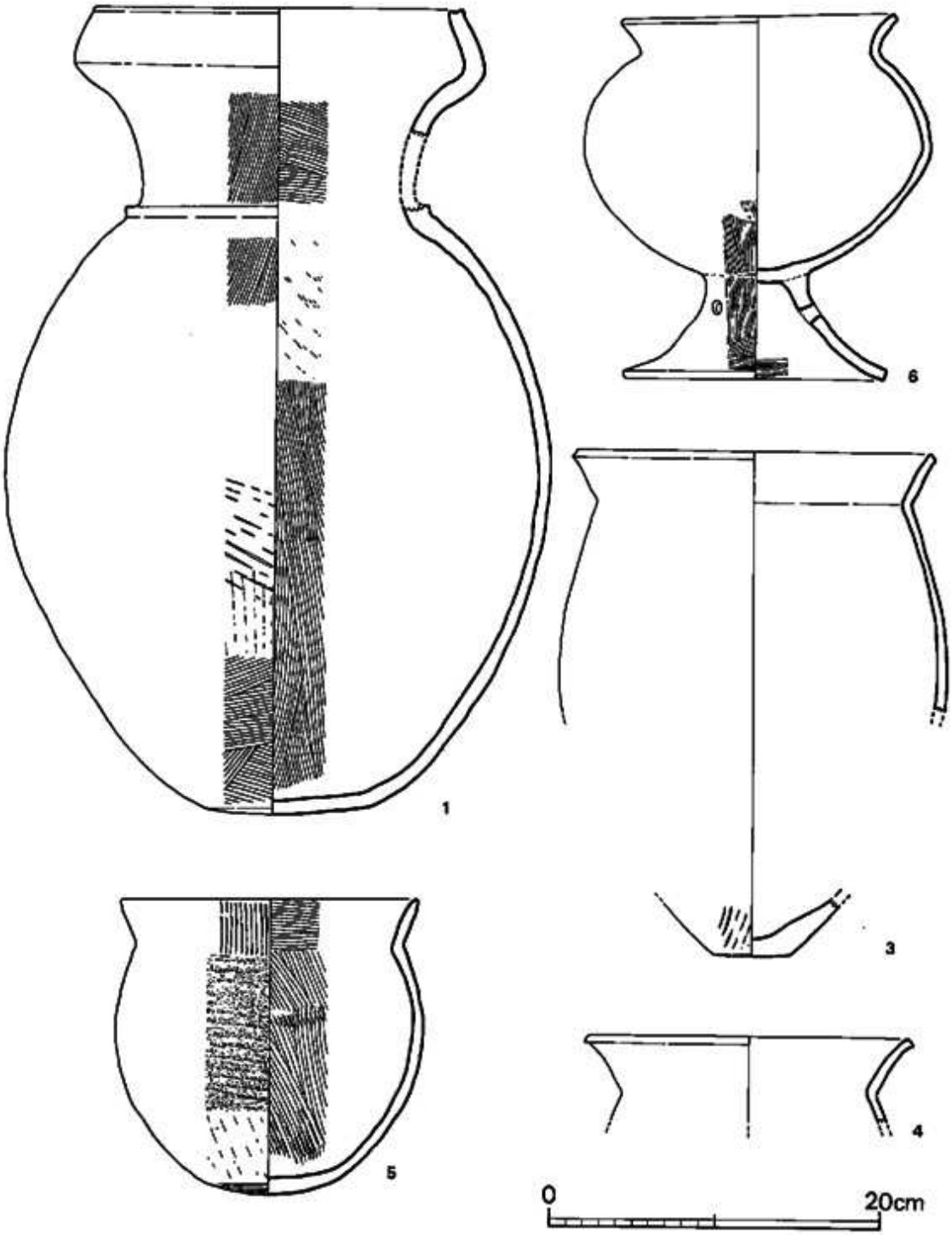
出土遺物（図版140，第128・129図）

壺形土器（１・２）　１はいわゆる複合口縁の大形壺で，ほぼ完形の資料である。卵形の胴部に立ち気味に外反する短かい頸部がつく。口縁部は「袋状」気味の内傾する口縁で，口頸部の屈折点はあまり明瞭でない。頸部下には１条の三角凸帯がめぐる。底部は「レンズ」状の平底である。口径22.3cm，器高47.5cm，底径 6.3cm，胴部最大径32.5cmを測る。口頸部に比べ長胴の壺である。調整は外面上半刷毛，下半は粗いタタキのあとヘラ削りし，さらに底部付近は刷毛調整している。胴中位は刷毛のあとナデて仕上げている。内面は刷毛調整し，肩部付近はさらにナデている。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。口唇部にはヨコナデによる凹みがみられる。色調は茶褐色を呈す。

２は球形の胴部に大きく外反する「く」字状口縁がつく単口縁の壺である。口径15.2cm，器高32.7cm，胴部最大径29.2cmを測る。底部は丸底である。調整は内外とも器面の風化が著しく不明。色調は暗茶褐色を呈し，胎土には小砂粒を多く含む土器である。胴部外面には大きな黒斑がみられる。

甕形土器（３～６）　３・４ともいわゆる「く」字状口縁の長胴の甕である。３は復原口径21.6cm，胴部最大径23.1cm，底径4.4cmを測る。底部は「レンズ」状の平底である。調整は器面の風化が著しく不明であるが，底部付近外面は粗いタタキのあとヘラ削り，内面はナデて仕上げていることが判る。色調は黄褐色である。４は復原口径19.7cmと少し小形の甕で，口縁端部をヨコナデにより外下方につまみ出している。この土器も器面の風化が著しく調整が明瞭でない。色調は黄褐色。

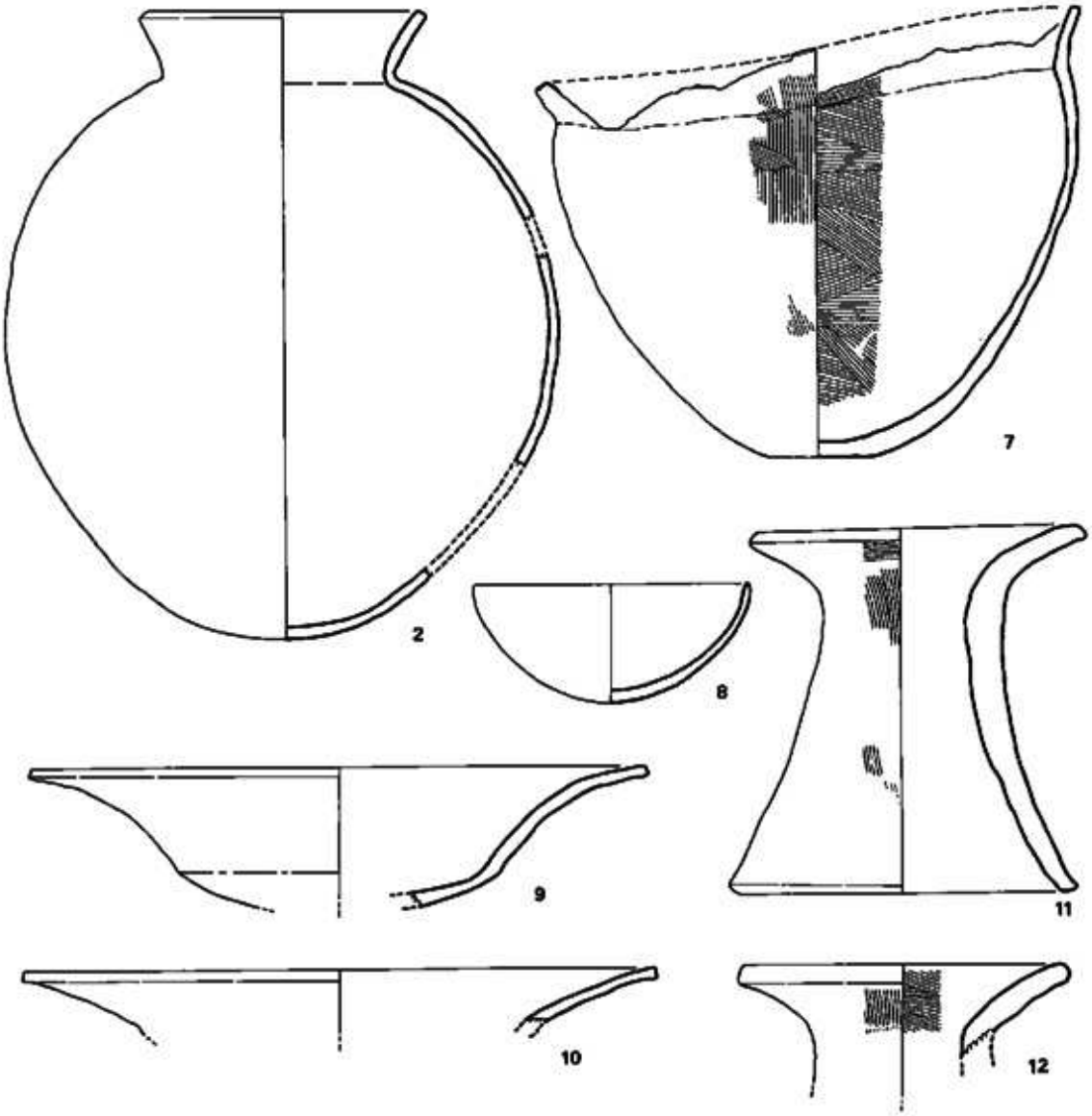
５は復原口径17.8cm，器高17.5cmとほぼ等しい小形の広口甕である。球形の胴部にゆるやかに外反する「く」字状口縁がつくもので，底部は丸底である。調整は胴部外面粗いタタキのあと下半はヘラ削りし，底部はさらに刷毛調整している。口縁部内外と胴部内面は粗い刷毛で仕上げている。色調は暗黄褐色を呈す。



第 128 図　Ⅲ区竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)

6は広口の小形甕に低い脚台がついた脚付甕である。口径16.6cm，器高21.4cm，脚部径15.8cm，胴部最大径20.7cmを測る。脚部には3個の円孔が穿たれている。胴部外面細かい刷毛調整のあと上半は入念にヘラ磨きして仕上げている。内面はナデ調整，口縁部内外はヨコナデしている。脚部外面細かい刷毛，内面刷毛のあとナデている。色調は茶褐色を呈し，焼成良好な作りのよい土器である。

鉢形土器（7）　極めていびつな土器である。口径約29.2cm，中央部での器高21.3cm，底径5



第129図　Ⅲ区竪穴住居跡出土土器実測図2（1/4）

cmを測り，底部は平底である。内外とも粗い刷毛調整，内底部はさらにナデて仕上でている。色調は黄褐色で，上半には黒斑がみられる。全体に風化の進んだ土器である。

椀形土器（8）　復原口径14.7cm，器高 6.2cmを測る。内外ともナデ仕上げの茶褐色を呈す土器で，二次焼成を受けたためか内面と体部上半は褐色に変色している。

高杯形土器（9・10）　杯部の資料である。9は杯底部の屈折が不明瞭で，杯部が長く大きく外上方にひらく高杯である。口径32.9cmを測る。10もほぼ同様のタイプと思われるものであるが，9に比べ杯部が浅いもののようである。復原口径33.8cmを測る。調整は両者とも風化が著しく不明。色調は9が赤褐色，10は外面暗茶褐色，内面黄褐色を呈す。

器台形土器（11・12）　器受部のくびれが高いタイプである。11は器受部径17.6cm，器高19.5cm，脚部径18.2cm，12は器受部径17.3cmを測る。12は内外とも刷毛調整である。11は器面の風化が著しく明瞭ではないが外面粗い刷毛，内面ナデて仕上げている。色調は11・12とも黄褐色である。

（井上裕弘）

3. 建　物　跡（図版141－1，第130図，表13）

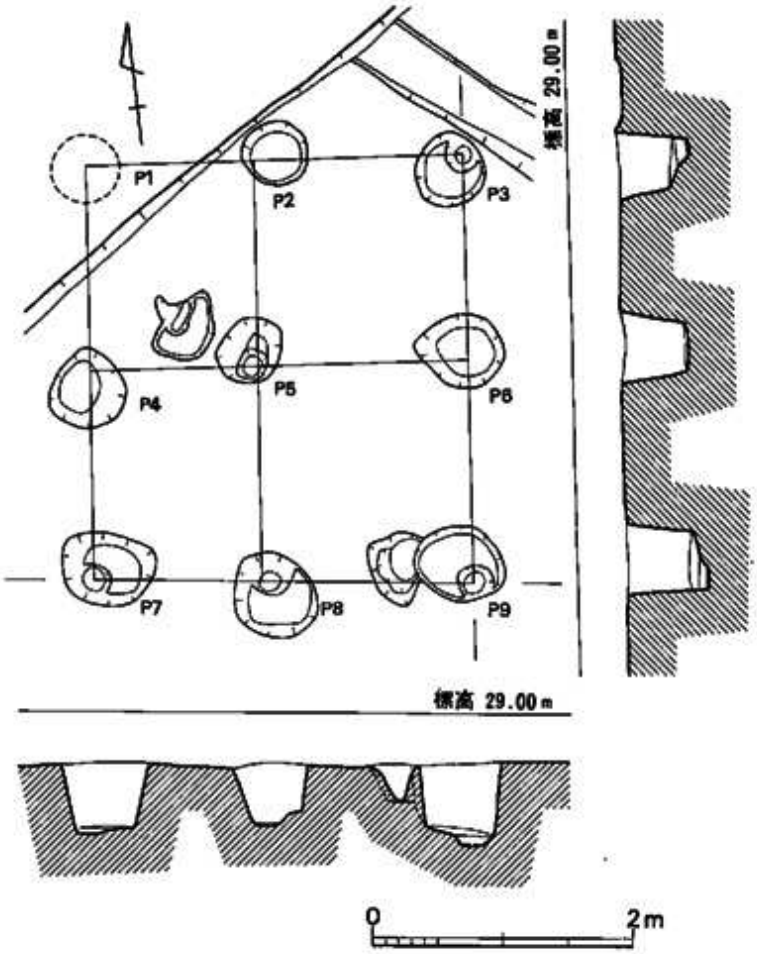
Ⅲ区調査区域の中央部北寄りに検出された掘立柱建物跡で，台地頂部に占地する。2×2間の総柱になるが柱穴1基は調査区域外に想定される。梁間間平均2.93m，桁行間平均3.21mで，桁行は真北に対して5°20′東偏する。上部が削平されてはいるが柱穴は径50～60cm，深さ50cm程度としっかりしており，中央からやや西寄りにあるP5のみ浅い。

表13　建物跡計測表　（単位　cm）

2間×2間		梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間
P1	P2	148.0	290.0	P1	P4	170.0	315.0
2	3	142.0		4	7	144.0	
4	5	134.0	298.0	2	5	158.0	32 .0
5	6	164.0		5	8	164.0	
7	8	135.0	292.0	3	6	151.0	327.0
8	9	157.0		6	9	176.0	
平　均		146.66	293.33	平　均		160.5	321.33

N5°20′E

P	深さ	長径	短径
1	—	—	—
2	51	51	48
3	55.5	56	53
4	48	58	56
5	29.5	53	45
6	53	69	55
7	54.5	71	54
8	47.5	70	61
9	63	71	58
平均	50.13	62.38	53.75



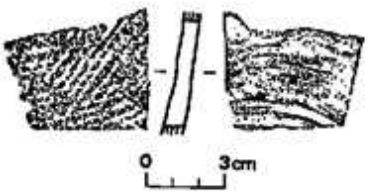
第 130 図　Ⅲ区建物跡実測図（1/60）

出土遺物（第131図）

柱穴内から出土した遺物としては，Ｐ２から須恵器１片，Ｐ５・Ｐ６からあわせて５片程度の弥生後期後半と思われる土器細片が出土した。須恵器は胎土焼成とも良好であるが器形は不明。

この建物跡の時期は須恵器の年代が不明のため断定できない，一応古墳時代以降としておこう。

（小池史哲）



第 131 図　Ⅲ区建物跡出土須恵器拓影（1/3）

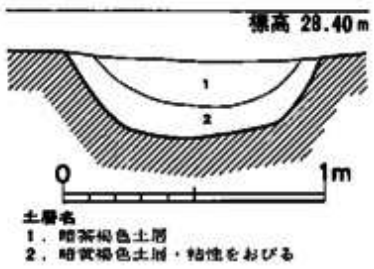
4. 溝状遺構

（第132図）

台地を横ぎる状態で弥生時代後期の住居跡を切って検出されたもので，北西から南東方向に走る溝である。溝幅は発掘区北西端で45cmと狭いが，南東にいくに従がって広くなり，発掘区

南東端では1.25ｍを測る。深さは北西端で，約３cmと浅いが，南東端では約30cmと深くなり，溝底のレベルは北西から南東方向に傾斜している。溝内の堆積土は，２層からなり上層に暗茶褐色土，下層に粘質気味の暗黄褐色土がレンズ状に堆積している。溝の断面はＵ字状を呈す。

出土遺物は，弥生式土器・土師器・須恵器・磁器（青磁）等の小破片が数点出土したのみである。時期は中世であろう。



第 132 図　Ⅲ区溝状遺構土層図（1/3）

5. 小　　結

この地区から検出された遺構は，弥生時代終末の竪穴住居跡１軒と，古墳時代以降のものと思われる総柱の掘立柱建物跡１棟，中世のものと思われる溝状遺構１条のみであった。

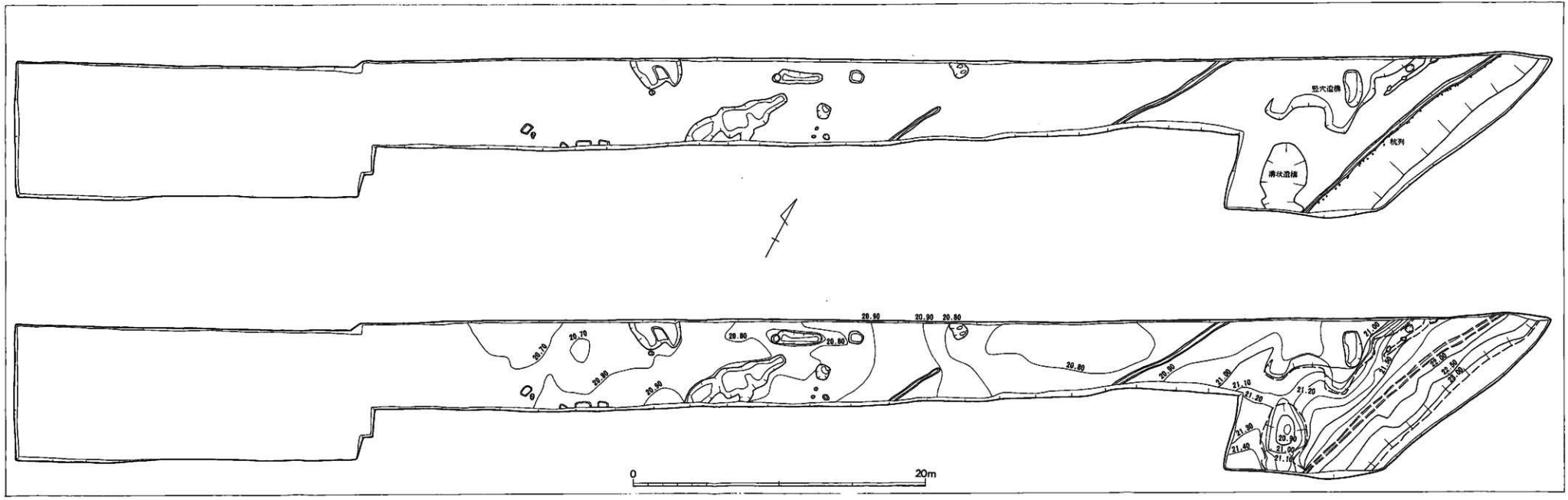
遺構の掘り込みは浅く，台地全体がかなり削平されていることが判る。従って，消失した遺構もあるかもしれない。

しかし，火災を受けた弥生後葉～終末の住居跡から完形ないしは完形に近い多数の土器が一括して出土したことは大きな成果であった。この土器群は，かつて不充分ながらも弥生終末期の土器群として理解した門田遺跡辻田地区の８号住居跡出土土器群（註１）と，基本的にほゞ対応する一群の土器である。いわゆる長胴の「く」字状口縁の甕，単口縁の壺，杯底部の屈折が不明瞭で大きく長く外するタイプの高杯，器受部の屈折が高く，脚部が大きく開く大形のタイプの器台は，８号住居跡出土土器と共通する土器である。また，壺・甕の胴部外面下半にみられる粗いタタキのあとのヘラ削り手法，内外の刷毛調整も共通する手法といえる。

これまで，辻田地区８号住居跡出土土器群には多くの欠落した器種があり，報告時にもその構成は不明瞭であった。しかし，今回のこの一括資料はその欠落した器種を補うものとして貴重である。とりわけ，壺形土器の実態が明らかになったことは大きな成果といえよう。

（井上裕弘）

註１　井上裕弘「Ⅶ－５」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』７　福岡県教育委員会　1978



第 133 図　Ⅳ区遺構配置・地形図（1/200）

Ⅵ　第Ⅳ区の遺構と遺物

門田遺跡辻田地区から連なる台地上に位置するⅢ区の，西側一帯に拡がる水田面で，Ⅲ区との比高は6ｍ前後を測る。また，縄文後期の住居跡を検出した柏田遺跡とも近接し，立地のあり方も類似しているところから，縄文時代の遺構ないし包含層の存在が予想された。調査の結果は意に反して，Ⅲ区に接する地点より，弥生時代中期の土器を出土する竪穴遺構，弥生中期～古墳時代初頭の土器及び，木材の集積した溝状遺構及び，近世頃の杭列が検出された。一方，調査区の中央部から東側にかけては，灰白色砂層を切った不整の落ち込みが数ヶ所及び，溝状遺構2条が検出されたが，遺物はまったく出土していない。また，一部，この灰白色砂層を掘り下げたが，遺物は何ら出土せず，当初の目的は果されなかった。調査区は湧水がひどく，連日水あげに追われ包含層もないところから，予定面積を縮少し短期間で調査を終了した。

1. 竪穴遺構

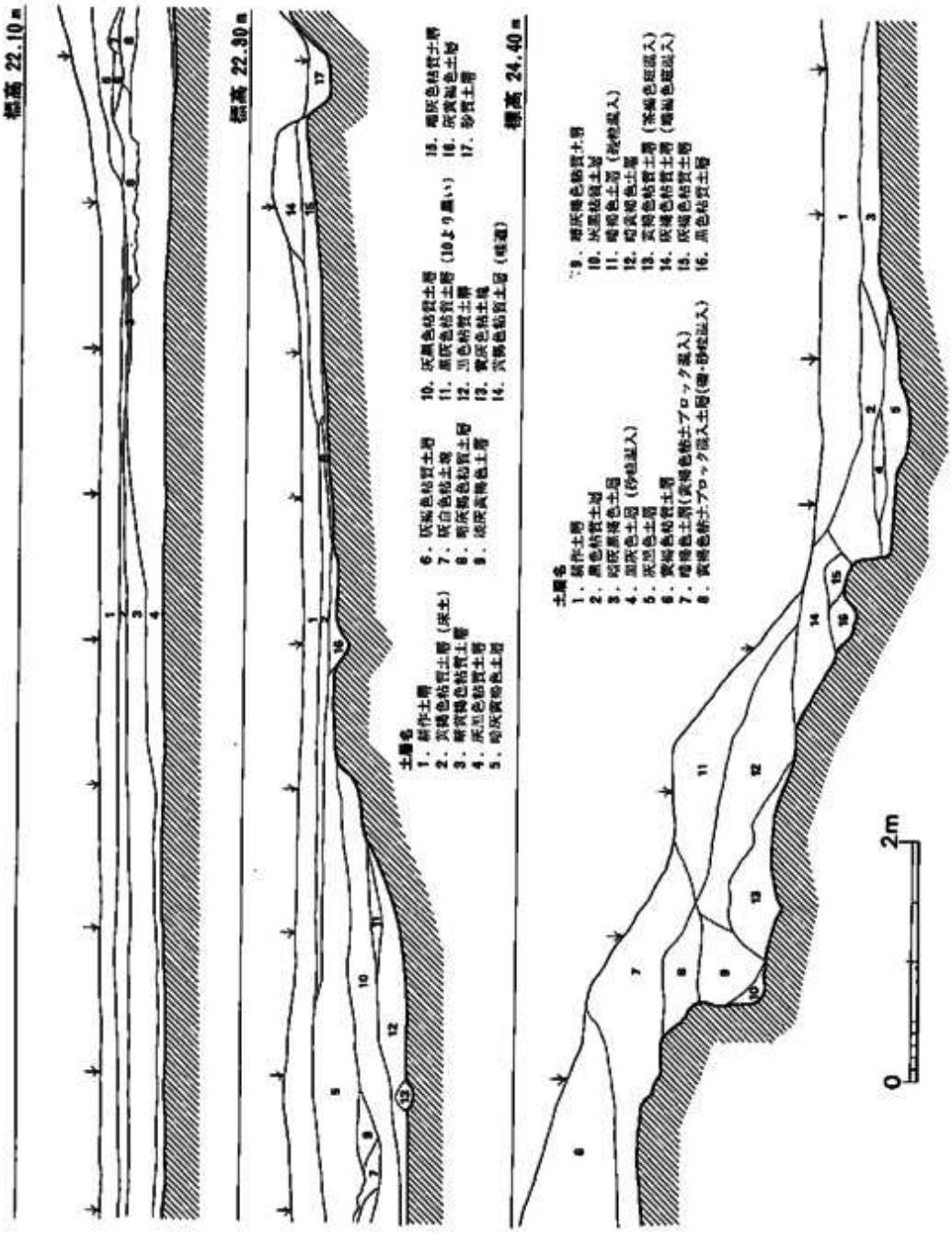
地山の青灰色粘土層を切った楕円形の竪穴（図版143）で，溝状遺構の北側で検出された。長径2.4ｍ，短径1.28ｍ，深さ42ｍを測り，底面はほぼ平坦である。竪穴内から弥生時代中期中葉の土器片が出土した。

土　器（第135図1～6）

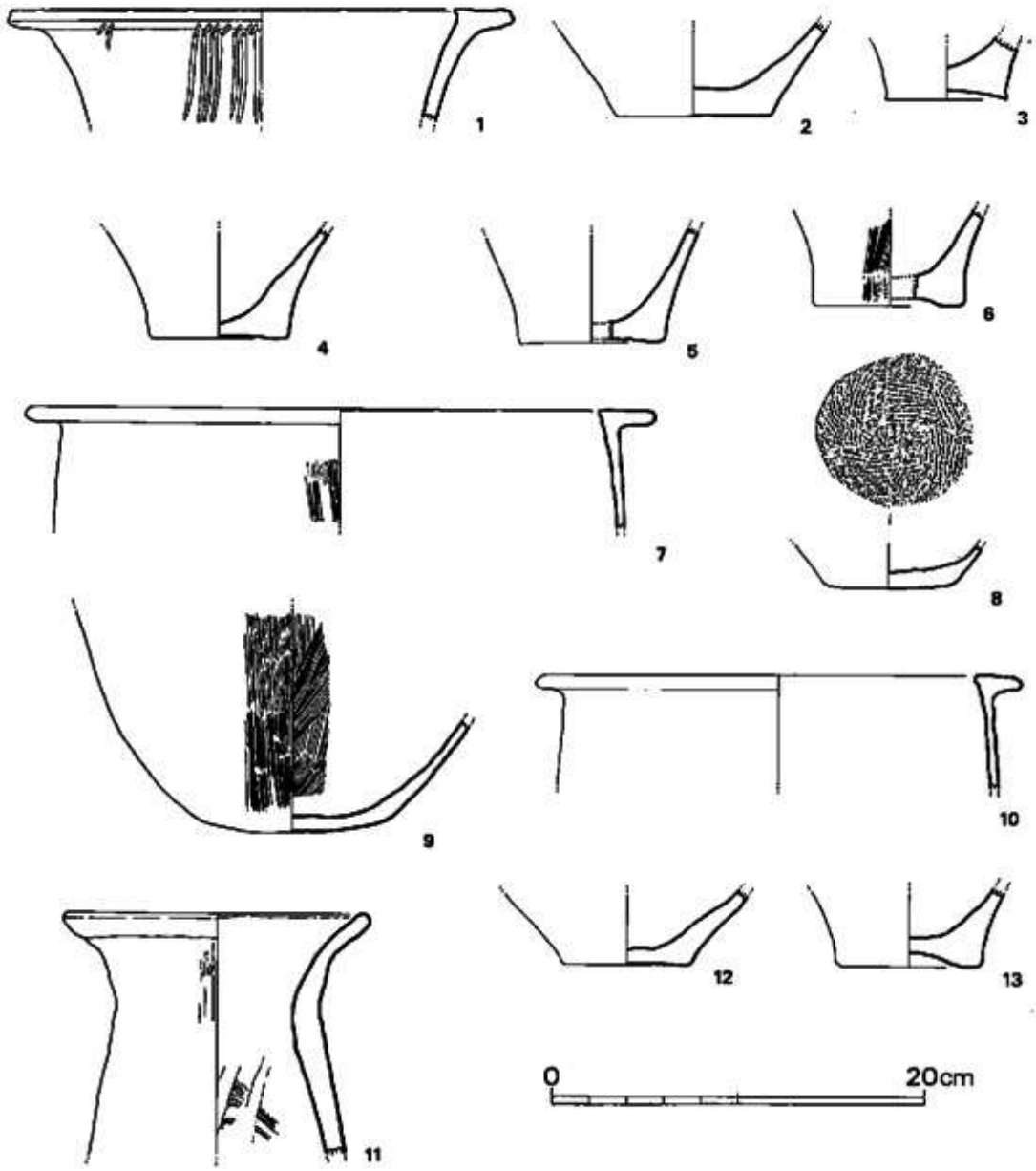
1は広口の壺形土器の口縁部で，口径26.6cm，現在高6cmを測る。鋤先状の口縁部は平坦面を有し，口唇部はやや凹む。口縁直下から，篦状工具による縦方向の沈線を施す。器面はナデ調整のみで，研磨されていない。淡灰褐色を呈す。2～6は底部破片で，2は壺形土器で，それ以外は甕形土器であろう。3～6はいずれも上げ底である。

2. 溝状遺構（図版144，第136図）

調査区の東端で，Ⅲ区の崖下に検出された，ほぼ南北方向の溝状遺構である。遺構は暗灰色土層を切り込んでおり，幅2.6～3ｍと広く，深さは最深部で43cmと浅い「U」字形を呈す。溝は，調査区の南側から延びており，調査区内で4.7ｍ続き終結する。溝内の堆積土は，下層



第 134 図　Ⅳ区北壁・南壁土層図（1/60）



第 135 図　Ⅳ区竪穴遺構及び包含層出土土器実測図（1/4）

が灰黒色土で20cm前後，上層は黒色粘質土で20～40cmの層厚がある。この層中には，10～20cm浮いて溝を横断する如く木材の集積がみられたが，加工された材は認められなかった。また，下層には弥生時代中期の土器が若干出土し，上層の木材集積の同レベルに古墳時代前期の良好な壺，甕形土器3個体分がつぶれた状態で出土した(図版145)。遺構の時期は下層の土器から弥生時代中期中葉頃に形成され，古墳時代前期に廃絶されたと思われる。

第 136 図　Ⅳ区溝状遺構実測図（1/60）

土　器

弥生土器　（第135図7～9）

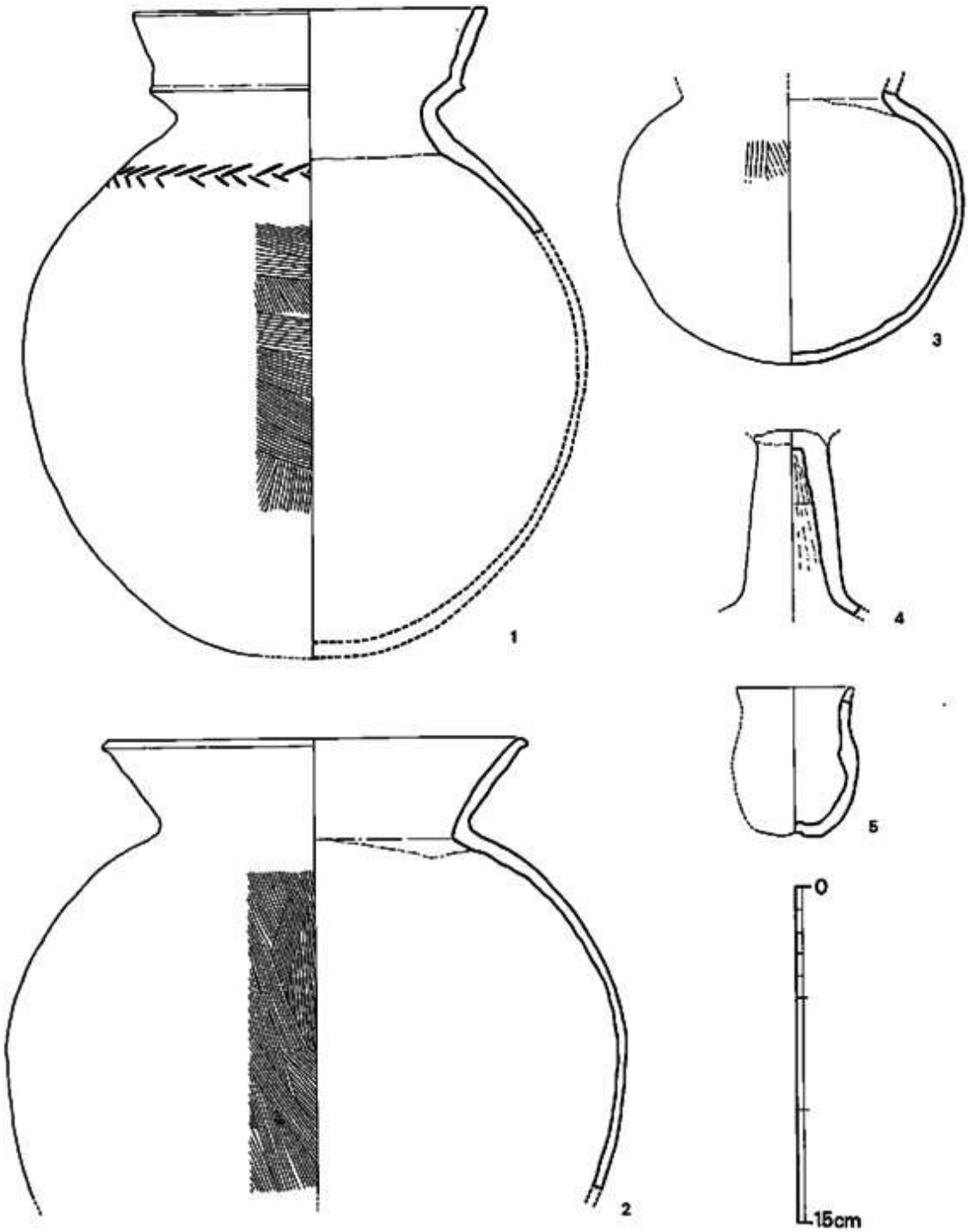
7～9は下層出土で，7は平坦な逆「L」字形を呈す甕形土器。口径34cm前後を測る。外面は刷毛目調整で，上部はその後ナデ消している。口縁部及び内面は斜めのナデを施す。胎土・焼成とも極めて良好。8は底径7cmを測る弥生後期の壺形土器の底部片であろう。内底面に時計と逆回りの5回に分けての刷毛調整が施こされる。9は底部から胴下半部片である。

（木下　修）

土師器　（図版146第137図）

1は壺形土器で，口径15.9cm，復原推定器高28.5cmを測る二重口縁の壺である。胴部は球形で，頸部といえるものはほとんどない。口縁部は明瞭な屈折部をもつ二重口縁で，立ち上りは直線的に外反する口縁である。口縁中位内外にはヨコナデによる凹面を形成し，端部内面はつまみ出し気味に仕上げている。肩部には櫛状工具による「八」字状の刺突文を施している。胴部外面横位→斜位→横位→斜位の刷毛調整，内面ヘラ削り，口頸部内外と外面肩部にかけてはヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。

2・3は甕形土器で，2は胴下半，3は口縁部を欠く破片資料である。2は復原口径25.3cmを



第 137 図　Ⅳ区溝状遺構出土土器実測図（1/3）

測る甕で，張りの強い球形の胴部に大きく外反する「く」字状の単口縁がつくもので，端部はヨコナデによりつまみ出し気味に仕上げている。調整は胴部外面斜位・縦位の刷毛，内面は頸部よりやや下った所からヘラ削り，口頸部内外はヨコナデ仕上げである。外面全体に著しい煤の付着がみられる。色調は黄褐色を呈し，焼成良好な土器である。3は小型の甕で，胴部最大径15.2cmを測る。胴部は球形で，底部は尖り気味の丸底である。調整は胴部外面粗い刷毛のあと下半はナデ，内面ヘラ削り，頸部内面と肩部はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し，胎土には多くの砂粒を含む。胴部外面には煤の付着がみられる。

4は高杯柱状部の資料である。柱状部がスマートなもので，おそらくラッパ状にひらく裾部がつくタイプである。外面は丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ，内面はナデている。色調は淡黄褐色を呈し，胎土・焼成とも良好な土器である。

これらの土器師は一括して出土したもので，ほぼ同時期の資料といえる。いわゆる球形の胴部に「く」字状に外反する単口縁がつく甕は，下原遺跡出土土器群（竪穴住居跡）（註1）と共通するタイプである。また，高杯も柏田遺跡（註2）でいう高杯Bタイプの典型であり，下原遺跡の高杯と一致する。しかし，これまで，これらの土器群に伴う壺の実態は下原遺跡でも不明瞭であった。だが，今回出土した二重口縁の壺は明らかにこの時期をうめる重要な資料である。下原遺跡出土土器群と併行期の一括土器群といえよう。（井上裕弘）

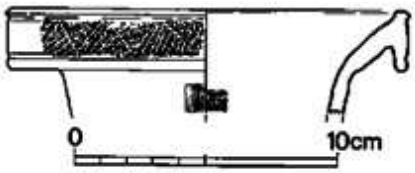
3. 杭　列（図版143，第133図）

Ⅲ区とⅣ区の接点である崖下に，幅45～60cm，深さ20～30cm前後の配水路が走る。地者の人の話によれば最近まで，水田の配水路として利用されている。この，水路のⅢ区側肩部に杭列が延びる。杭の状態も新しく，近世の所産であろう。

4. 包含層出土の遺物

弥生土器　（第135図10～13）

10は逆「L」字形を呈す甕形土器で，口径26.1cmを測る。平坦で若干肥厚した口縁部を有す。器面は風化し調整不明。11は器台形土器で，口径16.3cm，残存高12.8cmを測る。外面は刷毛調整，内面下半にも短かい単位の刷毛がみられる。胎土に石英・長石を含む。



第138図　Ⅳ区包含層出土土器実測図
(1/3)

12は壺，13は甕形土器の底部片。第138図は復原口径15.4cmを測る壺形土器の口縁部片である。径10.4cmを測る頸部から徐々に広がり，内面は口縁直下で直に近く反転する。口縁帯は幅2.3cmで，下方に近く下がる。文様はこの口縁帯に上・下2条の凹線間に篦による細い鋸歯文を施す。頸部外面は縦方向の刷毛目で，内面は同位置に横方向の刷毛目のあとナデを施す。その上部は横ナデである。黄褐色を呈し，胎土に石英・長石を含む。瀬戸内地方の後期土器であろう。

土師器（第137図5）

小型の椀形をなす手捏土器である。内面には顕著な指頭圧痕がみられ，粗いナデで仕上げた土器である。色調は淡黄褐色を呈す。

石　器（第139図）

平基無茎式石鏃で完形品。5.7mmと比較的厚手の安山岩製で，全長18.4mm，基部幅17.0mmを測る。両側辺は若干外弯している。

第139図　Ⅳ区包含層出土石鏃実測図(2/3)

5. 小　結

調査の結果，Ⅲ区との境付近に弥生時代中期中葉の竪穴遺構と溝状遺構および，近世の杭列が検出された以外は，時期不詳の溝2条と不整形ピットが数ヶ所検出された。当初の主目的であった縄文時代の遺構は無く，包含層のみならず，遺物の存在すら皆無の状態であった。

現在，柏田遺跡の西方を北流する小河川が，かって，その東側を流れていたとの指摘がされ（註3），この事は微地形図でも，Ⅳ区が門田遺跡谷地区の末端部からを含めた浅い支谷となっていたことで裏付けられている（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』4　付図1）。この遺跡立地のあり方が，Ⅳ区に縄文時代の生活の痕跡を残さなかった要因であろう。

一方，Ⅲ区との境に検出された溝状遺構は，門田遺跡辻田地区方向から流下し，調査区内で終結する。溝内は上・下2枚の土層の堆積が認められ，下層は弥生時代中期中葉～後期，上層は木材の集積と，その間に古墳時代前期の遺物が出土した。出土状態から遺物は同時に破棄されたと考えられる。時期的には門田遺跡の南側に立地した下原遺跡住居跡と同時期であり，特に二重口縁壺の検出は，そのセットの欠を補うものとして貴重な成果であった。（木下　修）

註1　井上裕弘「下原遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3　福岡県教育委員会 1977

2　井上裕弘他「古墳時代の遺構と遺物－柏田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』4－下巻　福岡県教育委員会　1977

3　小池史哲「柏田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』4－上巻　福岡県教育委員会　1977

Ⅶ おわりに

辻田遺跡の調査は，幅10mで4つの地区にわたるため，各種の遺構・遺物の広がり等を充分に確認できたとは言えない。しかし各地区では先土器時代～中世の生活の痕跡をみとめることができる。各地区での小結において前述しているがここではこれらを通して概観してみよう。

縄文時代以前の様相，先土器時代に属する遺物の出土はⅠ－2区東部耕作土出土のナイフ形石器・Ⅱ－2区耕作土出土のナイフ形石器の2点があり，Ⅲ区の層序に先土器時代包含層と類似する堆積土をみとめることができるが，プライマリーな遺物の出土をみなかった。縄文時代では，Ⅱ区大溝下層に晩期の土器片と石器類が出土しているが，早～後期の土器等の出土はみられなかった。縄文中・後・晩の遺構・遺物の出土した柏田遺跡に近く同じ低位段丘上に立地するⅣ区でも柏田遺跡との間に浅い支谷（旧河川）で断絶されるためか生活の痕跡をみとめられない。一方Ⅱ区出土の縄文土器は従来北部九州地域に類例をみない資料であるが，精製土器の文様構成は，三又状文を基本とした連続文様である。三又状文は亀ヶ岡系土器に多用される文様であり，三又状連結文は，北陸地方晩期初頭の八日市新保式（註1），あるいはこれに続く御経塚式土器（註2）に特徴的である。また条痕文土器の口縁部の形状も，北部九州域ではみかけないもので，肥厚する口唇部で刻み目に近い刺突を有すること以外に突帯文として明瞭ではない。器形の面では岡山県原遺跡下層の土器（註3）に似ている。しかし両者共，北部九州あるいはその周辺において稀少な例であり早急に彼我の関係について述べることは難しいと言えよう。一応晩期前半～中葉頃に生活の痕跡をみとめるとしておきたい。

弥生時代では，前期の土器は大溝下層に散見することができ，中期ではⅡ区東端部の土壙3基・大溝下層に土器片，Ⅳ区東端の竪穴遺構・溝状遺構が確認できる。後期ではいずれも終末期に近い段階ではあるが，Ⅰ－1区の住居跡2軒・溝状遺構等・Ⅱ区の大溝・竪穴状遺構・土壙，Ⅲ区の住居跡等があり，辻田遺跡出土遺物の大半はこの時期に含まれる。しかしこの中でもⅠ－1区と・Ⅱ・Ⅲ区の土器群には若干の差異がみとめられⅠ区出土土器群はⅡ・Ⅲ区出土土器群よりも後出するとみられる。弥生終末期～古墳時代初頭期の土器群については，既に，門田遺跡・柏田遺跡出土の土器群から研究が進められており（註4），Ⅱ・Ⅲ区出土土器は門田遺跡地区8号住居跡出土土器群に相当する。

古墳時代初頭の土器群としての下原遺跡出土土器群にはⅣ区出土の土器があり，柏田Ⅰ期以降低位段丘上の立地が顕著になる。辻田遺跡の周辺ではこの段階に低地への移行がみられ低地が利用し易い状況に変化していたことが推定できる。辻田遺跡の大溝が埋没してしまう過程とも関わりのあるものと考えられ，自然条件の変貌も考慮しなければなるまい。門田遺跡谷地区

の調査では大水による腐植物堆積を考えられている（註5）が，注意を払う必要はあろう。但しII区大溝の腐植物堆積は第6層下部に顕著で土器群はこの上の第6層上部に木材を被うようにして堆積していたことは単に大水だけでは理解しえない現象と言えよう。可耕地の拡充を目的とした森林破壊等の人為的な面も介在していたと考えておきたい。木製農具・鋼鋤先・鉄斧・切断面のある巨木・剝片等の木屑の存在は環境への対応を考えさせる材料である。

なお，II区大溝には多くの木製鍬類が出土しているが，矢板，杭等による水田遺構は検出されず，鍬類同様散乱した出土状況であった。一方木製農具の出土した門田遺跡谷地区では，谷頭部のC9区に鍬類が集中（辻田遺跡に比して量的には少ない）し，平坦な区域では疎となり，水田遺構は検出されていない（註5）。従って，辻田遺跡III区及び門田遺跡辻田地区に占地する住居跡に対比させられる水田はII区大溝の上流延長線上に想定されるべきで且つ門田遺跡谷地区に遠くない位置，大溝南方200～300 mを考えておきたい。

古墳時代以降は，I－2区土壙・溝状遺構，II区土壙・掘立柱建物跡，III区掘立柱建物跡・溝等の遺構がみられ，II区の大溝も凹地として残る程度になる。注目すべき遺物として文様塼・木簡・墨書土器・白水廃寺系の瓦等があり，7世紀後半の白水廃寺の存在・9世紀前半頃の文様塼・木簡等の大宰府と関連の深い資料の存在は，須恵器生産地であった牛頸周辺を含めて，那珂川水系と大宰府を結ぶ要所にあったことを想定させるものである。なお，白水廃寺系の瓦は，門田遺跡・下原遺跡・柏田遺跡にも出土例があり，いずれも寺院跡を想定させうる建物等は検出されていない。現上白水集落内に占地していた可能性が高い。

今回の調査は，II区の大溝にその大半を費しており，II区の小結において成果と問題点を列挙している。時間的にもこの問題点を充分に検討する余裕はないが，以下2・3の項目に若干の補いを加えてまとめに替えたい。

(1) 鍬類について

鍬類としては，平鍬，二叉鍬・三叉鍬の3種があり，平鍬の中には柄孔付近に突起を有さないタイプと，狭鍬と思われるもの・柄孔付近に突起を有すもの各1点がある。平鍬17点・二叉鍬19点・三叉鍬109点と圧倒的に三叉鍬が占めるが材質は柄孔付近に突起を有す資料1点以外全てカシ材である。

各鍬類の法量差をみてゆくと，平鍬の身全長，(A)34.9～43.3cm・刃幅(B)15.1～20.1cm・刃部長(C)24.1～31.7cm・柄孔の長さ(Da)5.1～6.4cm・柄孔の幅(Db)3.3～3.5cm・柄孔の刃部側の角度(E)60～73°・柄孔の頭部側の角度(F)92～116°で，最大厚(G)1.5～2.0cmにまとまる。二叉鍬では，A33.0～49.8cm・B12.9～15.8cm・C21.7～35.4cm・Da5.3～7.2 cm・Db3.0～4.5cm，E31～57°，F123～127°，G1.0～2.2・歯の長さ(H)12.2～26.1cm・歯の幅

(Ⅰ)2.8～7.4cm。三叉鍬ではA32.5～69.8cm，B12.2～18.2cm・C17.9～57.8cm・Da5.0～7.4cm・Db3.1～3.7cm・E29～63°・F102～150°・G0.7～2.3・H12.4～49.2cm・Ⅰ1.4～3.3cmに分布する。

この数値では平鍬A・二叉鍬・三叉鍬に大きな差をみとめるものとしては，柄孔の角度と平鍬・二叉鍬・三叉鍬との差が求められる程度である。全体のプロポーションでは一部の三叉鍬で歯の長いタイプのものを除けばおおむね三者は似ており，ただ叉の造りの差と柄の角度が違う程度と云ってよいだろう。この他には，それぞれに頭部から刃部に移る外側縁の形状が異なる点をあげることが出来よう。

一方鍬としての機能は身のみの形状だけでは解決するものではなく，着柄の状態と柄の長さが重要なポイントがあり，当該遺跡のように柄の着装された資料がない状況では鍬の機能を充分に語り得ない。

まず柄孔の角度では，刃部の観察によると，表・裏の区別が不明で殊に平鍬は刃部がまったく同様な形状である（身の反りも考慮すべきかも知れないが土圧による変形も考えられ援用しなかった）ことから前面・後面の区別は難しく，ここでは刃先と柄が鋭角になる面を前面と考えている。この結果平鍬は60°以上・二叉鍬・三叉鍬は60°以下と区別することが可能である。しかし今回充分な計測をすることが出来なかった事の一つに鍬の前面・後面を反転した場合にも同様な数値を得る可能性のある資料が往々にしてあることをあげておかなければならない。特に平鍬のそれは顕著で片面が減った場合の反対側の面の使用も考えなければならないだろう。

次に問題にしなければならないものとして，全長に対する刃の長さの差があげられる。三叉鍬では全長の極端に長い例があり，刃の長さも長い。しかし，柄孔の下端を基点としてそれぞれの法量をみてみると，二叉鍬・三叉鍬の基部の長さに大きな変化がなく，あっても4cm以内に限られる。また頭部の長さは二叉鍬でわずかに長くなるものをみとめる程度にとどまる。このことから刃の長さの差異は磨耗によって起こる現象である可能性が高い。

全体のプロポーションとして，辻田遺跡の鍬類はまとまりをもつが，外側縁の形状で肩の位置が異なるものがある。しかし，この問題について充分な検討をなしえなかった。ここでは差異を列挙することに留めておきたい。

1．頭頂部が平らなものと丸味をもつもの，

2．頭頂部から基部にかけて並行線を描いて移行するものと，扇形になるもの。

3．頭部と刃部の境の位置で肩を有するものと基部に肩を有するもの，あるいは基部と歯の境の位置で肩を有するもの。

4．肩を識別し難いもの。

5．外側縁に抉り込み等の施設を有するもの。

なお辻田遺跡出土鍬類と同様の形を呈す鍬類は，佐賀・福岡・大分といったいわゆる北部九

州地域に弥生時代中期以降分布するようである。

(2) 筌について

筌はII区大溝の中でも一段高くなると思われる部分の底面で斜面と接する位置から口を上流側に向けた状況で出土した。上部の堆積上の状況では掘削したような痕跡をみとめず，まったく土圧でつぶされたような状況であり，上部に弥生時代後期の遺物を多く埋積していることからこの時代を下ることのない資料と言えよう。筌の出土地点は竪穴状遺構の延長で西側から張り出してきた部分と東南部のわずかに高くなる部分の幅の狭くなる部分にあたり，上流側では建築材等が低い部分を横断するかのように堆積する処があり，下流側には大溝の最も低い部分へ移行する。しかし筌自体を固定したような痕跡は検出できなかった。筌自体の構造については本文IV－2－(5)－(2)に前述しているが，口の部分を欠損しカエリも不明，素材は広葉樹材とされる。またこの筌は現在でも使用できそうな形状を有しており，既に弥生時代後期の段階に捕魚技術の一つとして確立していたと思われる。

筌の遺跡からの出土としては，静岡県浜松市伊場遺跡の2例（註6）がある。伊場遺跡の例は篠竹製による筌で，1点は直径55cm・長さ1m程度，あと1点はこれよりも小形とされ，いずれも7世紀後半代の資料と報告されている。

辻田遺跡の筌と伊場遺跡の筌とは法量の面でも形態的な面でもかなり相違がみられるが，現在民具資料として残されている筌にもかなりの形態差や法量差はある。これは対象とする魚の種類によって異なるものであろう。この形態に似た現存する民具資料にあたってはいないが，おそらく雑魚用の筌と考えてさしつかえないだろう。

(3) 金属製品について

辻田遺跡の調査ではI区の1号住居跡から鉄製鉈1点，II区の大溝上面で銅矛片1・銅鋤先1・袋状鉄斧1点が出土した。I区1号住居跡は弥生時代終末期の住居跡で鉈もこの時代のものとして問題のない形状のものである。銅矛片は広形銅矛の刃部を折り取ったもので，意図が注目されよう。銅鋤先は磨耗が顕著な完形品で，柳田康雄氏の分類によるII類（註7）に相当する。木製品との対応では，鍬・鋤類の中に相当する資料がなく，この銅製品が鋤先か鍬先かの区別は決し難い。なお木製品中の鋤(133)では刃部に沿った約1.5cmの位置に傷を有し，また身の上半部（先端から13.8cmの位置）に横断する傷もみられることは留意しておく必要があろう。鉄製鋤先の装着とも考えられるためである。鉄斧も完形品で全長8.8cmを測る手斧の部類に入る袋状鉄斧で類例として長崎県壱岐郡原ノ辻遺跡の例（註8）がある。しかし本文IV－2－(5)－(2)で示したように斧柄(18)と着装可能であるが，刃の方向が柄の方向と並行し手斧の役割を果さない。

(4) 琴の出土をめぐる問題

辻田遺跡第Ⅱ区の大溝から出土した琴（琴の上板と考えられる）は，多量多岐にわたる木製品の中でも圧巻と言うべきものである。琴1号の全体のプロポーションの類例については知らないが，沖ノ島遺跡の金銅製5弦琴（註9）の形状に相通じさせるものがある。沖の島例が7～8世紀の祭祀遺構から出土で5弦であるのに対して，琴1号は弥生時代後期に属し6弦であるという違いはあるにしても，弦尾・龍角の配置は全く同様である。

琴1号の形状・法量については本文Ⅳ－2－(5)－(8)に前述しているので煩雑になるような再述はしないが，裏面と考える面には2条の長い溝とそれに伴う6ヶ所10孔がみとめられる。この溝の形状は，別材（板材）の側面を嵌込み接合したことを想定させ，2条の長い溝のそれぞれ端部において対応する2孔が，嵌込んだ別材の両面側から楔（やや扁平な断面を有す角棒状の楔か？）を打ち込んで固定したことを想定させる。更に溝の中程外側縁にみられる小孔は，琴上板の表面から楔（断面円形になる釘状の楔か？）を打ち込んで別材との固定を一層強化させる役割を果したと考えられる。また2条の溝をつなぐように削り込まれた段は，溝に嵌込んだ別材によって出来上る両側板と，第三の材（板材）の接する部分と考えることも可能である。もしこの考えに誤りがなければ「凵」形の箱が琴板の裏面にくっついた形状になろう。このような状況は沖ノ島遺跡出土の琴にみられる鋲で留めた形状にも通ずる。ただし辻田遺跡では側板あるいはそれに接するとみられる第三の材は検出できずどれだけの幅を有していたか不明である。箱を形成し共鳴箱となっていたと推定する域を脱しえない。なお琴板の中央には円孔が穿たれているので共鳴の為の孔と考えることは可能である（註10）。 6本の突起と「ㅗ」形の孔（表側にわずかな段があり別材を介したと考えられる）に弦を張った6弦琴，それもモミ属の材を用いる（註11），優れた琴がここに浮かびあがってくる。

弥生時代・古墳時代の琴については，兼康保明氏の分類（註12）がある。これによると，三重県納所遺跡の形態は大きく違うが他は突起を有するものとし，更に静岡県登呂遺跡例を代表とする登呂型・千葉県菅生遺跡例を代表とする菅生型・滋賀県服部遺跡例を代表とする服部型に区別され都合4類に整理されている。辻田遺跡琴1号は，共鳴箱を有した琴であるという点から服部型の範疇に含めうるものであろう。しかし服部遺跡の琴は古墳時代中期の資料で箱の接合方法はくり抜き板を樹皮によってとじ合わせたものである。この点では服部遺跡の琴が沖ノ島の琴に近いと言えよう。辻田遺跡では板を刳り抜く技術は，盤・鐙等がクスノキ等のような加工の容易な材を，器壁をやや厚く造形する例にみられるが，むしろ枘・枘孔を有する板材にみられるように針葉樹材を薄く削り組み合わせるという技術の方が優先する。時期的にも古い点からも服部遺跡琴の先駆的なものと考えられる。なお辻田遺跡琴2号は既に破片化しているが形状から登呂遺跡例・滋賀県森浜遺跡の第2号・第3号琴に近く，登呂形に含めうる（註13）。

辻田遺跡琴1号が服部遺跡例に先行するとすれば，どのような系譜をたどったのかという問題が生じる。この問題に対して納所の例や登呂例だけでは解決がつかない，また辻田遺跡の琴だけでも解決のつく問題ではない。

しかし，ここで一つの問題提示をしておきたい点がある。それは前述した「口」形の箱の出現である。辻田遺跡に枘と枘孔を有した板材の多いこと，また辻田遺跡と時期的に近い大分県安国寺遺跡に枘・枘孔を有した板材の多いことから既にこの時期には枘孔を接合して箱を箱を造る技術があったと言えよう。安国寺遺跡の報告（註14）では箱枠形木器として示唆されている。

「口」形を呈するものの一つには，木棺墓があげられる。柳田康雄氏によるA組合せ式の木棺墓（註15）がそれにあたる。このタイプの木棺墓は既に弥生時代前期の段階から出現しており，中期の甕棺墓盛行に伴って一度は減少傾向をとるものの後期中頃以降は箱式石棺（木棺のA組合せと同様の形がある）と共に盛行する。

前期の木棺墓では側板の深さと木口板の深さではおおむね木口板が深く側板の痕跡の不明瞭な例が多いが，後期の木棺墓・箱式石棺墓では側板は木口板の深さと変わらない。あるいは深いものが現れ，側板の痕跡は明瞭である。このような後期木棺墓・箱式石棺墓の出現の要素としては，青銅器・鉄器の普及に起因する木材加工技術の発達と共に「屈葬という古い呪術的な制約からの解放」（註16）が考えられている。琴1号の「凵」形の掘り込みと墓制とはこの観点から共通し，琴の有した性格もこのあたりに秘められていると考えられないだろうか。古墳時代に入って出現する服部遺跡の琴等を含めて，祭祀に深く関わっていたことは想像にかたくない。

なおこの資料を琴と断定する際に次の方々の御意見を伺った。記して感謝の意を表したい。九州芸術工科大学安藤由典教授・お茶の水女子大学柴田南雄講師・宗像大社学芸員松本肇氏・日本観光文化研究所村山道宣氏。

（小池史哲）

註1　高橋勝吉「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『石川県押野村史』1970.
2　註1と同じ。
3　鍬木義昌編『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社　1965.
4　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集，福岡県教育委員会　1978.
5　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集　福岡県教育委員会　1979.
6　八木勝行「七世紀後半の筌」『民具マンスリー』6巻5・6号　1973，東京.
7　柳田康雄「青銅製鋤先」（湯納遺跡）『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集　福岡県教育委員会　1977.
8　川越哲志「金属器の製作と技術」『古代史発掘』4，講談社　1975.

8　川越哲志「金属器の製作と技術」

9　宗像大社復興期成会編『宗像沖ノ島展』カタログ，1977，出光美術館

10　琵琶の共鳴孔は琴1号の孔よりもさらに小さく，琴1号の孔は充分に役目を果す。村山道宣氏の御教示による。

11　樹種同定は九州大学農学部松本鼎教授・林弘也助手による。モミ属の材は，強さの割に軽量で，弾力性があり，共鳴する性質があるため現在でも楽器の共鳴板に多用されている。

12　兼康保明「古代の琴」『月刊文化財』169号，1977，東京．

13　水野正好氏は森浜第2号琴の孔と，埴輪例にみられる脚付の琴を対比されている。水野正好「埴輪に見る琴の三種の構造」『滋賀文化財だより』13，1978，大津．

14　乙益重隆「木器及び木製品」『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』九州文化総合研究所・毎日新聞社 1958．

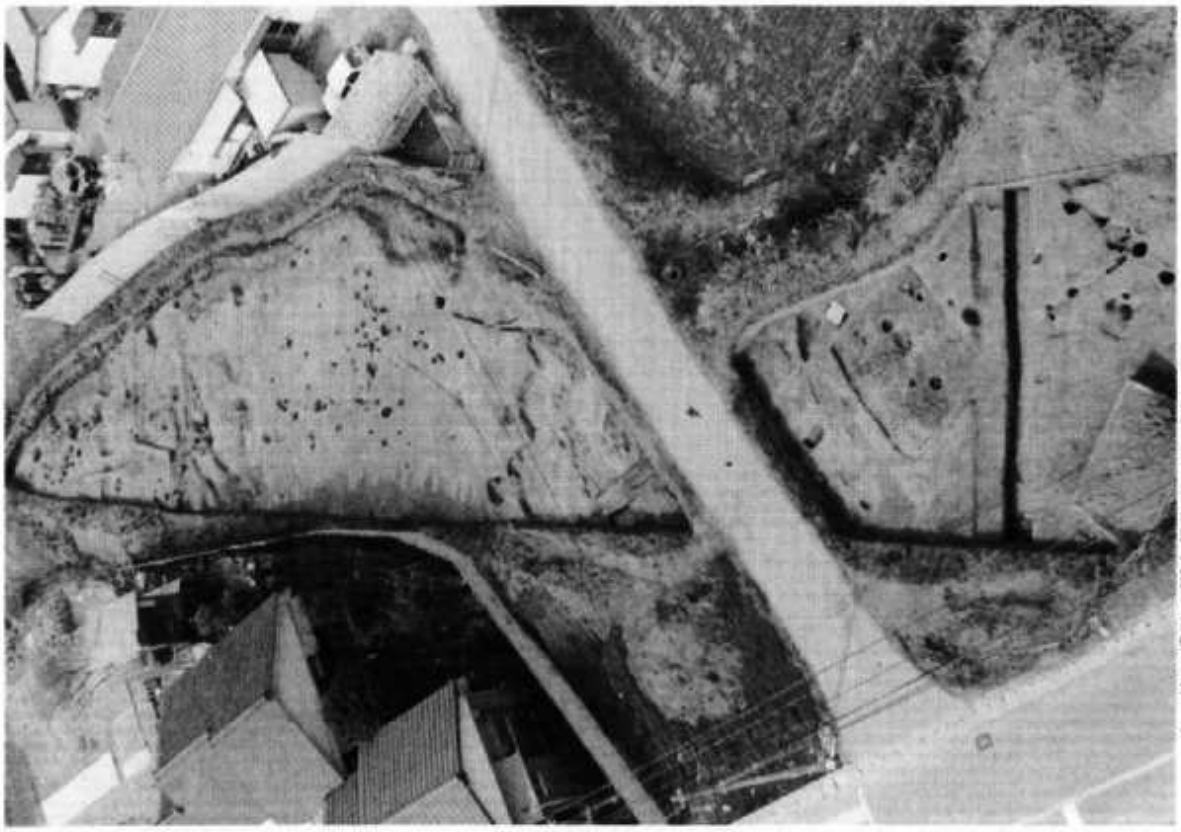
15　柳田康雄「木棺墓と甕棺墓」『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会 1970．

16　森貞次郎「弥生文化の発展と地域性・九州」『日本の考古学 III 弥生時代』河出書房新社 1966．

図　　版

上　辻田遺跡遠景空中写真

下　辻田遺跡全景空中写真



1　辻田遺跡Ⅰ区全景空中写真（東から）

2　辻田遺跡Ⅰ区全景（西から）

1　Ⅰ－1区 住居跡群（東から）

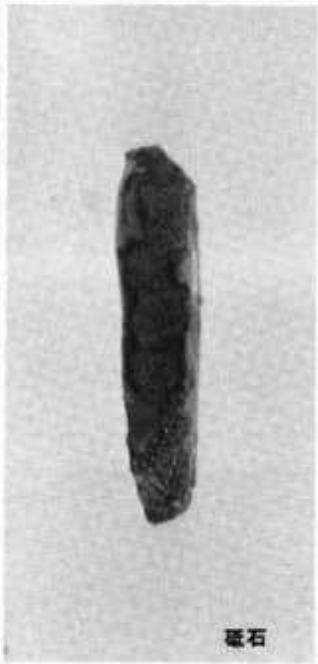
2　Ⅰ－1区 1号住居跡（東南から）

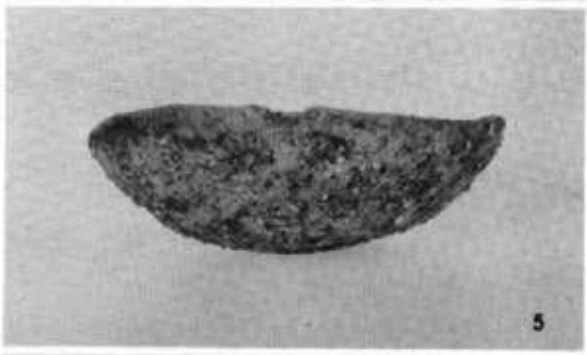
1　Ⅰ－1区1号住居跡内遺物出土状況

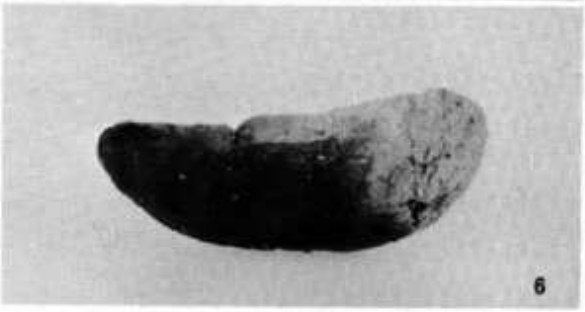
2　Ⅰ－1区 1号住居跡内遺物出土状況（左　砥石　右　鏡）

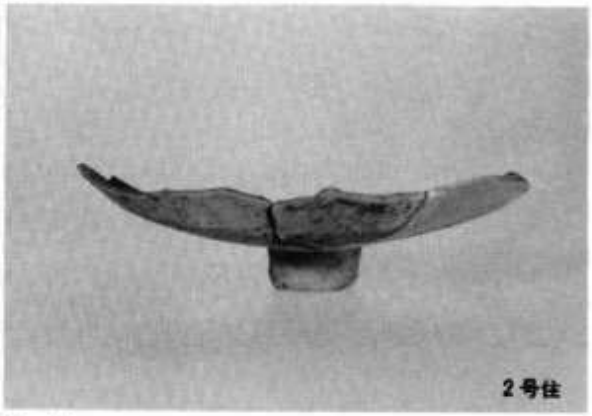
1　Ⅰ－1区 2号住居跡全景（東から）

2　Ⅰ－1区 2号住居跡内高杯出土状況









Ⅰ－1区 1・2号（高杯のみ）住居跡出土土器・砥石・鉈

1　Ⅰ－1区 溝状遺構全景（東南から）

2　Ⅰ－1区 溝状遺構1土層堆積状況

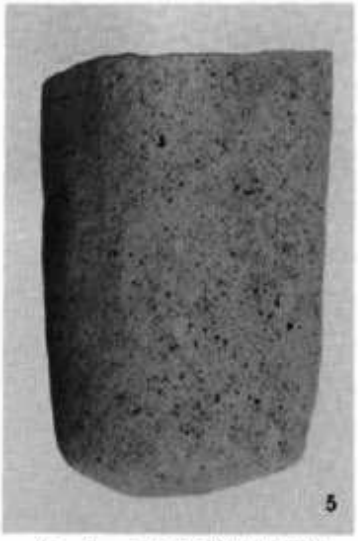
1　Ⅰ－1区 溝状遺構・土壙出土土器

2

3

4

7



5

6

8

2　Ⅰ－1区 包含層出土石器

1　I－2区 全景（西から）

2　I－2区 土壙群全景（北西から）

1　Ⅰ－2区 土壙1

2　Ⅰ－2区 土壙1土層堆積状況

1　Ⅰ－2区 土壙2

2　Ⅰ－2区 土壙3

1　I－2区 土壙4

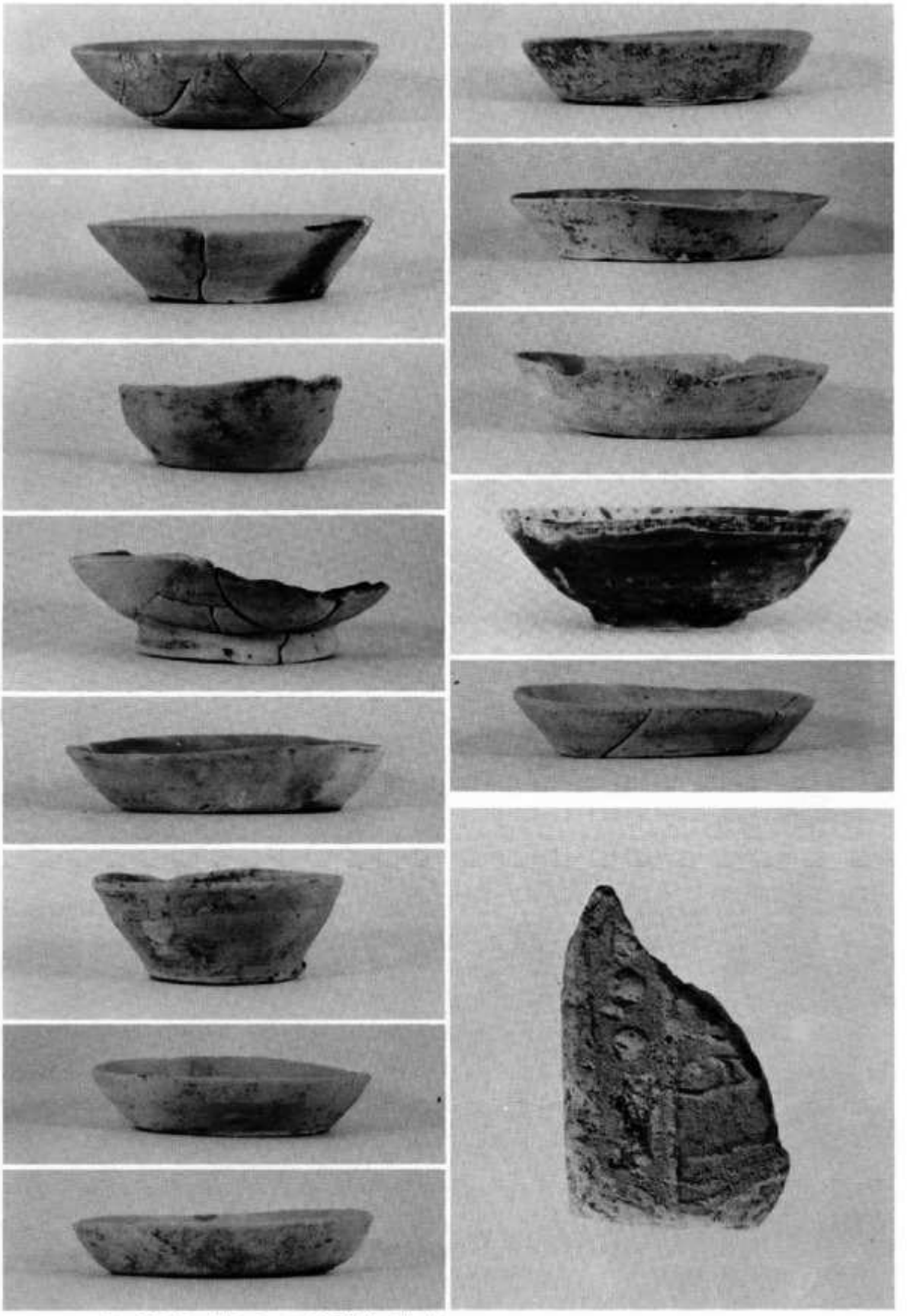
2　I－2区 pit 5

1　I－2区 pit 群（北から）

2　I－2区 溝・土壙・pit群（北から）

1　Ⅰ－2区 柱穴群（北から）

2　Ⅰ－2区 杭列（東から）



I－2区 溝・土壙・Pit・包含層出土土器・埴

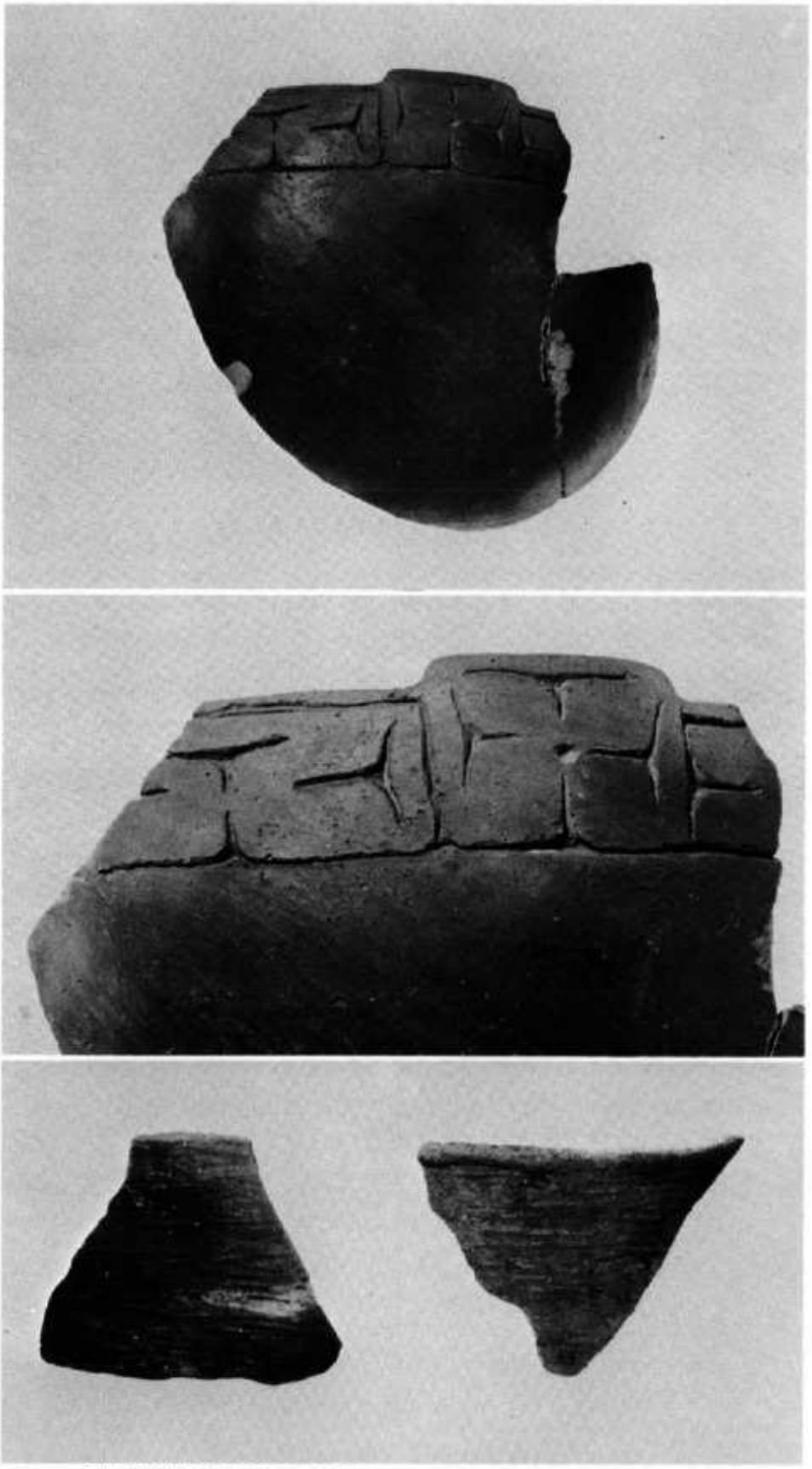
図版　16

上　II区 全景空中写真（東から）

下　II区 全景地上写真（西から）

1　II－1区 全景（西から）

2　II－2区 全景（西から）



II区 出土縄文土器（中段は実大）

1 II区 大溝全景
（南から）

2 II区 大溝土層
堆積状況

1　II区 B－C－3・4区建築部材等出土状況（南から）

2　II区B・C－3・4区 建築部材等出土状況（東から）

1　Ⅱ区B・C－3・4区 建築部材等出土状況近景（北から）

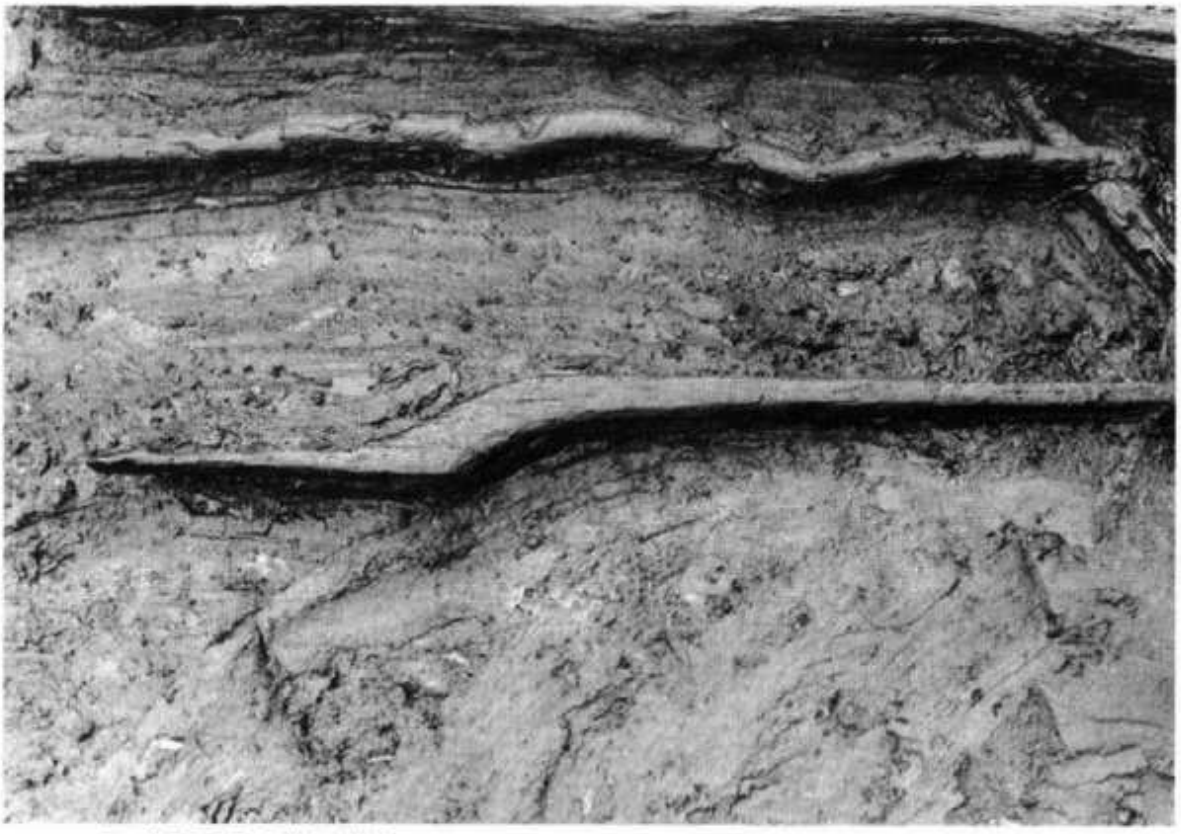
2　Ⅱ区B・C－3・4区 建築部材等出土状況近景（東から）

1　II区C３区 農具・建築部材出土状況（南から）

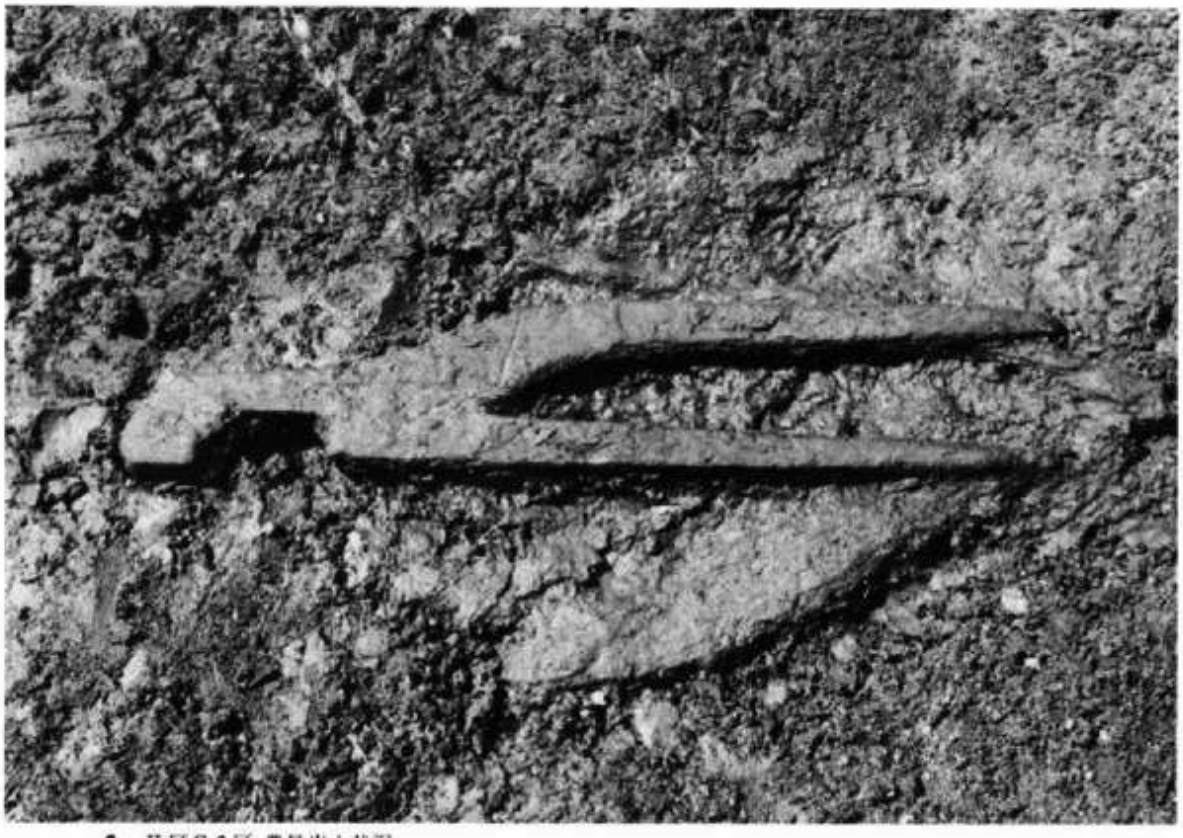
2　II区B４区 建築部材出土状況（南から）

1　II区B－2・3区 木材出土状況（南西から）

2　II区B3区 建築部材出土状況



1　II区D5区 農具出土状況



2　II区C6区 農具出土状況

1 Ⅱ区B6区 槌出土状況

2 Ⅱ区C6区 農具未製品出土状況

1　II区D3区 杓子出土状況

2　II区C4区 杓子出土状況

1　II区C6区 杓子出土状況

2　II区C6区 木製紡錘車出土状況

1 II区B7区 手網出土状況

2 II区B7区 円形板状製品

1　II区B7区 琴1号・農具出土状況（北から）

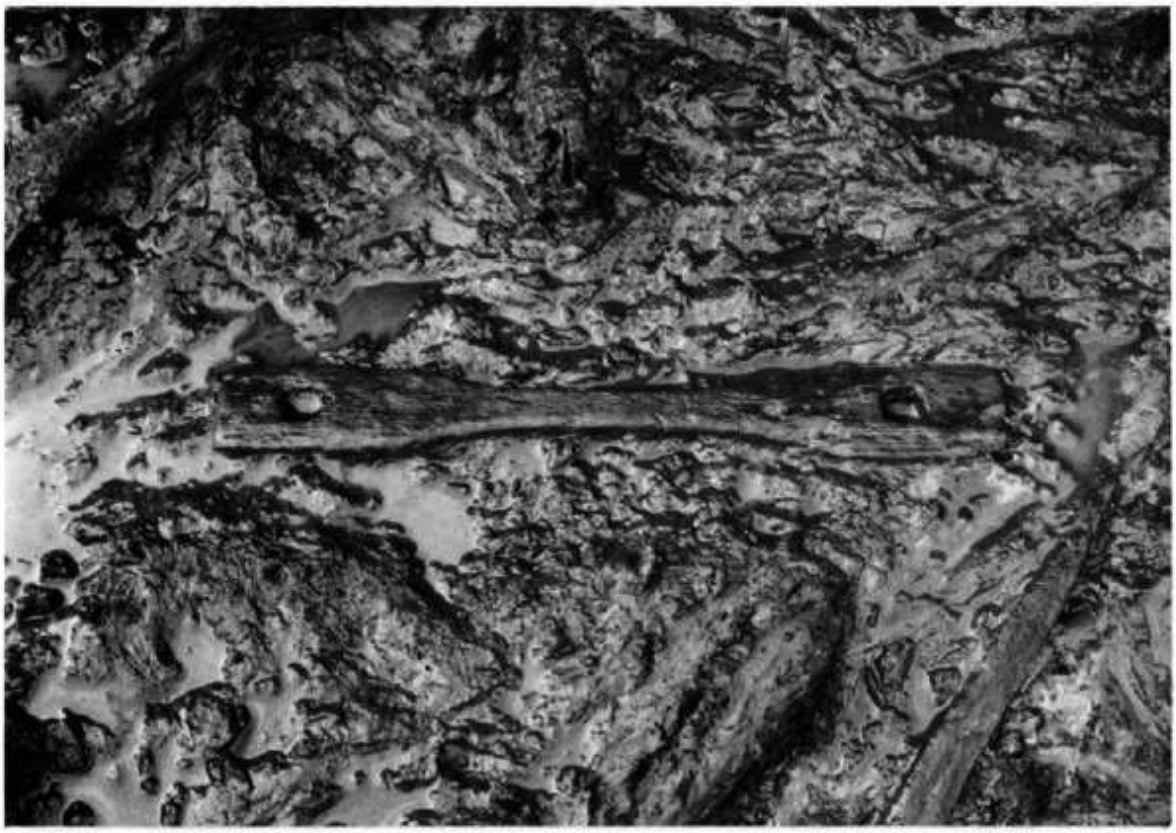
2　II区B7区 琴1号出土状況（北から）

上　II区B 7区 琴1号近景（東から）
及び細部

下　II区B 7 横杵出土状況

1 Ⅱ区B 7区 二又銀出土状況

2 Ⅱ区B 7区 杓子出土状況



1　Ⅱ区B７区 紡織具？出土状況

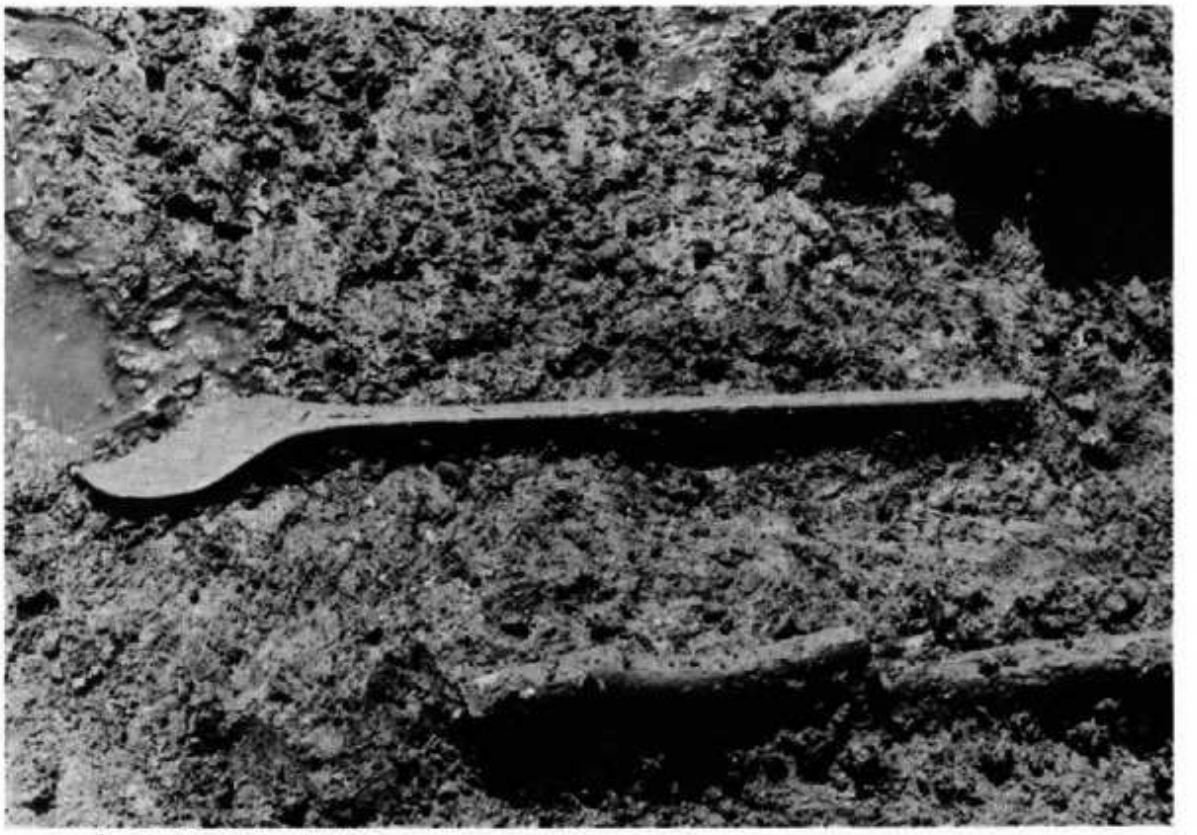
2　Ⅱ区B７区 枘孔を有した板材（A類）出土状況

1　II区B 7区 鋤出土状況

2　II区B 7区 三叉鍬出土状況

1　II区C7区 二叉鏃出土状況

2　II区D7区 三叉鏃出土状況



1　II区C7区 杓子出土状況

2　II区C7区 槽出土状況

1　II区B８区 遺物出土状況（東から）

2　II区B８区 遺物出土状況（南から）

1　II区B8区 遺物出土状況（北から）

2　II区B8区 三叉鋤・建築部材出土状況

1　II区B８区 木材出土状況（北から）

2　II区B８区 木材出土状況（東から）

1　II区B 7区 盤出土状況

2　II区B 7区 田舟状木製品出土状況

1　II区B8区 建築部材等出土状況

2　II区B8区 平鍬出土状況

1　II区B 8区 三叉鋤・杓子出土状況

2　II区 柄を有した板材（B類）出土状況

1　II区C８区 建築部材等出土状況（西から）

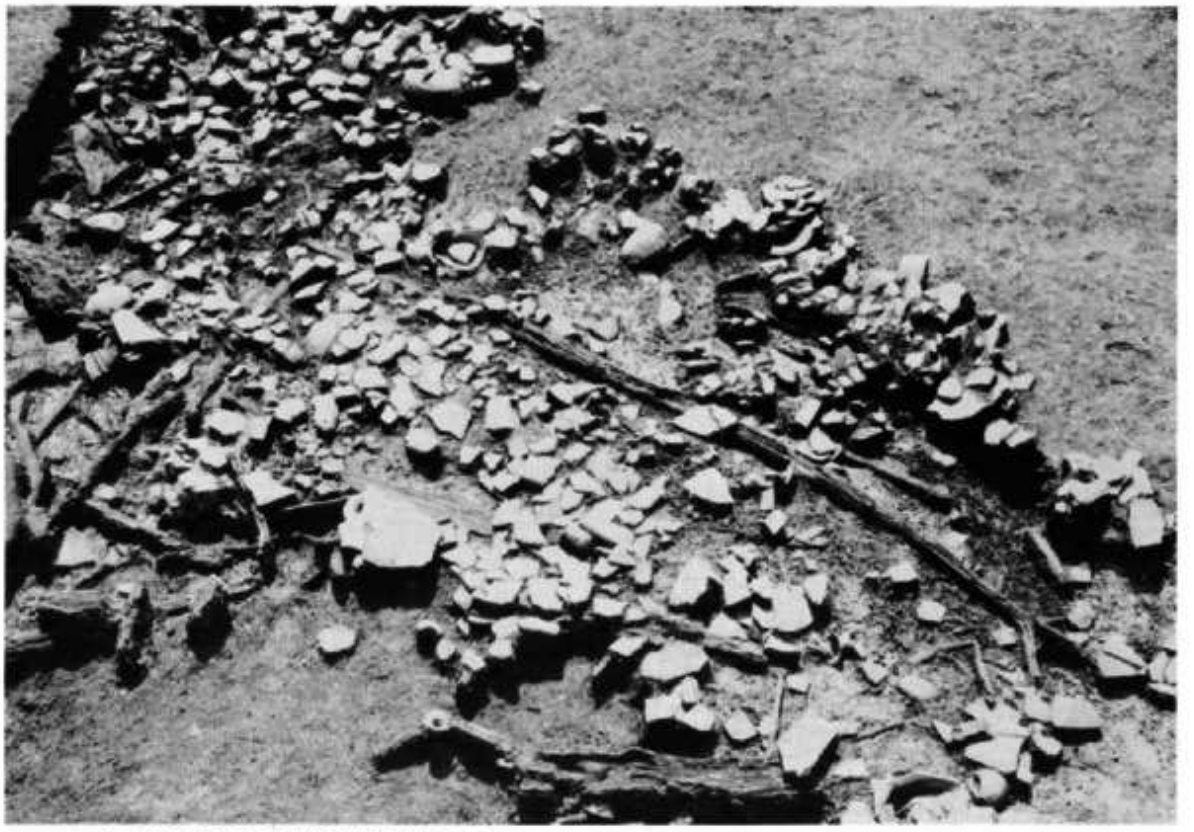
2　II区C８区 建築部材等出土状況（南から）

1　II区C 8 区 紡織具？出土状況

2　II区C 8 区 建築部材出土状況

1　II区C８区 建築部材出土状況

2　II区C８区 建築部材細部



1　II区C９区 土器集積状況（東から）

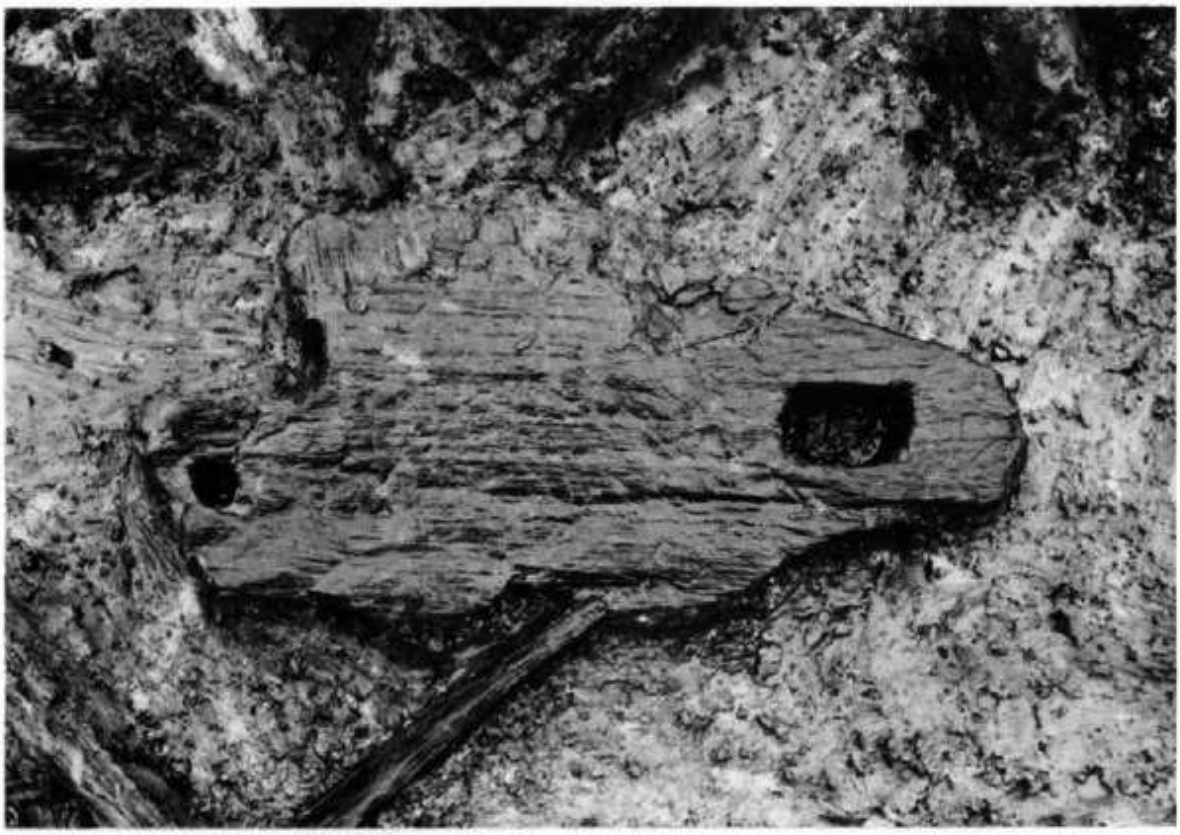
2　II区C９区 土器除去後の状況（東から）

1　II区C 7区 竪杵出土状況

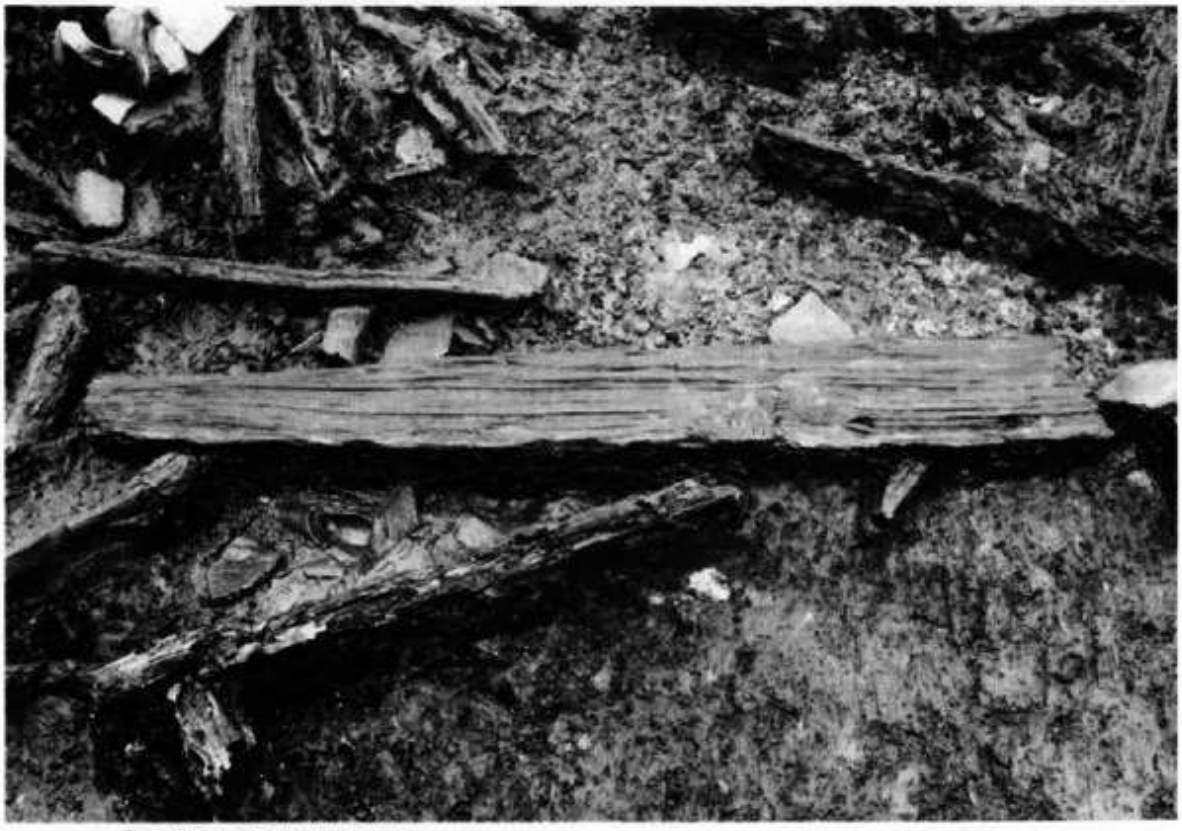
2　II区C 7区 枘を有した板材（B類）出土状況

1　II区C 9区 杓子出土状況

2　II区C 9区 横杵出土状況



1　II区C９区 平鍬出土状況



2　II区C９区 板材出土状況

1　Ⅱ区D８・９区 木材出土状況（北西から）

2　Ⅱ区D９区 木製品出土状況（南から）

1　II区D９区 槽出土状況

2　II区D９区 鋤未製品出土状況

1　II区D9区 横杵出土状況

2　II区D9区 平鍬出土状況

1　Ⅱ区D８・９区 南端部での木材出土状況

2　Ⅱ区D８・９区 南端部での木材出土状況（近景）

1　II区D8区 梯子・容器蓋出土状況

2　II区D9区 三叉鍬出土状況

1　II区D10区 遺物出土状況（南から）

2　II区D10区 枘を有した板材出土状況

1　II区D8区 笠出土状況

2　II区C8区 籠出土状況

1 石匙出土状況

2 砥石出土状況

3 石剣出土状況

II区 石器出土状況

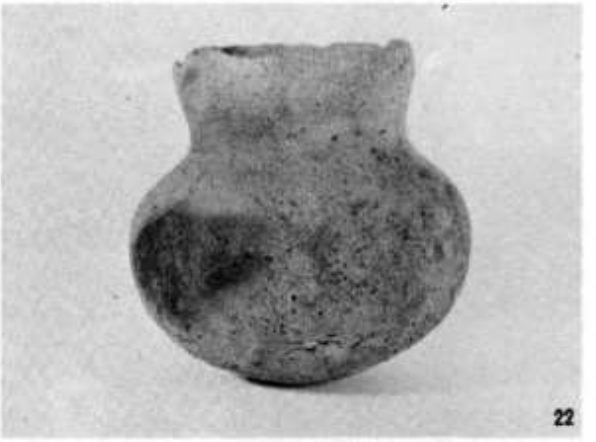
1 銅矛片出土状況

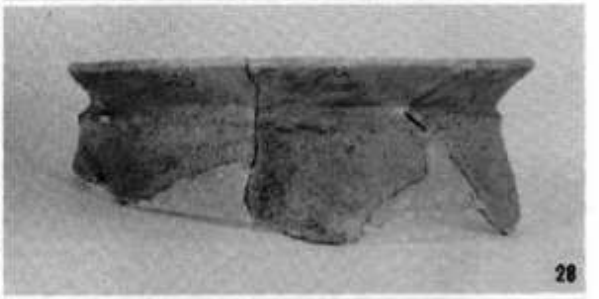
2 鉄斧出土状況

3 銅鋤先出土状況

II区 金属製品出土状況

II区 大溝出土弥生式土器 1





II区 大溝出土弥生式土器 2

32

35

33

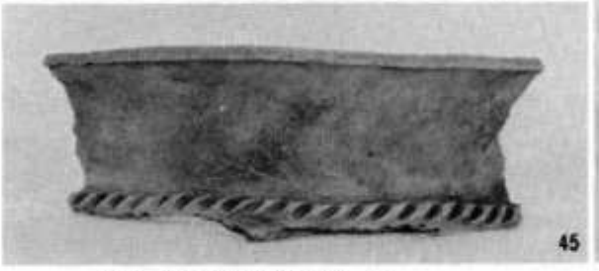
36

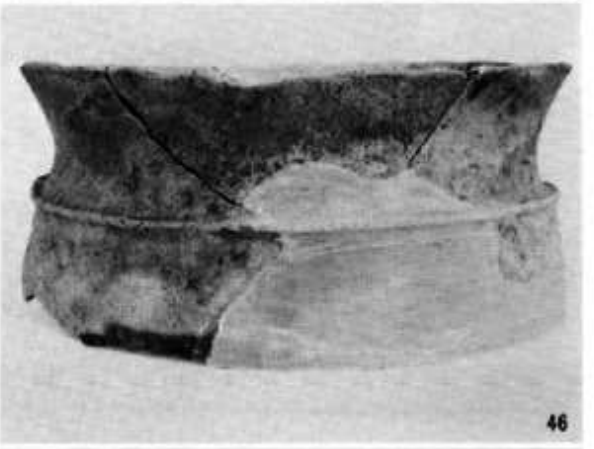
37

34

38

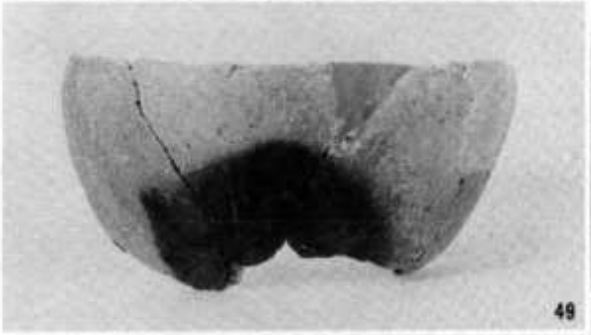
II区 大溝出土弥生式土器 3





II 区 大溝出土弥生式土器 4

48


49

50

51

52

54

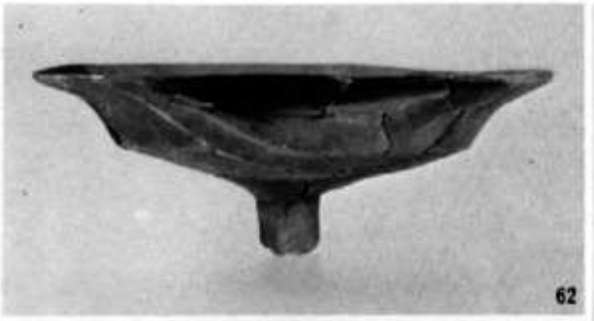
55

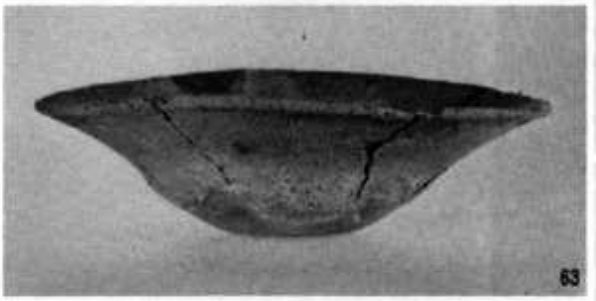
56

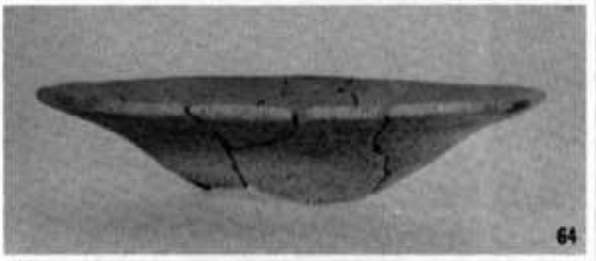
57

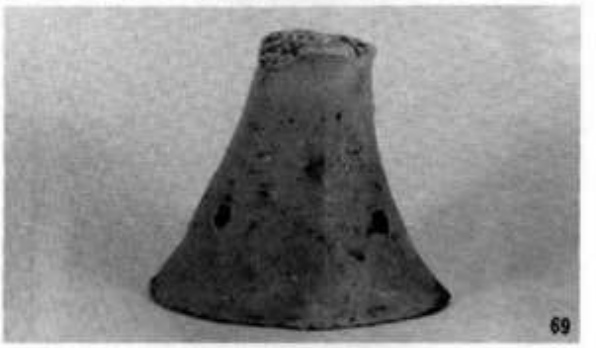
58

II区 大溝出土弥生式土器　5

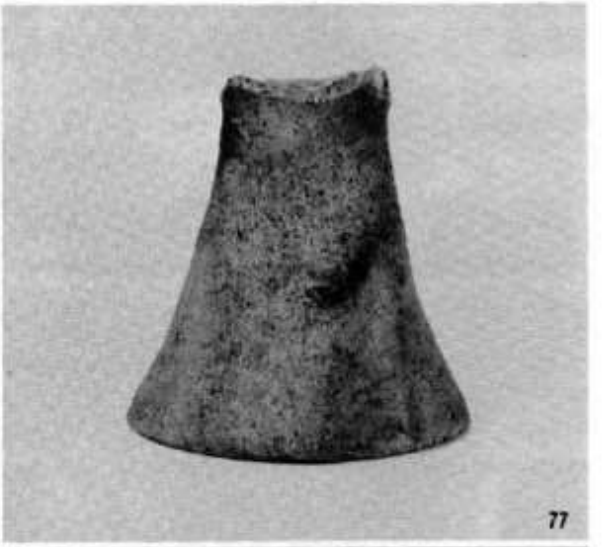






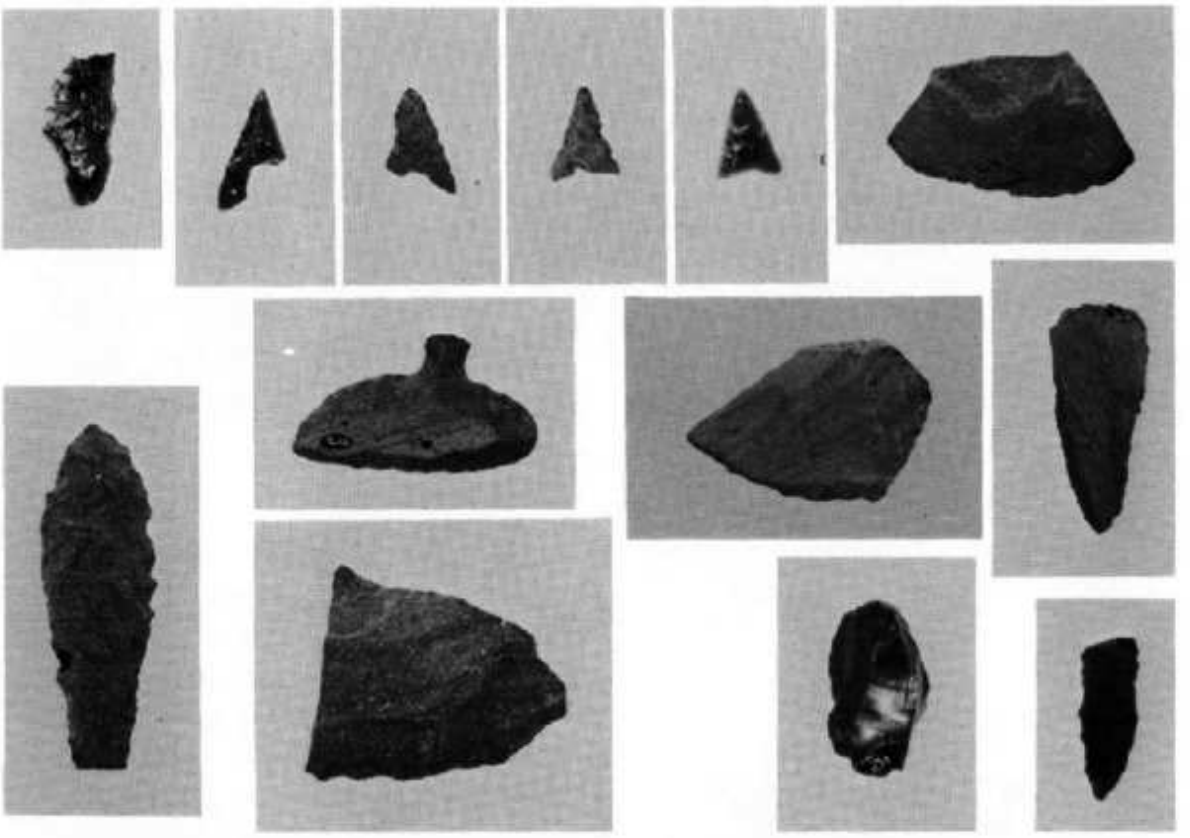


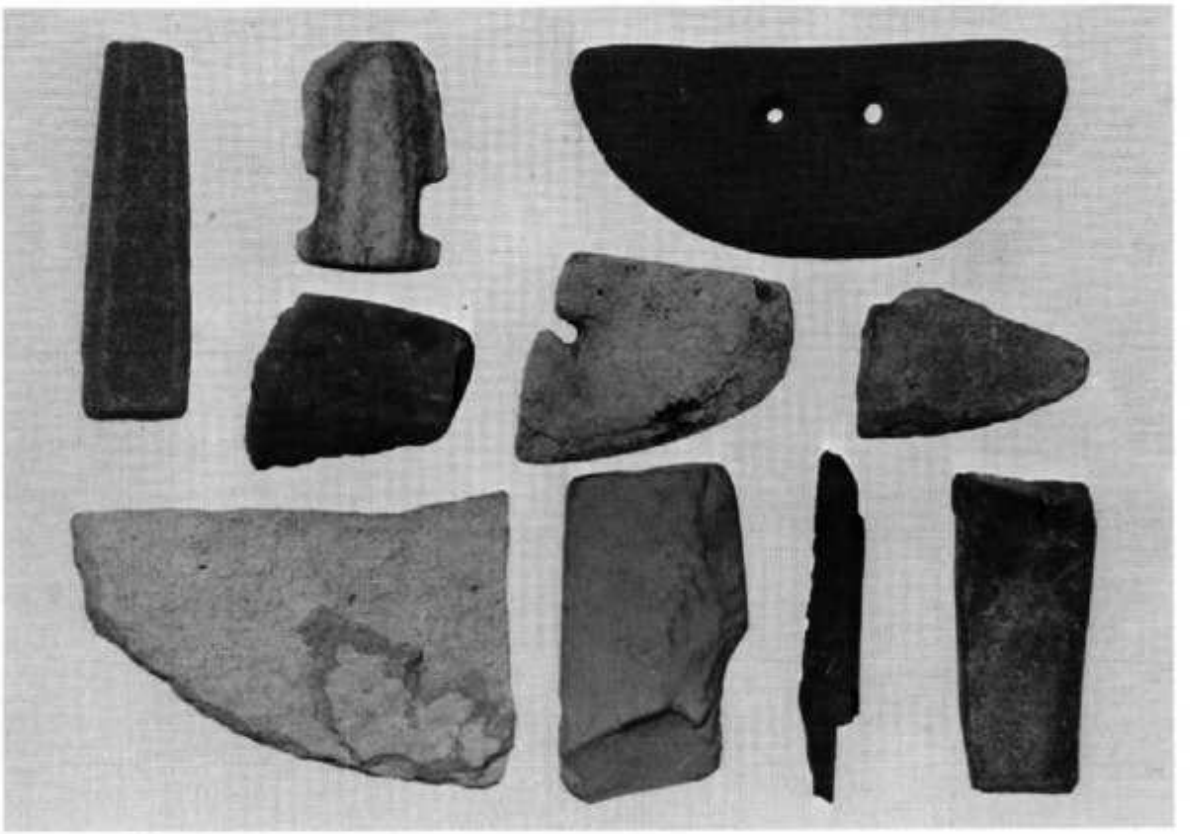
II区 大溝出土弥生式土器 6



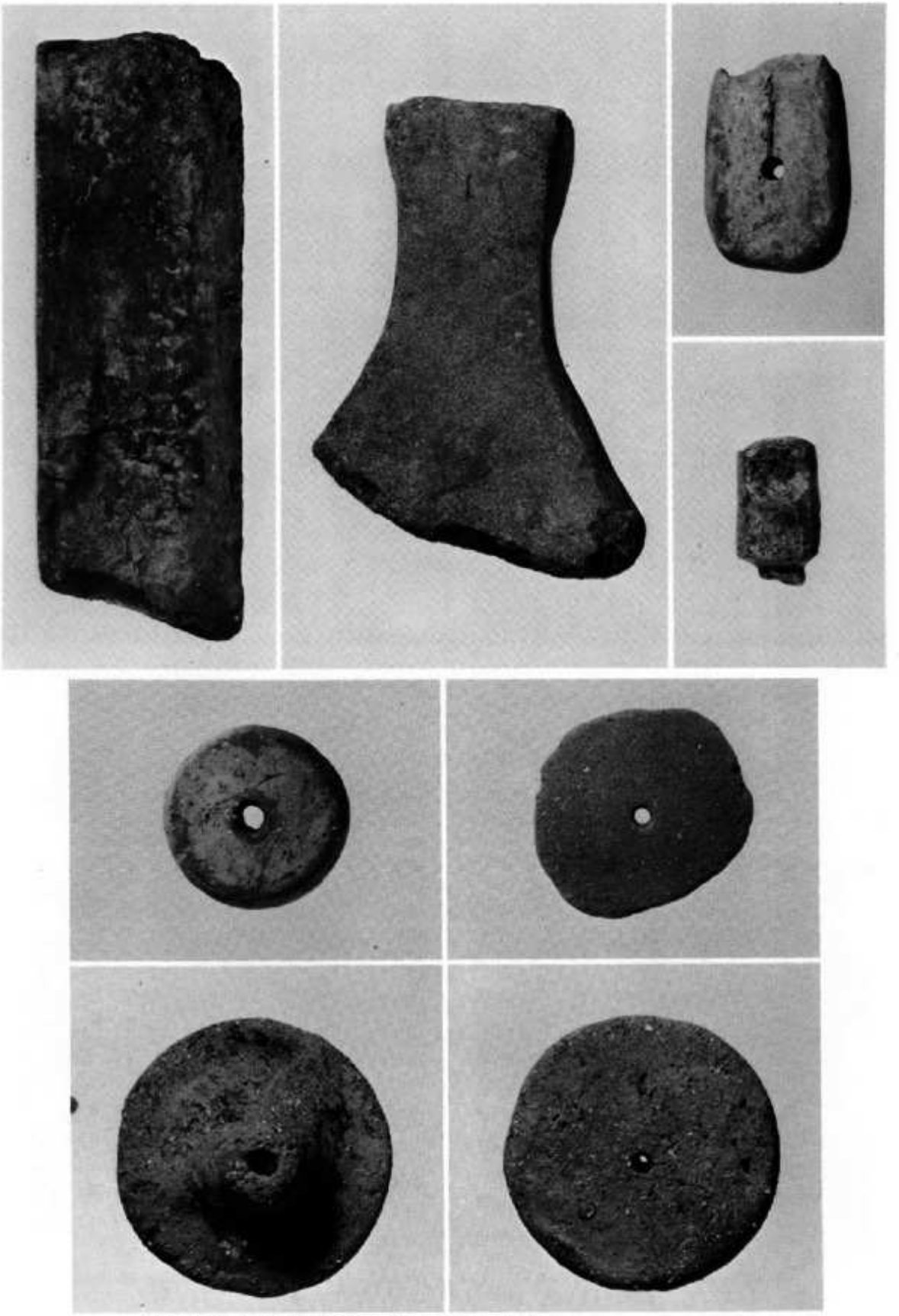
II 区 大溝出土弥生式土器 7

II区 大溝出土弥生式土器 8



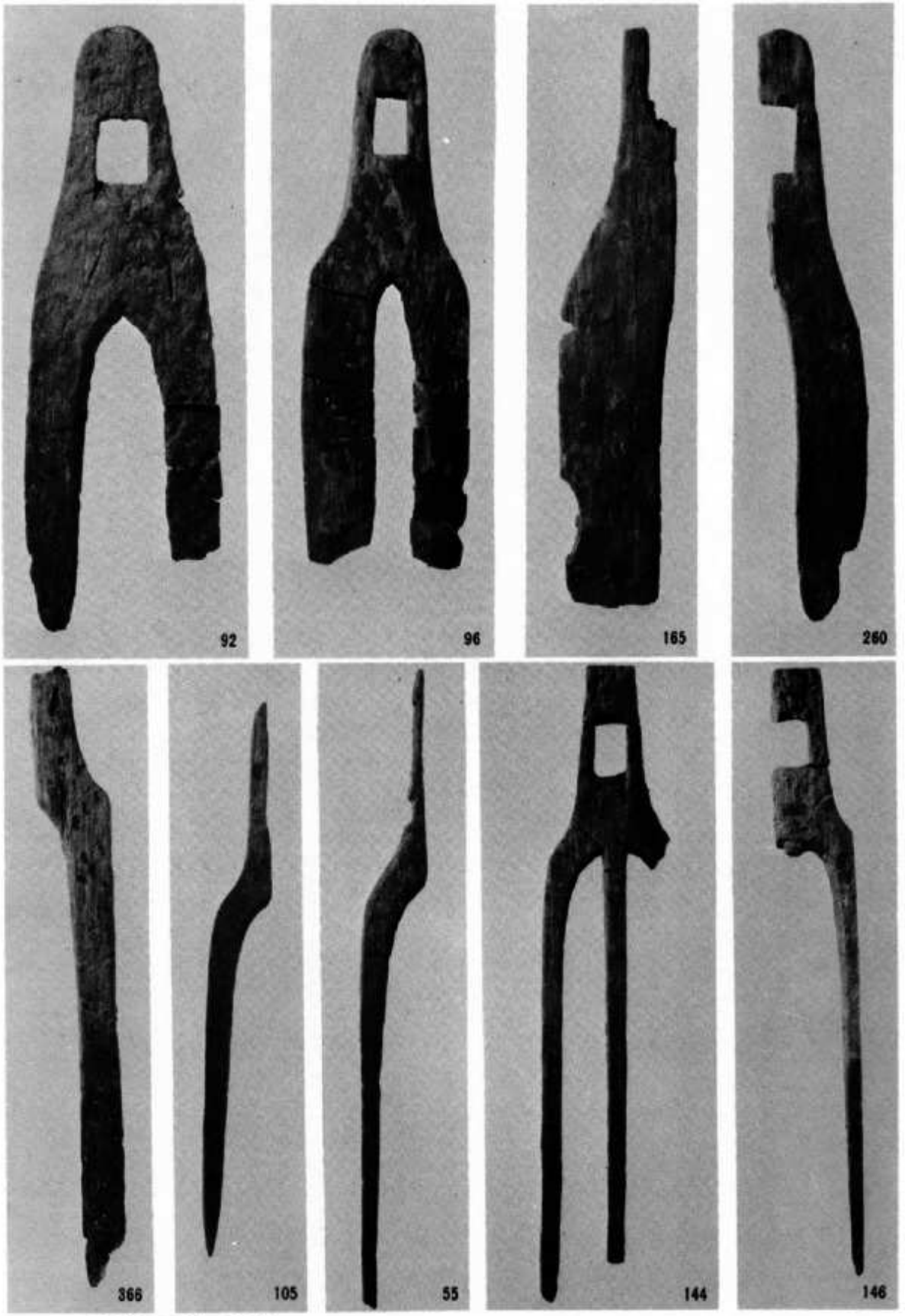


II区出土 先土器～弥生時代石器

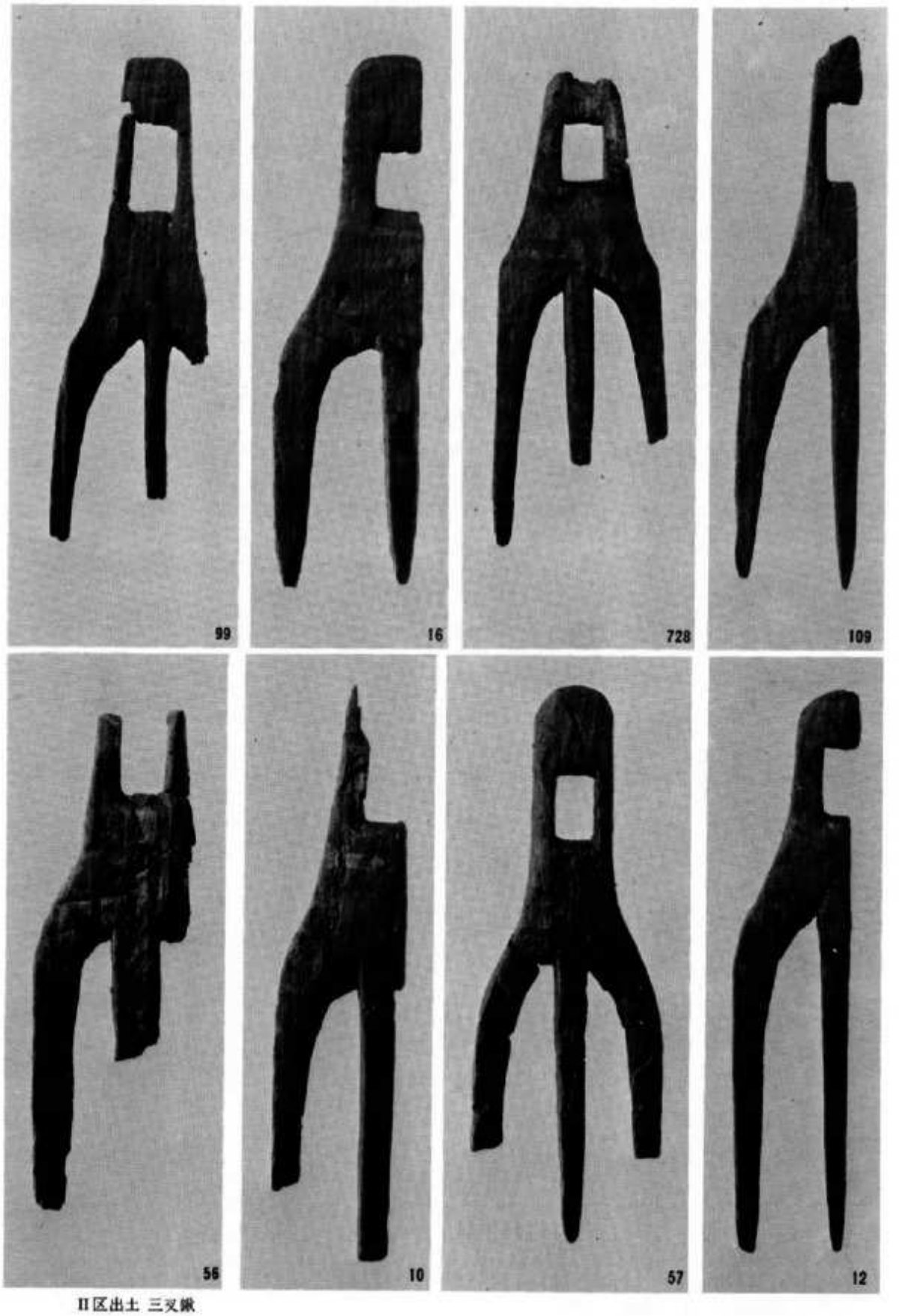


II区 出土石器・土製品（石器は1/2-1/3　土製品は5/6）

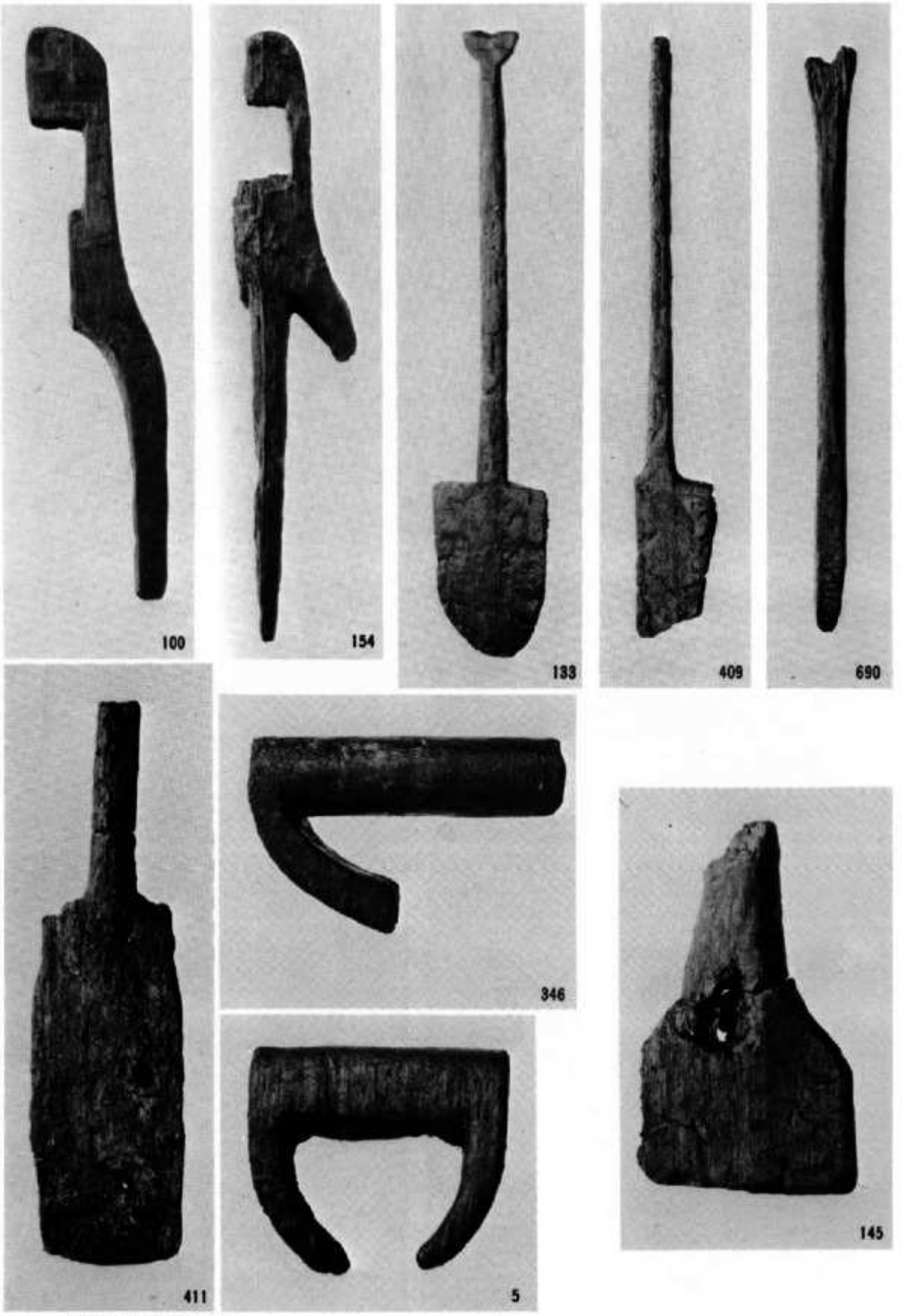
II区 出土平鍬・二叉鍬



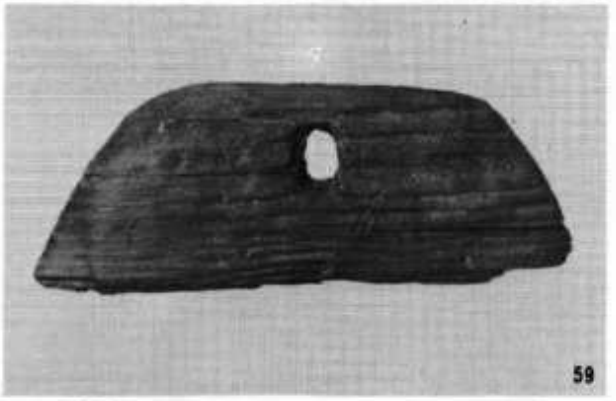
II区出土 二叉鍬・三叉鍬

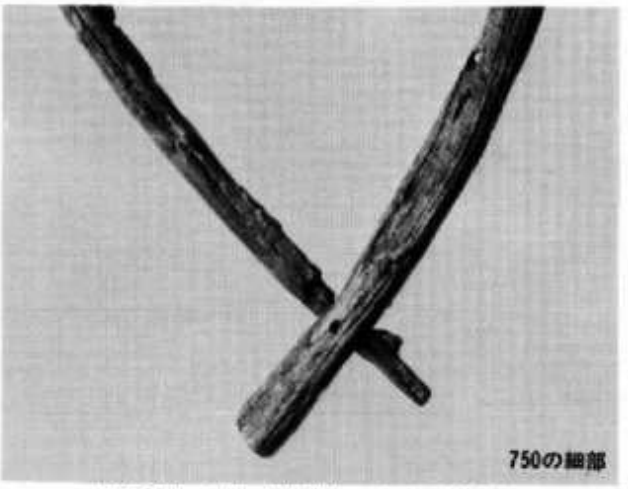


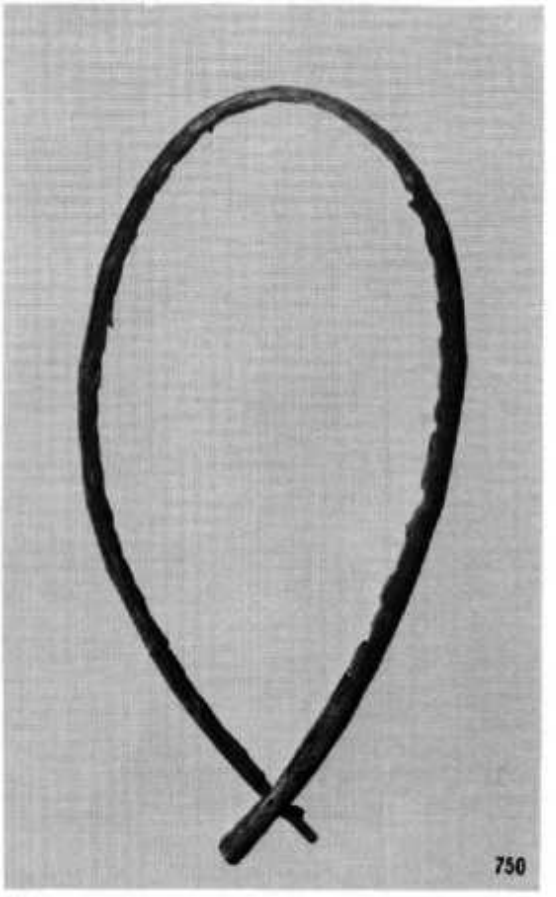
II区出土 三叉鏃



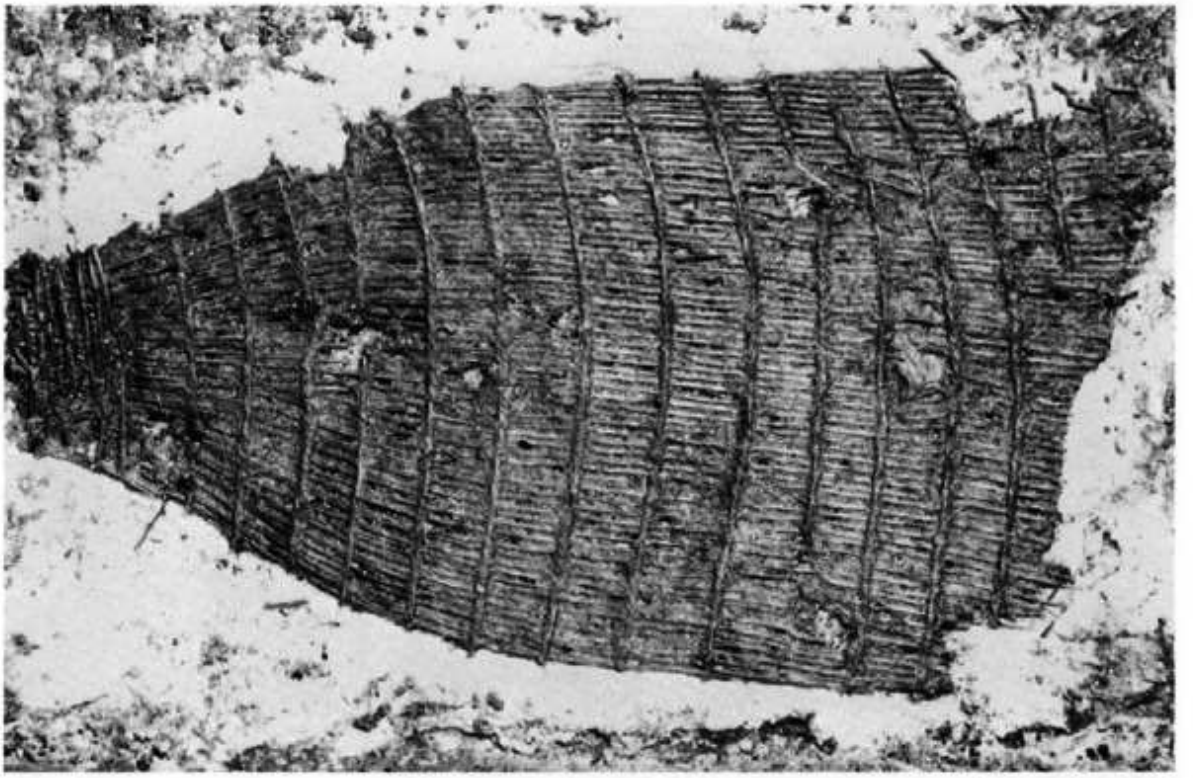
II区出土 三叉鍬・鋤



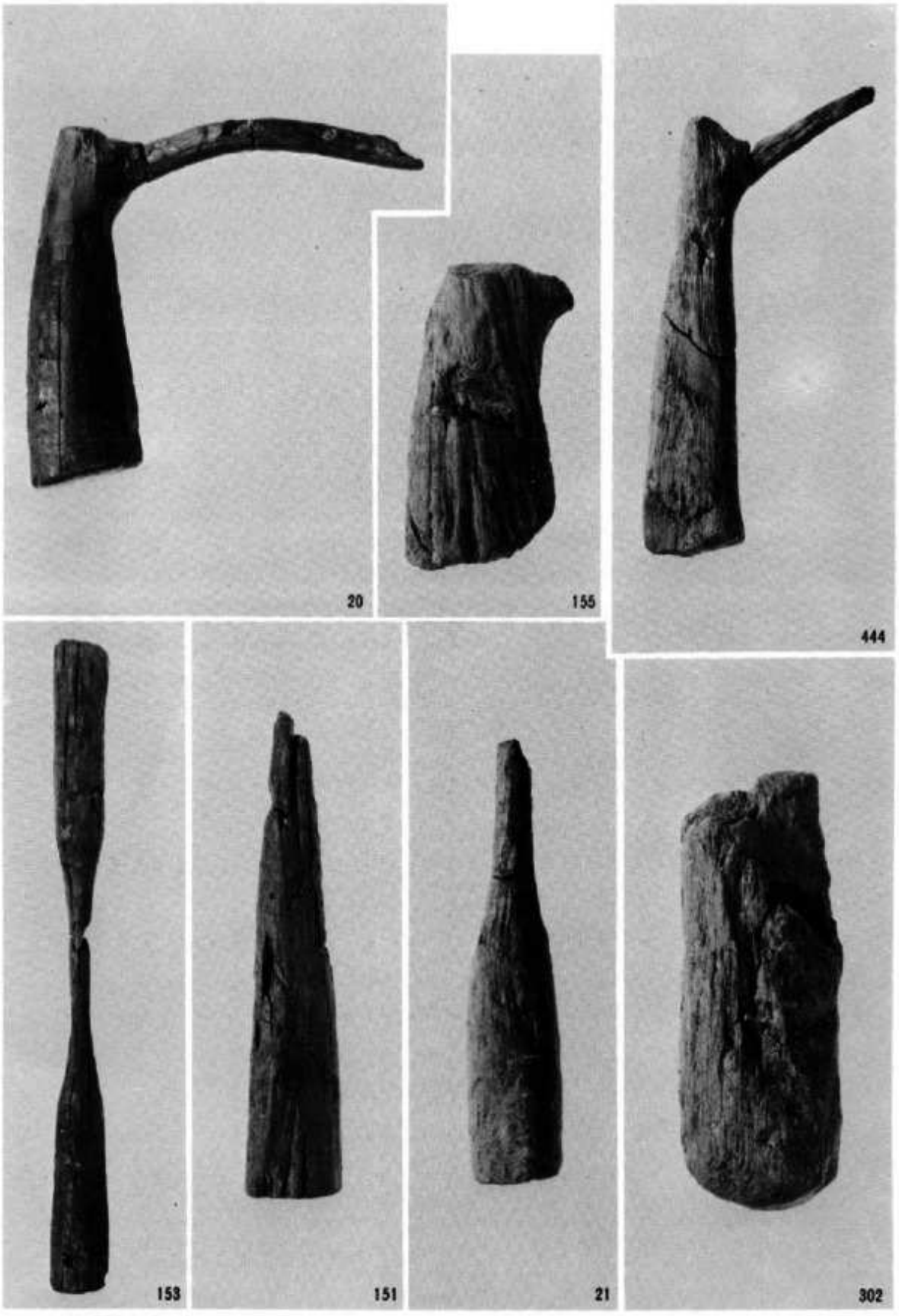




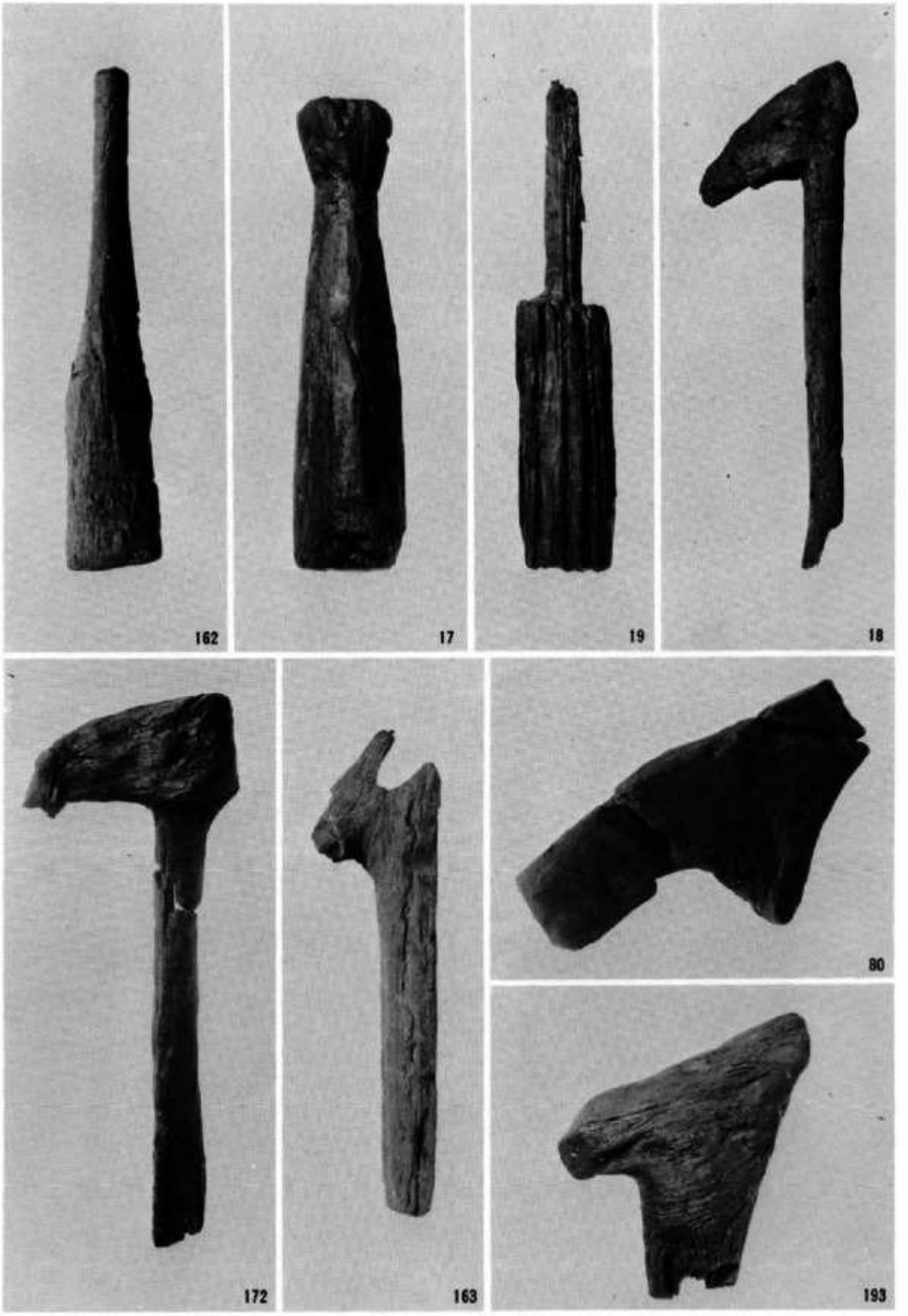
II区出土 ふぐし状木製品・えぶり状木製品・田下駄・手綱枠



II区出土 笠（下は実大）

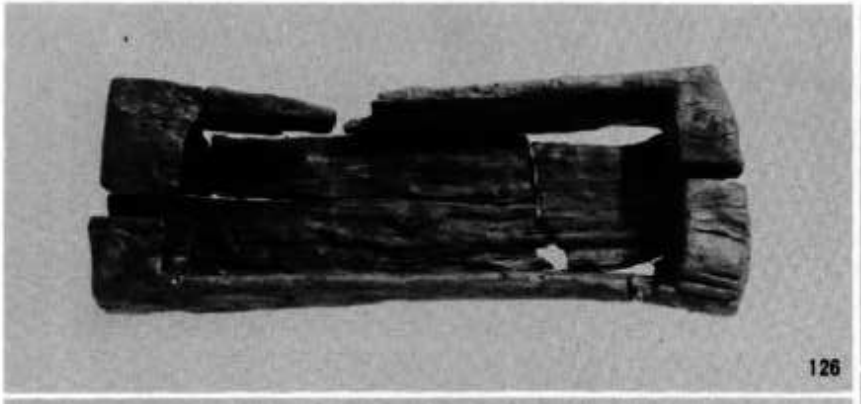


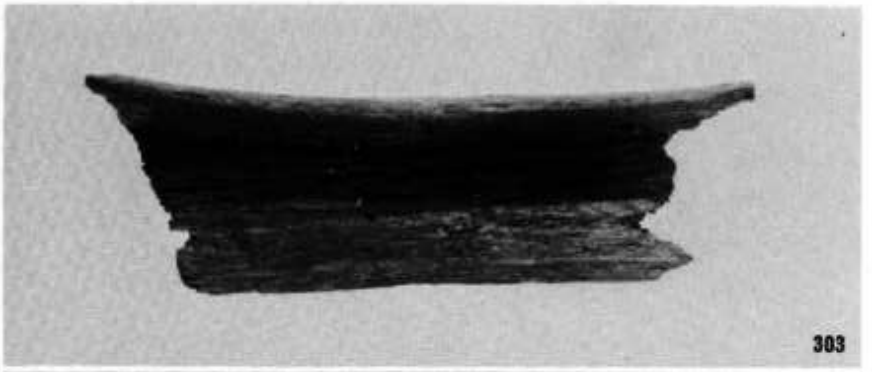
II区出土 杵 類

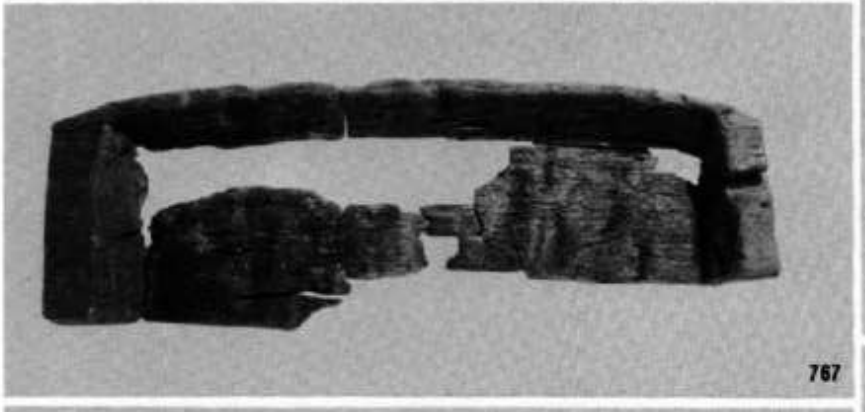


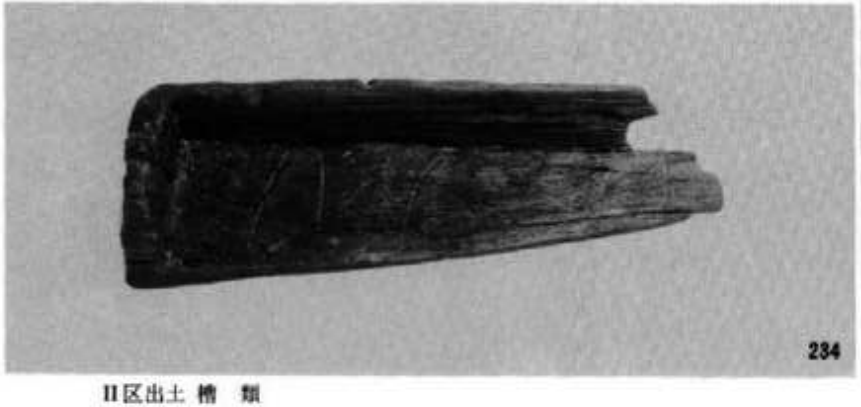
II区出土 槌・斧柄

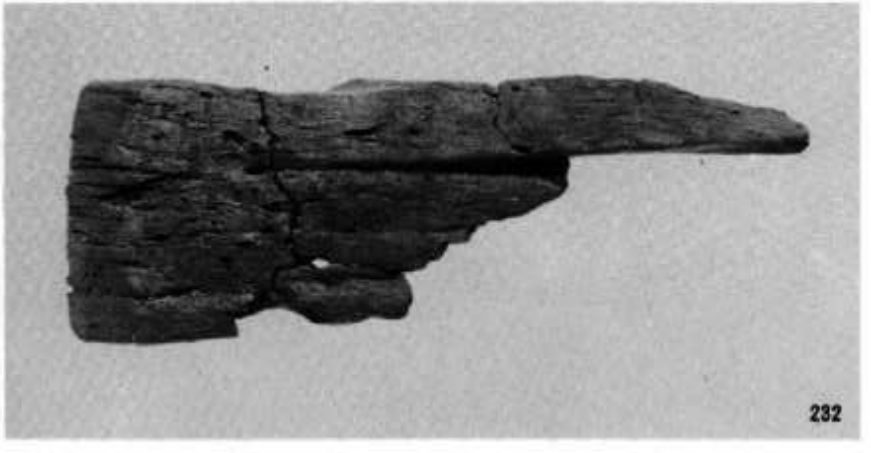
II区出土 つるべ状木製品・盤・槽



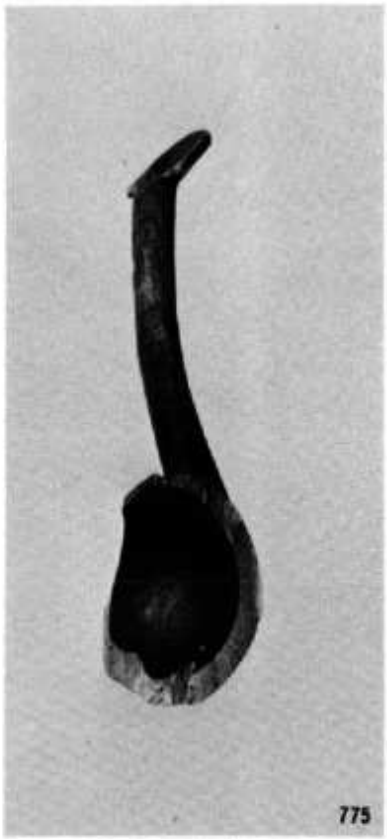


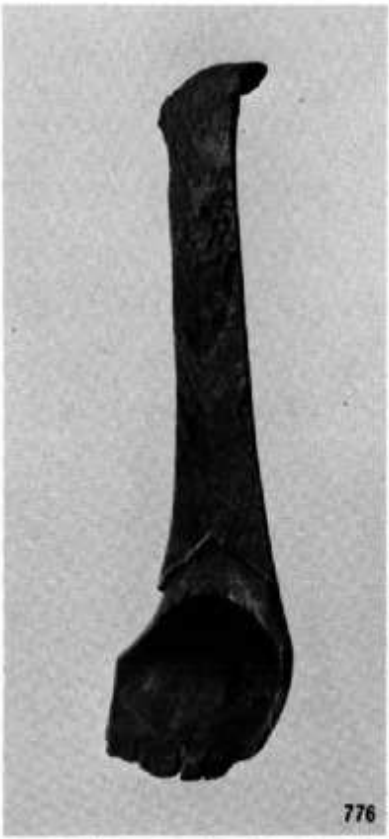


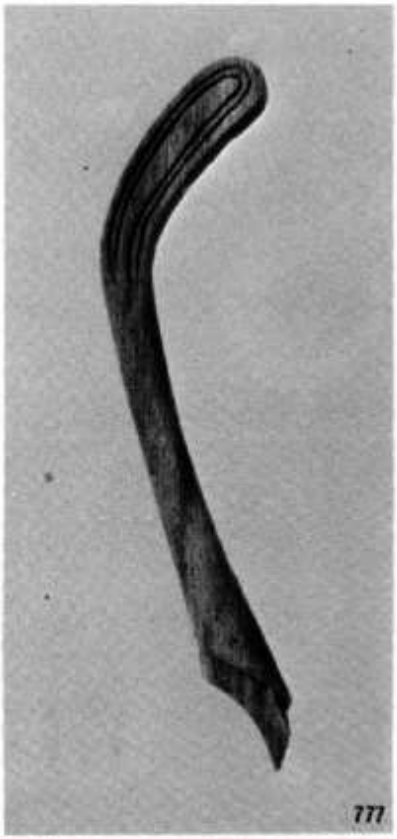


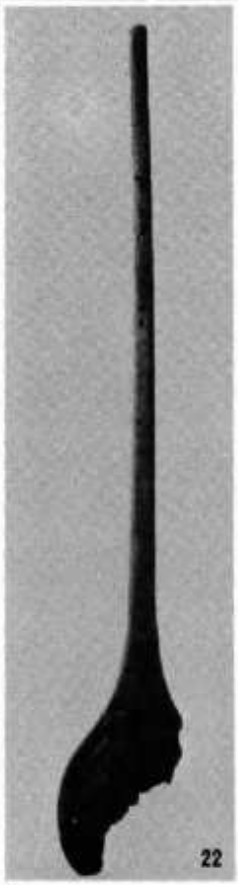


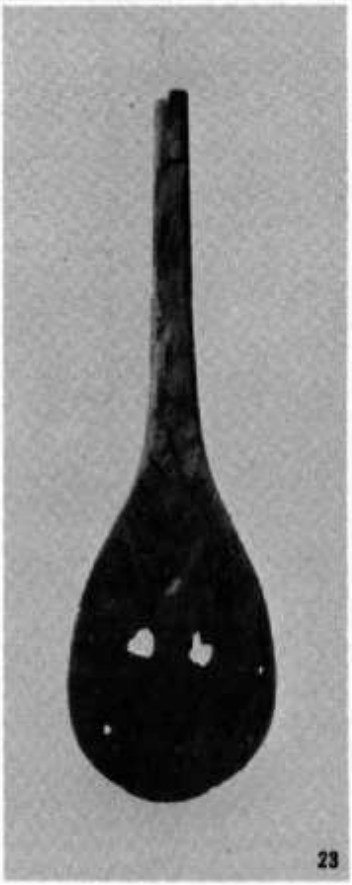
II区出土 槽 類

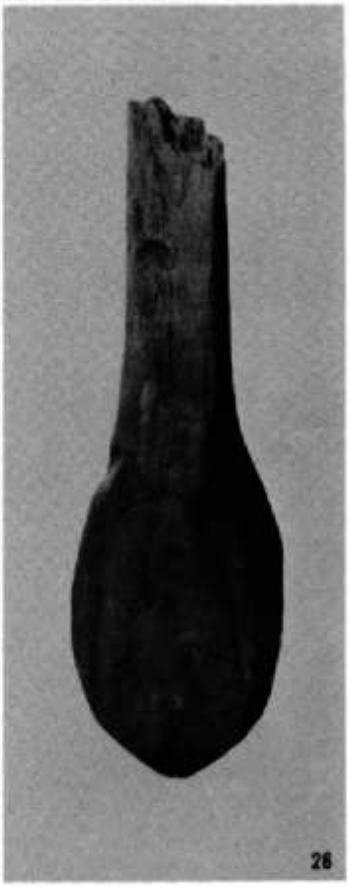




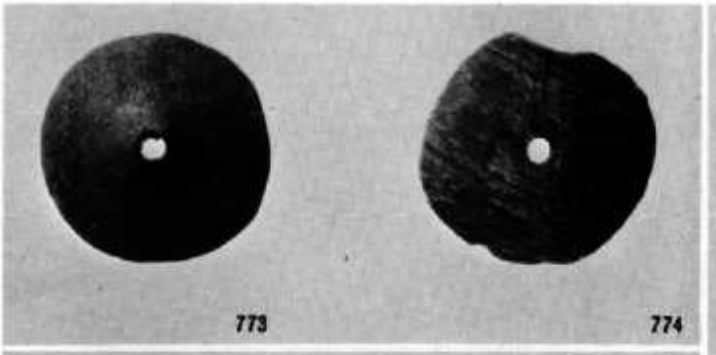


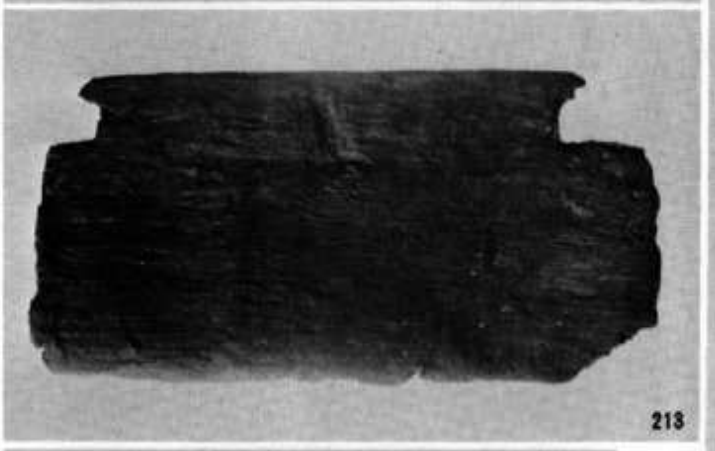


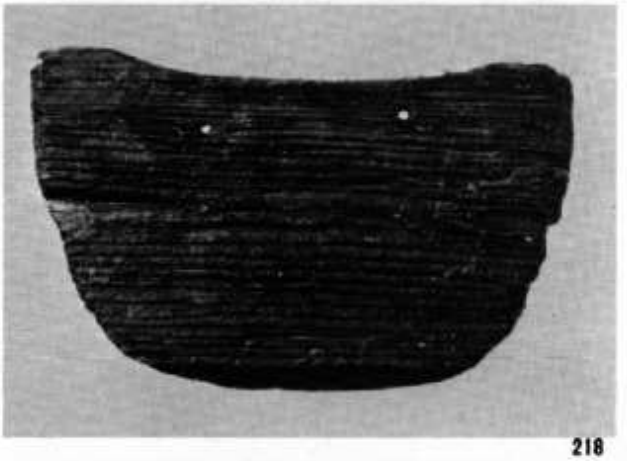


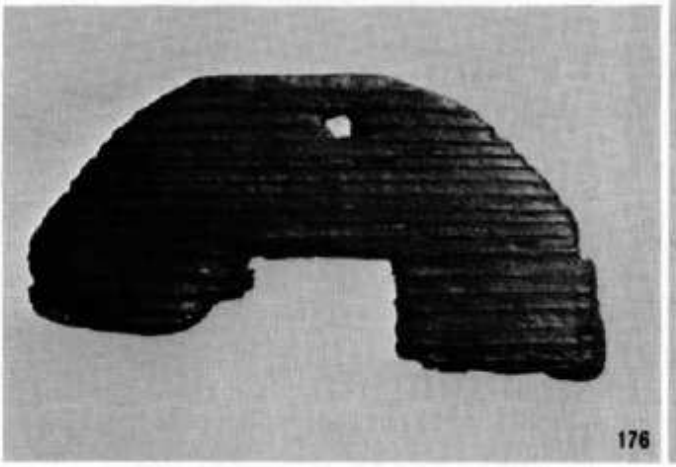


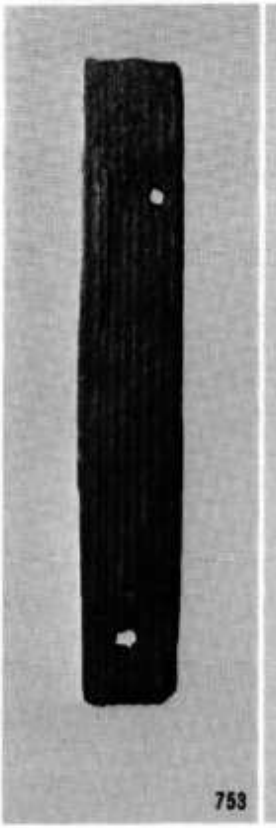
II区出土 杓 子

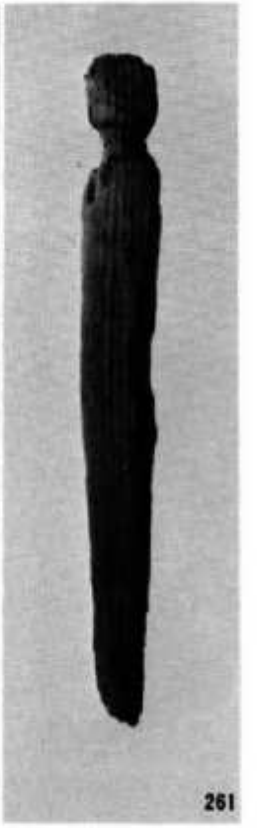




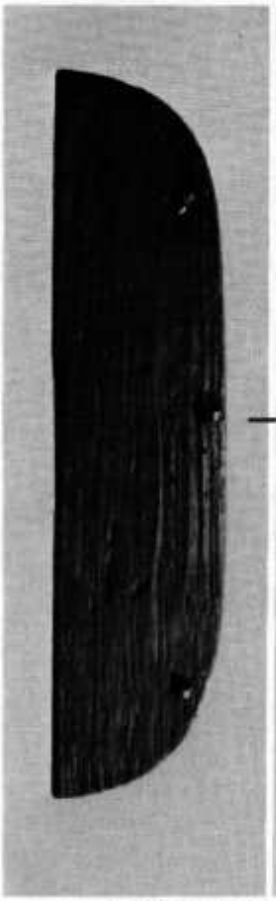


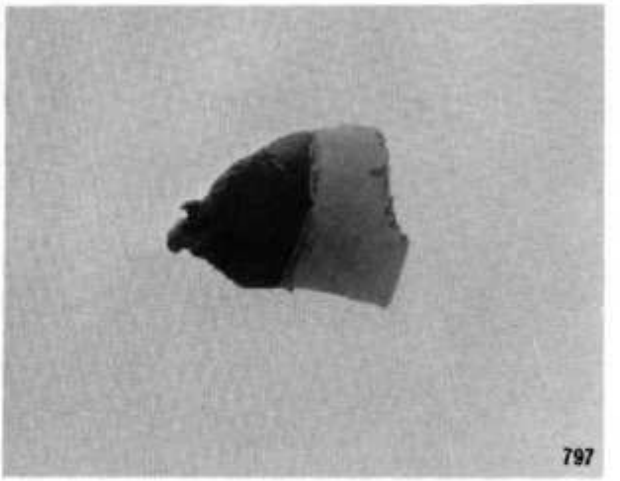




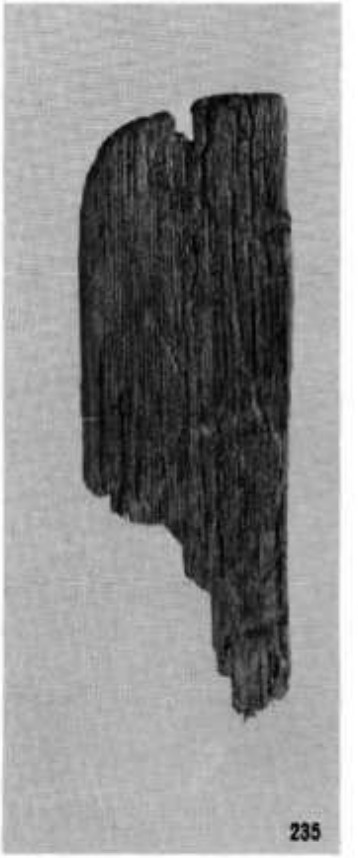


II区出土 紡織具・円形の小孔を有した板材等

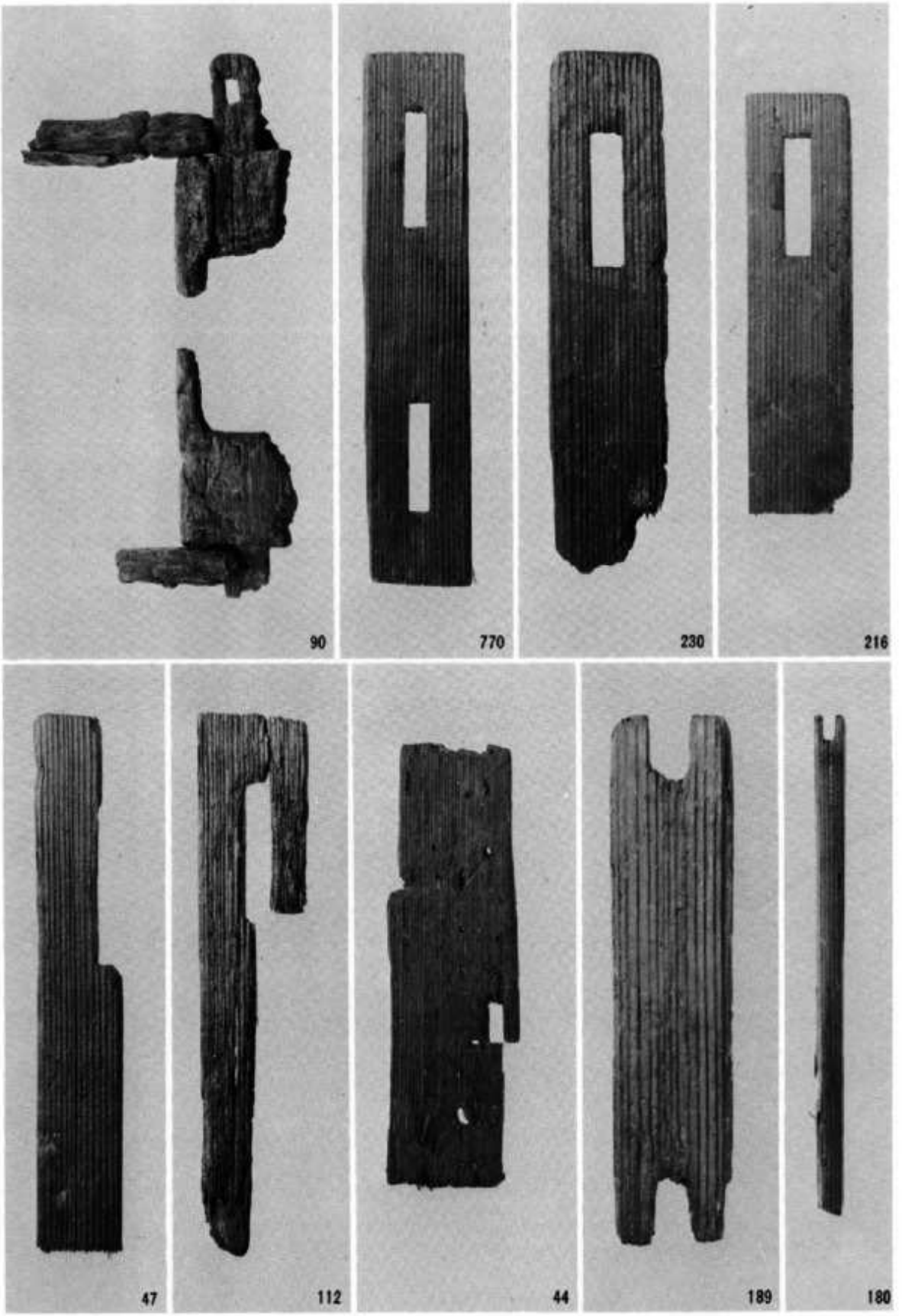




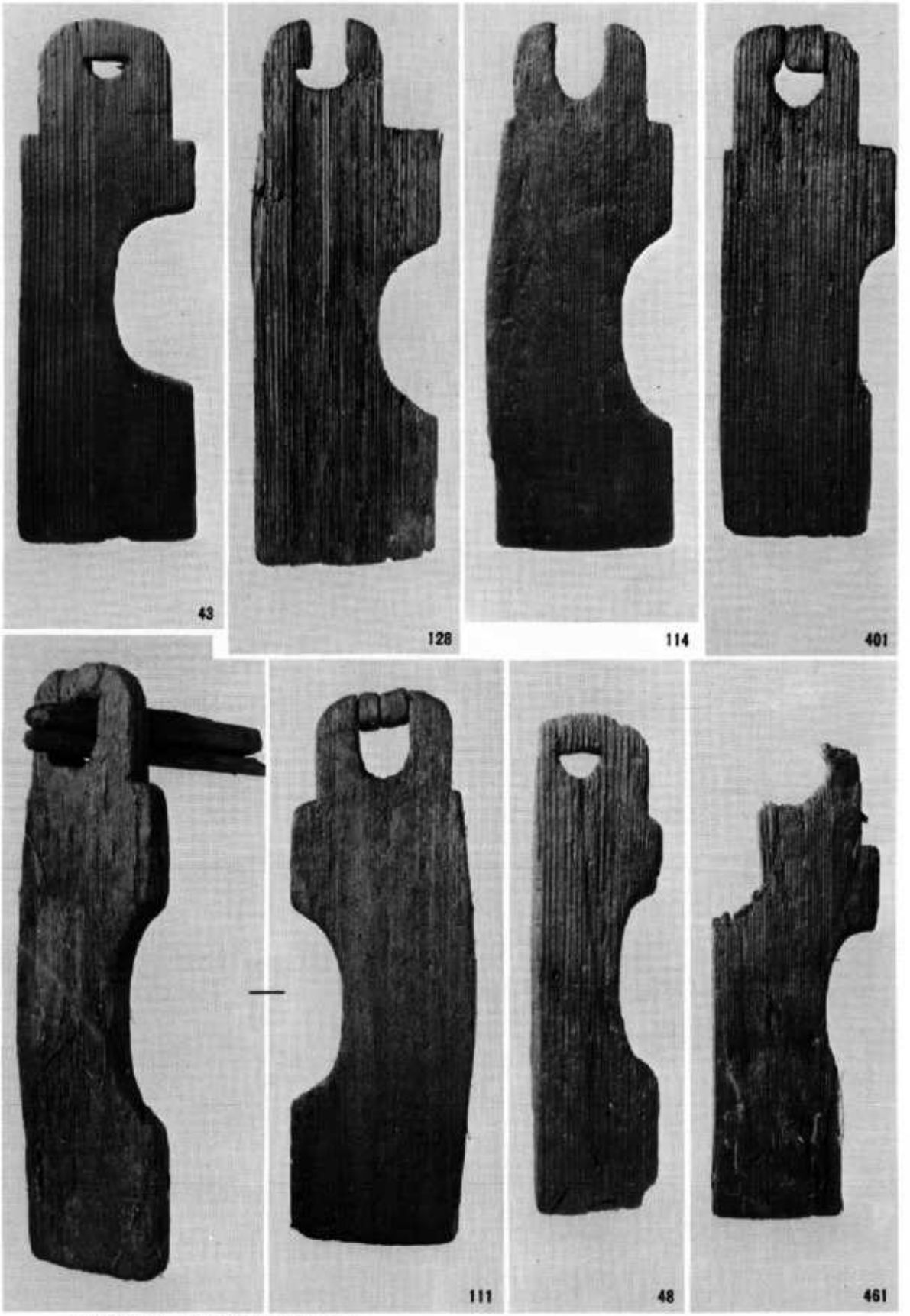
II区出土 容器・容器蓋・曲物底板



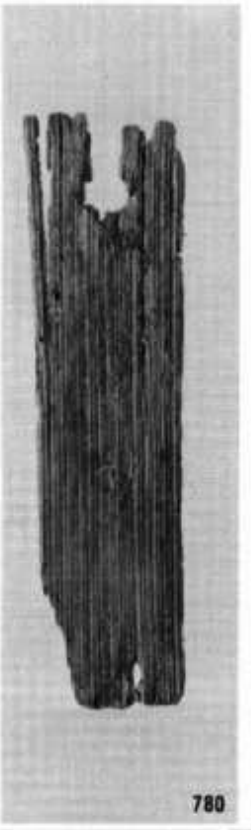
II区出土 孔を有した円形板状製品

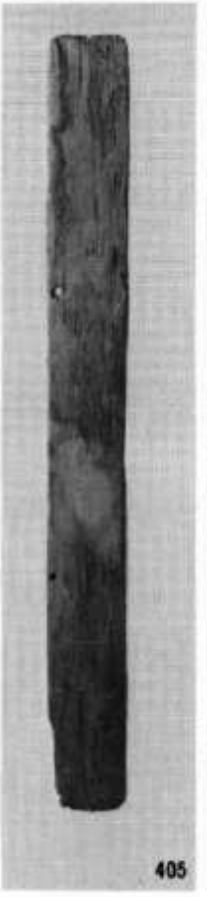


II区出土 枘・枘孔を有した板材（A類）

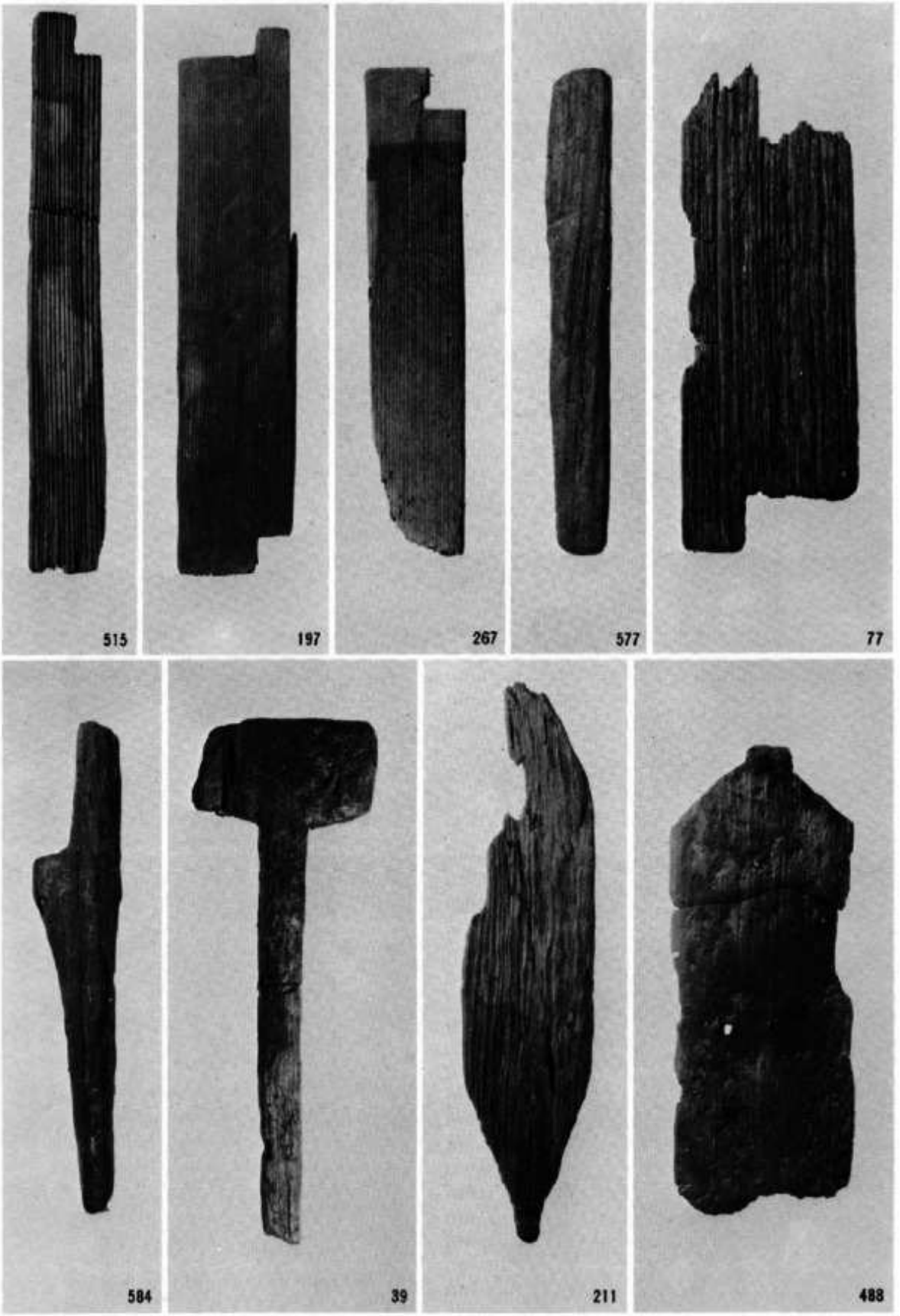


II区出土 枘・枘孔を有した板材（B類）

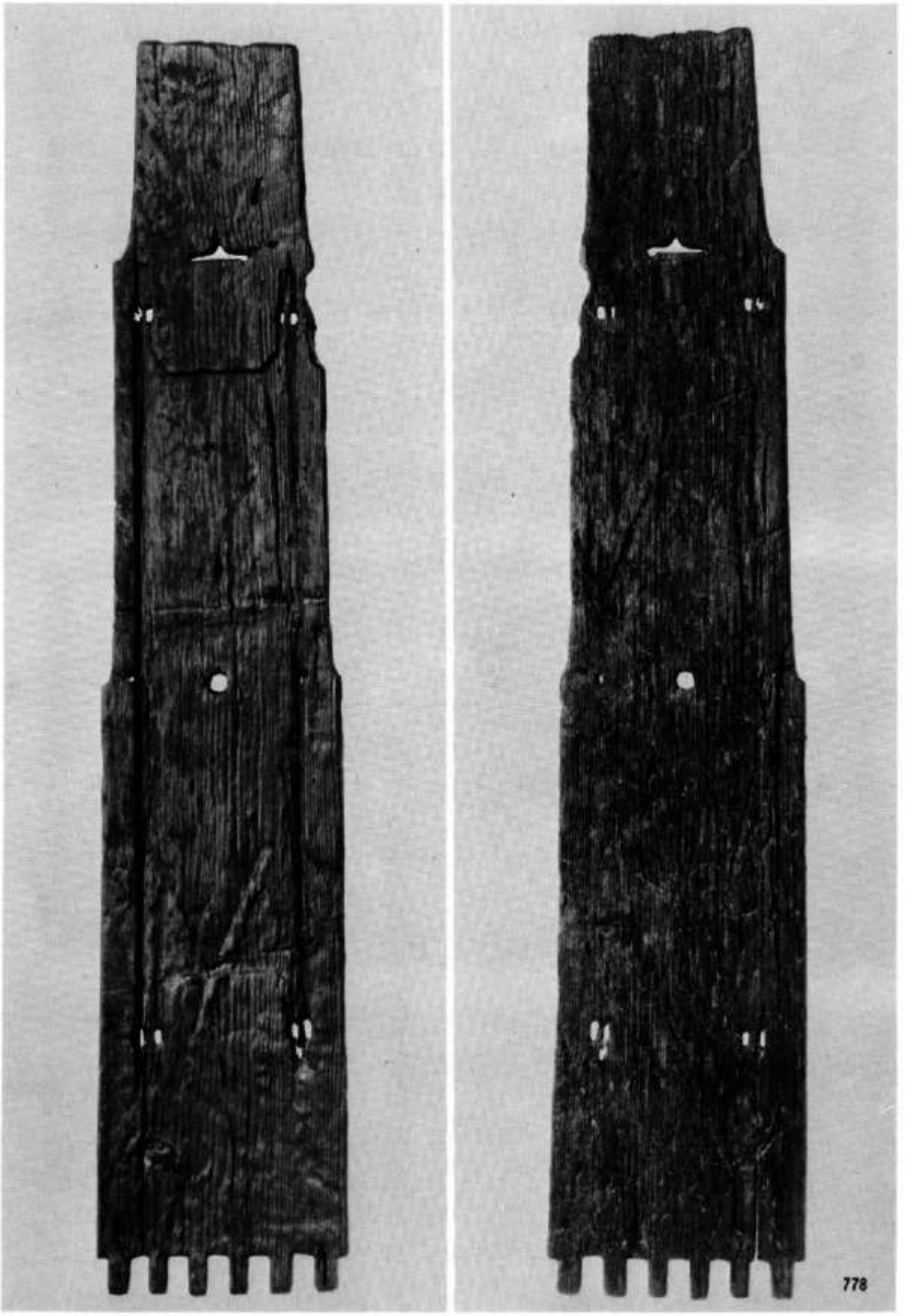




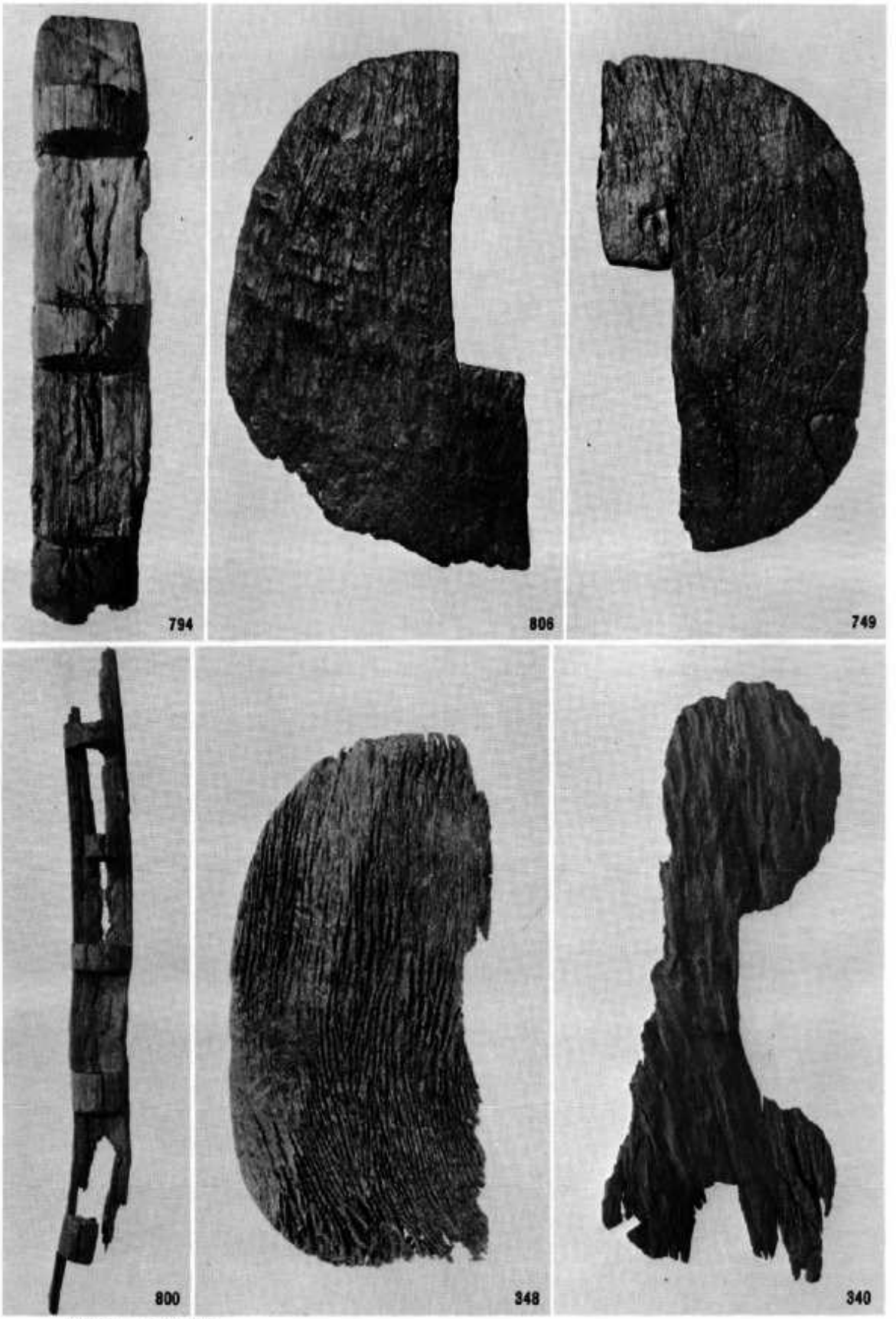
II区出土 枘・枘孔を有した板材



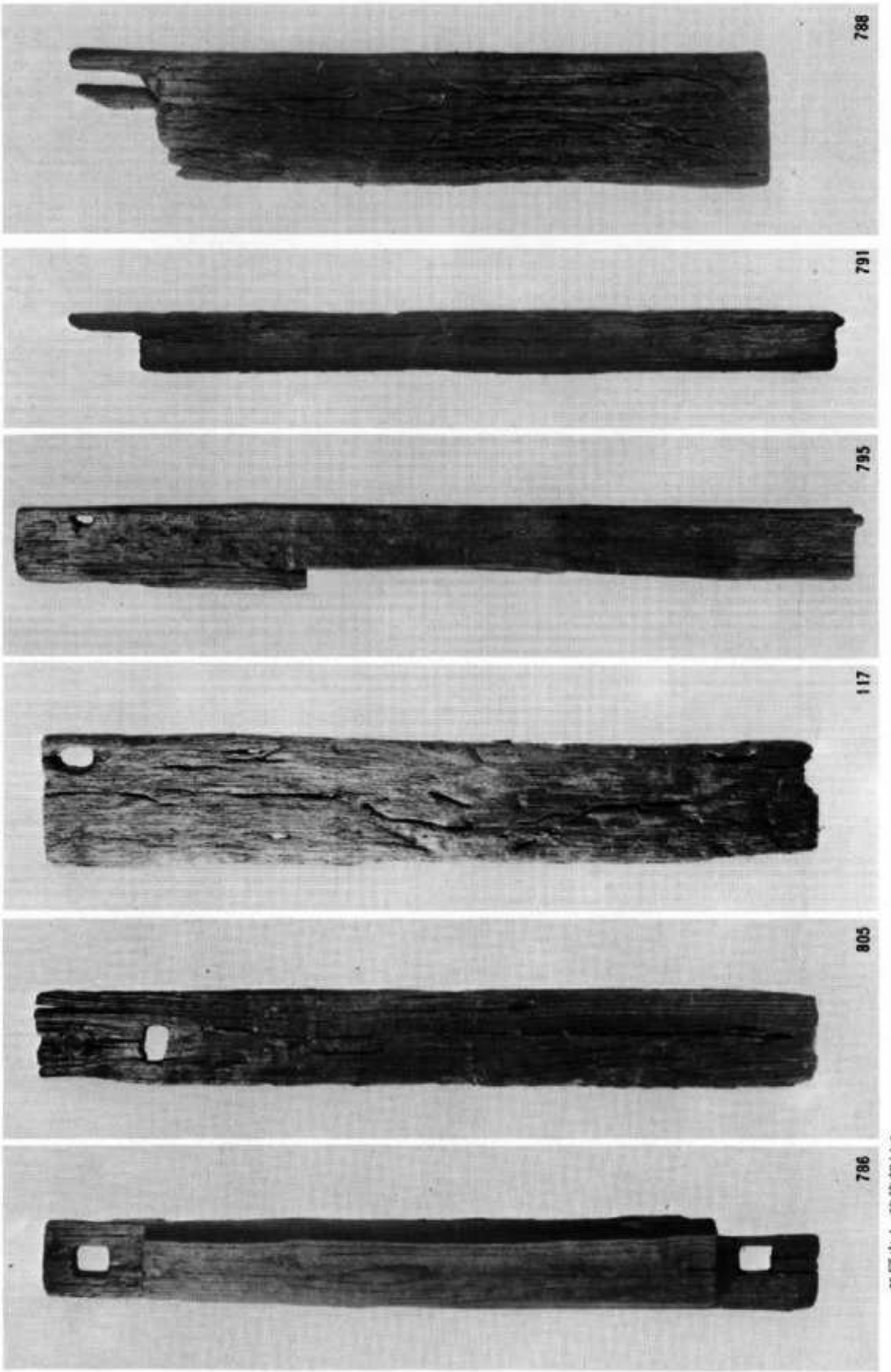
II区出土 栓・枘孔を有した板材等



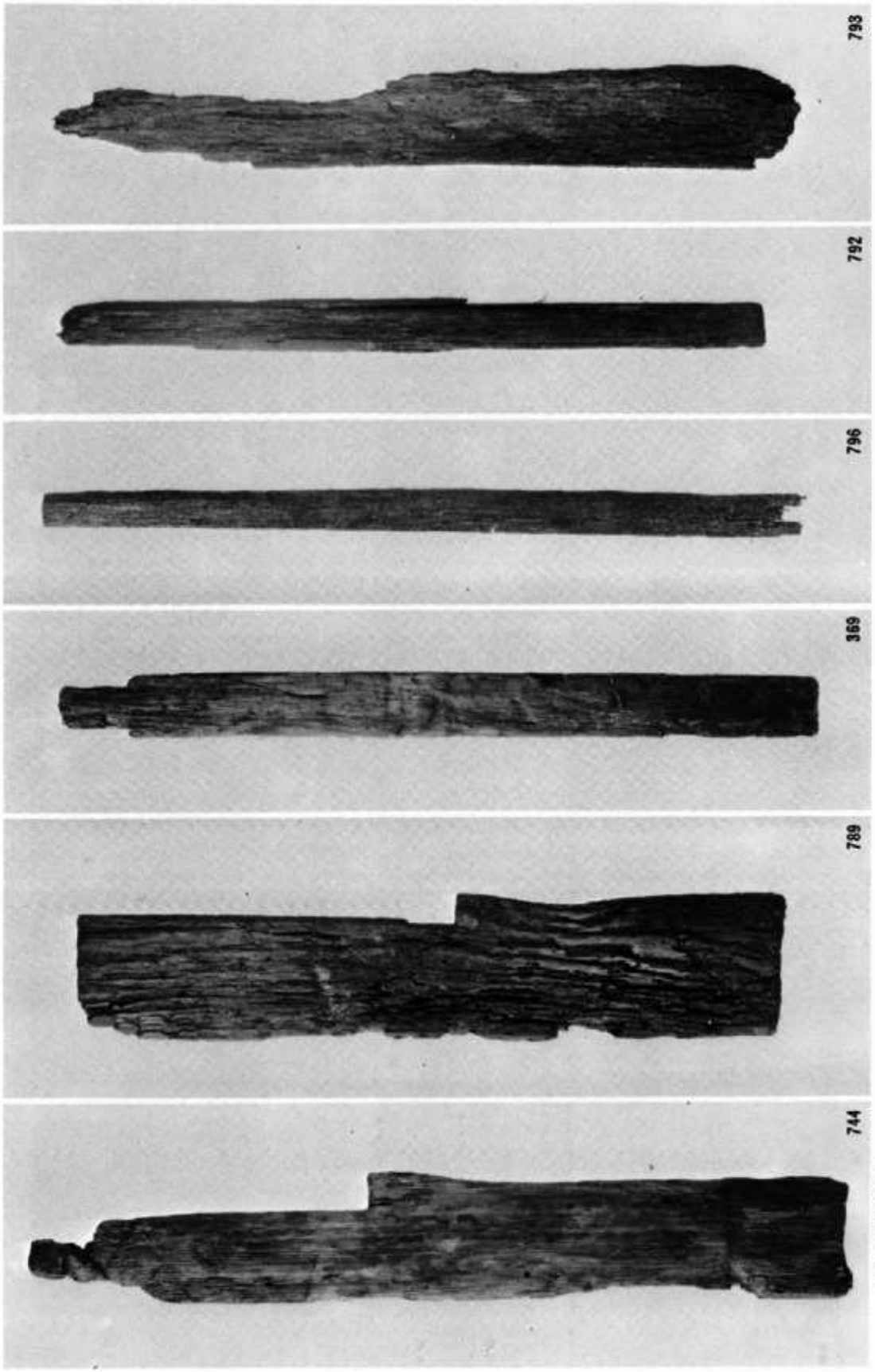
II区出土 琴1号



II区出土 建築部材 1

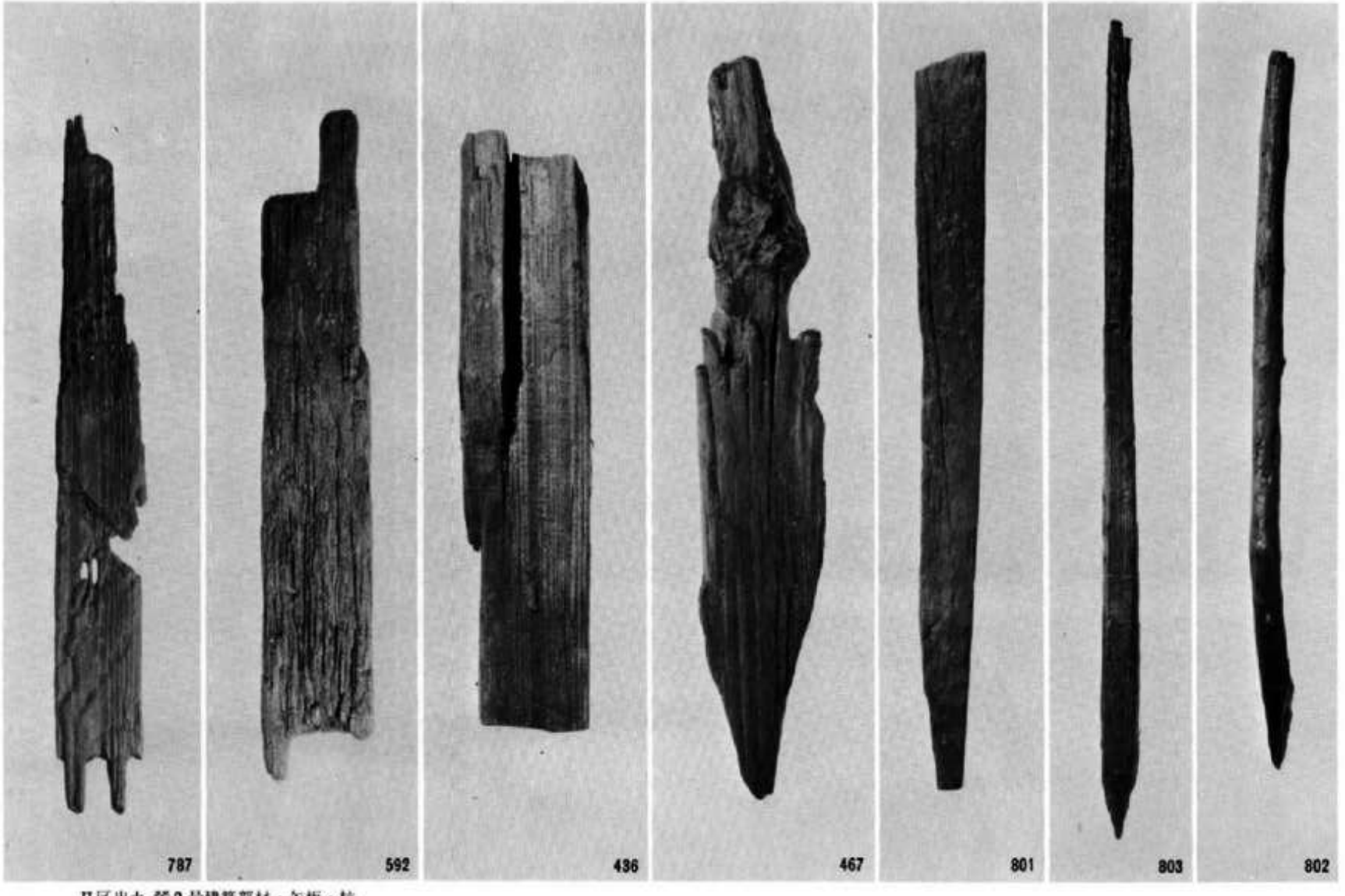


II区出土 建築部材2

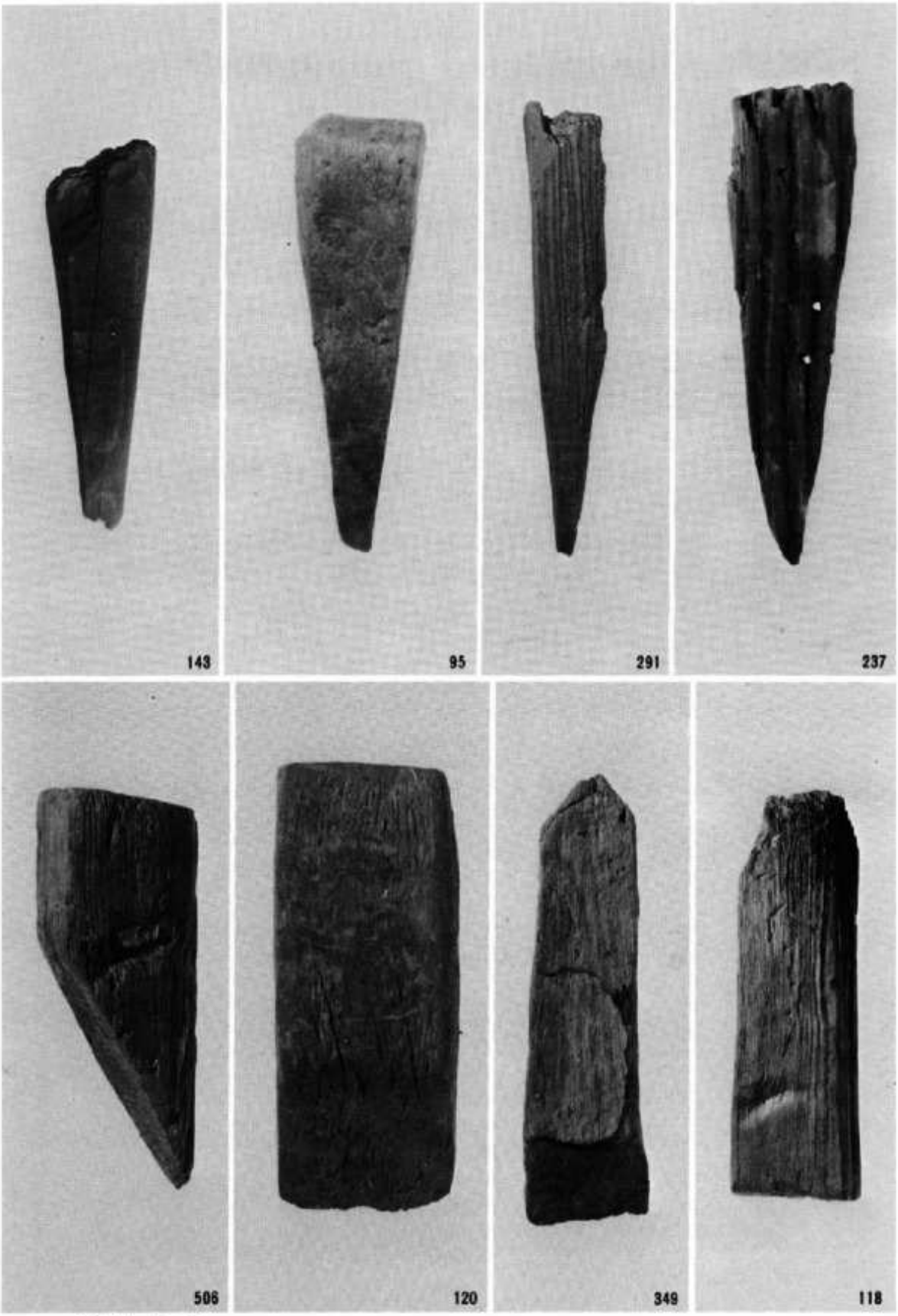


II区 建築部材3

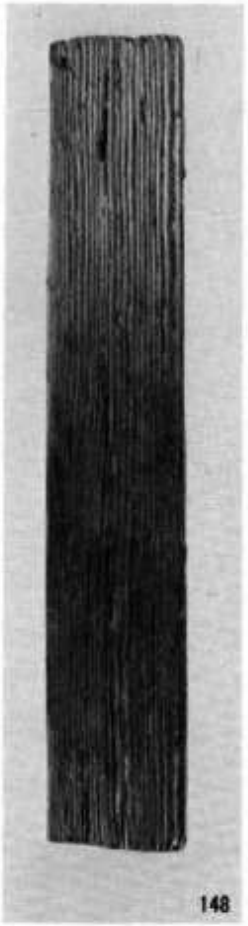
II区出土 建築部材 4

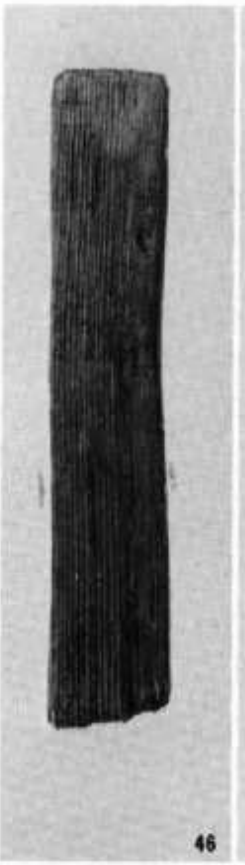


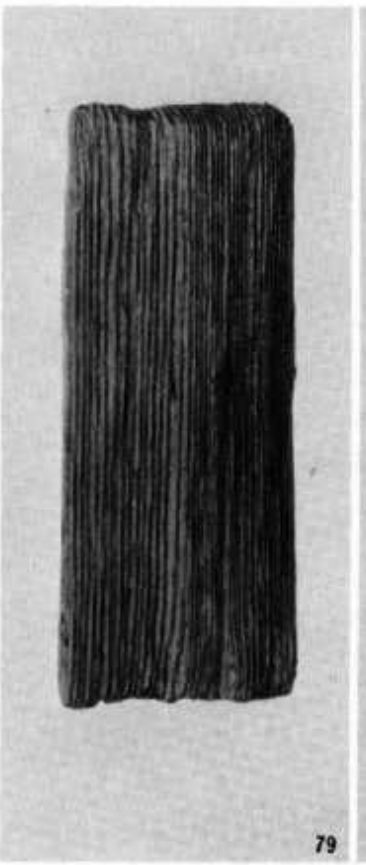
II区出土 琴2号建築部材・矢板・杭



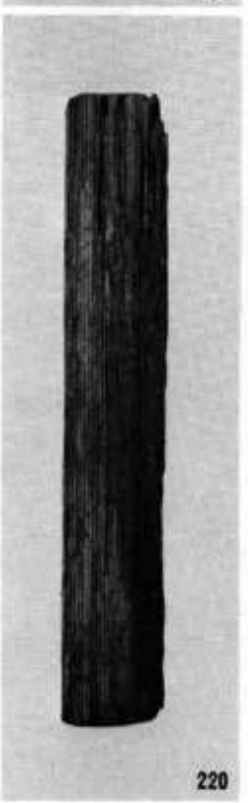
II区出土 櫛 類


148

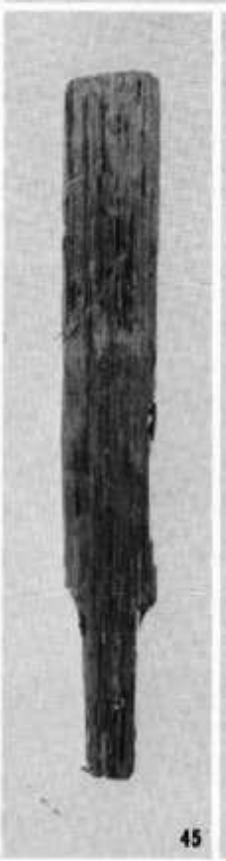

46

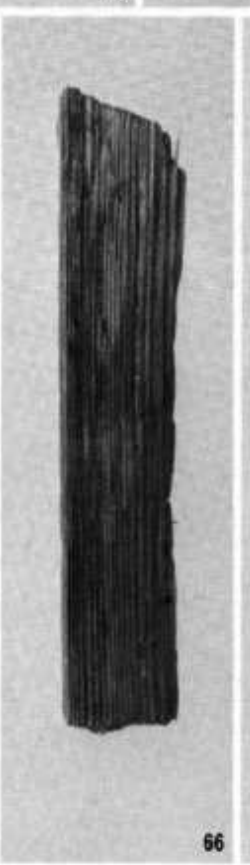

79

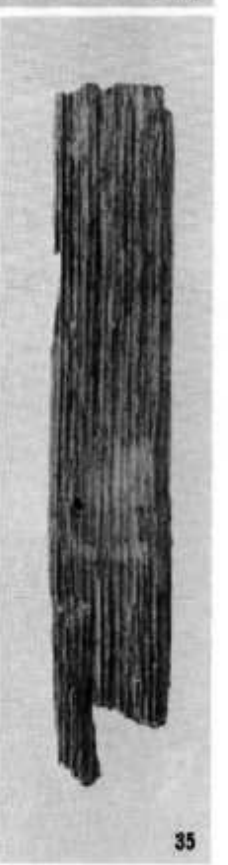
215


220

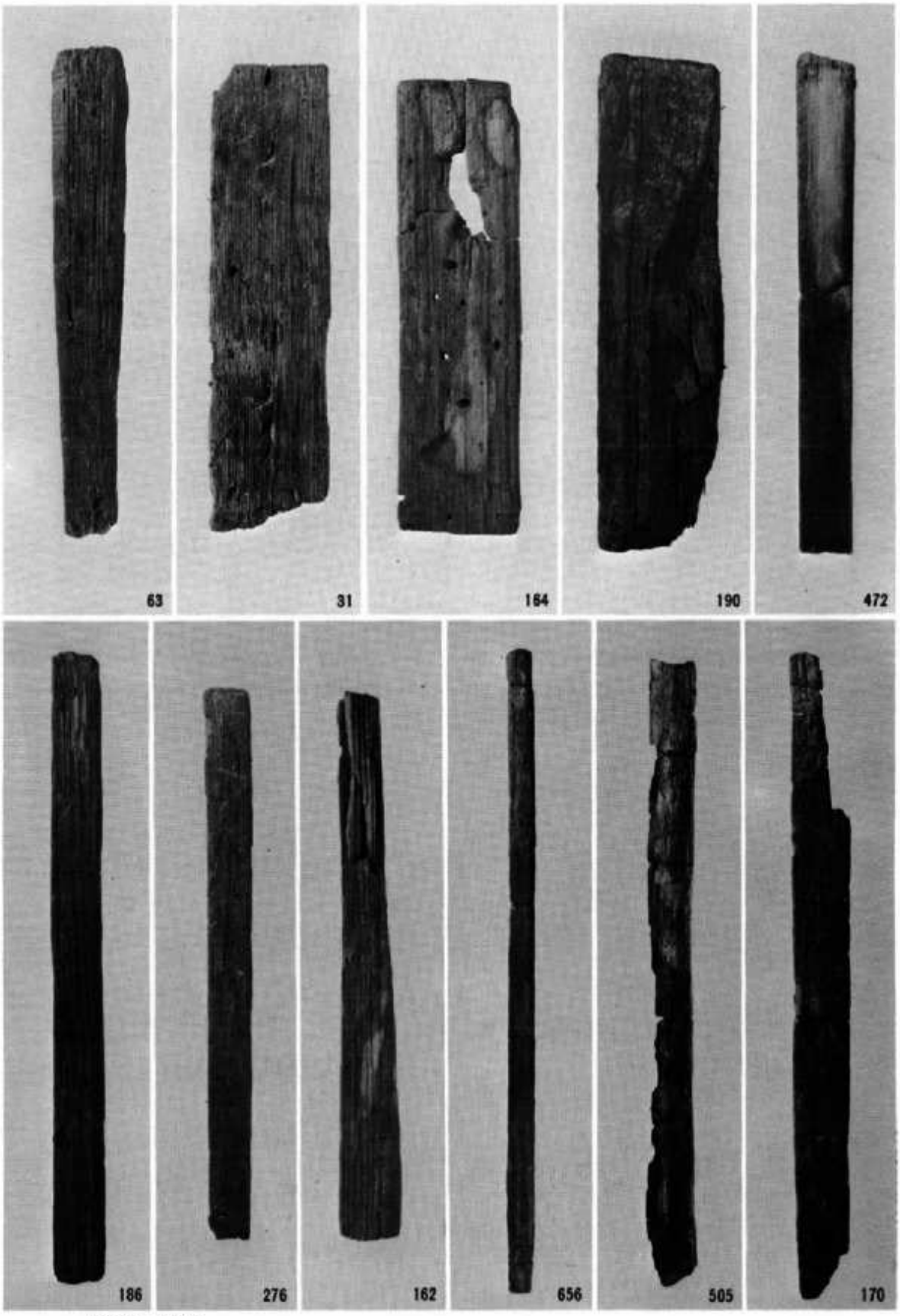
297


45

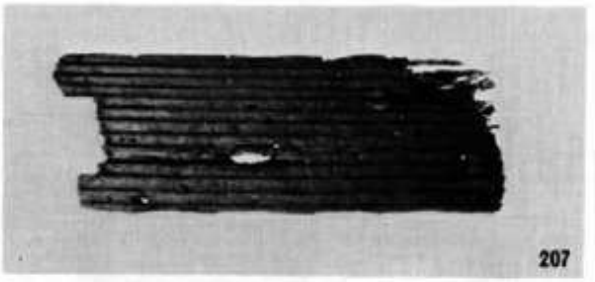

66

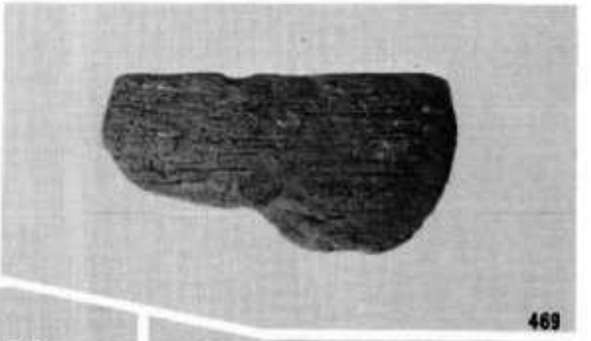

35

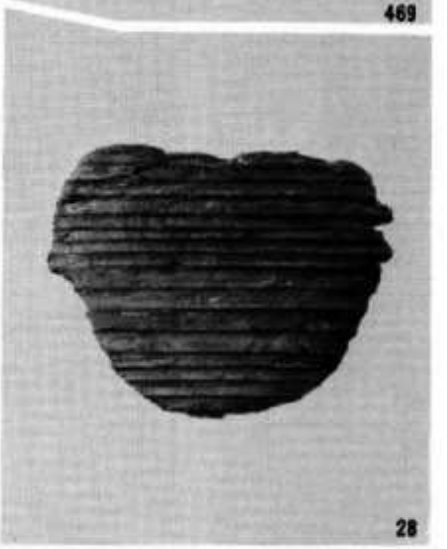
II区出土 板材1

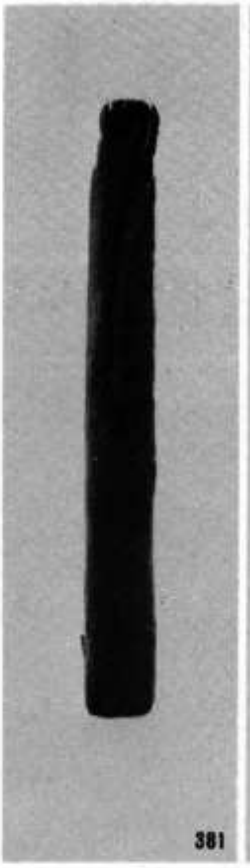


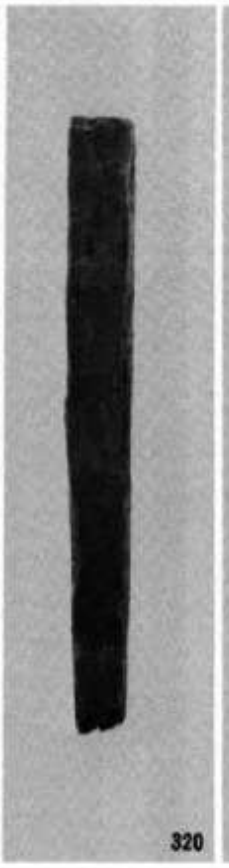
II区出土 板材2



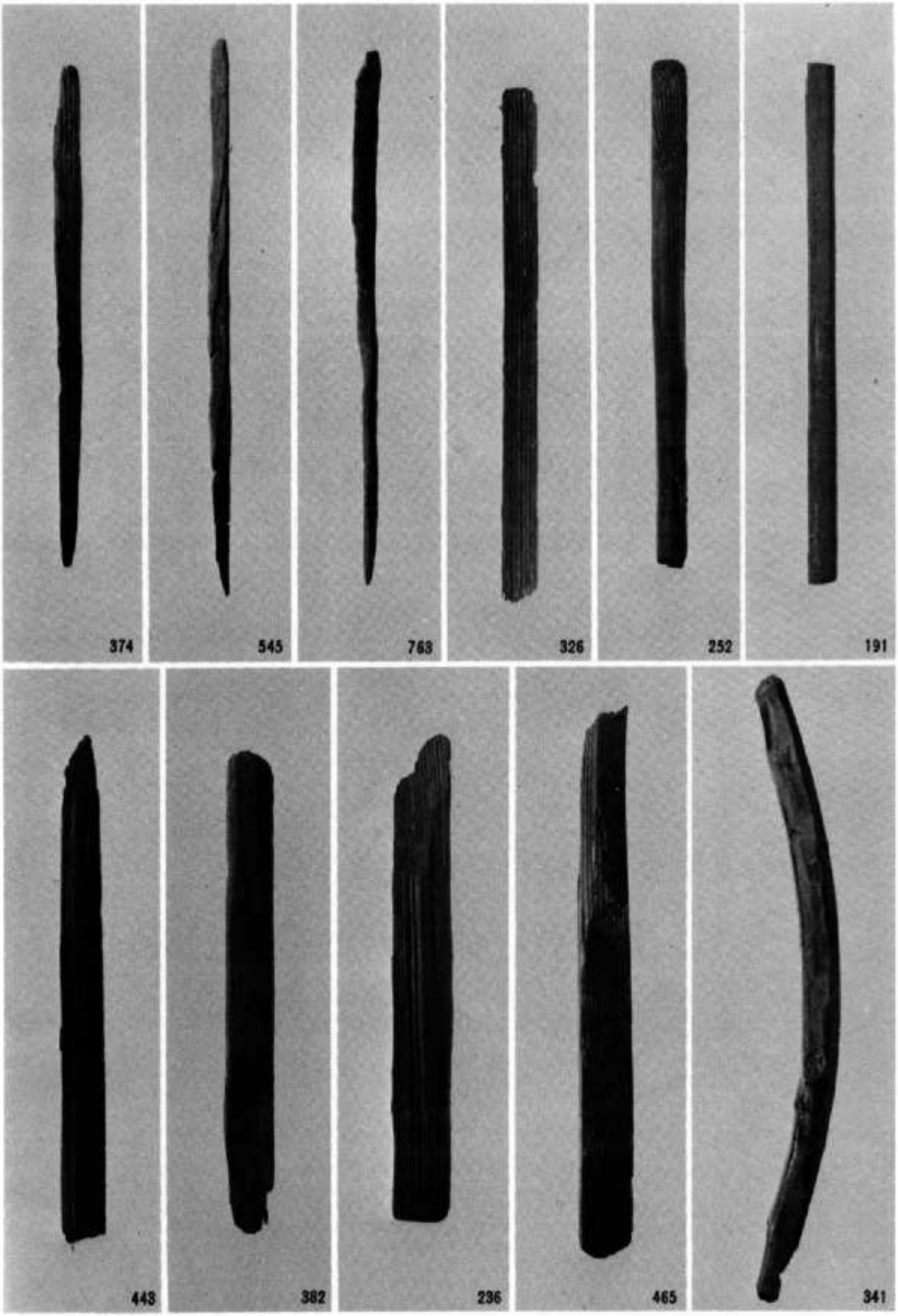




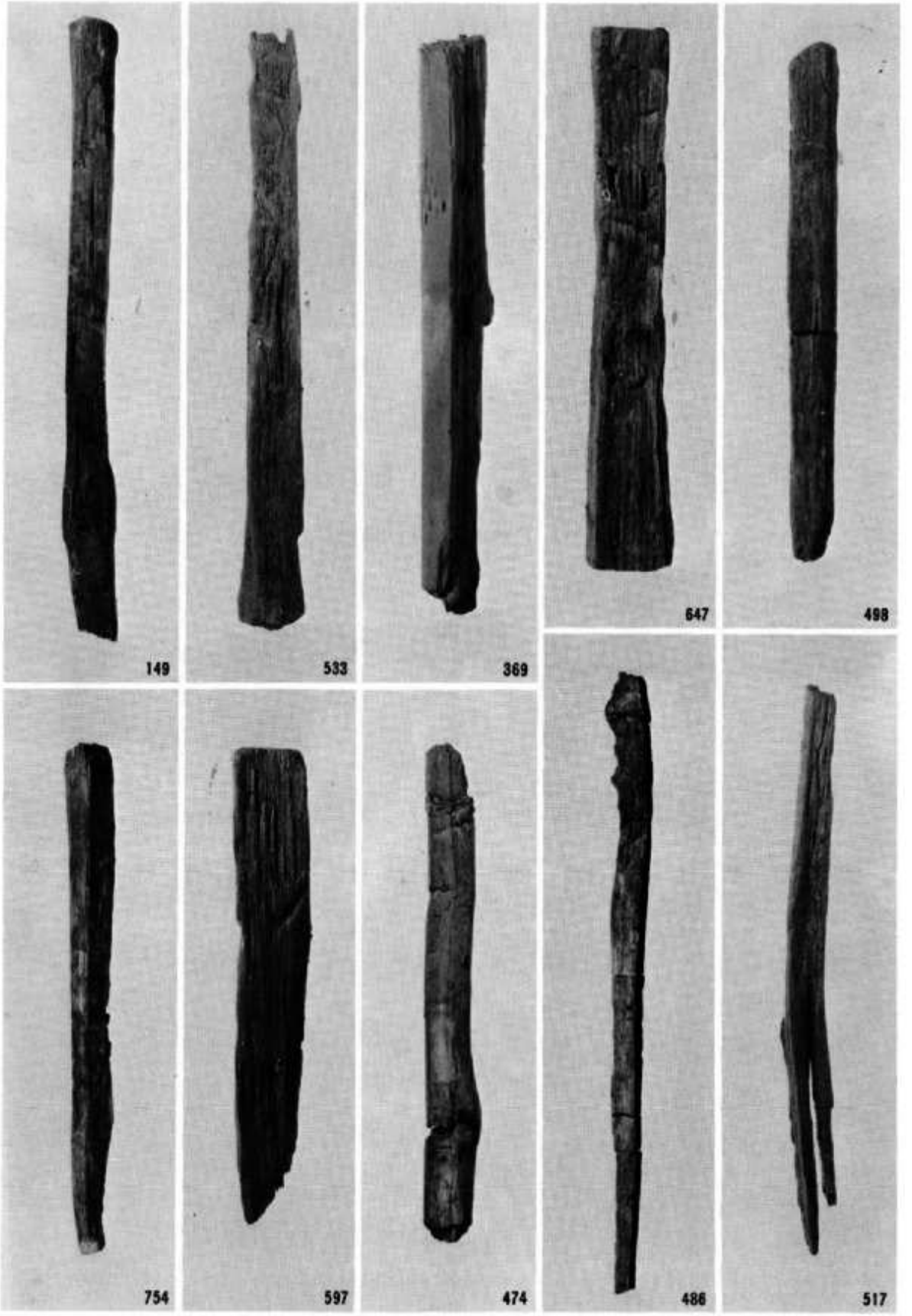




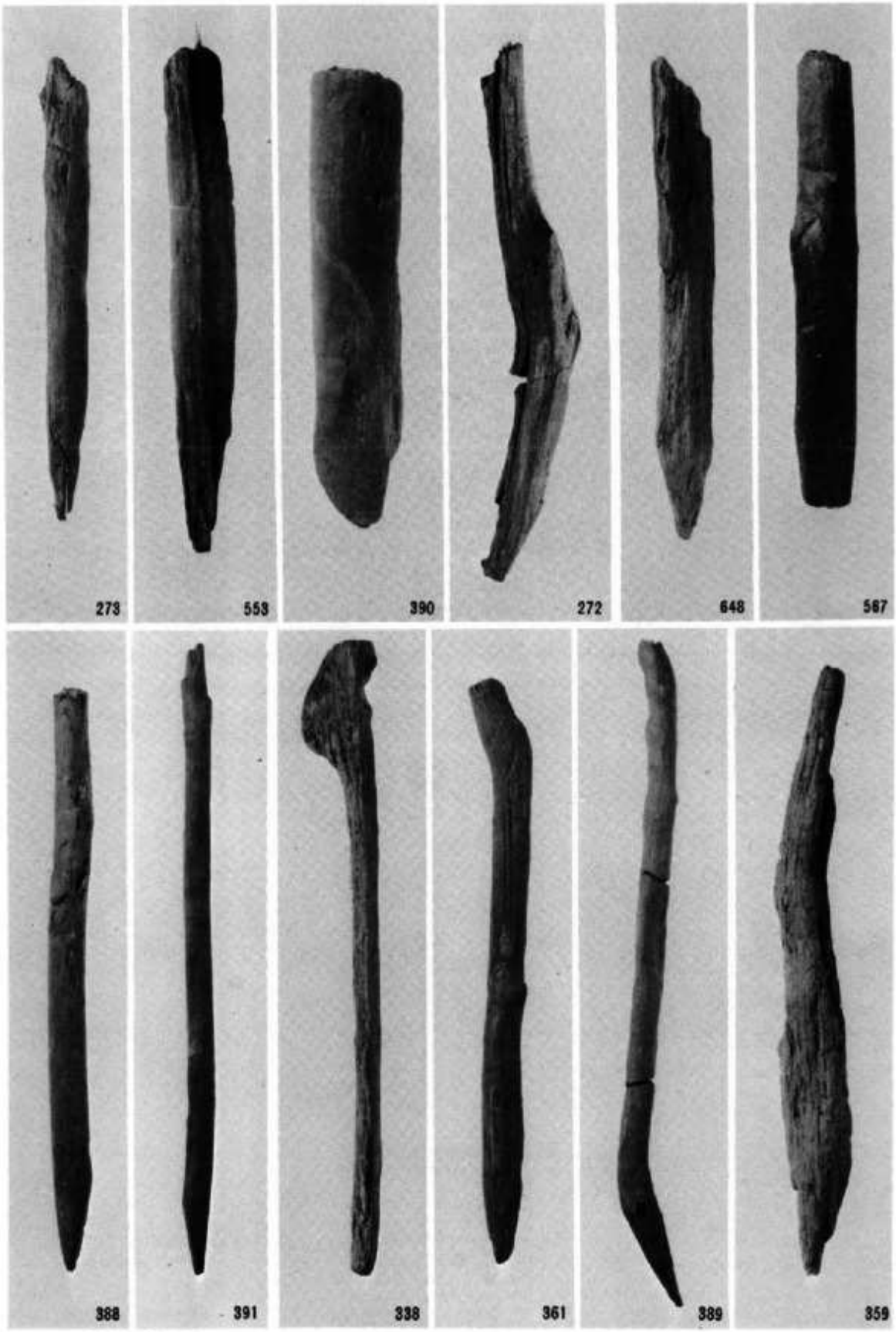
II区出土 板材等3



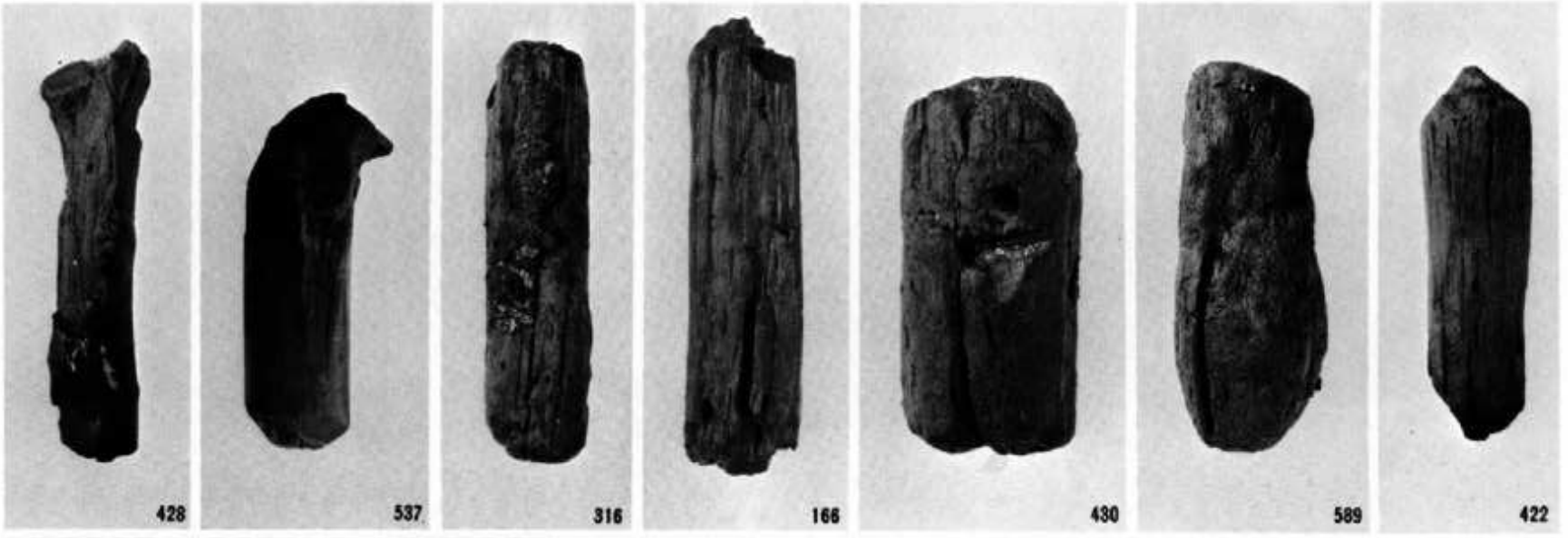
II区出土 角材1

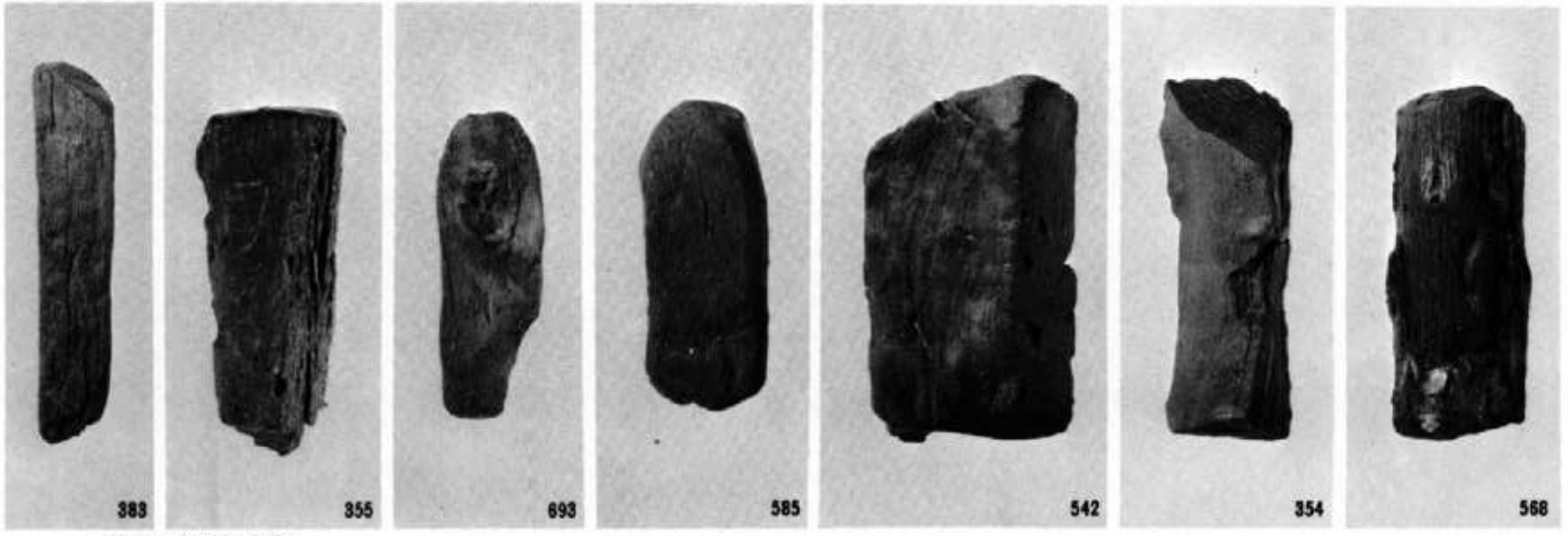


II区出土 角材2

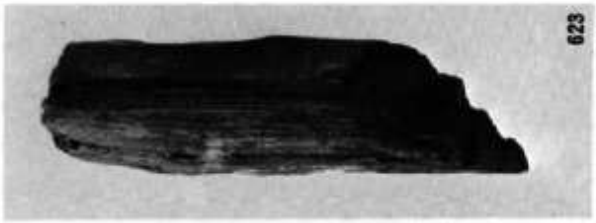


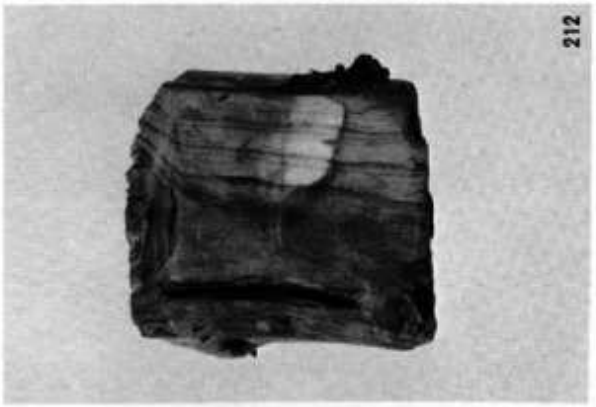
II区出土 杭 類

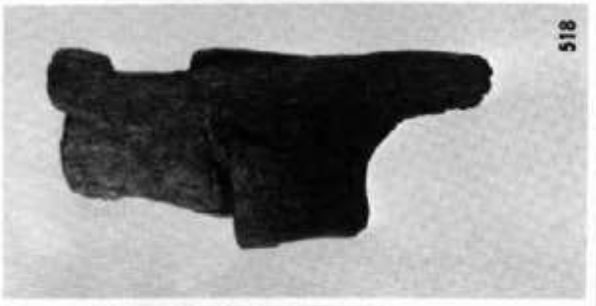


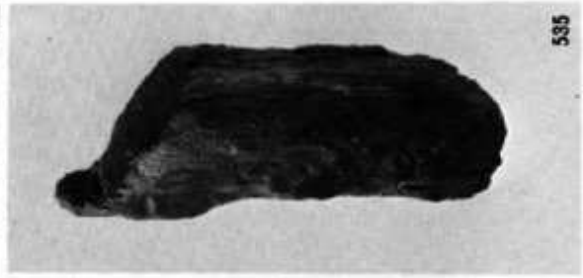


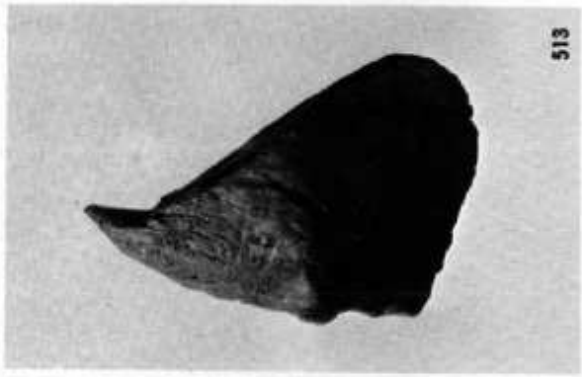
II区出土 端部加工材1

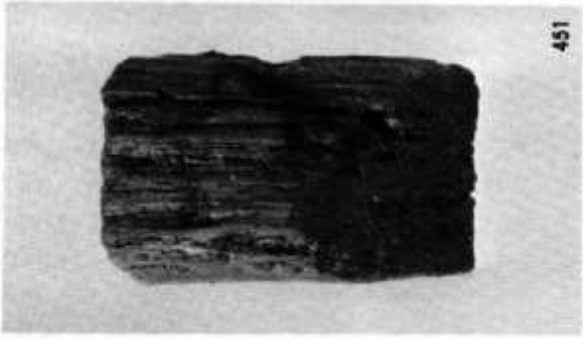


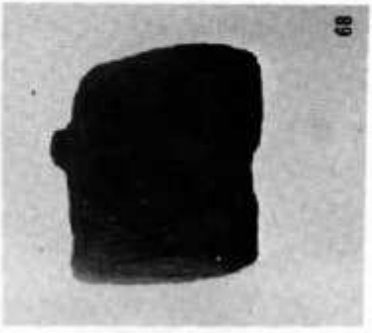


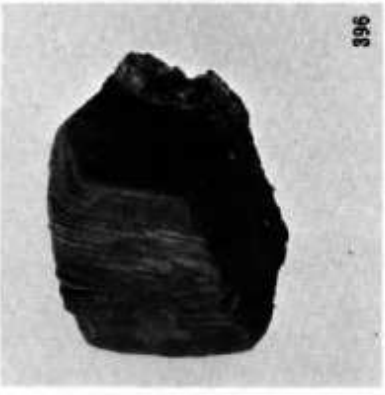


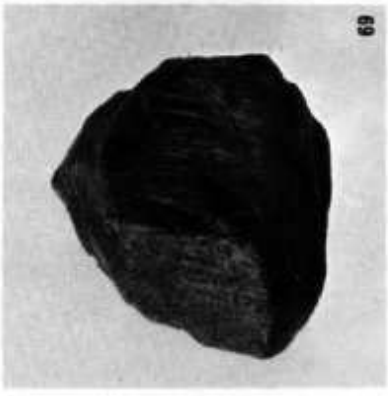




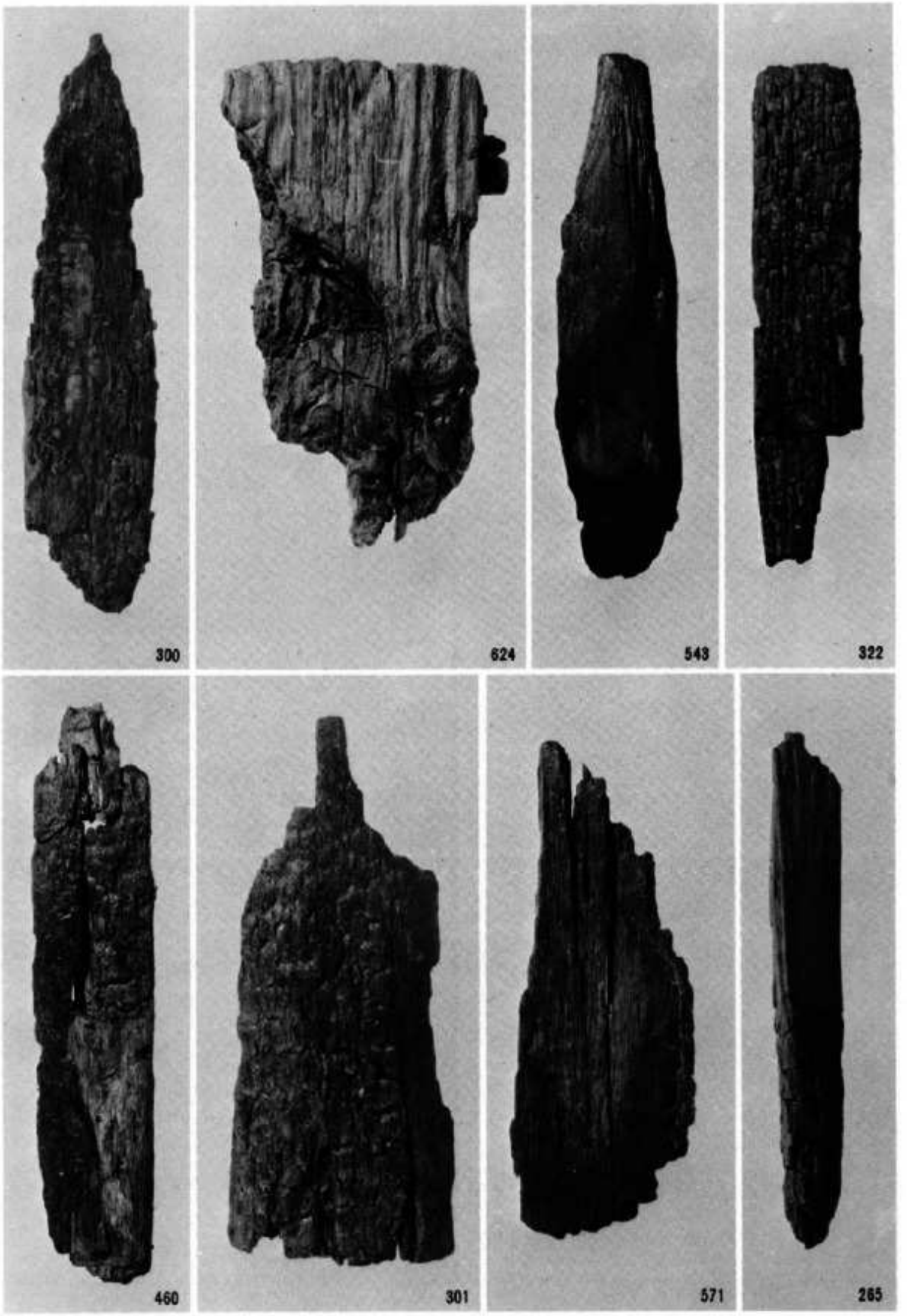




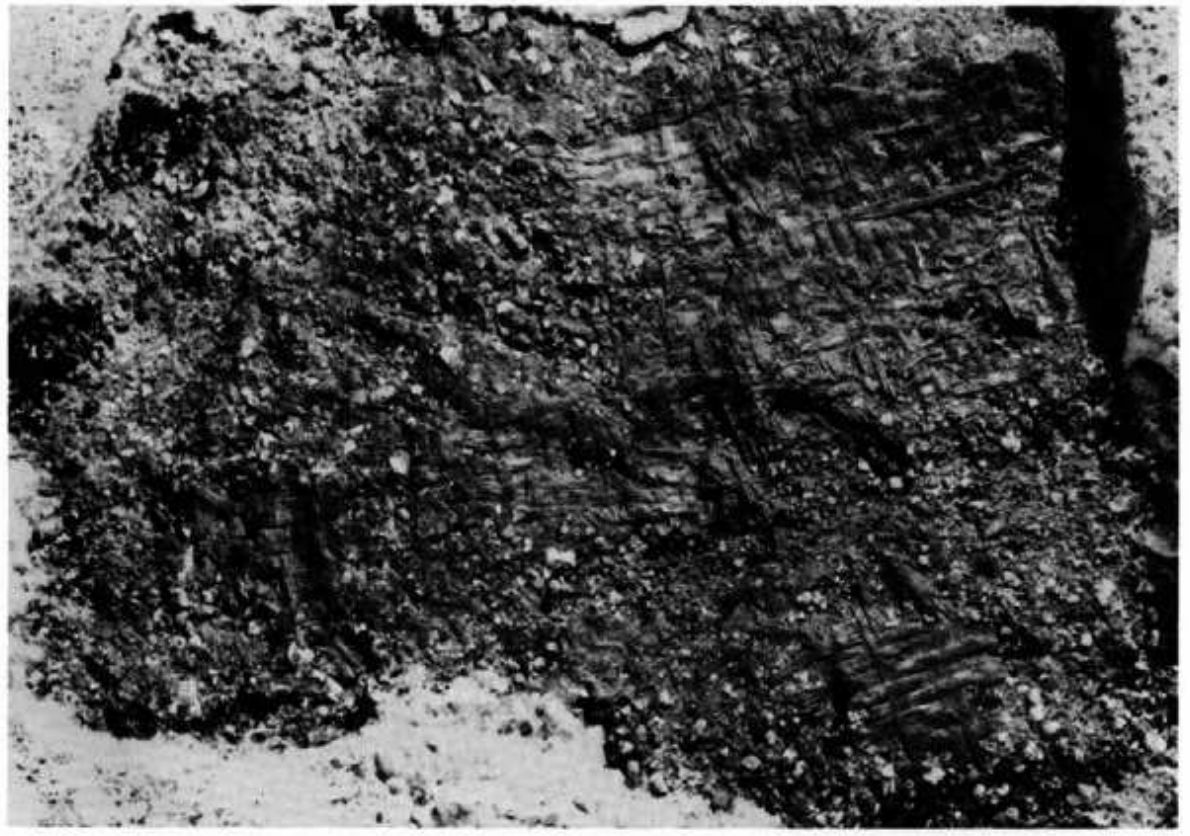




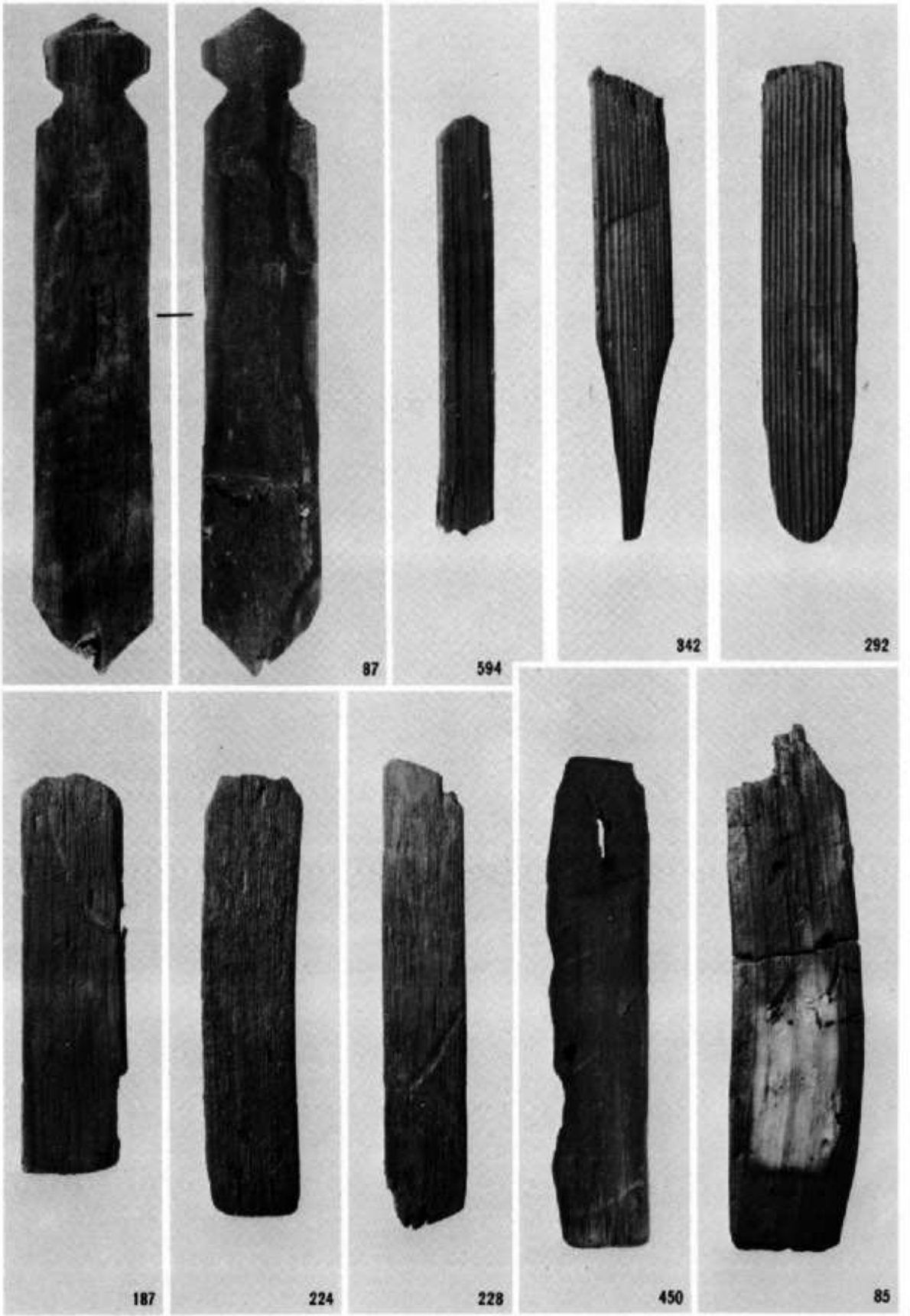
II区出土 端部加工材 2



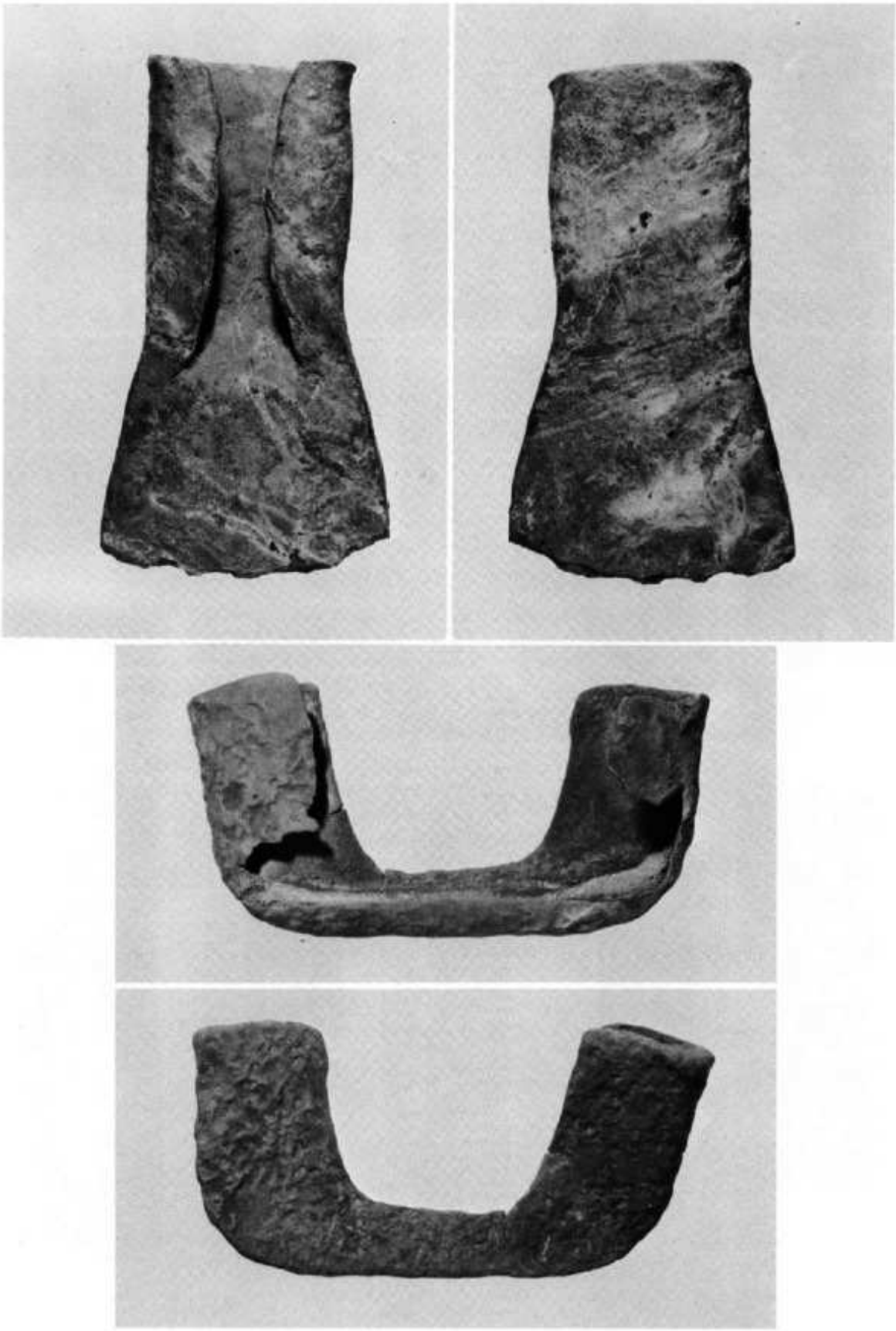
II区出土 焼けた材



II区出土 瓶（下は実大）



II区出土 木簡及び短冊形木製品



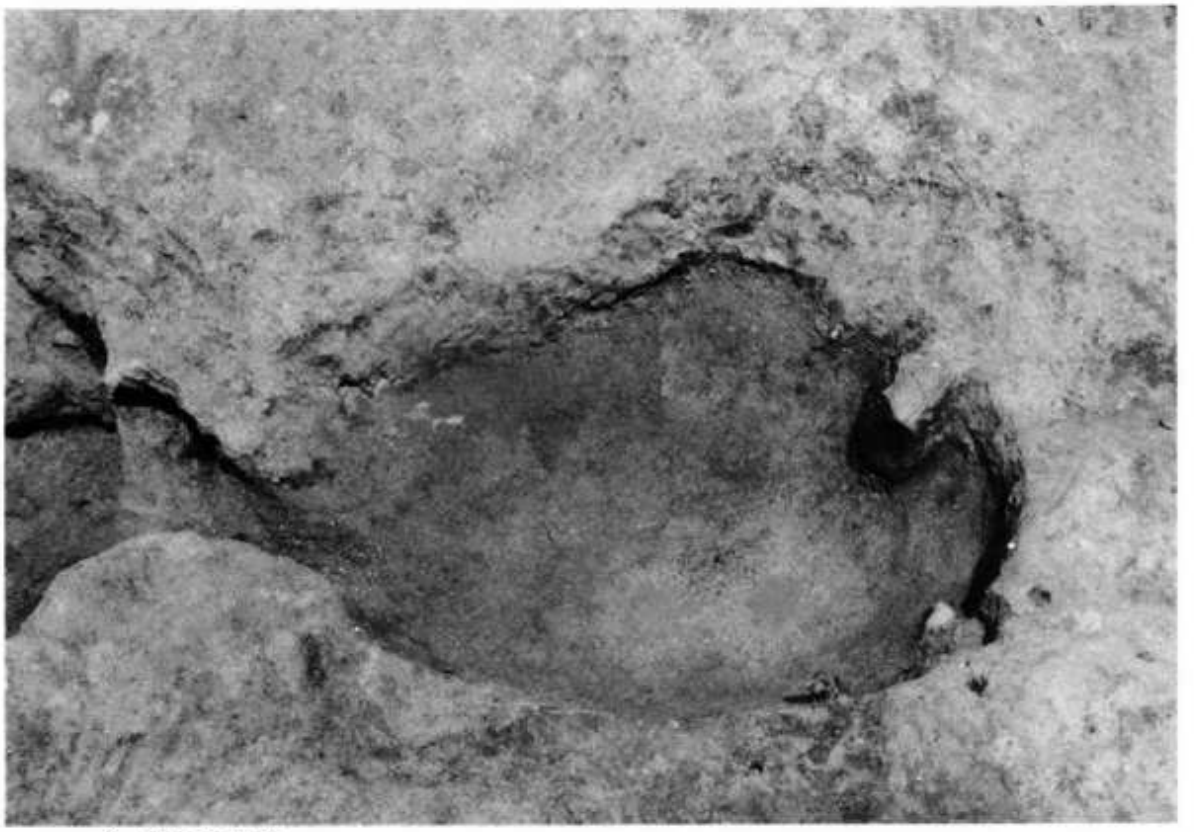
II区出土 袋状鉄斧・銅鋤先

II区出土 銅矛片・勾玉

上　II区 1号土壙

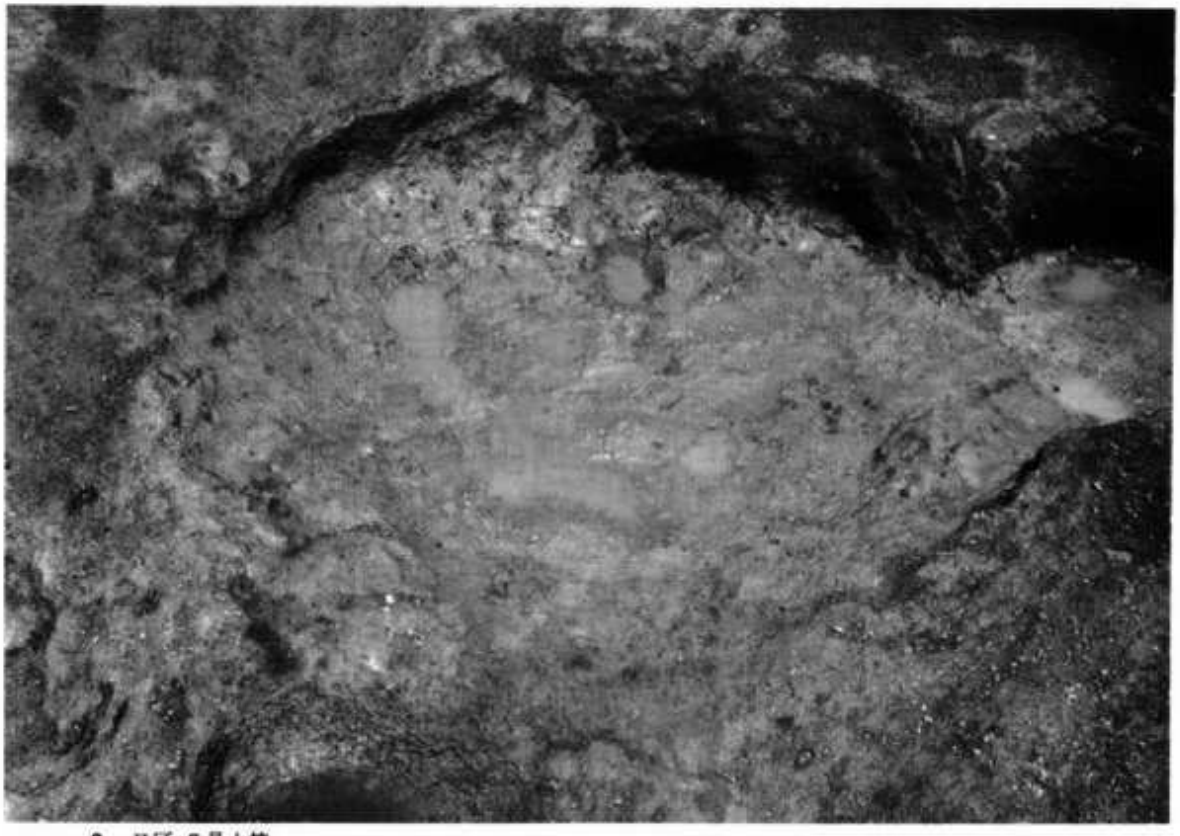
II区 4～7号土壙群（北から）

1　II区 4号土壙



2　II区 5号土壙

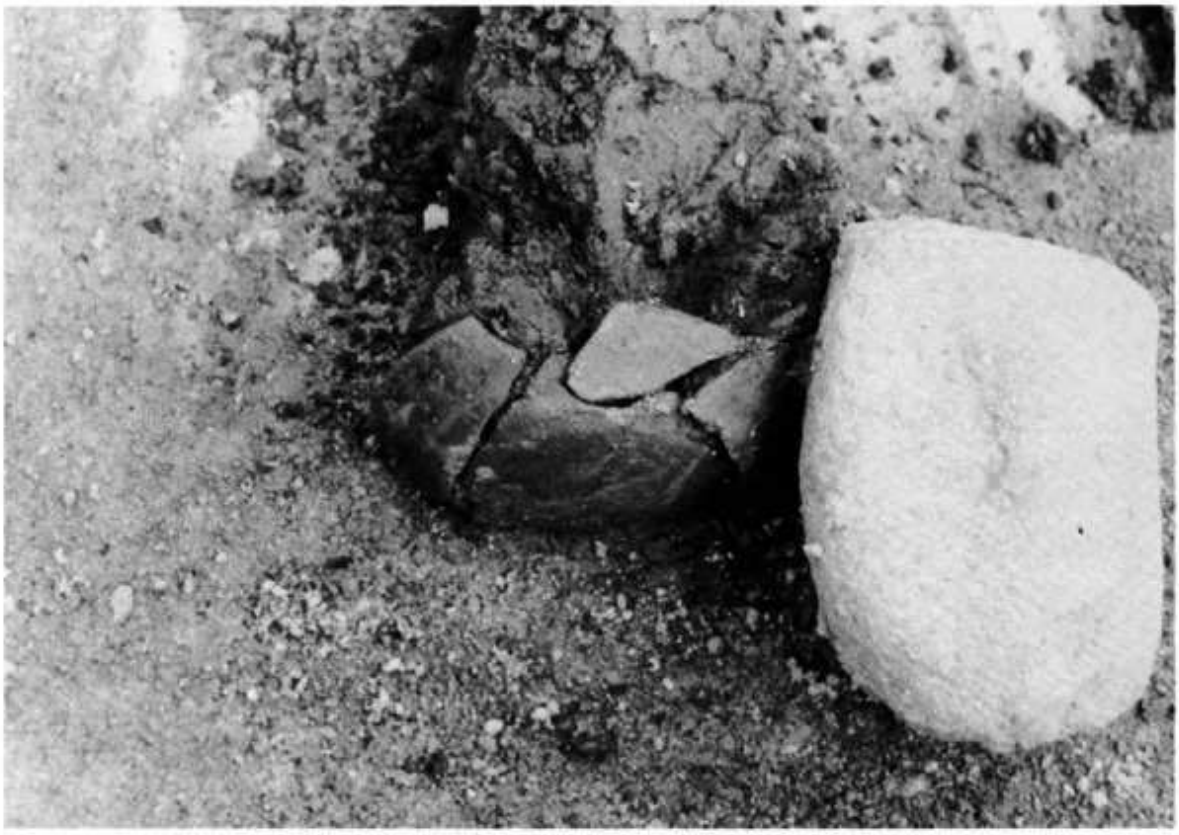
1　II区 6号土壙



2　II区 7号土壙

1　II区 2号土壙

2　II区 2号土壙内遺物出土状況



1　II区 2号土壙内遺物出土状況（墨書土器）

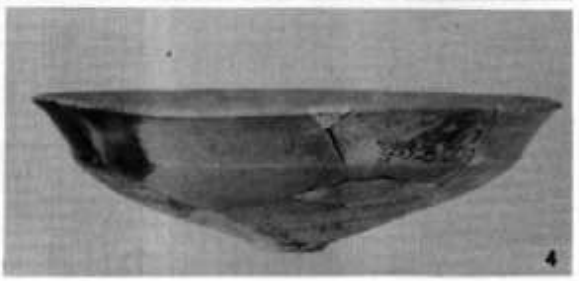
2　II区 2号土壙内遺物出土状況（下駄）

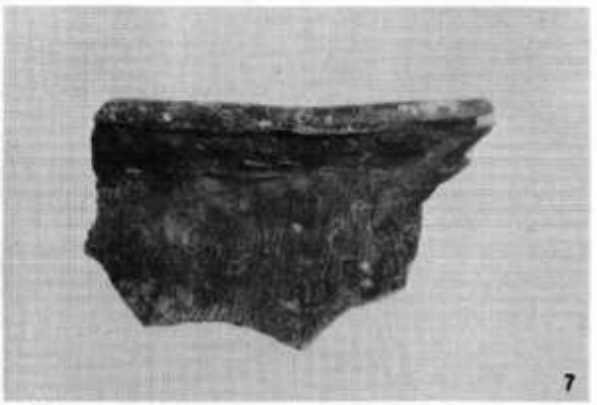
1　II区 2号土壙内遺物出土状況（瓶容器）

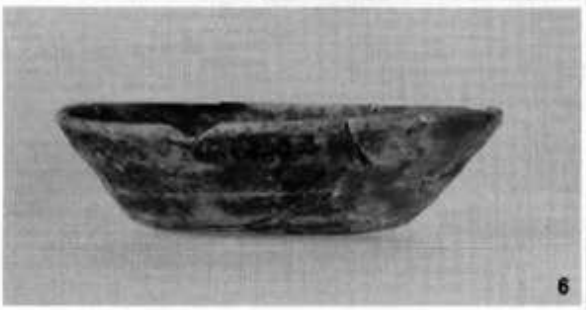
2　II区 3号土壙

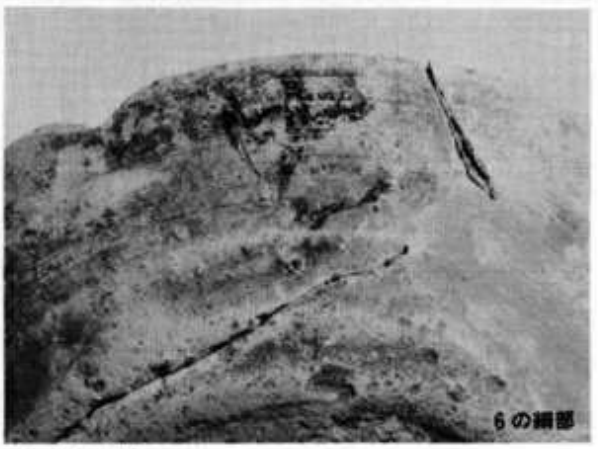
1　II区 2号建物跡（南から）

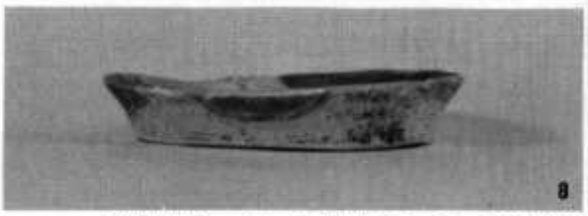
2　II区 pit内の柱痕



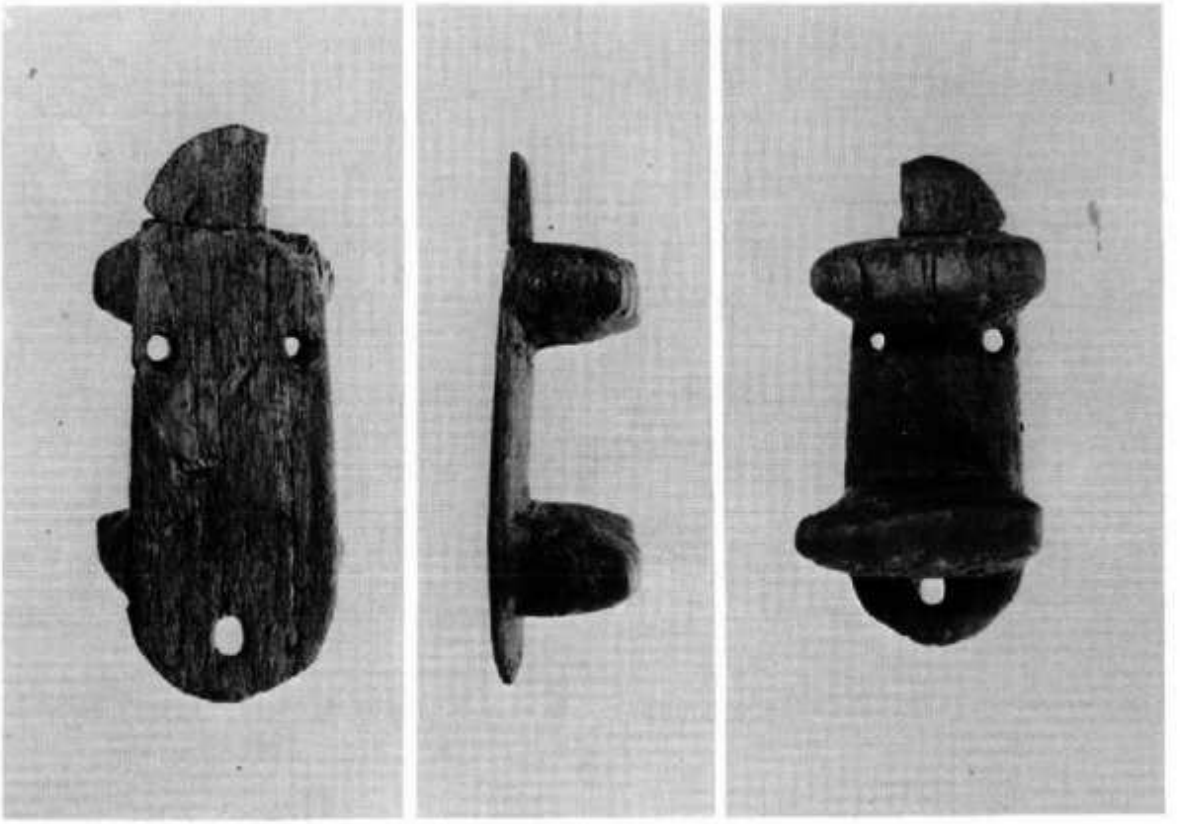




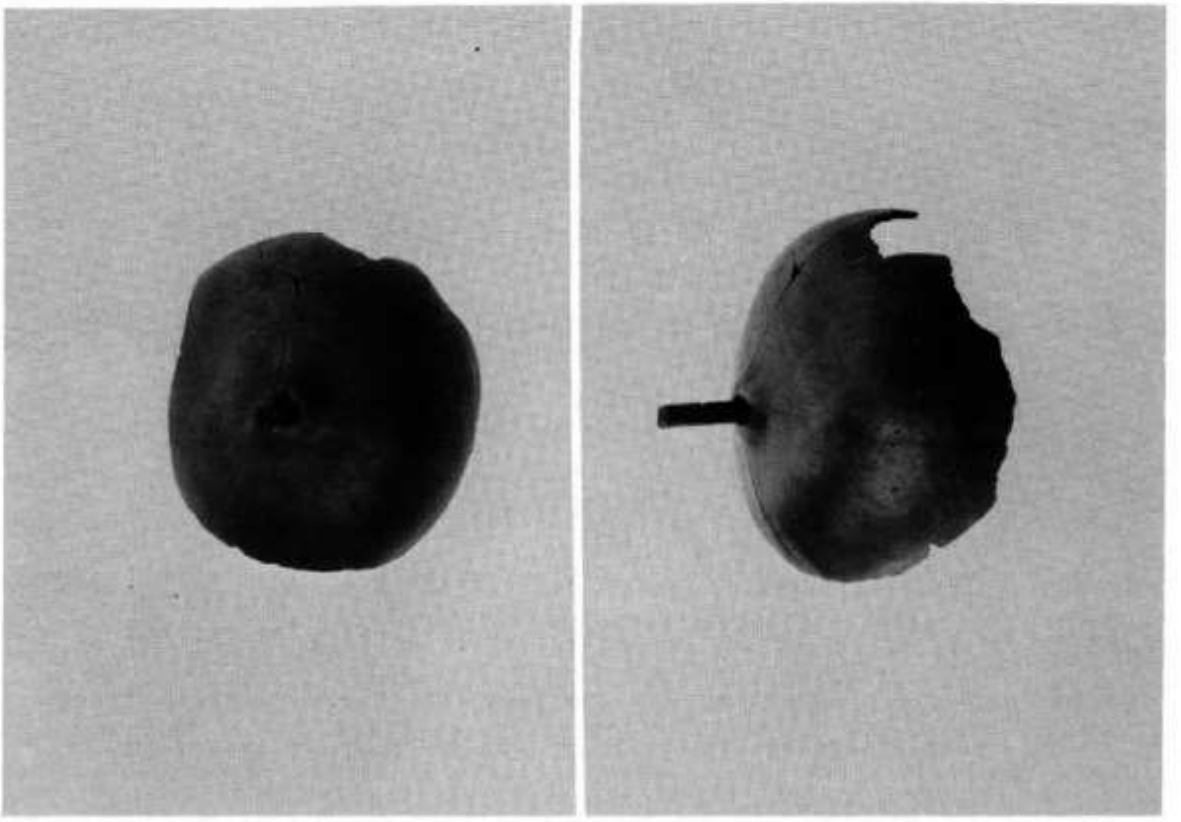




1号土壙(1～4)・2号土壙(5～7)・2号建物(8)出土土器

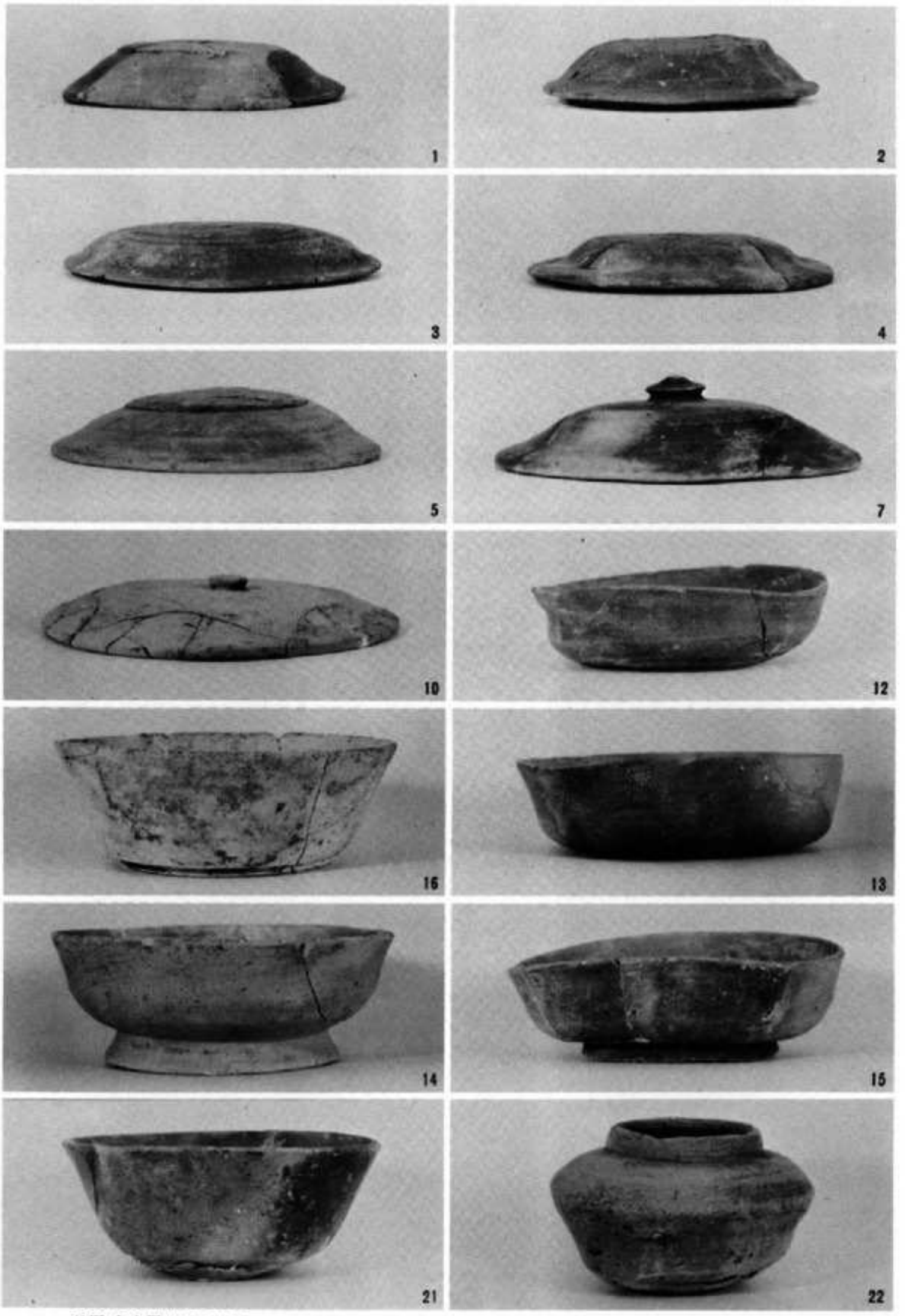


1　II区 2号土壙出土下駄

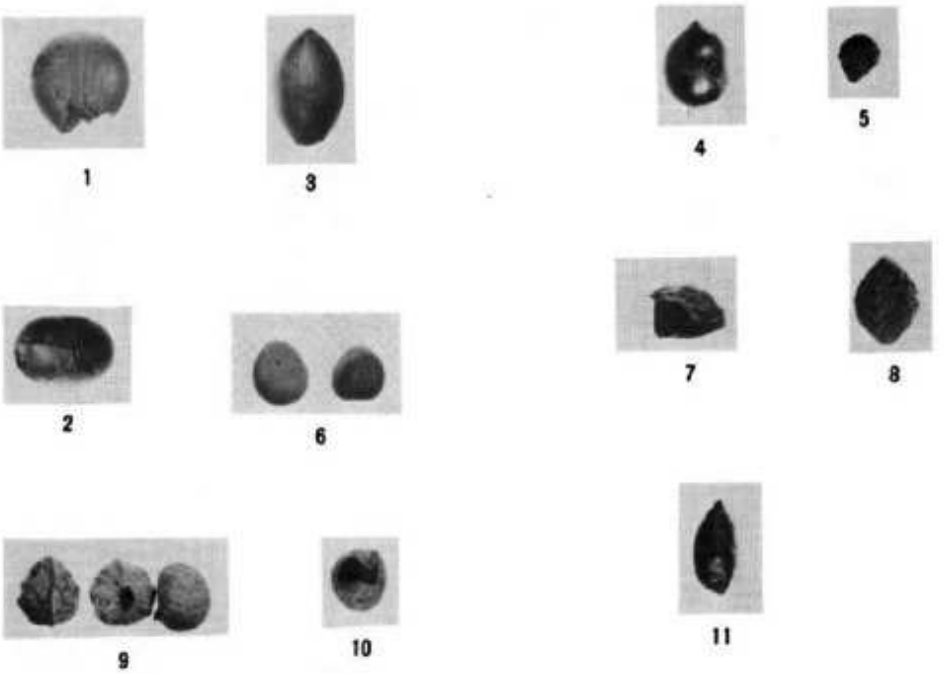


2　II区 2号土壙出土瓢容器

II区 包含層出土弥生式土器



II区 包含層出土須恵器



II区 大溝出土種子類

図 版 説 明

II区C6　7層B－3 780414より の試料の一部

1．エゴノキ（*Styrax japonica* S. et Z.）の双生で両個体のくつついたまま出土したもの。（×1）

2．仝上を上より見た状態。（×1）

3．ハクウンボク（*Styrax obassia* S. et Z.）（×1）

4．ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY）（×1）

5．ツブラジイの未熟幼果（殻斗を被る）（×1.5）

6．ムクノキ（*Aphananthe aspera* PLANCH.）（×1）

7．イロハカエデ？（*Acer palmatum* THUNB.）の翼のとれた種子（×1.5）

8．コバンモチ（*Elaeocarpus japonicus* S.et Z.）（×1.5）

9．ヤマビワ（*Meliosma rigida* S.et Z.）左より上面・下面・側面。（×1.5）

10．ヤマビワの縦断面。（×1.5）

11．クス科（Lauraceae）ではないかとみられる越冬芽。（×1.5）

木材の顕微鏡写真について

1　写真および写真表示の配列は下図のようにされている。

写真番号　　資　料　名（樹種名）

2　写真の倍率は表示されていない場合には

横断面、半径断面　　×31倍

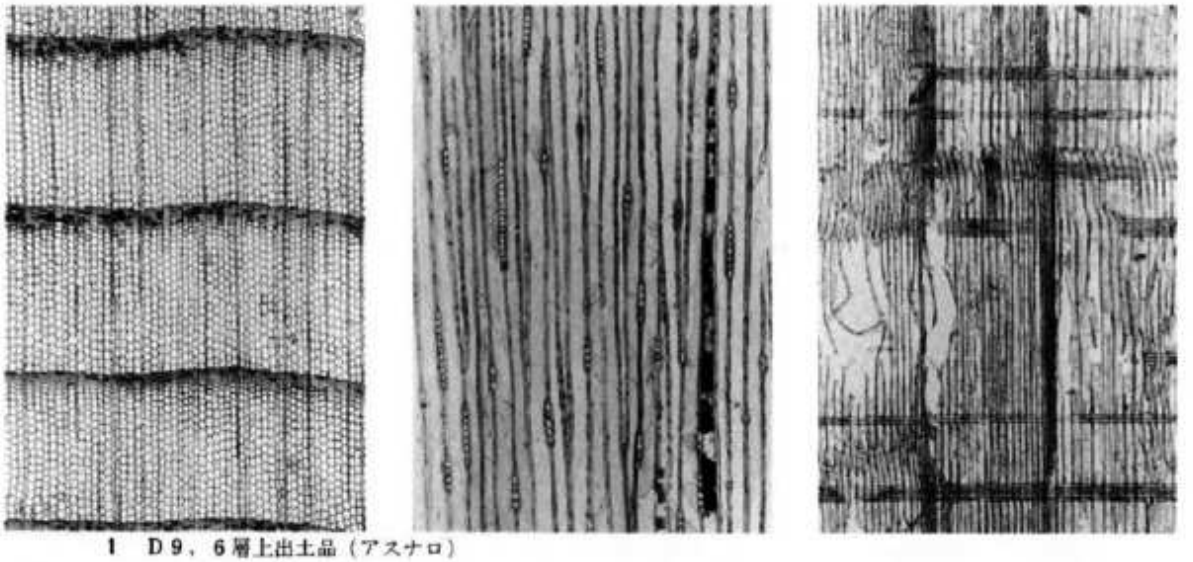
接線断面　　×77倍

である。

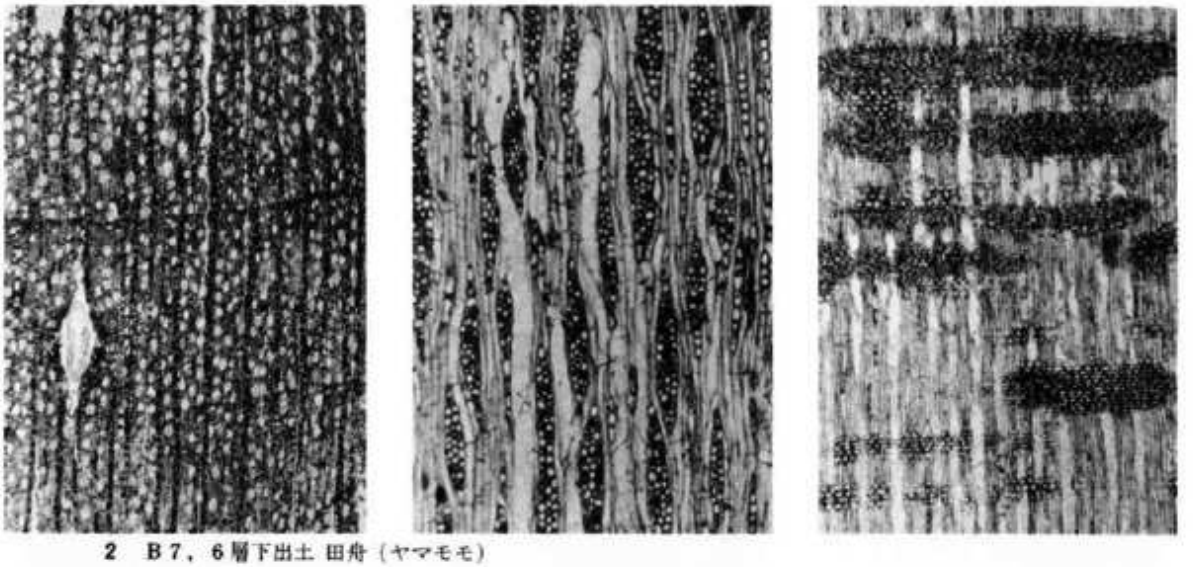
3　次の3資料は資料の都合上　下記断面の顕微鏡写真を添付した。

写真番号 8	整理番号 8	横断面
写真番号 47	整理番号 48	横断面・半径断面
写真番号 51	整理番号 51	横断面

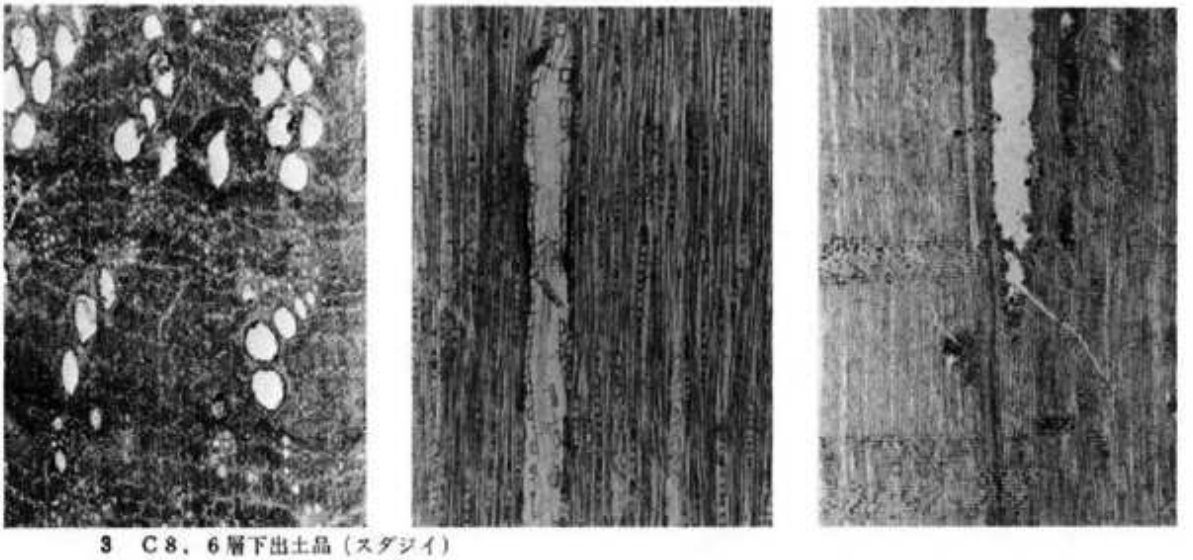
4　整理番号43 曲物底板は剝片によって樹種が同定されたため顕微鏡写真は添付されていない。



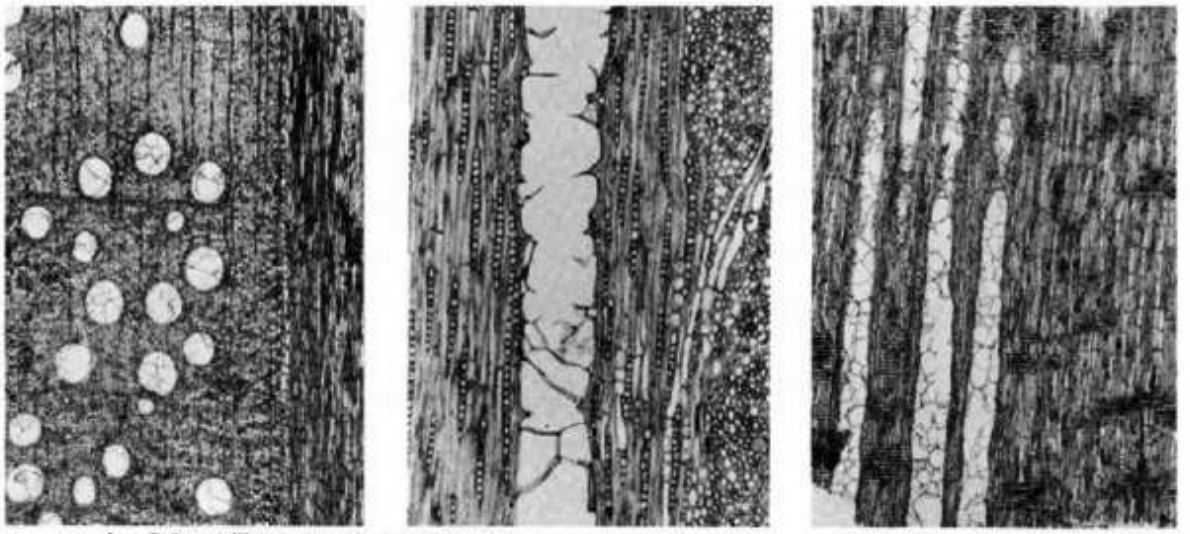
1　D9，6層上出土品（アスナロ）



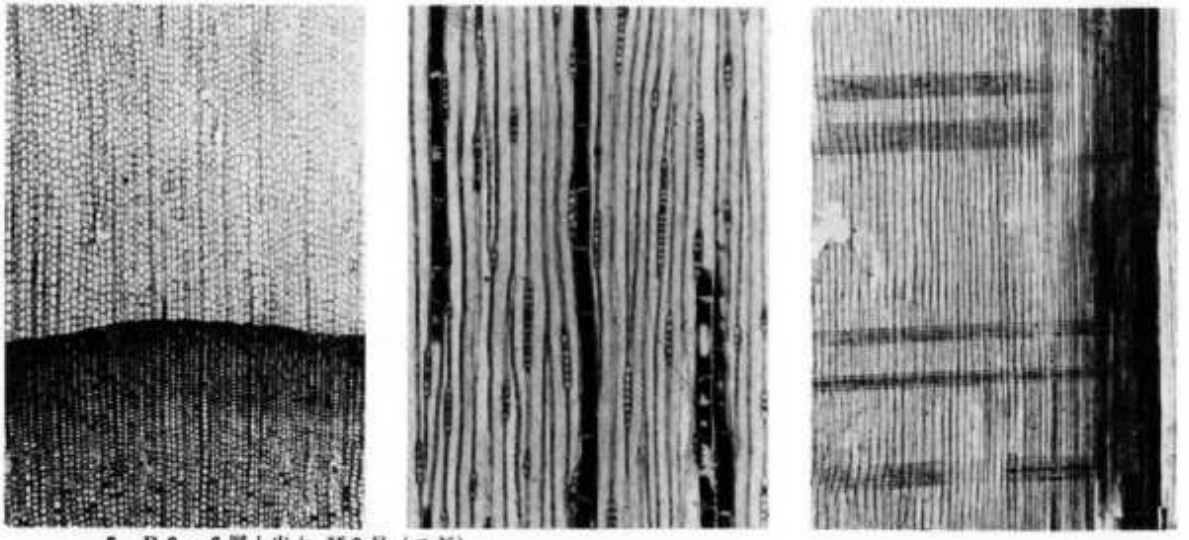
2　B7，6層下出土 田舟（ヤマモモ）



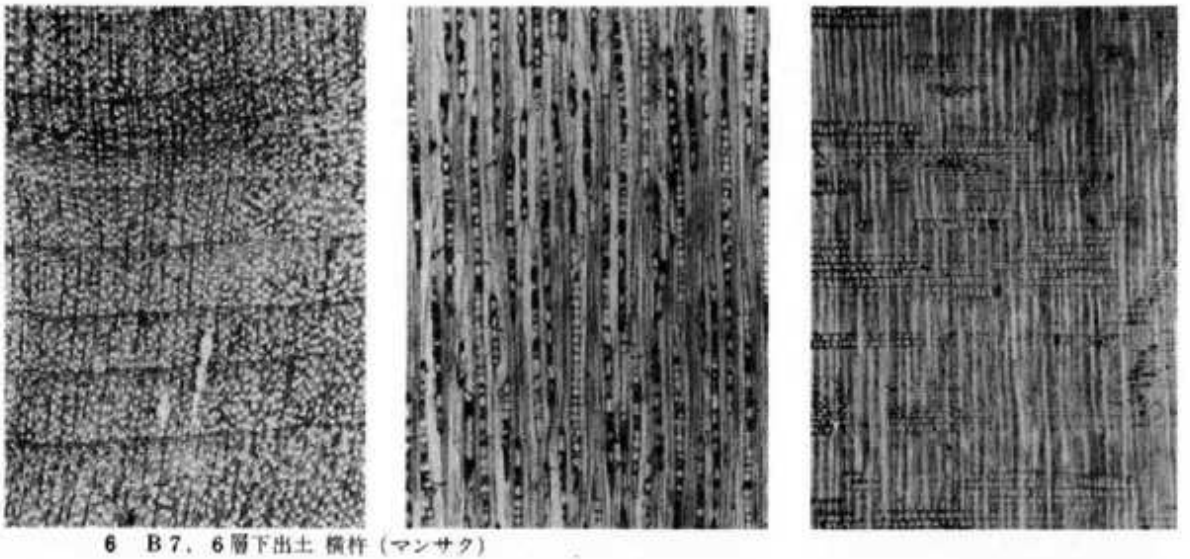
3　C8，6層下出土品（スダジイ）



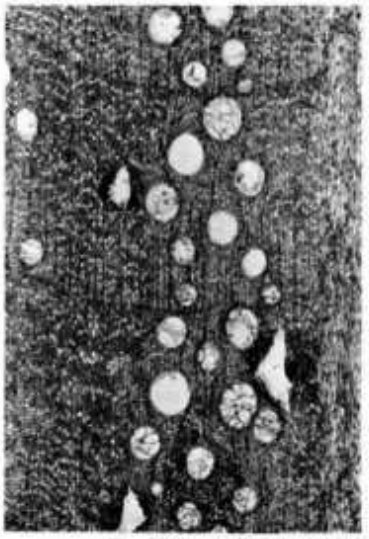
4　C 7，6 層出土 三叉鍬（アカガシ属）



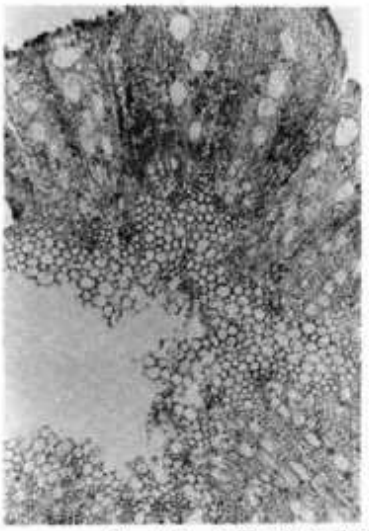
5　B 8，6 層上出土 琴2号（スギ）



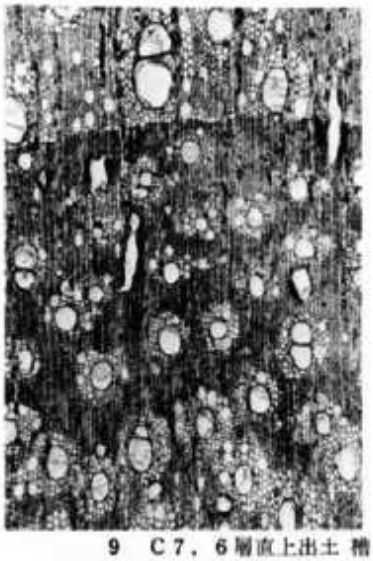
6　B 7，6 層下出土 横杵（マンサク）



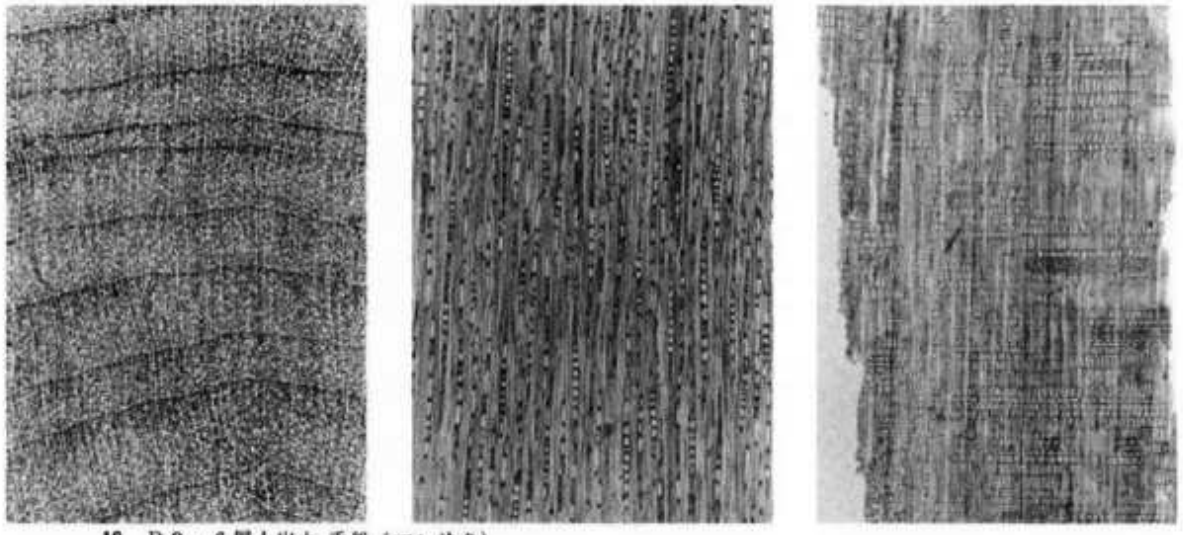
7　C9，6層上出土 杓子（アカガシ属）



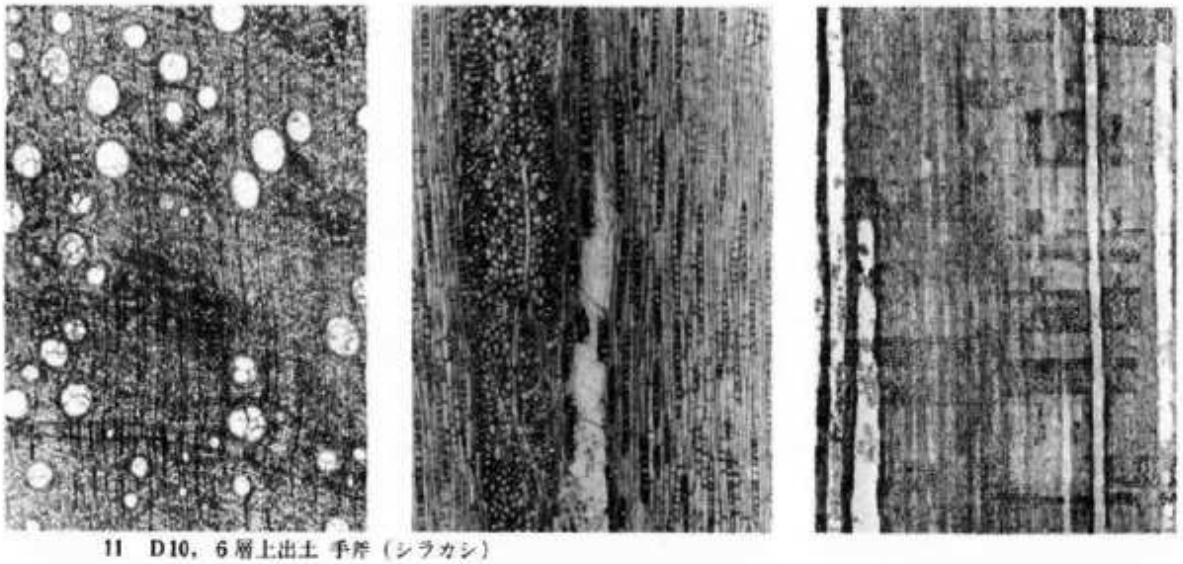
8　D8，6層下出土 苓の一部（広葉樹材）



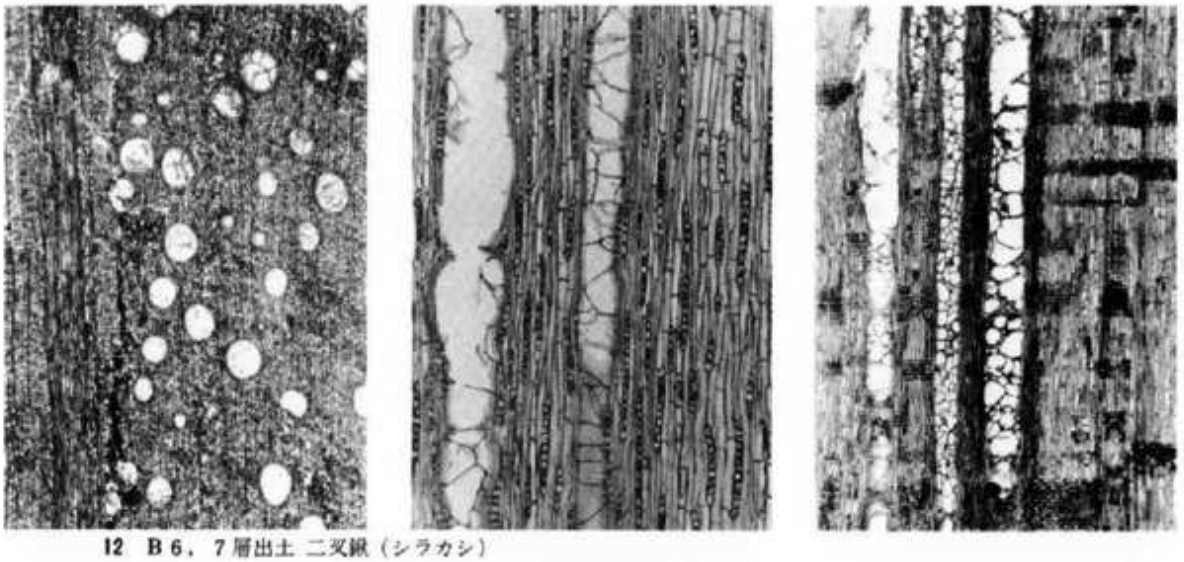
9　C7，6層直上出土 槽（クスノキ）



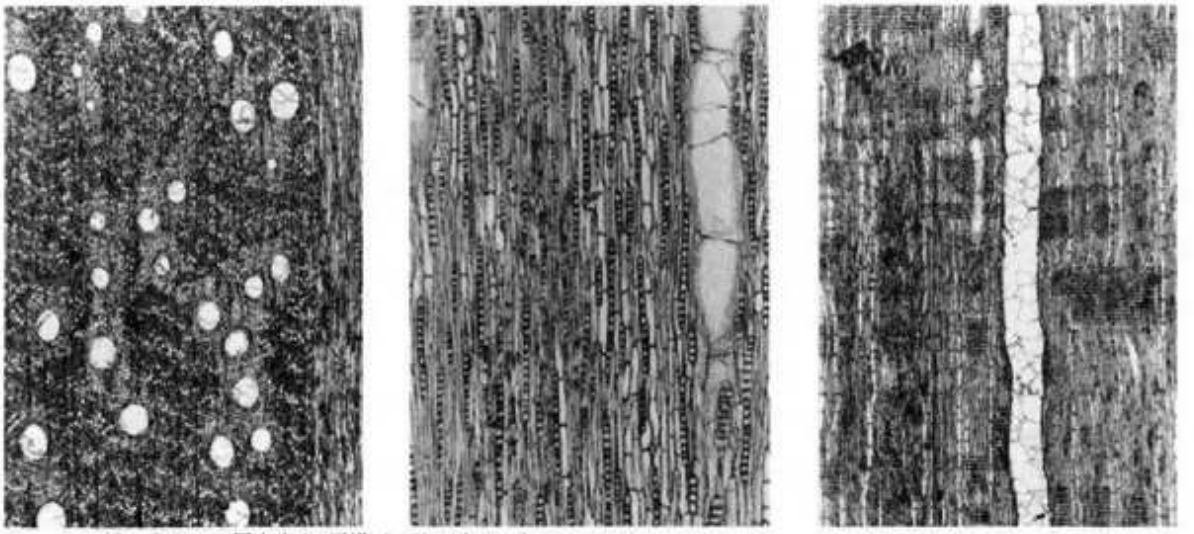
10　D9，6層上出土 手斧（マンサク）



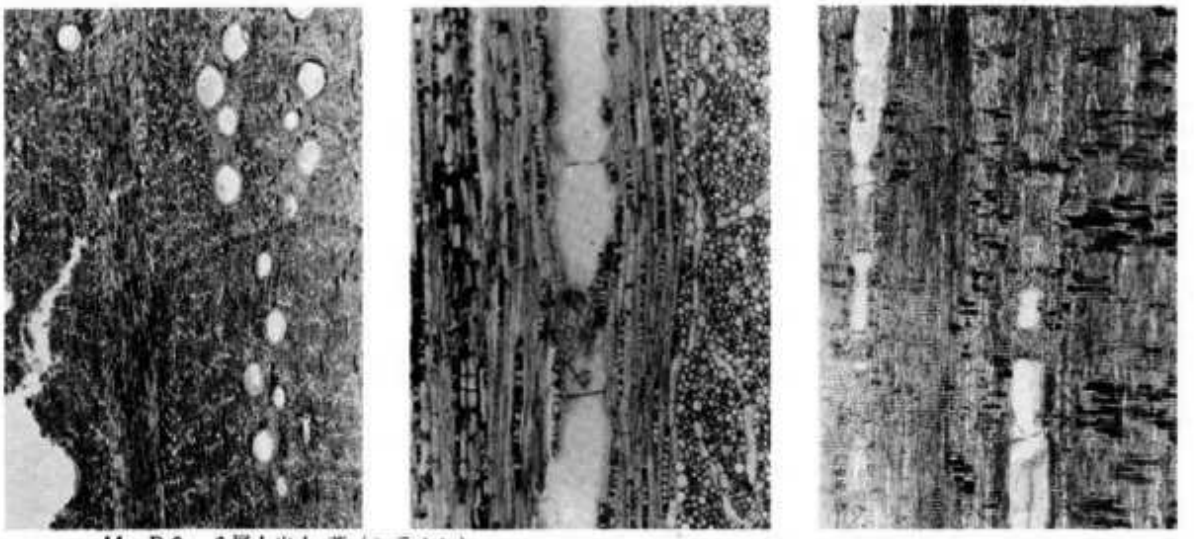
11　D10，6層上出土 手斧（シラカシ）



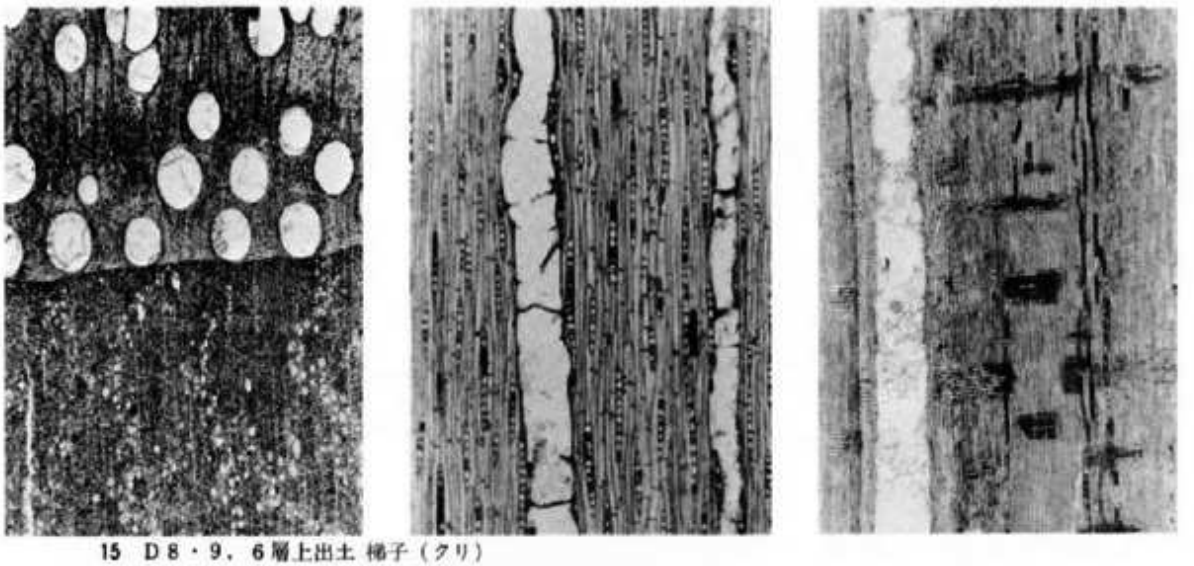
12　B6，7層出土 二叉鍬（シラカシ）



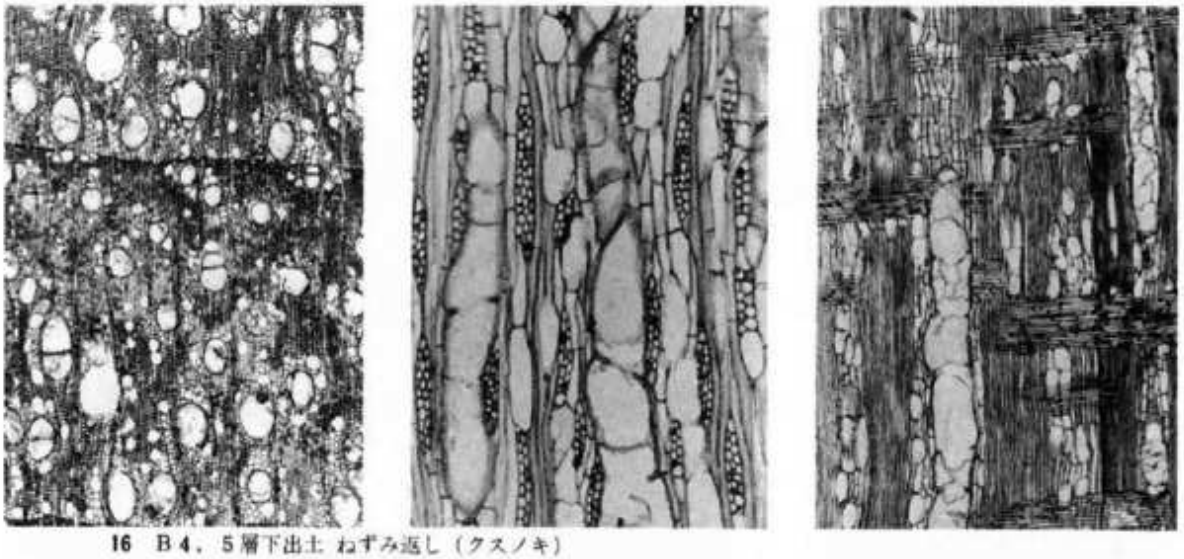
13　C9，6層上出土 平鍬（ツクバネガシ）



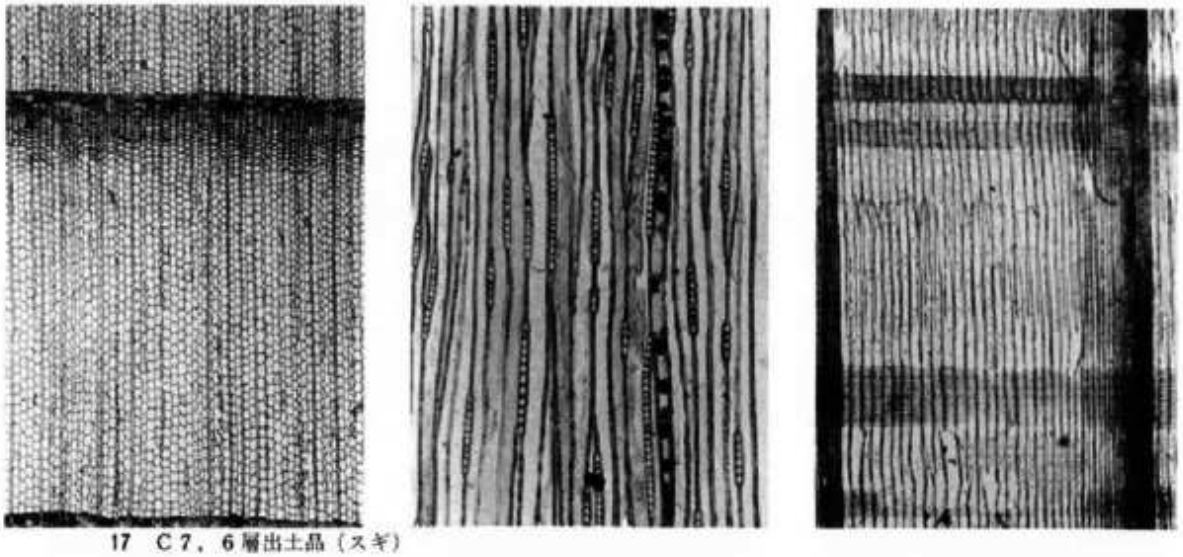
14　D9，6層上出土 蓋（シラカシ）



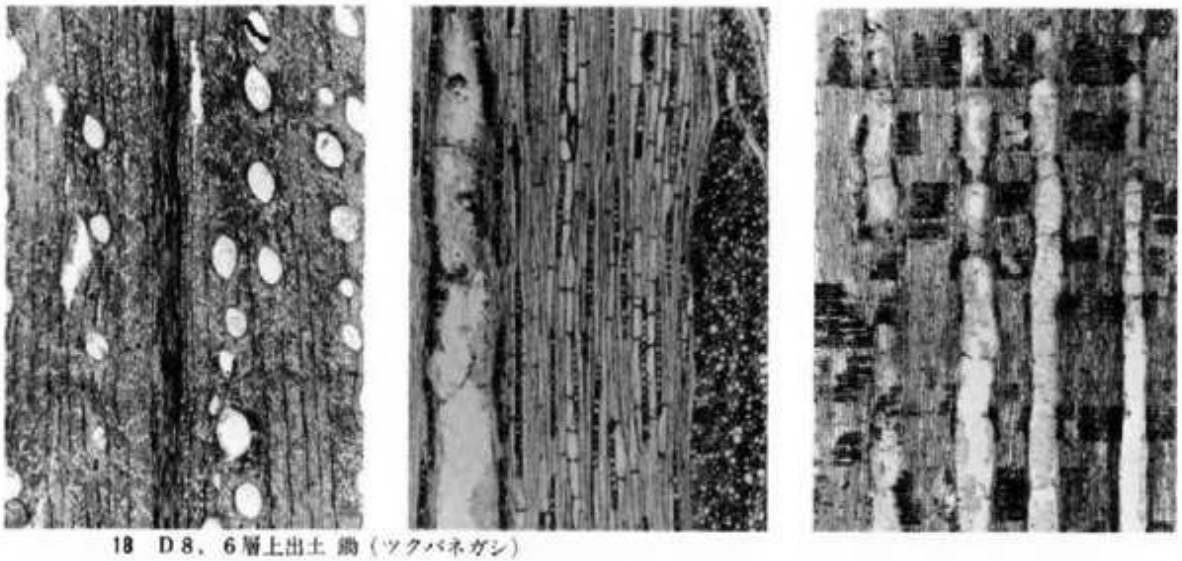
15　D8・9，6層上出土 梯子（クリ）



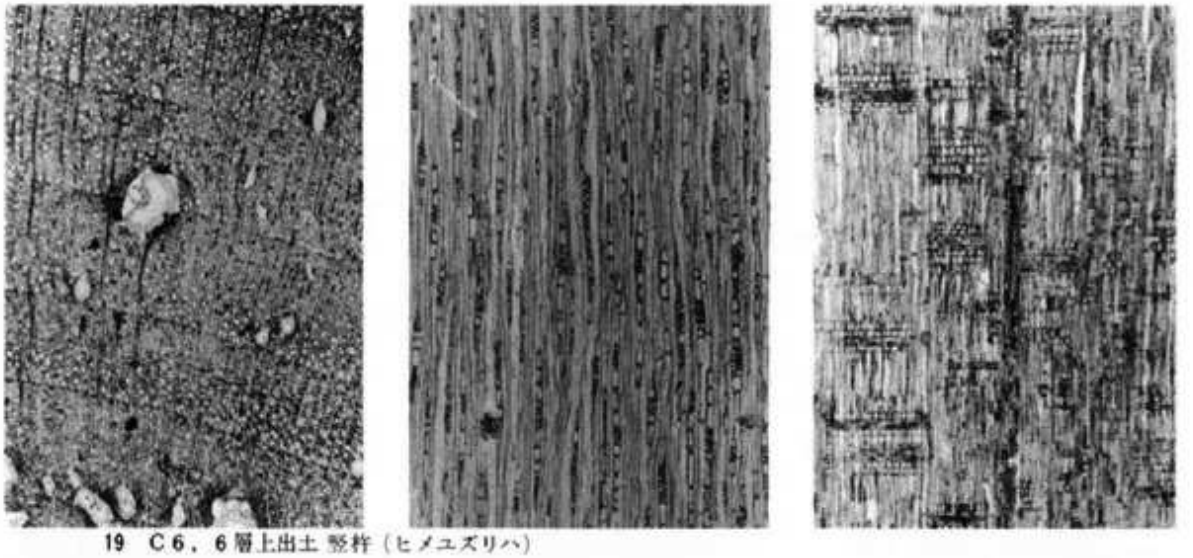
16　B 4，5 層下出土 ねずみ返し（クスノキ）



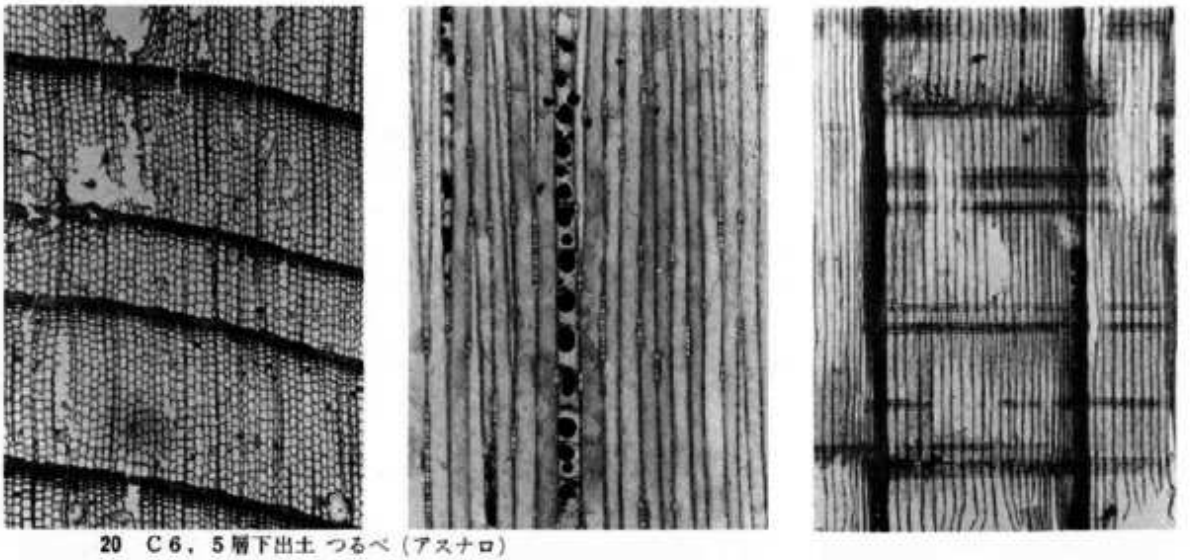
17　C 7，6 層出土品（スギ）



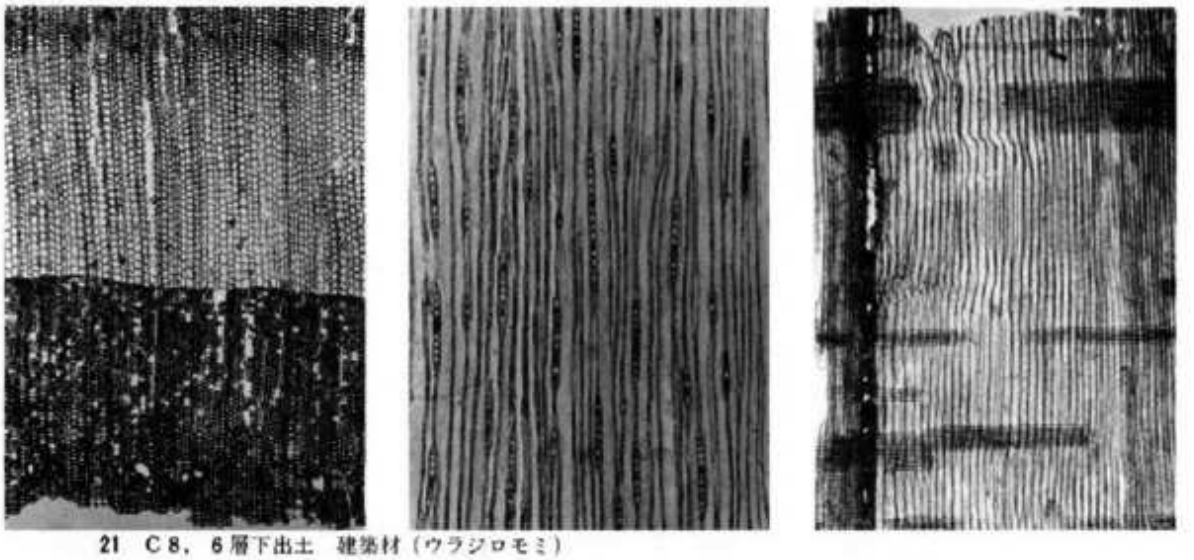
18　D 8，6 層上出土 鋤（ツクバネガシ）



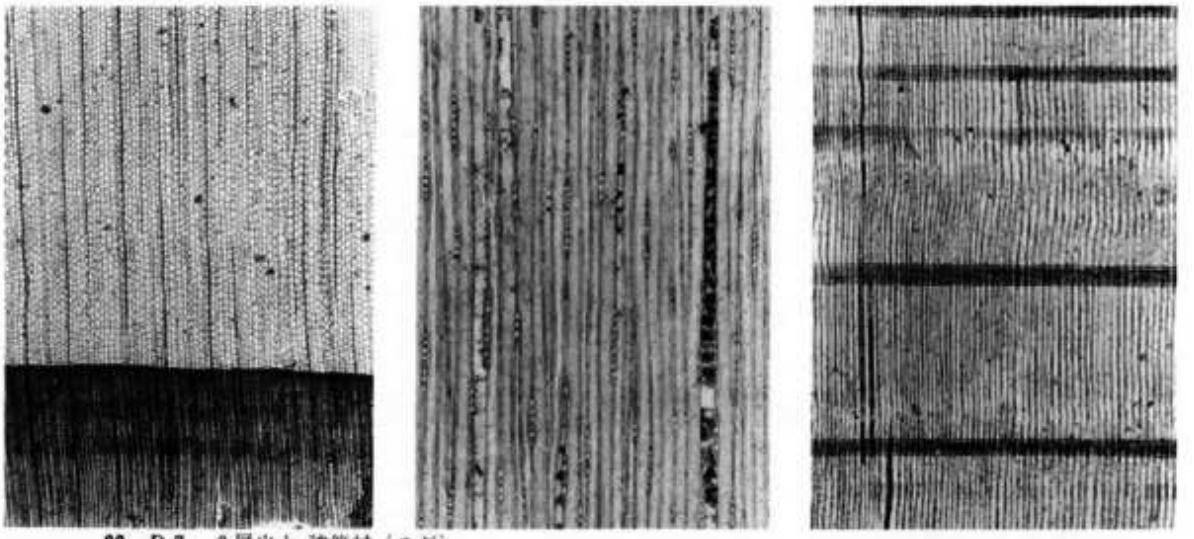
19　C6，6層上出土 竪杵（ヒメユズリハ）



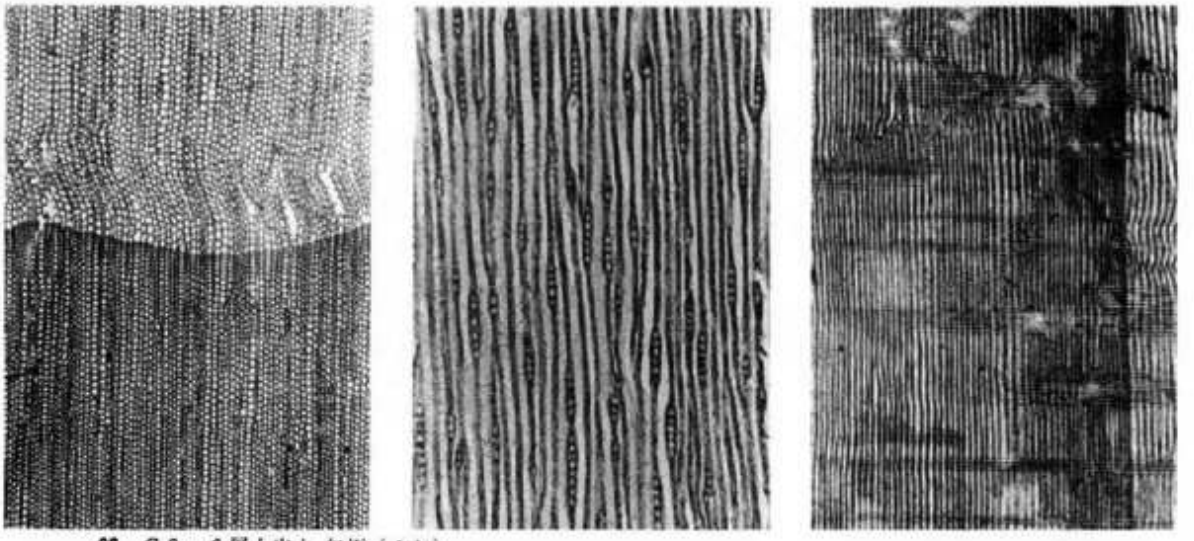
20　C6，5層下出土 つるべ（アスナロ）



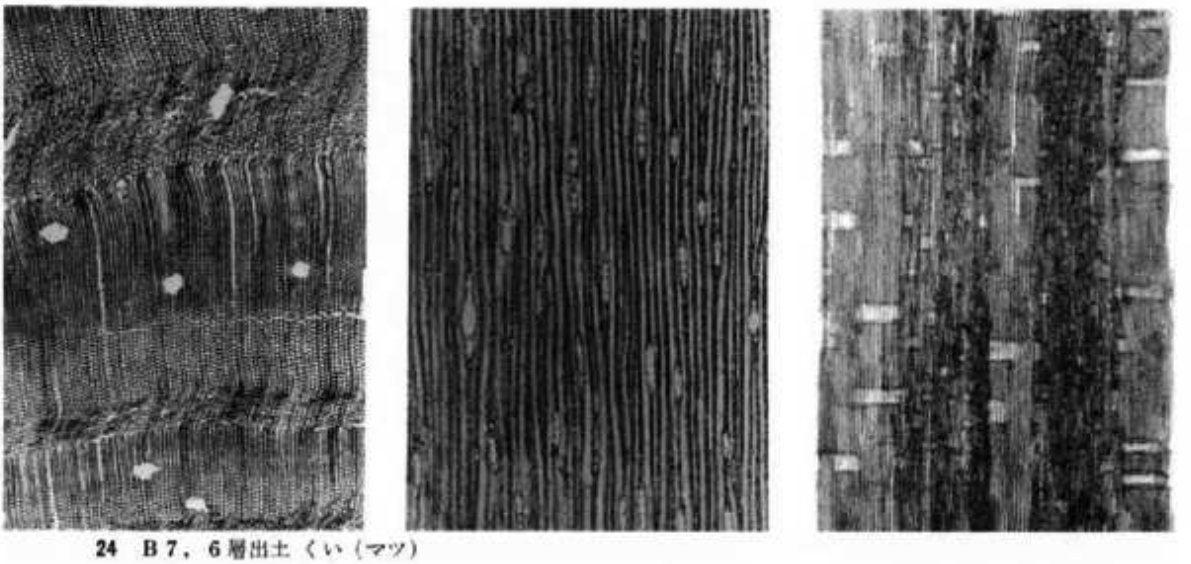
21　C8，6層下出土　建築材（ウラジロモミ）



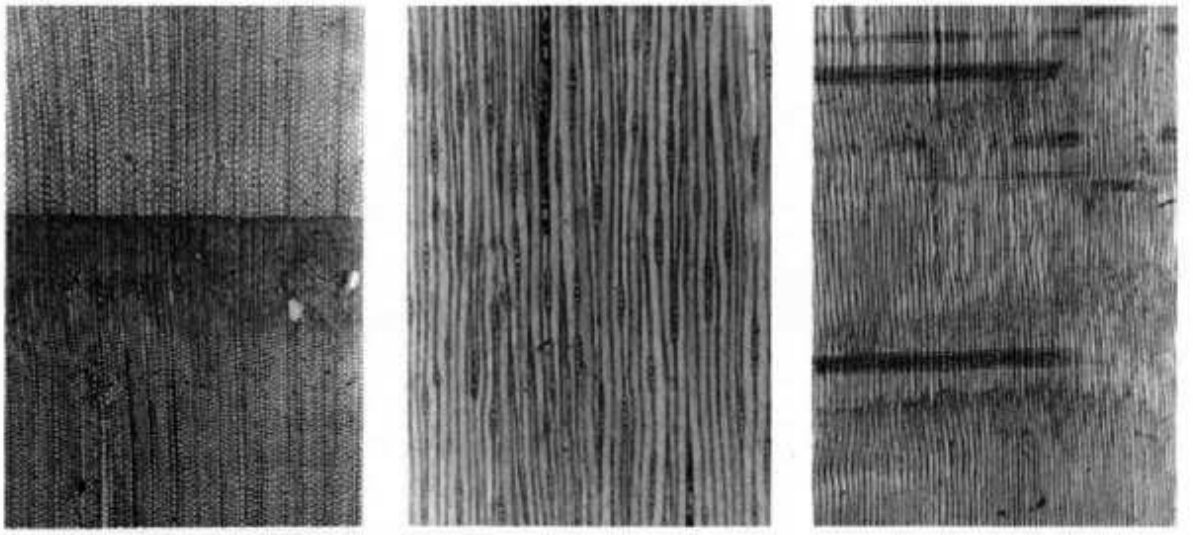
22　D 7，6 層出土 建築材（スギ）



23　C 8，6 層上出土 矢板（カヤ）

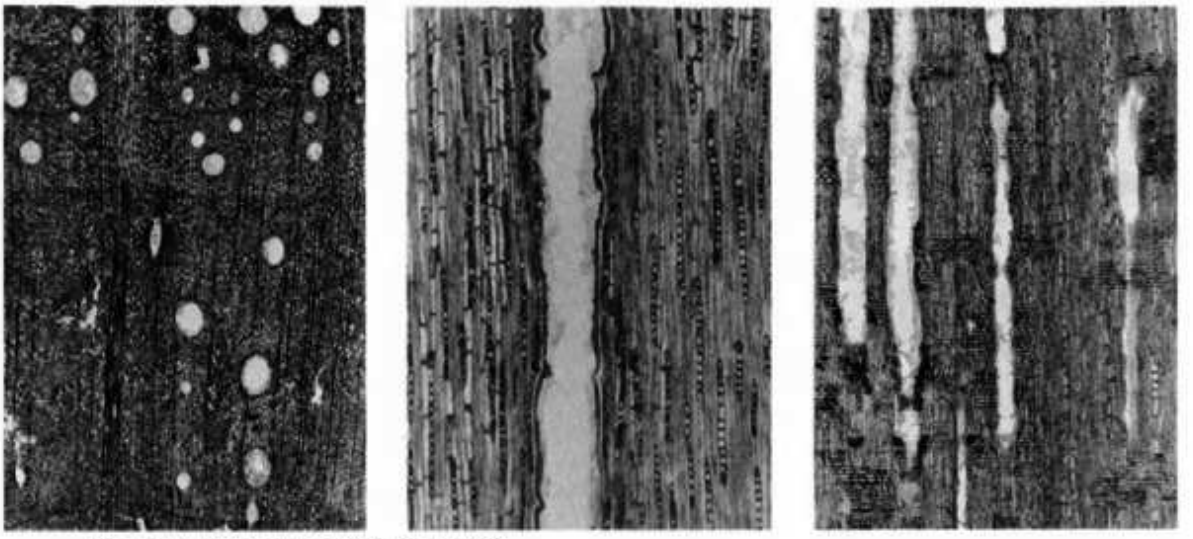


24　B 7，6 層出土 くい（マツ）

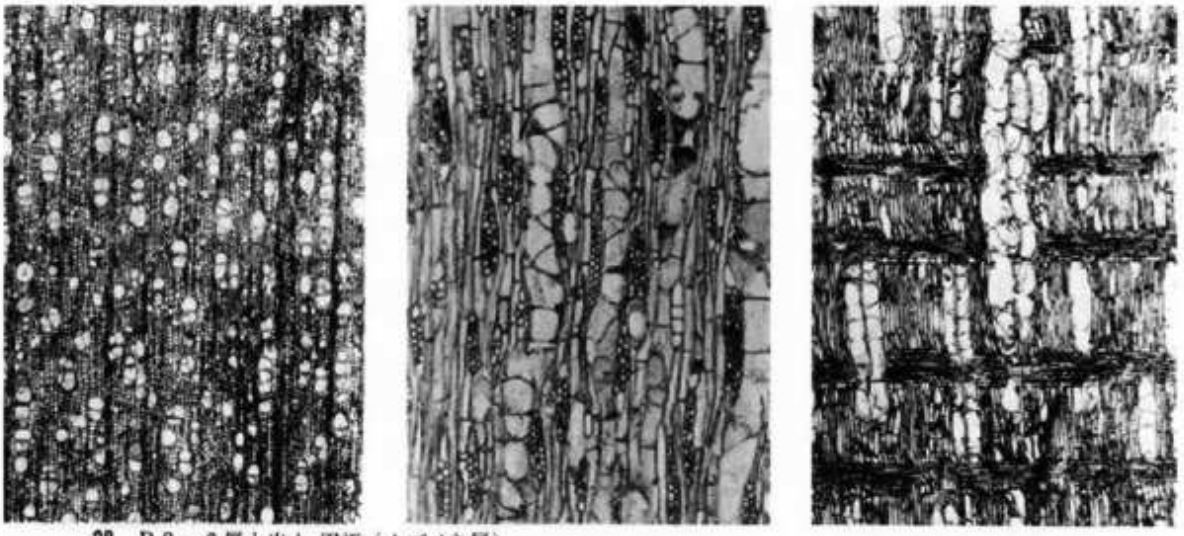


25　C8，6層下出土 角くい（クロベ）

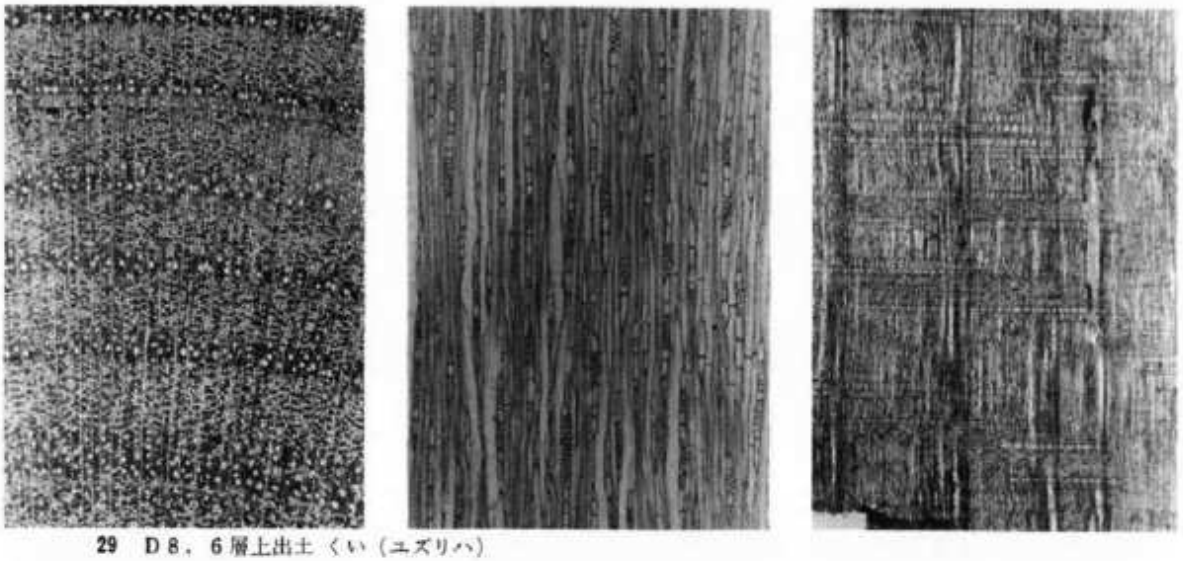
26　D8，6層上出土 三叉鍬（ハナガガシ）



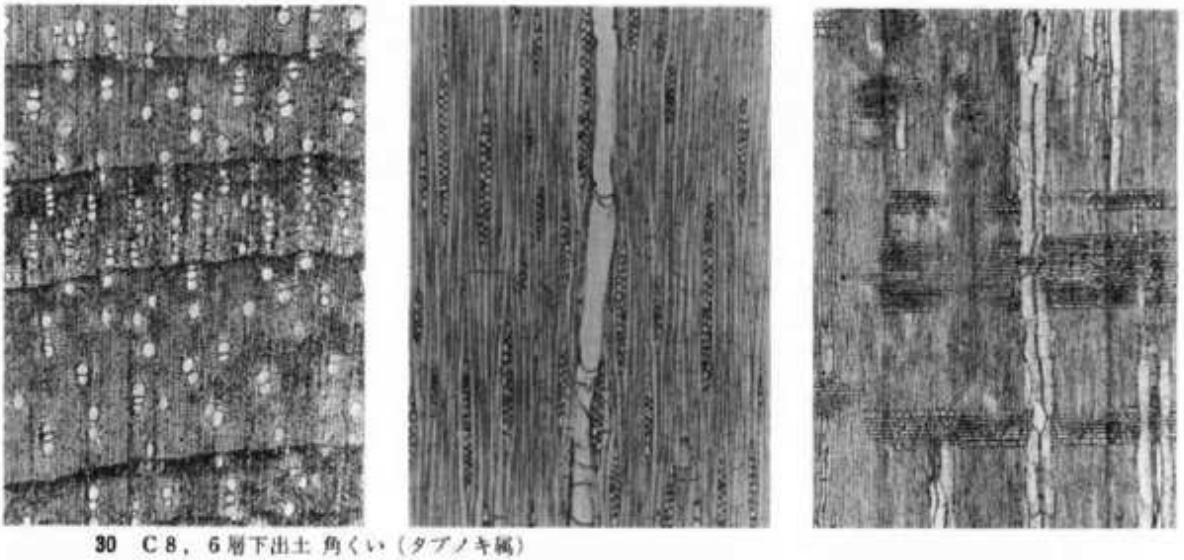
27　D10，6層下出土 三叉鍬（シラカシ）



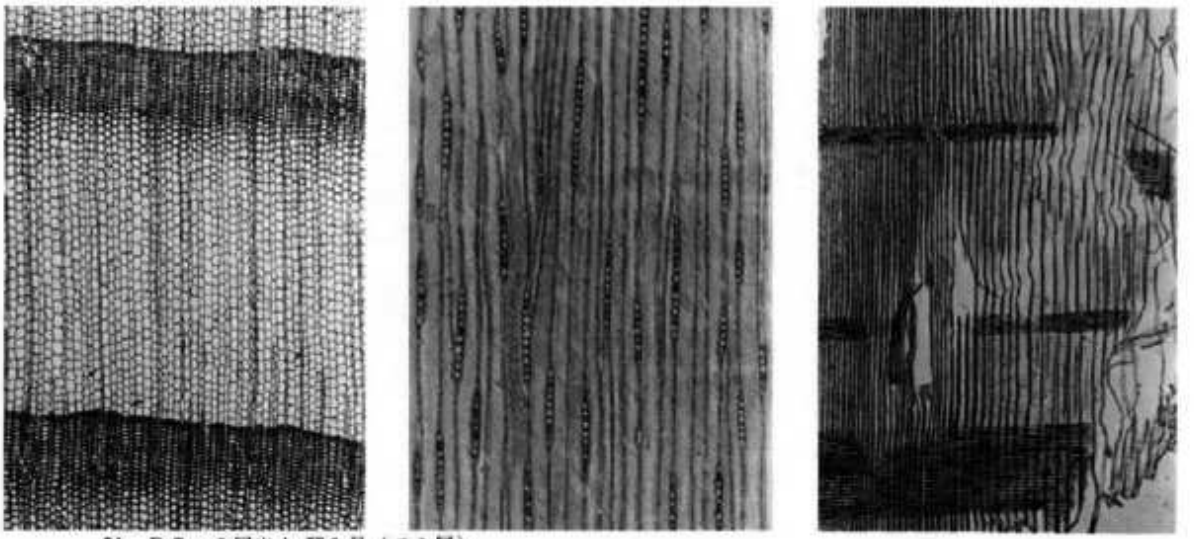
28　D 8，6 層上出土 円板（カゴノキ属）



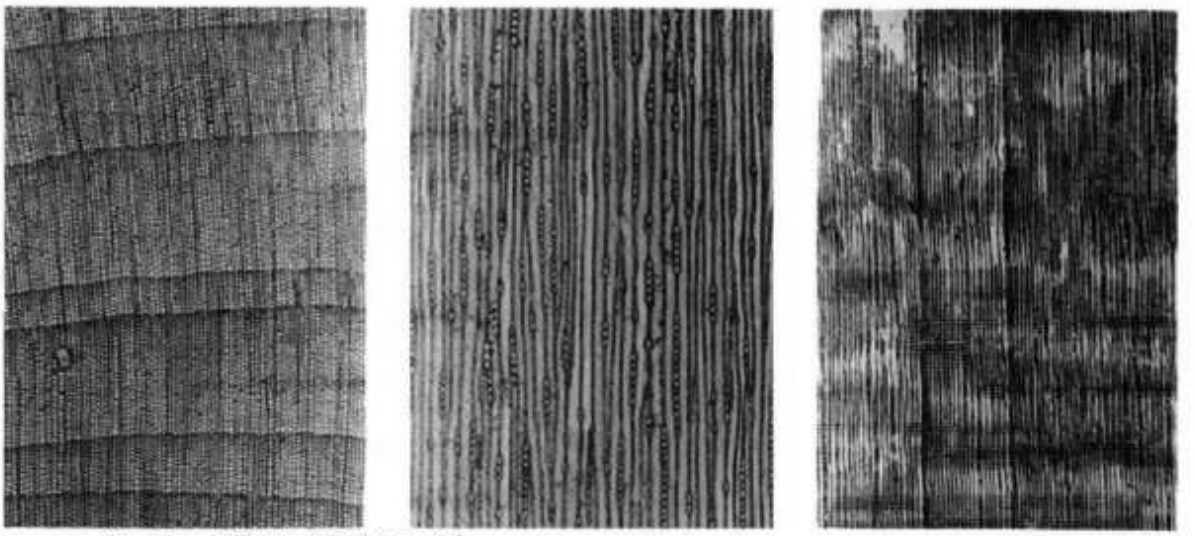
29　D 8，6 層上出土 くい（ユズリハ）



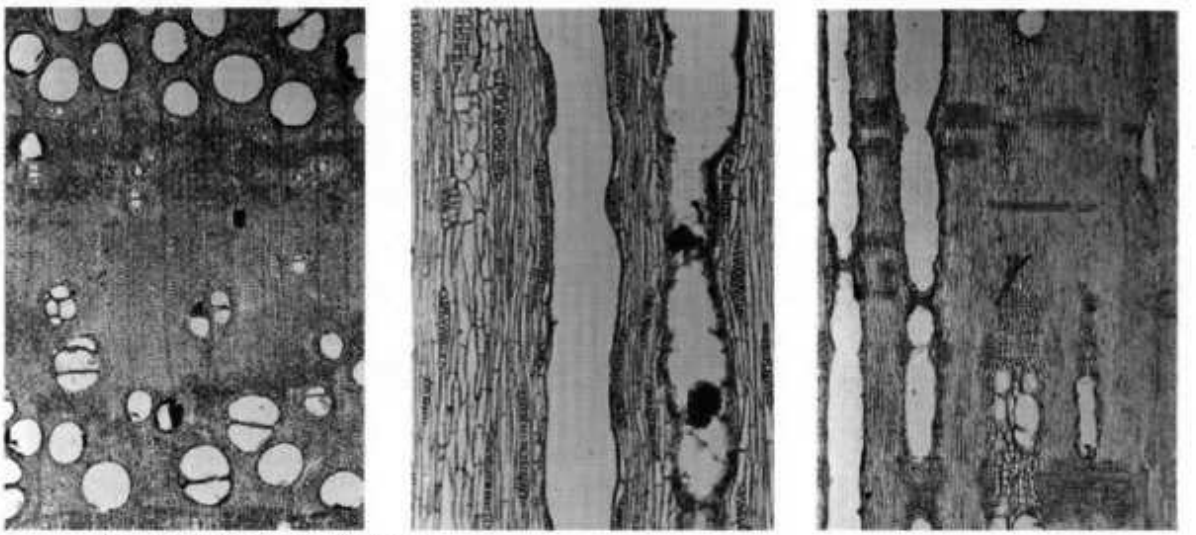
30　C 8，6 層下出土 角くい（タブノキ属）



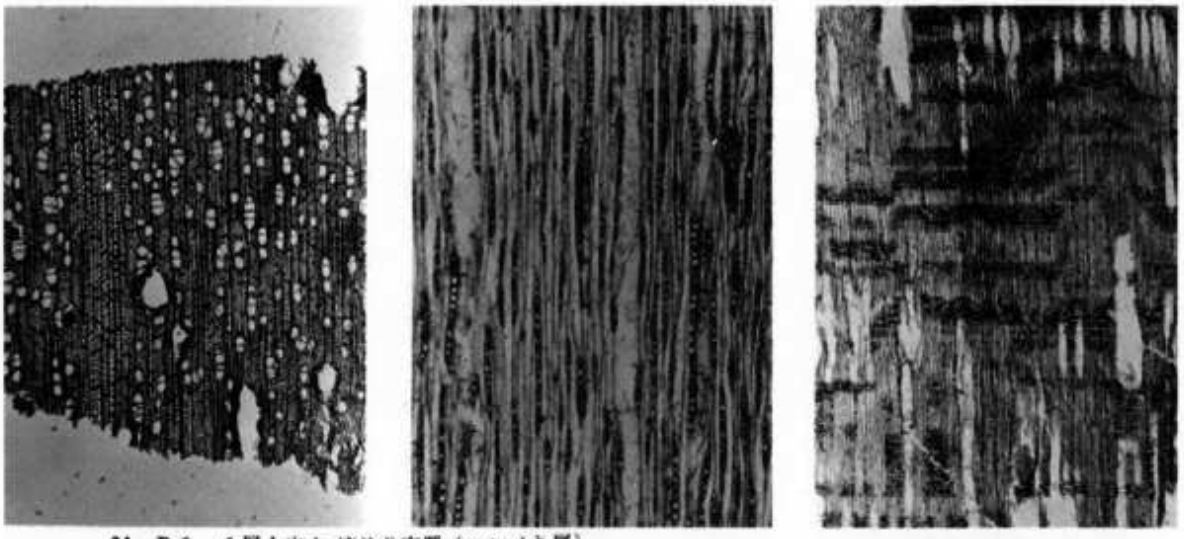
31　B 7，6 層出土 琴1号（モミ属）



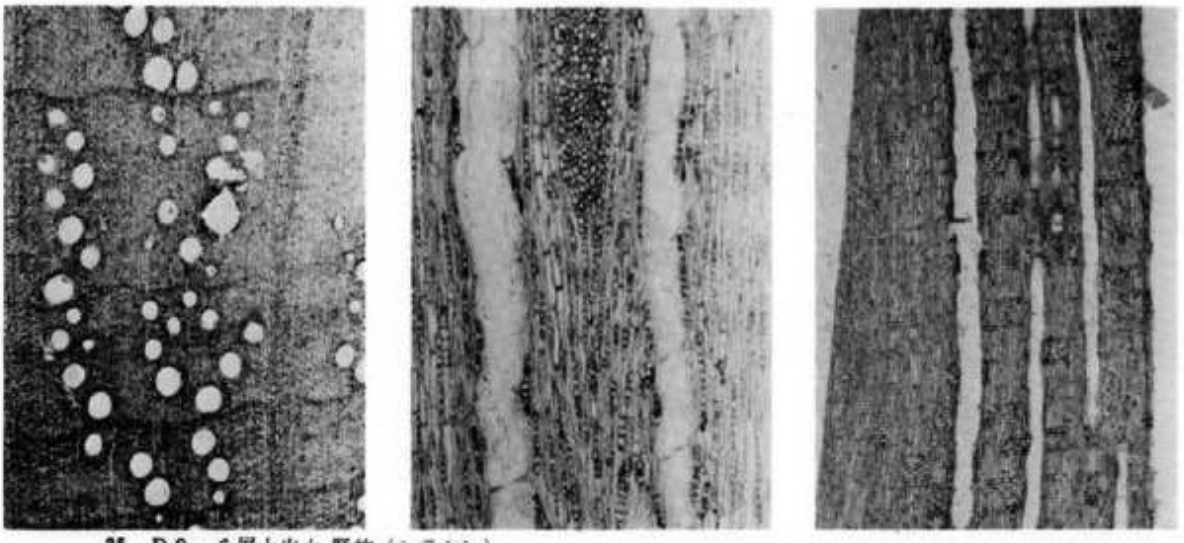
32　D 3，7 層出土 杓子（イヌマキ）



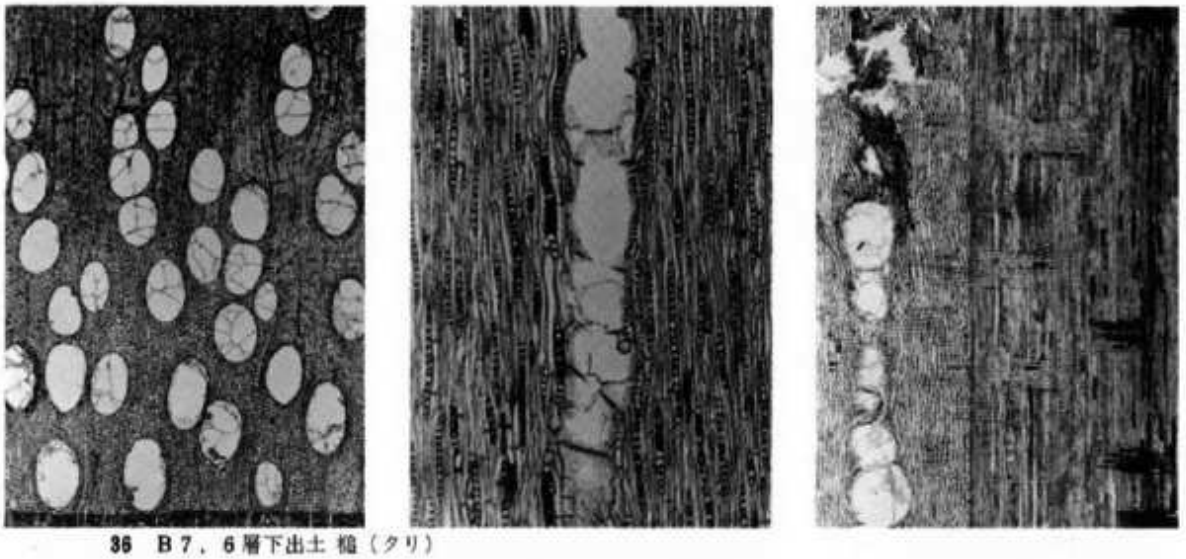
33　2 号土壙出土 下駄（シオジ）



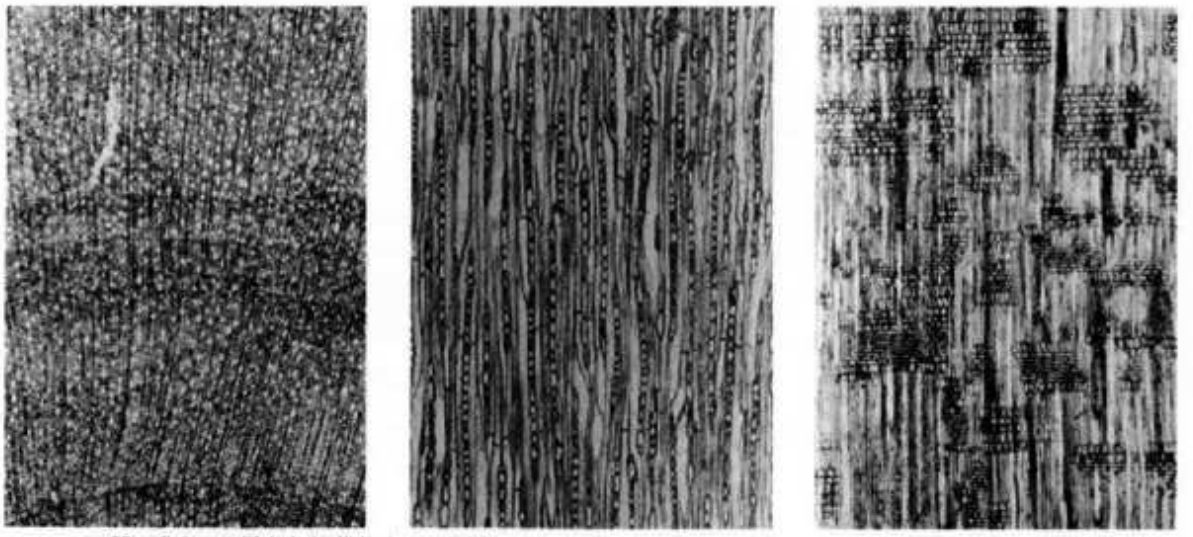
34　D9，6層上出土 漆塗り容器（ハンノキ属）



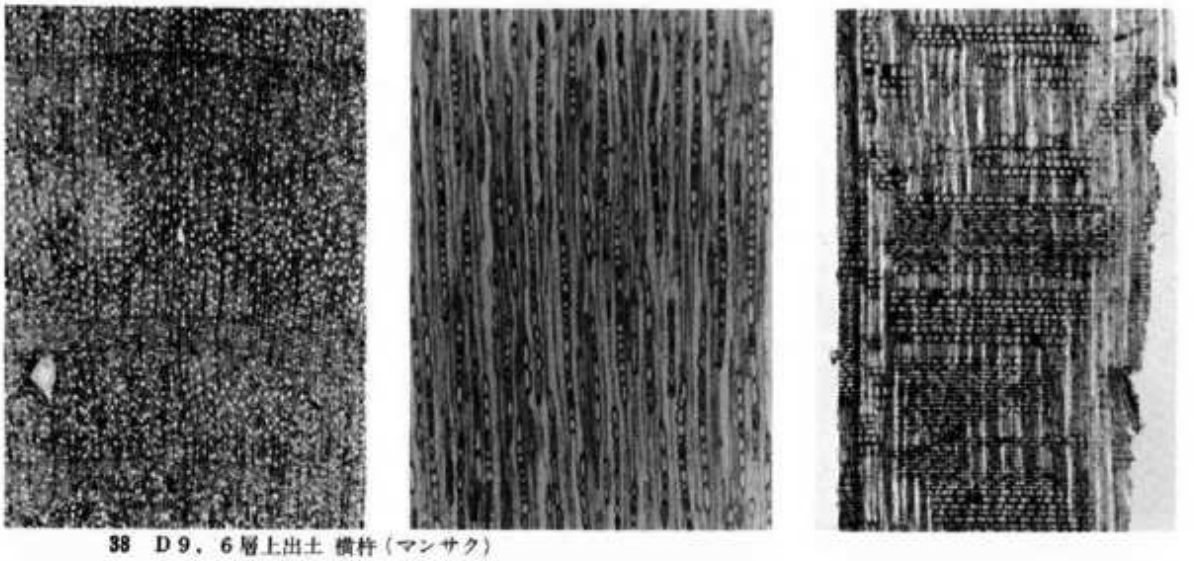
35　D9，6層上出土 竪杵（シラカシ）



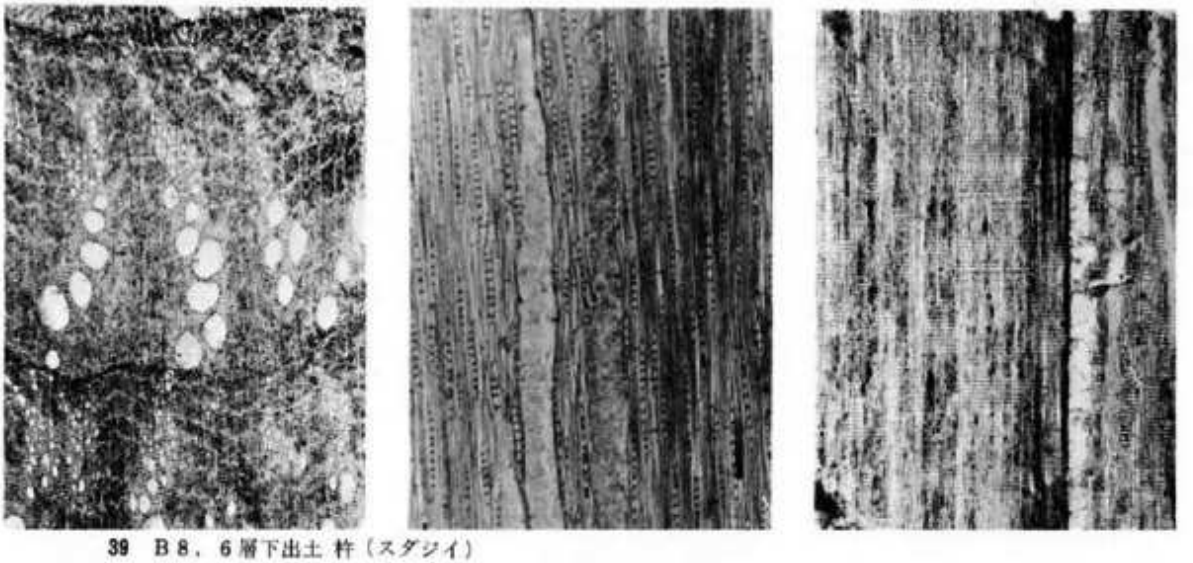
36　B7，6層下出土 槌（クリ）



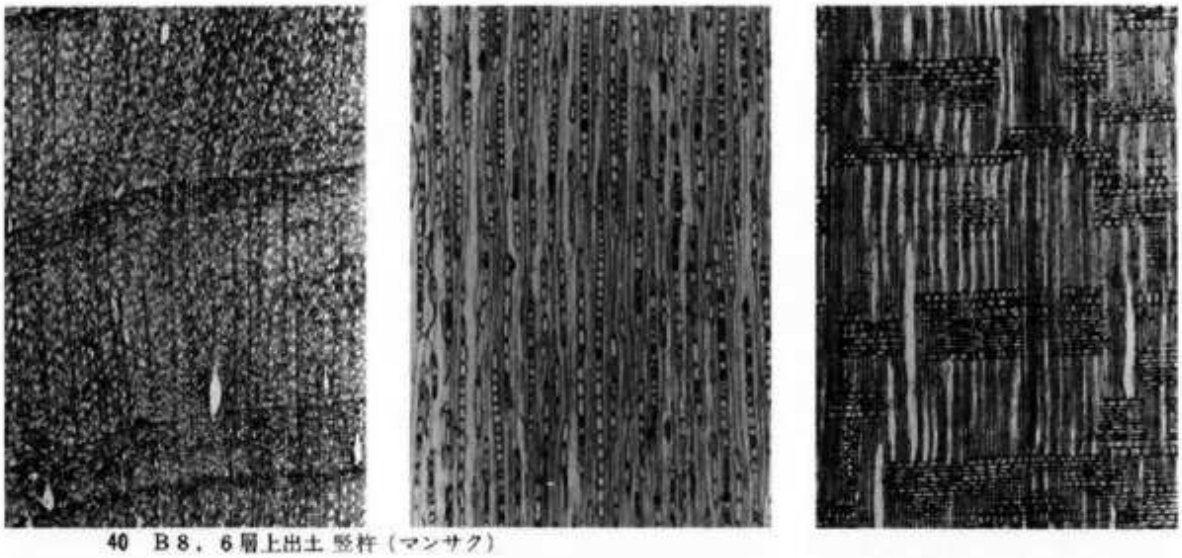
37　C 9，6 層上出土 横杵（マンサク）



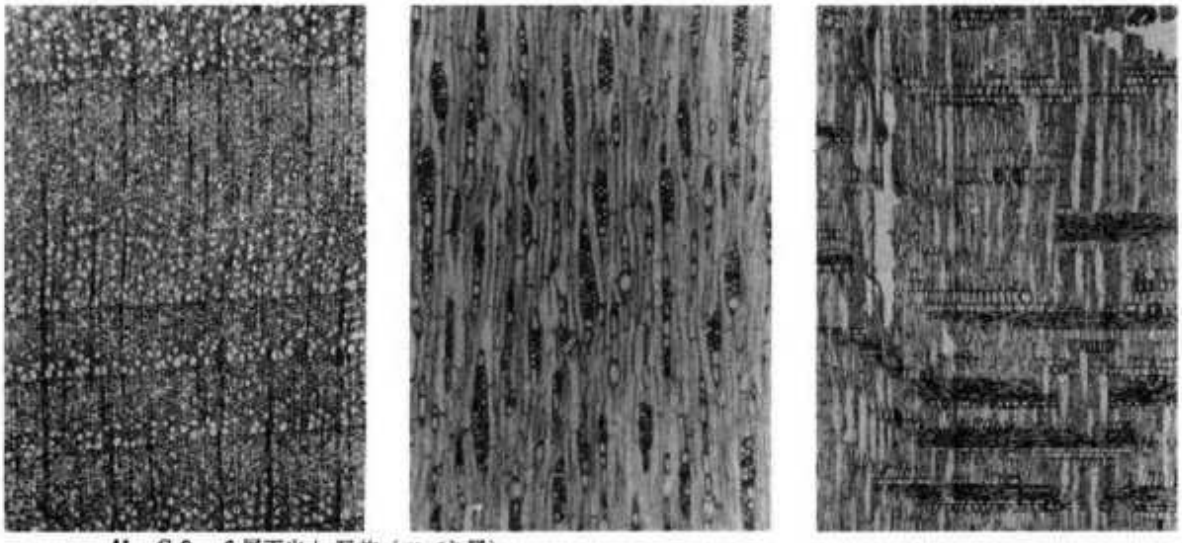
38　D 9，6 層上出土 横杵（マンサク）



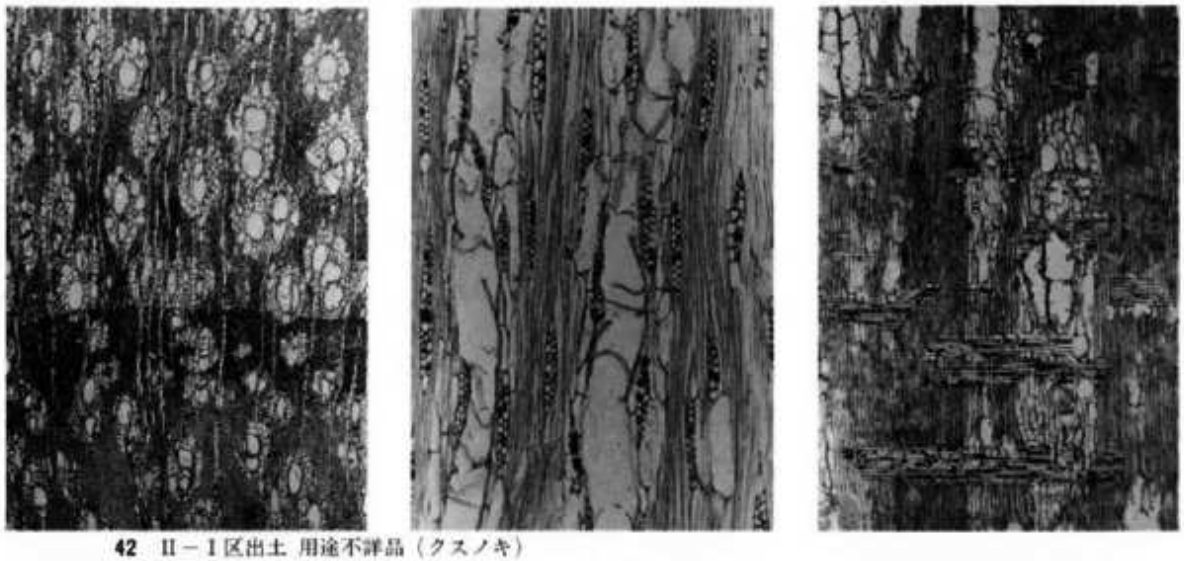
39　B 8，6 層下出土 杵（スダジイ）



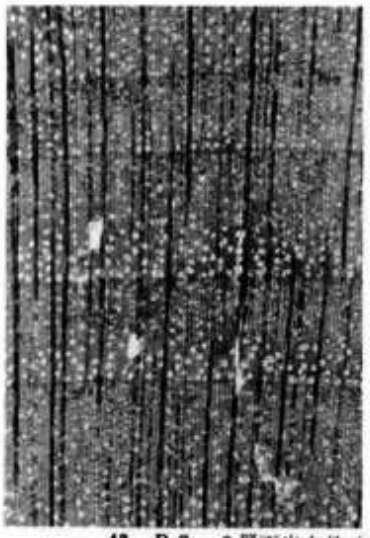
40　B 8，6 層上出土 竪杵（マンサク）



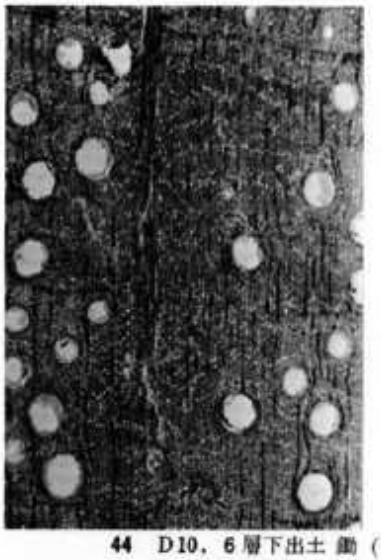
41　C 9，6 層下出土 竪杵（ツバキ属）



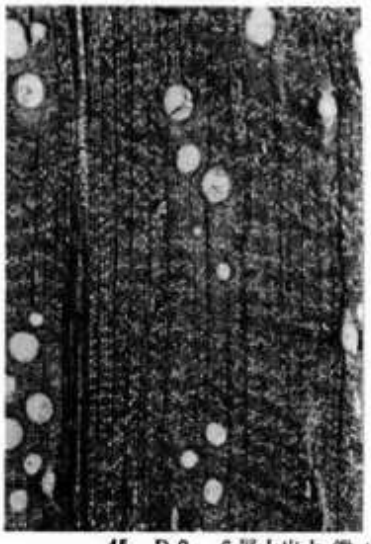
42　II－I 区出土 用途不詳品（クスノキ）

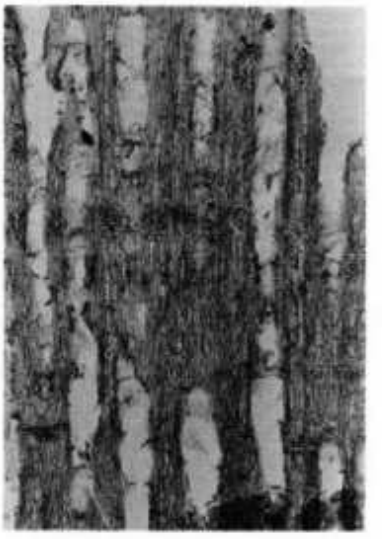


43　B 7，6層下出土品（ツバキ属）

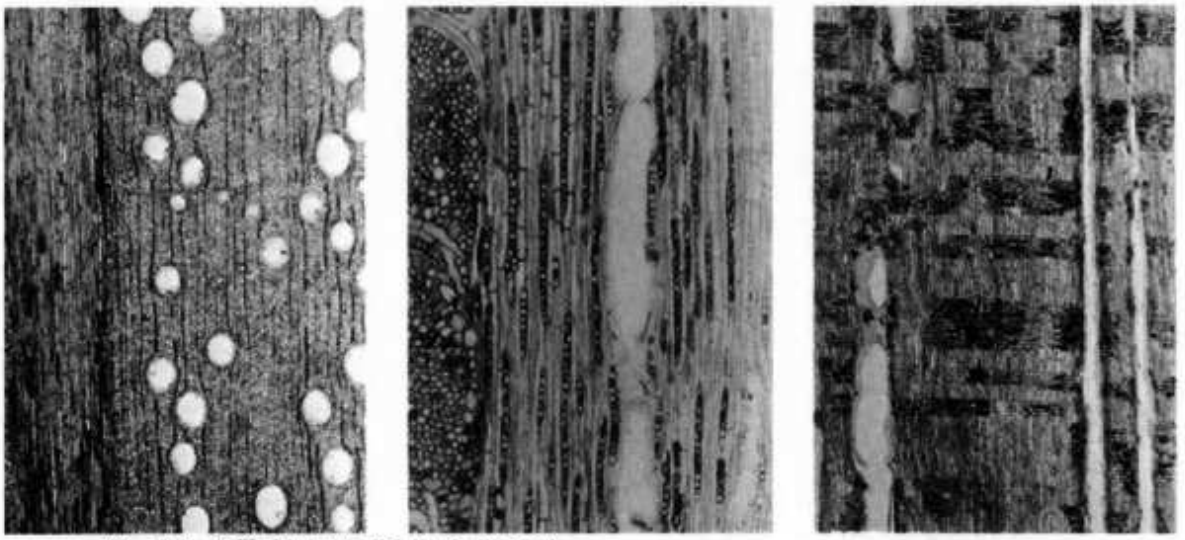


44　D10，6層下出土 鋤（ツクバネガシ）



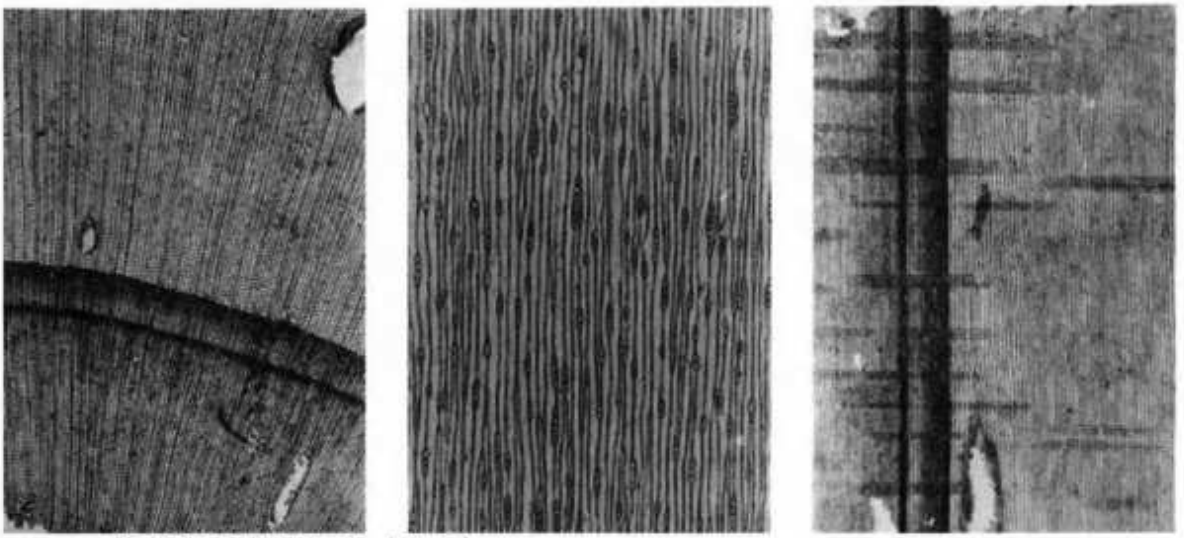


45　D 9，6層上出土 鋤（ツクバネガシ）

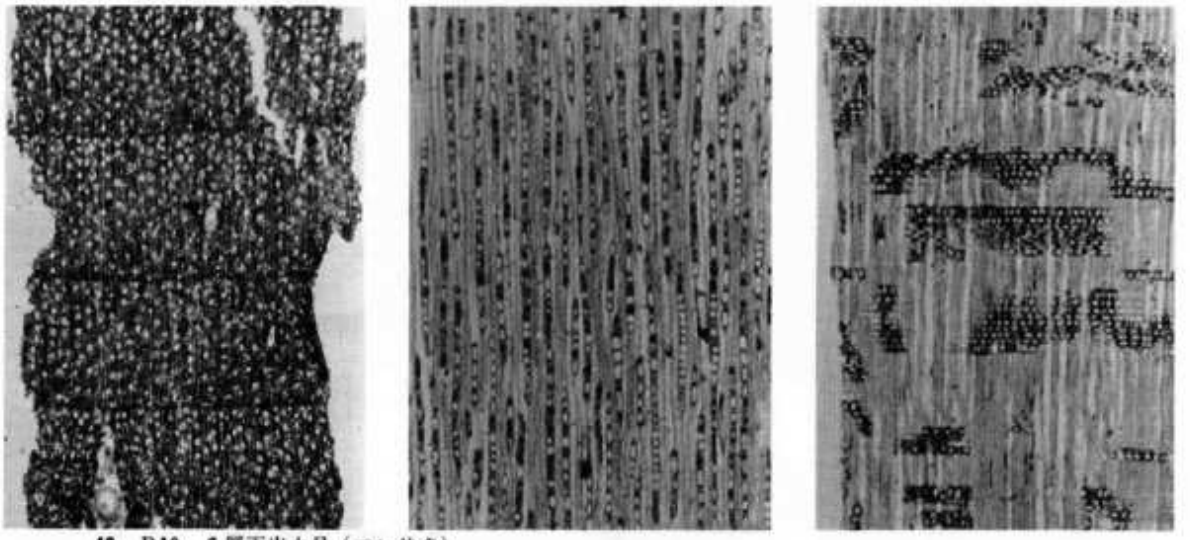


46　B 3，6 層下出土 鋤の柄（ツクバネガシ）

47　B 3，6 層出土 紡錘車（マツ）

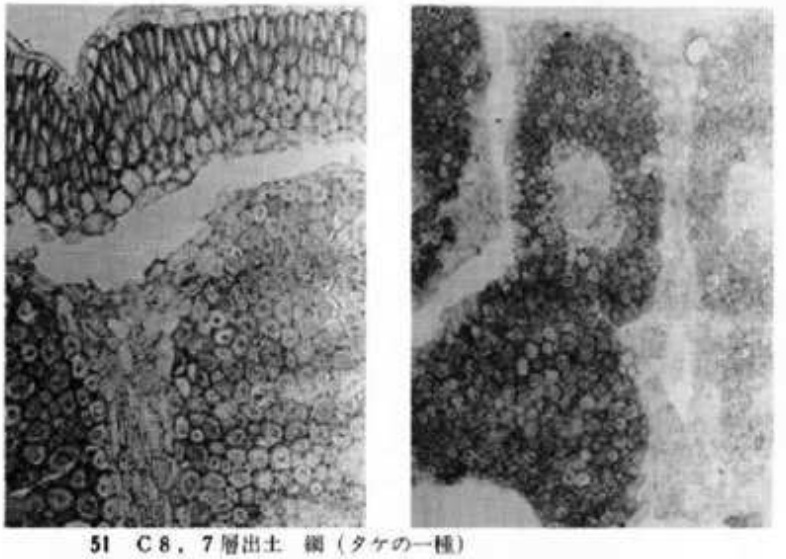


48　B 7，5 層下出土 たも（クロベ）

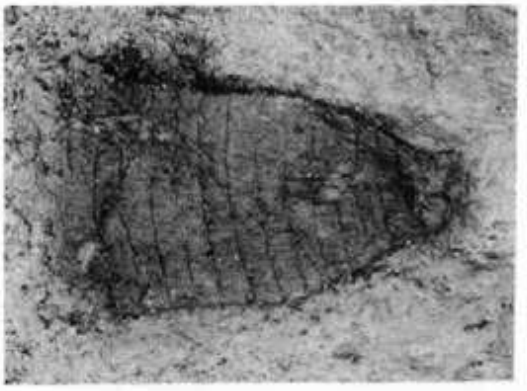


49　D10，6層下出土品（マンサク）

50　D10，6層下出土品（ツクバネガシ）

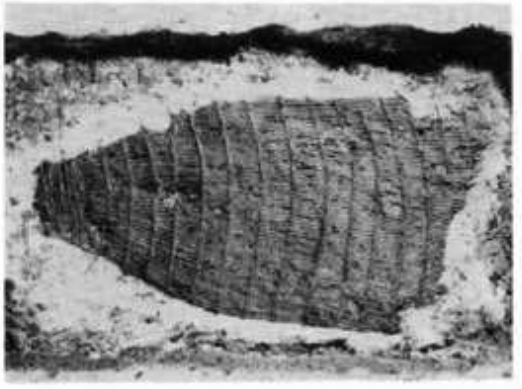


51　C8，7層出土　綱（タケの一種）

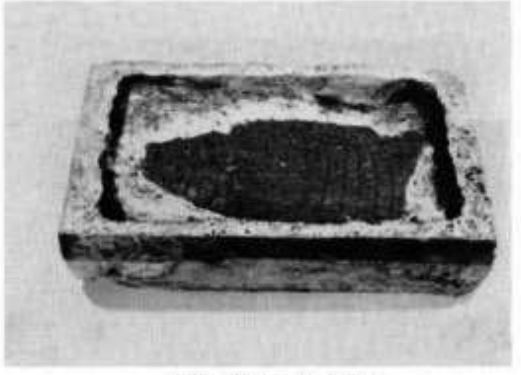


1　出土状況

2　取り上げ、ひっくり返したところ



3　裏側の土の除去後



4　現在の状況

編物（笠）の取り上げ

1　調査前のⅢ区（東から）

2　Ⅲ区 全景（東から）

1　III区 住居跡全景（南から）

2　III区 住居跡全景完掘後（北から）

1　Ⅲ区 住居跡内遺物出土状況

2　Ⅲ区 住居跡内遺物出土状況

Ⅲ区 住居跡出土土器

1　Ⅲ区 建物跡（東から）

2　Ⅲ区 調査風景

1　Ⅳ区 全景（東から）

2　Ⅳ区 全景（西から）

1　Ⅳ区 調査区東側全景（西から）

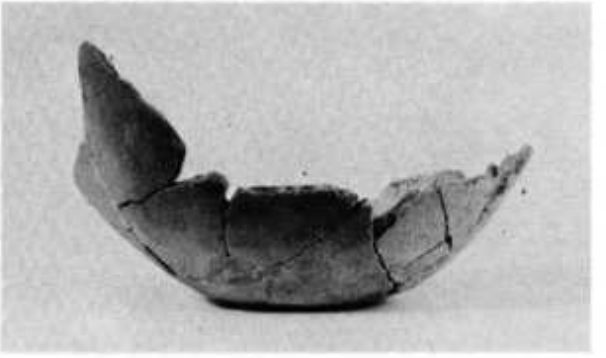
2　Ⅳ区 調査区東側全景（北から）

1　Ⅳ区 溝状遺構全景（北から）

2　Ⅳ区 溝状遺構全景（東から）

1　Ⅳ区 溝状遺構内木材・土器出土状態

2　Ⅳ区 遺状遺構内壺出土状態



Ⅳ区 溝状遺構出土土器

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 12 集

昭和54年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6－29

印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号